

清里・長久保遺跡

昭和55年度県営畑地帯総合土地改良事業
清里地区埋蔵文化財発掘調査報告書第3集

1986年

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

消里・長久保遺跡

正

誤

表

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

頁・行・種類	誤	正
巻頭図版 5.6	緑釉陶器(1号基壇)	緑釉陶器(1号基壇)
P 10 遺跡の概略の項目	1号墳に概当	1号墳に該当
P 25 Fig. 12	エレベーションポイントCが欠落	Cを加筆
P 85 表 Fig. 49-13出土位置の項	覆土下層	覆土下層
P126 Fig. 73	3・5が欠落	3は図中2の右に近接を指す 5は図中76-4の右点線内を指す
P141 1行目	(Fig. 84~888……	(Fig. 84~88……
P197 表 Fig. 111-11出土位置の項	2・3・3層	2・3・3層
P293 1行目	天井石	天井石
P319-320 Fig. 207 1・2号墳土層図C-C'の海拔	169.0m	169.7m
P321-322 Fig. 208 2号墳土層図A-A' IIとIVの間	Ⅲが欠落	Ⅲを加筆
P321-322 Fig. 208 2号墳土層図B-B'	Ⅴ	Ⅲ
P321-322 Fig. 208 2号墳土層図B-B'	Ⅰ	Ⅴ
P321-322 Fig. 208 4号墳土層図B-B'の海拔	164.5m	165.5m
P325-326 Fig. 210 7号墳土層図A-A'の海拔	163.5m	162.5m
P325-326 Fig. 210 7号墳土層図B-B'の海拔	165.5m	163.5m
P327-328 Fig. 211 11号墳土層図A-A'の海拔	160.0m	159.5m
P327-328 Fig. 211 11号墳土層図B-B'の海拔	160.5m	159.7m
P327-328 Fig. 211 庚申塚1号墳土層図A-A'の海拔	167.0m	166.5m
P327-328 Fig. 211 庚申塚1号墳土層図B-B'の海拔	168.0m	167.0m
P327-328 Fig. 211 庚申塚1号墳土層図C-C'の海拔	167.0m	167.3m
P327-328 Fig. 211 庚申塚2号墳土層図A-A'の海拔	168.0m	169.1m
P359~365 柱部分	庚申塚遺跡	庚申塚遺跡
PL. 25	遺物説明欠落	1~5 13区8号住居址出土遺物
PL. 98-5	金組元~物打部	銅元~物打部

資料 群馬県埋蔵文化財
調査事業団保管
No. 98-4526 平成10年 5月13日

01-353
244
(9)

清里・長久保遺跡

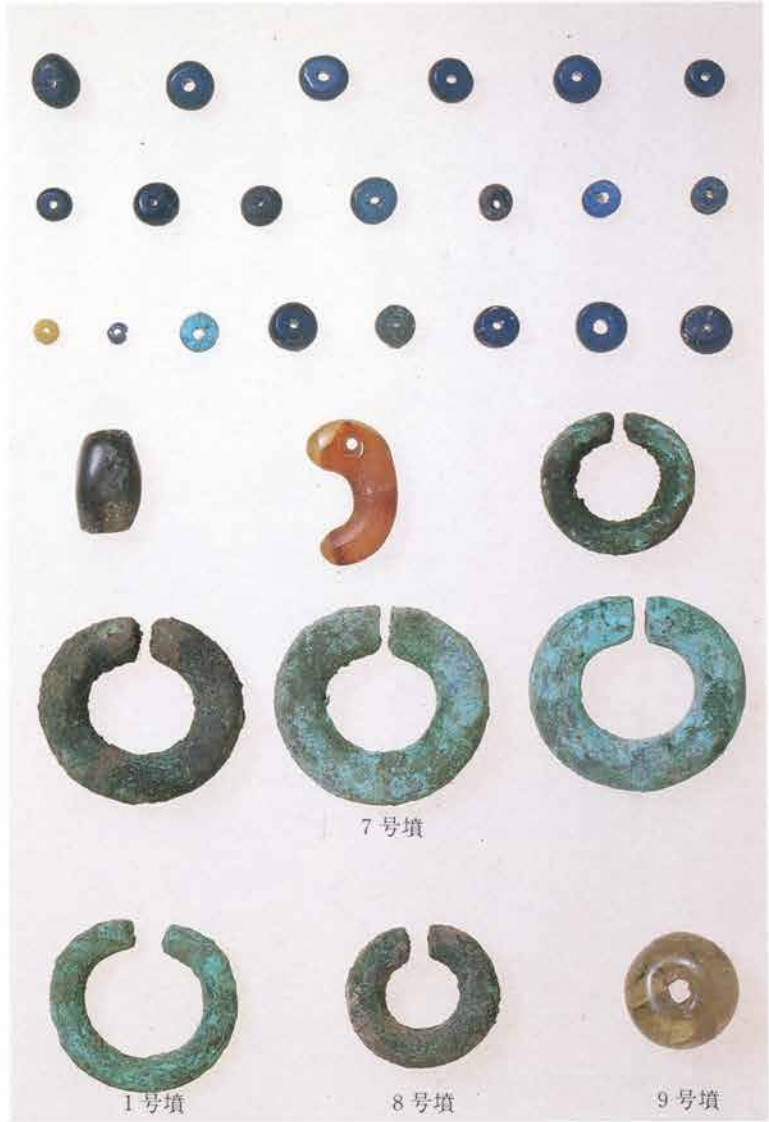
昭和55年度県営畑地帯総合土地改良事業
清里地区埋蔵文化財発掘調査報告書第3集

1986年

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



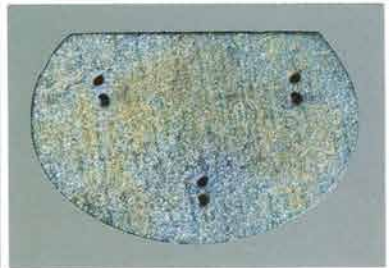
1. 小刀 (7号墳)



2. 古墳出土玉類、耳環



3. 丸柄表 (7号住居址)



4. 丸柄裏 (7号住居址)



5. 緑釉陶器 (1号基壇)



6. 緑釉陶器 (1号基壇)

序

県営畑地帯総合清里地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は、昭和52年度に着手して以来、4ケ年計画で実施してまいりました。55年度の調査は、前橋市池端町および北群馬郡吉岡村大字大久保地域が対象となりました。当該地域には古墳14基をはじめとする埋蔵文化財が分布していることが既に確認されていまして、これら古墳の調査を行ないました。その結果、以下に報告するところの成果をあげることができました。

55年度の調査対象区域となった榛名山の東南麓には、県指定史跡高塚古墳をはじめとし、数多くの古墳が分布していたことが知られています。しかし、それらの多くは、調査されないまま姿を消してしまっています。今回、この区域の古墳が調査されたことは、榛名山東南麓地域の古墳文化を解明する上で、貴重な資料を提供してくれたものと思います。

本報告書の刊行をもって、4カ年にわたる県営畑地帯総合清里地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は完了いたしました。既に公刊されている本事業に伴う調査報告書。「清里・陣場遺跡」、「清里・庚申塚遺跡」とともに、本報告書が多くの人々の利用に供され、広く県民文化の向上に寄与されますことを心より念願する次第です。発掘調査にご協力いただいた関係機関、地元地権者等に厚く御礼を申し上げ、序といたします。

昭和61年3月20日

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水 一郎

例 言

1. 本書は、昭和55年度に実施された群馬県前橋市池端町783番地、北群馬郡吉岡村大字大久保616番地を中心とする県営畑地帯総合土地改良事業清里地区埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 遺跡名は、^{きよさと}清里・^{ながくぼ}長久保遺跡である。註 近接する長久保古墳群(榛東村)とは別の遺跡である。
3. 事業主体は、群馬県農政部である。
4. 発掘調査は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が下記により実施した。

調査期間 昭和55年8月18日～昭和56年3月26日

調査担当 細野雅男 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査研究第3課長(現在、伊勢崎市立名和小学校教諭)

中束耕志 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査研究員(現在、群馬県立歴史博物館学芸員)

相京建史 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査研究員

調査協力者 前橋土地改良事務所 清里地区土地改良区

調査の主な参加者 新井清江 新井トミ子 飯島栄子 石関要 一倉清太郎 伊藤初夫

伊藤春江 伊藤やす子 今井キク子 大島正幸 大塚操 大塚洋子

(敬称省略) 岡田あや子 岡田庫治 小川かめ 小材恒久 小材尚子 小渕莊作

笠井絹江 笠井絹江 笠井京子 笠井トシ子 笠井初子 笠井久義

笠井ヒチ 鹿島ハル江 岸只男 草間てるみ 桑原恵美子 小林シャウ

斉藤つる 神保一枝 神保ゲン 神保トク江 神保久子 神保政子

関口キヨ子 関口ナミ子 関口洋子 高橋幸枝 筑井たみ子 角田由五郎

富岡かつ子 富岡千代子 中島トキ 萩原晃 蜂巢綾子 馬場秋代

馬場寿美子 馬場ナツ 平林照美 藤田タカ 藤田光夫 間仁田カネ

松島妙子 松田千津子 山崎チイ 山田光子 湯浅佳代子 浅間ヨシ江

5. 整理作業は、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の昭和59年度・60年度事業として、下記により実施した。

整理期間 昭和59年4月1日～61年3月20日

整理担当 相京建史

遺物写真 佐藤元彦 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団技師

保存処理 関邦一 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団技師・浜野和宗作・伊能敬治・北爪健二

整理作業員 福島恵理子 石井弘子 中山悦子 大川明子 茂木順子 鈴木紀子

6. 本書作成にあたって、人骨の鑑定は国立科学博物館人類研究部 佐倉 朔、緑釉及び灰釉陶器の鑑定は岐阜県多治見市教育委員会の田口昭二、滋賀県教育委員会の松沢 修、石材の鑑定は高崎市中尾町の飯島静男、刀剣研磨の指導は関根貞雄の各氏にお願いした。

7. 本遺跡の図面・写真・出土遺物は現在、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

8. 本書に掲載した地図は、建設省国土地理院発行の5万分の1地形図(前橋、榛名山)昭和58年、前橋市役所発行の1万分の1現形図(3)昭和49年を使用した。

9. 昭和54年度調査分の清里・庚申塚1号墳は今回の報告書に登載した。

10. 本書の執筆は下の通りである。それぞれの執筆箇所に関係する氏名を記した。

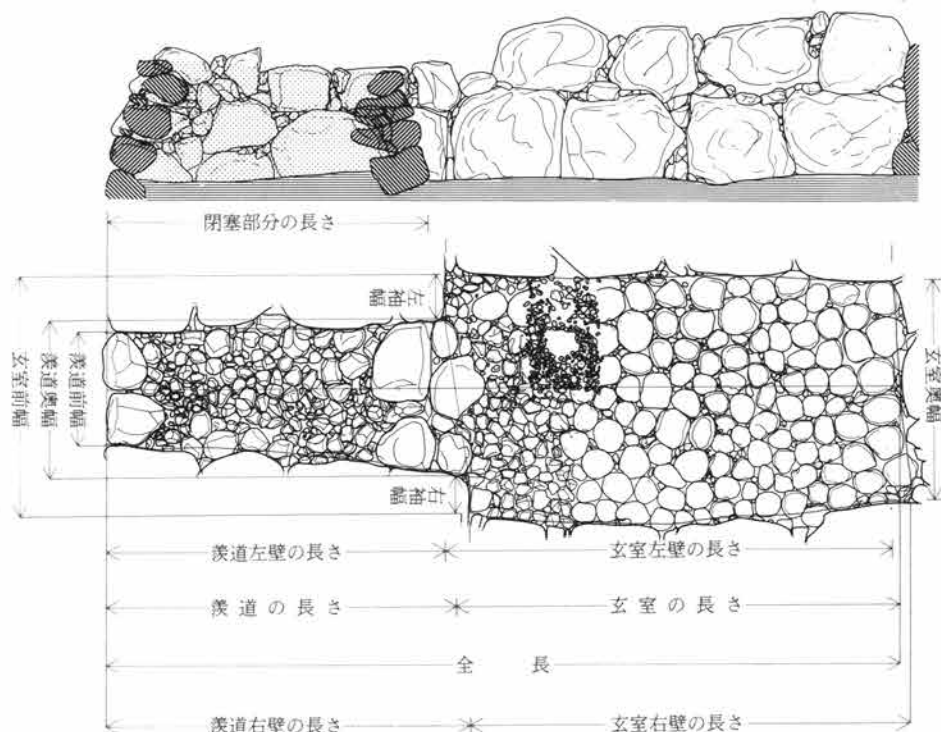
第1章	第1節	神保 侑史		
	第2節	相京 建史		
第2章		〃		
第3章	第1節	遺構	〃	
		遺構遺物	谷藤 保彦	
		土器だまり	中東 耕志	
	第2節	遺構	松本 浩一	神保 相京
		遺物	相京	
	第3節		〃	
第4章	第1節	中東		
	第2節	細野 雅男		
	第3節	相京		
第5章	第1節	大江 正行		
	第2節	佐倉 朔		

11. 本書を作成するにあたり、下記の方々からご指導、ご協力を得た。

新井 房夫	石川 正之助	田中 宏之	市川 昇治	小林 起久治	沢井 良之助	井上 唯雄
近藤 平志	白石 保三郎	梅沢 重昭	松本 浩一	大沢 秋良	上原 啓己	細野 雅男
神保 侑史	定方 隆史	国定 均	笠原 秀樹	須田 朋子	吉田 有光	柳岡 良宏

凡 例

1. 清里・長久保遺跡の発掘区は1区画を100m四方に区切り、1～27区まで設定した。この1区画100m四方の中に5m区画を作って調査を行なった。東西方向西から東へ向けてアルファベット、南北方向北から南へ向けて数字を使用した。
2. 遺構実測図内の方位記号は、真北を表わす。
3. 土器だまり全体図及び古墳等高線実測図は25m間隔であり、表土層を剝した段階で計測した数値である。
4. 本書における遺構実測図に記した断面基準線は海拔で表わした。
5. 本書に記載した等高線による土器だまり全体図は500分の1、古墳墳丘実測図は300分の1（庚申塚2号墳のみ150分の1）縮尺である。
6. 遺構図版・遺物出土状況図版説明文最後の（ ）は、被写体に向かったのカメラ位置である。
7. 縄文時代の遺構（住居址等）の実測原図は10分の1、及び20分の1であるが、記載の遺構図は80分の1、遺物出土状況図は60分の1を基本として表わし、各図の中にスケールを付加した。
8. 古墳の遺構の実測原図は10分の1、及び20分の1であるが、記載の石室展開図・墓道石組み・前庭部実測図は40分の1、掘り方実測図は60分の1、石室内遺物出土状況図は20分の1、土層図は100分の1を基本として表わし、各図の中にスケールを付加した。
9. 古墳の基本土層は、各古墳に比較的共通する土層をⅠ～Ⅶ層とした。この番号以外は各古墳ごとに便宜上使用したものであり、古墳間ごとに共通性はない。
10. 石室の計測値は下記の名称に数値をあてた。



11. 住居址、古墳等遺物出土状況図中の遺物に付した番号は、挿図図版中の番号と一致する。また、接合関係にある遺物は各々を可能な限り実線で結び、不可能な物に関しては図中に凡例を設け明記した。
12. 古墳から出土の人骨・歯の出土状況はイロハ記号で表わした。本文で個々の人骨・歯の説明も同様の記

号で表わしたが、床面下礫石面で検出した人骨と歯は床面下の下を付加した。

13. 住居址及び古墳遺物出土状況図中に使用した記号は下記の通りである。

住居址	■ 床面出土遺物	● 覆土出土遺物			
古墳	□ 須恵器	∖ 土師器	○ 小玉	□ 刀子	▲ 鉄鏃
	■ 馬具	◆ 鉄釘	◇ その他の鉄器	● 人骨	△ 歯

14. 本遺跡出土遺物の註記は、清ナ○○遺構、土層等を記入した。土器に註記した土層は図面整理との都合で本文中の出土層位と異なる場合がある。

15. 本書に記載した遺物実測図は、縄文時代の土器と石器は6分の1と3分の1と2分の1の他1分の1。古墳時代の土師器・須恵器が3分の1、装身具の玉類が1分の1、耳環が2分の1。鉄器が4分の1と2分の1。埴輪が4分の1と3分の1縮尺を基本とし、各々実測図に近接させスケールを付加した。

16. 土器等の遺物実測は、4分割法により左2分の1へ外面、右2分の1に断面及び内面を記載した。

17. 土器実測図等中央線については、実線は遺物正置のままの実測図であり、一点鎖線は180°回転させて実測したことを表わす。

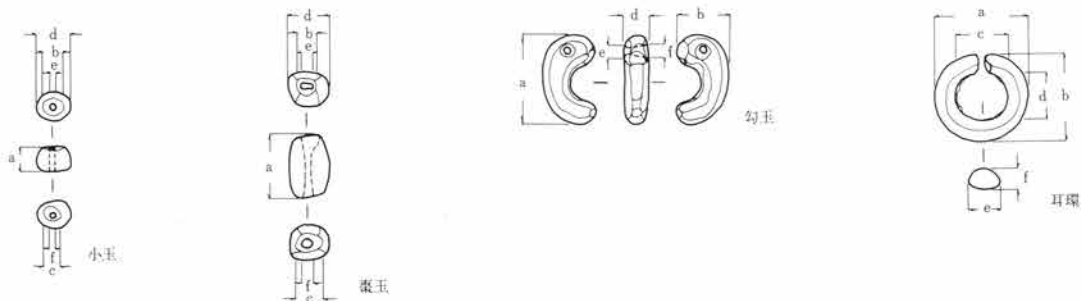
18. 土器等の拓本は断面の左側に内面を表わし、右側に外面を表わした。

19. 遺物実測図で破線を使用した部分は推定復元部分であるが、出来る限り最小限の復元にとどめた。

20. 土器類の色調の断定は、「標準土色帖」農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修、1976年9月発行を使用した。

21. 石器の実測は三角法を用いた。石器の磨耗部分は朱色で表わした。

22. 古墳出土の装身具（玉類・耳環）の計測値は下図の記号に数値をあてた。玉類の色調は、武井邦彦「日本色彩事典」笠間書院 1978年5月31日発行を使用した。



23. 遺構及び遺物挿図版中におけるスクリーントーンは次の事を表わす。

住居址等床面下	古墳石室床面下	古墳石室墓道部閉塞部分
須恵器の断面部分	緑釉陶器の施釉部分	内黒処理の内黒部分
灰釉陶器の施釉部分		

24. 本文中にある火山灰層は略して使用してある部分があるが、本来は下記の呼称で使われている。

B → 浅間B降下軽石層	F P → 榛名山二ツ岳降下軽石層	F A → 榛名山二ツ岳降下火山灰層
C → 浅間C降下軽石層	Y P → 板鼻黄色軽石層	B P → 板鼻褐色軽石層

25. Fig. 2・3 に記入してある関越自動車道工事に伴う発掘調査で青梨子古墳として発表（「年報1」群埋文1982）された古墳は、同一古墳群のため清里・長久保遺跡13号墳と改名した。

26. 清里・長久保遺跡7号墳出土の小刀の金属学的解析については、佐々木稔氏にお願いした。結果については研究紀要（群馬県埋蔵文化財調査事業団発行）に登載する計画である。

目 次

序

例 言

凡 例

第1章 経 過

第1節 発掘調査に至る経過..... 1

第2節 調査の経過..... 2

第2章 遺跡の立地と調査方法

第1節 遺跡の立地と環境..... 8

第2節 調査の方法.....14

第3章 各 説

第1節 縄文時代.....15

1区1号住居址.....15

13区1号住居址.....20

13区2号住居址.....24

13区3号住居址.....34

13区4号住居址.....45

13区5号住居址.....56

13区6号住居址.....69

13区8号住居址.....81

13区9号住居址.....100

13区10号住居址.....110

13区11号住居址.....125

13区1号土坑.....137

13区2号土坑.....138

13区1号集石.....140

12・13・27区土器だまり.....141

第2節 古墳時代.....223

1号墳.....223

2号墳.....238

3号墳.....248

4号墳	252
5号墳	256
6号墳	266
7号墳	271
8号墳	295
9号墳	299
10号墳	302
11号墳	304
12号墳	307
庚申塚1号墳	309
庚申塚2号墳	314
各古墳の土層と説明	319
第3節 歴史時代	329
13区7号住居址	329
13区1号墓壙	331
13区2号墓壙	333
第4節 時期不明	334
5区1号土坑	334
第4章 ま と め	
第1節 縄文時代	335
第2節 古墳時代	343
第3節 歴史時代	353
第5章 付 編	
第1節 清里・長久保遺跡7号墳出土小刀の研磨について	355
第2節 清里・長久保遺跡、及び清里・庚申塚遺跡の古墳出土人骨	359

図 版 目 次

<p>卷頭図版</p> <p>PL. 1 清里・長久保遺跡全景(空中写真)</p> <p>PL. 2-1 1区1号住居址全景(南)</p> <p style="padding-left: 2em;">2 1区1号住居址全景最終(南)</p> <p>PL. 3-1 1区1号住居址遺物出土状況(南西)</p> <p style="padding-left: 2em;">2 1区1号住居址北礫群遺物出土状況(南)</p> <p style="padding-left: 2em;">3~6 1区1号住居址出土遺物</p> <p>PL. 4-1 13区1・5号住居址全景(南)</p> <p style="padding-left: 2em;">2・3 13区1号住居址出土遺物</p> <p>PL. 5-1 13区2号住居址遺物出土状況全景(東)</p> <p style="padding-left: 2em;">2 13区2号住居址全景(東)</p> <p>PL. 6-1 13区2号住居址全景(南)</p> <p style="padding-left: 2em;">2 13区2号住居址柱穴柱受け(西)</p> <p style="padding-left: 2em;">3 13区2号住居址遺物出土状況</p> <p style="padding-left: 2em;">4 13区2号住居址炉内埋設土器(南)</p> <p style="padding-left: 2em;">5 13区2号住居址炉内埋設土器(南)</p> <p>PL. 7-1~8 13区2号住居址出土遺物</p> <p>PL. 8-1~6 13区2号住居址出土遺物</p> <p>PL. 9-1 13区3号住居址全景(東)</p> <p style="padding-left: 2em;">2 13区3号住居址遺物出土状況全景(東)</p> <p>PL. 10-1~7 13区3号住居址出土遺物</p> <p>PL. 11-1~4 13区3号住居址出土遺物</p> <p>PL. 12-1 13区4号住居址全景(東)</p> <p style="padding-left: 2em;">2 13区4号住居址遺物出土状況全景(東)</p> <p>PL. 13-1 13区4号住居址炉全景(東)</p> <p style="padding-left: 2em;">2 13区4号住居址遺物出土状況</p> <p style="padding-left: 2em;">3 13区4号住居址遺物出土状況</p> <p style="padding-left: 2em;">4 13区4号住居址遺物出土状況</p> <p style="padding-left: 2em;">5 13区4号住居址遺物出土状況</p> <p>PL. 14-1~6 13区4号住居址出土遺物</p> <p>PL. 15-1~4 13区4号住居址出土遺物</p> <p>PL. 16-1 13区5号住居址遺物出土状況床面</p>	<p>(南)</p> <p>2 13区1・5号住居址全景(南)</p> <p>3 13区5号住居址内1・2号炉(南東)</p> <p>4 13区5号住居址遺物出土状況埋甕(北西)</p> <p>5 13区5号住居址1号炉</p> <p>PL. 17-1 13区5号住居址遺物出土状況(南)</p> <p style="padding-left: 2em;">2~4 13区5号住居址出土遺物</p> <p>PL. 18-1~4 13区5号住居址出土遺物</p> <p>PL. 19-1~7 13区5号住居址出土遺物</p> <p>PL. 20-1 13区6号住居址全景(南)</p> <p style="padding-left: 2em;">2 13区6号住居址セクションW-E(南)</p> <p style="padding-left: 2em;">3 13区6号住居址セクションS-N(東)</p> <p style="padding-left: 2em;">4~6 13区6号住居址出土遺物</p> <p>PL. 21-1~4 13区6号住居址出土遺物</p> <p>PL. 22-1 13区8号住居址全景(南)</p> <p style="padding-left: 2em;">2 13区8号住居址遺物出土状況全景(南)</p> <p>PL. 23-1 13区8号住居址遺物出土状況埋甕(北)</p> <p style="padding-left: 2em;">2 13区8号住居址遺物出土状況</p> <p style="padding-left: 2em;">3~6 13区8号住居址出土遺物</p> <p>PL. 24-1~10 13区8号住居址出土遺物</p> <p>PL. 25-1~5 13区8号住居址出土遺物</p> <p>PL. 26-1 13区8号住居址内落ち込み(南)</p> <p style="padding-left: 2em;">2 13区8号住居址内落ち込み全景(南)</p> <p style="padding-left: 2em;">3~5 13区8号住居址内落ち込み出土遺物</p> <p>PL. 27-1~5 13区8号住居址内落ち込み出土遺物</p> <p>PL. 28-1 13区9号住居址セクション(W-E)(南)</p> <p style="padding-left: 2em;">2 13区9号住居址遺物出土状況全景(南西)</p> <p>PL. 29-1 13区9号住居址遺物出土状況柱受け(南)</p>
--	--

PL.	2~5	13区9号住居址出土遺物	況
PL.	30-1~5	13区9号住居址出土遺物	2 12・13・27区土器だまり遺物出土状況
PL.	31-1	13区10号住居址遺物出土状況全景(西)	況
	2	13区10・11号住居址全景(西)	PL. 42-1~4 12・13・27区土器だまり出土遺物
PL.	32-1	13区10号住居址炉遺物出土状況(南東)	PL. 43-1~7 12・13・27区土器だまり出土遺物
	2	13区10号住居址遺物出土状況(東)	PL. 44-1~4 12・13・27区土器だまり出土遺物
	3~7	13区10号住居址出土遺物	PL. 45-1~5 12・13・27区土器だまり出土遺物
PL.	33-1~5	13区10号住居址出土遺物	PL. 46-1~4 12・13・27区土器だまり出土遺物
PL.	34-1・2	13区10号住居址出土遺物	PL. 47-1~4 12・13・27区土器だまり出土遺物
	3	13区10号住居址全景(西)・11号住居址遺物出土状況全景(西)	PL. 48-1~6 12・13・27区土器だまり出土遺物
PL.	35-1	13区11号住居址全景下部(南東)	PL. 49-1~4 12・13・27区土器だまり出土遺物
	2	13区11号住居址セクションW-E(北西)	PL. 50-1~4 12・13・27区土器だまり出土遺物
			PL. 51-1~6 12・13・27区土器だまり出土遺物
PL.	36-1	13区10・11号住居址全景(西)	PL. 52-1~6 12・13・27区土器だまり出土遺物
	2	13区11号住居址炉(南西)	PL. 53-1 1号墳墳丘正面(南東)
	3~7	13区11号住居址出土遺物	2 1号墳墳丘土層(南)
PL.	37-1~5	13区11号住居址出土遺物	3 1号墳石室正面(南東)
PL.	38-1	13区1号土坑全景(東)	4 1号墳墓道石組(南西)
	2	13区1号土坑出土遺物	5 1号墳全景(南東)
	3	13区2号土坑遺物出土状況全景(南)	PL. 54-1 1号墳石室左壁(東)
	4	13区2号土坑出土遺物	PL. 2 1号墳石室右壁(南)
PL.	39-1	13区1号集石全景(南西)	3 1号墳墓道(北西)
	2	13区1号集石掘り方全景(南西)	4 1号墳石室内鉄鏝出土状況(北東)
			5 1号墳石室裏込め被覆(北東)
PL.	40-1	13区A~C-12・13グリッド土器だまり遺物出土状況(西)	6 1号墳壁石根石と掘り方(南東)
	2	13区C-9グリッド土器だまり遺物出土状況(西)	7 1号墳石室根石支石(南東)
	3	13区C-8グリッド土器だまり遺物出土状況(南東)	8 1号墳掘り方最終(南東)
	4	13区C-8グリッド土器だまり遺物出土状況(北)	PL. 55-1~7 1号墳出土遺物
	5	13区E-8グリッド土器だまり遺物出土状況(南)	PL. 56-1・2 1号墳出土遺物
PL.	41-1	12・13・27区土器だまり遺物出土状況	PL. 57-1・2 1号墳出土遺物
			PL. 58-1 2号墳全景(南)
			2 2号墳石室全景(南)
			PL. 59-1 2号墳石室左壁(南東)
			2 2号墳石室右壁(南西)
			3 2号墳玄室奥壁(南)
			4 2号墳玄室内遺物出土状況(南)
			5 2号墳墓道(南)
			6 2号墳墓道部遺物出土状況(南)

	7	2号墳壁石根石と掘り方(西)		8	5号墳石室壁石根石と掘り方(南東)
	8	2号墳壁石根石と掘り方(北西)	PL. 69-1~7	5	5号墳出土遺物
PL.	60-1	2号墳左壁根石と掘り方(南西)	PL. 70-1~3	5	5号墳出土遺物
	2	2号墳左壁礎石(東)	PL. 71-1	6	6号墳石室全景(南)
	3	2号墳石室前遺物出土状況		2	6号墳全景(南)
	4	2号墳石室前遺物出土状況		3	6号墳玄室床下土層(南)
	5~7	2号墳出土遺物		4.5	6号墳出土遺物
PL.	61-1~9	2号墳出土遺物	PL. 72-1~11	6	6号墳出土遺物
PL.	62-1~10	2号墳出土遺物	PL. 73-1	7	7号墳全景(南)
PL.	63-1	3号墳全景(南)		2	7号墳墓道石組(南東)
	2	3号墳石室全景(南)		3	7号墳石室前特殊遺構(南西)
PL.	64-1	3号墳石室左壁(南東)		4	7号墳閉塞状況と墓道石組(南)
	2	3号墳石室右壁(南西)		5	7号墳石室前閉塞部(南)
	3	3号墳石室奥壁(南)	PL. 74-1	7	7号墳閉塞状況(北)
	4	3号墳前庭部左袖(東)		2	7号墳石室左壁(東)
	5	3号墳前庭部右袖(西)		3	7号墳石室右壁(北西)
	6	3号墳裏込め被覆状況(東)		4	7号墳石室奥壁(南)
	7	3号墳壁石根石と掘り方(南)		5	7号墳袖石(北)
	8	3号墳壁石根石と掘り方(東)		6	7号墳玄室礎石(南)
PL.	65-1	3号墳西トレンチ裏込め(南西)		7	7号墳玄室内遺物出土状況(北)
PL.	2	3号墳奥壁裏込め(北)		8	7号墳墓道内出土遺物(東)
	3	3号墳左壁裏込め(西)	PL. 75-1	7	7号墳玄室内遺物出土状況(南)
	4	3号墳出土遺物		2	7号墳石室全景(南)
	5	4号墳全景(南)	PL. 76-1	7	7号墳壁石根石と裏込め被覆(南)
PL.	66-1	4号墳石室全景(南)		2	7号墳壁石根石と掘り方(南)
	2	4号墳閉塞状況(南)		3	7号墳壁石根石(西)
	3	4号墳石室右壁(南西)		4	7号墳壁石根石(北)
	4	4号墳裏込め被覆状況(南東)		5~7	7号墳出土遺物
	5	4号墳玄室床下土層(南)	PL. 77-1~5	7	7号墳出土遺物
PL.	67-1	5号墳全景(南)	PL. 78-1・2	7	7号墳出土遺物
	2	5号墳石室全景(南東)	PL. 79-1~4	7	7号墳出土遺物
PL.	68-1	5号墳閉塞状況(南東)	PL. 80-1~4	7	7号墳出土遺物
	2	5号墳石室左壁(東)	PL. 81-1	8	8号墳全景(北)
	3	5号墳石室右壁(南)		2	8号墳主体部(北)
	4	5号墳石室奥壁(南東)	PL. 82-1	8	8号墳主体部(北)
	5	5号墳墓道石組(南)		2~5	8号墳出土遺物
	6	5号墳玄室内遺物出土状況(北西)	PL. 83-1	9	9号墳全景(北東)
	7	5号墳玄室内遺物出土状況(南)		2	9号墳主体部(南西)

- PL. 84-1 9号墳石室全景(北東)
2~6 9号墳出土遺物
- PL. 85-1 10号墳全景(北)
2 10号墳石室右壁(西)
3 10号墳石室左壁(南東)
4 10号墳石室奥壁(南)
5 10号墳石室全景(上)
- PL. 86-1 11号墳全景(南西)
2 11号墳石室床面(南西)
3 11号墳正面(南西)
4 11号墳掘り方(南西)
5 11号墳框(北東)
- PL. 87-1 12号墳石室全景(南)
2 12号墳全景(南)
- PL. 88-1 庚申塚1号墳調査前全景(南)
2 庚申塚1号墳全景(南西)
- PL. 89-1 庚申塚1号墳石室全景(南)
2 庚申塚1号墳閉塞状況(南)
3 庚申塚1号墳石室左壁(南東)
4 庚申塚1号墳右壁裏込め(東)
5 庚申塚1号墳石室床面(南)
- PL. 90-1 庚申塚1号墳石室右壁(南西)
2 庚申塚1号墳石室奥壁(南)
3 庚申塚1号墳葺石根石(南)
4 庚申塚1号墳掘り方土層(南)
5 庚申塚1号墳出土遺物
- PL. 91-1 庚申塚2号墳石室全景(南)
2 庚申塚2号墳全景(南)
- PL. 92-1 庚申塚2号墳玄門柱(北)
2 庚申塚2号墳石室左壁(南東)
3 庚申塚2号墳石室右壁(南西)
4 庚申塚2号墳石室奥壁(南)
5 庚申塚2号墳周堀土層断面(南東)
6 庚申塚2号墳裏込め被覆状況(南)
7 庚申塚2号墳石室全景(南)
8 庚申塚2号墳玄室内遺物出土状況(北)
- PL. 93-1 庚申塚2号墳石室(南)
- PL. 93-2~5 庚申塚2号墳出土遺物
- PL. 94-1 13区7号住居址全景(西)
2 13区7号住居址遺物出土状況
3 13区7号住居址 炉セクションW-E(南)
4~6 13区7号住居址出土遺物
- PL. 95-1 13区1号墓壙全景(南)
2 13区1号墓壙遺物出土状況
3~5 13区1号墓壙出土遺物
6 13区2号墓壙出土遺物
- PL. 96-1 13区2号墓壙全景(南)
2 13区2号墓壙セクション(南)
- PL. 97-1 5区1号土坑セクションE-W(北東)
2 5区1号土坑全景(南東)
- PL. 98 清里・長久保遺跡7号墳出土小刀研出し結果写真
- PL. 99-1 清里・長久保遺跡2号墳出土人骨
2 清里・長久保遺跡6号墳出土人骨

挿 図 目 次

Fig. 1 遺跡の位置と地形……………12	Fig. 37 13区5号住居址出土遺物実測図……………66
Fig. 2 遺構の分布と周辺の地形……………13	Fig. 38 同……………67
Fig. 3 遺構の広がり(国家座標)……………14	Fig. 39 同……………68
Fig. 4 1区1号住居址実測図……………16	Fig. 40 13区6号住居址実測図……………69
Fig. 5 1区1号住居址遺物出土状況図……………18	Fig. 41 13区6号住居址遺物出土状況図……………70
Fig. 6 1区1号住居址出土遺物実測図……………18	Fig. 42 13区6号住居址出土遺物実測図……………71
Fig. 7 同……………19	Fig. 43 同……………73
Fig. 8 13区1号住居址実測図……………20	Fig. 44 同……………76
Fig. 9 13区1号住居址遺物出土状況図……………20	Fig. 45 同……………78
Fig. 10 13区1号住居址出土遺物実測図……………22	Fig. 46 同……………80
Fig. 11 同……………23	Fig. 47 13区8号住居址実測図……………81
Fig. 12 13区2号住居址実測図……………25	Fig. 48 13区8号住居址遺物出土状況図……………83
Fig. 13 13区2号住居址遺物出土状況図……………26	Fig. 49 13区8号住居址出土遺物実測図……………86
Fig. 14 13区2号住居址出土遺物実測図……………28	Fig. 50 同……………88
Fig. 15 同……………30	Fig. 51 同……………90
Fig. 16 同……………31	Fig. 52 同……………91
Fig. 17 同……………33	Fig. 53 同……………93
Fig. 18 13区3号住居址実測図……………34	Fig. 54 同……………95
Fig. 19 13区3号住居址遺物出土状況図……………35	Fig. 55 13区8号住居址内落ち込み遺物 出土状況図……………96
Fig. 20 13区3号住居址出土遺物実測図……………37	Fig. 56 13区8号住居址内落ち込み出土 遺物実測図……………98
Fig. 21 同……………40	Fig. 57 同……………99
Fig. 22 同……………41	Fig. 58 13区9号住居址実測図……………100
Fig. 23 同……………43	Fig. 59 13区9号住居址遺物出土状況図……………102
Fig. 24 同……………44	Fig. 60 13区9号住居址出土遺物実測図……………104
Fig. 25 13区4号住居址実測図……………45	Fig. 61 同……………105
Fig. 26 13区4号住居址遺物出土状況図……………46	Fig. 62 同……………107
Fig. 27 13区4号住居址出土遺物実測図……………49	Fig. 63 同……………109
Fig. 28 同……………51	Fig. 64 13区10号住居址実測図……………110
Fig. 29 同……………54	Fig. 65 13区10号住居址遺物出土状況図……………111
Fig. 30 同……………55	Fig. 66 13区10号住居址出土遺物実測図……………113
Fig. 31 13区5号住居址実測図……………56	Fig. 67 同……………116
Fig. 32 13区5号住居址遺物出土状況図……………57	Fig. 68 同……………119
Fig. 33 13区5号住居址内1・2号炉実測図……………58	Fig. 69 同……………121
Fig. 34 13区5号住居址出土遺物実測図……………60	Fig. 70 同……………123
Fig. 35 同……………62	
Fig. 36 同……………64	

Fig. 71	13区10号住居址出土遺物実測図	124	Fig. 106	12・13・27区土器だまり出土遺物実測図	189
Fig. 72	13区11号住居址実測図	125	Fig. 107	同	192
Fig. 73	13区11号住居址遺物出土状況図	126	Fig. 108	同	194
Fig. 74	13区11号住居址出土遺物実測図	128	Fig. 109	同	196
Fig. 75	同	131	Fig. 110	同	197
Fig. 76	同	133	Fig. 111	同	199
Fig. 77	同	135	Fig. 112	同	201
Fig. 78	同	136	Fig. 113	同	203
Fig. 79	13区1号土坑実測図	137	Fig. 114	同	205
Fig. 80	13区1号土坑出土遺物実測図	137	Fig. 115	同	207
Fig. 81	13区2号土坑実測図	138	Fig. 116	同	209
Fig. 82	13区2号土坑出土遺物実測図	140	Fig. 117	同	211
Fig. 83	13区1号集石実測図	140	Fig. 118	同	213
Fig. 84	12・13・27区土器だまり遺物密度分布図(土器)	142	Fig. 119	同	215
Fig. 85	同(石器)	143	Fig. 120	同	216
Fig. 86	同(土器&石器)	144	Fig. 121	同	218
Fig. 87	13区土器だまりA～C-12・13グリッド平面実測図	147	Fig. 122	同	219
Fig. 88	12・13・27区土器だまり土層図	148	Fig. 123	同	221
Fig. 89	12・13・27区土器だまり出土遺物実測図	151	Fig. 124	同	222
Fig. 90	同	153	Fig. 125	1号墳墳丘等高線図	223
Fig. 91	同	155	Fig. 126	1号墳石室実測図	225
Fig. 92	同	158	Fig. 127	1号墳墓道石組と葺石実測図	226
Fig. 93	同	159	Fig. 128	1号墳石室内遺物出土状況図	227
Fig. 94	同	161	Fig. 129	1号墳石室掘り方と根石実測図	228
Fig. 95	同	164	Fig. 130	1号墳石室掘り方と根石断面実測図	229
Fig. 96	同	167	Fig. 131	1号墳出土遺物実測図	230
Fig. 97	同	169	Fig. 132	同	231
Fig. 98	同	172	Fig. 133	同	233
Fig. 99	同	174	Fig. 134	同	235
Fig. 100	同	175	Fig. 135	同	236
Fig. 101	同	178	Fig. 136	同	237
Fig. 102	同	180	Fig. 137	2・3号墳墳丘等高線図	238
Fig. 103	同	183	Fig. 138	2号墳石室実測図	240
Fig. 104	同	185	Fig. 139	2号墳石室掘り方と根石実測図	241
Fig. 105	同	187	Fig. 140	2号墳石室内遺物出土状況図	242
			Fig. 141	2号墳出土遺物実測図	243
			Fig. 142	同	244

Fig. 143	2号墳出土遺物実測図	245	Fig. 181	7号墳出土遺物実測図	290
Fig. 144	同	245	Fig. 182	同	291
Fig. 145	同	246	Fig. 183	同	292
Fig. 146	同	247	Fig. 184	同	294
Fig. 147	3号墳石室実測図	249	Fig. 185	8号墳墳丘等高線図	295
Fig. 148	3号墳前庭部石組と葺石実測図	250	Fig. 186	8号墳掘り方実測図	296
Fig. 149	3号墳石室掘り方と根石実測図	251	Fig. 187	8号墳出土遺物実測図	297
Fig. 150	3号墳出土遺物実測図	252	Fig. 188	同	298
Fig. 151	4号墳墳丘等高線図	253	Fig. 189	9・10号墳墳丘等高線図	299
Fig. 152	4号墳石室実測図	254	Fig. 190	9号墳石室実測図	300
Fig. 153	4号墳石室掘り方と根石実測図	255	Fig. 191	9号墳出土遺物実測図	301
Fig. 154	5号墳墳丘等高線図	256	Fig. 192	10号墳石室実測図	302
Fig. 155	5号墳石室実測図	258	Fig. 193	10号墳石室掘り方と根石実測図	303
Fig. 156	5号墳前庭部石組と遺物出土状況図	259	Fig. 194	11・12号墳墳丘等高線図	304
Fig. 157	5号墳石室内遺物出土状況図	259	Fig. 195	11号墳石室実測図	305
Fig. 158	5号墳石室掘り方と根石実測図	260	Fig. 196	11号墳石室掘り方と根石実測図	306
Fig. 159	5号墳出土遺物実測図	261	Fig. 197	12号墳石室実測図	308
Fig. 160	同	262	Fig. 198	庚申塚1号墳全体図	309
Fig. 161	同	265	Fig. 199	庚申塚1号墳石室実測図	310
Fig. 162	6号墳石室実測図	266	Fig. 200	庚申塚1号墳石室内遺物出土状況図	311
Fig. 163	6号墳墓道実測図	267	Fig. 201	庚申塚1号墳出土遺物実測図	313
Fig. 164	6号墳石室掘り方と根石実測図	268	Fig. 202	庚申塚2号墳全体図	314
Fig. 165	6号墳出土遺物実測図	269	Fig. 203	庚申塚2号墳石室実測図	315
Fig. 166	同	270	Fig. 204	庚申塚2号墳石室内遺物出土状況図	317
Fig. 167	7号墳墳丘等高線図	272	Fig. 205	庚申塚2号墳石室掘り方実測図	318
Fig. 168	7号墳石室実測図	273	Fig. 206	庚申塚2号墳出土遺物実測図	318
Fig. 169	7号墳石室断面実測図	274	Fig. 207	1号墳、1・2号墳通し土層図	319
Fig. 170	7号墳墓道石組と葺石実測図	275	Fig. 208	2号墳、3号墳、4号墳土層図	321
Fig. 171	7号墳石室内遺物出土状況図	276	Fig. 209	5号墳、6号墳土層図	323
Fig. 172	7号墳石室掘り方と根石実測図	277	Fig. 210	7号墳、8号墳土層図	325
Fig. 173	7号墳出土遺物実測図	279	Fig. 211	9号墳、10号墳、11号墳、庚申塚1号墳、庚申塚2号墳土層図	327
Fig. 174	同	280	Fig. 212	13区7号住居址実測図	329
Fig. 175	同	281	Fig. 213	13区7号住居址内かまど実測図	329
Fig. 176	同	283	Fig. 214	13区7号住居址出土遺物実測図	330
Fig. 177	同	284	Fig. 215	13区1号墓壙実測図	331
Fig. 178	同	287	Fig. 216	13区1号墓壙出土遺物実測図	332
Fig. 179	同	288	Fig. 217	13区2号墓壙実測図	333
Fig. 180	同	289			

Fig. 218	13区2号墓墳出土遺物実測図	………333
Fig. 219	5区1号土坑実測図	………334
Fig. 220	各古墳の企画	………354
Fig. 221	7号墳石室内出土小刀実測図	………358

第1章 経 過

第1節 発掘調査に至る経過

前橋市西北部の清里、池端、上青梨子地区、北群馬郡吉岡村大久保地区の県営畑地帯総合土地改良計画が持ち上がり、この地域内の埋蔵文化財の分布調査が実施されたのは、昭和51年度のことである。分布調査の結果、埋蔵文化財包蔵地5箇所、古墳7基が確認されたが、この調査結果に基づき群馬県教育委員会文化財保護課と群馬県農政部は、土地改良事業と埋蔵文化財保護の調整を図るべく会議を重ねた。調整会議は主に前橋土地改良事務所との間で進められたが、土地改良事業は当初、昭和52年度より7ケ年で実施する計画が示された。この7ケ年計画の土地改良事業の中での事業区域内の埋蔵文化財の取り扱い、事業計画に於て現状保存不可能な箇所について、記録保存のための埋蔵文化財の発掘調査を4ケ年計画で実施することになった。そして、埋蔵文化財の発掘調査は群馬県農政部の委託を受けて、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施することになった。7ケ年の土地改良事業計画はその後9ケ年計画に変更されたが、埋蔵文化財の調査計画は変更されることなく事業が進められた。

事業計画の第1年次の昭和52年度は、前橋市池端町地区の12.6haが事業対象となったが、幸いにもこの区域では埋蔵文化財包蔵地がなく、調査は実施しなかった。第2年次の昭和53年度は、前橋市池端町、北群馬郡吉岡村陣場地区の32.5haが事業対象となった。この中で、前橋市池端町400他、吉岡村陣場85他が埋蔵文化財の対象区域となり、遺跡名を「清里・陣場遺跡」と命名して、昭和54年1月8日から3月24日にかけて調査を実施した。調査の成果は、既に「清里・陣場遺跡」として公開している。第3年次の昭和54年度は前橋市池端町、上青梨子地区26.6haが事業対象となった。この年度は前橋市池端町他、上青梨子他が埋蔵文化財の調査対象区域となり、遺跡名を「清里・庚申塚遺跡」と命名して、昭和54年11月12日より昭和55年3月31日まで調査を実施した。調査の成果は、「清里・庚申塚遺跡」として公開している。

これら第1年次から第3年次の後を受けて埋蔵文化財調査計画の最終年度となった55年度（第4年次）は前橋市池端町、北群馬郡吉岡村大久保地区の32.6haが事業対象となった。今年度の調査は、分布調査の段階で明らかとなった午王頭川右岸の残丘上に分布する古墳が主な調査対象となった。これら古墳については、前橋土地改良事務所、清里土地改良区事務所、地権者と文化財保護行政側との調整が行なわれ、現状保存が不可能な古墳等について調査を実施した。調査は、昭和55年8月18日より昭和56年3月4日まで実施したが、55年度は発掘調査に従事する作業員の問題では、特に地元地権者に迷惑をかけ格段の協力を得た。調査が予定の計画の中で終了したのも、偏に地元地権者の協力があつたからこそである。

かくて、4ケ年にわたる県営清里地区畑地帯土地改良事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、55年度の調査ですべて終了した。55年度調査した遺跡は「清里・長久保遺跡」と命名した。「清里・陣場遺跡」「清里・庚申塚遺跡」に次いで刊行するこの「清里・長久保遺跡」の調査報告書が、本土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の最終報告書になるが、4ケ年の間、この調査においては終始、地元民をはじめ前橋土地改良事務所、清里土地改良区事務所等の協力を得、また、お世話になった。改めて、ここに銘記しておきたい。

(神保侑史)

第2節 調査の経過

- 8月18日 月曜日 晴 発掘調査準備。雑木の伐採。
- 8月19日 火曜日 曇/雨 器材運搬。雑木の伐採。
- 8月20日 水曜日 雨 発掘調査準備。
- 8月22日 金曜日 曇/雨 器材運搬。安全対策（調査区道路整備）。
- 8月25日 月曜日 晴 発掘器材運搬。
- 8月26日 火曜日 雨 プレハブ内にて発掘用具の点検。土地改良区にて打合せ（道路、土取り部分の確認
桑の抜根時期の確認など）。
- 8月27日 水曜日 曇 1・2号墳地形測量。1号墳にトレンチを入れ調査開始。南東トレンチで葺石確認。
須恵器片出土。
- 8月28日 木曜日 曇 1・2号墳墳丘地形実測終了。1号墳南東トレンチ20分の1断面実測。南西トレン
チの調査をはじめ。午後、土地改良区にて会議（部・課長出席）。プレハブの水道、
ガラス、電気取付け終了。
- 8月29日 金曜日 曇 1号墳南東トレンチ土層写真・実測終了。南東トレンチ東側に拡張。南西トレンチ
調査続行。石室内上部覆土除去。前庭部調査葺石確認。物品搬入
- 8月30日 土曜日 曇 1号墳前庭部、石室内覆土掘下げ。
- 9月1日 月曜日 晴 1号墳北東トレンチ調査、溝状の落ち込み検出。前庭部覆土中より土師器（鬼高II
期）・須恵器片出土。玄室内覆土除去、床面より人骨・鉄鏃出土。
- 9月2日 火曜日 曇 1号墳前庭部下部覆土掘下げ後写真撮影。南西・北東トレンチ、ローム面まで掘下
げ、周堀未検出。羨道部閉塞石確認。石室内床面精査。安全対策（古墳周辺に立看
板・ロープ等を設置）。
- 9月3日 水曜日 曇 1号墳南東トレンチ南へ拡張。前庭部下部断面実測。玄室内床面精査、出土遺物取
上げ。
- 9月4日 木曜日 曇 1号墳南西トレンチ土層写真撮影。前庭部出土遺物写真撮影後、平面実測。玄室床
面精査、出土遺物取上げ。
- 9月5日 金曜日 曇 1号墳前庭部遺物取上げ。南西トレンチ土層写真撮影・実測。北西トレンチ調査開
始。石室床面精査。
- 9月6日 土曜日 曇 1号墳南西トレンチ土層実測。北西トレンチ土層精査。
- 9月8日 月曜日 雨/曇 午後一時1号墳北西トレンチ精査。
- 9月9日 火曜日 曇/雨 1号墳前庭部土層観察用ベルト除去、須恵器片出土。南西トレンチ土層実測終了。
北西トレンチ精査。
- 9月10日 水曜日 雨 野外作業中止。記録整理。
- 9月11日 木曜日 曇/晴 1号墳北西トレンチ土層実測。北東トレンチローム面まで掘下げ終了。1・2号墳
連続トレンチ調査開始。
- 9月12日 金曜日 晴 1号墳北東トレンチ土層実測終了。西北西トレンチ精査。2号墳西トレンチに於い
て石室の礎を確認。北トレンチ埴輪片出土。
- 9月16日 火曜日 晴 2号墳北・南トレンチ調査、土層実測、東トレンチ土層精査。東南東トレンチに於

第2節 調査の経過

いて石室左壁確認。前庭部付近にて流れ込み土中に埴輪片出土。県庁にて会議（細野出席）。

- | | | | |
|--------|-----|-----|--|
| 9月17日 | 水曜日 | 晴 | 1号墳玄室内遺物出土状況写真撮影。石室内部分写真撮影（左・右・奥壁・閉塞部分）。2号墳西・東・南トレンチ土層写真撮影。土地改良事務所次長・課長現場視察。 |
| 9月18日 | 木曜日 | 曇 | 1号墳玄室内遺物出土状況写真撮影。2号墳東南東トレンチ土層実測。石室内精査、床面部分写真撮影。清里地区土地改良事務所理事長視察。 |
| 9月19日 | 金曜日 | 曇 | 1号墳玄室内遺物取上げ。2号墳石室内床面精査。前庭部清掃、写真撮影。3号墳石室内覆土除去。 |
| 9月20日 | 土曜日 | 曇 | 1号墳墳丘表土除去。 |
| 9月22日 | 月曜日 | 晴 | 1号墳石室実測開始。墳丘表土除去。周堀有無確認の為、駄目押しトレンチを入れる。2号墳墳丘表土除去。3号墳石室・前庭部調査。 |
| 9月24日 | 水曜日 | 曇/雨 | 1号墳石室平面実測。2号墳墓道～前庭部覆土除去。3号墳前庭部葺石確認。墳丘表土除去。 |
| 9月25日 | 木曜日 | 曇 | 1号墳平面実測。床面断面写真撮影・実測。2号墳前庭部覆土・墳丘部表土除去。3号墳北・西トレンチ土層写真撮影。墳丘精査。 |
| 9月26日 | 金曜日 | 曇 | 1号墳主体部実測。2号墳前庭部・墳丘部調査。3号墳断面実測。前橋土地改良事務所にて発掘区域の打合せ（部・課長出席）。 |
| 9月27日 | 土曜日 | 雨 | 作業中止。発掘区域の打合せ。 |
| 9月29日 | 月曜日 | 晴 | 1号墳石室実測。2号墳石室写真撮影。墓道遺物出土状況写真撮影。閉塞部精査。3号墳断面実測。石室内精査。羨道部写真撮影。4号墳石室平面形確認。 |
| 9月30日 | 火曜日 | 晴 | 1号墳平面実測。2号墳全景写真撮影。3号墳石室全景写真撮影。4号墳閉塞石除去後写真撮影。 |
| 10月1日 | 水曜日 | 晴 | 1号墳石室実測。3号墳全景写真撮影。4号墳羨道部写真撮影。 |
| 10月2日 | 木曜日 | 晴 | 1号墳羨道部実測。2号墳石室床面土層写真撮影。3号墳部分写真撮影（左・右・奥壁）。4号墳全景写真撮影。石室部分写真撮影。支線3号試掘調査。 |
| 10月3日 | 金曜日 | 晴 | 1号墳羨道部平面実測。3号墳前庭部葺石写真撮影。4号墳石室写真撮影。支線3号試掘調査。前橋土地改良区係員来訪。 |
| 10月4日 | 土曜日 | 晴 | 支線3号試掘調査。1号墳墓道平面実測。1号住居址全景・遺物出土状況写真撮影。 |
| 10月6日 | 月曜日 | 曇 | 支線3号試掘調査。1号墳墓道平面実測。5号墳石室調査。 |
| 10月7日 | 火曜日 | 曇/雨 | 支線3号一部拡張。5号墳墳丘、前庭部調査。午後、土地改良区にて会議（部・課長出席）。 |
| 10月8日 | 水曜日 | 晴 | 1号墳葺石実測。5号墳墳丘断面実測。玄室部・前庭部精査。支線3号試掘の結果北丘陵部で古墳1基確認。 |
| 10月9日 | 木曜日 | 晴 | 1号墳墓道葺石撮影。3・4号墳石室写真撮影。 |
| 10月13日 | 月曜日 | 雨 | 調査区道路部分の抜根。5号墳墳丘部調査。 |
| 10月14日 | 火曜日 | 曇/雨 | 1号墳全景写真撮影。閉塞部断面実測。3・4号墳平面実測割付。7号墳調査開始
台風の為プレハブ内整理。 |
| 10月15日 | 水曜日 | 晴 | 台風のあと片付け。 |

第1章 経 過

10月16日	木曜日	曇 雨	1号墳全景・墓道・閉塞部写真撮影。3号墳石室平面実測。4号墳周辺部調査。5号墳墳丘精査。南西・北西・北北東・北東トレンチ土層実測。
10月17日	金曜日	曇	1号墳羨道部実測。3号墳実測。4号墳周堀調査。5号墳墳丘・前庭部調査。
10月18日	土曜日	晴	1号墳石室断面実測。4号墳周堀調査。5号墳墳丘調査。
10月20日	月曜日	雨 曇	図面・写真の整理。
10月22日	水曜日	晴	1号墳石室内床面下精査。2号墳石室平面実測。3号墳裏込除去。4号墳周堀平面・断面実測。石室内床面下石除去。5号墳石室全景写真。群馬大学新井房夫氏により地質の同定。土地改良区係員来訪。
10月23日	木曜日	晴	1号墳断面実測。3・4号墳玄室床面下石除去。4号墳墳丘等高線実測（周堀）。5号墳全景写真撮影。
10月24日	金曜日	曇	1号墳石室内・墓道断割。3号墳玄室部床面下断面写真撮影。石室裏込断面写真撮影。4号墳玄室床面下断面実測。周堀土層写真撮影。
10月25日	土曜日	雨	図面・写真整理。
10月26日	日曜日	晴	4号墳石室裏込断面写真撮影。
10月27日	月曜日	晴	1・3・4号墳石室内床面下断面実測。1・2号墳墳丘等高線実測。5号墳正面写真撮影。県史編纂室専門員視察。
10月28日	火曜日	晴	1・2号墳墳丘等高線実測。3・4号墳石室床面下断面実測。文化庁・県教委文化財保護課員現場視察。
10月29日	水曜日	晴	3号墳石室裏込精査。4号墳全景写真撮影。床面下断面実測。
10月30日	木曜日	晴	1号墳墳頂より墓道の写真撮影。2号墳遺物出土状況写真収録。3号墳石室内床面下エレベーション実測。4号墳裏込被覆写真撮影。掘方確認。事業団普及事業の一環としてビデオ撮影にくる。
10月31日	金曜日	晴	1号墳墳丘除去。石室裏込被覆確認。2号墳墳丘断割。3号墳墳丘断面写真撮影。4号墳裏込被覆範囲平面実測。5号墳石室平面実測。
11月1日	土曜日	晴	1号住居址土層実測。2号墳主体部断割実測。
11月4日	火曜日	晴	1号墳葺石除去。2号墳断面実測。断割写真撮影。3号墳裏込除去。4号墳裏込・石室掘方実測終了。1号住居址遺物取上げ、全景写真撮影終了。
11月5日	水曜日	晴	1・2・3号墳裏込被覆調査。5号墳平面実測。1号住居址断割、実測。
11月6日	木曜日	晴	1号墳裏込被覆写真撮影。断面実測。2号墳裏込被覆実測。4号墳裏込写真撮影。5号墳平面実測。
11月7日	金曜日	晴	1号墳裏込平面実測。2号墳掘方実測。3号墳裏込・掘方写真撮影。
11月8日	土曜日	晴	1号墳裏込除去、天井石除去。3号墳裏込写真撮影。5号墳墳丘等高線実測。
11月10日	月曜日	晴	1号墳側壁石除去。5号墳玄室内出土遺物取上げ。6号墳精査。前橋土地改良区係員視察。
11月11日	火曜日	晴	6号墳全景写真撮影。
11月12日	水曜日	晴	1号墳掘方根石写真撮影。5号墳石室全景・玄室内遺物出土状況写真撮影。
11月13日	木曜日	晴	1号墳根石実測。5号墳石室実測。
11月14日	金曜日	晴	1号墳石室根石除去。5号墳石室平面実測。

11月15日	土曜日	晴	1号墳石室掘方と根石痕写真撮影・実測。5号墳石室床面下出土遺物取上げ。
11月17日	月曜日	曇	1号墳石室掘方最終写真撮影。5号墳羨道部床面除去。墳丘削平。
11月18日	火曜日	晴	5号墳石室床面下部土層実測。遺跡南東部丘陵表土除去。
11月19日	水曜日	晴	5号墳石室裏込写真撮影。掘方確認。6号墳石室床面下の掘方調査。遺跡南東部丘陵表土除去。
11月20日	木曜日	晴	5号墳裏込・掘方精査。6号墳石室床面・前庭部精査後、床面断割写真撮影。7号墳墳丘精査。
11月25日	火曜日	曇/雨	5号墳石室根石と掘方の写真撮影。6号墳前庭部調査。7号墳石室床面・羨道部実測。
11月26日	水曜日	晴	5号墳石室根石実測。
11月27日	木曜日	晴/曇	6号墳玄室内主軸土層写真撮影後、実測。エレベーション実測。
11月28日	金曜日	曇	6号墳全景写真撮影。7号墳玄室内遺物出土状況写真撮影。
11月29日	土曜日	晴	6号墳実測。7号墳玄室内精査。南トレンチ土層精査。
12月1日	月曜日	晴	6号墳掘方精査。7号墳前庭部調査。東・南トレンチ土層写真撮影。
12月2日	火曜日	晴	7号墳玄室内出土遺物取上げ。墳丘表土除去。前庭部精査。
12月3日	水曜日	晴	7号墳墳丘表土除去。前庭部覆土除去。玄室床面精査。Bトレンチ土層実測。
12月4日	木曜日	晴	7号墳墳丘精査。玄室内床面礎石除去。写真撮影後実測。
12月5日	金曜日	晴	7号墳玄室掘方エレベーション実測終了。前庭部葺石精査。写真撮影。遺物取上げ。
12月6日	土曜日	晴	7号墳閉塞部写真撮影。13区6号住居址土層写真撮影。7号住居址炉土層写真撮影。
12月8日	月曜日	晴/曇	13区表土除去。遺構確認作業。
12月9日	火曜日	曇	13区表土除去。遺構確認作業。
12月10日	水曜日	晴	13区1号土坑土層実測。13区遺構確認作業。
12月11日	木曜日	晴/曇	13区1号土坑全景写真撮影、平面実測。7号墳前庭部葺石部分・閉塞部写真撮影。
12月12日	金曜日	曇	13区遺構確認作業。7号墳主体部写真撮影。墳丘土層写真撮影・実測。
12月13日	土曜日	晴	13区遺構確認作業。7号墳石室側壁写真撮影。
12月15日	月曜日	晴	13区遺構確認作業。2号住居址発掘調査開始。
12月16日	火曜日	晴	7号墳石室掘方根石面まで除去。石室羨道部入口の正面図写真撮影。8号墳トレンチを入れる。13区2号住居址調査。
12月17日	水曜日	晴	7号墳前庭部と石室正面写真撮影。13区2号住居址掘下げ。
12月18日	木曜日	晴	7号墳裏込除去、根石確認。掘方写真撮影後、実測。9号墳石室調査、12区・13区トレンチを入れる。
12月19日	金曜日	晴	7号墳裏込被覆根石写真撮影後、実測。8号墳上の溝上遺構調査。9号墳墳丘土層実測。12～13区C軽石混入黒色土層除去。2号住居址遺物出土状況写真撮影。
12月20日	土曜日	曇	7号墳裏込除去後写真撮影。8号墳墳丘土層実測。9号墳墳丘表土除去。
12月22日	月曜日	晴	7号墳掘方実測。8号墳墳丘等高線実測。9号墳墳丘土層実測。10号墳表土除去。13区遺物出土状況実測後取上げ。
12月23日	火曜日	曇/雪	8号墳掘方平面実測。10号墳石室・周堀調査。
12月24日	水曜日	曇/雨	発掘調査区整備。プレハブ整理。図面一括撤収。56年1月6日まで年末年始で事務

第1章 経 過

			所閉鎖。
1月7日	水曜日	晴	プレハブ整理。器材搬入。
1月8日	木曜日	晴	8号墳石室掘方実測終了。最終写真終了。9号墳主体部全景写真撮影。10号墳墳丘断面実測。13区1号墓墳断面実測。2・3号住居址床面精査。
1月9日	金曜日	晴	9・10号墳全景・墳丘断面写真撮影。13区2号住居址遺物出土状況写真撮影。平面実測。3号住居址遺構精査。4号住居址掘下げ。
1月10日	土曜日	晴	9号墳平面実測。10号墳主体部写真撮影。庚申塚2号墳調査開始。13区2号住居址床面出土遺物写真撮影後取上げ。3・4号住居址調査。
1月11日	日曜日	晴	13区2号住居址炉址土層実測・写真撮影。1号墓墳土層写真撮影。
1月12日	月曜日	晴/雪	9・10号墳石室平面実測。庚申塚2号墳石室内調査。13区2号住居址レベリング。4号住居址調査。1号墓墳土層写真撮影・実測。
1月13日	火曜日	晴	9号墳平面実測。10号墳奥壁実測。13区2号住居址遺物出土状況写真撮影。1号墓墳全景写真撮影。
1月14日	水曜日	晴	9・10号墳エレベーション実測。庚申塚2号墳石室主体部写真撮影。
1月15日	金曜日	晴	9号墳墳丘等高線実測。13区2号墓墳土層写真撮影・実測。
1月17日	土曜日	晴	9・10号墳石室実測。13区2号住居址炉址内遺物出土状況写真撮影。3・4号住居址調査。
1月19日	月曜日	晴	9・10号墳掘方精査・実測。13区2号住居址炉埋設土器写真撮影。3号住居址土層写真撮影。南西部丘陵南端に古墳確認、11号墳とする。
1月20日	火曜日	晴	9・10号墳裏込・掘方実測。庚申塚2号墳玄室床面実測。13区2号住居址床面遺物取上げ。3号住居址エレベーション実測。4号住居址土層精査。2号墓墳平面実測。前橋土地改良区・県教委・事業団の三者で打合せ。
1月21日	水曜日	曇	13区2号住居址全景写真撮影。3号住居址遺物出土状況写真撮影。4号住居址土層写真撮影。
1月22日	木曜日	晴	庚申塚2号墳平面実測。
1月23日	金曜日	晴	庚申塚2号墳平面実測。裏込被覆実測。13区2号住居址エレベーション・レベリング実測。3号住居址遺物出土状況実測。
1月24日	土曜日	晴	13区2号住居址炉址掘方写真撮影。3号住居址遺物出土状況実測。2号墓墳エレベーション実測。
1月26日	月曜日	晴	庚申塚主体部エレベーション実測。13区3号住居址炉址土層写真撮影、実測。4号住居址遺物出土状況全景写真撮影。
1月27日	火曜日	晴	庚申塚2号墳掘方平面実測。13区2号住居址埋甕実測・遺物取上げ。
1月28日	水曜日	晴	庚申塚2号墳裏込土層写真撮影。掘方実測。13区3号住居址炉址写真撮影。
1月29日	木曜日	晴	13区3号住居址エレベーション実測。4号住居址遺物出土状況写真撮影。
1月30日	金曜日	晴	13区4号住居址遺物出土状況実測。6・8号住居址掘下げ。
1月31日	土曜日	晴	13区4号住居址土層実測。6・8号住居址掘下げ。
2月2日	月曜日	晴	13区4号住居址炉址土層写真撮影。6・8号住居址掘下げ。
2月3日	火曜日	晴	11号墳発掘着手。12～13区A・B-13・14区調査（土器だまり検出）。13区4～8号

			住居址調査。
2月4日	水曜日	晴/曇	11号墳主体部調査。13区5号住居址遺物出土状況写真撮影。7号住居址土層写真撮影。
2月5日	木曜日	晴	11号墳全景写真撮影。4号住居址エレベーション実測。7号住居址土層実測。
2月6日	金曜日	晴	13区7号住居址炉址土層写真撮影。
2月7日	土曜日	晴	13区6号住居址土層・全景写真撮影。7号住居址全景・炉内遺物出土状況写真撮影実測。
2月8日	日曜日	晴	11号墳石室正面・羨道部写真撮影。12号墳石室全景写真撮影・実測。
2月9日	月曜日	晴	南西丘陵遺構確認。
2月10日	火曜日	晴	13区5号住居址床面遺物出土状況写真撮影。南西丘陵上土坑調査。
2月11日	水曜日	曇	11号墳全景写真撮影。掘方平面実測。楯断面図作成。13区1号集石土層実測。
2月12日	木曜日	晴/曇	13区1号集石全景写真撮影。8号住居址土層写真撮影。9号住居址精査。
2月13日	金曜日	晴/曇	13区1号住居址土層写真撮影。5号住居址炉址土層写真撮影。8・9号住居址土層実測。
2月14日	土曜日	曇	1・5号住居址全景・炉址写真撮影。土器だまりA・B-14区遺物出土状況実測。
2月15日	日曜日	曇	13区5号住居址全景写真撮影。8号住居址遺物出土全景写真撮影。
2月16日	月曜日	晴/曇	13区土器だまり全体に掘下げ。
2月17日	火曜日	雪/曇	除雪作業。
2月18日	水曜日	晴	13区2号土坑遺物出土状況写真撮影・実測。6号住居址全景写真撮影。7・9号住居址床面取外し。
2月19日	木曜日	曇	13区2号土坑立面実測。8号住居址内落ち込み全景写真撮影・実測。5号住居址炉址埋甕出土状況写真撮影。8・9号住居址遺物出土状況写真撮影。台地上の大トレンチ東西・南北ライン土層実測。
2月20日	金曜日	曇	13区土器だまりC-8・9、E・F-8区遺物出土状況写真撮影。8号住居址埋設土器出土状況写真撮影。10号住居址遺物出土状況写真撮影。
2月21日	土曜日	晴	13区2・3号住居址全景写真撮影。9号住居址全景写真撮影。
2月22日	日曜日	晴/曇	10・11号住居址土層・遺物出土状況写真撮影。
2月23日	月曜日	曇/雪	13区土器だまり覆土中遺物取上げ。
2月24日	火曜日	雪/雨	土器の水洗い。
2月25日	水曜日	曇	13区10・11号住居址全景・炉址写真撮影。
2月26日	木曜日	晴	13区土器だまり精査・遺物取上げ。
2月27日	金曜日	曇/雪	13区全体の駄目押し。器材撤収。
2月28日	土曜日	晴	庚申塚2号墳全景・東トレンチ土層写真撮影。
3月2日	月曜日	晴	庚申塚2号墳周堀等高線実測。
3月3日	火曜日	晴	庚申塚2号墳周堀等高線実測。
3月4日	水曜日	曇	庚申塚2号墳調査終了。3月26日まで土器整理を中心に作業等を行なう。 撤収後は事業団にて整理を行なう。

(相京)

第2章 遺跡の立地と調査方法

第1節 遺跡の立地と環境

清里・長久保遺跡は、前橋市中心街より北西部へ約5km付近の池端町と吉岡村南部の大久保地区にある。当遺跡は前橋市街地から高崎市街地にかけて広がる平坦な前橋台地上にあり、西に広く分布する相馬ヶ原扇状地とスムーズに移行する。扇状地の末端は標高110m付近であり、面の勾配は扇頂部で80/1000程度、扇中央部から扇端部にかけての遺跡付近で20/1000程度である。本扇状地末端には多数の小河川をつくる小さな谷が残っている。遺跡は標高165m前後であり、午王頭川と八幡川によって分断された台地である。台地の幅は600m～1600m内外であり、扇端部に向い広がる。遺跡は午王頭川の右岸に近接している。当遺跡には古墳があり、この構成層は宮室、陣場、北下等に分布する泥流丘と対比することが出来る。これらの泥流丘群を陣場泥流丘群(陣場熱雲)、その堆積物を陣場泥流堆積物と呼んでいる。この泥流丘群は扇状地面より数mないし10数mの比高で瘤状に突出する。泥流は上部と下部の2つのflow unitsに区別されている。下部堆積物はほぼ全部同一岩種(安山岩質)の角礫から成り、matrixも少なく全体として青灰色を呈している。一部に焼褐色を呈する。上部の堆積物は下部の堆積物を覆うように堆積したもので火山灰質のmatrixの中に多種の色をした安山岩角礫が乱雑に散らばっている。包含されている角礫も若干角がとれている。下部の堆積物が典型的な高温で流下したと推定される火砕流に対して上部の堆積物は多量の水を含み火山体の一部が破壊されて流下し堆積したものである。これらの泥流堆積物を覆ってYP(板鼻黄色軽石層)下約20cmまでの層準の上部ローム層をのせる。この泥流丘の形成は扇状地が形成されている途中の一火山活動によってつくられたものと考え、YP下位BP(板鼻褐色軽石層)上位に形成された泥流丘であることが指摘された。

この陣場泥流丘を利用した古墳が清里・長久保遺跡の中の半数以上を占めることが今回の調査でも判明した。主として山寄せ式古墳は当遺跡において陣場泥流丘を切込み、古墳の主体部や前庭部、墓道等を掘り込んで石室の掘り方をつくっている。この掘り方の断面土層は上記の構成層と一致している。また陣場泥流丘の流れ山状を呈する場所にも古墳は確認される一方、縄文時代の集落を営んだ場所として、この微高地の利用がある。また沖積世に堆積した土層の中にも年代観を与える鍵層がみられる。古墳の構築状況の調査で墳丘の断割を行なったところ、4世紀中葉前後の浅間C降下軽石を混入する黒色土や、6世紀前半に比定された二ツ岳降下火山灰層(FA層)の堆積が確認できる。また石室内床面からは6世紀後半の時期と推定されている二ツ岳降下軽石層(FP層)が持ち込まれて床石として使用されている痕跡がある。

遺跡内は調査時点では桑園、畑地、谷地状の水田などが主である。また近接地では畜産や養鶏・養豚などが行なわれ、都市近郊農家としての地域でもある。桑畑・畑・水田部分は調査終了時で道路・水路・畑地・一部水田として整備され、家屋と墓地はそのままの状況で残ることになる。(相京)

参考文献

- 森山昭雄「榛名火山東・南山麓の地形」『地理学報告第36・37合併号』(栗原光政先生退官記念号)愛知教育大学地理学会 1971
- 『群馬のおいたちをたずねて』下 上毛新聞社 1977
- 「地形・地質」『前橋市史』第一巻 1971
- 中沢 悟『清里・陣場遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1979
- 新井房夫「関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層」『考古学ジャーナルNo157』 1979

第1節 遺跡の立地と環境

地図上の番号	遺跡名 (所在地)	形 時 期	遺跡の概略	参考資料	群馬県 遺跡地区 No	全国遺跡 地区(群馬 県) No	上毛古 墳綜覧
1	清里・長久保遺跡	6 C後 7 C	12基の古墳の調査を昭和55年度清里地区土地改良に伴い調査を行なった。主に陣場泥流の残丘を利用した構築古墳である。(当報告書内に記載)。				本文中参照
2	清里・庚申塚古墳	6 C後 7 C	S54年・55年に各1基調査を行なった。両袖型の横穴式石室である。FA 降灰層よりも上層に構築されている。球状周堀をもつ6 C後から7 Cにかけての築造と推定される。(当報告書内に記載)。				
3	南下D号古墳 (北群馬郡吉岡村南下)	円墳 7 C中	山寄せ古墳で南西に向って開口する自然石乱石積の横穴式両袖型石室である。	1. 群馬県史研究11 14. 群馬県史			
4	南下E号古墳 (北群馬郡吉岡村南下大林)	方墳? 7 C末	緩斜面に構築された一辺約17mの方墳の可能性のある古墳である。榛名山二ツ岳噴出の角閃石安山岩の載石切組積の横穴式両袖型石室である。壁石には朱線があり載石切組積の工法に関連性があることを指摘している。	1. 2. 北群馬波川の歴史 14.			
5	南下C号古墳 (北群馬郡吉岡村南下)	円墳 6 C中 ～後	丘陵上に構築され、東に開口する自然石乱石積の横穴式袖無型石室である。	1、2			
6	南下B号古墳 (北群馬郡吉岡村南下大林)	円墳 7 C中 ～末	南斜面につくられた山寄せ古墳。規模は径30m、高さ6mである。玄門に粗雑な載石を用い、他は自然石乱石積の横穴式両袖型石室である。	1、2	2670	15-153	明治村 50号墳
7	南下A号古墳 (北群馬郡吉岡村南下宮代)	円墳 7 C末	二段築成の山寄せ古墳。南に開口する載石切組積の横穴式両袖型石室である。一部に角閃石安山岩や壁面には漆喰塗布が見られる。	1、2、14	2671	15-152	明治村 54号墳
8	清里3号墳 (前橋市池端町神明宮屋敷小路)		大きき118尺、高さ19尺、面積21.26畝、未発掘。	3. 前橋市史	165	15-156	
9	籬子古墳群 (北群馬郡榛東村新井籬子)		陣場泥流丘を利用した古墳がある。 榛東村39号墳については、S59.5.7～59.7.4に榛東村教育委員会により発掘調査	15. 16	2623	14-75	
10	長久保古墳群 (北群馬郡榛東村新井梨子木・長久保)	前方後 円墳2 円墳20 7 C前後	発掘調査S51.12.4～53.5.30。いずれも横穴式石室である。	4. 長久保古墳群発掘調査略報	2624	14-76	
11	高塚古墳 (北群馬郡榛東村新井高塚甲)	前方後 円墳 6 C後	丘陵上に二段築成で基壇、封土とも葺石形成された約60mの規模をもつ墳丘である。自然石乱石積の横穴式両袖型石室をもつ。形象・円筒埴輪等の出土品がある。	2. 14	2625	14-77	桃井村 54号墳
12	北原古墳群 (北群馬郡榛東村新井北原)				2626	14-78	
13	立畦古墳群 (北群馬郡榛東村新井立畦甲)				2627	14-79	
14	柿木坂古墳群 (北群馬郡榛東村新井長谷津)				2628	14-80	桃井村 38号墳

第2章 遺跡の立地と調査方法

地図上の番号	遺跡名 (所在地)	形 時 期	遺 跡 の 概 略	参 考 資 料	群 馬 県 遺跡地区 No	全国遺跡 地図(群 馬県) No	上毛古 墳綜覧
15	大久保山古墳 (北群馬郡吉岡村 大久保吉開戸)		群馬県教育委員会発行の『群馬県遺跡台帳Ⅰ』(344P)に記載。清里・長久保遺跡の1号墳に概当。		2703	15-163	駒寄村 23号墳
16	池端古墳 (前橋市池端町池 端南耕地甲)		駒寄方面から自然丘陵が点在する高所に石室の用材らしきものがある事が当古墳と思われる。	5. 群馬県 の遺跡	166	15-167	
17	橋向古墳群 (群馬県群馬町金 古橋向内林)	前方後 円墳・ 円墳	主軸長約100mの前方後円墳3基、径約30mの円墳3基、自然丘利用の小円墳2基を含む古墳群。		2519	15-439	
18	金井古墳群 (北群馬郡榛東村 広馬場宮室)				2522	14-127	
19	愛宕様古墳 (群馬郡群馬町金 古愛宕)	円 墳	径30m、葺石、埴輪がある。自然石乱石積の横穴式両袖型石室。	5	2523	15-442	金古町 9号墳
20	諏訪古墳群 (群馬郡群馬町金 古諏訪)		榛名山東南麓、円墳1基、古墳跡3基。内1基は径30m、周堀があり表土中より須恵器片出土。	5	2524	14-129	
21	二子山古墳 (前橋市総社町植 野二子山)	前方後 円墳 6・7C	全長約90m、二段築成、周溝は約20m幅の囲繞が予想される。前方部、後円部に各々1個の横穴式両袖型石室をもっている。前方部は自然石乱石積、後円部は角閃石安山岩の削石を使っている。	3. 6. 日本古 文化研究 所報告 4 14.	109	15-史12	総社町 11号墳
22	愛宕山古墳 (前橋市総社町総 社大屋敷愛宕山)	円 墳 7 C初	大型円墳であり巨石使用の横穴式両袖型石室である。壁石には角閃石安山岩や輝石安山岩がみられる。石室内には凝灰岩の家型石棺がある。	7. 群馬総 社古墳群	110	15-447	総社町 10号墳
23	遠見山古墳 (前橋市総社町総 社栗島)	前方後 円墳	主軸の長さ70m。墳丘の南側に周堀が一部認められる。葺石も認められる。後円部東南部は崩れて石室が見られる。	5	113	15-450	
24	宝塔山古墳 (前橋市総社町総 社町屋敷南)	方 墳 7 C末	東西49m、南北54m、高さ12m、二段築成が現状の規模である。周堀は南辺の線に平行して幅約24mで痕跡が推定できる。複室の横穴式両袖型石室には輝石安山岩と角閃石安山岩が使用され、漆喰が塗布されている。玄室には、脚部が格状間型の家型石棺が置かれている。	7. 14	115	15-史38	総社町 9号墳
25	蛇穴山古墳 (前橋市総社町総 社町屋敷)	方 墳 8 C初	一辺約39m前後の墳丘を有し、南側で三段に構築した基壇が確認された。基壇外側に30~130cmのテラスがあり、その外に周堀がある。石室前に台形プランの前庭がある。前庭の前には幅7mの基壇がある。横穴式石室であり、天井・奥・左右壁とも一枚石である輝石安山岩を使用した。玄門の前に羨道状の構造を残す。	3 8. 蛇穴山 古墳調査 概報 14.	111	15-史54	総社町 8号墳
26	庚申古墳群 (群馬郡群馬町金 古庚申)		榛名山東南麓、染谷川右岸際に位置する。「上毛古墳綜覧」には31基が記載されている。庚申B号墳は、7C末の円墳であり、前庭を延長した形の周堀がある。載石切石組の横穴式両袖型石室である。	9. 昭和37・ 38年度に おける発 掘調査	2520	14-133	
27	寺屋敷古墳群 (群馬郡群馬町足 門寺屋敷)	円 墳	榛名山東南麓、染谷川左岸際。径10~20mの円墳6基群在。内1基は自然石乱石積の横穴式石室である。		2528	14-135	

第1節 遺跡の立地と環境

地図上の番号	遺跡名 (所在地)	形 時 期	遺跡の概略	参考資料	群馬県 遺跡地区 No	全国遺跡 地図(群馬 県) No	上毛古 墳総覧
28	如来古墳群 (群馬郡群馬町金 古如来)	円墳	径10~20mの円墳14基群在。大半は平夷されている。埴輪片、須恵器片散布。	5.	2521	14-136	
29	北寝窟古墳群 (群馬郡群馬町棟 高北寝窟)	円墳	9基群在。内8基は径10~20m、高さ2~3mの小円墳。1基は径40m、高さ7m。ほとんどが平夷されている。1基のみ石室幅1.1mが認められる。	5	2531	15-456	
30	王山古墳 (前橋市総社町総 社石倉分)	前方後 円墳	全長75.6m、2~3段の葺石が全面にまわる。両袖型目通積FA層上に構築している。倍塚2基(石倉分・石倉)が存在した。現在なし。	7.	103	15-504	総社町 1号墳
31	天神塚古墳 (群馬郡群馬町中 里毘沙門)	円墳 7C後 半中葉 以降	直径約12m、高さ約3m、安山岩質崩れ石の乱石積の横穴式両袖型石室でFA層上に構築。	10、上越VI	2552	14-139	
32	薬師塚古塚 (群馬郡群馬町保 渡田薬師前)	前方後 円墳 6C	墳丘上に凝灰岩製舟型石棺がある。金銅製品の出土例がある。墳丘の規模は主軸228尺(約69m)。	5. 11. 上郊村 誌	2535	14-147	上郊村 1号墳
33	八幡塚古墳 (群馬郡群馬町保 渡田八幡塚)	前方後 円墳 6C	主軸258尺(約78m)、幅広い周堀があり、くびれ部左右に中島があり、土師器が多数出土した。墳頂には凝灰岩製舟型石棺がある。鏡・馬具・埴輪などの出土品がある。	5. 12. 考古学 ジャーナル157	2536	14-148	上郊村 2号墳
34	愛宕塚(二子塚) 古墳 (群馬郡群馬町井 出二子山)	前方後 円墳 6C	主軸92.4m、二重周堀、葺石、埴輪がある。竪穴式石室で内部に凝灰岩製舟型石棺がある。鏡・鏡・金環等の出土がある。	5. 13. 考古学 雑誌39の 1	2537	14-149	上郊村 5号墳

参考資料

- 1 松本浩一、桜場一寿、右島和夫、「截石切組積横穴式石室における、構築技術上の諸問題 上」『群馬県史研究11』 1980
- 2 尾崎喜左雄「古墳文化」『北群馬・渋川の歴史』 1971
- 3 尾崎喜左雄「豪族の支配と古墳の構造」『前橋市史 第1巻』 1971
- 4 『長久保古墳群発掘調査略報』(日本窯業史研究所) 1978
- 5 『群馬県の遺跡』(群馬県教育委員会) 1963
- 6 田沢金五「上野国総社二子山古墳の調査」『日本古文化研究所報告 第4』 1937
- 7 川合 巧『群馬総社古墳群』(財 観光資源保護財団) 1977
- 8 『蛇穴山古墳調査概報』(前橋市教育委員会) 1976
- 9 『昭和37・38年度における発掘調査』(群馬大学教育学部尾崎研究室、研究調査報告第一輯) 1966
- 10 中東耕志「中里天神塚古墳」『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報 VI』(群馬県教育委員会) 1980
- 11 『上郊村誌』 1979
- 12 石塚久則「八幡塚古墳」『考古学ジャーナル157号』 1979
- 13 後藤守一「上野国愛宕塚」『考古学雑誌 39の1』 1979
- 14 『群馬県史 原始古代3 古墳』 群馬県 1982
- 15 『年報4』(財 群馬県埋蔵文化財調査事業団) 1985
- 16 『榛東村39号墳(雛子遺跡)』(榛東村教育委員会) 1985

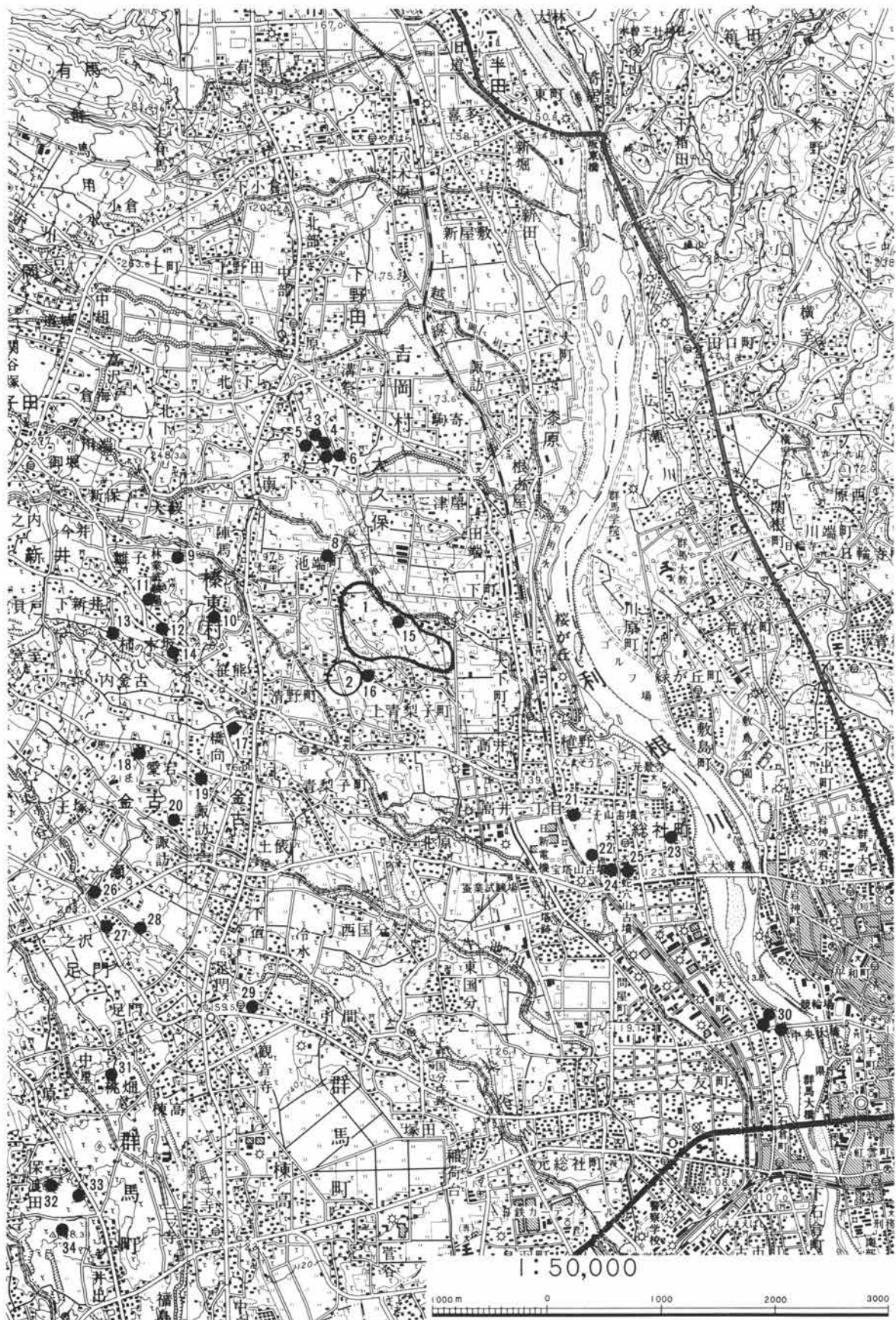


Fig. 1 遺跡の位置と地形



吉岡村

Fig. 2 遺構の分布と周辺の地形

前橋市現形図1万分の1 (前橋市役所)

第2節 調査の方法

調査区は圃場整備地域のカット部分を中心に調査対象地として計画された。このため広大な面積の部分部分の調査になり、調査区の設定を100m単位 (Fig.3) とした。この区分を国家座標にのせた。各区を100mの単位とした後に区ごとに5mグリッドを設定し、東西方向はアルファベットを使用し西から東へA～T、南北方向は算用数字を使用し北から南へ1～20に分け各グリッドポイントは西北の隅を基点とした。

基本土層と遺構面の確認後、重機により上層の土砂を除去した。

古墳は主軸線と考えられる部分にトレンチを設定した。

出土遺物は取り上げ時点で年月日、遺構、地区名、出土層位を記録した。

遺構に伴う遺物は実測図に出土位置、海拔を記入した。

遺構図の作成は次の通りである。平面図は20分の1を原則とし、部分図は10分の1、古墳等の等高線実測図は100分の1であり、土層図、立面図、側面図は20分の1を原則とする実測図を作成した。

その他、写真、記録カード、調査日誌による記録を作成した。

(相京)

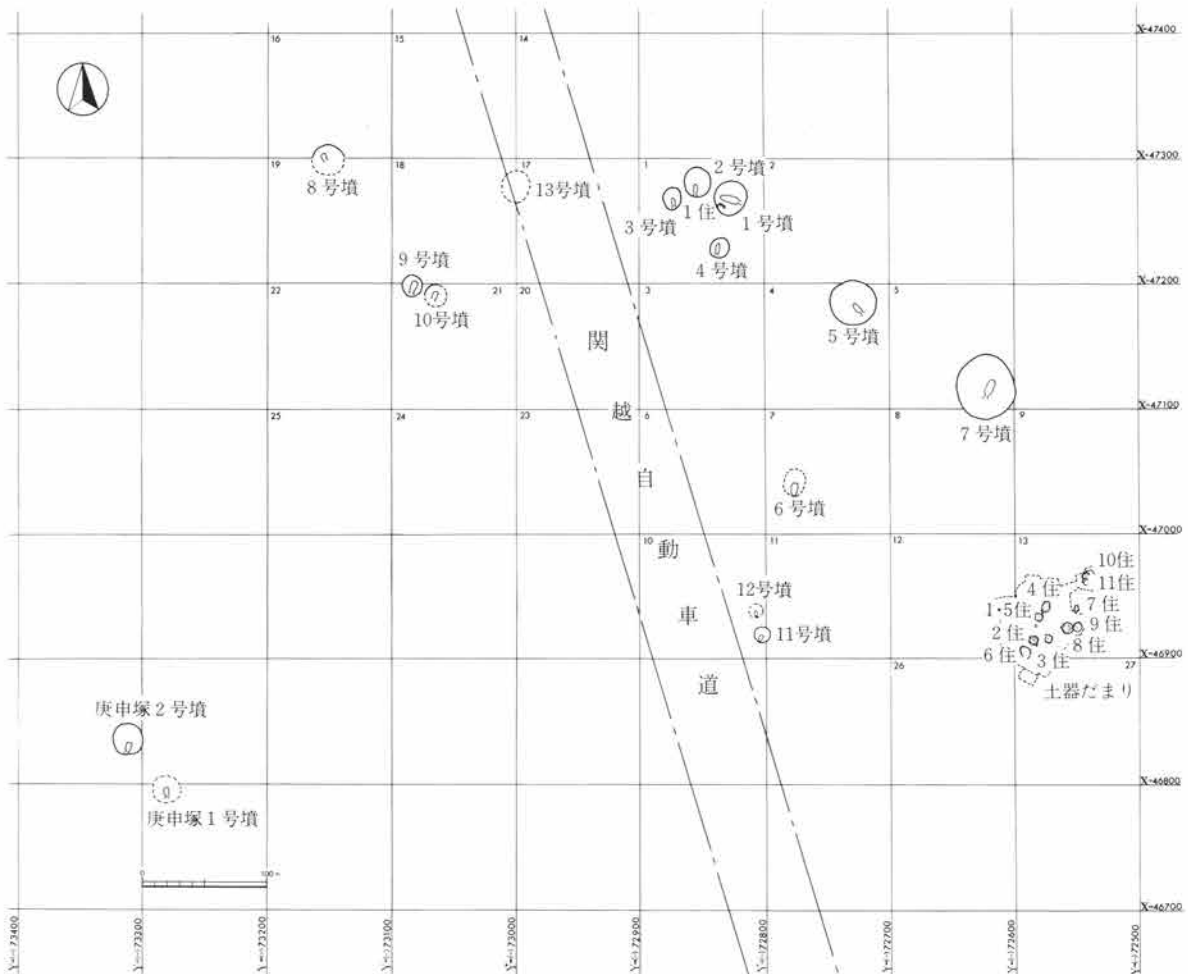


Fig. 3 遺構の広がり (国家座標)

第3章 各 説

第1節 縄文時代

1区1号住居址 (Fig. 4・5、PL. 2-1・2、3-1・2)

1区1号住居址はL・M-7・8グリッドで検出した。清里・長久保遺跡1号墳が形成されている陣場泥流丘上の南西斜面に位置している。北には午王頭川が近接して南東に流れている。住居址の平面形は定かでないが、北東および北西辺が確認できることから隅丸方形と推定できる。北東辺の長さは6.17mである。主軸方位はN-30°-Eである。床面は北側では明確であるが、南側は不明確となる。貼り床部分、炉址、焼土等、遺構内の施設は未検出であった。また住居址の床面も全体としては不安定である。住居址の南東部分から南西部分にかけての未検出の壁や床部分は、清里・長久保遺跡1号墳の墳形の形成段階で削られている可能性が考えられる。柱穴は5ヶ所で確認でき、規模は次の通りである。

P 1 約60cmの円形を呈し、深さ50cmである。

P 2 長軸40cm、短軸26cmの不正円形を呈し、深さ26cmである。

P 3 長軸50cm、短軸46cmのほぼ円形を呈し、深さ約30cmである。

P 4 長軸64cm、短軸58cmのほぼ円形を呈し、深さ40cmである。

P 5 長軸64cm、短軸60cmの不正円形を呈し、深さ44cmである。

P 1、P 3は床面との間に石を支してある。南東壁および南西壁は確認できない。残りの良い部分は北側であり、約24cmを測ることができる。

主な出土遺物は埋甕 (Fig. 6-1) があり、P 1の南西部分から出土している。床面出土遺物の中に他からの混入土器もみられる。

1区1号住居址出土遺物一覧表 (土器) (時期区分は第4章参照)

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 6-1	深鉢・口・胴部	床面	夾雑鉱物混入	橙		IX	
PL. 3-3	口縁が内反し、胴部上半がふくらむ無文の深鉢である。器面は内外面ともに良く研磨されている。						
Fig. 6-2	深鉢・胴部	覆土	黒色鉱物混入	にぶい黄褐		IX	
PL. 3-4	頸部から胴部にかけて屈曲し、胴部のふくらむ深鉢である。口縁部に隆帯及び沈線による文様がわずかに見られる。胴部は無文で良く研磨されている。						
Fig. 6-3	深鉢・胴部	北礫群覆土	白色鉱物混入	にぶい黄橙		I	
PL. 3-5	半截竹管具による爪形文を連続させる。						
Fig. 6-4	深鉢・胴部	覆土	白色鉱物混入	浅黄		I	
PL. 3-5	胴部に半截竹管具による縦の沈線を施し、さらに縦に羽状に沈線を施す。また器面にはボタン状の貼付文をもつ。						

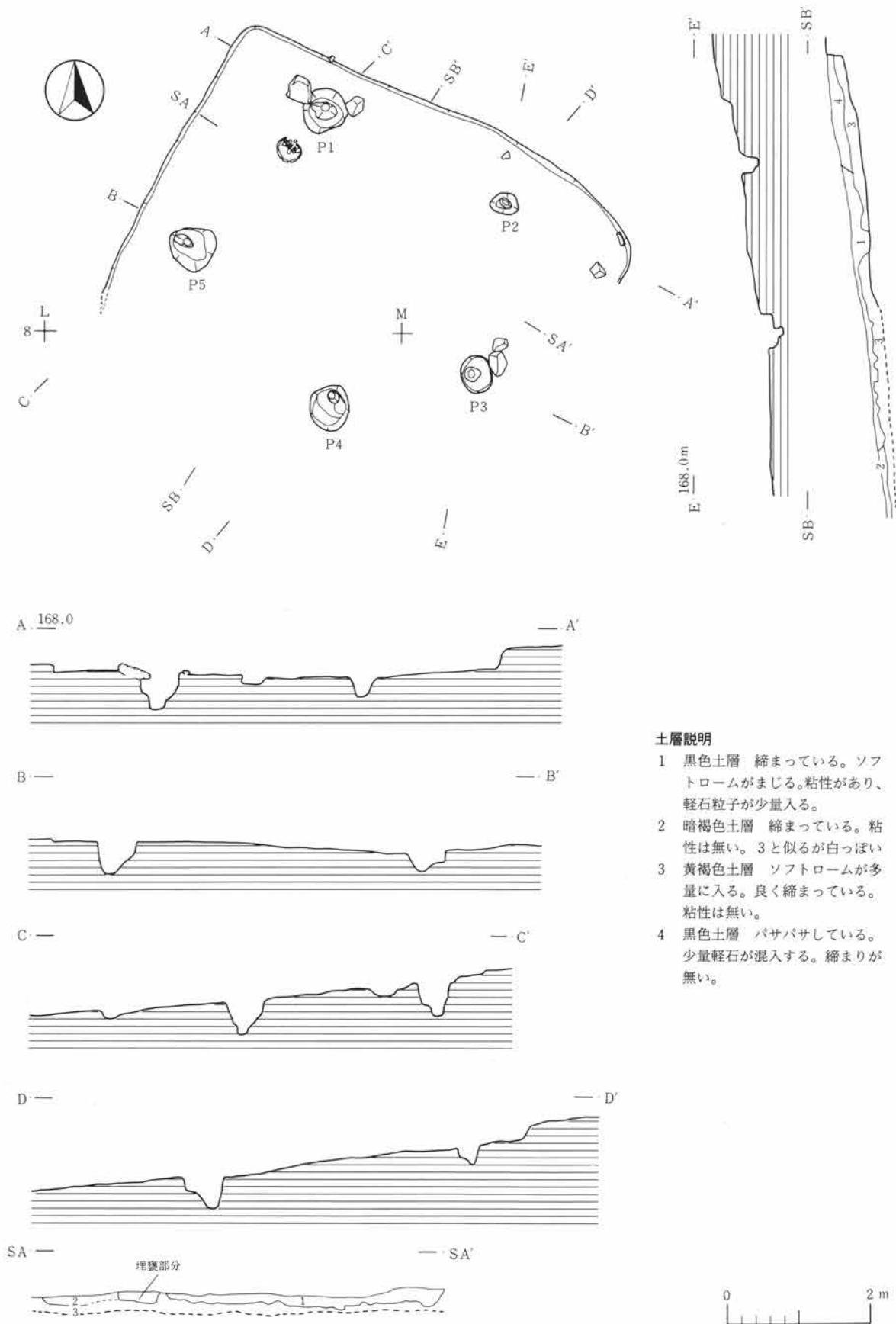


Fig. 4 1区1号住居址実測図

1区1号住居址出土遺物一覧表(土器)

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 6-5	深鉢・胴部	覆土	小礫混入	にぶい黄橙		I	
PL. 3-5	胴部に半截竹管具による縦の沈線を施し、器面にボタン状の貼付文をもつ。						
Fig. 6-6	深鉢・胴部	覆土	砂質	にぶい黄橙		I	
PL. 3-5	胴部に半截竹管具による縦の沈線を施し、器面にボタン状の貼付文をもつ。						
Fig. 6-7	深鉢・胴部	覆土	小礫混入	橙		I	
PL. 3-5	胴部に細い粘土を渦巻状に貼り付け、その上に半截竹管具による連続爪形文を施す。また器面にはボタン状の貼付文をもつ。また地文には半截竹管具による沈線をもつ。						
Fig. 6-8	深鉢・胴部	覆土	小礫混入	橙		I	
PL. 3-5	胴部に細い粘土を渦巻状に貼り付け、その上に半截竹管具による連続爪形文を施す。また器面にはボタン状の貼付文をもつ。また地文には半截竹管具による沈線をもつ。						
Fig. 6-9	深鉢・胴部	覆土	小礫混入	橙		I	
PL. 3-5	胴部に細い粘土を渦巻状に貼り付け、その上に半截竹管具による連続爪形文を施す。また器面にはボタン状の貼付文をもつ。また地文には半截竹管具による沈線をもつ。						
Fig. 6-10	深鉢・胴部	北礫群覆土	小礫少数混入	にぶい橙		I	
PL. 3-5	胴部に半截竹管具による刺突状の爪形文を連続させる。						
Fig. 6-11	深鉢・口縁部	覆土	小礫混入	にぶい橙	LR	I	
PL. 3-5	口縁直下に縄文施す。						
Fig. 6-12	深鉢・胴部	北礫群覆土	白色鉱物混入	にぶい赤褐	RL	I	
PL. 3-5	胴部に縄文を施す。						
Fig. 6-13	深鉢・胴部	覆土	小礫混入	にぶい橙	RL	I	
PL. 3-5	胴部に縄文を施す。						
Fig. 6-14	深鉢・胴部	北礫群覆土	白色鉱物混入	橙	RL	I	
PL. 3-5	胴部に縄文を施す。						
Fig. 6-15	深鉢・胴部	覆土	小礫少数混入	にぶい橙	LR	I	
PL. 3-5	胴部に縄文を施す。						
Fig. 6-16	深鉢・胴部	覆土	夾雑鉱物混入	にぶい赤褐	結束(LR・RL)	I	
PL. 3-5	胴部に結束による羽状縄文を施す。						
Fig. 6-17	深鉢・胴部	覆土	白色鉱物混入	にぶい黄橙	RL	I	
PL. 3-5	胴部に縄文を施す。						

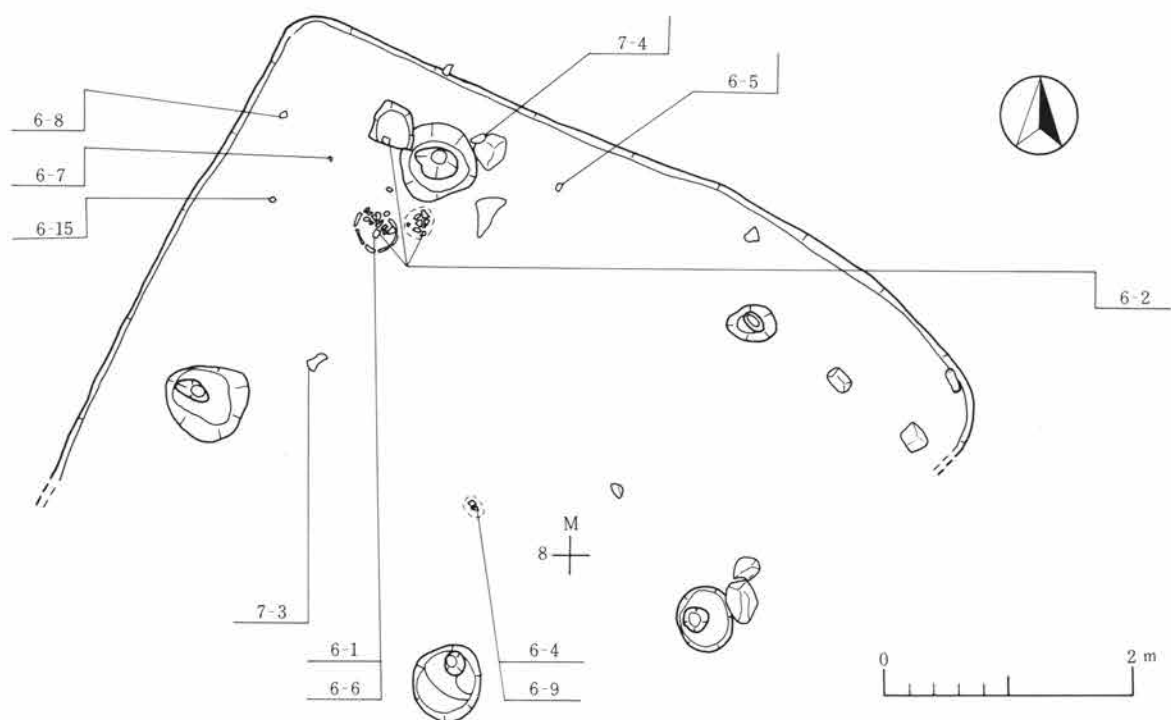


Fig. 5 1区1号住居址遺物出土状況図

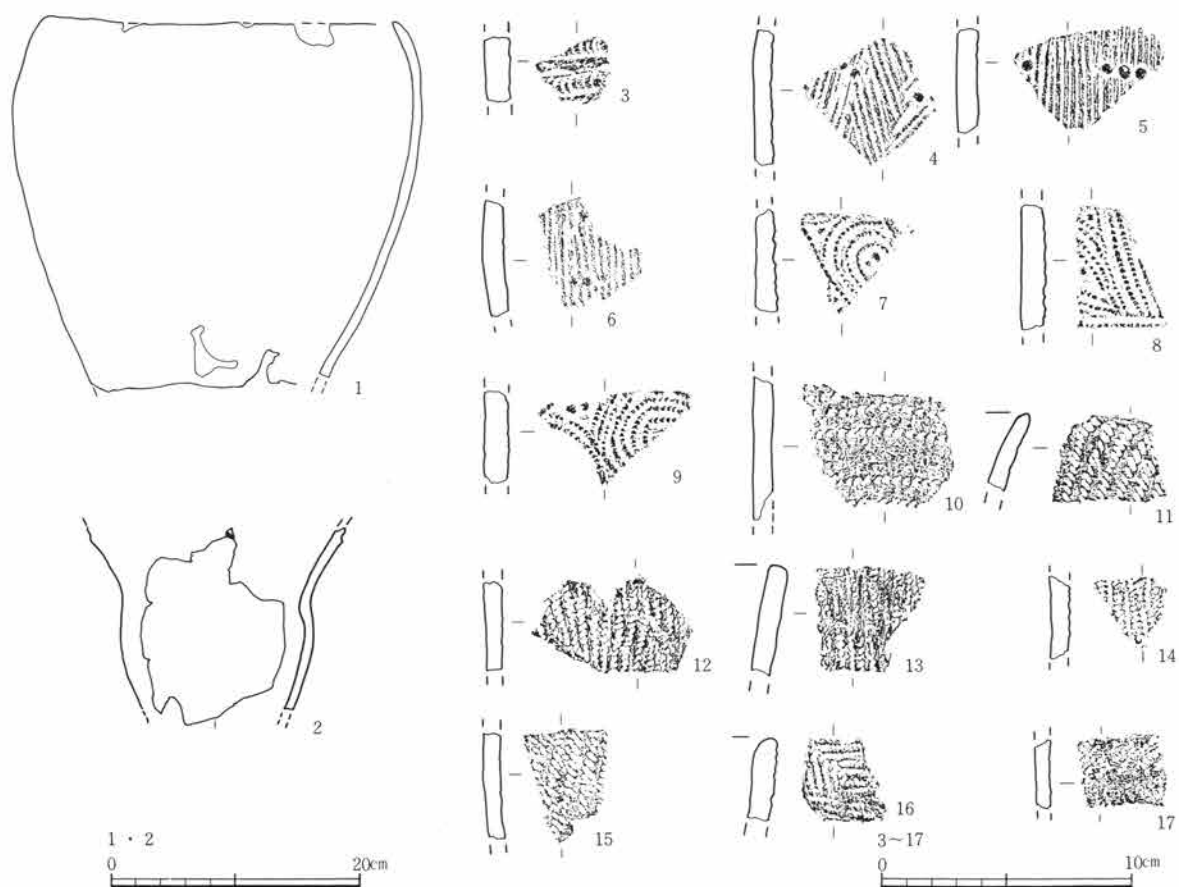


Fig. 6 1区1号住居址出土遺物実測図

1区1号住居址出土遺物一覧表（石器）

挿図番号	石器の種類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	出土位置
図版番号	説明						
Fig. 7-1	打製石斧	5.4	3.6	1.3	27.6	黒色頁岩	北礫群覆土
PL. 3-6	小型の短冊形を呈す。全面が風化しており荒れている。各辺は細かく剥離を行っている。						
Fig. 7-2	スクレイパー	(5.2)	2.5	0.9	11.7	黒色頁岩	北礫群覆土
PL. 3-6	基部は欠損している。刃部は細かい剥離が側面に対し直角に付いている。						
Fig. 7-3	打製石斧	16.6	8.5	2.6	430.0	黒色頁岩	覆土
PL. 3-6	撥形を呈す。刃部は丸味をもつ。表裏面とも横方向、刃部は縦方向から剥離を行なっている。刃部に磨耗痕がある。						
Fig. 7-4	磨石	11.8	4.5	3.7	270.0	輝石安山岩	覆土
PL. 3-6	全体に焼けており表面は剥れている部分が多い。一部分に磨り減った平滑面がある。						
Fig. 7-5	剥片石器	4.0	5.3	0.9	21.8	黒色安山岩	北礫群覆土
PL. 3-6	表裏面とも各1回の打撃で剥れた痕跡がある。						
Fig. 7-6	磨石?	(8.0)	10.0	4.5	620.0	輝石安山岩	覆土
PL. 3-6	ほぼ2分の1が欠損しているものと思われる。表面に一部磨り減った部分が認められる。						

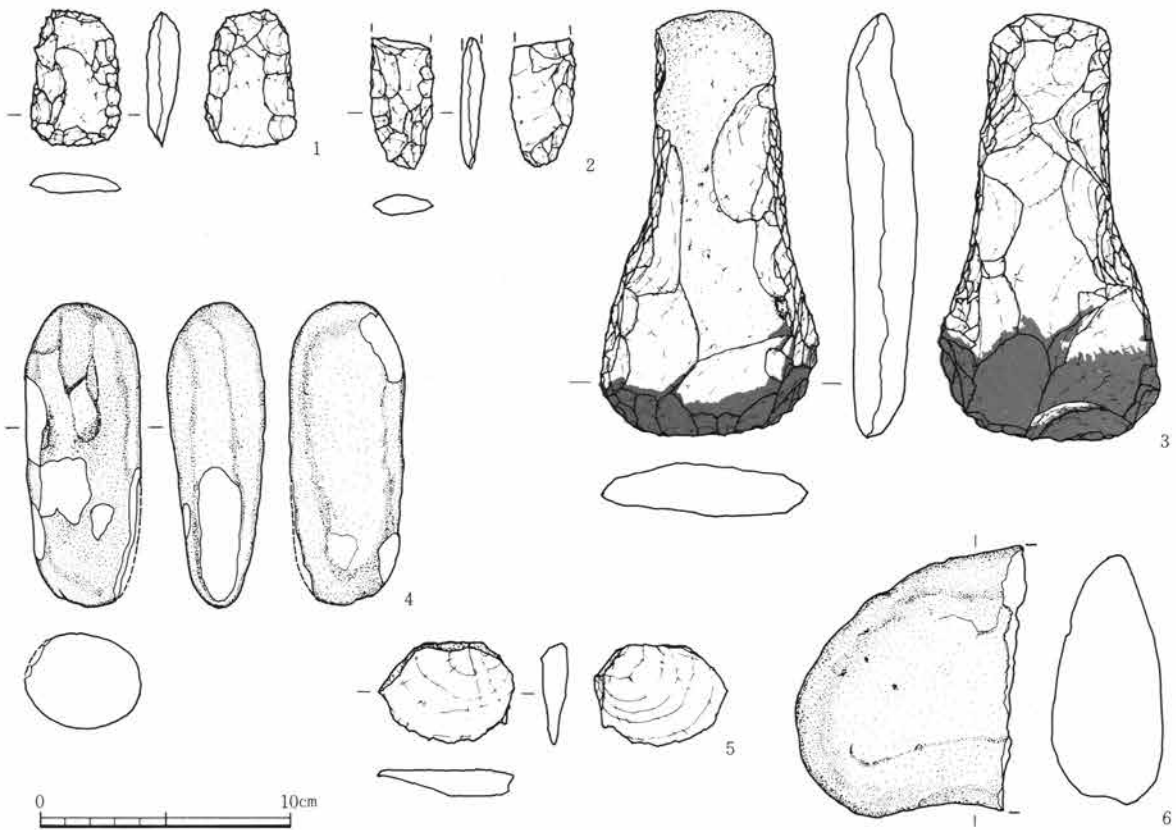


Fig. 7 1区1号住居址出土遺物実測図

13区1号住居址 (Fig. 8・9、PL. 4-1)

13区1号住居址はE-13グリッドで一部が確認できた。確認部分は住居址の北東部分であり、南側は5号住居址によって切られている。当住居址は主として13区に位置する陣場泥流残丘上に営まれた縄文時代の集落(10軒)と、同残丘、西斜面の土器だまりの中間部分に位置しており、4号住居址南西部の壁に0.5mまで接する。西側斜面の上位にある。住居址の平面形および規模は残存壁が僅かなため不明確であるが隅丸方形に近い形状になる可能性が考えられる。概ね方位はN-35°-Eである。壁の高さは確認できる部分で約10cmである。床面はほぼ平坦である。床面には陣場泥流に含まれている礫が顔を出している。柱穴や炉址、焼土等は未検出であった。

覆土内には小礫が多く含まれており、礫の様相は陣場泥流内に含まれている角礫の二次堆積(流入土)層である。

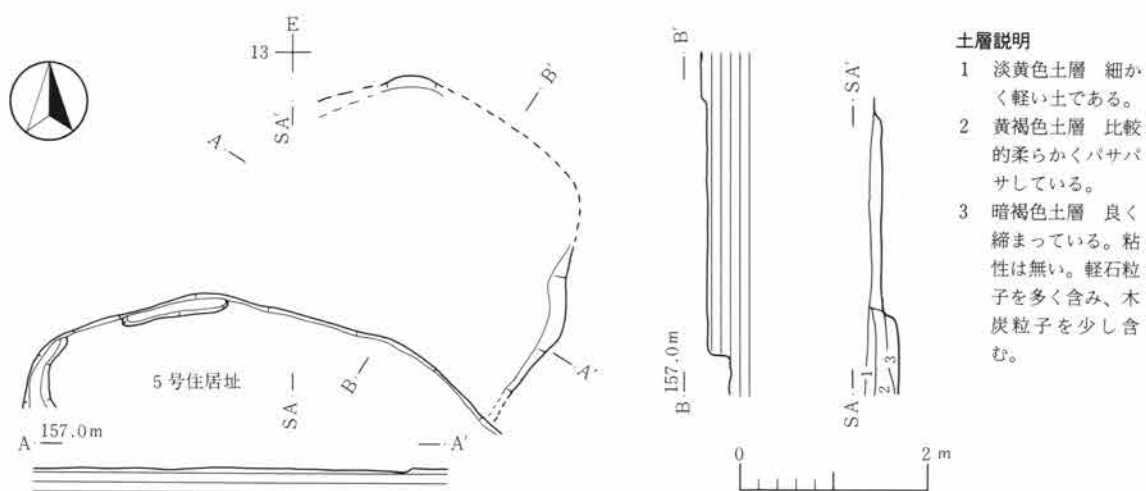


Fig. 8 13区1号住居址実測図

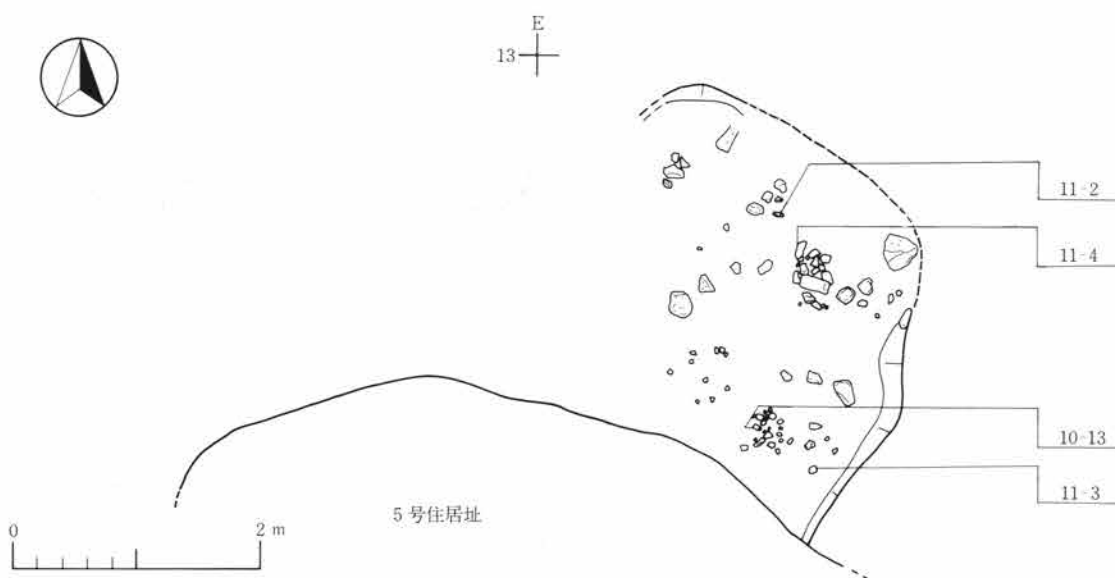


Fig. 9 13区1号住居址遺物出土状況図

13区1号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 10-1	深鉢・口縁部	覆土	小礫少数混入	にぶい黄橙		V	
PL. 4-2	口縁部に沈線により重弧文を描く。						
Fig. 10-2	深鉢・胴部	床面	黒色鉍物混入	橙	燃糸文	IV	
PL. 4-2	隆帯をもち、地文に縦位の燃糸文を施す。						
Fig. 10-3	深鉢・胴部	床面	小礫混入	にぶい橙	燃糸文	III-1	
PL. 4-2	垂下する隆帯をもち、地文に縦位の燃糸文を施す。						
Fig. 10-4	深鉢・胴部	床面	小礫混入	橙	RL	III-1	0段多条
PL. 4-2	隆帯をもち、地文に縄文を施す。						
Fig. 10-5	深鉢・胴部	床面	白色鉍物混入	にぶい黄橙	LR	IV	
PL. 4-2	地文に縄文を施し、さらに懸垂文および蛇行する懸垂文が施される。						
Fig. 10-6	深鉢・口縁部	床面	白色鉍物混入	にぶい黄橙		IV	
PL. 4-2	口縁部に隆帯が施され、頸部が無文となる。						
Fig. 10-7	深鉢・口縁部	床面	白色鉍物混入	にぶい黄橙	LR	VII	
PL. 4-2	口縁部に太い沈線で長楕円が描かれ、その区画内に縄文を施す。						
Fig. 10-8	深鉢・胴部	覆土	白色鉍物混入	にぶい橙	RL	VI~VII	
PL. 4-2	地文に縄文を施し、懸垂文が施され、懸垂文内を磨消している。						
Fig. 10-9	深鉢・胴部	覆土	白色鉍物混入	明赤褐	RL	VI~VII	
PL. 4-2	地文に縄文を施し、懸垂文が施され、懸垂文内を磨消している。						
Fig. 10-10	深鉢・胴部	覆土	小礫混入	にぶい赤褐	LR	VI~VII	E-13Gr
PL. 4-2	地文に縄文を施し、懸垂文が施され、懸垂文内を磨消している。						
Fig. 10-11	深鉢・胴部	覆土	夾雑鉍物混入	にぶい赤褐	LR	VI~VII	
PL. 4-2	地文に縄文を施し、懸垂文が施され、懸垂文内を磨消している。						
Fig. 10-12	深鉢・胴部	覆土	白色鉍物混入	暗赤褐	LR	VI~VII	
PL. 4-2	地文に縄文を施し、懸垂文が施され、懸垂文内を磨消している。						
Fig. 10-13	深鉢・口縁部	覆土	小礫少数混入	暗赤褐	LRL	VIII	
PL. 4-2	平口縁を呈し、縄文が施される。						
Fig. 10-14	深鉢・胴部	覆土	小礫混入	明赤褐	L	?	
PL. 4-2	地文に縄文が施される。						

13区1号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 10-15	深鉢・肩部	床 面	小礫混入	にぶい橙	RL	IV	
PL. 4-2	口縁部に隆帯区画をもち、区画内に縄文を施す。頸部は無文となるが上部に斜位の刺突が施される。						
Fig. 10-16	深鉢・胴部	覆 土	夾雑鉱物混入	橙	RL	不明	
PL. 4-2	地文に縄文が施される。						
Fig. 10-17	深鉢・胴部	覆 土	雲母・礫混入	明赤褐		IX	E-13Gr
PL. 4-2	無文地に沈線で曲線を描いたもの。						
Fig. 10-18	深鉢・口縁部	覆 土	小礫混入	赤 黒	RL	VIII	
PL. 4-2	波状口縁を呈し、口縁部に円形及び長楕円が沈線によって描かれる。						

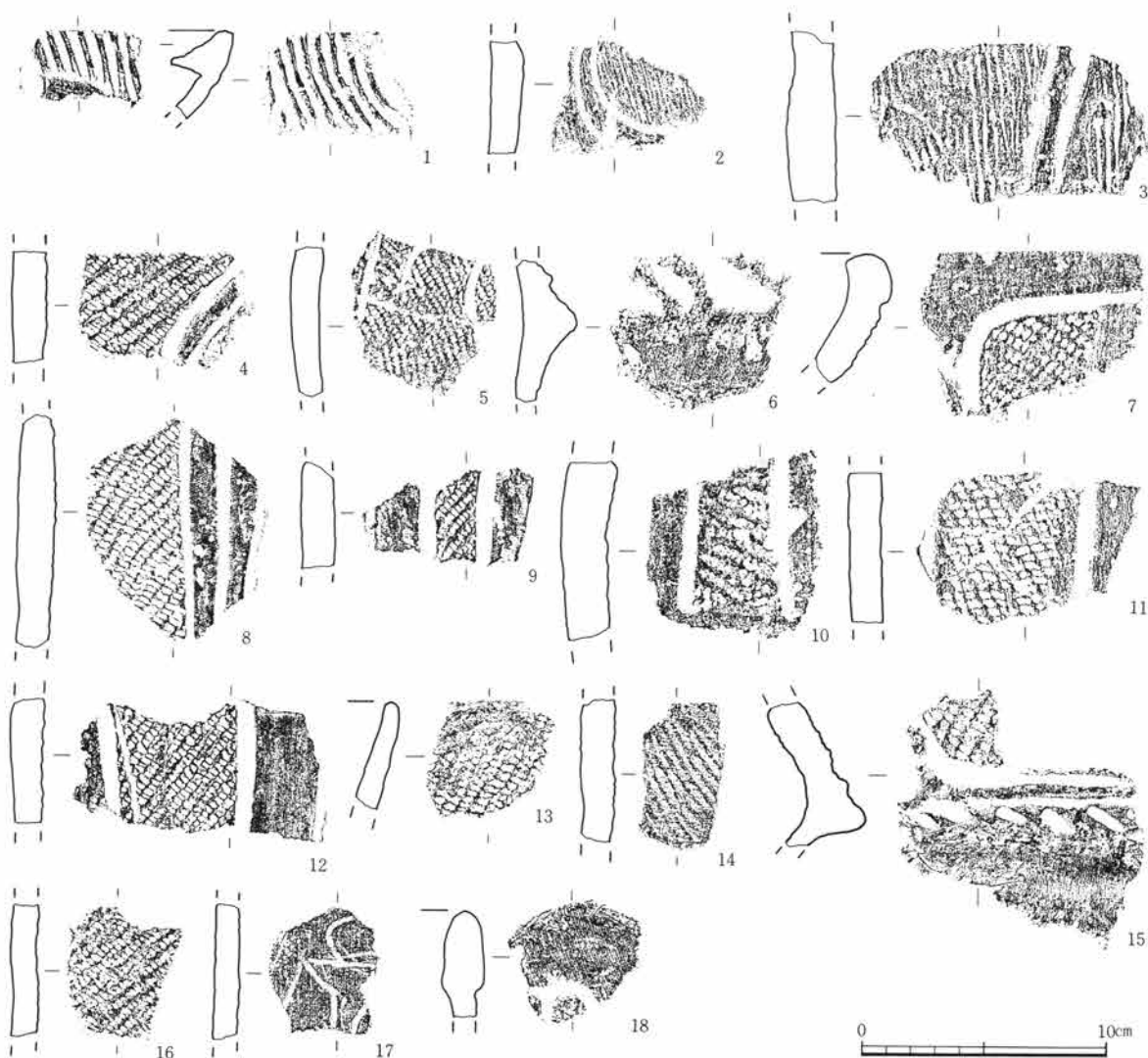


Fig. 10 13区1号住居址出土遺物実測図

13区1号住居址出土遺物一覧表 (石器)

挿図番号	石器の種類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	出土位置
図版番号	説明						
Fig. 11-1	打製石斧	11.2	4.7	1.7	127.1	黒色頁岩	床面
PL. 4-3	短冊形を呈す。表裏面は横方向、刃部片面は縦方向の剥離が見られる。片面には自然面が多く残る。						
Fig. 11-2	打製石斧	(8.4)	4.2	1.8	81.6	黒色頁岩	床面
PL. 4-3	短冊形を呈す。刃部は丸味をもつ。基部は欠損している。表裏面は横方向、刃部は縦方向から剥離を加えている。						
Fig. 11-3	打製石斧	(6.4)	6.0	1.6	75.6	黒色頁岩	床面
PL. 4-3	中間部で折れ、基部が欠損している。表裏面は横方向からの剥離を行なっている。						
Fig. 11-4	打製石斧	(4.6)	4.0	1.1	30.8	黒色安山岩	覆土
PL. 4-3	短冊形を呈す。刃部に近接した部分が残存する。刃部の一部も欠損。側面は細かく潰し調整している。						
Fig. 11-5	打製石斧	(8.4)	6.0	1.9	90.5	灰色安山岩	覆土
PL. 4-3	分銅形を呈している。刃部はほとんどが欠損している。袈れ部分は横方向から剥離を行なっている。						

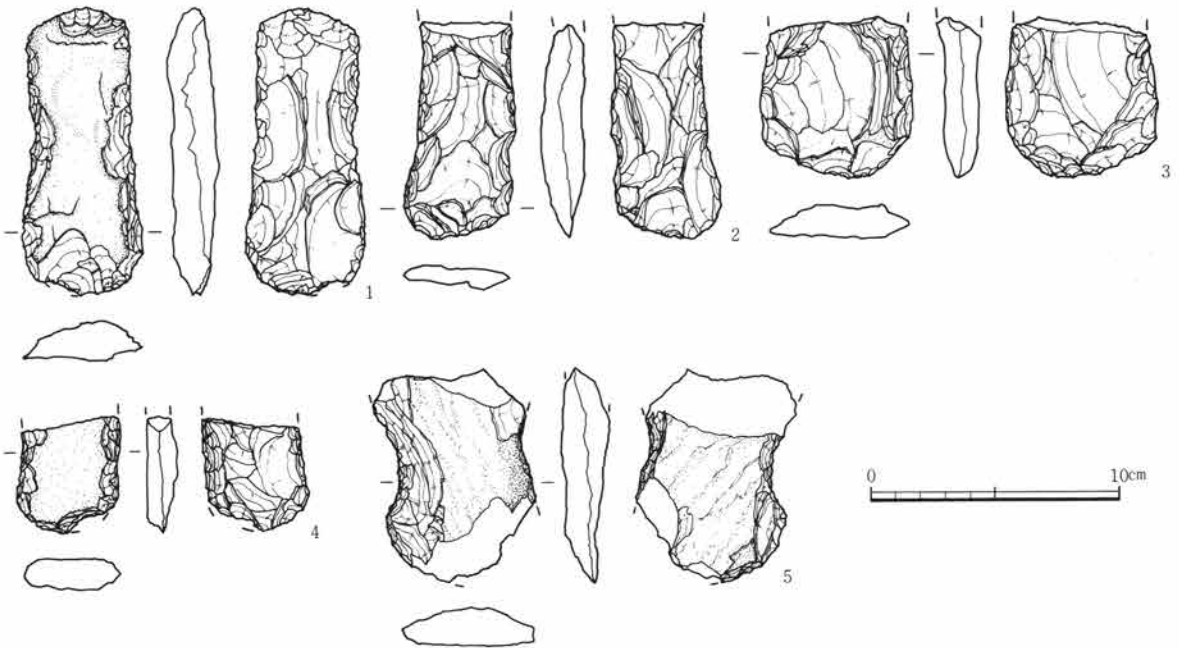


Fig. 11 13区1号住居址出土遺物実測図

第3章 各 説

13区2号住居址 (Fig. 12・13, PL. 5-1・2、6-1~5)

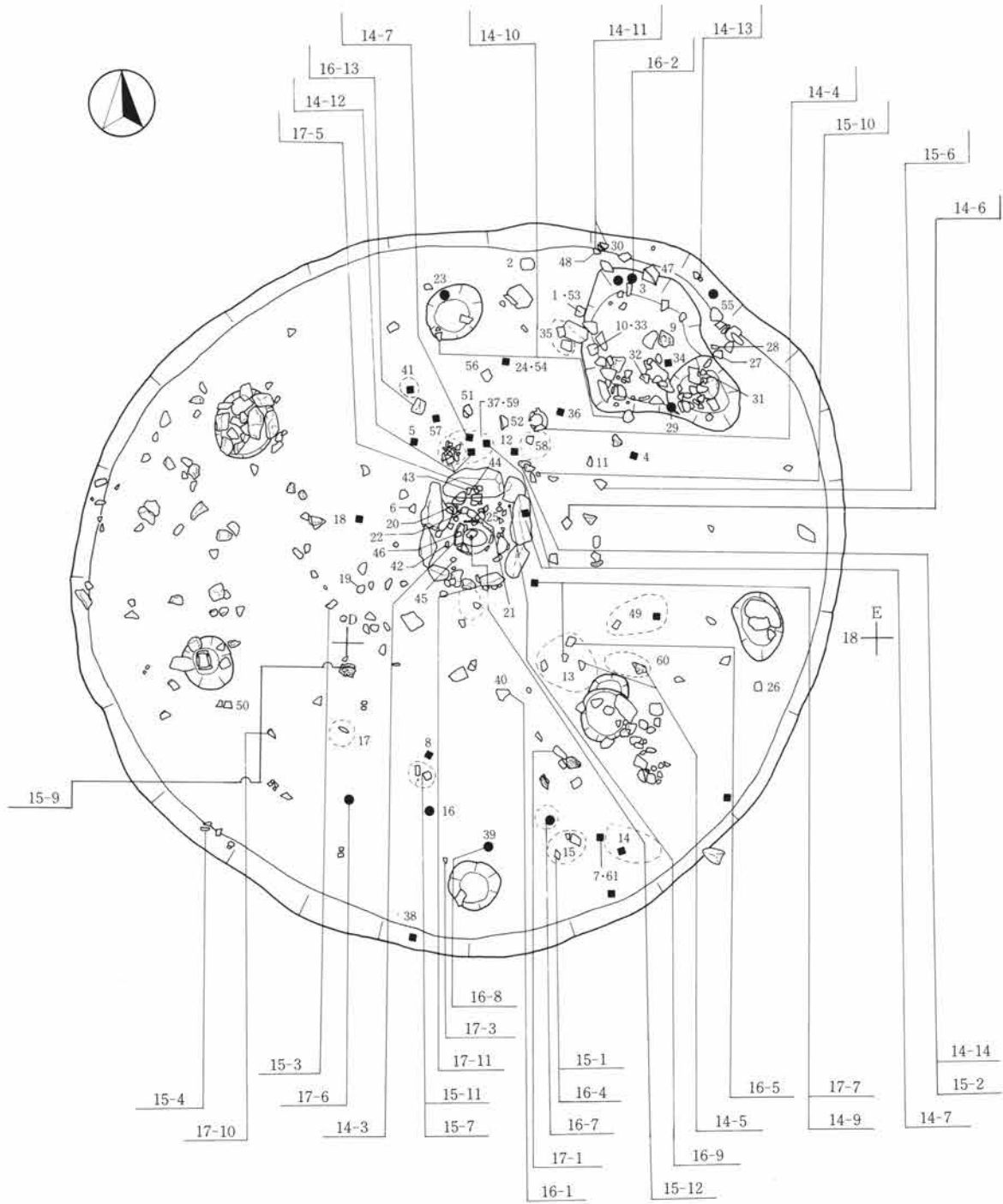
2号住居址は泥流丘上の南西部斜面上位にありC・D-17・18グリッドに位置している。南西には6号住居址がある。住居址はほぼ円形を呈し、長軸7.4m、短軸6.8mである。壁高は20~30cmである。床面はしつかりとしており、ほぼ中央に石囲い炉があり、中央に土器が設置されている。炉の規模は南北1.1m、東西1m、深さ約40cmである。また北東部には落ち込みがあり約1.4×1.3m、深さ約40cmである。柱穴は7本と考えられるがP7は集石状態を呈し、深さも少ない。またP6は柱受け状の土器片がある。柱穴の規模は下表の通りである。

13区2号住居址柱穴の規模

柱穴名 規模cm	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7
長軸×短軸	58×52	72×64	66×40	64×40	50×48	48×46	69×69
深 さ	40	44	58	48	44	24	8

13区2号住居址出土遺物一覧表 (土器)

挿 図 番 号	器形・部位	出 土 位 置	胎 土	色 調	縄文原体	時期区分	備 考
図 版 番 号	説 明						
Fig. 14-1	深鉢・口・胴部	床 面・覆 土	夾雑鉱物混入	にぶい橙		V	
PL. 7-1	口縁部が開き頸部で屈折し、胴部が丸く張る大型の深鉢を呈する。口縁部に沈線で連弧文が描かれ、連弧の頂部に渦巻文をもち、その下に楕円が描かれる。これらの区画内には太目の縦位の沈線文が施される。頸部に平行沈線が施され、胴部には楕円及び横位の「S」字文が沈線により描かれ、その区画内に斜位の沈線が施される。						
Fig. 14-2	深鉢・口・胴部	床 面・覆 土	小礫混入	橙	RL	V	
PL. 7-2	口縁部が開き頸部で屈折し、胴部が丸くなる大型の深鉢形を呈する。口縁部には平行沈線が巡り、平行沈線間には刺突が施され、その下には沈線により連弧文及び連弧文頂部に渦巻文が描かれる。地文に縄文が施される。頸部には口縁部同様の刺突をもつ平行沈線文が描かれている。						
Fig. 14-3	深鉢・口・胴部	炉内埋設土器	小礫混入	橙	RL	V	
PL. 7-3	キャリパー形を呈する深鉢で、口縁部には隆帯が施され、隆帯の先端に渦巻文をもつ。隆帯で区画された内部に縦位の沈線が施される。頸部以下胴部には縄文が施される。						
Fig. 14-4	深鉢・口・胴部	覆 土	白色鉱物混入	浅黄橙	RL	V	
PL. 7-4	口縁部は隆帯の先端に渦巻文をもつ。隆帯で区画された内部に斜位の沈線が施される。頸部以下胴部には縄文が施され、胴部には蛇行する懸垂文や隆帯、刺突文の施文がある。						
Fig. 14-5	深鉢・口・縁部	床 面	小礫混入	橙	RL	VI-1	
PL. 7-5	キャリパー形を呈する深鉢で、口縁部には平面的な隆帯による渦巻文が描かれ、その区画内に、縄文が施される。頸部は無文となる。						
Fig. 14-6	深鉢・口・胴部	覆 土	白色鉱物混入	にぶい橙	条 線 文	VI-1	
PL. 7-6	小型の深鉢形を呈し、口縁部に隆帯による2対の弧を描きその先端頂部が小突起となり、波状口縁をつくる。隆帯区画内には縦位の沈線が施される。胴部には櫛歯状工具による縦位の条線が地文となり、沈線が施される。						
Fig. 14-7	小型土器	床 面	雲母・礫混入	赤 褐		?	
PL. 7-7	平口縁の胴部がふくらむ無文の小型土器である。内外面ともに良く研磨されており、口縁部に2孔がある。						



- Fig. 15-1の土器は、23点の接合。(1~23)
- Fig. 15-2の土器は、23点の接合。(24~46)
- Fig. 15-5の土器は、4点の接合。(47~50)
- Fig. 15-8の土器は、6点の接合。(51~56)
- Fig. 16-6の土器は、3点の接合。(57~59)
- Fig. 16-10の土器は、2点の接合。(60~61)



Fig.13 13区2号住居址遺物出土状況図

13区2号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 14-8	浅鉢・口・胴部	床面・覆土	白色鉱物混入	橙		VI	
PL. 7-8	口舌部が厚く平坦となる無文の浅鉢である。						
Fig. 14-9	浅鉢・口・胴部	床面・覆土	白色鉱物混入	明赤褐		V	
PL. 7-8	口舌部が厚く平坦となる無文の浅鉢である。						
Fig. 14-10	浅鉢・口・胴部	床面・覆土	白色鉱物混入	赤		VI	
PL. 7-8	口舌部が厚く平坦となる無文の浅鉢である。						
Fig. 14-11	浅鉢・口・胴部	覆土	白色鉱物混入	明赤褐		VI	
PL. 7-8	口舌部が厚く平坦となる無文の浅鉢である。						
Fig. 14-12	深鉢・底部	床面	砂質	橙	条線文	?	
PL. 8-1	胴部に櫛歯状工具による縦位の条線を地文とし、沈線による懸垂文を施す。						
Fig. 14-13	深鉢・底部	覆土	砂質	にぶい橙	燃糸文	?	
PL. 8-2	胴部に縦位の燃糸文を地文とし、沈線による懸垂文、及び蛇行懸垂文を施す。						
Fig. 14-14	深鉢・底部	覆土	白色鉱物混入	明赤褐	燃糸文	V	
PL. 8-3	胴部に縦位の燃糸文を地文とし、沈線による懸垂文が施される。						
Fig. 15-1	深鉢・胴部	覆土	白色鉱物混入	橙	LR・RL	III-1	RL0段多条・付加?
PL. 8-4	地文に縄文をもち、隆帯及び沈線を施す。						
Fig. 15-2	深鉢・胴部	床面	小礫混入	橙	燃糸文	IV~V	
PL. 8-4	地文に縦位の燃糸文をもち、隆帯による懸垂文を施す。						
Fig. 15-3	深鉢・胴部	床面	雲母・礫混入	にぶい橙	燃糸文	II~IV	
PL. 8-4	地文に縦位の燃糸文をもつ。						
Fig. 15-4	深鉢・胴部	床面	砂質	橙	燃糸文	II~IV	
PL. 8-4	地文に縦位の燃糸文をもつ。						
Fig. 15-5	深鉢・頸・胴部	床面・覆土	白色鉱物混入	にぶい黄橙	燃糸文	III-2	
PL. 8-4	頸部がくびれ、胴部がややふくらむ大型の深鉢である。頸部に刺突をもつ平行沈線を巡らせ、胴部は地文に縦位の燃糸文をもち、先端に小さな渦巻をもつ隆帯を施す。						
Fig. 15-6	深鉢・頸部	床面	小礫少数混入	にぶい橙	燃糸文	III-2	
PL. 8-4	Fig. 15-5 と同一個体						

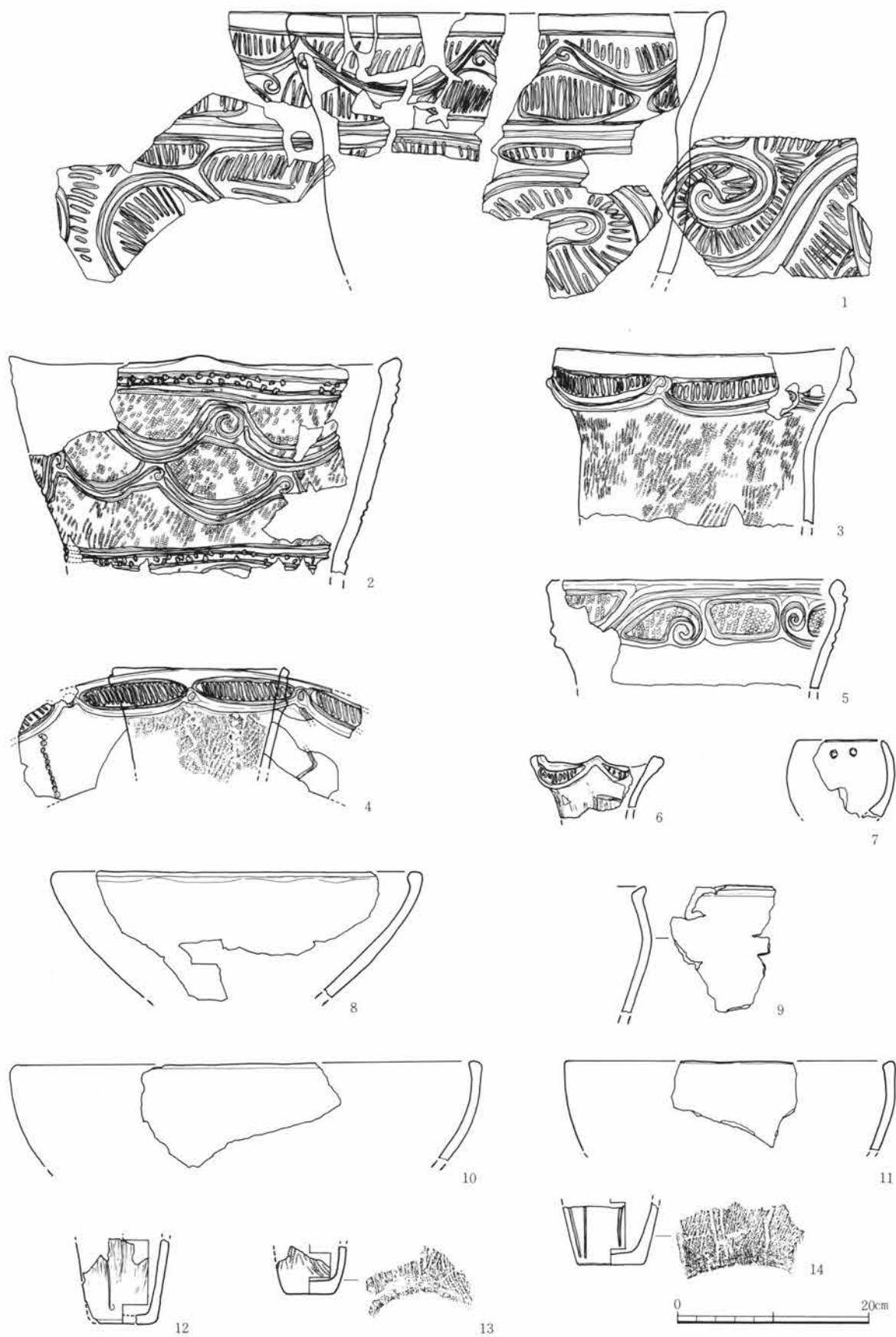


Fig. 14 13区2号住居址出土遺物実測図

13区2号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 15-7	深鉢・口縁部	覆土	小礫少数混入	にぶい橙		V	
PL. 8-4	口縁部に沈線を斜位に施し、頸部に大型の刺突をもつ隆帯を巡らせる。						
Fig. 15-8	深鉢・口縁部	覆土	小礫混入	明赤褐		V	
PL. 8-4	口縁部に沈線を斜位に施す。						
Fig. 15-9	深鉢・胴部	覆土	小礫少数混入	明赤褐		V	
PL. 8-4	胴部に隆帯で大きな渦巻を描き、その先端に十字文をもつ。さらに隆帯区画内に斜行する沈線を施す。						
Fig. 15-10	深鉢・口縁部	覆土	砂質	にぶい黄橙	RL	VI-2	0段多条
PL. 8-4	口縁部に太い沈線による曲線を描き、その下に沈線を巡らす。地文に縄文を施す。						
Fig. 15-11	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	橙	LR	VI	
PL. 8-4	口縁部に太い沈線と隆帯により文様を描き、地文に縄文を施す。						
Fig. 15-12	深鉢・胴部	覆土	白色鉱物混入	橙	LR	V	
PL. 8-4	胴部に懸垂文をもち、また斜行する沈線を施文する。地文には縄文を施す。						
Fig. 16-1	深鉢・口縁部	覆土	雲母・礫混入	にぶい橙	RL	IV	
PL. 8-5	口縁部に沈線による平行線、曲線等を描き、地文に縄文を施す。						
Fig. 16-2	深鉢・胴部	覆土	雲母・礫混入	橙	燃糸文	II~IV	
PL. 8-5	胴部に縦の燃糸文を施したもの。						
Fig. 16-3	深鉢・口縁部	覆土	砂質	にぶい赤褐	条線文	IX	
PL. 8-5	口縁部に沈線による平行線及び曲線を描き、地文に細い条線を施す。						
Fig. 16-4	深鉢・口縁部	覆土	小礫混入	にぶい黄	条線文	IV	
PL. 8-5	口縁部に沈線による平行線及び曲線を描き、地文にやや太い条線を施す。						
Fig. 16-5	深鉢・口縁部	覆土	砂質	にぶい橙	条線文	VI-1	
PL. 8-5	口縁部に沈線による平行線及び曲線を描き、地文に細い条線を施す。						
Fig. 16-6	深鉢・口縁部	床面・覆土	砂質	にぶい橙	条線文	VI-1	
PL. 8-5	口縁部に沈線による平行線を数段巡らせ、その間に連弧文を描く。地文には細い条線を施す。						
Fig. 16-7	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	橙	条線文	IV	
PL. 8-5	口縁部から頸部にかけて、沈線による曲線を描き、地文に条線を施す。						
Fig. 16-8	深鉢・胴部	覆土	砂質	橙	条線文	IV	
PL. 8-5	胴部に沈線による曲線を描き、地文に細い条線を施す。						

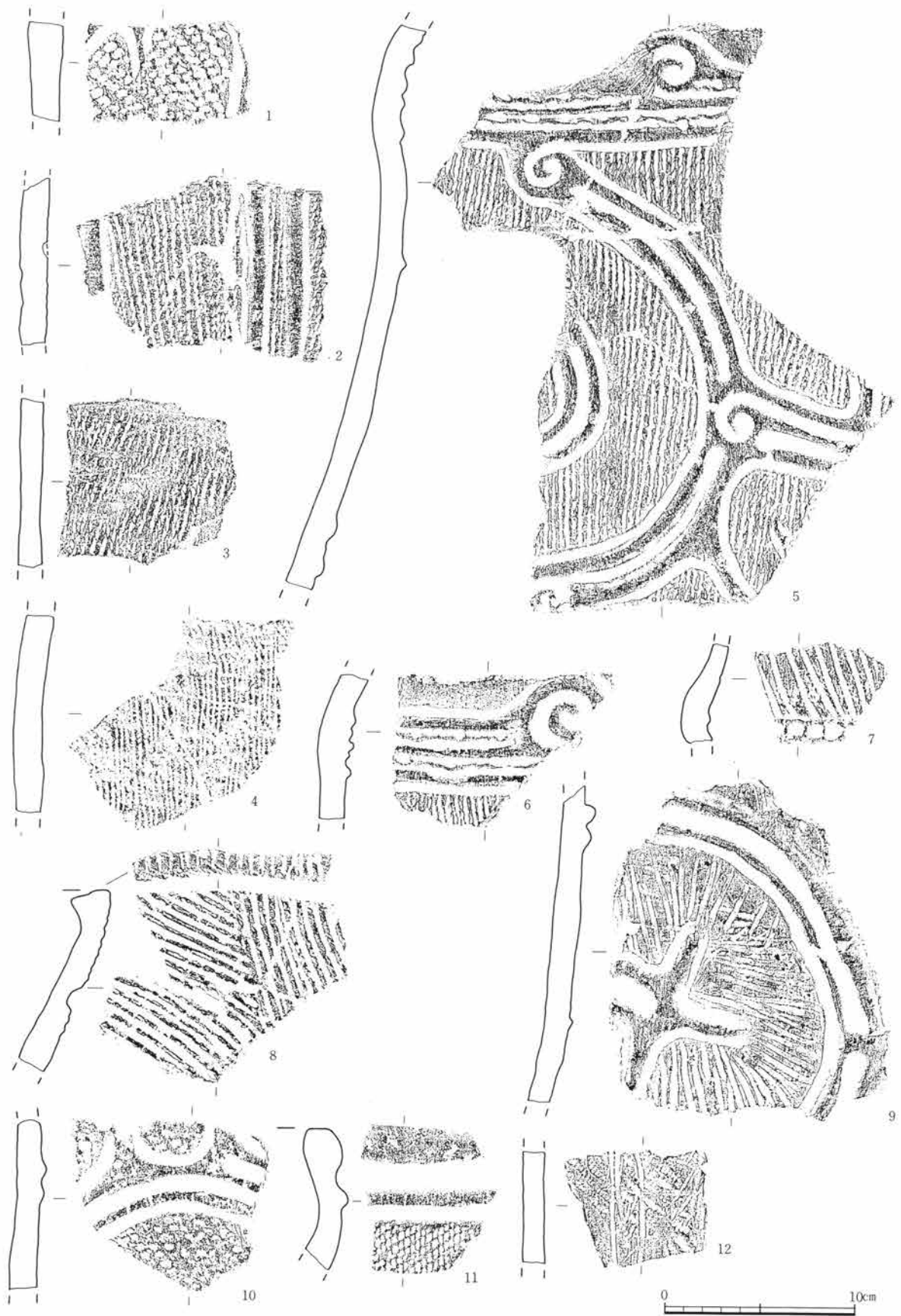


Fig. 15 13区2号住居址出土遺物実測図

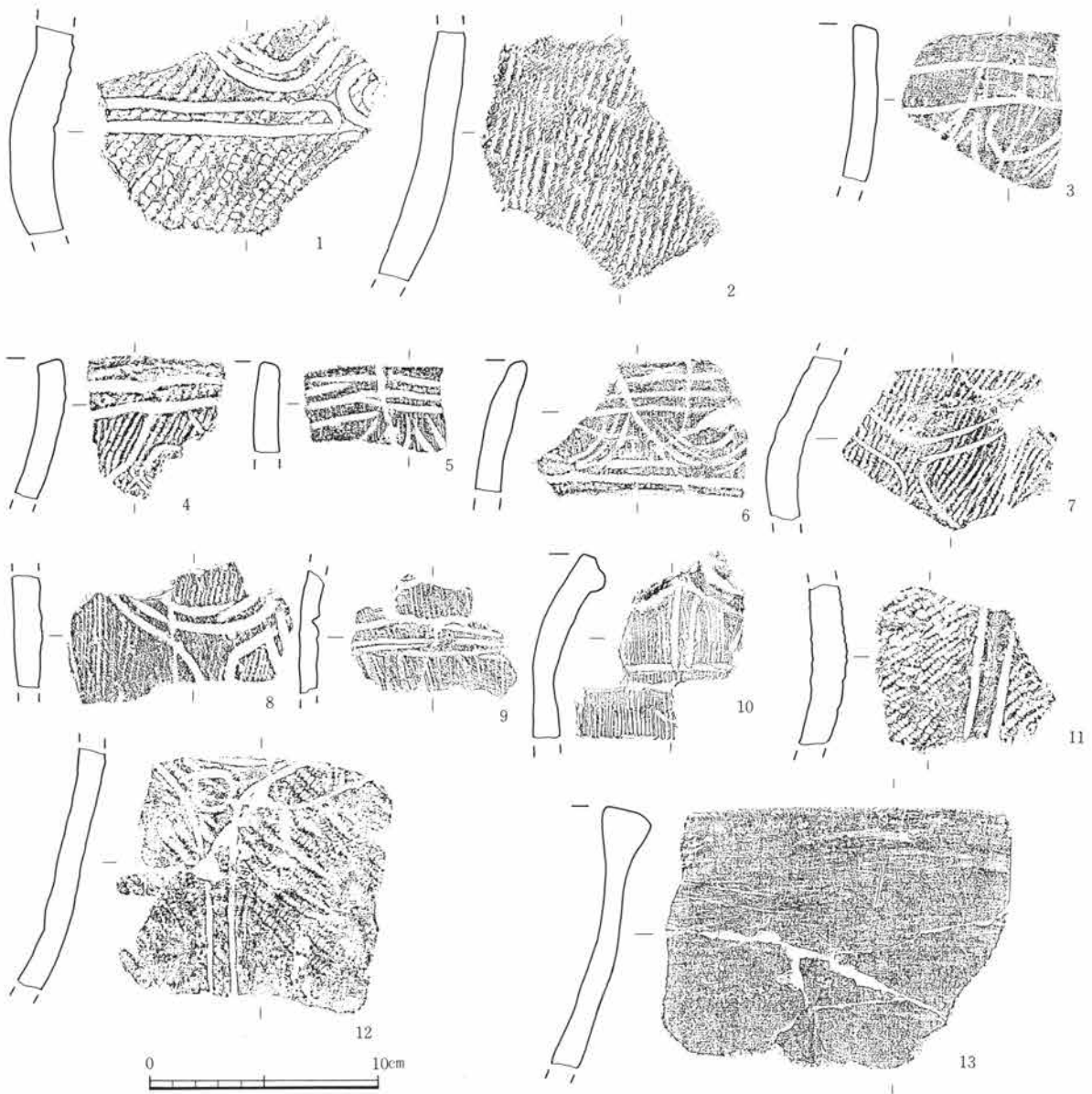


Fig. 16 13区2号住居址出土遺物実測図

13区2号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 16-9	深鉢・胴部	床面	小礫混入	明赤褐	条線文	VI-2	
PL. 8-5	胴部に沈線による平行線を巡らせ、地文に細い条線を施す。						
Fig. 16-10	深鉢・口縁部	床面	雲母・礫混入	黒褐	条線文	III-1	
PL. 8-5	口縁部に隆帯及び沈線で文様を描き、地文に細い条線を施す。						

第3章 各 説

13区2号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説 明						
Fig. 16-11	深鉢・胴部	D-17・18Gr III-3層	夾雑鉱物混入	にぶい橙	RL	VI~VII	住居址外出土
PL. 8-5	胴部に沈線による懸垂文をもち、その内部を磨消させ、地文に縄文を施す。						
Fig. 16-12	深鉢・胴部	床 面	白色鉱物混入	橙	LR	IV	
PL. 8-5	口縁部から胴部にかけて沈線による曲線及び円形文、懸垂文を描き、地文に縄文を施す。						
Fig. 16-13	浅鉢・口縁部	床 面	小礫混入	橙		VI-1	
PL. 8-5	口舌部がやや広くなる無文の浅鉢である。						

13区2号住居址出土遺物一覧表（石器）

挿図番号	石器の種類	長さcm	幅 cm	厚さcm	重さg	石 質	出 土 位 置
図版番号	説 明						
Fig. 17-1	打製石斧	(12.5)	4.3	1.7	118.4	安山岩	覆土
PL. 8-6	短冊形を呈す。基部を欠損する。表裏面は横方向から剝離を行なっている。刃部は丸味をもつ。						
Fig. 17-2	打製石斧	10.1	4.1	1.5	70.5	灰色安山岩	13区D-17・18Gr III-3層 住居址外
PL. 8-6	短冊形を呈す。表裏面は横方向、基部は縦方向から剝離を行なっている。刃部は斜めに付いている。						
Fig. 17-3	打製石斧	7.4	3.3	1.4	50.1	不 明	覆土
PL. 8-6	短冊形を呈す。刃部の一部を欠損する。基部・刃部とも丸味をもっている。基部は僅かに磨れている。						
Fig. 17-4	打製石斧	(5.8)	4.2	1.3	49.1	安山岩?	床面
PL. 8-6	短冊形を呈す。基部・刃部とも欠損している。表裏面とも横方向からの剝離を行なっている。一部に自然面を残す。						
Fig. 17-5	打製石斧	(4.2)	7.3	1.1	37.5	頁 岩	覆土
PL. 8-6	刃部付近のみが残存する。表裏とも横方向の剝離であり、刃部は丸味をもち細かく剝離している。						
Fig. 17-6	打製石斧	(4.2)	3.6	1.5	25.7	黒色頁岩	床面
PL. 8-6	短冊形と思われる。基部・刃部とも欠損している。基部に近い部分と考えられる。						
Fig. 17-7	打製石斧	(2.6)	3.3	1.1	11.5	黒色頁岩	床面
PL. 8-6	基部付近のみ残存する。表裏とも横方向からの剝離後、細かく剝離を行なう。基部に僅かながら自然面が残る。						
Fig. 17-8	打製石斧	(5.3)	3.2	1.3	26.6	黒色頁岩	覆土
PL. 8-6	中間部で折れ、基部が残存する。表裏面とも横方向からの剝離であり、基部裏面は縦方向からの剝離である。						
Fig. 17-9	剥片石器	5.1	5.6	1.0	30.2	黒色頁岩	覆土
PL. 8-6	表裏面とも各1回の剝離後、三辺を細かく剝離を行ない刃部を形成している。一部に自然面を残す。						

13区2号住居址出土遺物一覧表(石器)

挿図番号	石器の種類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	出土位置
図版番号	説明						
Fig. 17-10	剥片石器	6.9	8.9	1.7	102.6	凝灰岩質砂岩	床面
PL. 8-6	表裏面とも上位から1回の剥離を行なっている。一边は両面から刃部剥離を行ない、二辺は表面剥離だけである。						
Fig. 17-11	多孔石	12.9	8.7	4.0	5,000.0	輝石安山岩	覆土
PL. 8-6	表裏面ともほぼ平たく、多数の凹が面全体にみられる。						

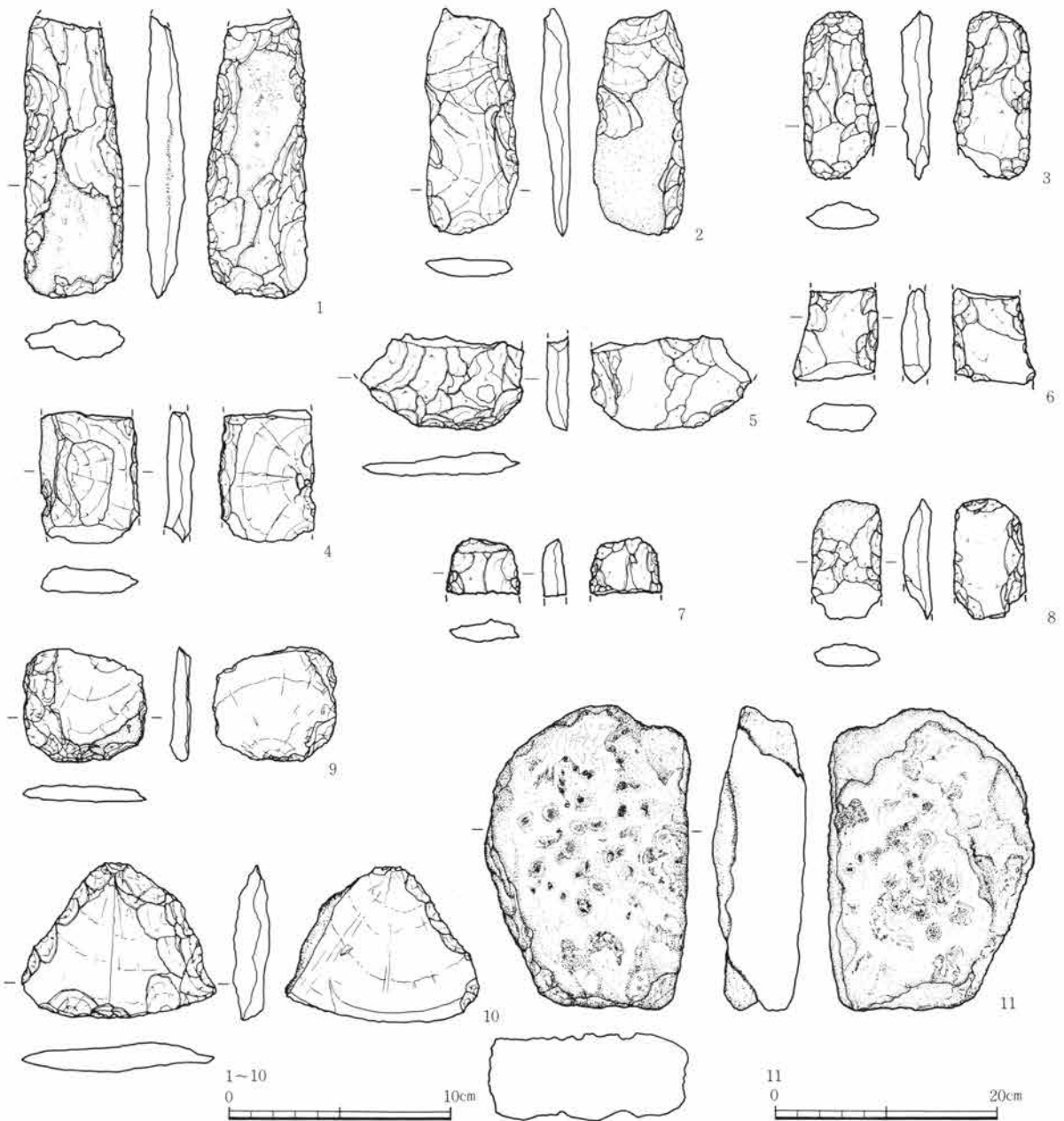


Fig. 17 13区2号住居址出土遺物実測図

13区3号住居址 (Fig. 18・19、PL. 9-1・2)

3号住居址は陣場泥流残丘上の南側上位のほぼ平坦部分に位置している。F・G-17・18グリッドに広がりをもち南西隅を2号墓墳によって切られており、西側は1号墓墳の東部分が接している。本住居址の平面形態は、南北に長い楕円形を呈している。長軸は約6.9m、短軸約5.6mである。壁は僅かに残り、北側で約20cm、南側で約10cmの深さを測る。壁は部分的に歪む所がある。床面には中央僅か西寄りに炉が検出できた。炉の規模は長軸1.06m、短軸0.94m、深さ約12cmである。炉は石組があり、自然石や破損した石皿を使用している。石は僅かに焼けている。柱穴とした穴は10ヶ所あるが、全体的に浅い。P1、P7、P9を除けばほぼ環状を描く。柱穴の形状や規模は次の通りである。

P1 ほぼ円形を呈す。長軸50cm、短軸46cm、深さ18cmである。

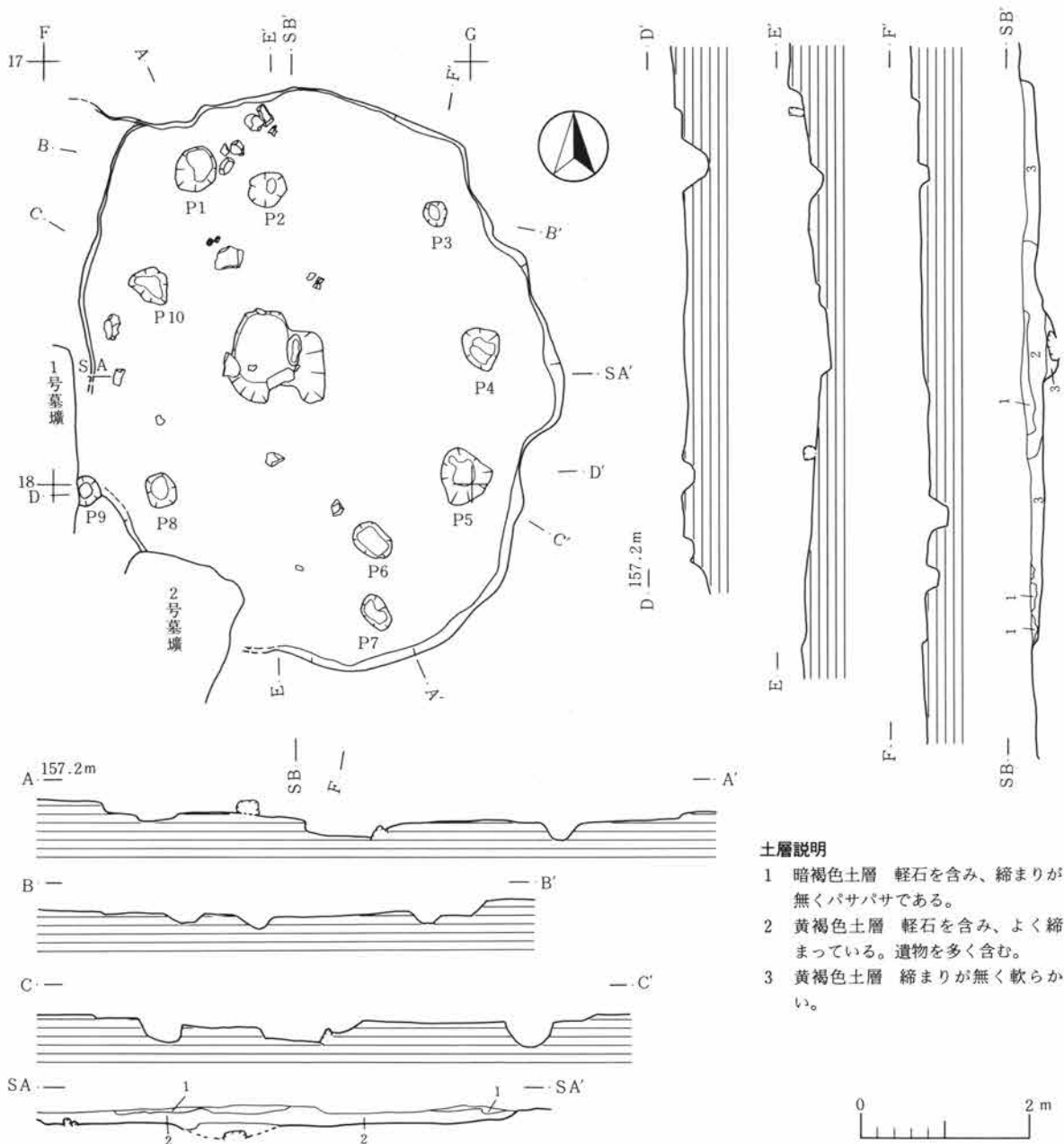


Fig. 18 13区3号住居址実測図

13区3号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 20-1	深鉢・頸・胴部	Pit. 5 覆土	砂質	浅黄橙	LR	IV	
PL. 10-1	頸部がくびれ、胴部のふくらむ深鉢である。口縁部に隆帯と沈線により文様を描き、頸部は無文となる。胴部には先端に渦巻をもつ隆帯と沈線を描き、地文に縄文を施している。						
Fig. 20-2	深鉢・口縁部	床面	白色鉱物混入	橙	条線文	VI-2	
PL. 10-2	口縁がやや内反する深鉢である。地文に細い条線を施し、口縁部に平行沈線を巡らせ、その下に波状となる沈線を描く。						
Fig. 20-3	深鉢・口縁部	覆土	小礫少数混入	にぶい黄橙	RL	VI-2	
PL. 10-3	キャリバー形がくずれた深鉢である。口縁部には先端に渦巻をもつ隆帯を描き、胴部に内部を磨消させる懸垂文と、蛇行する懸垂文をもち、地文には縄文を施している。						
Fig. 20-4	深鉢・胴・底部	床面・覆土	白色鉱物混入	浅黄橙	RL	VI~VII	
PL. 10-4	胴部に内部を磨消させる懸垂文をもち、地文に縄文を施している。						
Fig. 20-5	深鉢・胴・底部	覆土	夾雑鉱物混入	にぶい橙	LR	VI~VII	
PL. 10-5	胴部に内部を磨消させる懸垂文をもち、地文に縄文を施している。						
Fig. 20-6	深鉢・底部	覆土	白色鉱物混入	橙		?	
PL. 10-6	胴部に縄文が施されている。						
Fig. 20-7	浅鉢・底部	Pit.10・床面	夾雑鉱物混入	にぶい黄橙		?	
PL. 10-6	無文の浅鉢となるもの。						
Fig. 20-8	深鉢・口縁部	床面・覆土	砂質	浅黄橙	LR	VI-2	
PL. 10-7	口縁部に隆帯と沈線による渦巻及び楕円を描き、地文は縄文が施されている。口縁部文様の下には無文帯が観察される。						
Fig. 20-9	深鉢・口縁部	Pit. 6・覆土	砂質	にぶい橙	LR	VI-1	
PL. 10-7	口縁部に隆帯と沈線による渦巻及び楕円を描き、地文には縄文が施されている。口縁部文様の下には無文帯が観察される。						
Fig. 20-10	深鉢・口縁部	Pit. 5・覆土	砂質	浅黄橙	LR	VI-1	
PL. 10-7	口縁部に隆帯と沈線による渦巻及び楕円を描き、地文には縄文が施されている。口縁部文様の下には無文帯が観察される。						
Fig. 20-11	深鉢・口縁部	床面・覆土	白色鉱物混入	赤褐	LR	VII	
PL. 10-7	口縁部に隆帯と沈線による渦巻、楕円等の文様を描き、胴部に内部を磨消する懸垂文等をもつ。地文には縄文を施している。						
Fig. 20-12	深鉢・口縁部	覆土	小礫少数混入	にぶい黄橙	LR	IV	
PL. 10-7	口縁部に隆帯と沈線による文様が描かれ、地文に縄文が施される。						

第1節 縄文時代

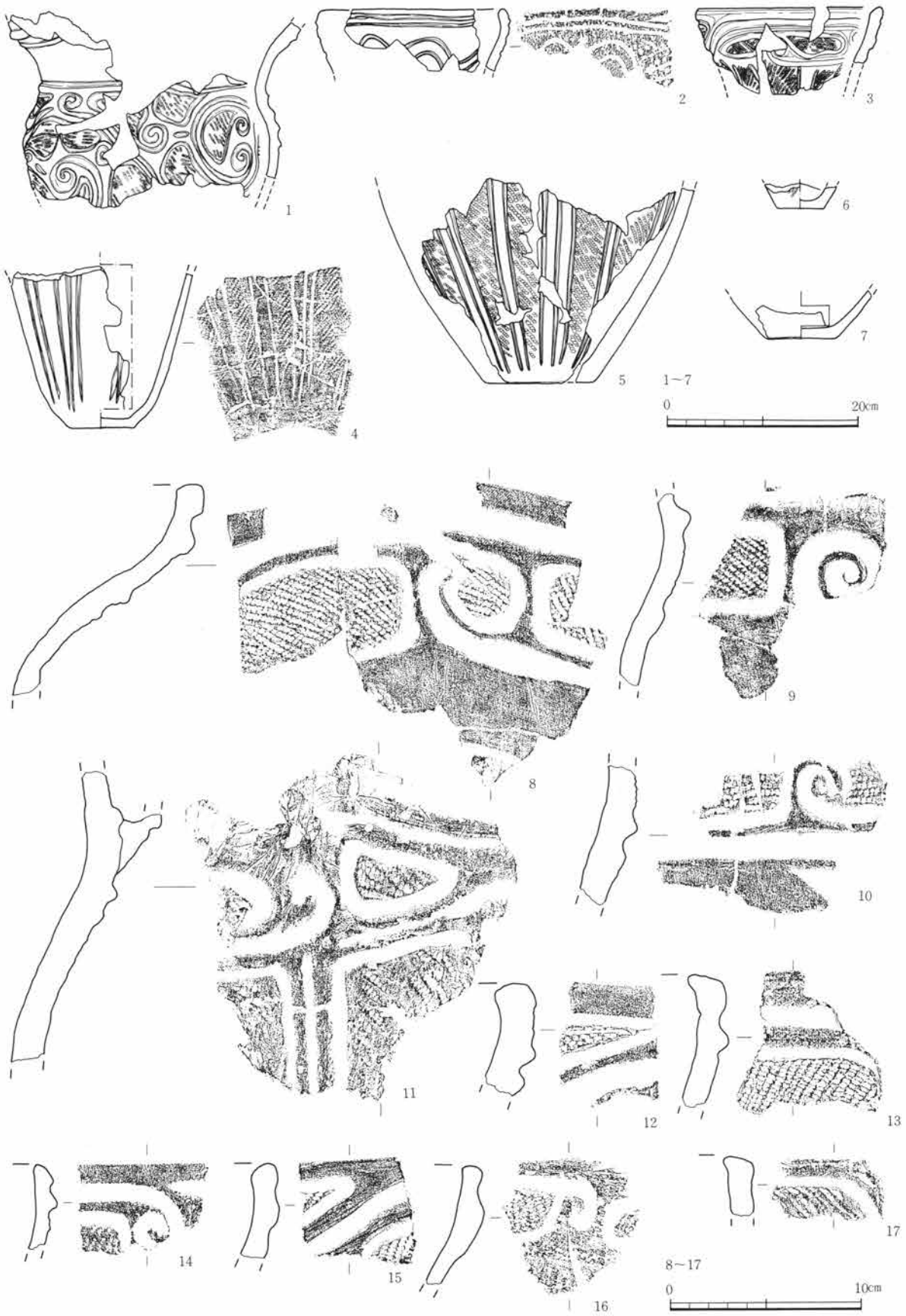


Fig. 20 13区3号住居址出土遺物実測図

第3章 各 説

13区3号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 20-13	深鉢・口縁部	覆土	小礫混入	浅黄橙	RL	VI	
PL. 10-7	口縁部に隆帯と沈線による文様が描かれ、地文に縄文が施される。						
Fig. 20-14	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	にぶい赤褐	RL	VI-1	
PL. 10-7	口縁部に隆帯と沈線による渦巻等の文様が描かれ、地文に縄文が施される。						
Fig. 20-15	深鉢・口縁部	炉址覆土	黒色鉱物混入	淡黄		VII	
PL. 10-7	口縁部に隆帯と沈線による文様が描かれ、地文に縄文が施される。						
Fig. 20-16	深鉢・口縁部	床面	小礫混入	にぶい赤褐	RL	VII	0段多条
PL. 10-7	口縁部に隆帯と沈線による文様が描かれ、地文に縄文が施される。						
Fig. 20-17	深鉢・口縁部	覆土	小礫少数混入	橙	LR	VI	
PL. 10-7	口縁部に隆帯と沈線による文様が描かれ、地文に縄文が施される。						
Fig. 21-1	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	にぶい橙		VI	
PL. 11-1	口縁部に隆帯による渦巻等の文様を描く。						
Fig. 21-2	深鉢・口縁部	床面・覆土	白色鉱物混入	橙	LR	VI-2	
PL. 11-1	口縁部に隆帯及び沈線による渦巻等を描き、胴部に内部を磨消する懸垂文をもち、地文に縄文を施す。						
Fig. 21-3	深鉢・胴部	覆土	雲母・礫混入	にぶい橙		?	
PL. 11-1	指頭刺突状の凹凸文を巡らし、その下に先端が蕨手状になる沈線、斜行沈線及び刺突等を施す。						
Fig. 21-4	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	橙	不明	VII	
PL. 11-1	口縁部に隆帯及び沈線による文様を描く。						
Fig. 21-5	深鉢・口縁部	床面	雲母・礫混入	橙	LR	VII	
PL. 11-1	口縁部に隆帯及び沈線による文様を描き、胴部に内部を磨消する懸垂文をもち、地文に縄文を施す。						
Fig. 21-6	深鉢・口縁部	床面	夾雑鉱物混入	橙	条線文	IV	
PL. 11-1	口縁部に広い無文帯をもち、太い沈線を巡らせ、以下に細い条線を施す。						
Fig. 21-7	深鉢・胴部	覆土	白色鉱物混入	にぶい橙		VII	
PL. 11-1	太い沈線及び円形刺突を施す。						
Fig. 21-8	深鉢・口縁部	床面・覆土	白色鉱物混入	赤褐	LR	VI-2	
PL. 11-1	口縁部に楕円状の文様を描き、胴部に内部を磨消する懸垂文をもち、地文に縄文を施す。						

13区3号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 21-9	深鉢・口縁部	覆土	小礫混入	赤褐		IV	
PL. 11-1	口縁部に隆帯及び沈線による文様を描き、その下に狭い無文帯をもつ。胴部には数条の平行沈線を巡らせる。						
Fig. 21-10	浅鉢・口縁部	床面	小礫少数混入	赤		VI	
PL. 11-1	口縁部に太い沈線で文様を巡らし、以下は無文となる。						
Fig. 21-11	深鉢・胴部	床面	白色鉱物混入	灰白	LR	VI~VII	
PL. 11-1	口縁部に太い沈線で文様を描き、胴部に内部を磨消する懸垂文をもつ。地文に縄文を施す。						
Fig. 21-12	深鉢・胴部	覆土	白色鉱物混入	橙	RL	VI~VII	
PL. 11-1	胴部に内部を磨消する懸垂文をもち、地文に縄文を施す。						
Fig. 21-13	深鉢・胴部	床面・覆土	夾雑鉱物混入	浅黄橙	RL	VI~VII	
PL. 11-1	胴部に内部を磨消する懸垂文及び蛇行する懸垂文をもち、地文に縄文を施す。						
Fig. 21-14	深鉢・胴部	覆土	白色鉱物混入	にぶい橙	RL	VI-2	
PL. 11-1	口縁部に隆帯及び沈線により渦巻等を描き、胴部に懸垂文をもつ。地文には縄文を施す。						
Fig. 22-1	深鉢・胴部	覆土	白色鉱物混入	にぶい橙	RL	VI~VII	
PL. 11-2	口縁部に隆帯と沈線により文様を描き、胴部に懸垂文をもつ。地文には縄文を施す。						
Fig. 22-2	深鉢・胴部	Pit.10・床面・覆土	雲母・礫混入	にぶい橙		VI	
PL. 11-2	胴部に隆帯で文様を描き、隆帯間に斜行沈線を施す。						
Fig. 22-3	深鉢・頸部	覆土	白色鉱物混入	にぶい橙	RL	VI	
PL. 11-2	隆帯と沈線により文様を描き、地文に縄文を施す。						
Fig. 22-4	深鉢・胴部	覆土	白色鉱物混入	赤		VI	
PL. 11-2	隆帯と沈線により文様を描き、地文に縄文を施す。						
Fig. 22-5	深鉢・胴部	覆土	砂質	にぶい黄橙	燃糸文	VI-2	
PL. 11-2	細い燃糸文を地文とし、平行沈線を施すもの。						
Fig. 22-6	深鉢・胴部	覆土	小礫混入	浅黄橙	RL	VI~VII	
PL. 11-2	胴部に内部磨消の懸垂文をもち、地文に縄文を施す。						
Fig. 22-7	深鉢・胴部	覆土	白色鉱物混入	淡赤橙	RL	VI~VII	
PL. 11-2	胴部に内部磨消の懸垂文をもち、地文に縄文を施す。						
Fig. 22-8	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	にぶい黄橙	RL	VIII	
PL. 11-2	口縁部に幅の狭い無文帯をもち、以下に縄文を施す。						

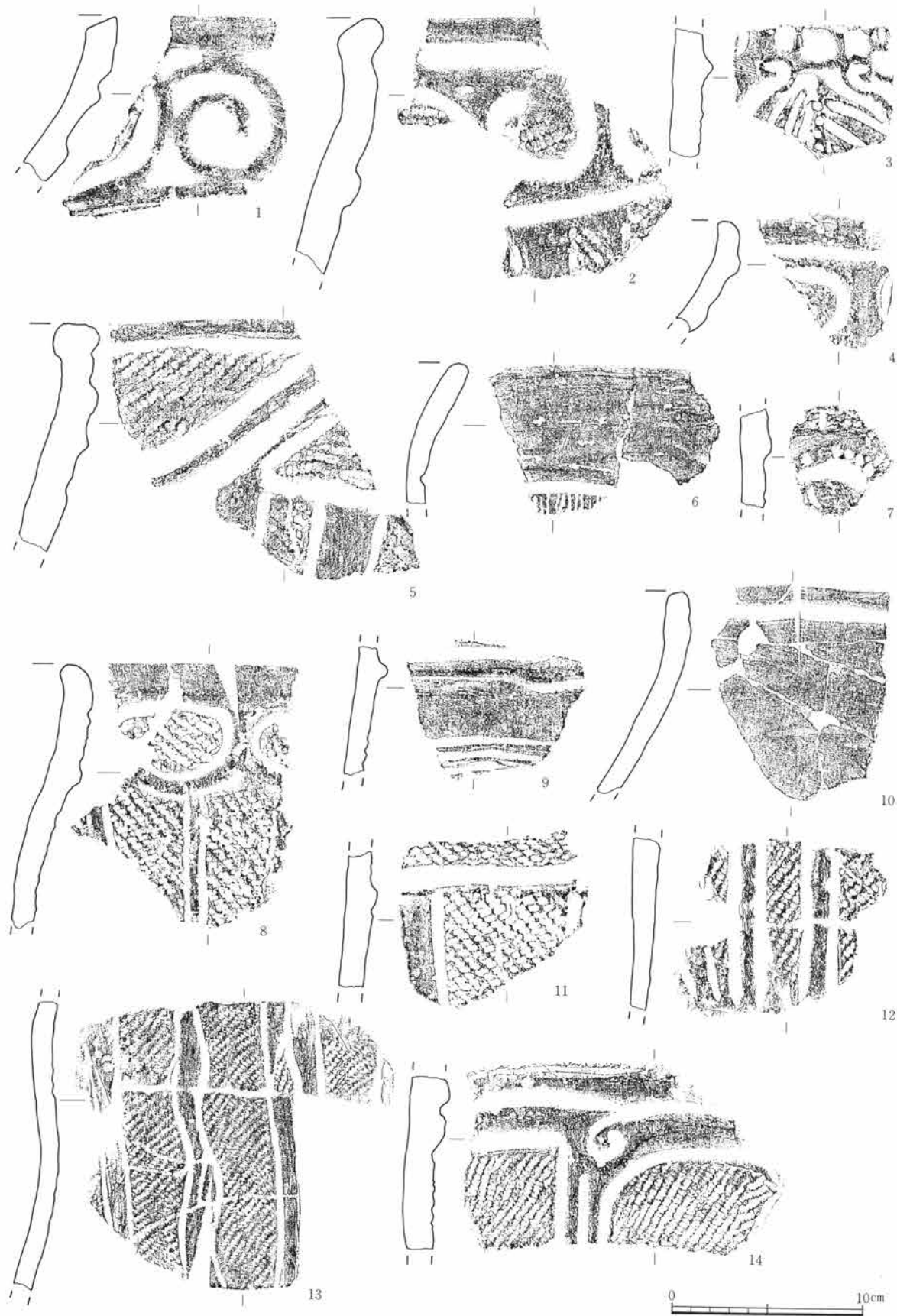


Fig. 21 13区3号住居址出土遺物実測図

13区3号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
Fig. 22-9	深鉢・胴部	覆土	砂質	浅黄橙	RL	VI~VII	
PL. 11-2	胴部に懸垂文及び蛇行する懸垂文をもち、地文には縄文を施す。						
Fig. 22-10	深鉢・胴部	炉址覆土	白色鉱物混入	明赤褐	LRL	VI~VII	
PL. 11-2	胴部に内部磨消する懸垂文をもち、地文に縄文を施す。						
Fig. 22-11	深鉢・胴部	覆土	小礫少数混入	浅黄橙	条線文	IV	
PL. 11-2	細い条線を地文とし、沈線で曲線を描くもの。						
Fig. 22-12	深鉢・胴部	床面	白色鉱物混入	にぶい橙	LR	VI~VII	
PL. 11-2	胴部に内部磨消する懸垂文をもち、地文には縄文を施す。						

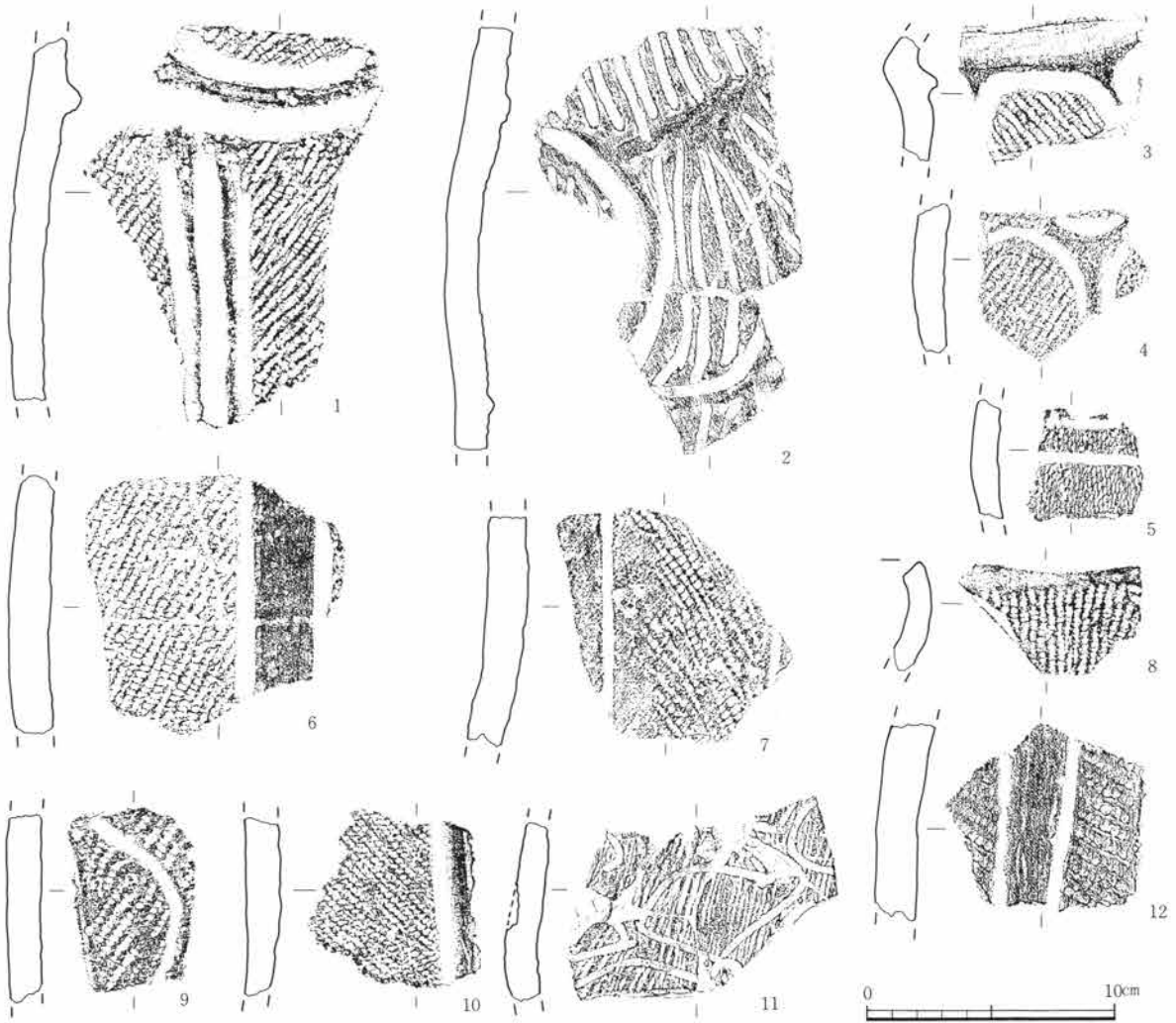


Fig. 22 13区3号住居址出土遺物実測図

第3章 各 説

13区3号住居址出土遺物一覧表 (石器)

挿図番号	石器の種類	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石 質	出 土 位 置
図版番号	説 明						
Fig. 23-1	打製石斧	10.6	4.3	1.7	72.1	安山岩	覆土
PL. 11-3	撥形を呈す。基部の一部を欠損。側面部は横方向、刃部は縦方向の剥離を行なっている。刃部は一部磨り減っている。						
Fig. 23-2	打製石斧	11.0	4.4	2.3	117.8	安山岩	覆土
PL. 11-3	短冊形を呈す。横方向からの剥離後、側面と刃部は表裏両面から細かい剥離を行なっている。片面には自然面が残る。						
Fig. 23-3	打製石斧	12.2	4.8	2.3	137.9	砂 岩	床面
PL. 11-3	短冊形を呈す。表裏面とも横方向からの剥離後、基部を除き細かい剥離を行なっている。基部に自然面が残る。						
Fig. 23-4	打製石斧	8.9	4.3	1.5	66.6	黒色頁岩	覆土
PL. 11-3	短冊形を呈す。横方向からの剥離後、各辺に細かい剥離が入る。刃部は丸味をもつ。基部には自然面を残す。						
Fig. 23-5	打製石斧	9.4	4.6	1.6	75.6	安山岩	覆土
PL. 11-3	短冊形を呈す。横方向から大きな剥離が入った後、各辺に細かく剥離を行なっている。						
Fig. 23-6	打製石斧	10.0	4.7	1.6	64.8	安山岩	覆土
PL. 11-3	撥形を呈す。横方向から剥離を行なっている。側面は両面から、刃部は片面から細かい剥離を行なっている。						
Fig. 23-7	打製石斧	8.0	4.4	1.5	70.2	黒色頁岩	覆土
PL. 11-3	短冊形を呈す。表裏、各辺2回の剥離を行なっており、刃部は再加工によるものと考えられる。基部に自然面が残る。						
Fig. 23-8	打製石斧	(8.5)	4.6	1.5	54.9	黒色頁岩	覆土
PL. 11-3	中間部から基部にかけて欠損する。横方向からの剥離後、側面は細かい剥離を行なっている。刃部は磨耗している。						
Fig. 23-9	打製石斧	(9.0)	4.4	1.6	64.6	輝 緑 岩	床面
PL. 11-3	形状は不明である。中間部付近で欠損している。端部に僅かな剥離が縦方向にみられる。表面に自然面が残る。						
Fig. 23-10	打製石斧	(12.0)	4.9	1.8	124.1	灰色安山岩	覆土
PL. 11-3	刃部を欠損する。基部には自然面が残る。表裏面とも横方向からの剥離を行なっている。						
Fig. 23-11	打製石斧	(8.3)	4.7	2.1	105.9	黒色頁岩	覆土
PL. 11-3	短冊形と考えられる。刃部・基部ともに欠損している。剥離は表裏面とも横方向から行なっている。						
Fig. 23-12	棒状石器	(9.4)	3.5	2.7	142.8	雲母石英片岩	覆土
PL. 11-3	両端が欠損している。断面はほぼ円形である。						
Fig. 23-13	打製石斧	(6.7)	6.5	2.3	90.5	灰色安山岩	床面
PL. 11-3	基部付近が残存する。横方向からと基部は縦方向からの剥離後、細かい剥離がみられる。側面の刃部は潰れている。						
Fig. 23-14	棒状石器	(7.0)	3.1	2.5	73.7	雲母石英片岩	覆土
PL. 11-3	中間部分で欠損をする。端部は丸味をもち、潰れ、一部欠損している。自然か人工か不明である。断面はほぼ円形。						

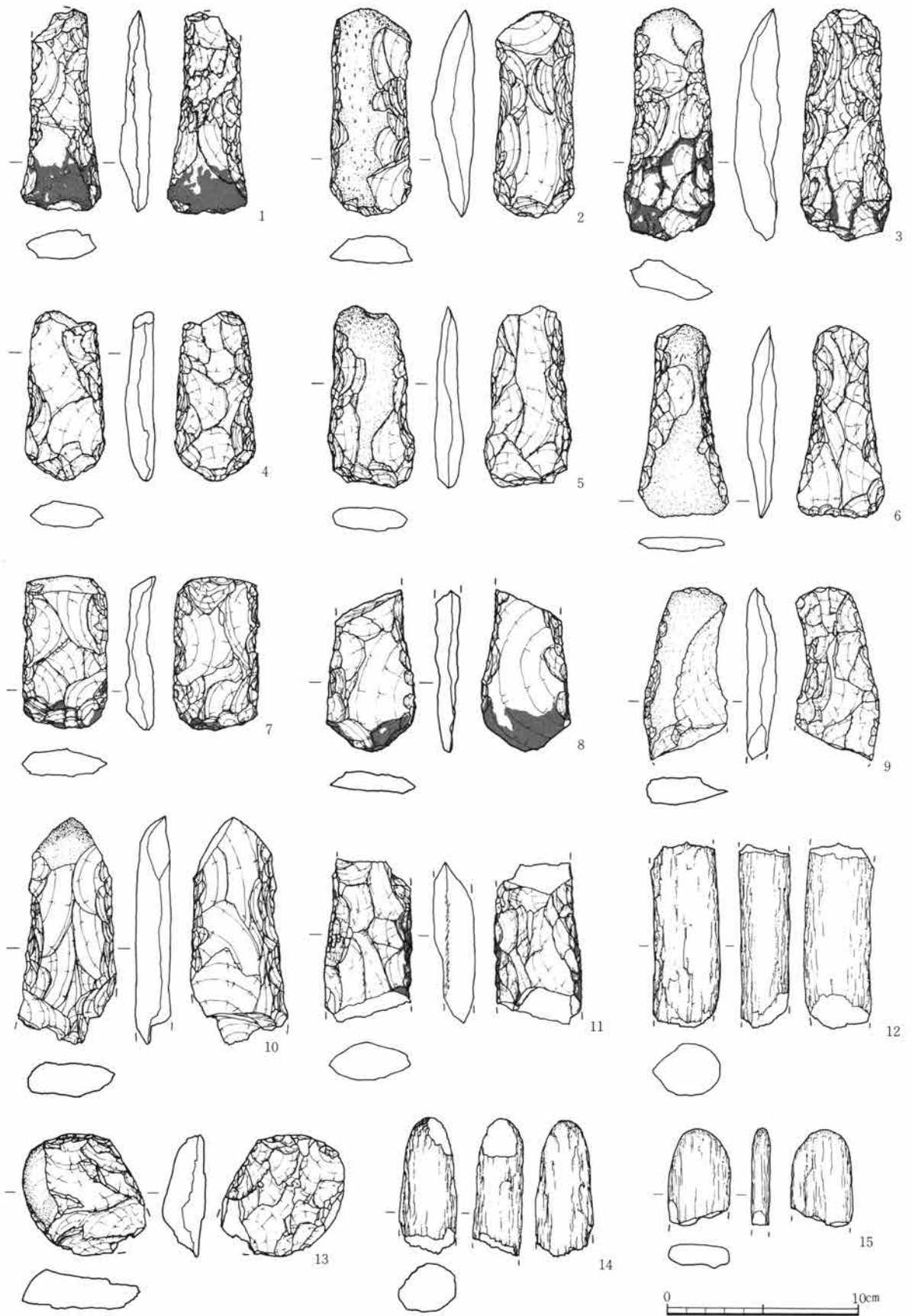


Fig. 23 13区3号住居址出土遺物実測図

13区3号住居址出土遺物一覧表(石器)

挿図番号	石器の種類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	出土位置
図版番号	説 明						
Fig. 23-15	棒状石器	(5.1)	3.3	1.1	25.5	緑色片岩	覆土
PL. 11-3	基部付近が残存する。基部は丸味をもたせてある。						
Fig. 24-1	磨石	11.2	8.6	5.0	720.0	輝石安山岩	床面
PL. 11-4	楕円形を呈す。表裏面及び側縁部分には叩いた痕がある。表面には使用痕である筋状の痕がある。表面に煤が付着。						
Fig. 24-2	石皿	(11.7)	(13.7)	2.2	4,230.0	輝石安山岩	覆土
PL. 11-4	2分の1～3分の1が残存する。底面は曲面形である。側縁部分には小さな突起がある。						

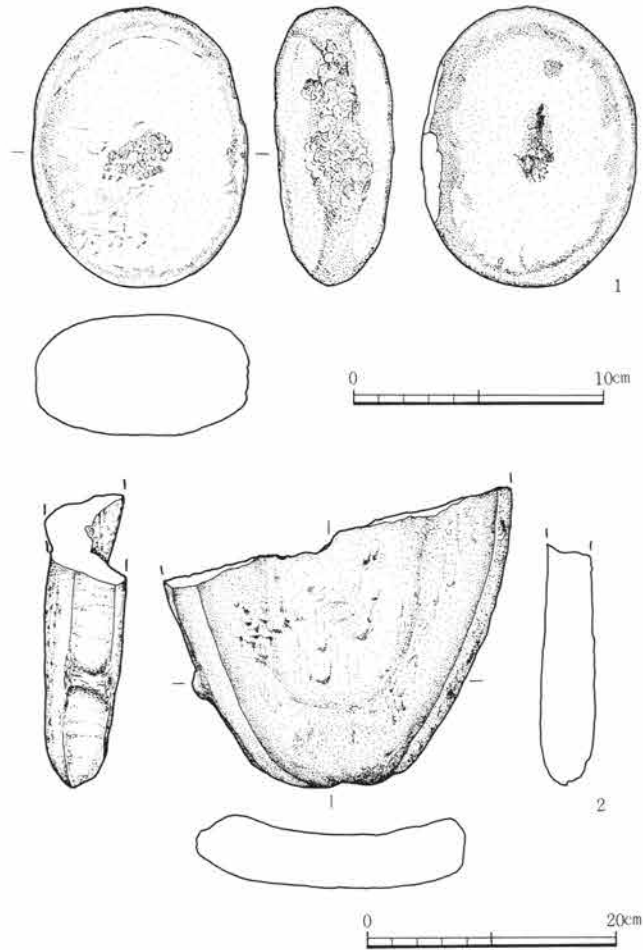


Fig. 24 13区3号住居址出土遺物実測図

13区4号住居址 (Fig.25・26、PL. 12-1・2、13-1~5)

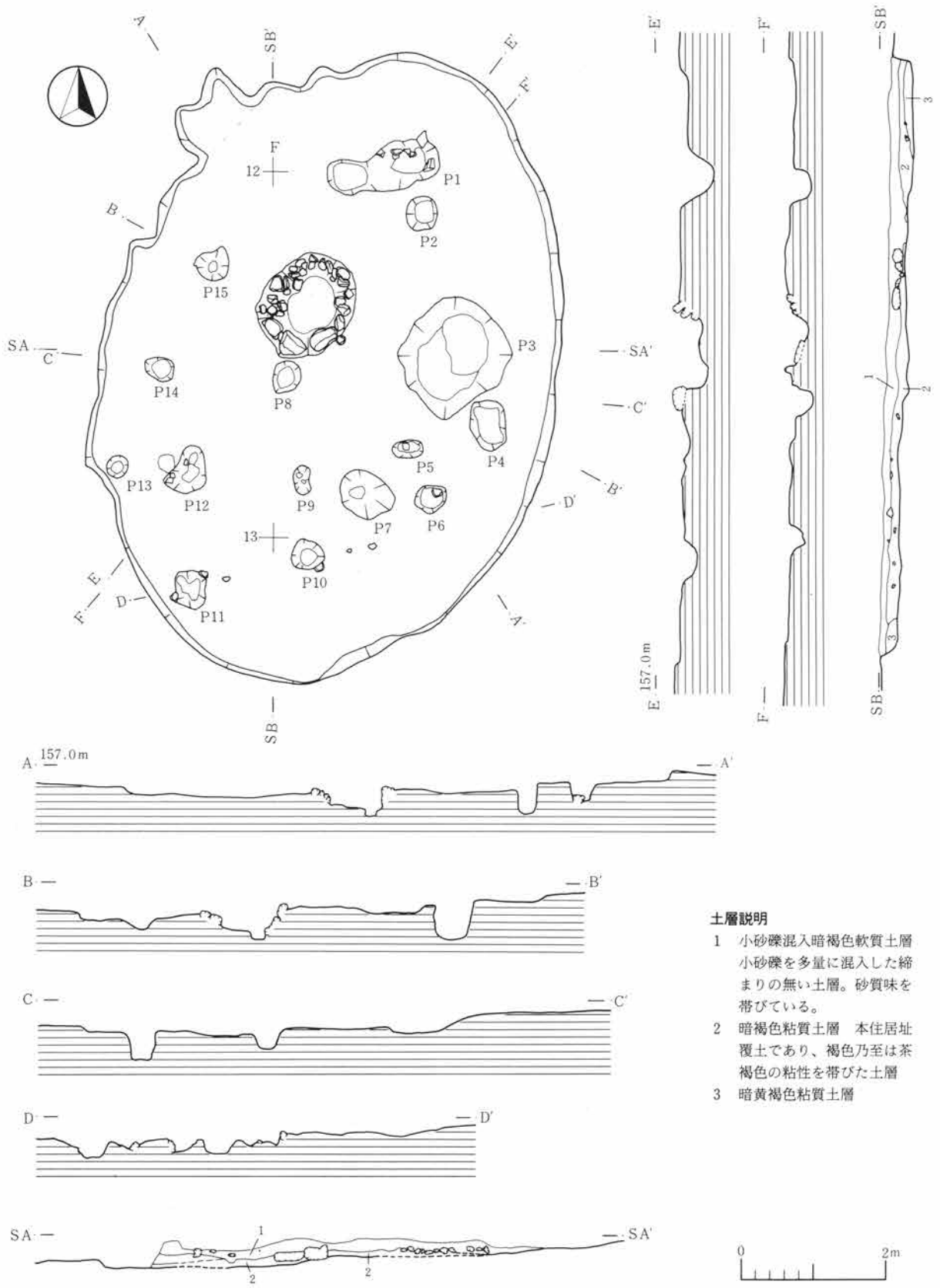


Fig. 25 13区4号住居址実測図

第3章 各 説

4号住居址はE・F-11・12・13グリッドに広がりをもつ。陣場泥流丘上の北西斜面上位に位置し、南西に1号住居址が近接している。本住居址の西側には土器だまりの遺物出土集中地がある。

住居址は南北に長い楕円形を呈し、長軸8.9m、短軸6.18mである。確認面より床面までの深さは、北側が約30cm、南側は約20cmであり、一部残りが悪い部分がある。炉址は床面中央より僅か北に位置している。円形の掘り込みに、角礫によってほぼ円形の炉壁を構築している。炉床は礫を組んでおらず、壁だけを組んでいる。規模は長軸1.56m、短軸1.22m、深さ約40cmである。柱穴は16ヶ所に検出でき、各々の計測値は別表に記した。P3はG-10グリッドで検出できた集石に類似していたが、層位では掘り込み面が未確認であり、形状、規模等から集石遺構の可能性を示唆できる。床面の状況は不安定であり、覆土中には陣場泥流内の角礫が二次堆積している。

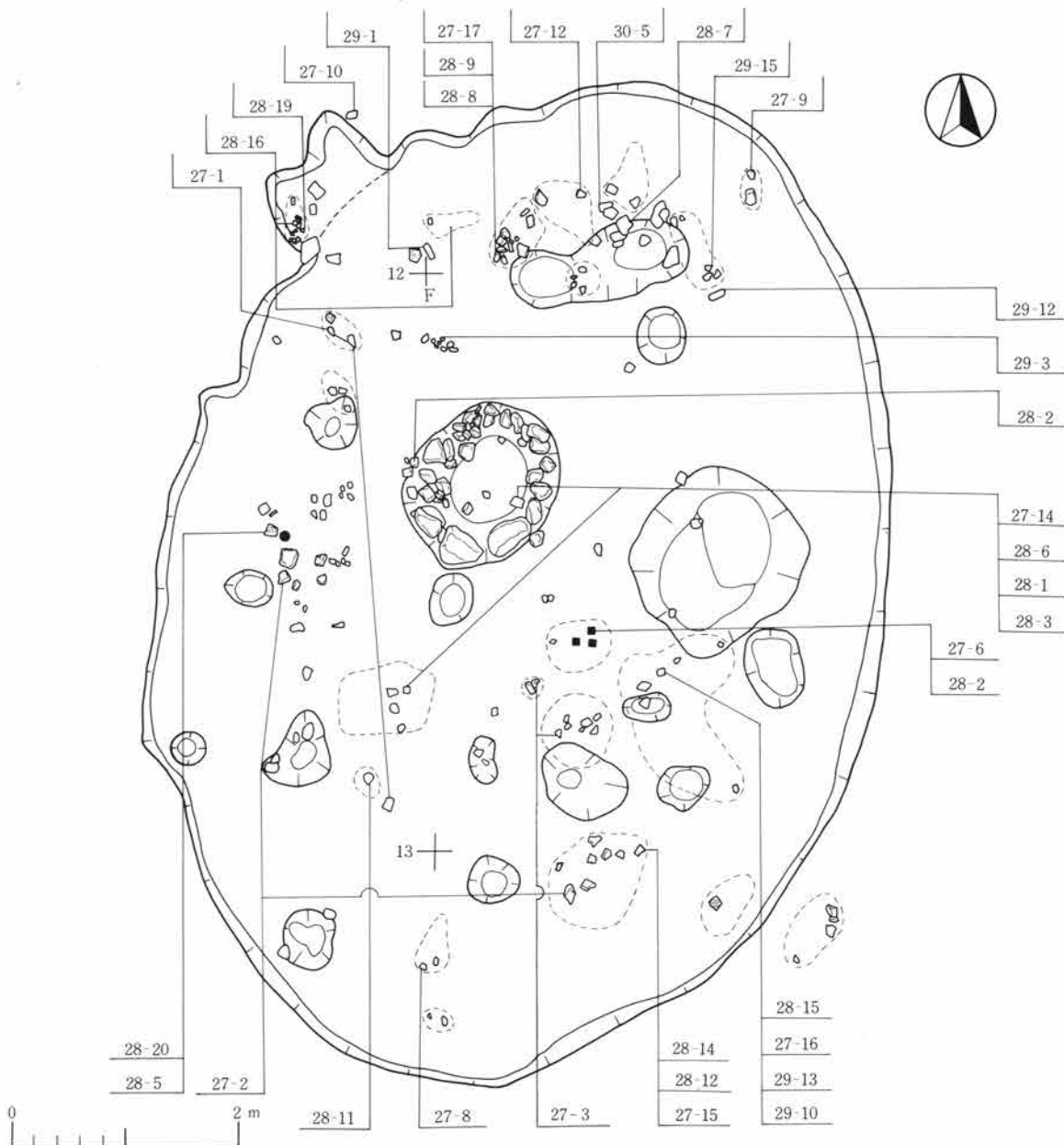


Fig. 26 13区4号住居址遺物出土状況図

13区4号住居址柱穴の規模

柱穴名 規模cm	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9
長軸 × 短軸	160×52	48×44	168×160	72×52	44×24	42×40	80×64	48×40	44×24
深 さ	50	26	8	46	36	24	31	20	10

柱穴名 規模cm	P 10	P 11	P 12	P 13	P 14	P 15	P 16
長軸 × 短軸	48×44	52×42	68×48	32×32	40×36	50×50	160×44
深 さ	16	25	20	15	40	18	15

13区4号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 27-1	深鉢・口縁部	覆土	白色鉾物混入	橙	RL	VII	
PL. 14-1	キャリパー形を呈する大型の深鉢である。口縁部に太い沈線と平面的な隆帯により渦巻と楕円が描かれ円形の刺突をもつ。地文に縄文が施される。						
Fig. 27-2	深鉢・口・胴部	床面・覆土	白色鉾物混入	にぶい赤褐	LR	VI-2	
PL. 14-3	小突起状のゆるやかな波状口縁となる、キャリパー形のややくずれた深鉢である。口縁部に太い沈線と平面的な隆帯による渦巻、円形文等が描かれ、地文に縄文が施される。胴部には沈線による懸垂文をもち、その内部を磨消させる。また先端が蕨手状になる蛇行する懸垂文をも描く。地文には縄文を施す。						
Fig. 27-3	深鉢・胴・底部	床面・覆土	白色鉾物混入	明赤褐	RL	VI~VII	
PL. 14-4	胴部に沈線による懸垂文をもち、その内部を磨消させる。地文には縄文が施される。						
Fig. 27-4	深鉢・口・胴部	覆土	小礫少数混入	赤褐	RL	VI-2	
PL. 14-2	キャリパー形を呈する大型の深鉢である。口縁部に太い沈線と平面的な隆帯により渦巻と楕円が描かれ円形の刺突をもつ。地文に縄文が施される。						
Fig. 27-6	深鉢・口縁部	床面・覆土	白色鉾物混入	橙		?	
PL. 14-5	口縁部が開き、頸部がくびれ鈔状の隆帯をもつ無文のもの。						
Fig. 27-7	深鉢・口縁部	覆土	小礫混入	にぶい橙		V	
PL. 14-6	口縁部に沈線による重弧文を描く。						
Fig. 27-8	深鉢・口縁部	床面	白色鉾物混入	浅黄橙	燃糸文	VI-2	
PL. 14-6	口縁部に隆帯及び太い沈線により文様を描き、区画内には円形刺突をもつ。胴部には細い燃糸文を施す。						
Fig. 27-9	深鉢・胴部	覆土	夾雑鉾物混入	橙	燃糸文	IV	
PL. 14-6	胴部に沈線による渦巻等の文様を描き、地文には燃糸文を施す。						
Fig. 27-10	深鉢・胴部	覆土	白色鉾物混入	にぶい橙	条線文	VI	
PL. 14-6	隆帯及び沈線で文様を描き、区画内には細い条線を施す。						

13区4号住居址出土遺物一覧表(土器)

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説 明						
Fig. 27-11	深鉢・胴部	覆 土	夾雑鉱物混入	にぶい橙	燃糸文	VII	
PL. 14-6	胴部に細い燃糸文を施す。						
Fig. 27-12	深鉢・胴部	覆 土	白色鉱物混入	にぶい赤褐	燃糸文	VI-2	
PL. 14-6	胴部に細い燃糸文を施す。						
Fig. 27-13	深鉢・口縁部	覆 土	白色鉱物混入	にぶい橙	燃糸文	VI-1	
PL. 14-6	口縁部に平行沈線を3条巡らせる。地文には燃糸文を施す。						
Fig. 27-14	深鉢・胴部	覆 土	白色鉱物混入	にぶい黄橙	条線文	VI	
PL. 14-6	胴部の沈線間に円形刺突をもつ平行沈線を巡らせ、また縦に垂下させる沈線を描出する。地文には細い条線を施す。						
Fig. 27-15	深鉢・胴部	床 面	雲母・礫混入	にぶい橙		VI-1	
PL. 14-6	胴部に懸垂文をもち、また縦位に矢羽状の斜行沈線を施す。						
Fig. 27-16	深鉢・口縁部	床 面	雲母・礫混入	橙	燃糸文	VIII	
PL. 14-6	口縁部に沈線及び刺突状の沈線を巡らせ、地文には燃糸文を施す。						
Fig. 27-17	深鉢・口縁部	覆 土	白色鉱物混入	橙	LR	VI-1	
PL. 14-6	口縁部に太い沈線及び隆帯による円形乃至は楕円を描き、地文に縄文を施す。						
Fig. 27-18	深鉢・口縁部	覆 土	砂 質	浅黄橙	条線文	VII	
PL. 14-6	口縁部に沈線及び円形刺突を巡らせ、以下に細い条線を施す。						
Fig. 27-19	深鉢・口縁部	覆 土	小礫少数混入	浅黄橙	条線文	VII	
PL. 14-6	口縁部に沈線及び円形刺突を巡らせ、以下に細い条線を縦位又は縦波状に施す。						
Fig. 27-20	深鉢・口縁部	覆 土	白色鉱物混入	明赤橙	RL	VII	
PL. 14-6	口縁部に沈線及び刻目状の刺突を巡らせ、以下に縄文を施す。						
Fig. 28-1	深鉢・口縁部	覆 土	白色鉱物混入	にぶい橙		VII	
PL. 15-1	口縁部に隆帯及び沈線により渦巻等の文様を描く。						
Fig. 28-2	深鉢・口縁部	覆 土	白色鉱物混入	にぶい橙	RL	VI	
PL. 15-1	口縁部に隆帯及び沈線により文様を描き、その区画内に縄文を施す。						
Fig. 28-3	深鉢・口縁部	覆 土	小礫少数混入	にぶい橙	RL	VII	
PL. 15-1	口縁部は無文となり沈線を巡らし、胴部には懸垂文をもつ。地文には縄文を施す。						
Fig. 28-4	深鉢・口縁部	覆 土	小礫少数混入	にぶい橙	RL	VII	
PL. 15-1	口縁部は幅の狭い無文帯となり、胴部には縄文を地文として施し、沈線による縦長の楕円が描かれ、磨り消しをもつ。						

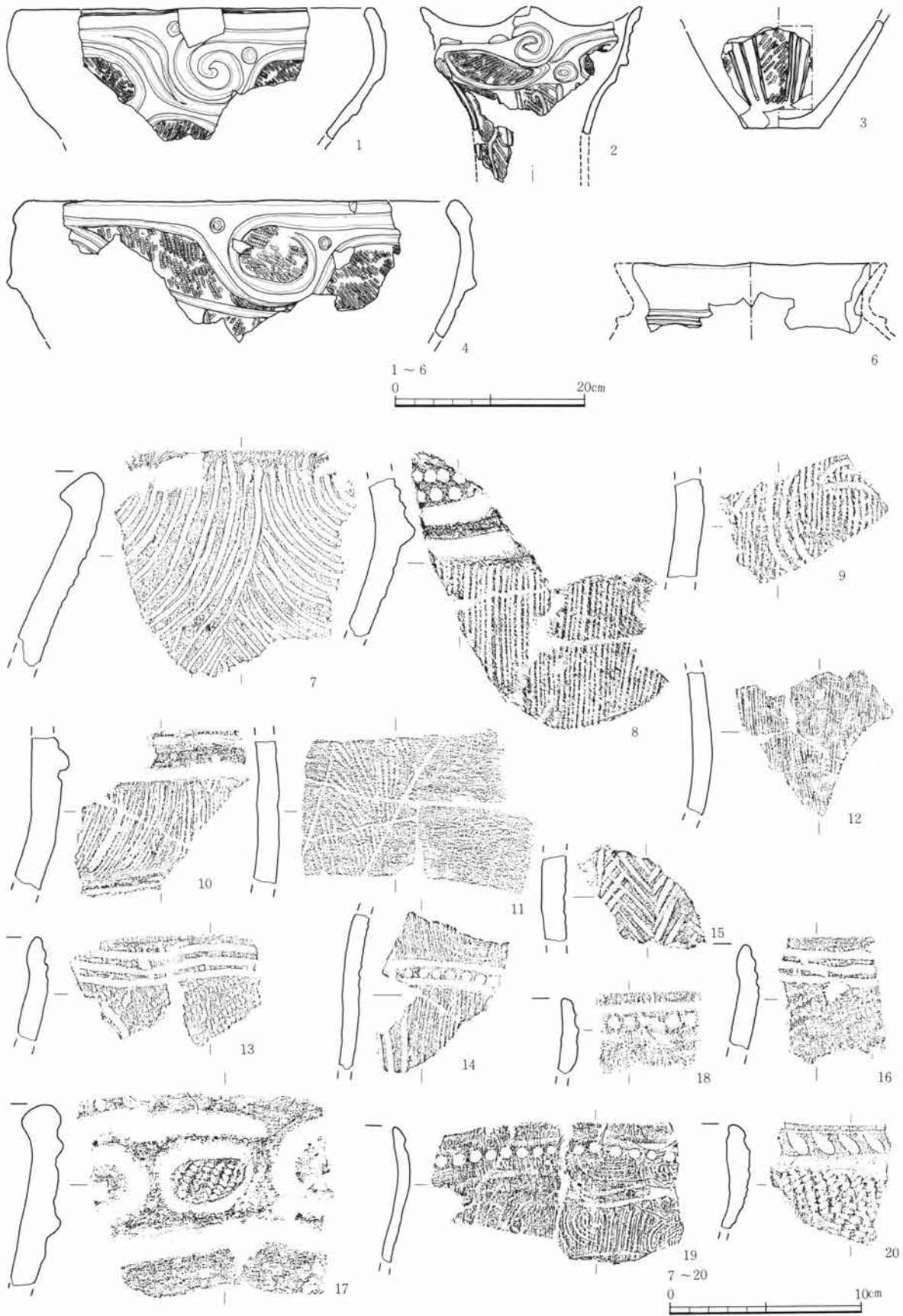


Fig. 27 13区4号住居址出土遺物実測図

13区4号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説 明						
Fig. 28-5	深鉢・口縁部	覆土	小礫混入	橙	RL	VII	
PL. 15-1	口縁部は無文となり沈線を巡らし、胴部に平行沈線を波状に描き、沈線間を磨消する。地文に縄文を施す。						
Fig. 28-6	深鉢・口縁部	覆土	黒色鈹物混入	にぶい橙	LR	VII	
PL. 15-1	口縁部は無文となり沈線を巡らし、以下に縄文を施す。						
Fig. 28-7	深鉢・胴部	床面	夾雑鈹物混入	にぶい橙	LR	VII	
PL. 15-1	胴部に沈線による縦長の楕円を描き、区画内に縄文を施し磨消する。						
Fig. 28-8	深鉢・口縁部	覆土	白色鈹物混入	にぶい黄橙		VI	
PL. 15-1	口縁部に太い沈線と隆帯により渦巻等の文様を描く。						
Fig. 28-9	深鉢・胴部	覆土	小礫混入	にぶい橙	LR	VII	
PL. 15-1	胴部に沈線を巡らし、縦長の楕円及び懸垂文をもち、地文に縄文を施す。						
Fig. 28-10	深鉢・胴部	覆土	砂質	にぶい橙	RL	VI-2	
PL. 15-1	胴部に平行沈線による蛇行する内部磨消の懸垂文をもち、地文に縄文を施す。						
Fig. 28-11	深鉢・胴部	覆土	白色鈹物混入	にぶい橙	RL	VI-2	
PL. 15-1	口縁部に太い沈線及び隆帯による文様、円形刺突を描き、胴部に縄文を施す。						
Fig. 28-12	深鉢・胴部	床面	白色鈹物混入	暗赤褐	RL	VI~VII	
PL. 15-1	胴部に内部磨消となる懸垂文をもち、地文に縄文を施す。						
Fig. 28-13	深鉢・胴部	覆土	白色鈹物混入	にぶい橙	LR	VI~VII	
PL. 15-1	胴部に内部磨消となる懸垂文をもち、地文に縄文を施す。						
Fig. 28-14	深鉢・胴部	床面	小礫混入	にぶい赤褐	RL	VI~VII	
PL. 15-1	胴部に内部磨消となる懸垂文をもち、地文に縄文を施す。						
Fig. 28-15	深鉢・胴部	床面	小礫混入	極暗赤褐	RL	VI~VII	
PL. 15-1	胴部に内部磨消となる懸垂文をもち、地文に縄文を施す。						
Fig. 28-16	深鉢・胴部	床面	白色鈹物混入	にぶい褐	RL	VI~VII	
PL. 15-1	胴部に内部磨消となる懸垂文及び蛇行する懸垂文をもち、地文には縄文を施す。						
Fig. 28-17	深鉢・胴部	覆土	小礫少数混入	明赤褐	RL	VI~VII	
PL. 15-1	胴部に内部磨消となる懸垂文をもち、地文には縄文を施す。						
Fig. 28-18	深鉢・胴部	覆土	小礫混入	にぶい赤橙	条線文	VII	
PL. 15-1	胴部に縦位に蛇行する細い条線を施す。						

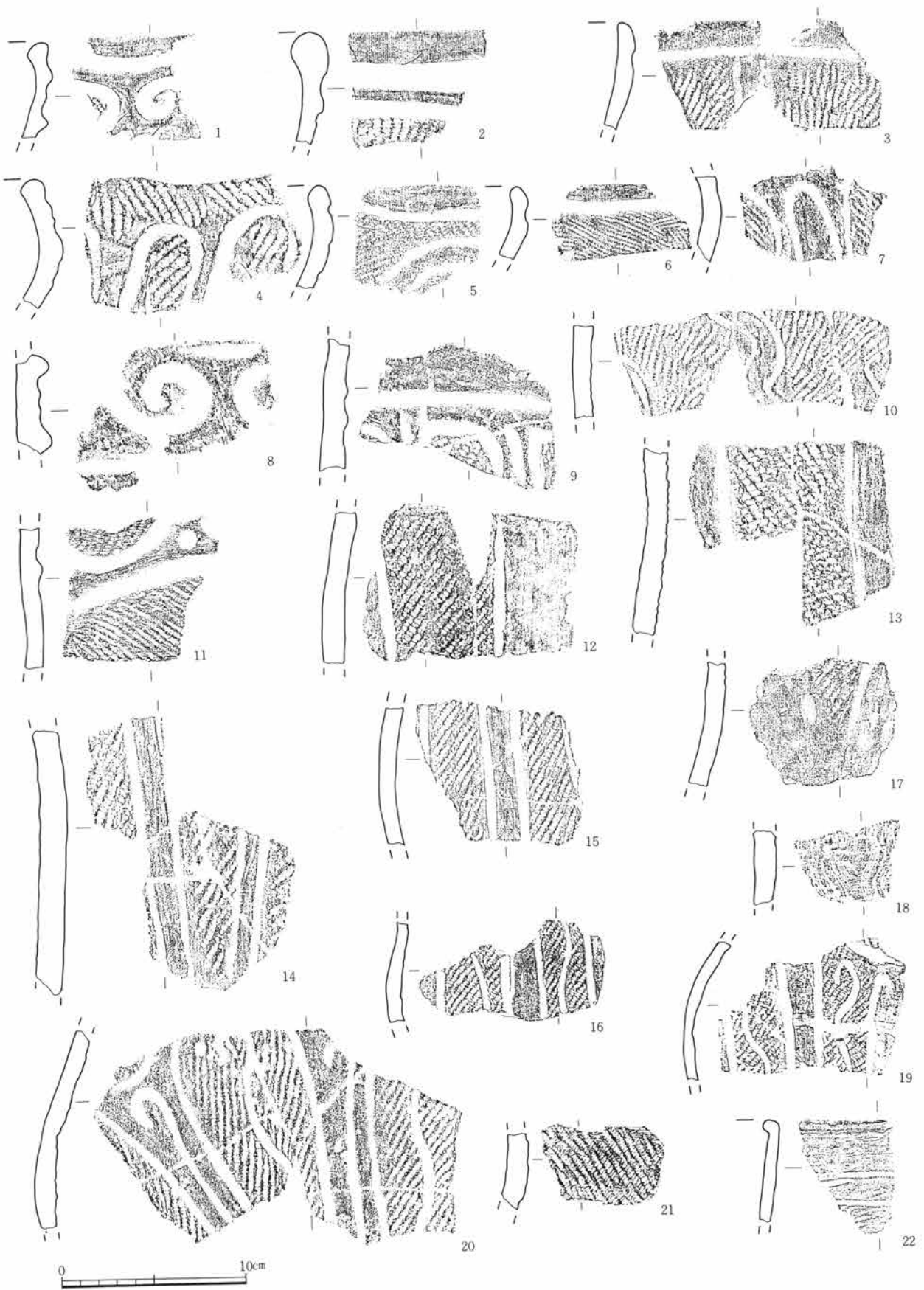


Fig. 28 13区4号住居址出土遺物実測図

第3章 各 説

13区4号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説 明						
Fig. 28-19	深鉢・胴部	床 面	白色鈹物混入	にぶい黄橙	RL	VII	
PL. 15-1	胴部に内部磨消となる懸垂文及び先端が蕨手となる蛇行する懸垂文をもち、地文には縄文を施す。						
Fig. 28-20	深鉢・胴部	覆 土	雲母・礫混入	にぶい橙	RL	VII	
PL. 15-1	胴部に先端が蕨手となる懸垂文及び同様の蛇行する懸垂文をもち、沈線による縦長の楕円を描き、その区画内に縄文を施す。						
Fig. 28-21	深鉢・胴部	床 面	白色鈹物混入	にぶい橙	RL	?	
PL. 15-1	胴部に縄文を施す。						
Fig. 28-22	深鉢・口縁部	覆 土	小礫混入	明 赤 褐	RL	IX	
PL. 15-1	口縁部に平行沈線を数条巡らし、沈線間に縄文を施す。器面はかなり研磨されている。						

13区4号住居址出土遺物一覧表（石器）

挿図番号	石器の種類	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石 質	出 土 位 置
図版番号	説 明						
Fig. 29-1	打製石斧	15.4	5.4	3.6	580.0	緑色岩類	覆土
PL. 15-2	表裏面とも自然面が残る。石器は厚みをもち刃部付近で薄くなる。剥離は各辺に直角方向から行なっている。						
Fig. 29-3	打製石斧	8.4	4.3	1.3	66.5	黒色頁岩	床面
PL. 15-2	短冊形を呈す。表裏面は横方向から剥離を行なっている。刃部は両面に使用による磨耗痕がある。						
Fig. 29-4	打製石斧	7.3	4.0	1.8	51.6	黒色頁岩	覆土
PL. 15-2	短冊形と考えられる。基部付近が残存する。横方向から大きく剥離を行なった後、側面は細かく潰し調整。						
Fig. 29-6	打製石斧	7.0	6.0	2.3	96.8	黒色頁岩	覆土
PL. 15-2	分銅形石斧になると推定される。中間より半分が欠損している。表裏面は横方向、刃部は縦方向から剥離している。						
Fig. 29-7	打製石斧	6.9	5.0	1.4	61.3	黒色安山岩	覆土
PL. 15-2	表裏面とも横方向からの剥離後、二辺に細かく剥離を行なっている。扁平な石材である。						
Fig. 29-8	打製石斧	7.9	4.6	1.3	51.1	灰色安山岩	覆土
PL. 15-2	剥片石器と考えられる。ほぼ中間で欠損しているものと考えられる。表裏面とも縦方向に剥離を行なっている。						
Fig. 29-9	打製石斧	6.8	(4.2)	1.0	38.1	黒色安山岩	覆土
PL. 15-2	短冊形と考えられる。中間部分より基部を欠損する。大きく横方向からの剥離後、各辺に細かく剥離を行なっている。						
Fig. 29-10	打製石斧	7.3	3.9	1.0	40.9	黒色頁岩	床面
PL. 15-2	短冊形と考えられる。刃部・基部とも欠損している。薄く扁平な形状を呈す。表裏面とも横方向からの剥離である。						

13区4号住居址出土遺物一覧表(石器)

挿図番号	石器の種類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	出土位置
図版番号	説明						
Fig. 29-11	打製石斧	12.8	6.9	2.8	320.0	輝石安山岩	覆土
PL. 15-2	短冊形と考えられる。表裏面とも横方向の剥離後、細かな剥離をくり返す。基部には自然面が残存する。						
Fig. 29-12	打製石斧	7.0	4.1	0.9	39.4	黒色頁岩	床面
PL. 15-2	短冊形と考えられる。基部を欠損する。横方向からの剥離と、刃部は縦方向からの剥離である。一部に自然面が残る。						
Fig. 29-13	打製石斧	5.2	3.5	0.9	16.4	灰色安山岩	床面
PL. 15-2	基部と考えられる。小型の石器であろう。表面は横方向から剥離された後、両面に細かく剥離を行なっている。						
Fig. 29-14	打製石斧	6.1	3.9	1.4	48.3	安山岩	覆土
PL. 15-2	短冊形と考えられる。刃部か基部か不明確である。表面の一部に自然面を残す。						
Fig. 29-15	打製石斧	8.8	4.8	1.7	77.8	輝石安山岩	覆土
PL. 15-2	短冊形と考えられる。中間より刃部にかけて基部の一部が欠損する。表面には自然面が残存する。						
Fig. 30-1	打製石斧	5.3	3.8	1.4	31.0	黒色頁岩	床面
PL. 15-3	中間部分から基部にかけて残存する。裏面には自然面が残る。表裏面とも横方向からの剥離後細部に調整を加えている。						
Fig. 30-2	打製石斧	5.2	3.5	1.3	32.7	砂岩	床面
PL. 15-3	中間部分から基部にかけて残存する。裏面には自然面があり、使用痕がある。表面は横方向を主に剥離痕がある。						
Fig. 30-3	剥片石器	9.0	8.0	1.7	143.3	輝緑岩	覆土
PL. 15-3	剥片の一辺に表裏両面から刃部を付けてある。自然面が表面にあり、平滑に磨っているため再利用品と考えられる。						
Fig. 30-4	磨石	13.8	6.6	4.6	590.0	石英閃緑岩	覆土
PL. 15-3	表面は僅かに叩いた状況を呈す。四面がすべて磨っている状況である。端部を欠損する。						
Fig. 30-5	磨石	11.6	8.2	4.4	665.0	輝石安山岩	床面
PL. 15-3	表裏面は僅かに叩き、磨いた状態である。両側面は叩き潰れた状況を呈す。一部に煤が付着する。						
Fig. 30-6	磨石	13.5	7.5	3.9	635.0	石英閃緑岩	覆土
PL. 15-3	表裏面には叩き、磨り減り部分がある。両側面中心部および両端部には叩き痕がある。						
Fig. 30-7	磨石	11.9	8.5	4.3	620.0	輝石安山岩	覆土
PL. 15-3	表裏両面は磨り痕、周縁部は叩き痕が見られる。						
Fig. 30-8	多孔石	25.5	19.7	13.5	9,994.0	輝石安山岩	北東pit
PL. 15-4	表裏面とも割った後に多孔を穿っている。風化が激しく自然面を思わせる表面である。						

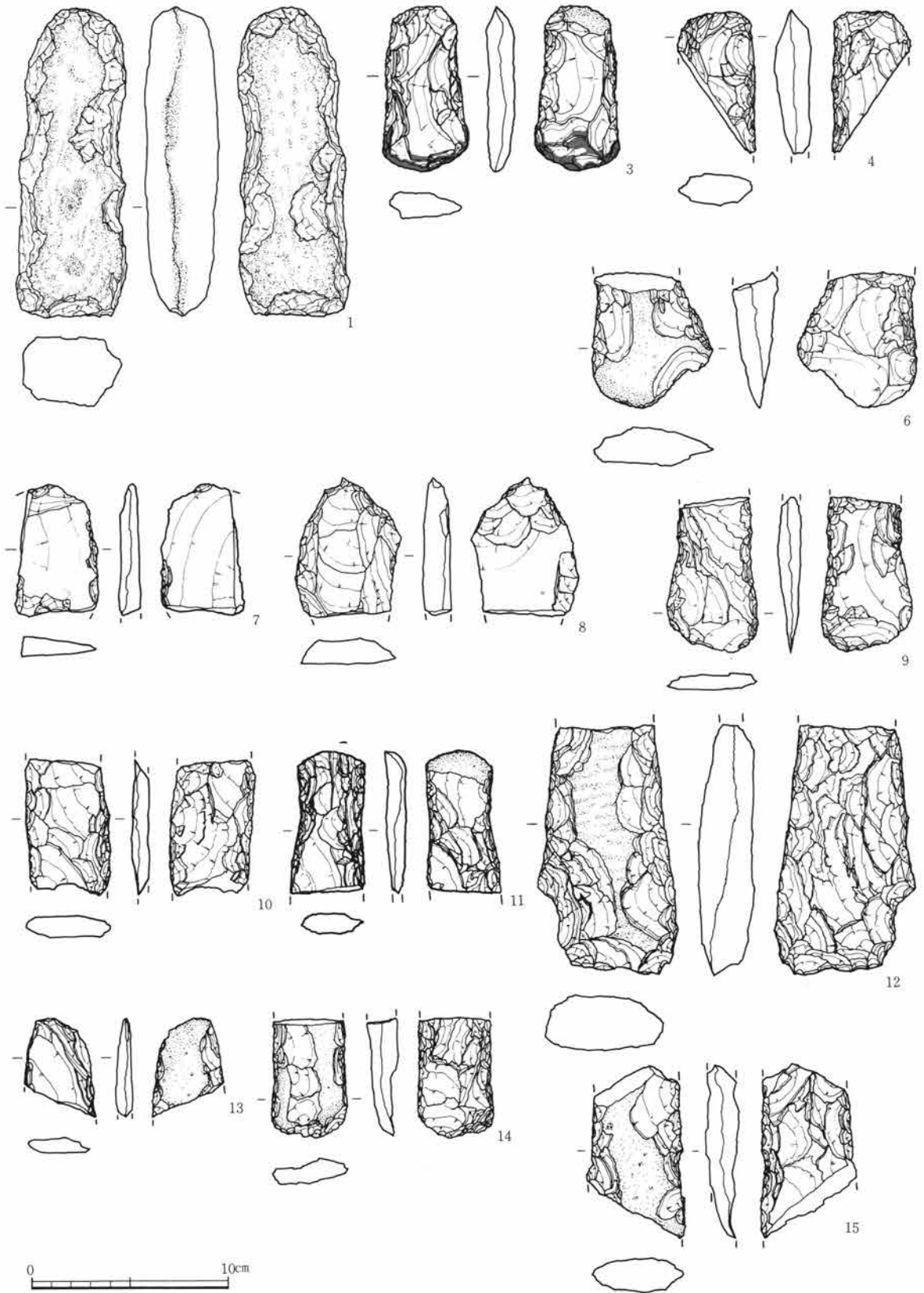


Fig. 29 13区4号住居址出土遺物実測図

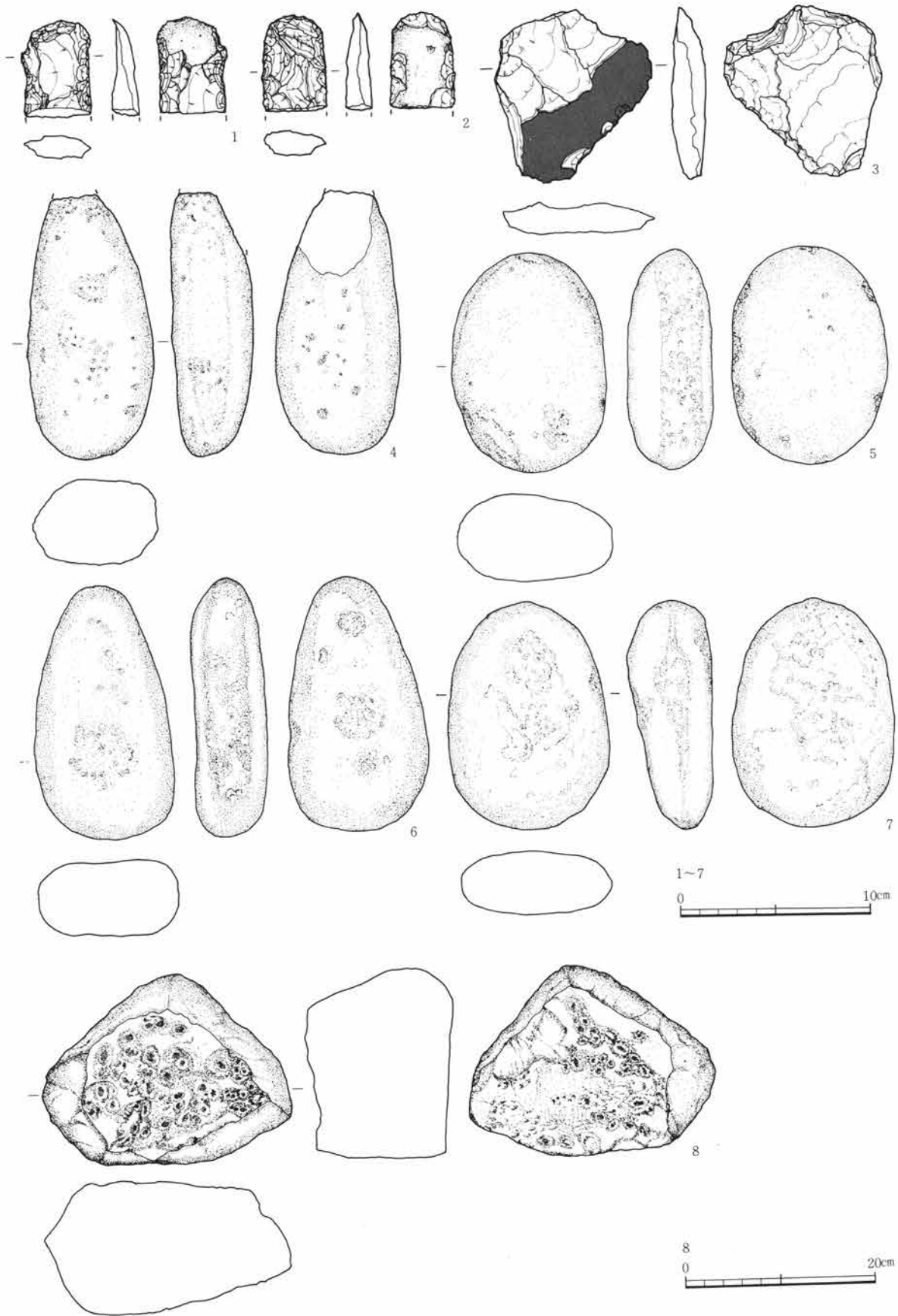
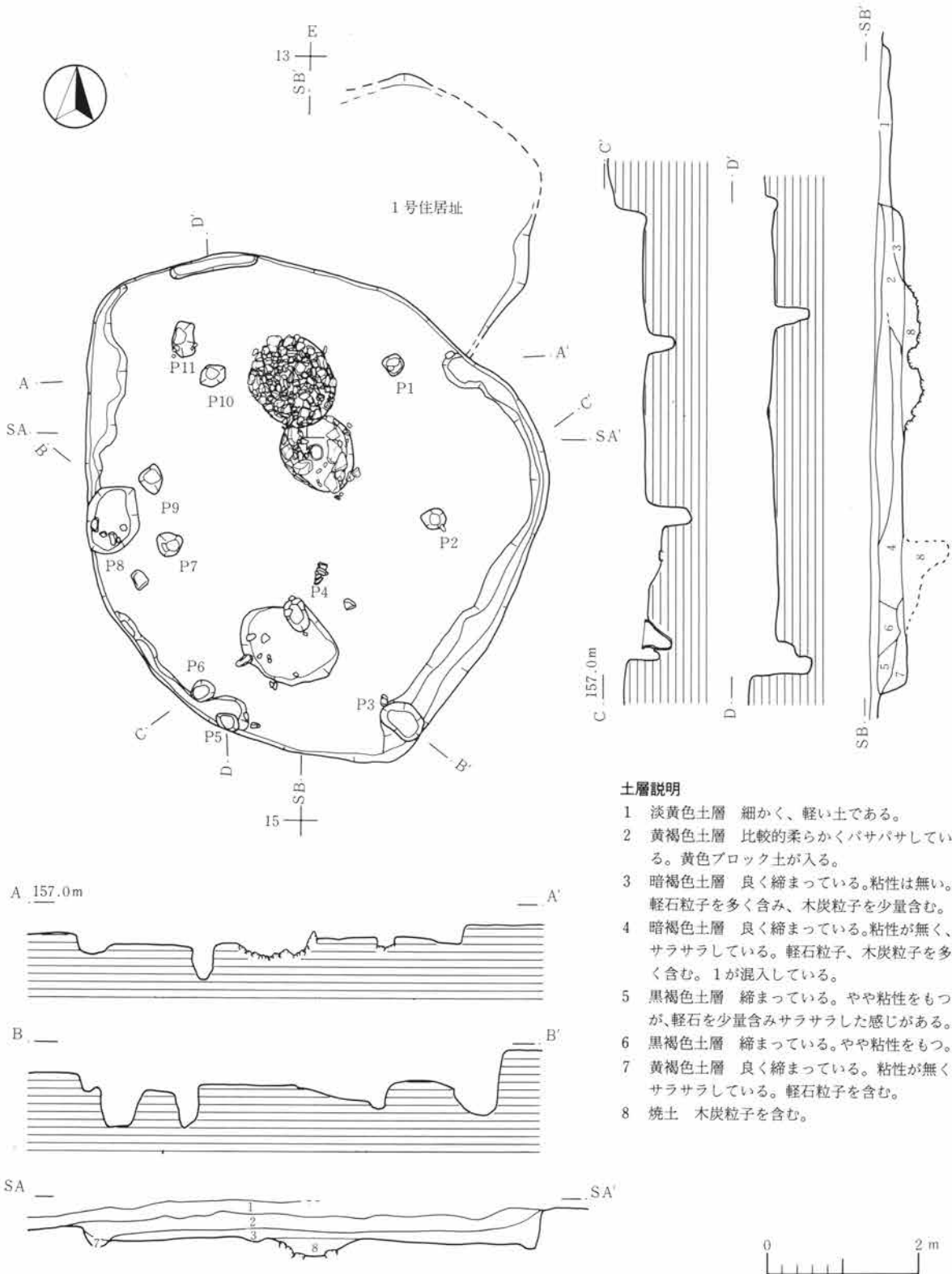


Fig. 30 13区4号住居址出土遺物実測図

13区5号住居址 (Fig. 31・32・33、PL. 16-1~5、17-1)

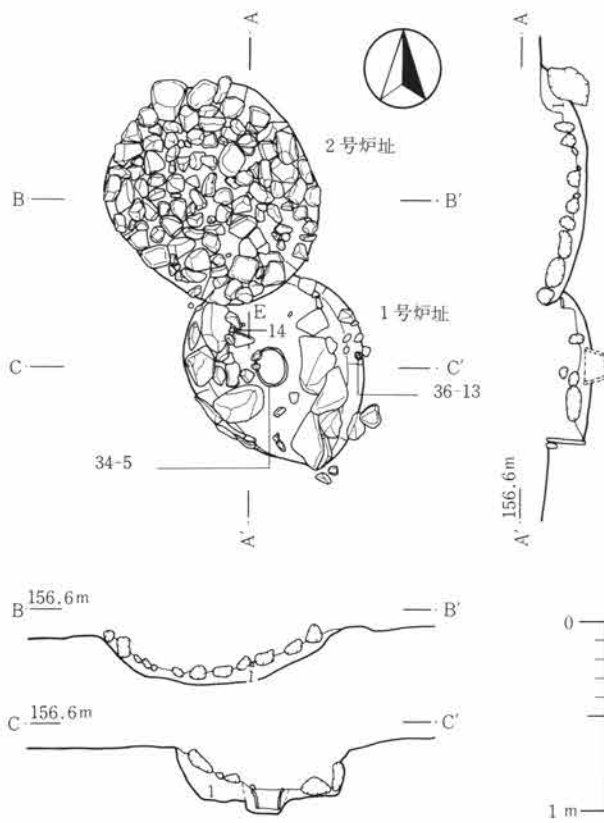
5号住居址はD・E-13・14グリッドに広がりをもつ。陣場泥流残丘上中央西側に位置し、1号住居址の南側を切っている。西側は斜面となり、土器だまりの集中地になる。住居址の形状は歪んでおり、長軸は北



土層説明

- 1 淡黄色土層 細かく、軽い土である。
- 2 黄褐色土層 比較的柔らかくパサパサしている。黄色ブロック土が入る。
- 3 暗褐色土層 良く締まっている。粘性は無い。軽石粒子を多く含み、木炭粒子を少量含む。
- 4 暗褐色土層 良く締まっている。粘性が無く、サラサラしている。軽石粒子、木炭粒子を多く含む。1が混入している。
- 5 黒褐色土層 締まっている。やや粘性をもつが、軽石を少量含みサラサラした感じがある。
- 6 黒褐色土層 締まっている。やや粘性をもつ。
- 7 黄褐色土層 良く締まっている。粘性が無くサラサラしている。軽石粒子を含む。
- 8 焼土 木炭粒子を含む。

Fig. 31 13区5号住居址実測図



土層説明

- 1 木炭粒子(1~3mmφ)を含む。上部にやや焼けた状況を呈す。
1層の下はすべてローム層

Fig. 33 13区5号住居址内1・2号炉実測図

- P 2 楕円形を呈す。長径34cm、短径30cm、深さ36cmである。
- P 3 周溝内に検出、楕円形を呈す。長径62cm、短径40cm、深さ44cmである。
- P 4 楕円形を呈す。長径30cm、短径44cm、深さ52cmである。P 4を半分ほど含み、楕円形の土坑状の遺構が南に位置する。規模は長径1.35m、短径1.04m、深さ約20cmである。
- P 5 楕円形に近似する。長径26cm、短径20cm、深さ48cmであり、周溝内に位置する。
- P 6 円形を呈す。径30cm、深さ34cm、埋設土器を伴う。
- P 7 円形に近似する。長径38cm、短径30cm、深さ40cmである。
- P 8 壁際にある落ち込みである。長径96cm、短径76cm、深さ50cmである。
- P 9 歪んだ円形を呈す。長径38cm、短径30cm、深さ13cmである。
- P 10 円形に近似する。長径32cm、短径28cm、深さ12cmである。
- P 11 楕円形を呈す。長径52cm、短径30cm、深さ33cmである。

13区5号住居址出土遺物一覧表(土器)

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 34-1	深鉢・口・胴部	埋壘 Pit 6 出土	白色鉱物混入	橙	RL	VI-2	
PL. 17-2	キャリバー形を呈する大型の深鉢である。口縁部に太い沈線と平面的な隆帯により渦巻及び楕円が描かれ、楕円区画内には主として縦位に又、部分的に横位施文した縄文が地文となる。胴部に沈線による懸垂文をもち内部を磨消する。地文に縄文が施される。						
Fig. 34-2	深鉢・口・胴部	覆土	夾雑鉱物混入	明赤褐	RL・LR	VI-1	土器だまりD・E-14Gr III-3層と接合
PL. 17-3	ややキャリバー形が崩れた深鉢である。口縁部に太い沈線と平面的な隆帯により、渦巻及び楕円が描かれ、楕円区画内には燃りの異なる2種類の縄文が地文となる。胴部は沈線による懸垂文をもち、地文に縄文が施される。						
Fig. 34-3	深鉢・底部	覆土	小礫混入	橙	RL	VI~VII	
PL. 17-4	胴部に沈線による懸垂文をもち、内部を磨消する。地文には縄文が施される。						
Fig. 34-4	深鉢・胴部	覆土	白色鉱物混入	赤	LR	III-2	
PL. 18-2	胴部のふくらむ深鉢である。胴部には先端に小さな渦巻をもつ隆帯で大きな渦巻を描き、地文には縄文が施される。						

13区5号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 34-5	深鉢・胴部	1号炉址内埋設土器	雲母・礫混入	橙	RL	VI~VII	
PL. 18-3	キャリパー形を呈する深鉢である。口縁部文様下部に太い平行沈線を巡らせ胴部に沈線による懸垂文をもち内部を磨消す。地文には縄文が施される。						
Fig. 34-6	深鉢・口・胴部	床面・覆土	小礫混入	赤	RL	VI-2	
PL. 18-1	口縁部がやや内反し、頸部に孔を有する隆帯による鏝をもち、胴部が強くふくらむ浅鉢となる有孔鏝付き土器である。口縁部は無文で、胴部には地文として細かい縄文が施され、さらに太い沈線による曲線が描かれ、その内部を磨消し無文部を造る。なおこれら口縁部、鏝部、胴部の無文部分には、朱彩した痕跡が認められる。						
Fig. 34-7	浅鉢・口・胴部	覆土	白色鉱物混入	浅黄橙		IV~V	
PL. 18-1	口縁部が開き、頸部がくびれ、胴部のややふくらむ無文の浅鉢である。						
Fig. 34-8	深鉢・胴部	覆土	小礫混入	にぶい黄橙	燃糸文	III-1	
PL. 18-1	胴部に渦巻をもつ隆帯を施し、地文に燃糸文を施す。						
Fig. 34-9	深鉢・胴部	床面・炉址・覆土	小礫混入	橙	燃糸文	IV~V	
PL. 18-1	胴部に隆帯による懸垂文をもち、地文に燃糸文を施す。						
Fig. 34-10	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	橙	RL	V	
PL. 18-1	口縁部に隆帯と沈線により渦巻等の文様を描き、その区画内に縄文を施す。						
Fig. 34-11	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	にぶい橙	RL	VI-1	
PL. 18-1	口縁部に隆帯と沈線により渦巻等の文様を描き、その区画内に縄文を施す。						
Fig. 34-12	深鉢・胴部	覆土	白色鉱物混入	橙		VI-1	
PL. 18-1	胴部に沈線による懸垂文をもつ。また縦位に矢羽状の斜行沈線を施す。						
Fig. 34-13	深鉢・胴部	1号炉址・覆土	夾雑物混入	にぶい橙		VI-1	
PL. 18-1	胴部に沈線による懸垂文をもつ。また縦位に矢羽状の斜行沈線を施す。						
Fig. 34-14	深鉢・胴部	覆土	雲母・礫混入	にぶい橙		VI-1	
PL. 18-1	胴部に沈線による懸垂文をもつ。また縦位に矢羽状の斜行沈線を施す。						
Fig. 34-15	深鉢・胴部	1号炉址・覆土	白色鉱物混入	にぶい橙		VI-1	
PL. 18-1	胴部に沈線による懸垂文をもつ。また縦位に矢羽状の斜行沈線を施す。						
Fig. 34-16	深鉢・胴部	覆土	白色鉱物混入	橙		VI-1	
PL. 18-1	胴部は縦位に矢羽状の斜行沈線を施す。						
Fig. 34-17	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	にぶい橙		V	
PL. 18-1	口縁部に沈線による重弧文を描く。						

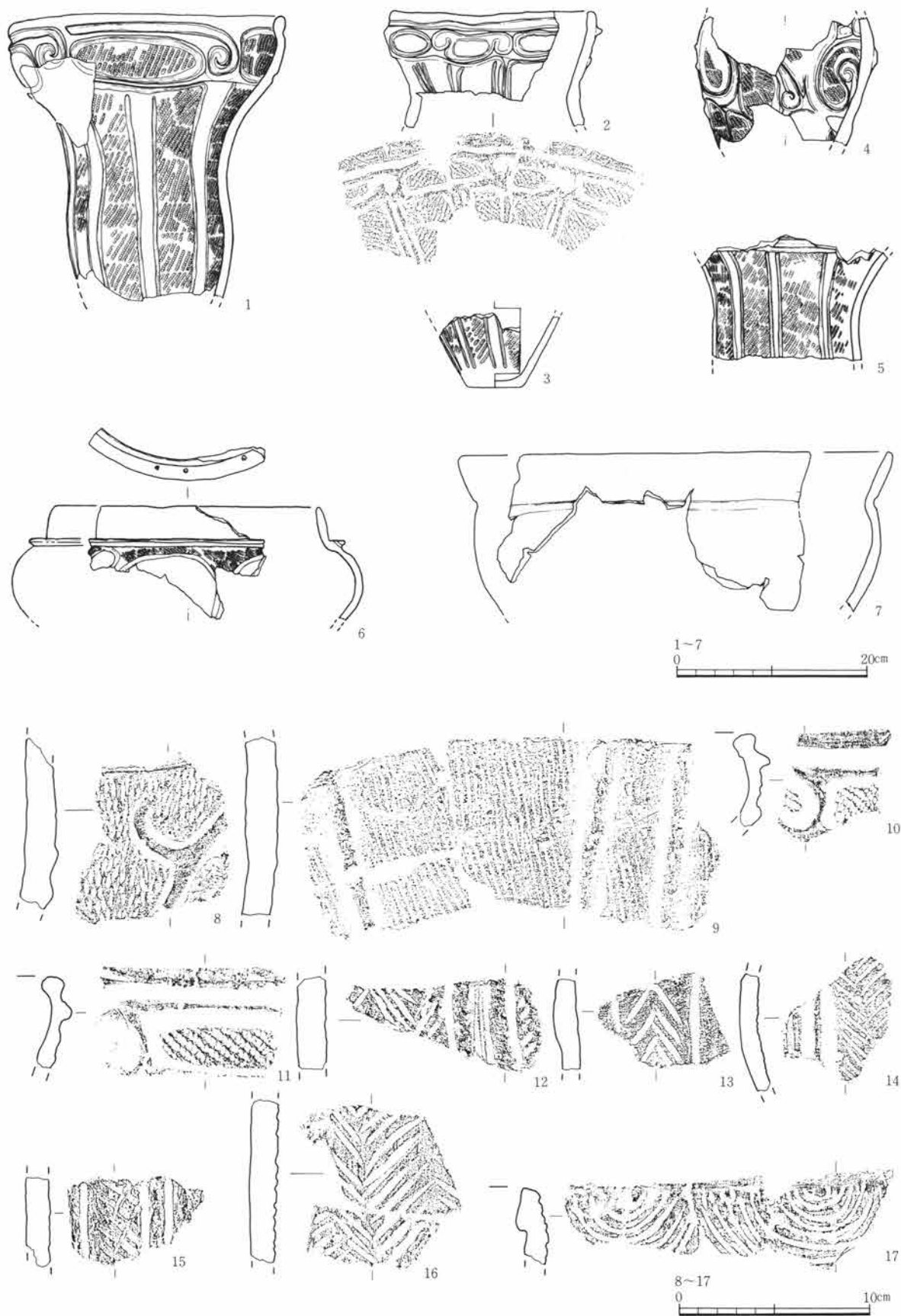


Fig. 34 13区5号住居址出土遺物実測図

13区5号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 35-1	深鉢・口縁部	覆土	夾雑鉱物混入	灰褐色	RL	VI-1	
PL. 18-4	口縁部に隆帯及び沈線により円形楕円等が描かれ、区画内に縄文を施す。胴部には内部磨消となる懸垂文をもち、地文に縄文を施す。						
Fig. 35-2	深鉢・肩部	覆土	白色鉱物混入	にぶい橙	RL		
PL. 18-4	口縁部に隆帯及び沈線により文様を描き、胴部には懸垂文をもち、地文には縄文を施す。						
Fig. 35-3	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	橙	RL	VI-1	
PL. 18-4	口縁部に隆帯及び沈線により渦巻等の文様を描き、区画内に縄文を施す。						
Fig. 35-4	深鉢・口縁部	覆土	白粒・礫混入	暗赤褐色	RL	VI-1	
PL. 18-4	口縁部に隆帯及び沈線により渦巻、楕円等が描かれ、区画内に縄文を施す。胴部には内部磨消となる懸垂文をもち、地文に縄文を施す。						
Fig. 35-5	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	橙	LR	VI-1	
PL. 18-4	口縁部に隆帯及び沈線により渦巻、楕円等が描かれ、区画内に縄文を施す。胴部には内部磨消となる懸垂文をもち、地文に縄文を施す。						
Fig. 35-6	深鉢・口縁部	覆土	黒色鉱物混入	にぶい橙	LRL	VI-1	
PL. 18-4	口縁部に隆帯及び沈線により渦巻、楕円等が描かれ、区画内に縄文を施す。胴部には内部磨消となる懸垂文をもち、地文に縄文を施す。						
Fig. 35-7	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	にぶい赤褐色	RL	VII	
PL. 18-4	口縁部に隆帯及び沈線により文様を描き、胴部には内部磨消となる懸垂文、蛇行する懸垂文をもち、地文に縄文を施す。						
Fig. 35-8	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	にぶい橙	RL	VII	
PL. 18-4	口縁部が小波状となり、口縁部に隆帯及び沈線により渦巻、楕円等が描かれ、区画内に縄文を施す。胴部は懸垂文をもち、地文に縄文を施す。						
Fig. 35-9	深鉢・口縁部	1号炉址・覆土	小礫少数混入	にぶい橙		VII	
PL. 18-4	口辺が隆帯のため肥大し、口縁部には先端に渦巻をもつ沈線が施文され、沈線区画内に円形刺突が施される。						
Fig. 35-10	深鉢・胴部	覆土	白粒・礫混入	橙	燃糸文	VI~VII	
PL. 18-4	胴部に内部磨消となる懸垂文をもち、地文に細い燃糸文を施す。						
Fig. 35-11	深鉢・胴部	覆土	夾雑鉱物混入	にぶい橙	燃糸文	VI-2	
PL. 18-4	胴部には平行沈線を巡らせ、その上下に平行沈線を波状に描き、地文には細い燃糸文を施す。						
Fig. 35-12	深鉢・胴部	覆土	雲母・礫混入	橙	燃糸文	VI-1	
PL. 18-4	胴部に3条の沈線による連弧文を、またその下に沈線を巡らせ、地文には細い燃糸文を施す。						
Fig. 36-1	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	暗赤褐色	燃糸文	VII	
PL. 19-1	口縁部に円形刺突及び沈線が巡らされ、以下には細い燃糸文を施す。						



Fig. 35 13区5号住居址出土遺物実測図

13区5号住居址出土遺物一覧表(土器)

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 36-2	深鉢・胴部	覆土	白色鉱物混入	橙	燃糸文	VI-1	
PL. 19-1	胴部に3条の沈線による連弧文が描かれ、地文には燃糸文を施す。						
Fig. 36-3	深鉢・胴部	覆土	砂質	にぶい褐	RL	V	
PL. 19-1	胴部に沈線及び先端が渦巻となる沈線により曲線的な文様が描かれ、地文には縄文を施すが、部分的に磨消する。						
Fig. 36-4	深鉢・胴部	覆土	雲母・礫混入	にぶい橙	燃糸文	VII	
PL. 19-1	胴部に先端が渦巻となる沈線等により曲線的な文様が描かれ、地文には燃糸文を施すが、部分的に磨消する。						
Fig. 36-5	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	灰褐	RL	VII	
PL. 19-1	波状となる口縁部に沈線により文様を描き、区画的に縄文を施す。						
Fig. 36-6	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	にぶい橙	RL	VII	
PL. 19-1	波状となる口縁部に沈線による渦巻等の文様を描き、区画内に縄文を施す。						
Fig. 36-7	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	にぶい橙		VII	
PL. 19-1	波状となる口縁部に沈線及び隆帯により渦巻等の文様を描く。						
Fig. 36-8	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	極暗褐	RL	VII	
PL. 19-1	口縁部に沈線による円形等の文様を描き、区画内に縄文を施す。						
Fig. 36-9	深鉢・胴部	覆土	白色鉱物混入	にぶい黄橙	RL	VI~VII	土器だまりE-14Grと接合
PL. 19-1	胴部に内部磨消となる懸垂文をもち、地文に縄文を施す。						
Fig. 36-10	深鉢・口縁部	覆土	小礫少数混入	にぶい褐	RL	VII	
PL. 19-1	口縁部が無文となり2条の沈線が巡り、以下に縄文を施す。						
Fig. 36-11	深鉢・口縁部	覆土	雲母・礫混入	にぶい黄橙	RL	VIII	
PL. 19-1	口縁部が無文となり微隆帯が巡り、以下に縄文を施す。						
Fig. 36-12	土錘(完形)	覆土	白色鉱物混入	暗赤褐			
PL. 19-2	径約2.3cm、厚さ1.0cm、重さ7.23gである。						
Fig. 36-13	耳栓	覆土	白色鉱物混入	にぶい橙			
PL. 19-3	表裏面に沈線による渦巻をもつ。重さは14.1gである。						

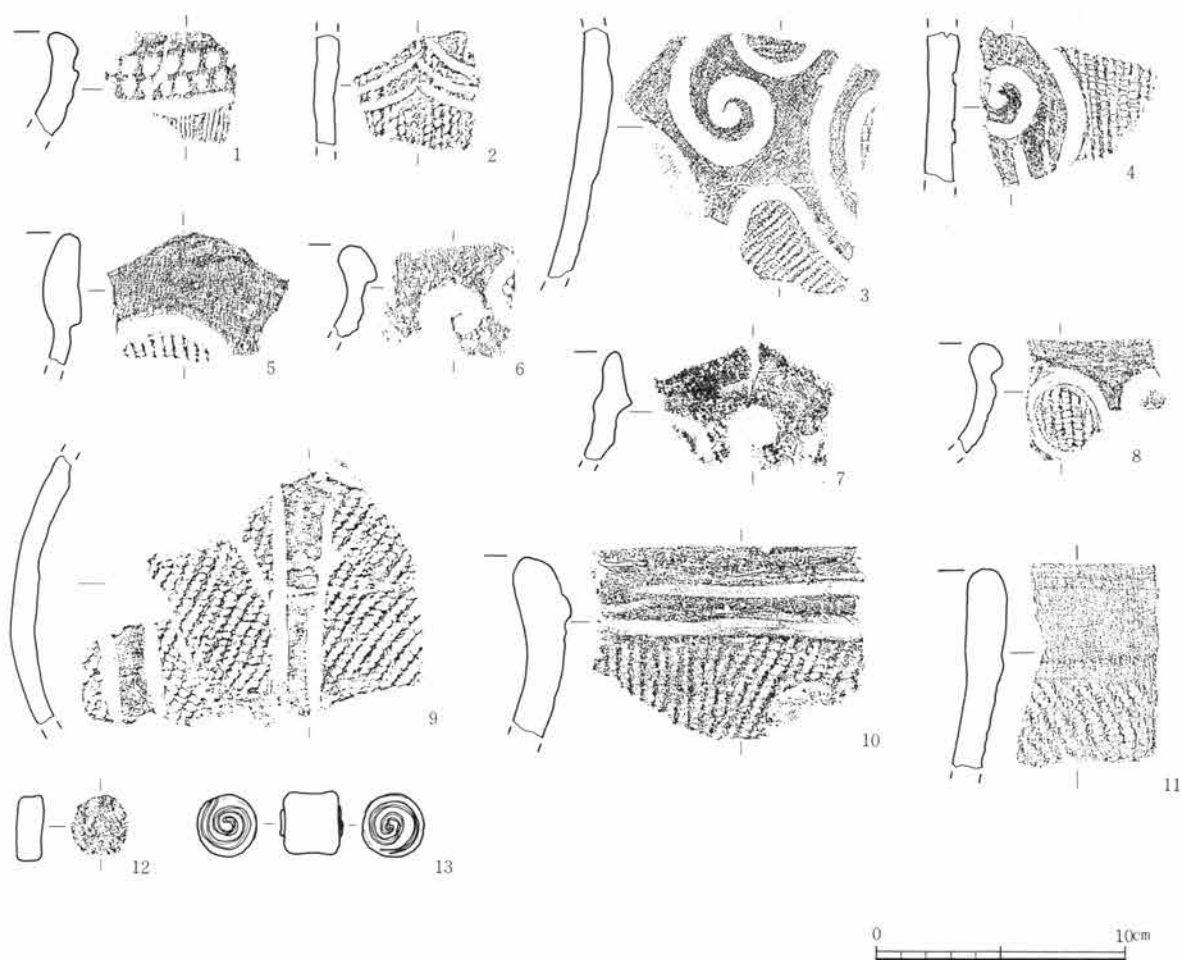


Fig. 36 13区5号住居址出土遺物実測図

13区5号住居址出土遺物一覧表 (石器)

挿図番号	石器の種類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	出土位置
Fig. 37-1	打製石斧	15.5	6.0	2.5	270.0	輝緑岩	13区D-13Grid 住居址外出土
PL. 19-4	表面は自然面を残す。表裏面は横方向からの剥離を行なった後、細かい剥離を行なっている。基部には自然面が残る。						
Fig. 37-2	打製石斧	11.2	3.8	1.4	50.1	黒色頁岩	13区D-13Grid 住居址外出土
PL. 19-4	表裏面とも横方向からの剥離後、側面を細かく剥離している。刃部は使用による磨滅が一部に認められる。						
Fig. 37-3	打製石斧	10.8	3.6	2.1	96.2	黒色頁岩	覆土
PL. 19-4	短冊形を呈す。刃部と基部の一部を欠損する。欠損部分は使用時におけるものと考えられる。裏面には自然面が中央部分に一部残る。						
Fig. 37-4	打製石斧	(14.5)	5.9	1.9	249.2	輝緑岩	覆土
PL. 19-4	基部を欠損する。表裏面とも横方向からの剥離後、細かく各側面を剥離している。裏面には自然面が残る。						

13区5号住居址出土遺物一覧表(石器)

挿図番号	石器の種類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	出土位置
図版番号	説明						
Fig. 37-5	打製石斧	(10.5)	5.3	1.5	106.2	黒色頁岩	覆土
PL. 19-4	短冊形を呈す。基部を欠損する。表裏面とも横方向からの剝離を行なっている。刃部は丸味をもち僅かに磨れている。						
Fig. 37-6	打製石斧	9.4	4.6	1.9	94.8	黒色頁岩	覆土
PL. 19-4	短冊形と考えられる。表裏面とも横方向からの剝離を行なっている。表面には自然面を残す。						
Fig. 37-7	打製石斧	8.2	3.6	1.4	45.9	黒色安山岩	覆土
PL. 19-4	小型の短冊形石斧である。横方向からの剝離であり、各辺に細かな剝離を入れる。断面は三角形を呈す。						
Fig. 37-8	打製石斧	(9.2)	4.4	2.1	113.6	黒色頁岩	13区D-13Grid住居址外出土
PL. 19-4	短冊形と考えられる。中間部から刃部にかけて欠損している。表裏面とも横方向から、基部は縦方向から剝離。						
Fig. 37-9	打製石斧	(13.4)	5.9	2.1	269.0	輝緑岩	覆土
PL. 19-4	短冊形になると思われる。刃部と基部が欠損している。表裏面とも横方向からの剝離。裏面には自然面が残る。						
Fig. 37-10	打製石斧	(8.3)	3.9	1.2	48.9	黒色頁岩	覆土
PL. 19-4	短冊形と考えられる。中間部から基部にかけて欠損する。表裏面とも横方向、刃部は一部縦方向の剝離。磨耗痕がある。						
Fig. 37-11	打製石斧	(7.8)	4.1	1.7	64.8	黒色頁岩	13区D-13Grid住居址外出土
PL. 19-4	短冊形と考えられる。刃部と基部が欠損している。横方向からの剝離後細かい剝離を側辺部に行なっている。						
Fig. 37-12	打製石斧	(7.7)	4.2	1.5	74.3	安山岩	覆土
PL. 19-4	短冊形と考えられる。刃部と基部を欠損している。横方向からの剝離がみられる。刃部寄り部分に磨耗痕が観察される。						
Fig. 37-13	打製石斧	(7.0)	4.2	1.1	52.4	砂岩	覆土
PL. 19-4	短冊形と考えられる。中間部から基部と刃部の一部が欠損する。表面には自然面が残り、裏面は横方向の剝離がある。						
Fig. 37-14	打製石斧	(7.7)	4.1	1.5	69.5	黒色頁岩	床面
PL. 19-4	短冊形と考えられる。中間部から刃部が欠損する。基部には自然面が残る。表裏面とも横方向の剝離を行なっている。						
Fig. 38-1	打製石斧	(8.0)	5.2	1.5	89.2	黒色頁岩	覆土
PL. 19-5	刃部および基部を欠損する。表面は横方向からの剝離を行ない、裏面は自然面が残る。自然面には使用痕がある。						
Fig. 38-2	打製石斧	(5.3)	5.0	1.8	68.2	安山岩	覆土
PL. 19-5	刃部付近のみ残存する。表面は自然面が残る。刃部は使用時に刃毀れが生じている。						
Fig. 38-3	打製石斧	(4.2)	5.2	1.1	36.8	安山岩	覆土
PL. 19-5	刃部付近のみ残存する。表裏とも刃部は磨り減っている様相がある。						
Fig. 38-4	剝片石器	(8.0)	3.6	1.3	37.7	黒色頁岩	覆土
PL. 19-5	剝片を利用し、右側縁部は両面から、左側縁部は裏面から調整した石器である。						

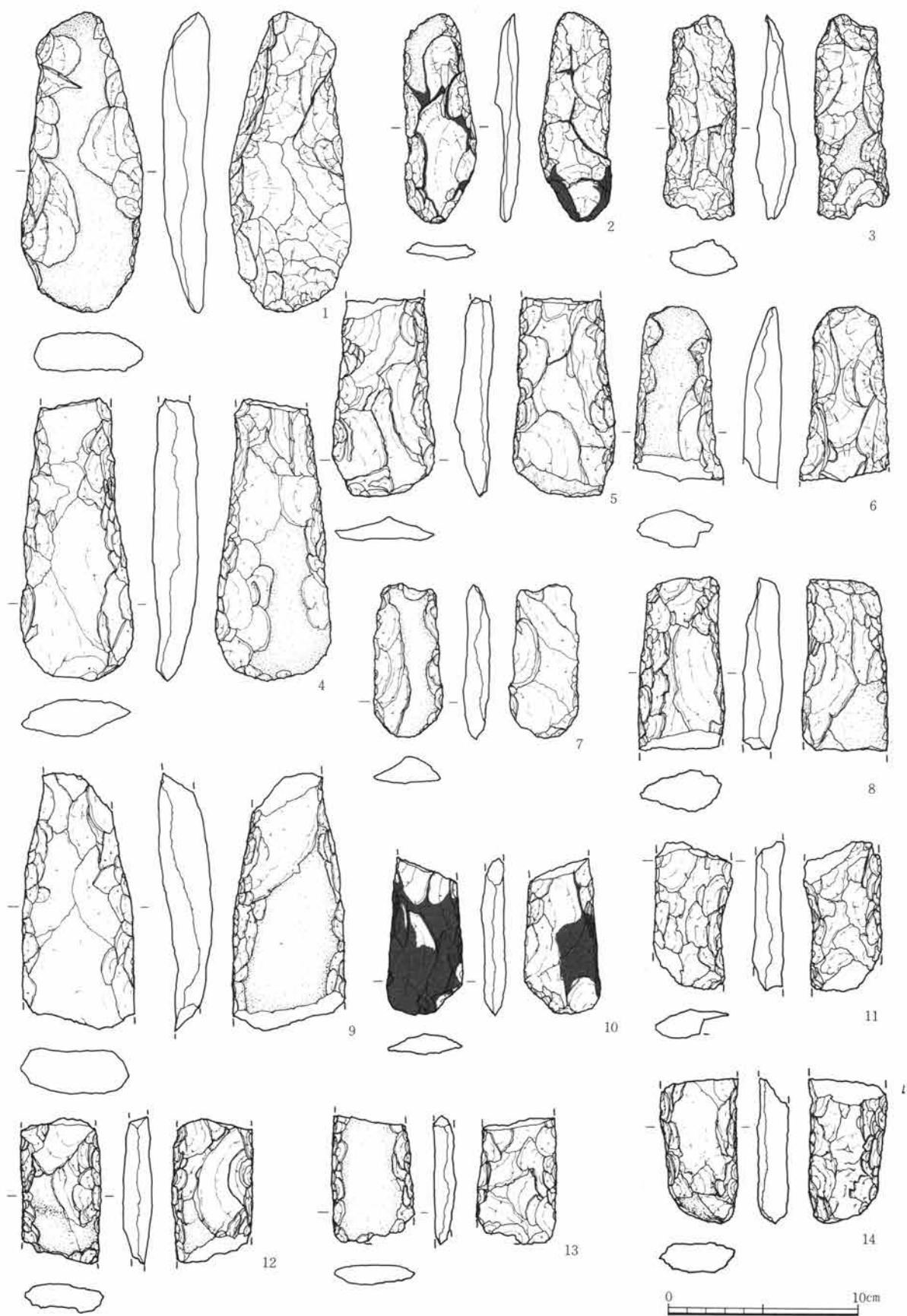


Fig. 37 13区5号住居址出土遺物実測図

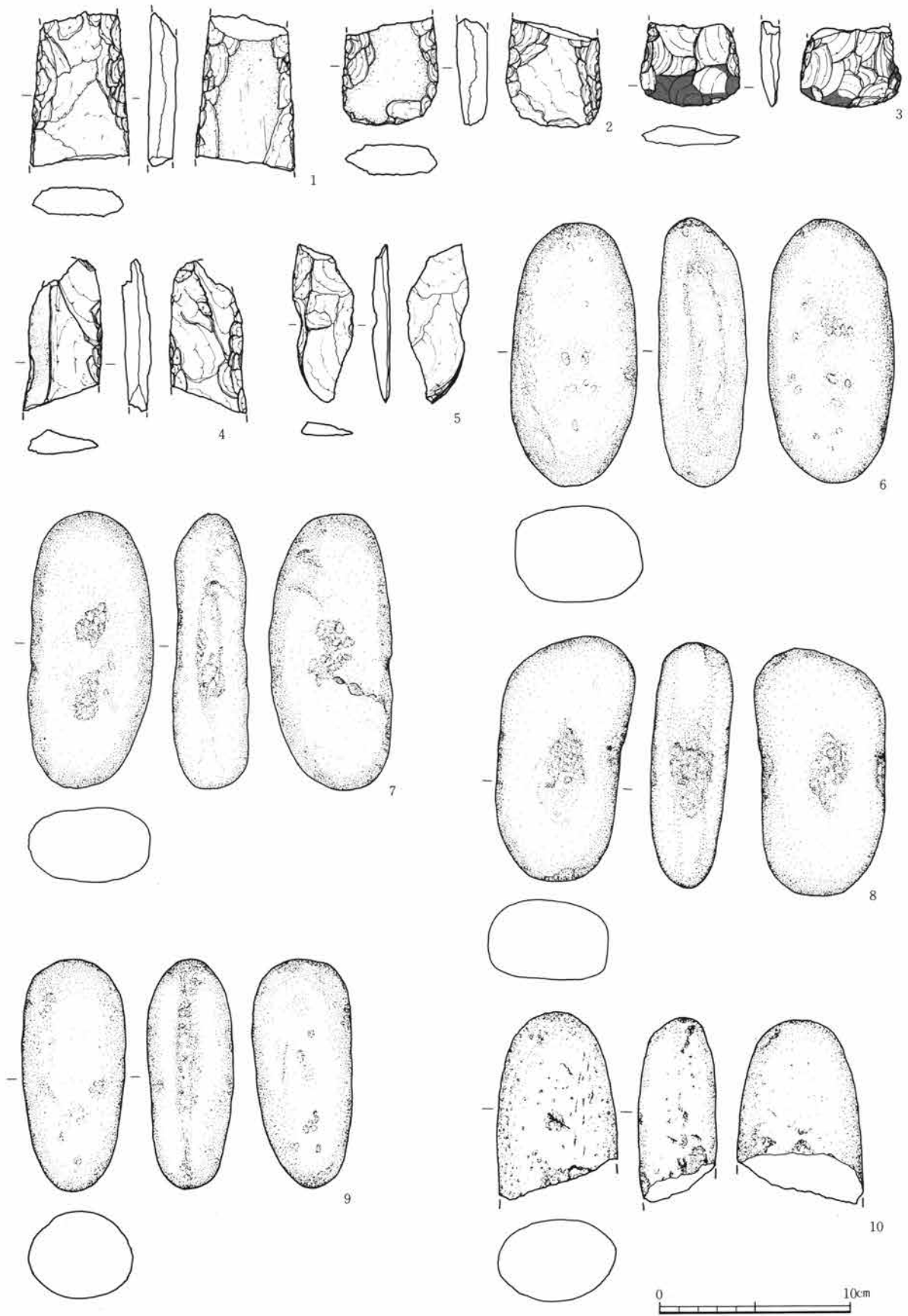


Fig. 38 13区5号住居址出土遺物実測図

13区5号住居址出土遺物一覧表（石器）

挿図番号	石器の種類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	出土位置
図版番号	説明						
Fig. 38-5	剥片石器	8.3	3.1	3.5	20.1	黒色頁岩	覆土
PL. 19-5	剥片を利用した石器であり、一边は細かな調整を表裏面に行なっている。						
Fig. 38-6	磨石	14.0	6.6	4.9	682.0	輝石安山岩	覆土
PL. 19-5	表裏面および両側面を磨っている。上下両端部は僅かに叩いて潰れている。						
Fig. 38-7	磨石	14.4	6.4	3.1	580.0	ひん岩	覆土
PL. 19-5	表裏面と両側縁部は叩き痕と磨り痕が一部で見られる。						
Fig. 38-8	磨石	12.9	6.8	4.3	620.0	石英閃緑岩	覆土
PL. 19-5	表裏面は僅かに叩き、磨っている。両側面と両端面中央には叩き痕がある。						
Fig. 38-9	磨石	12.0	5.4	4.5	470.0	輝石安山岩	覆土
PL. 19-5	表裏面は僅かに磨り痕、両端部は僅かに叩き痕が見られる。						
Fig. 38-10	磨石	(9.5)	6.4	4.3	350.0	溶結凝灰岩	覆土
PL. 19-5	表裏面は叩き痕と磨った状況が観察できる。両側面と端面は叩いた状態である。						
Fig. 39-1	石皿	(32.5)	23.0	6.2	6,000.0	輝石安山岩	覆土
PL. 19-6	3分の1ほど欠損する。内面底部は緩やかな曲面を呈す。外面底部は平滑にして安定感がある。						
Fig. 39-2	多孔石	(13.7)	(13.5)	8.0	1,390.0	輝石安山岩	覆土
PL. 19-7	破片であり全体の大きさを推測することは不可能である。表裏両面に凹穴がある。						

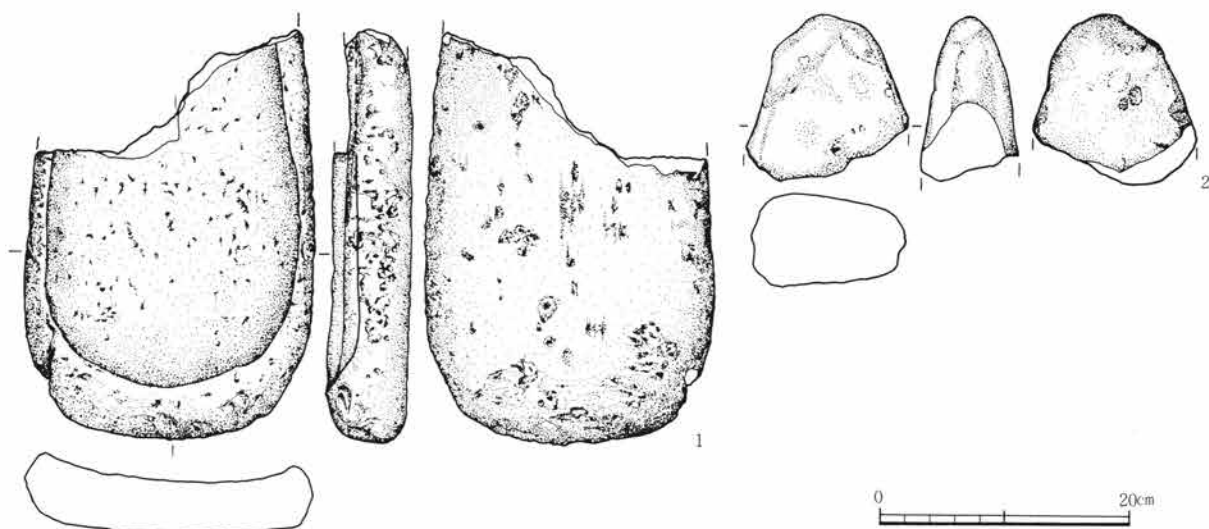


Fig. 39 13区5号住居址出土遺物実測図

13区6号住居址 (Fig. 40・41, PL. 20-1・2・3)

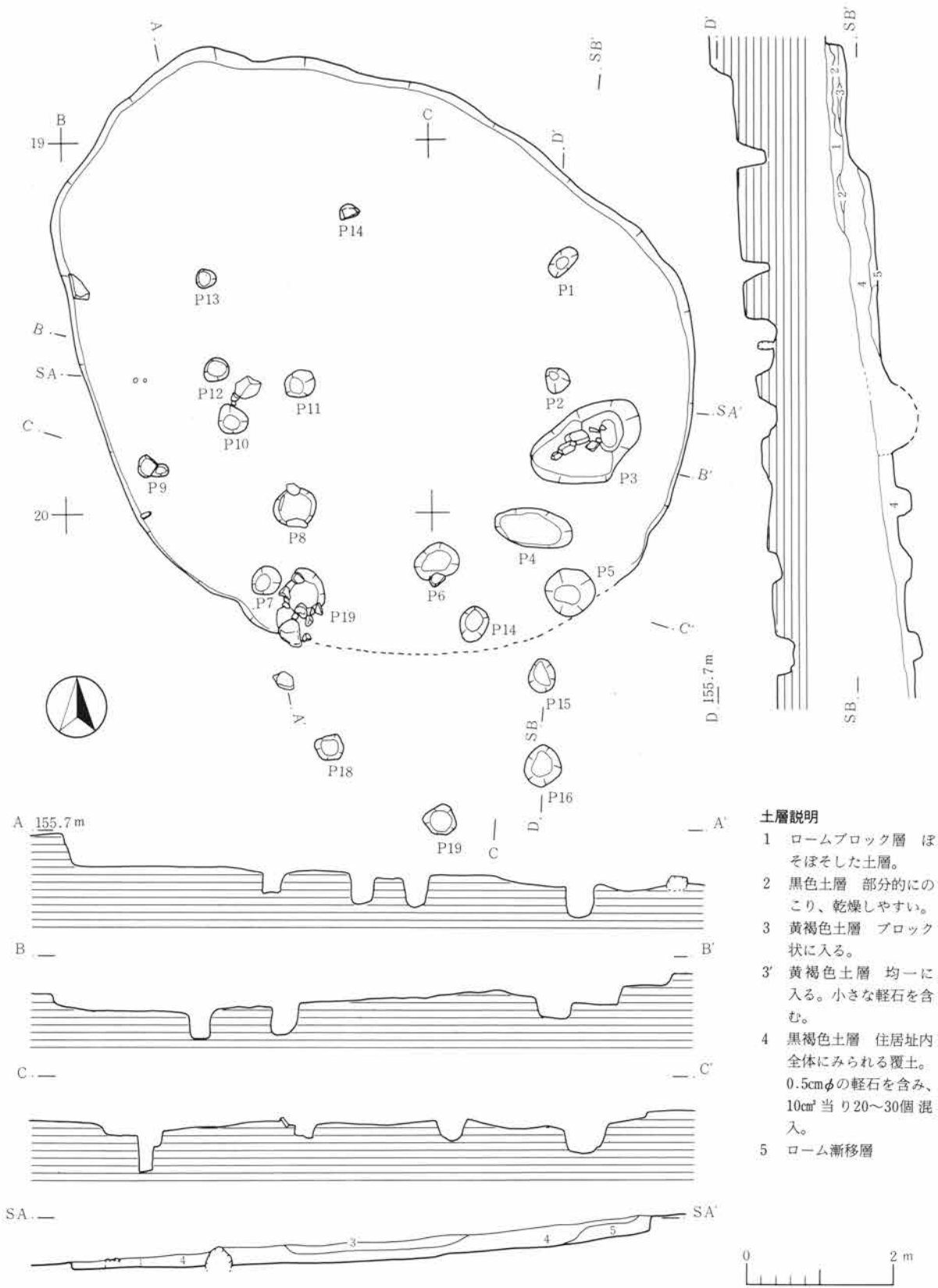


Fig. 40 13区6号住居址実測図

第3章 各 説

6号住居址はA-19、B・C-18・19・20グリッドに広がりを持ち、陣場泥流残丘南西斜面の中ごろに位置している。住居址は楕円形を呈しており長径約9.4m、短径約7.45m、深さ約45cmである。西側には土器だまりが近接しており大小の角礫や土器、石器等が出土している。南側の壁は未検出である。住居址内の覆土は陣場泥流丘を構成している。土砂やローム層の二次堆積からの埋土であり、南壁部分の把握は困難であった。柱穴は19個確認でき、住居址外から4個を含めて測定してある。床面はほぼ平坦であるが、南側は僅かに下がる傾向にある。20ライン以南は調査以前に削られた可能性がある。床面の施設には柱穴と思われる穴の他は無く、焼土も未検出であった。柱穴は住居址プランの内側を弧状に巡るが、一部の柱穴は南側で壁際にある。それぞれの柱穴の規模は次の通り表に記した。

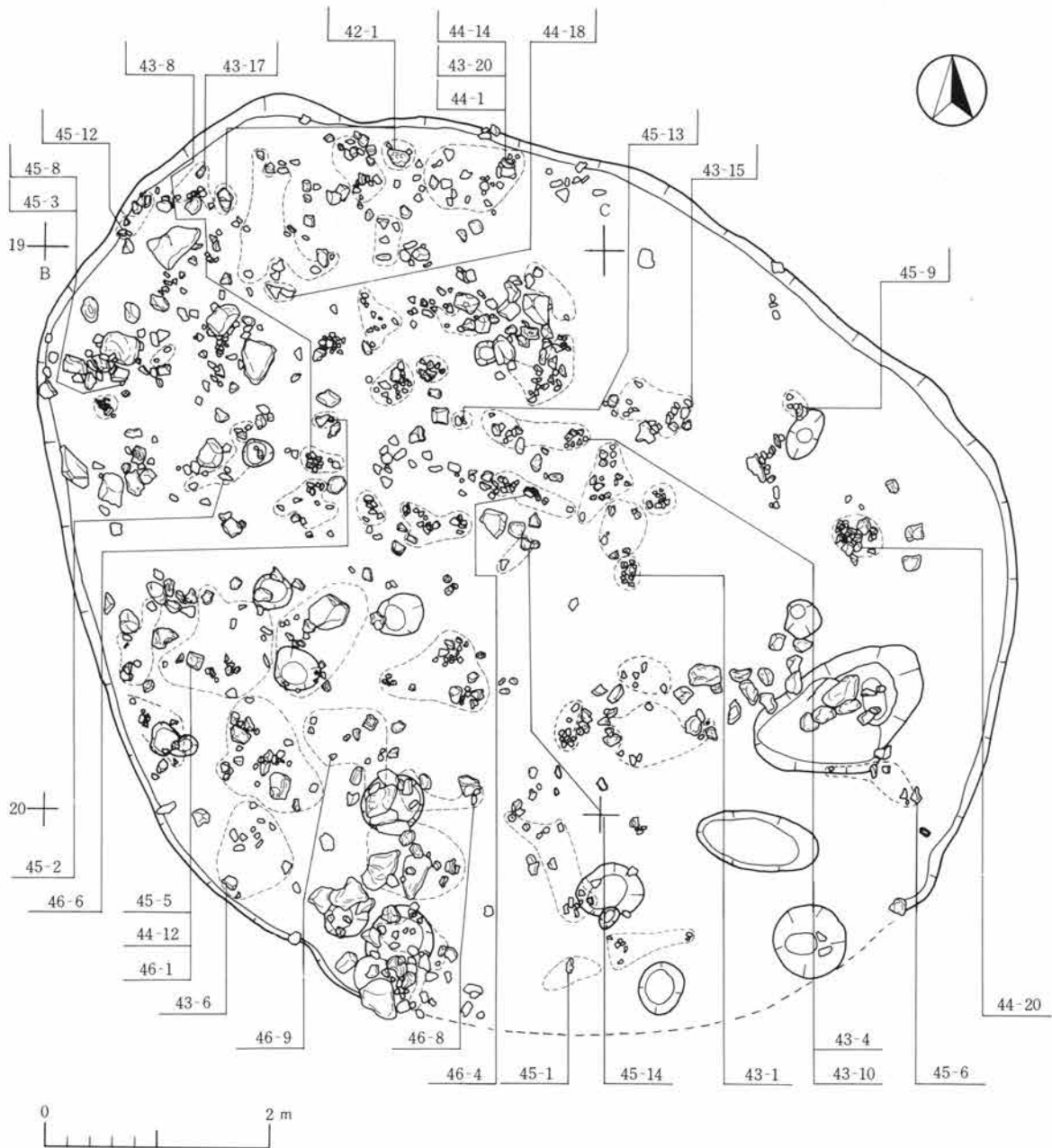


Fig. 41 13区6号住居址遺物出土状況図

13区6号住居址柱穴の規模

柱穴名 規模cm	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10
長軸×短軸	48×28	36×32	160×108	108×56	70×64	60×60	40×40	60×60	44×32	40×40
深さ	40	36	56	24	38	26	44	24	52	38

柱穴名 規模cm	P 11	P 12	P 13	P 14	P 15	P 16	P 17	P 18	P 19
長軸×短軸	42×36	36×30	26×26	48×40	50×40	58×54	49×45	41×35	62×42
深さ	40	36	26	18	18	26	38	45	14

13区6号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 42-1	深鉢・口・胴部	床面・覆土	白粒・礫混入	にぶい橙	RL	IV	
PL. 20-4	キャリバー形を呈する大型の深鉢である。口縁部は隆帯による二重口縁となり、渦巻及び楕円等の文様が施され、区画内には縄文が施される。頸部は幅広の無文帯となり、胴部にも隆帯が施文される。						
Fig. 42-2	深鉢・口縁部	B・C-18・19 III-3層	白色鉾物混入	明赤褐		V	住居址外出土
PL. 20-4	口縁部は隆帯による二重口縁ならびに小突起をもち、楕円区画内には縦位の沈線及び渦巻が施文される。						
Fig. 43-1	深鉢・口縁部	覆土	白色鉾物混入	橙	RL	VI	
PL. 21-1	口縁部に隆帯による文様が施され、地文に縄文が施される。また各部位を区画する隆帯が巡らされ、頸部は広い無文帯。						
Fig. 43-2	深鉢・口縁部	床面	白色鉾物混入	赤褐	RL	VI-1	
PL. 21-1	口縁部に隆帯及び沈線による渦巻、楕円等が描かれ、区画内には縄文を施す。						

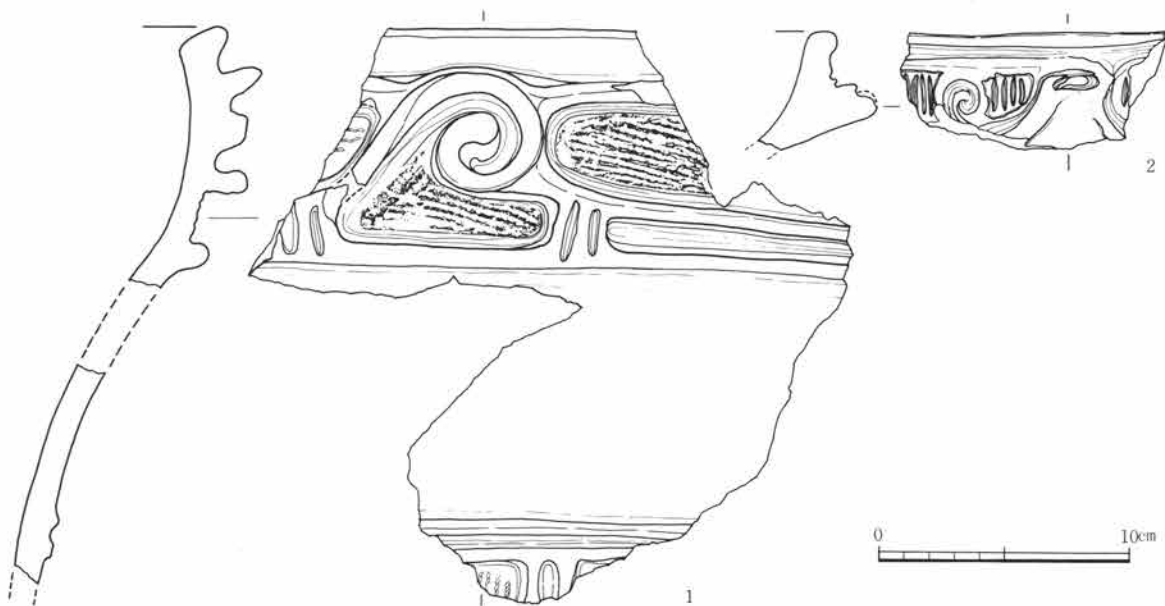


Fig. 42 13区6号住居址出土遺物実測図

13区6号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説 明						
Fig. 43-3	深鉢・口縁部	床 面	白色鈳物混入	赤 褐	不 明	VI-1	
PL. 21-1	口縁部に隆帯による渦巻等の文様が描かれ、胴部には沈線による懸垂文をもつ。地文に縄文を施す。						
Fig. 43-4	深鉢・口縁部	床 面	白色鈳物混入	橙	RL	V	
PL. 21-1	口縁部は隆帯により小突起状となり、突起部に渦巻が描かれる。また口縁部に描かれた文様の区画内には縦位の沈線が施され、胴部には縄文を施す。						
Fig. 43-6	深鉢・口縁部	覆 土	石英混入	橙	RL	VI	
PL. 21-1	口縁部に平行沈線が2条巡らされ、また弧状の沈線が描かれる。地文に縄文を施す。						
Fig. 43-7	深鉢・口縁部	床 面	雲母・礫混入	黒 褐		?	
PL. 21-1	口縁部に数条の沈線が巡らされ、以下は無文となる						
Fig. 43-8	深鉢・口縁部	床 面	白色鈳物混入	赤 黒		III-2	
PL. 21-1	口縁部下に太い沈線が巡らされ、以下は無文となる。						
Fig. 43-9	深鉢・口縁部	覆 土	白色鈳物混入	にぶい橙		V	
PL. 21-1	口辺が幅広となり、沈線が巡らされ、口縁部にかけて斜行する沈線が施される。						
Fig. 43-10	深鉢・口縁部	床 面	白色鈳物混入	にぶい橙		V	
PL. 21-1	口辺が幅広となり、口縁部にかけて斜行する沈線が施される。						
Fig. 43-11	深鉢・口縁部	床 面	白粒・礫混入	にぶい橙		V	
PL. 21-1	口縁部に沈線により文様が描かれ、その区画内に横位矢羽状となる斜行沈線を施す。						
Fig. 43-12	深鉢・口縁部	覆 土	白粒・礫混入	赤 褐		III-1	
PL. 21-1	口縁部に隆帯をクランク状に施文し、沈線を縦位に施す。						
Fig. 43-13	深鉢・口縁部	床 面	雲母・礫混入	にぶい赤褐	燃 糸 文	IV	
PL. 21-1	口縁部に隆帯で渦巻等の文様を施文し、また縦位の沈線をもつ。頭部は無文となり、胴部には円形刺突をもつ隆帯が巡らされ、胴部に燃糸文を施す。						
Fig. 43-15	深鉢・胴部	覆 土	白色鈳物混入	橙	RL	III-2?	RL (0段多条)
PL. 21-1	胴部に隆帯による方形等の文様区画を行ない、地文には縄文を施す。						
Fig. 43-16	深鉢・胴部	床 面	白色鈳物混入	にぶい橙	LR	IV	
PL. 21-1	胴部に隆帯による曲線的な文様を施文する。地文には縄文を施す。						
Fig. 43-17	深鉢・胴部	覆 土	白色鈳物混入	にぶい橙	LR	III-2	
PL. 21-1	胴部に隆帯による曲線的な文様を施文する。地文には縄文を施す。						



Fig. 43 13区6号住居址出土遺物実測図

第3章 各 説

13区6号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説 明						
Fig. 43-18	深鉢・胴部	覆 土	小礫少数混入	にぶい橙		IV	
PL. 21-1	胴部に隆帯及び沈線で文様を区画し、区画内に刺突を施す。						
Fig. 43-19	深鉢・口縁部	床 面	白色鈹物混入	橙	RL	VI	
PL. 21-1	口縁部に平行沈線を巡らせ、その間に刺突をもつ。以下に縄文を施す。						
Fig. 43-20	深鉢・頸部	床 面	白色鈹物混入	極暗赤褐	RL	II	
PL. 21-1	隆帯により文様区画を行ない、隆帯上及び区画内に縄文を施す。						
Fig. 43-21	深鉢・頸部	覆 土	砂 質	にぶい橙	RL	V	
PL. 21-1	頸部に「S」状の隆帯を巡らせ、胴部に隆帯による懸垂文が見られる。地文には縄文を施す。						
Fig. 43-22	深鉢・頸部	C・D-19・20 III-3層	白色鈹物混入	にぶい橙	燃糸文	II	住居址外出土
PL. 21-1	口縁部に刻目をもつ隆帯及び沈線により文様を描き、胴部に燃糸文を施す。						
Fig. 43-23	深鉢・口縁部	床 面	白色鈹物混入	暗 赤 褐		IV	
PL. 21-1	口縁部が幅広の無文帯となり、その下に隆帯を巡らせる。						
Fig. 43-24	深鉢・胴部	床 面・覆 土	白色鈹物混入	橙		II	
PL. 21-1	刻目をもつ隆帯を施文する。						
Fig. 44-1	深鉢・胴部	床 面	白色鈹物混入	赤 橙	LR	IV	
PL. 21-2	胴部に平行沈線及び沈線による渦巻を描き、地文には縄文を施す。						
Fig. 44-2	深鉢・口縁部	床 面	雲母・礫混入	黒 褐	RL	IV	
PL. 21-2	胴部に沈線による渦巻を描き、地文には縄文を施す。						
Fig. 44-3	深鉢・胴部	覆 土	白色鈹物混入	橙	RL	VI-1	
PL. 21-2	口縁部に平行沈線を巡らせ、その下に沈線による波状乃至は弧状を描き、地文には縄文を施す。						
Fig. 44-4	深鉢・胴部	C・D-19・20 III-3層	白粒・礫混入	橙	糸 線 文	VI-1	住居址外出土
PL. 21-2	胴部に沈線による連弧文を描き、地文には細い糸線を施す。						
Fig. 44-5	深鉢・胴部	C・D-19・20 III-3層	白色鈹物混入	にぶい橙	RL	IV	住居址外出土
PL. 21-2	胴部に沈線による連弧文を描き、地文には縄文を施す。						
Fig. 44-6	深鉢・胴部	床 面	白色鈹物混入	にぶい赤褐	RL	IV	
PL. 21-2	沈線による弧状及び曲線を描き、地文には縄文を施す。						

13区6号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 44-7	深鉢・胴部	C・D-19・20Gr III-3層	小礫混入	にぶい橙	条線文	VI-1	住居址外出土
PL. 21-2	胴部に平行沈線及び連弧文を描き、地文には細い条線を施す。						
Fig. 44-8	深鉢・胴部	床面	白色鈹物混入	浅黄橙	LR	IV	
PL. 21-2	胴部に沈線及び先端が蕨手となる沈線により文様を描き、地文には縄文を施す。						
Fig. 44-9	深鉢・胴部	覆土	白色鈹物混入	橙	RL	IV	
PL. 21-2	胴部に沈線及び先端が渦巻となる沈線により文様を描き、地文には縄文を施す。						
Fig. 44-10	深鉢・胴部	C・D-20・1Gr III-3層	白色鈹物混入	黒褐	RL	VIII	13・27区 住居址外出土
PL. 21-2	胴部に沈線により曲線的な文様を描き、その沈線間に縄文を施す。						
Fig. 44-11	深鉢・口縁部	床面	白粒・礫混入	にぶい黄橙	RL	VII	
PL. 21-2	口縁部に沈線により楕円等の文様を描き、その区画内に縄文を施す。						
Fig. 44-12	深鉢・口縁部	覆土	白粒・礫混入	にぶい橙	LR	VIII	
PL. 21-2	口縁部が無文となり、胴部に曲線となる沈線を描き、縄文を施す。						
Fig. 44-13	深鉢・胴部	C・D-20・1Gr III-3層	白色鈹物混入	にぶい橙	RL	VIII	13・27区 住居址外出土
PL. 21-2	胴部に沈線により縦位の楕円を描き、その区画内に縄文を施す。						
Fig. 44-14	深鉢・口縁部	床面	砂質	にぶい赤褐		III-2	
PL. 21-2	口縁が「く」の字に内反する浅鉢である。口縁部に円形及び楕円が施される。						
Fig. 44-16	浅鉢・胴部	床面	白色鈹物混入	にぶい橙	RL	VI	
PL. 21-2	胴部で「く」の字にかなり強く張る浅鉢である。胴部に沈線による渦巻、楕円及び屈曲部には沈線が巡らされる。						
Fig. 44-17	深鉢・胴部	C・D-20・1Gr III-3層	白色鈹物混入	黒褐	RL	IX	13・27区 住居址外出土
PL. 21-2	胴部に沈線による三角文等が描かれ、区画内に細かい縄文が施される。器面はよく研磨されている。						
Fig. 44-18	浅鉢・口縁部	覆土	白粒・礫混入	灰褐		IX	
PL. 20-5	無文の浅鉢となるもの。						
Fig. 44-19	浅鉢・口縁部	B・C-18・19Gr III-3層	白色鈹物混入	灰褐と一部赤		?	住居址外出土
PL. 20-5	無文の浅鉢となるもの。						
Fig. 44-20	深鉢・底部	覆土	夾雑鈹物混入	にぶい橙		?	
PL. 20-6	残存部分は無文である。						

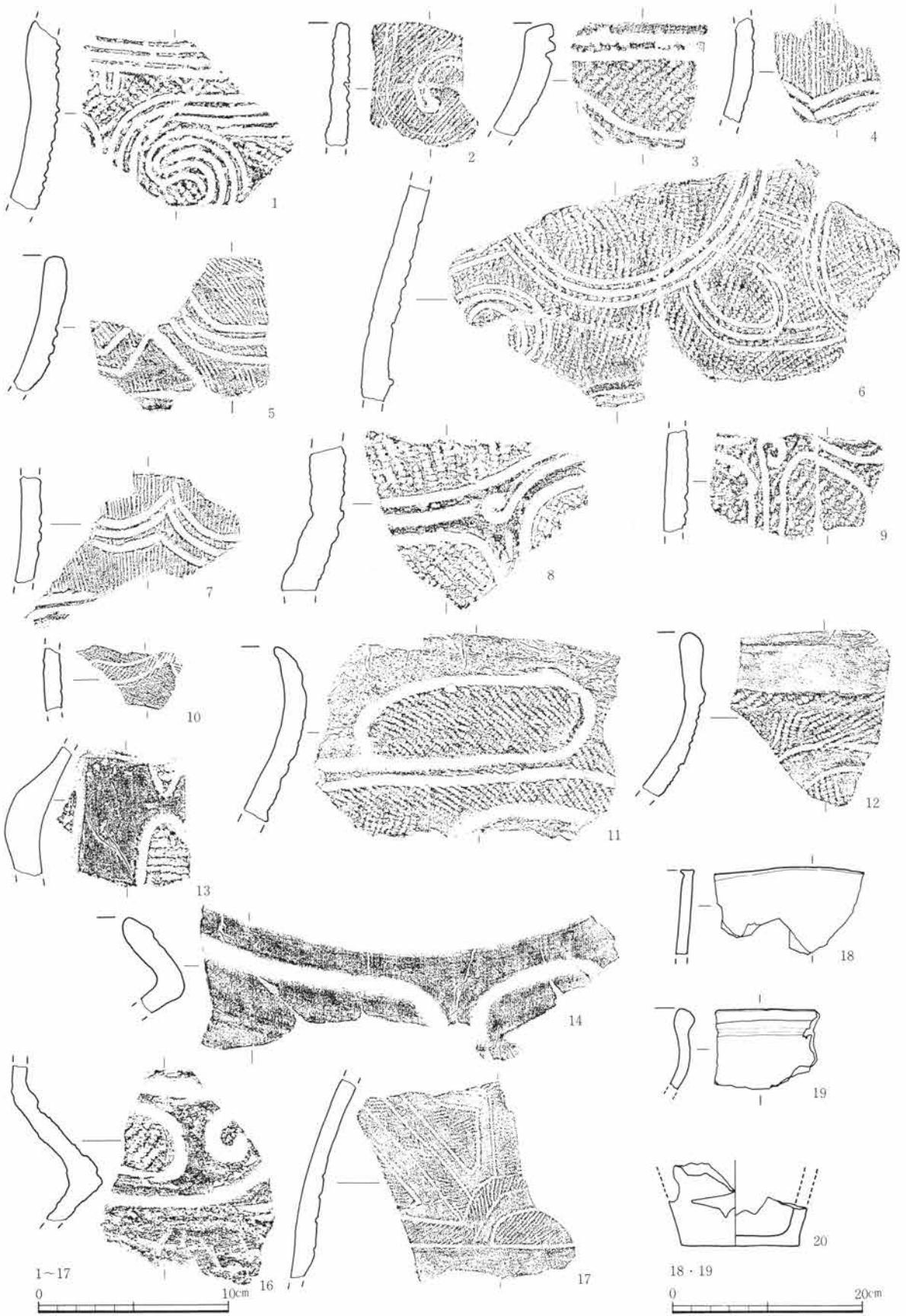


Fig. 44 13区6号住居址出土遺物実測図

13区6号住居址出土遺物一覧表(石器)

挿図番号	石器の種類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	出土位置
図版番号	説明						
Fig. 45-1	打製石斧	13.4	5.0	2.1	158.8	黒色頁岩	覆土
PL. 21-3	表裏面とも横方向から剥離を行ない、刃部裏面は縦方向からの剥離である。両側辺部は僅かに抉れている。						
Fig. 45-2	打製石斧	11.3	4.7	1.7	93.6	安山岩	覆土
PL. 21-3	短冊形を呈す。表裏面とも横方向から剥離後、細かい剥離を行なっている。刃部は縦方向からの剥離であり、磨耗。						
Fig. 45-3	打製石斧	11.0	5.4	1.9	130.2	黒色頁岩	覆土
PL. 21-3	撥形を呈す。刃部は丸味をもつ。表裏面とも横方向の剥離後、各辺に細かい剥離が入る。						
Fig. 45-4	打製石斧	11.2	4.2	1.5	82.9	黒色頁岩	床面下部において検出できた。
PL. 21-3	短冊形を呈す。刃部、基部ともに丸味をもつ。薄く扁平である。表面は風化している。						
Fig. 45-5	打製石斧	10.3	4.5	1.6	81.2	黒色頁岩	覆土
PL. 21-3	短冊形を呈す。基部を欠損するが僅かであろう。刃部は磨耗している。また刃部は縦方向の力によって割れている。						
Fig. 45-6	打製石斧	10.7	4.6	1.3	69.4	黒色頁岩	覆土
PL. 21-3	側辺は抉れており、横方向から剥離している。表面には自然面を多く残す。刃部は磨耗している。						
Fig. 45-7	打製石斧	8.4	3.9	1.1	55.6	黒色頁岩	床面下部において検出できた。
PL. 21-3	短冊形を呈す。表裏面とも横方向からの剥離後、細かい剥離を周縁に行なっている。刃部は丸味をもつ。						
Fig. 45-8	打製石斧	9.2	3.9	1.6	45.1	黒色頁岩	覆土
PL. 21-3	撥形?。側刃角の一部が使用時に欠損、後に再加工して刃部に細かい剥離による刃を付けている。						
Fig. 45-9	磨製石斧	(5.0)	(6.2)	2.4	119.8	珪質蛇紋岩	覆土
PL. 21-3	基部が残存する。基部端部は叩かれたように潰れている。各面には直線的に石器製作時の磨き痕が残る。						
Fig. 45-10	打製石斧	(11.5)	(4.2)	1.7	113.1	安山岩	13・27区C・D-20・1Gr III-3層住居址外
PL. 21-3	刃部と基部の一部を欠損する。細身の短冊形と推定される。表裏面とも横方向からの剥離を行なっている。						
Fig. 45-11	打製石斧	(9.4)	4.8	1.1	83.9	黒色頁岩	13区B・C-18・19Gr III-3層住居址外
PL. 21-3	短冊形と思われる。中間部より基部にかけて欠損する。大きく横方向から剥離後、細かい剥離を行なう。一部磨耗。						
Fig. 45-12	打製石斧	(11.2)	4.7	1.5	79.3	灰色安山岩	覆土
PL. 21-3	基部を僅かに欠損する撥形の石斧と考えられる。表裏面とも横から剥離を行なっている。刃部は磨耗痕がある。						
Fig. 45-13	打製石斧	(5.7)	3.7	1.3	39.0	安山岩	床面
PL. 21-3	短冊形と考えられる。中間部より基部を欠損する。刃部は丸味をもつ。表裏面とも刃部付近に磨耗痕がある。						
Fig. 45-14	打製石斧	(9.1)	4.2	2.1	105.8	黒色頁岩	床面
PL. 21-3	中間部から刃部にかけて欠損する。表裏面とも横方向の剥離後、細かい剥離を行なう。基部に自然面が残る。						

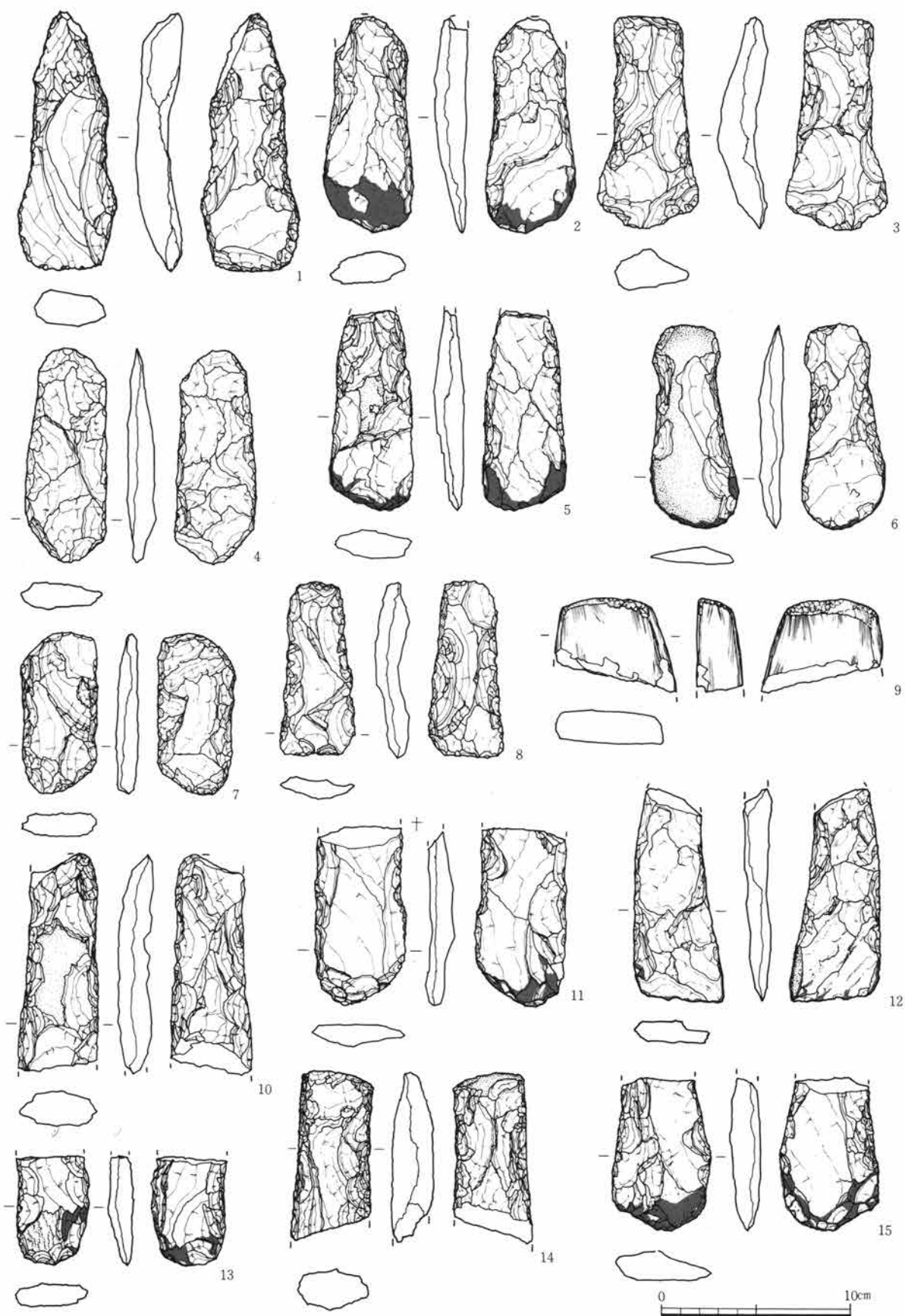


Fig. 45 13区6号住居址出土遺物実測図

13区6号住居址出土遺物一覧表(石器)

挿図番号	石器の種類	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石質	出土位置
図版番号	説明						
Fig. 45-15	打製石斧	(8.2)	5.0	1.5	82.2	黒色頁岩	13区B・C-19・20Gr III-3層住居址外
PL. 21-3	中間部より基部までが欠損する。表裏とも横方向の剥離後、各辺に細かい剥離を行なっている。刃部は表裏面とも磨耗している。						
Fig. 46-1	打製石斧	(8.8)	4.5	1.5	67.6	黒色頁岩	覆土
PL. 21-4	基部を欠損する。横方向に打撃を行ない、剥離後、細かく各辺を剥離している。刃部は表裏面とも磨耗している。一部に自然面を残す。						
Fig. 46-2	剥片石斧	8.3	4.2	1.1	42.6	黒色頁岩	覆土
PL. 21-4	表面は横方向、裏面は斜方向からの剥離後、細かい剥離を側辺の一部に付けている。他辺には刃毀れ状の極細な剥離状の痕が残る。						
Fig. 46-3	打製石斧	(6.8)	4.4	1.6	67.8	黒色頁岩	覆土
PL. 21-4	短冊形と推定される。中間点より基部にかけて欠損している。刃部は使用時に一部刃毀れしたものである。横方向に剥離後、各辺に細かく刃を付けている。						
Fig. 46-4	棒状石器	(8.7)	3.5	1.2	49.8	黒色片岩	覆土
PL. 21-4	中間部から刃部にかけて欠損する。扁平な石である。石の各面は僅かに剥れているが人工によるものか、自然の力が加わったものかは不明である。						
Fig. 46-5	棒状石器	(12.0)	3.0	2.2	132.2	雲母石英片岩	床面
PL. 21-4	両端面は欠損している。断面は隅丸の方形を呈している。						
Fig. 46-6	剥片石器	11.6	6.6	2.0	121.3	黒色頁岩	覆土
PL. 21-4	一部を欠損する。表裏面とも横方向から剥離している。直線をなす辺は両面に細かい刃部を付けている。表面には自然面が残る。						
Fig. 46-7	スクレイパー	6.5	5.3	1.4	41.7	黒色頁岩	床面下
PL. 21-4	剥片を使用して周縁部に細かな剥離を両面から行なっている。一部は欠損しており、断面は三角形を呈している。						
Fig. 46-8	磨石	13.8	7.8	5.3	860.0	花崗岩	覆土
PL. 21-4	表裏面は磨った様相がある。両側面中央部付近は面が荒れており、叩き石として使用したものである。						
Fig. 46-9	磨石	11.9	7.4	3.5	435.0	輝石安山岩	覆土
PL. 21-4	表面および周縁部分は僅かに磨った様相を呈す。表面中央に僅かに叩いた痕がある。						
Fig. 46-10	磨石	10.5	5.9	3.9	380.0	輝緑岩	床面
PL. 21-4	表面には中央に1カ所、裏面および両側縁部分には各2カ所づつ叩いた状況での凹のできた様相が明瞭である。側面は全体に叩いた様相を呈す。						
Fig. 46-11	磨石?	16.4	9.7	5.0	900.5	輝石安山岩	
PL. 21-4	自然石に左右二辺に幅2.5~3.0cm、深さ0.7cm前後の抉りを入れてある。下端はほぼ平坦であり使用痕がある。使用痕は下端面の長軸方向に入っている。						

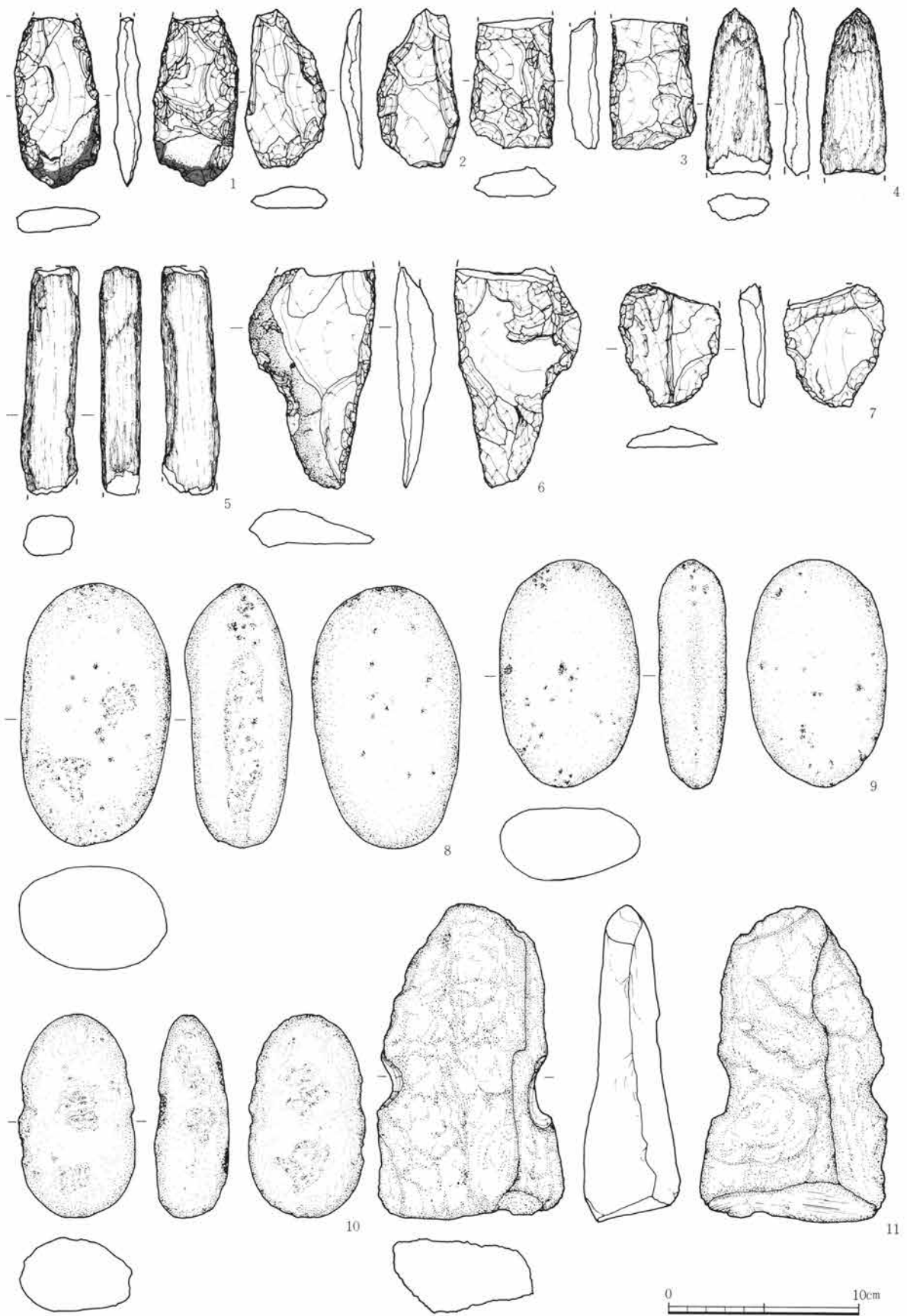


Fig. 46 13区6号住居址出土遺物実測図

13区8号住居址 (Fig. 47・48、PL. 22-1・2、23-1・2)

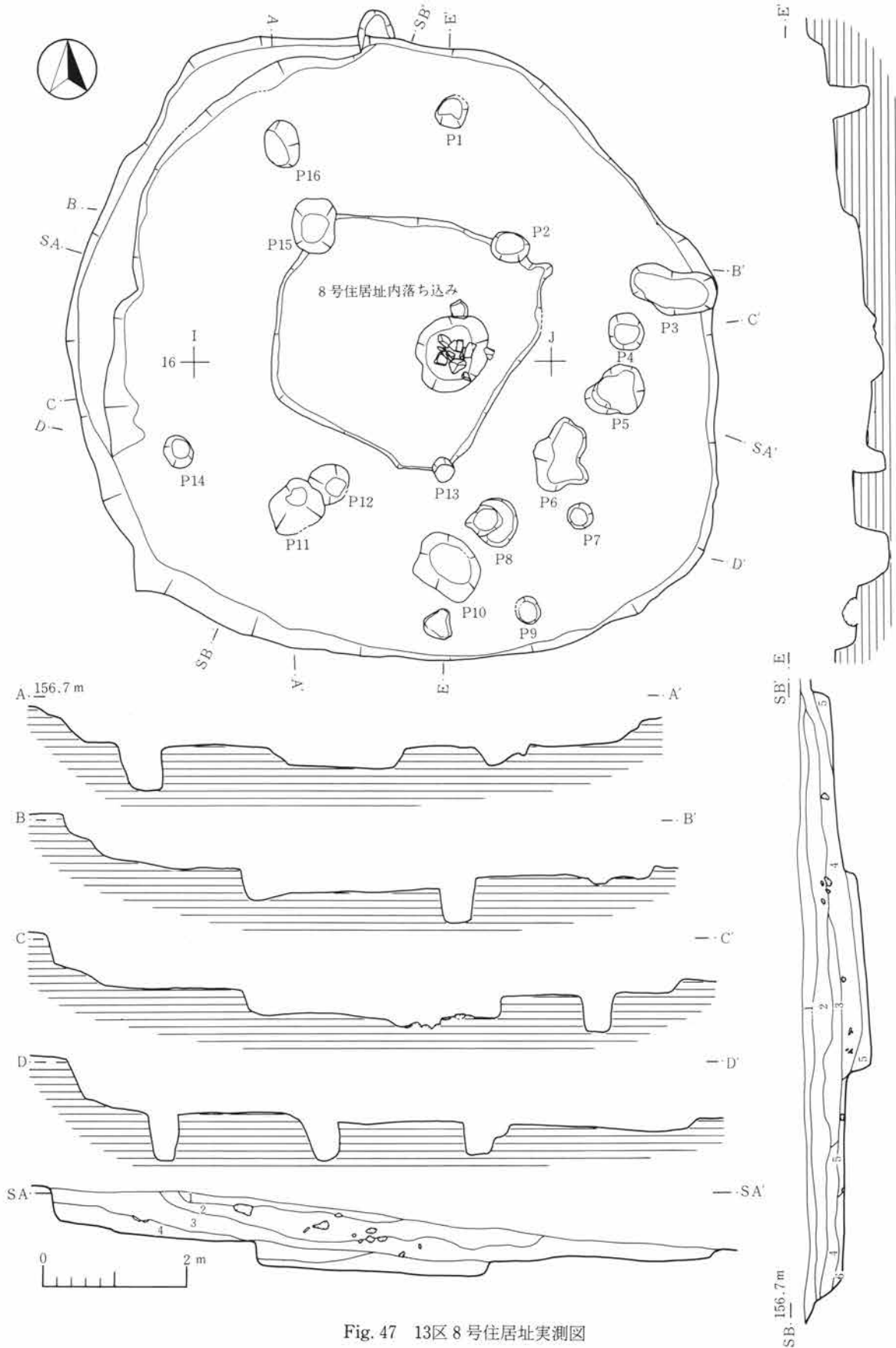


Fig. 47 13区8号住居址実測図

第3章 各 説

8号住居址はH・I・J-15・16グリッドに広がりを持ち、東側の9号住居址に東壁が近接している。陣場泥流残丘上の東中央部の斜面上位に位置している。東側は9号住居址をはさんで数メートルで沖積低地へと変化していく変遷点になる。住居址はほぼ円形を呈す。径は約8.8mである。壁は比較的残っており、良好な西側で約60cm、東側斜面下部で約20cmが確認できた。北から西にかけての壁は段状を呈している。床面には中央に不定形な落ち込みがあり、ほぼ中央に炉址が検出できた。その他に柱穴状の穴は16ヶ所で確認できた。床面中央から検出された落ち込みは住居址に伴うものと考えられる。

8号住居址内覆土の土層は次の様に観察した。

- 1層 礫混入褐色土層（僅かに砂質を帯びた堆積土であり、多量の円礫と角礫を混入した土層である。）
- 2層 礫混入黄褐色土層（1層に類似した構成土層である。堆積層の色が黄味を帯びている。）
- 3層 礫混入茶褐色粘質土層（小さい角礫を僅かに含み、水分の蒸発が遅い。粘性はあるが僅かである。）
- 4層 礫混入暗褐色粘質土層（流入土を主体とした土層と考えられる。当土層下位は床面に接する。）
- 5層 炭化物混入黄褐色粘質土層（住居址の壁が崩れて流入した状況を呈す。下位に炭化物がある。）
- 6層 炭化物混入黄褐色土層（砂質）
- 7層 黄褐色土層（8号住居址内落ち込み覆土である。関東ローム層の二次的な堆積状況と考えられる土層であり、黄色味がある。）

土層によると全体的に礫を含んでいるが、これは陣場泥流内に含まれている礫の二次的な土層堆積状況を示すものである。

炉の規模は径約1mの円形を呈し、深さ約20cmである。中央には角礫があるが、石組炉か否か不明である。焼土は別の地点、西約80cmのところに30×20cm範囲で僅かに検出できた。

床面には他の施設として埋設土器がある（Fig. 49-2）、出土地点（Fig. 48）は南壁の中央やや東寄りである。焼土やその他に出土したものは無い。

住居址中央には不整形な落ち込みが床面付近で確認できた。

住居址床面からの出土遺物は数多くある。深鉢を主とした器種、石器が多数出土した。遺物の出土状況は床面、覆土内から多くを出土する。また床面からは10~20cm ϕ 程度の角礫、円礫が全体にわたり出土するが、遺構に関係しているものとは考え難い。

床面には16ヶ所の柱穴が確認できる。このうちP3、P7、P11、P13は不整形な形状をしているものと小型で浅いものである。平面形の大きさがほぼ同一なものと、深さが50cm前後あるものとを共通の観点とした場合はP1、P4、P8、P12、P14、P16があげられる。僅かに崩れるもののほぼ環状を呈する。その他、P5は大きさ、深さともに規模的には大きい形状が崩れる。P6、P10、P15は大きさ、規模ともに比して大~中規模に入る。また不整形な中央落ち込み部分の、ほぼ3ヶ所の隅にピットが確認できたが遺構との関係ではピットの規模が違い、同じ遺構に伴うものなのか否かは不明である。以下柱穴として各ピットの形状と規模を明記した。

- P1 ほぼ円形を呈し、長軸50cm、短軸48cm、深さ52cmである。
- P2 楕円形を呈し、長軸56cm、短軸44cm、深さ46cmである。住居址の中央の落ち込みに半分かかっている。
- P3 東壁の一部がかかる楕円形に近似する柱穴である。長軸1.2m、短軸60cm、深さ25cmである。
- P4 ほぼ円形を呈す。長軸50cm、短軸48cm、深さ52cmである。
- P5 不整形である。長軸88cm、短軸68cm、深さ68cmである。

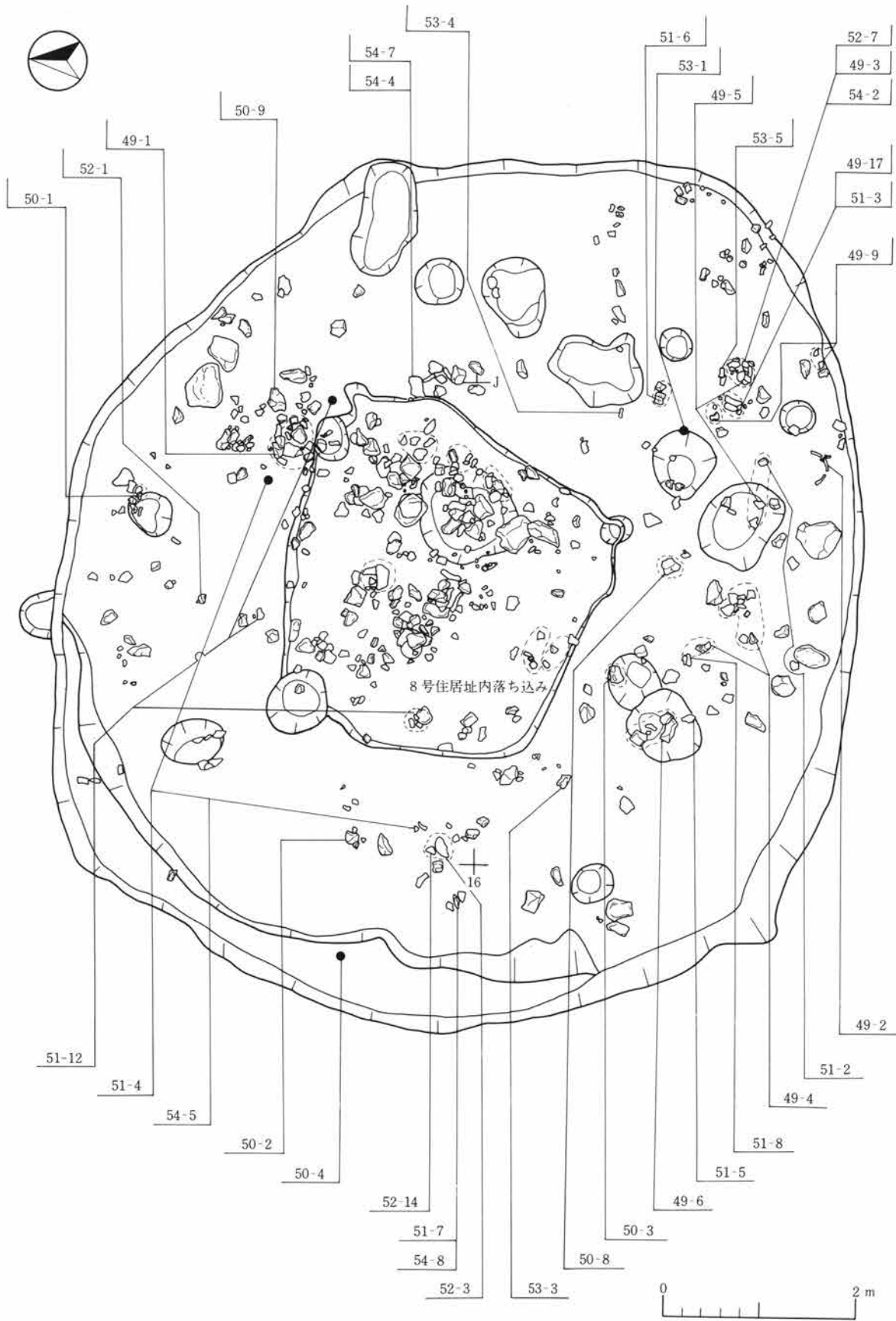


Fig. 48 13区 8号住居址遺物出土状況図

第3章 各 説

- P 6 不整形である。長軸1.04m、短軸68cm、深さ31cmである。
 P 7 円形を呈す。径は36cmである。深さ20cmである。
 P 8 ほぼ円形を呈す。長軸70cm、短軸68cm、深さ40cmである。
 P 9 住居址の南壁際にある。ほぼ円形を呈し、長軸40cm、短軸36cmである。
 P10 楕円形に近似する。長軸1m、短軸76cm、深さ44cmである。
 P11 P12を切っている。概ね楕円形を呈し、長軸80cm、短軸60cm、深さ25cmである。
 P12 P11に切られている。概ね楕円形を呈す、長軸56cm、短軸46cm、深さ54cmである。
 P13 中央にある落ち込みの南東隅に位置している。ほぼ円形を呈し、径26cm、深さ26cmである。
 P14 楕円形を呈す。長軸44cm、短軸40cm、深さ62cmである。
 P15 中央落ち込み部の北西隅に位置する。隅丸方形に近似し、長軸80cm、短軸60cm、深さ44cmである。
 P16 楕円形を呈す。長軸64cm、短軸50cm、深さ58cmである。

13区 8号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 49-1	深鉢・口・胴部	床面	夾雑鉱物混入	にぶい橙	RL	VI-2	
PL. 23-3	口縁が波状となるキャリバー形のやくずれた大型の深鉢である。口縁部に隆帯及び太い沈線による渦巻等の文様が描かれ、胴部には沈線による内部磨消となる懸垂文をもつ。地文には縄文を施す。						
Fig. 49-2	深鉢・口・胴部	床面埋裏	白粒・礫混入	にぶい橙	RL	VI-1	
PL. 23-4	口縁が開き、胴部下半でふくらむ大型の深鉢である。口縁部に隆帯及び太い沈線による渦巻ならびに楕円が描かれ、胴部には沈線による内部磨消となる懸垂文をもつ。地文には縄文を施す。						
Fig. 49-3	深鉢・口・胴部	床面・覆土下層	白粒・礫混入	にぶい赤褐	LR	VI-1	
PL. 23-5	キャリバー形のくずれた大型の深鉢である。口縁部に隆帯及び沈線による渦巻等の文様が描かれ、胴部には沈線による内部磨消となる懸垂文をもつ。地文には縄文を施す。						
Fig. 49-4	深鉢・口・胴部	覆土下層	夾雑鉱物混入	明赤褐	RL	VI-2	
PL. 23-6	キャリバー形のくずれた大型の深鉢である。口縁部に隆帯及び沈線による渦巻等の文様が描かれ、胴部には沈線による内部磨消となる懸垂文をもつ。地文には縄文を施す。						
Fig. 49-5	深鉢・胴部	床面	夾雑鉱物混入	橙	RL	VI~VII	
PL. 24-1	胴部に沈線による内部磨消となる懸垂文をもち、地文には縄文を施す。						
Fig. 49-6	深鉢・胴部	覆土下層	白粒・礫混入	にぶい橙	RL	VII	
PL. 24-7	キャリバー形のくずれた大型の深鉢である。口縁部に隆帯及び沈線による渦巻等の文様が描かれ、胴部には沈線による内部磨消となる懸垂文をもつ。地文には縄文を施す。						
Fig. 49-7	深鉢・底部	覆土下層	白色鉱物混入	淡黄	LR	VI~VII	
PL. 24-2	胴部に沈線による内部磨消となる懸垂文をもち、地文には縄文を施す。						
Fig. 49-8	深鉢・底部	覆土下層	砂質	橙	RL	VI~VII	
PL. 24-2	胴部に沈線による内部磨消となる懸垂文をもち、地文には縄文を施す。						

13区8号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 49-9	深鉢・底部	覆土	小礫混入	黄橙		VI~VII	
PL. 24-3	胴部に沈線による懸垂文をもつ。						
Fig. 49-10	深鉢・底部	覆土	夾雑鉱物混入	淡黄		?	
PL. 24-3	胴部に沈線による懸垂文及び斜行沈線を施す。						
Fig. 49-11	深鉢・底部	覆土	雲母・礫混入	橙		?	
PL. 24-4	胴部に沈線による懸垂文及び斜行沈線を施す。						
Fig. 49-12	浅鉢・底部	覆土下層	夾雑鉱物混入	明赤褐		?	
PL. 24-4	浅鉢の底部で無文である。底には網代痕がみられる。						
Fig. 49-13	深鉢・底部	覆土下層	黒色鉱物混入	黄橙		?	
PL. 24-5	深鉢の底部で無文である。						
Fig. 49-14	深鉢・底部	覆土下層	砂質	浅黄橙		?	
PL. 24-5	深鉢の底部で無文である。						
Fig. 49-15	器台	覆土下層	白色鉱物混入	にぶい黄橙		?	
PL. 24-6	側面に孔をもち、沈線による文様を描いた器台である。						
Fig. 49-16	深鉢・底部	覆土下層	小礫混入	橙		?	
PL. 24-6	深鉢の底部で文様は不明。						
Fig. 49-17	浅鉢・口縁部	覆土下層	白色鉱物混入	橙		VII	
PL. 24-8	無文の浅鉢である。						
Fig. 49-18	浅鉢・口縁部	覆土	黒色鉱物混入	淡黄	RL	VII	
PL. 24-9	口縁部が無文となり、沈線を巡ぐらせ、以下に縄文を施す。						
Fig. 50-1	深鉢・口縁部	床面	白粒・礫混入	橙	RL	VII	
PL. 24-10	口縁が波状となり、口縁部に隆帯及び太い沈線により渦巻等の文様が描かれ、以下に縄文を施す。						
Fig. 50-2	深鉢・口縁部	床面	白色鉱物混入	橙	RL	VII	
PL. 24-10	口縁が波状となり、口縁部に隆帯及び太い沈線により渦巻等の文様が描かれ、以下に縄文を施す。						
Fig. 50-3	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	にぶい橙	RL	VII	
PL. 24-10	口縁が波状となり、口縁部に隆帯及び太い沈線により文様を描き、胴部には内部磨消となる懸垂文、蛇行する懸垂文をもち、地文には縄文を施す。						

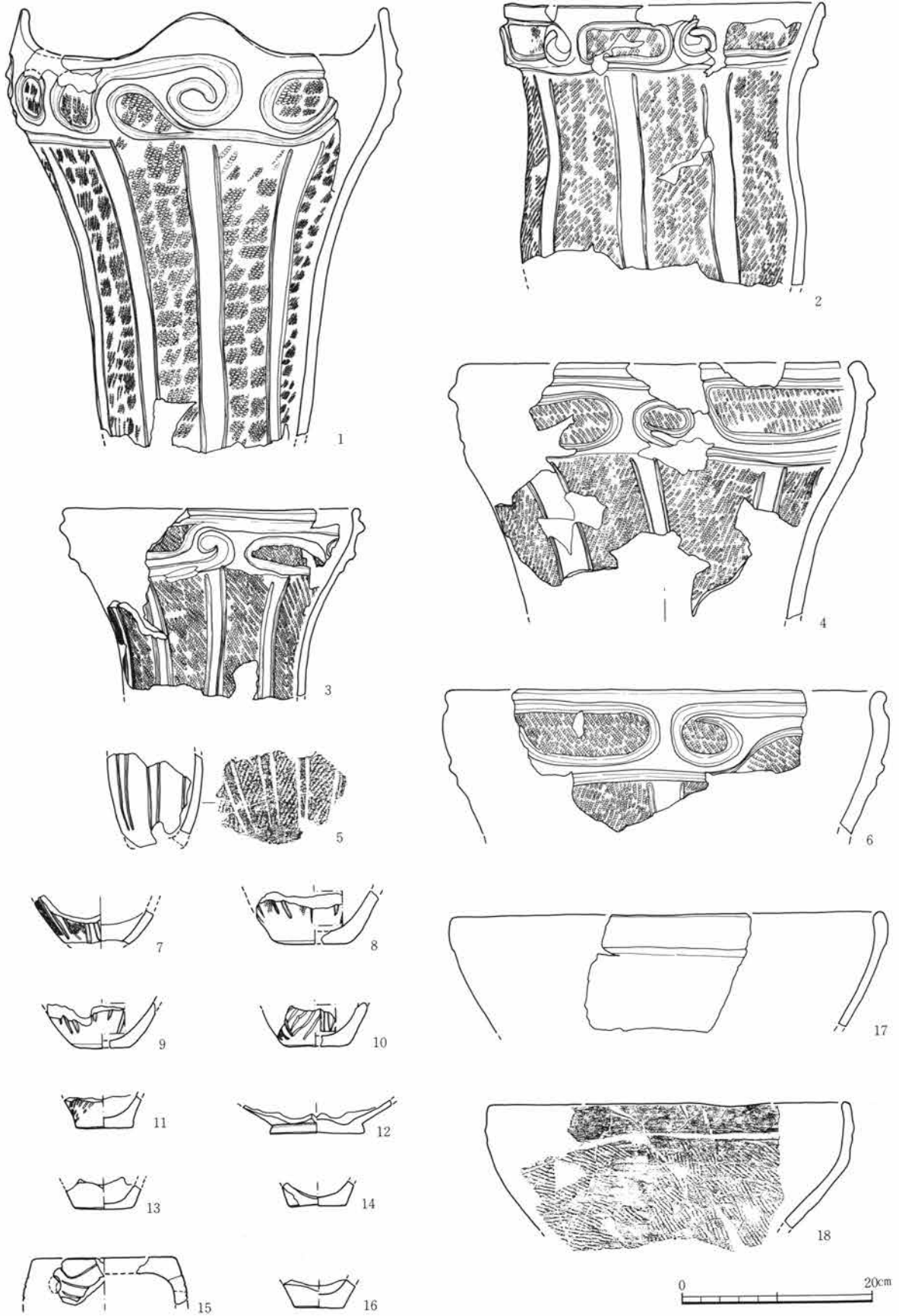


Fig. 49 13区8号住居址出土遺物実測図

13区8号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 50-4	深鉢・口縁部	覆土	白色鈹物混入	淡赤橙	RL	VII	
PL. 24-10	口辺が波状となり、口縁部に隆帯及び太い沈線により渦巻等の文様を描く。						
Fig. 50-5	深鉢・口縁部	覆土	黒色鈹物混入	橙	RL	VI	
PL. 24-10	口縁部に隆帯及び太い沈線により渦巻等の文様を描き、地文には縄文を施す。						
Fig. 50-6	深鉢・口縁部	覆土	小礫少数混入	橙	RL	VII	
PL. 24-10	口縁が波状となり、口縁部に隆帯及び太い沈線により渦巻等の文様を描き、地文には縄文を施す。						
Fig. 50-7	深鉢・口縁部	覆土	白色鈹物混入	にぶい黄橙	RL	VII	
PL. 24-10	口縁が波状となり、口縁部に隆帯及び太い沈線により渦巻等の文様を描き、地文には縄文を施す。						
Fig. 50-8	深鉢・口縁部	覆土	白色鈹物混入	橙	RL	VII	
PL. 24-10	口縁部に太い沈線により楕円等の文様を描き、胴部には内部磨消となる懸垂文をもつ。地文には縄文を施す。						
Fig. 50-9	深鉢・胴部	覆土	白粒・礫混入	にぶい黄橙	RL	III	
PL. 24-10	口縁部に太い沈線により楕円及び縦位に「S」字状の文様を描き、胴部には先端が渦巻となる沈線を連続的に波状に施す。地文には縄文を施す。						
Fig. 51-1	深鉢・胴部	覆土下部	白色鈹物混入	浅黄橙	RL	III-2	
PL. 25-1	胴部に沈線により懸垂文及び渦巻状の曲線を描き、地文には縄文を施す。						
Fig. 51-2	深鉢・口縁部	床面	小礫少数混入	浅黄橙	条線文	VIII	
PL. 25-1	口縁部が無文となり、太い沈線を1条巡らせ、以下は細い条線を縦位に施す。						
Fig. 51-3	深鉢・口縁部	覆土	石英混入	明黄褐	条線文	VIII	
PL. 25-1	口縁部が無文となり、太い沈線を1条巡らせ、以下は細い条線を縦位に施す。						
Fig. 51-4	深鉢・口・胴部	床面	白粒・礫混入	赤	RL・条線文	VI-2	
PL. 25-1	口縁部に隆帯及び沈線により渦巻、楕円等が描かれ、楕円区画内には縄文を施す。胴部には細い条線を縦位に施す。						
Fig. 51-5	深鉢・胴部	覆土	石英混入	にぶい黄橙	条線文	VIII	
PL. 25-1	胴部に細い条線を縦位に施す。						
Fig. 51-6	深鉢・胴部	覆土	黒色鈹物混入	にぶい橙	RL・条線文	VI	
PL. 25-1	口縁部に隆帯及び沈線により文様が描かれ、区画内に縄文を施す。胴部には細い条線を縦位に、また沈線による文様区画を行ない区画内に縄文を施す。						
Fig. 51-7	深鉢・口縁部	覆土	白色鈹物混入	淡赤橙		VII	
PL. 25-1	口縁部に円形刺突をもつ隆帯により文様を描出する。						



Fig. 50 13区8号住居址出土遺物実測図

13区8号住居址出土遺物一覧表(土器)

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 51-8	深鉢・胴部	覆土	夾雑鉱物混入	赤橙	撚糸文	?	
PL. 25-1	頸部に平行沈線を巡らせ、胴部には撚糸を縦位に施す。						
Fig. 51-9	深鉢・胴部	覆土	白粒・礫混入	にぶい黄橙		VI	
PL. 25-1	無文地に円形刺突を連続させて巡らす。						
Fig. 51-10	深鉢・胴部	覆土下層	白色鉱物混入	にぶい橙	RL	VI~VII	
PL. 25-1	胴部に内部磨消となる懸垂文をもち、地文には縄文を施す。						
Fig. 51-11	深鉢・胴部	覆土下層	白粒・礫混入	橙	LRL	VI~VII	
PL. 25-1	胴部に内部磨消となる懸垂文をもち、地文には縄文を施す。						
Fig. 51-12	深鉢・胴部	床面・落ちこみ覆土	白粒・礫混入	橙	RL	VI~VII	
PL. 25-1	胴部に内部磨消となる懸垂文をもち、地文には縄文を施す。						
Fig. 52-1	深鉢・胴部	覆土	白色鉱物混入	にぶい橙	RL	VI~VII	
PL. 25-2	口縁部に隆帯及び沈線により文様を描き、胴部には内部磨消となる懸垂文をもつ。地文には縄文を施す。						
Fig. 52-2	深鉢・胴部	覆土	小礫少数混入	淡橙	RL	VII	
PL. 25-2	口縁部に隆帯及び沈線により文様を描き、胴部には内部磨消となる懸垂文をもつ。地文には縄文を施す。						
Fig. 52-3	深鉢・胴部	覆土	白色鉱物混入	橙	RL	VI~VII	
PL. 25-2	胴部に内部磨消となる懸垂文をもち、地文には縄文を施す。						
Fig. 52-4	深鉢・口縁部	覆土下部	白色鉱物混入	暗赤		VI	
PL. 25-2	口縁部に隆帯及び沈線により文様を描き、頸部が無文となるが、下部に刻目をもつ隆帯を巡らせる。						
Fig. 52-5	深鉢・口縁部	覆土下部	白色鉱物混入	赤橙	RL	VIII	
PL. 25-2	口縁部に沈線により文様を描き、沈線区画内に縄文を施す。						
Fig. 52-6	深鉢・口縁部	覆土	小礫混入	浅黄橙	RL	VII	
PL. 25-2	口縁部に刻目をもち、沈線による渦巻等の文様を縦位に描く。地文には縄文を施す。						
Fig. 52-7	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	にぶい黄橙	RL	VII	
PL. 25-2	口縁部に平行沈線を巡らし、この間に円形刺突をもつ。地文には縄文を施す。						
Fig. 52-8	深鉢・口縁部	覆土	砂質	橙	RL	VII	
PL. 25-2	口縁部が無文となり、沈線を1条巡らせる。以下には縄文を施す。						
Fig. 52-9	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	にぶい黄橙	RL	VII	
PL. 25-2	口縁部が無文となり、沈線を1条巡らせる。以下には縄文を施す。						



Fig. 51 13区 8号住居址出土遺物実測図

13区 8号住居址出土遺物一覧表 (土器)

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
Fig. 52-10	深鉢・口縁部	覆土下部	白色鉱物混入	橙	RL	VI-2	
PL. 25-2	口縁部が幅狭い無文となり、以下に縦位の楕円、先端が蕨手となる懸垂文を描き、楕円区画内に縄文を施す。						
Fig. 52-11	深鉢・口縁部	覆土下部	白色鉱物混入	にぶい褐	LR	VIII	
PL. 25-2	口縁部が無文となり、以下に沈線による文様を描く。また沈線区画内には縄文を施す。						
Fig. 52-12	深鉢・口縁部	覆土・覆土下部	白色鉱物混入	赤橙	RL	VII	
PL. 25-2	口縁部が幅狭い無文となり、以下に太い沈線により文様を描く。地文には縄文を施す。						
Fig. 52-13	深鉢・胴部	覆土下層	雲母・礫混入	にぶい橙	LRL	VIII	
PL. 25-2	胴部に沈線による文様を描出し、沈線区画内に縄文を施す。						
Fig. 52-14	土錘 (完形)	覆土	夾雑鉱物混入	橙			
PL. 25-3	長径約3.6cm、短径約3.2cm、厚さ1.1cm、重さ16.65gである。						

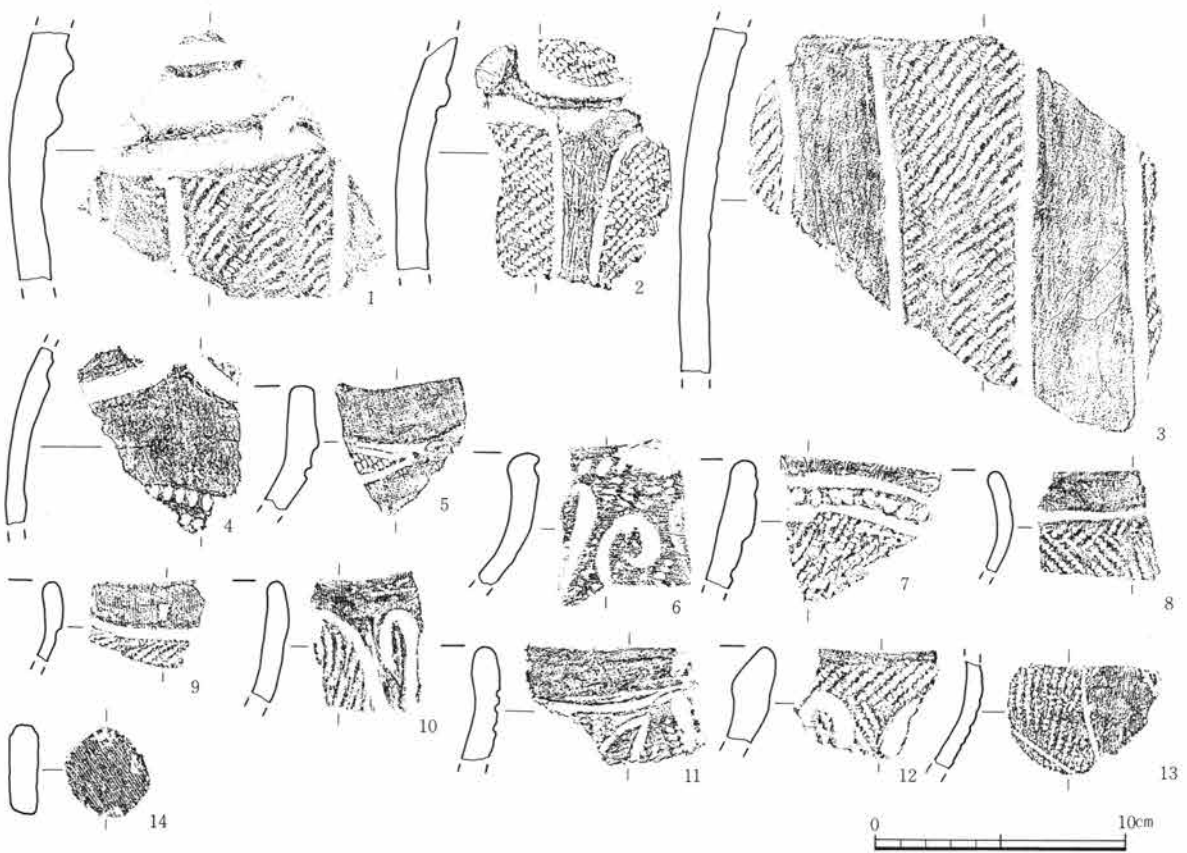


Fig. 52 13区 8号住居址出土遺物実測図

13区8号住居址出土遺物一覧表(石器)

挿図番号	石器の種類	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石 質	出 土 位 置
図版番号	説 明						
Fig. 53-1	石 鏃	(1.9)	1.8	0.3	(0.8)	珪 質 頁 岩	覆土
PL. 25-4	先端部が欠損する。無茎鏃である。抉りはしっかりとしている。						
Fig. 53-2	磨 製 石 斧	9.0	4.0	1.5	77.8	灰 色 安 山 岩	覆土
PL. 25-4	定角式石斧である。両側辺と頭部を研磨している。刃部は両刃であり一部が欠損している。断面は隅丸方形である。						
Fig. 53-3	打 製 石 斧	11.8	4.8	1.3	85.8	黒 色 頁 岩	覆土
PL. 25-4	短冊形を呈す。表裏面とも横方向からの剥離を行なっている。刃部は丸味をもち、一部磨り減っている。						
Fig. 53-4	打 製 石 斧	11.0	3.9	1.3	69.5	灰 色 安 山 岩	覆土
PL. 25-4	短冊形を呈す。裏面は横方向からの剥離。側辺は細かい剥離を行なっている。表面は自然面を多く残す。						
Fig. 53-5	打 製 石 斧	(9.6)	4.3	1.5	(89.6)	灰 色 安 山 岩	覆土
PL. 25-4	短冊形と考えられる。刃部は欠損する。横方向からの剥離後、細かい剥離を行なう。側面に僅かな抉れがある。						
Fig. 53-6	打 製 石 斧	(9.2)	4.0	1.8	(86.3)	黒 色 頁 岩	覆土
PL. 25-4	短冊形を呈す。表面基部に自然面を残す。表裏面とも横方向の剥離、側辺・刃部は細かい剥離痕がある。						
Fig. 53-7	打 製 石 斧	(5.4)	3.9	2.0	(42.1)	黒 色 頁 岩	覆土
PL. 25-4	中間部から基部にかけて残存する。表裏面とも側辺部は横方向からの剥離、基部は縦方向の剥離を行なっている。						
Fig. 53-8	打 製 石 斧	5.7	3.7	0.9	18.7	黒 色 頁 岩	覆土
PL. 25-4	撥形を呈する小形の石器である。主として横方向の剥離後、各辺を細かく剥離している。表面に自然面が残る。						
Fig. 53-9	打 製 石 斧	(5.0)	3.4	1.1	23.2	黒 色 頁 岩	覆土
PL. 25-4	短冊形と考えられる。裏面は横方向の剥離を行なっている。表面は自然面を残す。中間部分より基部にかけて残る。						
Fig. 53-10	打 製 石 斧	(8.0)	4.0	1.6	69.0	黒 色 頁 岩	覆土
PL. 25-4	短冊形と考えられる。刃部を欠損する。基部は自然面を残す。剥離は主に横方向から行なっている。断面は扁平である。						
Fig. 53-11	打 製 石 斧	(6.5)	4.3	1.6	60.3	灰 色 安 山 岩	覆土
PL. 25-4	短冊形と考えられる。中間部より刃部にかけて欠損している。主として横方向の剥離である。一部抉りがある。						
Fig. 53-12	打 製 石 斧	(4.5)	3.8	0.9	20.3	黒 色 頁 岩	覆土
PL. 25-4	基部が残存する。横方向からの剥離を行なっている。両面とも磨り減っている。刃部の可能性もある。						
Fig. 53-13	打 製 石 斧	(6.8)	(5.3)	1.5	57.3	黒 色 頁 岩	覆土
PL. 25-4	撥形または分銅形と思われる。刃部・基部を欠損している。剥離は横方向から行なっている。抉りがある。						
Fig. 53-14	打 製 石 斧	(5.2)	(4.3)	1.3	35.8	安 山 岩	覆土
PL. 25-4	刃部・基部を欠損する。横方向からの剥離であり側辺に両面から細かい剥離を行なっている。僅かに抉りがある。						

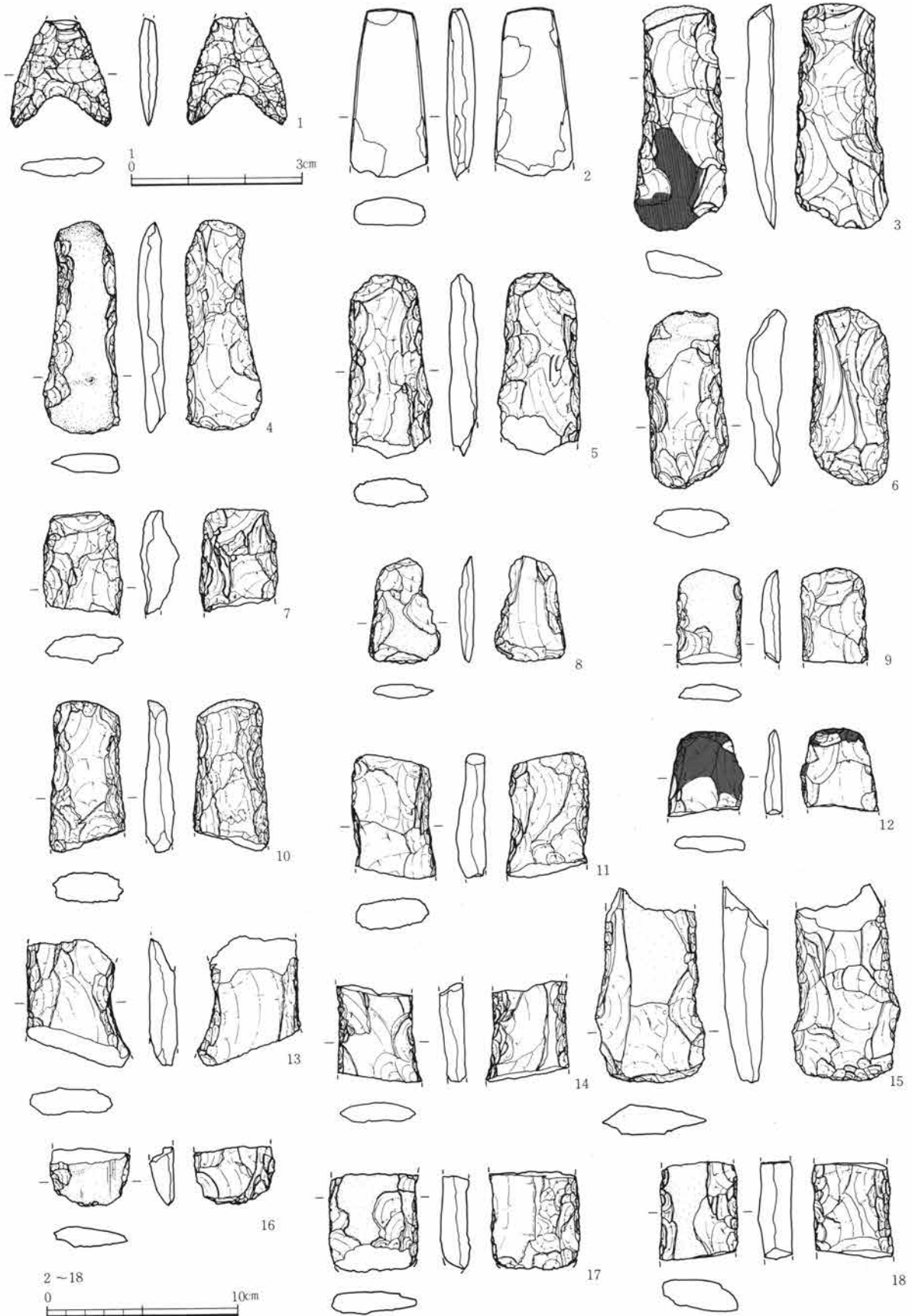


Fig. 53 13区8号住居址出土遺物実測図

13区8号住居址出土遺物一覧表(石器)

挿図番号	石器の種類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	出土位置
図版番号	説 明						
Fig. 53-15	打製石斧	(10.1)	5.4	2.3	143.7	黒色頁岩	覆土
PL. 25-4	短冊形と考えられる。中間部より基部にかけて欠損する。横方向から剥離を行なっている。表面に自然面が残る。						
Fig. 53-16	打製石斧	(3.1)	4.3	1.3	17.0	黒色頁岩	覆土
PL. 25-4	刃部のみが残存する。表面には自然面が多く残るが縦方向に擦痕が認められる。裏面は横方向、刃部は縦方向の剥離。						
Fig. 53-17	打製石斧	(4.9)	4.7	1.6	53.4	安山岩	覆土
PL. 25-4	短冊形と思われる。中間部から基部にかけてと、刃部を欠損する。						
Fig. 53-18	打製石斧	(5.0)	4.0	1.8	54.9	輝石安山岩	覆土
PL. 25-4	刃部・基部ともに欠損。表面には自然面が残る。表裏面とも横方向からの剥離後、細かい剥離を行なっている。						
Fig. 54-1	打製石斧	(9.7)	6.9	1.9	159.4	黒色頁岩	覆土
PL. 25-5	中間部分から基部にかけて欠損する。中間部分は挟り込みの状況がみられる。表裏面とも細部調整を行なっている。						
Fig. 54-2	打製石斧	7.3	6.2	1.5	62.7	黒色頁岩	床面
PL. 25-5	分銅形を呈す。基部は欠損する。横方向から大きく剥離した後、挟りや細部調整を両面から行なっている。						
Fig. 54-3	打製石斧	5.5	2.5	1.0	11.6	黒色頁岩	覆土
PL. 25-5	小型の撥形を呈す。刃部の一部分と基部を欠損する。細部調整は表面が主である。						
Fig. 54-4	スクレイパー	7.3	3.6	0.4	22.2	黒色頁岩	覆土
PL. 25-5	剥離後、表面の一辺に調整を加えて刃部を作っている。						
Fig. 54-5	剥片石器	6.5	4.2	0.7	15.2	黒色頁岩	覆土
PL. 25-5	一辺に刃部を片面から設けている。						
Fig. 54-6	棒状石器	(6.3)	2.4	1.2	27.7	緑色片岩	覆土
PL. 25-5	中間部分から刃部にかけて欠損する。基端部は僅かに欠損する。						
Fig. 54-7	棒状石器	11.9	3.2	1.2	86.8	雲母石英片岩	覆土
PL. 25-5	扁平な石である。端部は丸味がある。潰れたものかは不明。						
Fig. 54-8	叩き石	15.0	5.6	4.2	575.0	輝緑岩	覆土
PL. 25-5	断面三角形の叩き石である。各面や辺が潰れており、面の高い部分が磨り減っている。						
Fig. 54-9	磨石	8.4	4.5	1.7	108.2	輝石安山岩	覆土
PL. 25-5	表裏面とも磨っている。表面には僅かに使用痕がある。側面も磨った状況が観察できる。						
Fig. 54-10	磨石	(7.7)	8.9	3.2	300.0	輝石安山岩	覆土
PL. 25-5	2分の1を欠損する。表裏面とも石器中央に凹がある。表裏面は磨った状況であることが観察できる。						

13区 8号住居址出土遺物一覧表 (石器)

挿図番号	石器の種類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	出土位置
図版番号	説明						
Fig. 54-11	凹石	8.1	5.8	2.6	184.4	輝石安山岩	覆土
PL. 25-5	表面中央部に凹がある。表裏面とも平滑である。						

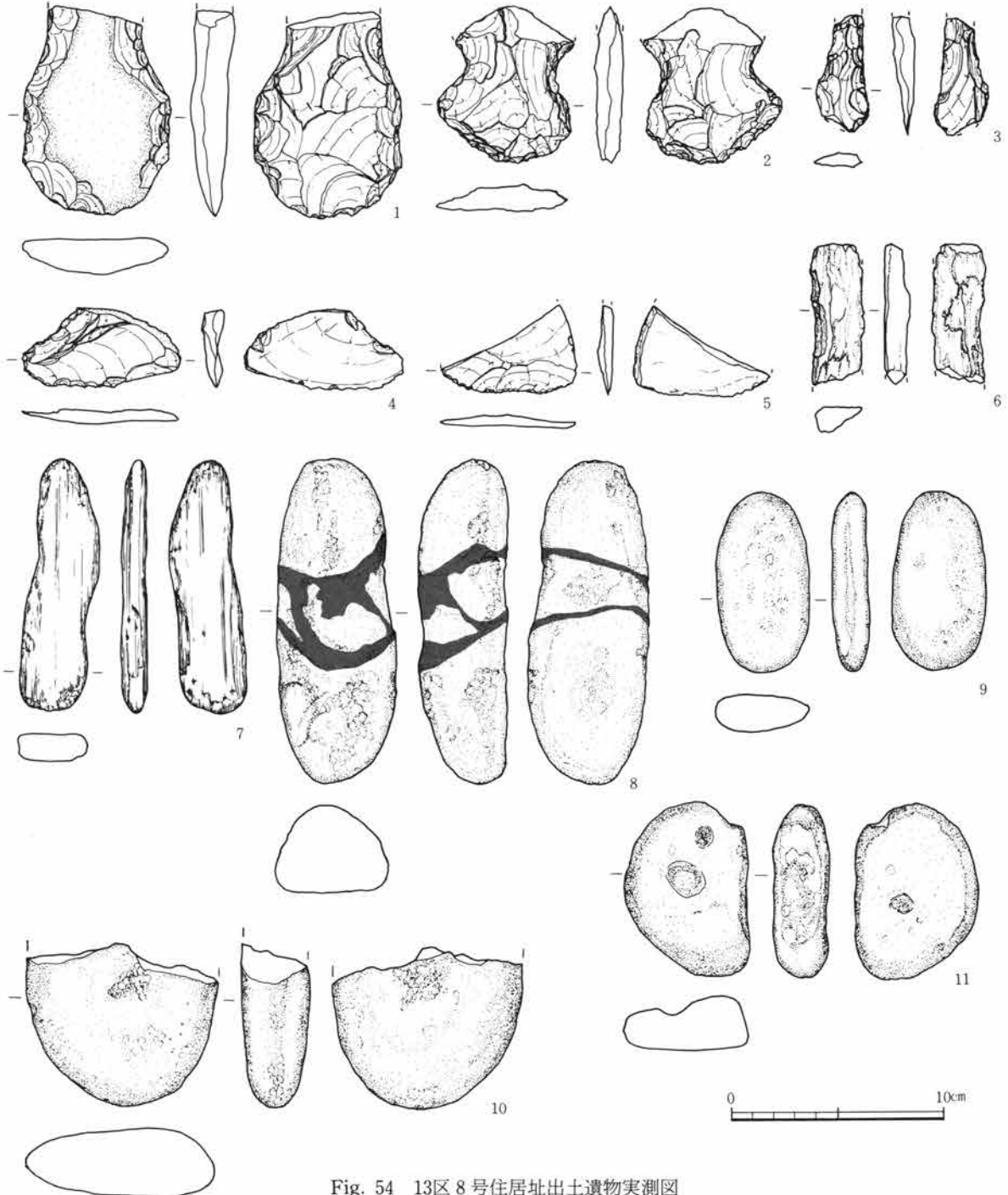


Fig. 54 13区 8号住居址出土遺物実測図

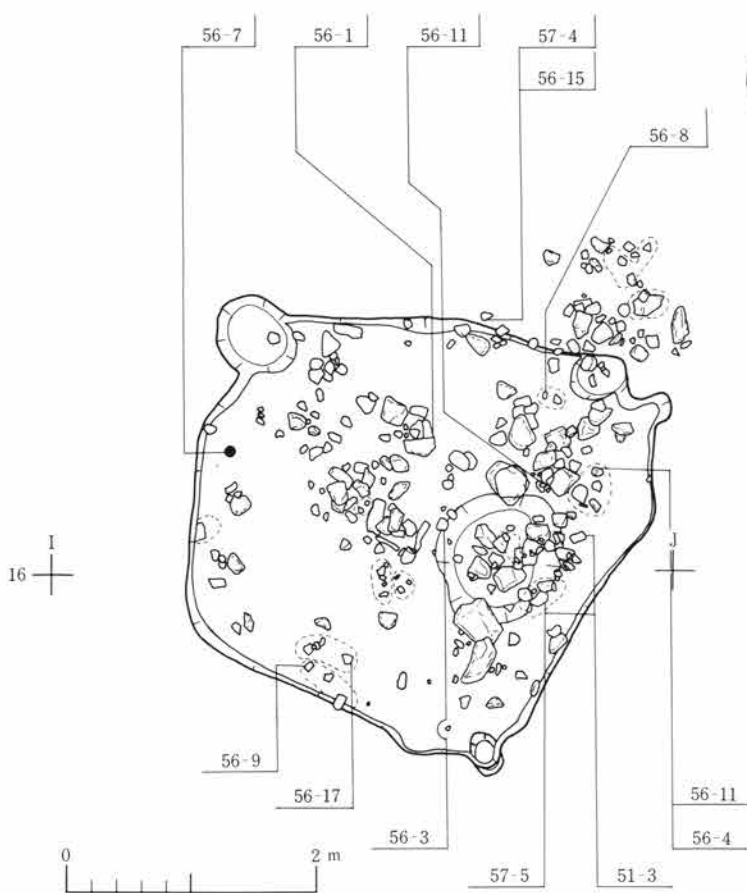


Fig. 55 13区8号住居址内落ち込み遺物出土状況図

13区8号住居址内落ち込み

(Fig. 55、PL. 26-1・2)

8号住居址中央付近に不整形な落ち込みとして検出された当遺構は、8号住居址に付づいた施設として考えたい。当遺構の規模は、長軸3.44m、短軸3.34m、深さ22cmである。概ね一辺の方位(西壁)はN-15°-Eである。この遺構の壁を切るようにP2、P13、P15が存在する。また落ち込み床面は、ほぼ平坦である。この床面に炉址がある。炉址の規模は、長軸116cm、短軸96cm、深さ20cmである。炉址は楕円形を呈し、床面には礫を敷いている。この落ち込みの覆土には住居址同様、陣場泥流中に含まれる角礫が多数混入している。

13区8号住居址内落ち込み出土遺物一覧表(土器)

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 56-1	深鉢・口・胴部	覆土	白色鉱物混入	赤橙	LR	VI-2	
PL. 26-3	キャリバー形を呈す大型の深鉢である。口縁部に隆帯と沈線による渦巻等の文様を描き、円形刺突をもつ、胴部には内部磨消となる懸垂文をもち、地文に縄文を施す。						
Fig. 56-2	深鉢・胴部	覆土	白粒・礫混入	淡橙	条線文	VI-2	
PL. 26-4	キャリバー形を呈する深鉢の胴部である。口縁部は太い沈線による文様が施され、胴部には内部磨消となる懸垂文及び蛇行する懸垂文をもち、地文に細い条線が施される。						
Fig. 56-3	深鉢・口・胴部	床面・覆土	白粒・礫混入	にぶい橙	RL	VII	
PL. 26-5	キャリバー形を呈する大型の深鉢である。器面全体に沈線による『∩』状の文様を配し、先端或いは両端が蕨手となる懸垂文をもち、磨り消しを行なう。地文には縄文を施す。						

13区8号住居址内落ち込み出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 56-4	深鉢・底部	覆土	砂質	にぶい橙	RL	VI~VII	
PL. 27-1	深鉢の底部で、胴部下半には内部磨消となる懸垂文と、地文の縄文が見られる。						
Fig. 56-5	深鉢・底部	覆土	小礫混入	橙		?	
PL. 27-2	深鉢の底部で、胴部下半には懸垂文が見られる。						
Fig. 56-6	深鉢・口縁部	覆土	小礫混入	橙	LR	VI-1	
PL. 27-3	口縁部に隆帯と沈線により渦巻等の文様を描き、地文に縄文を施す。						
Fig. 56-7	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	橙	RL	VI-2	
PL. 27-3	口縁部に沈線で文様区画を行ない、地文には縄文を施す。						
Fig. 56-8	深鉢・口縁部	覆土	雲母・礫混入	浅黄	LR	VI	
PL. 27-3	口縁部に太い沈線と隆帯により文様を描き、区画内に縄文を施す。						
Fig. 56-9	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	灰黄褐	RL	VII	
PL. 27-3	波状口縁となり、口縁部に太い沈線による渦巻等の文様を描き、区画内に縄文を施す。						
Fig. 56-10	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	橙	RL	VI	
PL. 27-3	口縁部に隆帯と沈線により文様を描き、区画内に縄文を施す。						
Fig. 56-11	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	浅黄橙	LR	VI	
PL. 27-3	口縁部に隆帯と沈線により文様を描き、区画内に縄文を施す。						
Fig. 56-12	深鉢・口縁部	覆土	白粒・礫混入	橙	RL	VII	
PL. 27-3	口縁部に隆帯と沈線による文様を描き、胴部には沈線による懸垂文や、『∩』状の文様が描かれ、磨り消しをもつ。地文には縄文が施される。						
Fig. 56-13	深鉢・胴部	覆土	小砂少数混入	にぶい橙	LR	VI~VII	
PL. 27-3	胴部に懸垂文をもち、地文に縄文を施す。						
Fig. 56-14	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	にぶい橙		VII	
PL. 27-3	口縁部に隆帯と沈線により文様を描き、区画内に刺突を施す。						
Fig. 56-15	深鉢・口縁部	覆土	白粒・礫混入	にぶい橙	RL	VI~VII	
PL. 27-3	口縁部に隆帯と沈線により文様を描き、胴部には内部磨消となる懸垂文をもつ。地文には縄文を施す。						
Fig. 56-16	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	にぶい橙		VII	
PL. 27-3	口縁部が狭い無文帯となり1条の沈線を巡らせる。胴部には沈線による大きな波状及び『∩』状に文様を配し、区画内に縄文を施す。						
Fig. 56-17	土錘（完形）	覆土	砂質	橙	RL		
PL. 27-4	土器片を使用した土錘で、文様は不明である。長径約4.0cm、短径約3.1cm、厚さ0.9cm、重さ12.86gである。						

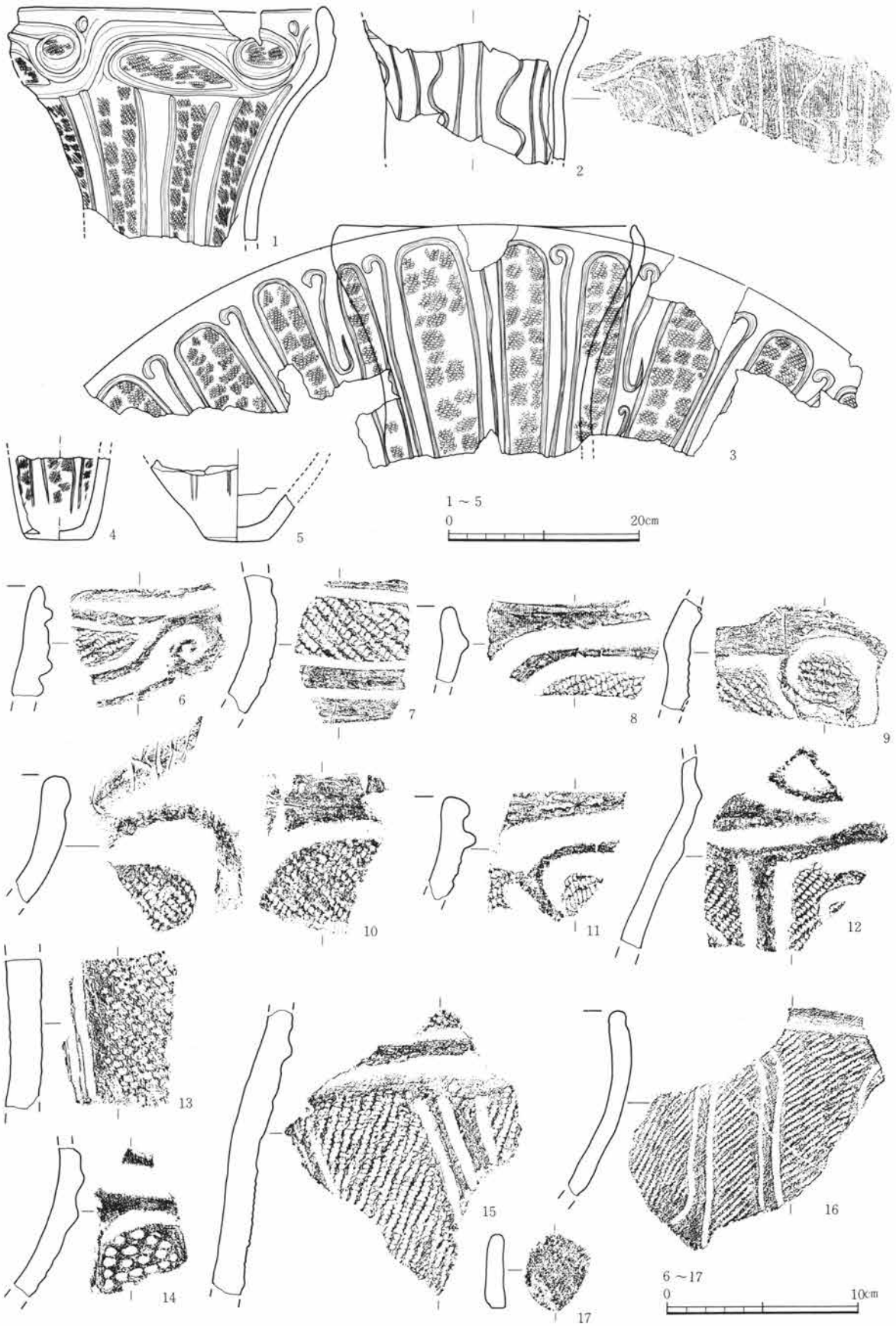


Fig. 56 13区8号住居址内落ち込み出土遺物実測図

13区 8号住居址内落ち込み出土遺物一覧表 (石器)

挿図番号	石器の種類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	出土位置
図版番号	説明						
Fig. 57-1	磨石	15.0	5.8	4.7	630.0	輝緑岩	覆土
PL. 27-5	石器全体が風化している。一部分に磨った部分と叩いた状況の痕がある。						
Fig. 57-2	打製石斧	(5.8)	9.2	3.0	210.0	灰色安山岩	覆土
PL. 27-5	刃部のみ残存する。表面は自然面が広く残る。刃部調整は表面が主である。自然面に使用痕が確認できる。						
Fig. 57-3	スクレイパー	(8.4)	4.3	2.3	67.7	黒色頁岩	覆土
PL. 27-5	断面は三角形を呈す。片面は入念に刃部の調整を行なっている。一部分を欠損する。						
Fig. 57-4	打製石斧	13.0	10.3	2.5	310.0	黒色安山岩	覆土
PL. 27-5	大型の剥片を利用し、二辺に刃部を付けている。表面には使用痕と磨耗痕がある。						
Fig. 57-5	打製石斧	(6.0)	4.7	1.9	73.4	灰色安山岩	覆土
PL. 27-5	基部付近が残存する。基端部は上方からの力により一部欠損。裏面は横方向からの剥離を行なっている。						

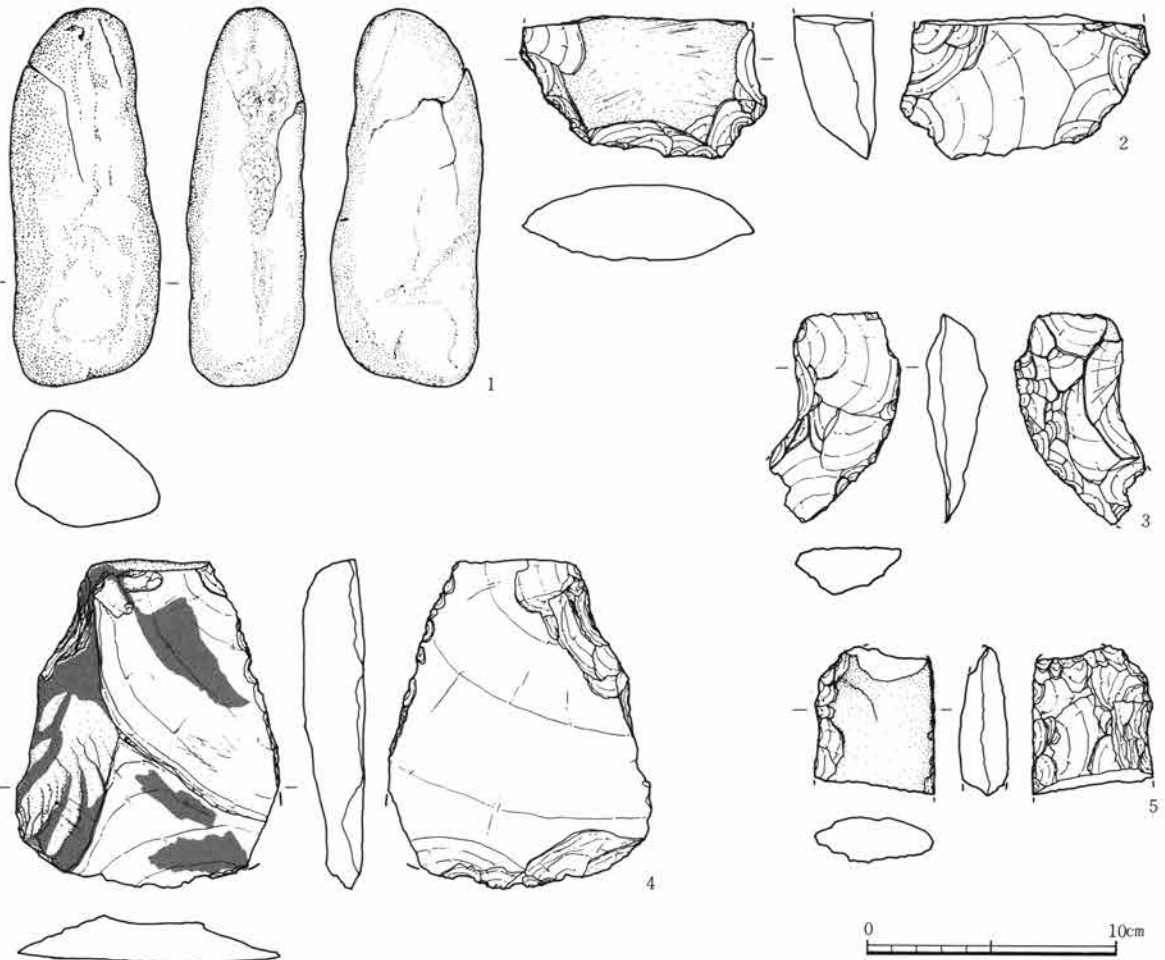


Fig. 57 13区 8号住居址内落ち込み出土遺物実測図

13区9号住居址 (Fig. 58・59、PL. 28-1・2、29-1)

9号住居址はJ・K-15・16グリッドに広がりをもち、西側に近接して8号住居址の東壁がある。東側は下り斜面であり、沖積低地がある。現在は水田となっている。住居址はほぼ楕円形を呈し、長軸7.8m、短軸

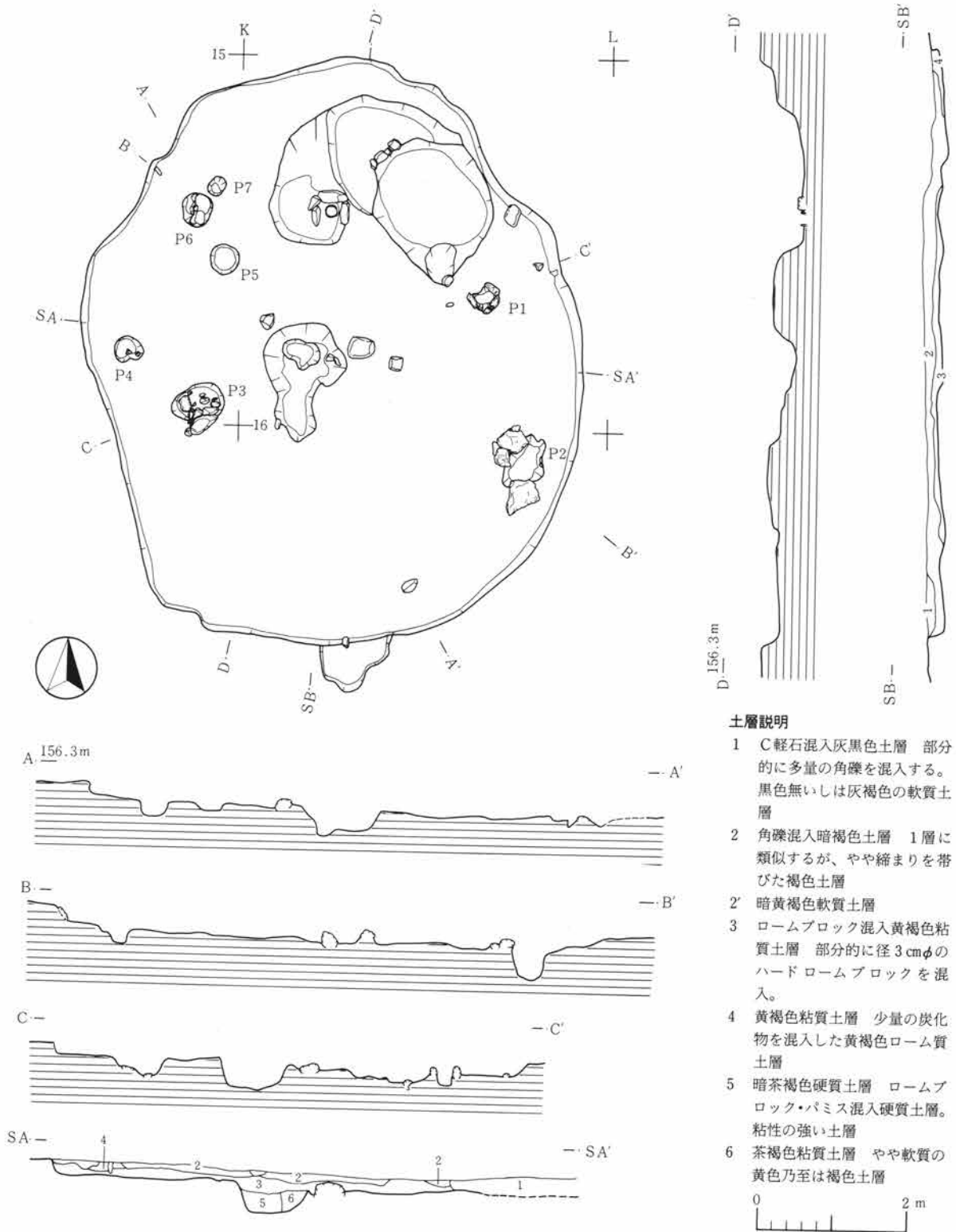


Fig. 58 13区9号住居址実測図

6.4mである。遺構確認面から床面までは北壁および西壁で約20cmで比較的良く残り、南東壁は僅か数cmの確認であった。炉址は住居址北側に不整な掘り込みが連続して3ヶ所ある。このうちの西側は方形（南側の石を欠く）石組中央に埋設土器を持つ。規模は東西52cm、南北約47cm、深さ60cmである。3連続の落ち込み状の遺構は全体の長さ2.86m、深さは西側よりそれぞれ、60cm、40cm、59cmである。

また住居址中央には不整形な落ち込みがある。規模は南北1.6m、東西1.09mであり、深さは中段に平坦面をもつ2段掘りになっている。柱穴の確認できた数は7地点であるが、全体の規格性を見出すことは不可能である。当住居址の柱穴は、柱穴掘り方部分の床面の接点を石で詰める様相を呈していることが明瞭である。

P 1 不整形であり床面の接点を石で詰めている。長軸46cm、短軸40cm、深さ24cmである。

P 2 不整形を呈しており、周囲に石を設置している。長軸80cm、短軸56cm、深さ36cmである。

P 3 ほぼ楕円形を呈し多くの小礫を入れている。長軸76cm、短軸56cm、深さ20cmである。

P 4 僅かに歪んだ円形を呈す。長軸40cm、短軸36cm、深さ23cmである。

P 5 円形を呈す。径40cm、深さ3cmである。

P 6 ほぼ楕円形を呈す。長軸46cm、短軸40cm、深さ20cmである。

P 7 ほぼ楕円形を呈す。長軸26cm、短軸20cm、深さ39cmである。

13区9号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 60-1	深鉢・口縁部	覆土	砂質	にぶい黄橙	RL	VI-2	
PL. 29-2	口縁が内反し、頸部でかなりくびれる深鉢である。口縁と頸部に太い沈線が巡らされ、その間に口縁部文様が施文される。文様は縦位の「S」字状の沈線文と、弧状沈線文である。地文には縄文を施す。なお頸部沈線間には刻目状の刺突が施される。						
Fig. 60-2	蓋	床面	小礫少数混入	淡黄		VI-2	
PL. 29-4	表面に孔を有する摘部をもつ円形の蓋である。						
Fig. 60-3	深鉢・口・胴部	炉址内埋設土器	雲母・礫混入	橙	LR	VI-2	
PL. 29-3	キャリパー形のややくずれた深鉢である。口縁部には太い沈線による波状文が描かれる。胴部には縦位の楕円が描かれ、この楕円区画内を磨消及び「S」字状の沈線が施文される。地文には縄文を施す。						
Fig. 60-4	深鉢・胴部	覆土	雲母・礫混入	赤	燃糸文	II~IV	
PL. 29-5	胴部に縦位の細い燃糸文を施す。						
Fig. 60-5	深鉢・口縁部	覆土	雲母・礫混入	にぶい橙	RL	III-2	
PL. 30-1	口縁部文様の隆帯による渦巻文が把手状となり、また隆帯及び沈線により文様が施され、地文に縄文を施す。						
Fig. 60-6	深鉢・口・胴部	床面	白粒・礫混入	橙	RL	VI-2	
PL. 30-1	口縁が小波状となり、口縁部に隆帯及び太い沈線により渦巻等の文様が描かれ、胴部には内部磨消となる懸垂文をもつ。地文には縄文を施す。						

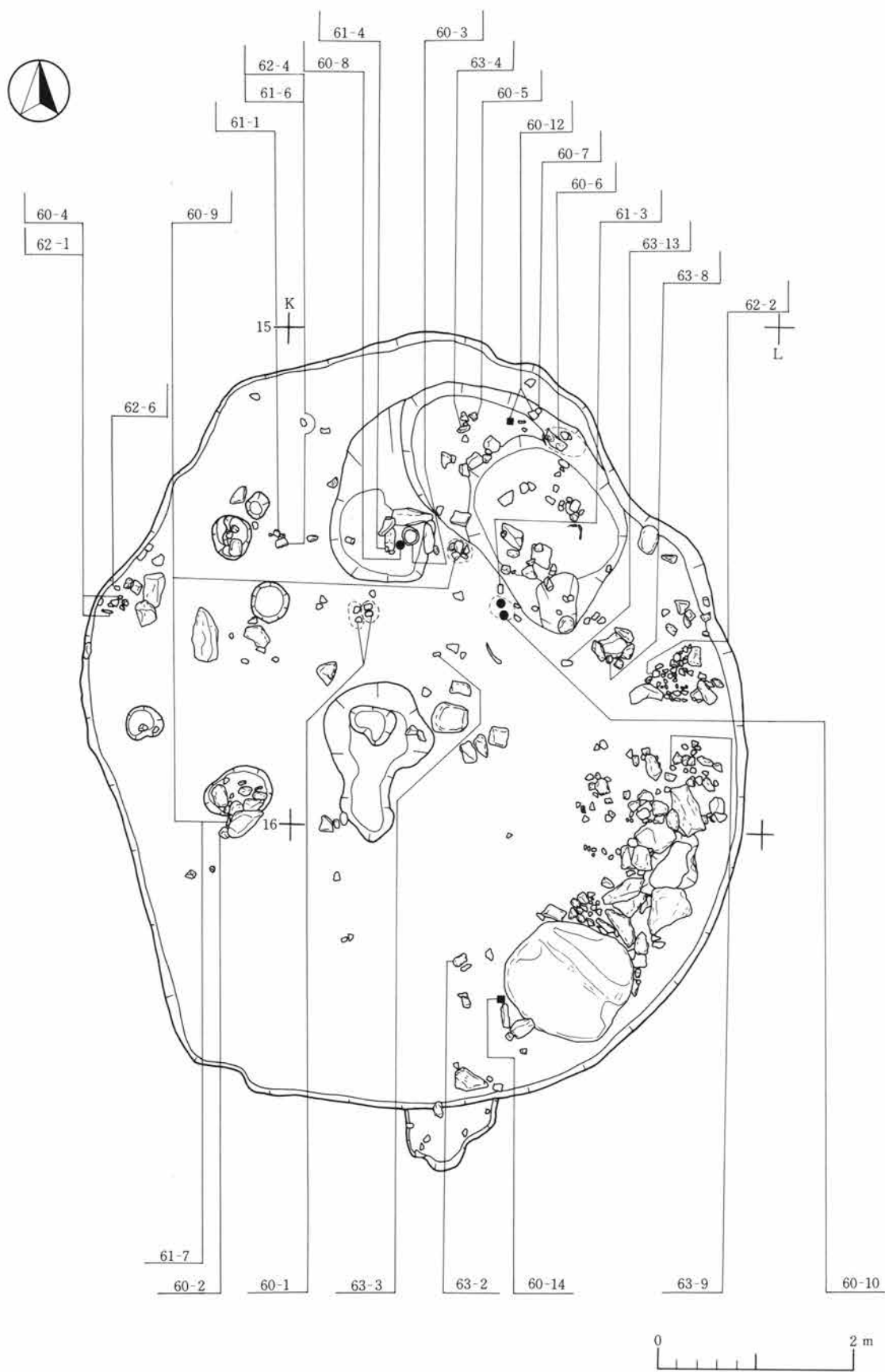


Fig. 59 13区9号住居址遺物出土状況図

13区9号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 60-7	深鉢・口縁部	覆土	白粒・礫混入	にぶい橙	LR	VII	
PL. 30-1	口縁が小波状となり、口縁部に隆帯及び太い沈線により渦巻等の文様が描かれ、胴部には内部磨消となる懸垂文をもつ。地文には縄文を施す。						
Fig. 60-8	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	にぶい橙	撚糸文	VII	
PL. 30-1	口縁部が隆帯により二重口縁状となり、文様には太い沈線による渦巻、楕円等が描出される。胴部には縦位に撚糸文を施す。						
Fig. 60-9	深鉢・胴部	覆土	白色鉱物混入	にぶい橙	RL	VI~VII	
PL. 30-1	胴部に内部磨消となる懸垂文をもち、地文に縄文を施す。						
Fig. 60-10	深鉢・胴部	覆土	白色鉱物混入	橙	RL	VI~VII	
PL. 30-1	胴部に内部磨消となる懸垂文及び蛇行する懸垂文をもち、地文には縄文を施す。						
Fig. 60-11	深鉢・胴部	覆土	白色鉱物混入	にぶい橙	RL	VI~VII	
PL. 30-1	胴部に内部磨消となる懸垂文及び蛇行する懸垂文をもち、地文には縄文を施す。						
Fig. 60-12	深鉢・胴部	床面・覆土	石英混入	にぶい橙	RL	VII	
PL. 30-1	口縁部に太い沈線による文様が描かれ、胴部には懸垂文及び「 \cap 」状の沈線文を施し、磨消をもつ。地文には縄文を施す。						
Fig. 60-13	深鉢・胴部	覆土	石英混入	橙	RL	VII	
PL. 30-1	胴部に縦位の楕円文及び先端が蕨手となる懸垂文をもち、楕円区画内には縄文を施す。						
Fig. 60-14	深鉢・胴部	床面	白色鉱物混入	橙	RL	VI	
PL. 30-1	頸部に連続する刻目状の刺突を巡らせ、以下に縄文を施す。						
Fig. 61-1	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	橙	RL	VIII	
PL. 30-2	口縁部が無文となり、1条の沈線を巡らせる。胴部には沈線による曲線が描かれ区画内部に縄文を施す。						
Fig. 61-2	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	にぶい橙	RL	VIII	
PL. 30-2	口縁部が無文となり、1条の沈線を巡らせ、以下には縄文を施す。						
Fig. 61-3	深鉢・口縁部	覆土	夾雑鉱物混入	にぶい橙	LR	VIII	
PL. 30-2	口縁部が無文となり、1条の沈線を巡らせ、以下には縄文を施す。						
Fig. 61-4	深鉢・口縁部	覆土	砂質	にぶい橙	条線文	VIII	
PL. 30-2	口縁部が無文となり、1条の沈線を巡らせ、以下には縦位の条線を施す。						
Fig. 61-5	深鉢・口縁部	覆土	夾雑鉱物混入	橙	RL	VIII	RL (0段多条)
PL. 30-2	口縁部が無文となり、1条の沈線を巡らせ、以下には縄文を施す。						

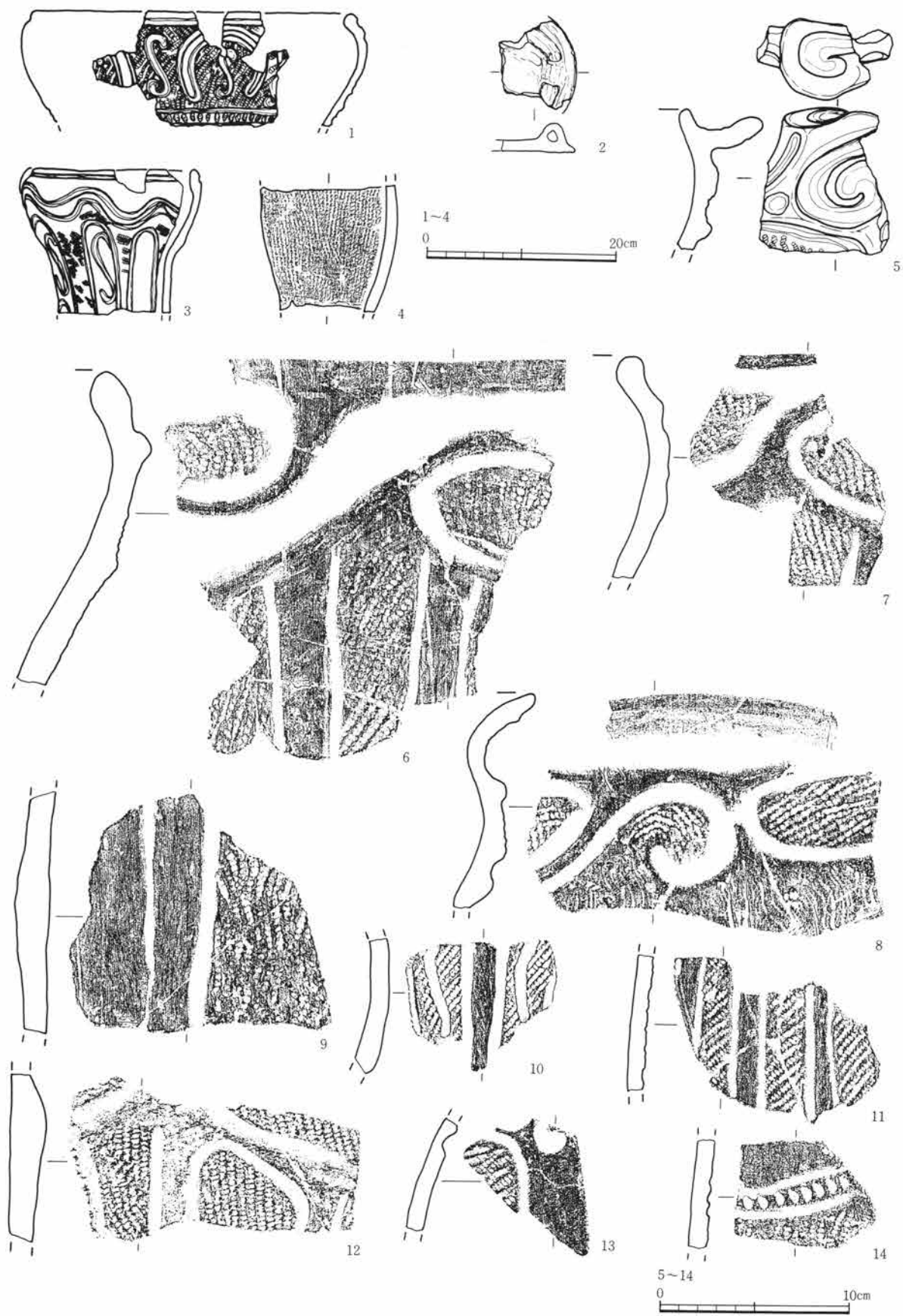


Fig. 60 13区9号住居址出土遺物実測図

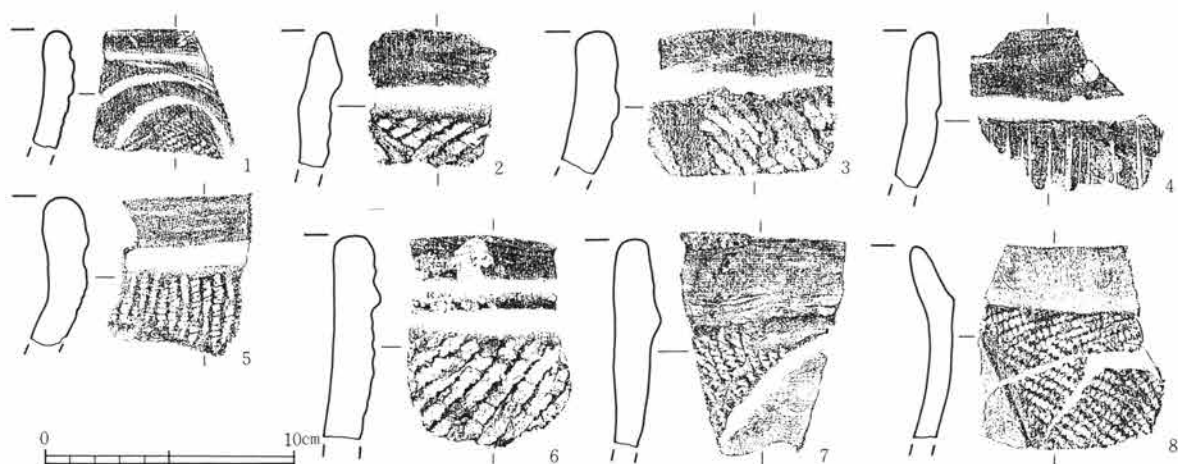


Fig. 61 13区9号住居址出土遺物実測図

13区9号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
Fig. 61-6	深鉢・口縁部	床面	白色鈹物混入	にぶい橙	RL	VIII	
PL. 30-2	口縁部が無文となり、2条の沈線を巡らせ、以下には縄文を施す。						
Fig. 61-7	深鉢・口縁部	覆土	白色鈹物混入	橙	LR	VIII	
PL. 30-2	口縁部が無文となり、1条の微隆帯を巡らせる。胴部には微隆帯による「∩」状の文様を区画し、区画内に縄文を施す。						
Fig. 61-8	深鉢・口縁部	覆土	黒色鈹物混入	浅黄橙	LR	VIII	
PL. 30-2	口縁部が無文となり、1条の微隆帯を巡らせる。胴部には微隆帯による「∩」状の文様を区画し、区画内に縄文を施す。						
Fig. 62-1	深鉢・胴部	覆土	白・黒粒子混入	明黄褐	LR	VIII	
PL. 30-4	口縁から胴部にかけてくびれ、胴部下半でややふくらむ深鉢である。						
Fig. 62-2	深鉢・口縁部	覆土	白色鈹物混入	明赤褐		VIII	
PL. 30-5	波状口縁となる口縁部の表面に沈線を1条もち、裏面には先端が蕨手状になる太い沈線を施す。						
Fig. 62-3	深鉢・口縁部	覆土	砂質	褐灰	RL	VI	
PL. 30-5	口縁部に隆帯と沈線による文様を描き、地文に縄文を施す。						
Fig. 62-4	深鉢・口縁部	床面	小礫少数混入	にぶい橙	RL	VI	
PL. 30-5	口縁部に太い沈線で文様を区画し、区画内に縄文を施す。						
Fig. 62-5	深鉢・口縁部	覆土	黒色鈹物混入	にぶい赤褐	LR	VII	
PL. 30-5	口縁部に太い沈線により渦巻等の文様を描き、地文に縄文を施す。						

13区9号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説 明						
Fig. 62-6	深鉢・口縁部	覆 土	白色鈳物混入	赤	LR	VII	
PL. 30-5	波状口縁となり、口縁部に太い沈線により渦巻等の文様を描き、地文に縄文をもつ。						
Fig. 62-7	深鉢・口縁部	覆 土	白粒・礫混入	にぶい橙	RL	VIII	
PL. 30-5	内反する波状口縁で、口縁部に太い沈線をもち、つまみ状の把手を有する。胴部には「八」状に文様を描き、区画内を磨消する。地文には縄文をもつ。						
Fig. 62-8	深鉢・口縁部	覆 土	砂 質	橙	LR	VII	
PL. 30-5	口縁がやや内反し、口縁部が狭い無文帯となり1条の沈線を巡らせ、以下に縄文を施す。						
Fig. 62-9	深鉢・口縁部	覆 土	白色鈳物混入	浅黄橙	RL	VIII	
PL. 30-5	口縁がやや内反し、口縁部が狭い無文帯となり以下に縄文を施す。						
Fig. 62-10	深鉢・口縁部	覆 土	白色鈳物混入	浅黄橙		VII	
PL. 30-5	口縁部に1条の沈線を巡らせ、胴部に沈線で「〇」状に描く。						
Fig. 62-11	深鉢・胴部	覆 土	白色鈳物混入	にぶい橙	LR	VI~VII	
PL. 30-5	胴部に内部磨消となる懸垂文をもち、地文に縄文を施す。						
Fig. 62-12	深鉢・胴部	覆 土	白色鈳物混入	にぶい橙	RL	VI~VII	
PL. 30-5	胴部に内部磨消となる懸垂文をもち、地文に縄文を施す。						
Fig. 62-13	深鉢・口縁部	覆 土	小礫混入	赤		VIII	
PL. 30-5	口縁部に平行沈線をもつ。						
Fig. 62-14	深鉢・胴部	覆 土	白色鈳物混入	浅黄橙	RL	VI~VII	
PL. 30-5	胴部に内部磨消となる懸垂文と蛇行する懸垂文をもち、地文には縄文を施す。						
Fig. 62-15	深鉢・胴部	覆 土	黒色鈳物混入	橙		VII	
PL. 30-5	胴部に連続刺突をもつ平行沈線をもち、先端が蕨手状になる懸垂文及び「〇」状の文様。						
Fig. 62-16	深鉢・胴部	覆 土	砂 質	橙	RL	VII	
PL. 30-5	胴部に沈線で二重の「〇」状の文様を描き、区画内を磨消する。地文には縄文を施す。						
Fig. 62-17	深鉢・胴部	覆 土	黒色鈳物混入	にぶい赤褐	LR	III-1	
PL. 30-5	胴部に懸垂文をもち、地文に縄文を施す。						
Fig. 62-18	深鉢・胴部	覆 土	小礫混入	にぶい橙	RL	III-2	
PL. 30-5	胴部に懸垂文をもち、内部に楕円文を描き、磨消を行なう。地文には縄文を施す。						
Fig. 62-19	深鉢・口縁部	覆 土	白色鈳物混入	赤 褐	LR	VI-1	
PL. 30-5	口縁部に隆帯と沈線で文様を描き、胴部に懸垂文をもつ。地文には縄文を施す。						

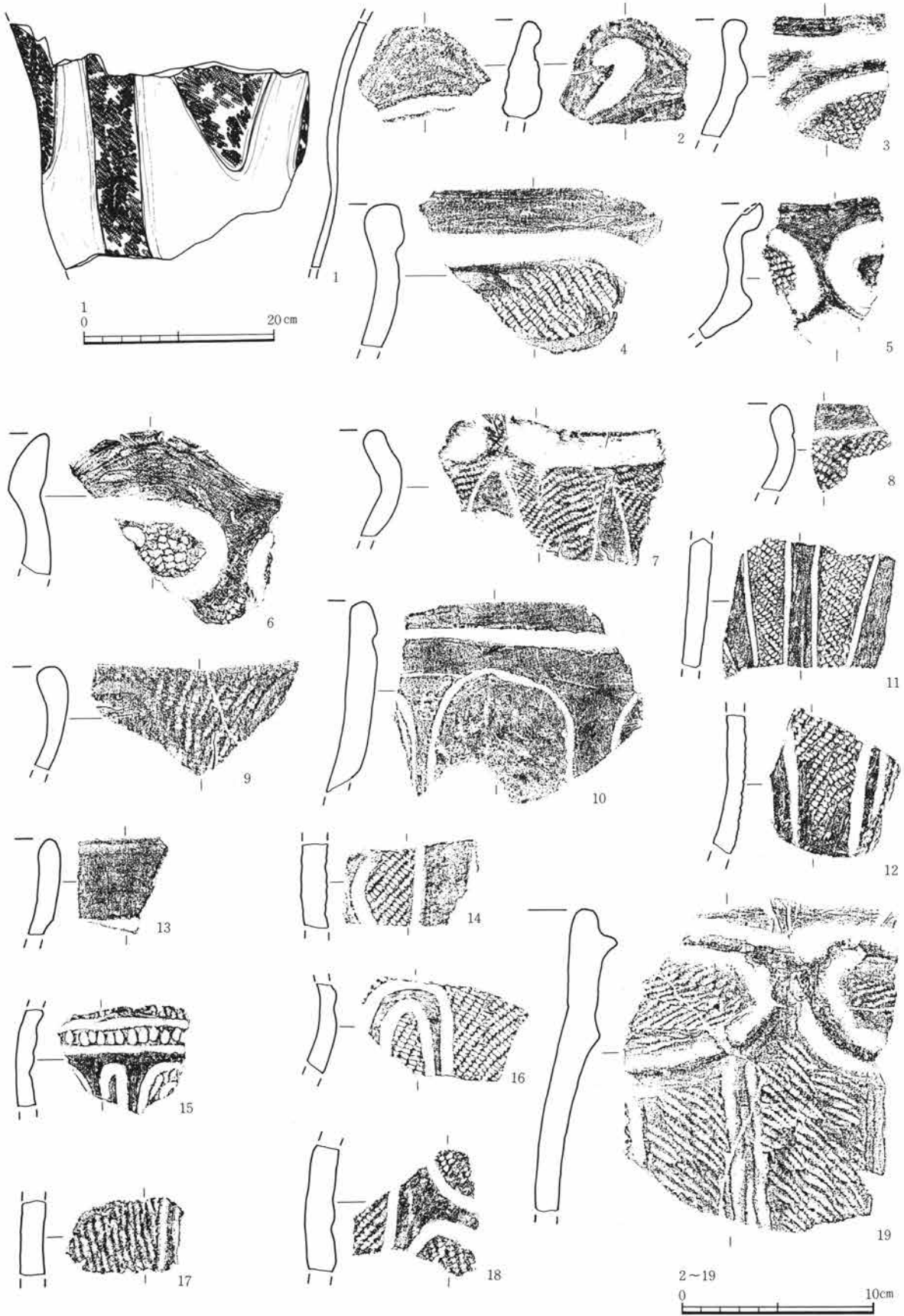


Fig. 62 13区9号住居址出土遺物実測図

第3章 各 説

13区9号住居址出土遺物一覧表（石器）

挿図番号	石器の種類	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石 質	出 土 位 置
図版番号	備 考						
Fig. 63-1	打製石斧	(9.4)	5.0	2.8	143.0	黒色頁岩	覆土
PL. 30-3	刃部を欠損する。表面は自然面を多く残す。裏面は横方向からの剥離後、表裏面とも細部調整を行なっている。						
Fig. 63-2	打製石斧	11.5	4.4	1.2	64.5	輝石安山岩	覆土
PL. 30-3	基部は一部を欠損する。比較的薄い。主に表裏面とも横方向からの剥離後、細部調整を行なっている。						
Fig. 63-3	打製石斧	9.4	3.6	1.6	69.0	輝緑岩	床面
PL. 30-3	短冊形を呈す。裏面には自然面が残る。刃部は表裏面とも細かい調整を行なっているが磨耗が激しい。						
Fig. 63-4	打製石斧	13.6	5.8	2.9	270.0	輝石安山岩	覆土
PL. 30-3	刃部を欠損する。表面には自然面が残る。剥離は表裏面とも横方向から行なっている。作り方は荒い。						
Fig. 63-5	打製石斧	(9.8)	5.0	1.9	119.8	安山岩	覆土
PL. 30-3	短冊形を呈すと考えられる。基部を欠損する。裏面には自然面が残り使用痕がある。刃部は再調整を行なっている。						
Fig. 63-6	剥片石器	8.0	4.5	1.0	29.5	黒色頁岩	覆土
PL. 30-3	剥片を利用し、側縁片側を表面から細部調整を行なっている。						
Fig. 63-7	打製石斧	(6.7)	4.8	2.0	67.4	黒色頁岩	覆土
PL. 30-3	中間部分から基部にかけて欠損する。刃部も一部欠損する。表裏面とも横方向からの剥離後、細部調整を行なっている。						
Fig. 63-8	打製石斧	(8.0)	4.6	2.1	81.8	灰色安山岩	床面
PL. 30-3	刃部および基端部を欠損する。表裏面とも横方向からの剥離後、細部調整を行なっている。風化が著しい。						
Fig. 63-9	打製石斧	(6.0)	4.8	1.2	41.2	黒色頁岩	覆土
PL. 30-3	刃部および基部を欠損する。形状は撥形と推測できる。表裏面とも横方向の剥離を行なっている。						
Fig. 63-10	打製石斧	(5.8)	4.0	1.4	34.1	輝石安山岩	覆土
PL. 30-3	刃部および基端部を欠損する。表裏面とも横方向の剥離後、細部調整を行なっている。						
Fig. 63-11	剥片石器	(9.6)	4.7	1.1	27.7	黒色頁岩	覆土
PL. 30-3	剥片に僅かな調整を行なっており、刃部を形成している。						
Fig. 63-12	磨石	11.3	8.0	5.6	760.0	輝石安山岩	覆土
PL. 30-3	両端部が欠損している。表裏面は磨っており滑らかである。周縁部分は僅かに叩いた痕がある。						
Fig. 63-13	磨石	8.6	7.1	3.4	295.0	石英閃緑岩	床面
PL. 30-3	全体に磨った様相を呈し、表裏面の中央付近と側縁部分に叩いた痕がある。片側面に煤の付着がある。						

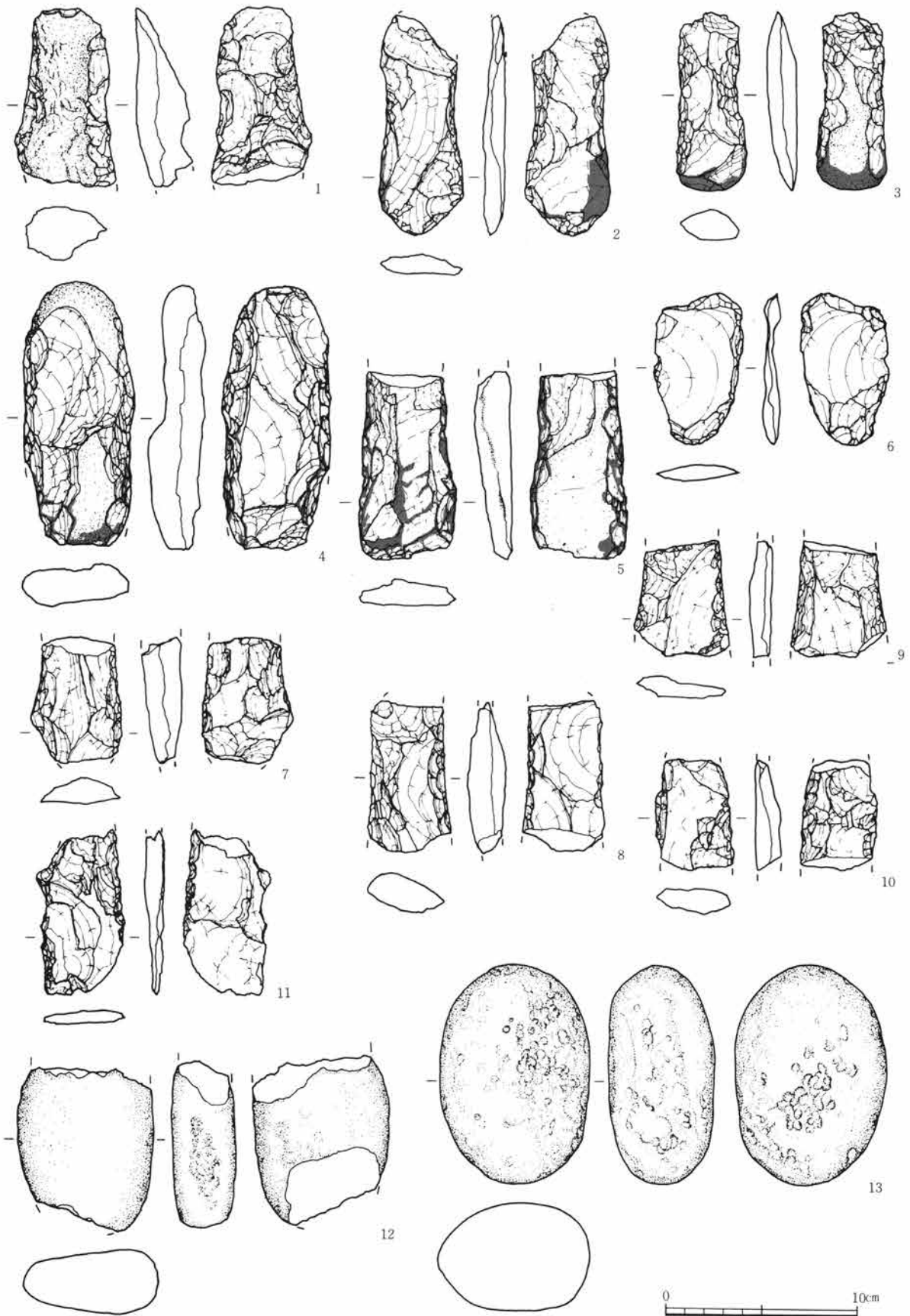


Fig. 63 13区9号住居址出土遺物実測図

13区10号住居址 (Fig. 64・65、PL. 31-1・2、32-1・2)

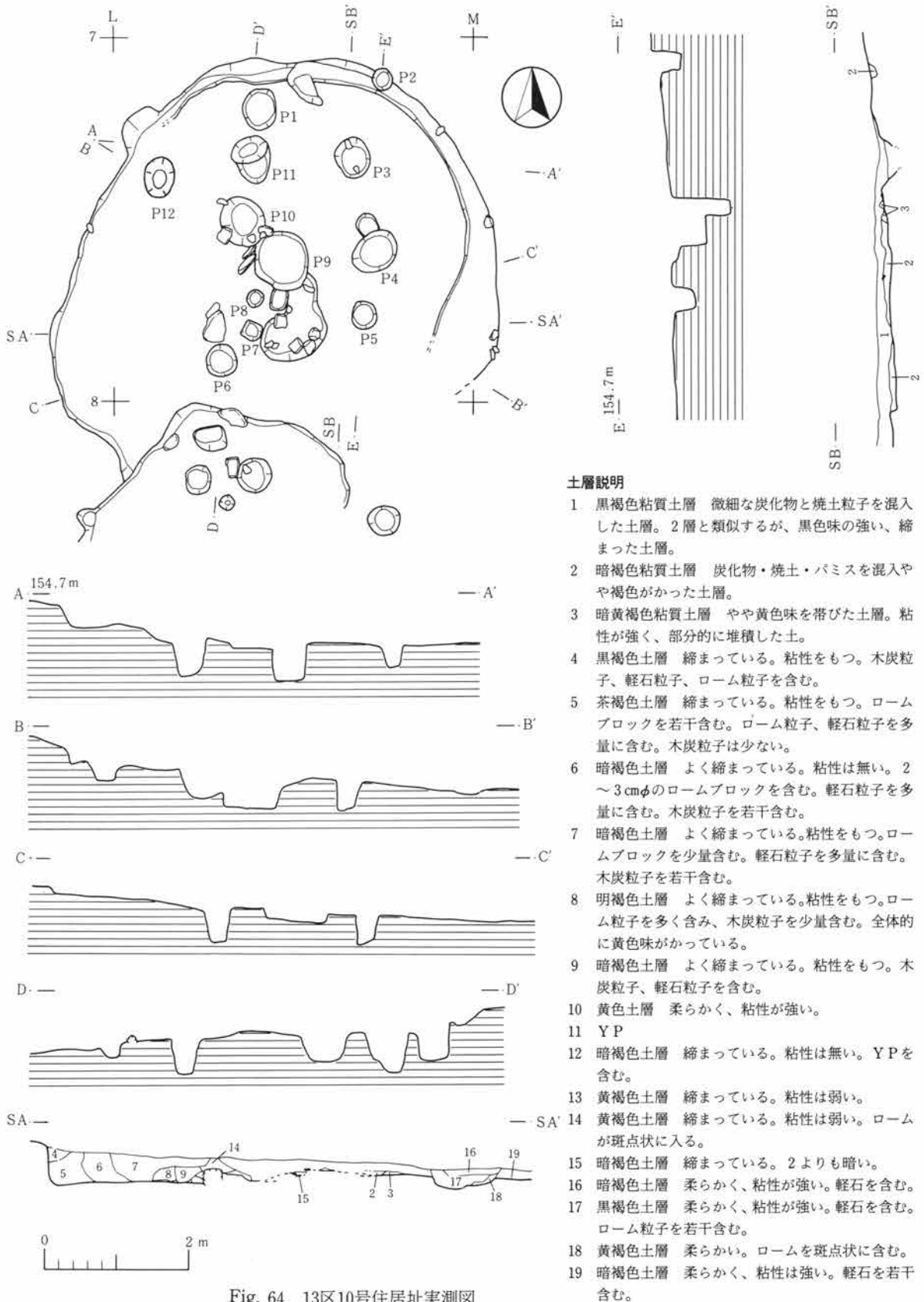


Fig. 64 13区10号住居址実測図

10号住居址はK・L・M-7・8グリッドに広がりをもつ。陣場泥流残丘の北東裾部に位置しており、南側を11号住居址の北側壁部分の構築時点で切られている。住居址の形状は、楕円形を呈しており、規模は長軸約6.52m、短軸約5.56mを測定できる。住居址の長軸方位はN-35°-Eである。床面は不安定である。床面のほぼ中央には不整形な落ち込みがあり、いくつかの石がある。焼土は未検出であるが炉になる可能性がある。規模は長軸約1.14m、短軸約90cm、深さ約40cmである。柱穴は12個あり、そのうちのP1、P3、P4、P5、P6、P12で形状、深さから推測してほぼ環状になることから主柱穴の可能性のあることを示唆することができよう。また、住居址の床面北側を中心に、壁直下に溝（壁溝）が確認できた。幅約38cm、深さ約6cmである。

13区10号住居址柱穴の規模

柱穴名 規模cm	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
長軸×短軸	48×58	30×32	58×52	68×56	40×38	42×42	28×20	80×74	120×86	64×52	40×40	81×74
深さ	40	30	44	36	34	48	9	44	16	52	22	40

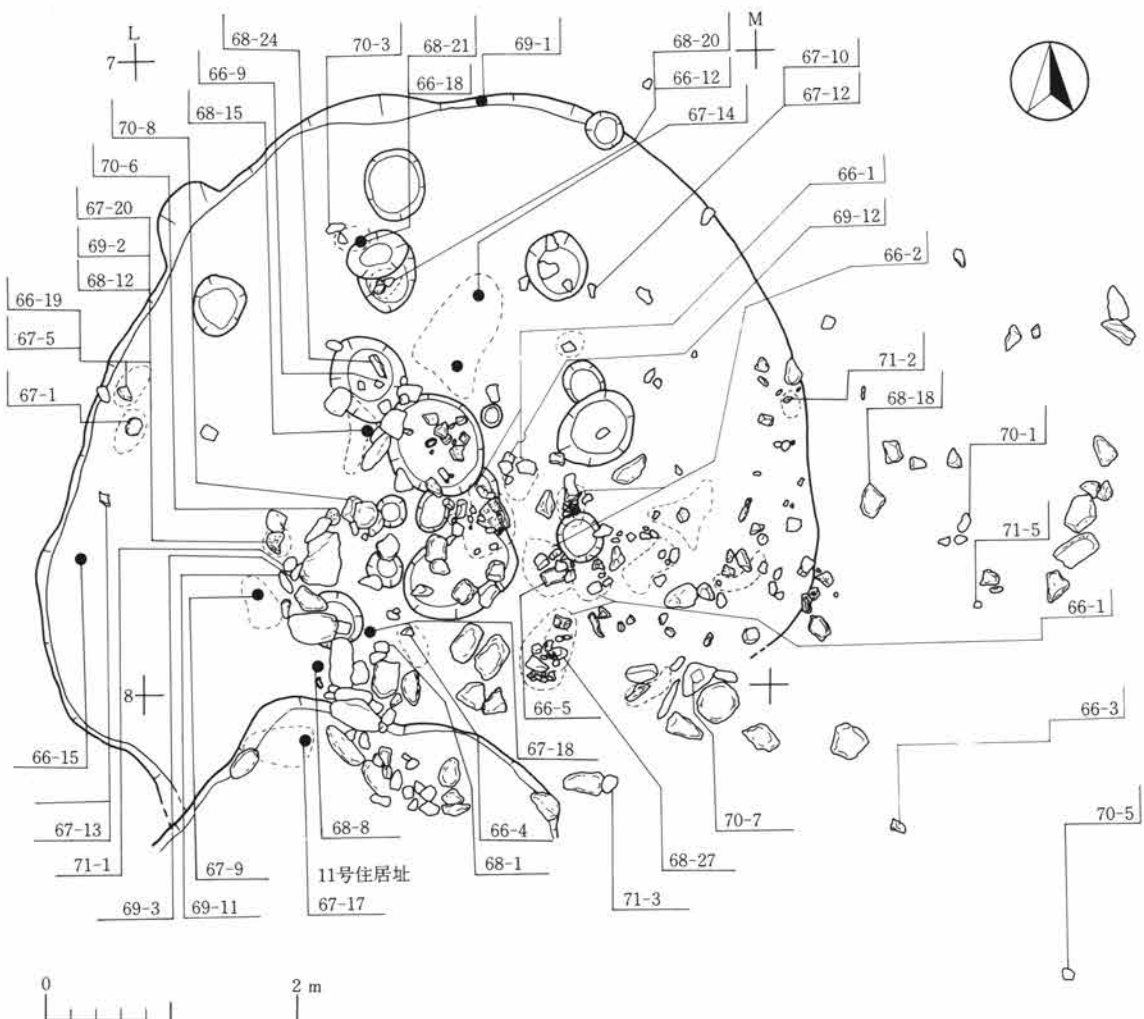


Fig. 65 13区10号住居址遺物出土状況図

第3章 各 説

13区10号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説 明						
Fig. 66-1	深鉢・口縁部	床面・覆土	白色鈳物混入	暗 褐	RL	V	
PL. 32-3	キャリパー形を呈する大型の深鉢である。口縁部に隆帯により上下を区画し、先端が渦巻となる『∩』状の隆帯文様をもち、さらに横位矢羽状の沈線を施す。胴部には懸垂文及び蛇行する懸垂文、さらには沈線文が描かれ地文に縄文を施す。						
Fig. 66-2	深鉢・口縁部	床面・覆土	白・黒粒混入	暗 褐	RL	V	
PL. 32-4	キャリパー形を呈する大型の深鉢である。口縁部に隆帯による渦巻等を配する文様区画がなされる。胴部には懸垂文及び蛇行する懸垂文がもちいられ、地文に縄文を施す。						
Fig. 66-3	深鉢・底部	覆 土	小礫混入	浅 黄 橙		?	住居址外出土
PL. 32-5	胴部がかなり開く無文の底部である。						
Fig. 66-4	深鉢・底部	覆 土	砂 質	浅 黄 橙		?	
PL. 32-5	胴部に懸垂文をもつ深鉢の底部である。						
Fig. 66-5	深鉢・口縁部	覆 土	雲母・礫混入	にぶい橙		?	
PL. 32-6	隆帯により裝飾された孔を有する把手部である。						
Fig. 66-6	深鉢・胴部	覆 土	石英混入	にぶい橙		II	
PL. 32-6	深鉢となる胴部で、沈線及び隆帯による文様裝飾が施され、特に隆帯部が把手状となる部分である。						
Fig. 66-7	深鉢・口縁部	覆 土	石英混入	浅 黄 橙	RL	VIII	
PL. 32-6	口縁部が、幅の狭い無文となり、その直下に橋状の把手を有する。胴部には縄文が施される。						
Fig. 66-8	深鉢・口縁部	覆 土	雲母・礫混入	赤 褐	RL	V	
PL. 32-6	口縁直下が無文となり沈線を1条巡らせ、その下に沈線を斜位及び隆帯で小さな把手をもつ。さらに半截竹管により文様区画を行ない、区画内に縄文を施す。						
Fig. 66-9	深鉢・口縁部	覆 土	白色鈳物混入	にぶい赤褐		V	
PL. 32-6	口縁が小さな波状となり、この波頂部に隆帯による渦巻をもち垂下させる。又、口縁部は隆帯による文様区画がなされ、区画内に横位矢羽状に沈線が施される。						
Fig. 66-10	深鉢・口縁部	覆 土	白色鈳物混入	明 赤 褐		V	
PL. 32-6	波状口縁を呈す。口縁部には隆帯による文様区画がなされ、区画内には横位矢羽状沈線、中央に蕨手状沈線施文。						
Fig. 66-11	深鉢・口縁部	覆 土	白色鈳物混入	明 赤 褐		II	
PL. 32-6	口縁に隆帯裝飾による孔を有する把手をもつ。隆帯上には刻目を施す。						
Fig. 66-12	深鉢・口縁部	床 面	白色鈳物混入	にぶい橙		IV	
PL. 32-6	口縁部に隆帯による渦巻等の文様が描かれ、文様区画が施される。						
Fig. 66-13	深鉢・口縁部	覆 土	黒色鈳物混入	淡 橙		V	
PL. 32-6	口縁部に隆帯による渦巻等の文様が描かれ、文様区画がされる。区画内には縦位に沈線を施す。						

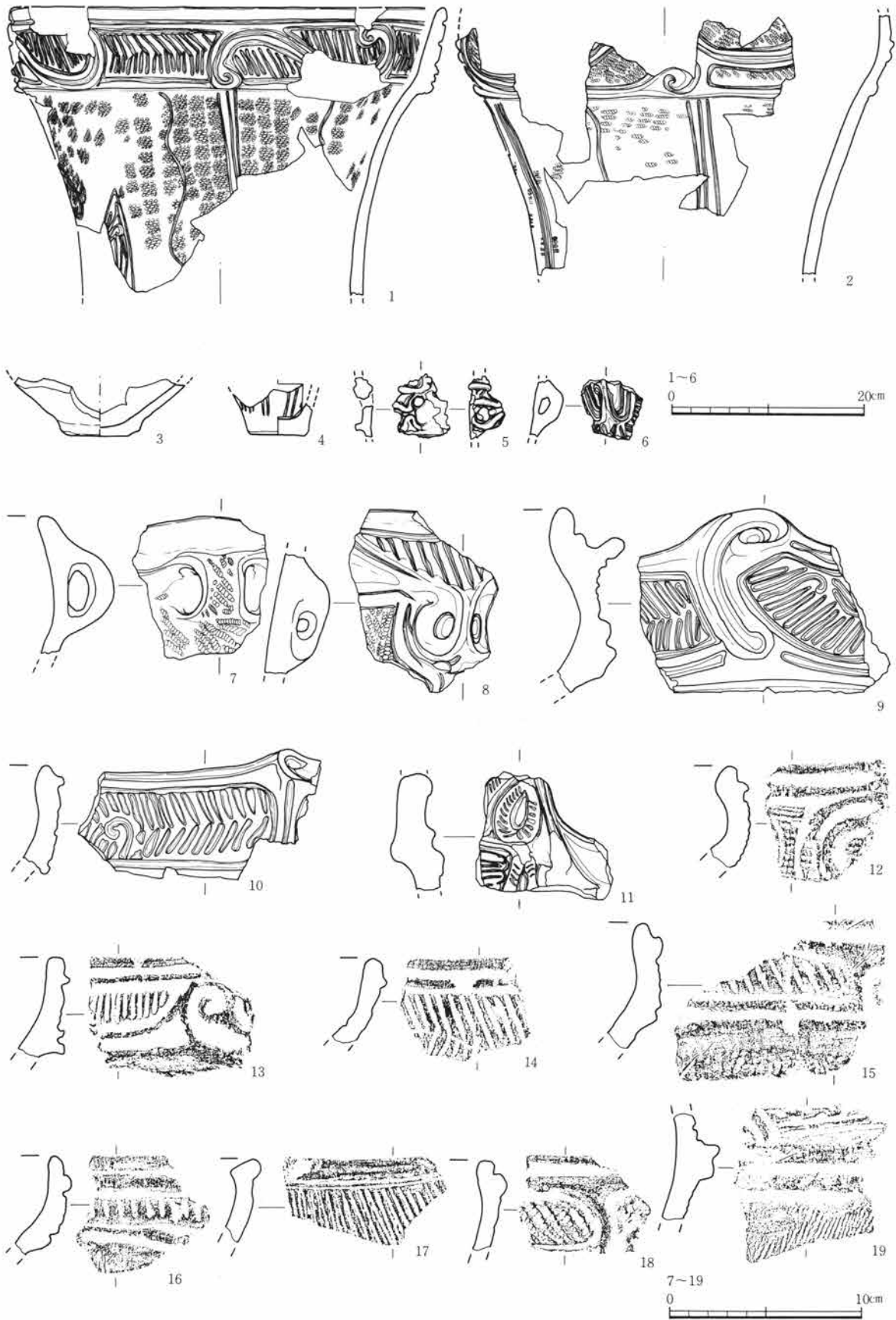


Fig. 66 13区10号住居址出土遺物実測図

第3章 各 説

13区10号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説 明						
Fig. 66-14	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	にぶい赤褐		V	
PL. 32-6	口縁部に隆帯による文様区画がなされ、区画内に横位矢羽状の沈線が施される。						
Fig. 66-15	深鉢・口縁部	覆土	小礫少数混入	灰白	RL	V	
PL. 32-6	口縁部に隆帯による文様区画がなされ、区画内に斜位に沈線を施す。口縁部直下に狭い無文帯をもち以下胴部には縄文が施される。						
Fig. 66-16	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	明赤褐		V	
PL. 32-6	口縁部に隆帯による文様区画がなされ、区画内に縦位に沈線を施す。						
Fig. 66-17	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	明赤褐		V	
PL. 32-6	口縁部に隆帯による文様区画がなされ、区画内に斜位に沈線を施す。						
Fig. 66-18	深鉢・口縁部	床面	白・黒粒混入	明赤褐	RL	V	
PL. 32-6	口縁部に隆帯による文様区画がなされ、地文に縄文が施される。						
Fig. 66-19	深鉢・口縁部	覆土	雲母・礫混入	にぶい赤褐	燃糸文	V	
PL. 32-6	口縁部に隆帯及び沈線による文様が描かれ、胴部に細い燃糸文が施される。						
Fig. 67-1	深鉢・胴部	覆土	小礫混入	にぶい橙		V	
PL. 32-7	胴部に沈線による弧線を数重に施文する。						
Fig. 67-2	深鉢・口縁部	覆土	白粒・礫混入	にぶい橙		V	
PL. 32-7	隆帯による文様区画がなされ、区画内に沈線を施す。						
Fig. 67-3	深鉢・口縁部	覆土	石英混入	にぶい褐		II	
PL. 32-7	口縁部に半截竹管による沈線及び爪形の刻目をもつ隆帯を巡らせる。						
Fig. 67-4	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	明赤褐		V	
PL. 32-7	口辺が幅広となり太い沈線及び刻目が巡る。口縁部は大きく開く器形を呈する無文のもの。						
Fig. 67-5	深鉢・胴部	覆土	雲母・礫混入	にぶい褐	LR	III-2	
PL. 32-7	胴部に隆帯による文様区画及び円形刺突がなされ、地文に縄文を施す。						
Fig. 67-6	深鉢・胴部	覆土	白色鉱物混入	橙	RL	IV	
PL. 32-7	胴部に懸垂文及び沈線による曲線が描かれ、地文には縄文が施される。						
Fig. 67-7	深鉢・胴部	覆土	黒色鉱物混入	橙	燃糸文	IV	
PL. 32-7	胴部に沈線による文様が描かれ、地文には燃糸文が施される。						
Fig. 67-8	深鉢・口縁部	覆土	雲母・礫混入	橙	RL	VII	
PL. 32-7	口縁部に太い沈線による文様が描かれ、地文に縄文を施す。						

13区10号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 67-9	深鉢・口縁部	床面	白色鈹物混入	橙	RL	VI-1	
PL. 32-7	口縁部に隆帯による文様区画がなされ、地文に縄文を施す。						
Fig. 67-10	深鉢・口縁部	覆土	白色鈹物混入	浅黄橙	LR	VIII	
PL. 32-7	口縁が大きく内反する器形を呈し、口縁部に太い沈線を巡らせ、以下に縄文を施す。						
Fig. 67-11	深鉢・胴部	覆土	小礫混入	にぶい橙	RL	IV	
PL. 32-7	頸部が無文帯となり下部に2条の沈線を巡らせる。胴部には懸垂文及び蛇行する懸垂文をもち、地文に縄文を施す。						
Fig. 67-12	深鉢・胴部	覆土	小礫少数混入	にぶい黄橙	LR	VI~VII	
PL. 32-7	胴部に内部磨消となる蛇行する懸垂文をもち、地文には縄文を施す。						
Fig. 67-13	深鉢・胴部	覆土	白色鈹物混入	にぶい橙	RL	VI~VII	
PL. 32-7	胴部に内部磨消となる懸垂文をもち、地文には縄文を施す。						
Fig. 67-14	深鉢・口縁部	覆土	小礫少数混入	明黄褐		VII	
PL. 32-7	口縁がゆるい波状となり、口縁部に円形刺突を連続させ巡らせる。						
Fig. 67-15	深鉢・口縁部	覆土	小礫混入	橙	LR	VII	
PL. 32-7	口縁部に1条の沈線を巡らせる。胴部には沈線による文様が描かれる。地文には縄文を施す。						
Fig. 67-16	深鉢・口縁部	覆土	小礫少数混入	にぶい黄橙		?	
PL. 32-7	口縁が大きく外反する器形を呈し、口辺に沈線を巡らせる。						
Fig. 67-17	深鉢・胴部	覆土	白色鈹物混入	にぶい黄橙	RL	VII	
PL. 32-7	胴部に内部磨消となる懸垂文及びやや太目の沈線が描かれ、地文に縄文を施す。						
Fig. 67-18	深鉢・胴部	覆土	小礫少数混入	淡橙	RL	VIII	
PL. 32-7	胴部に内部磨消となる懸垂文及び長楕円文が描かれ、地文には縄文を施す。						
Fig. 67-19	深鉢・胴部	覆土	砂質	橙	LR	VI~VII	
PL. 32-7	胴部に内部磨消となる長楕円文が描かれ、地文には縄文を施す。						
Fig. 67-20	深鉢・口縁部	覆土	黒色鈹物混入	橙	RL	VII	
PL. 32-7	口縁がやや内反する器形を呈し、太い沈線による蕨手文等の文様が描かれ、地文に縄文が施される。						
Fig. 67-21	深鉢・口縁部	覆土	黒色鈹物混入	橙	RL	VII	
PL. 32-7	口縁が狭い無文となり、胴部に太い沈線による文様が描かれ、地文には縄文が施される。						
Fig. 68-1	深鉢・口縁部	覆土	砂質	にぶい黄橙	LR	VIII	
PL. 33-1	口縁がやや内反する器形を呈し、口縁部に1条の隆帯を巡らせる。胴部には沈線による文様が描かれ、磨り消しをもつ。地文には縄文が施される。						

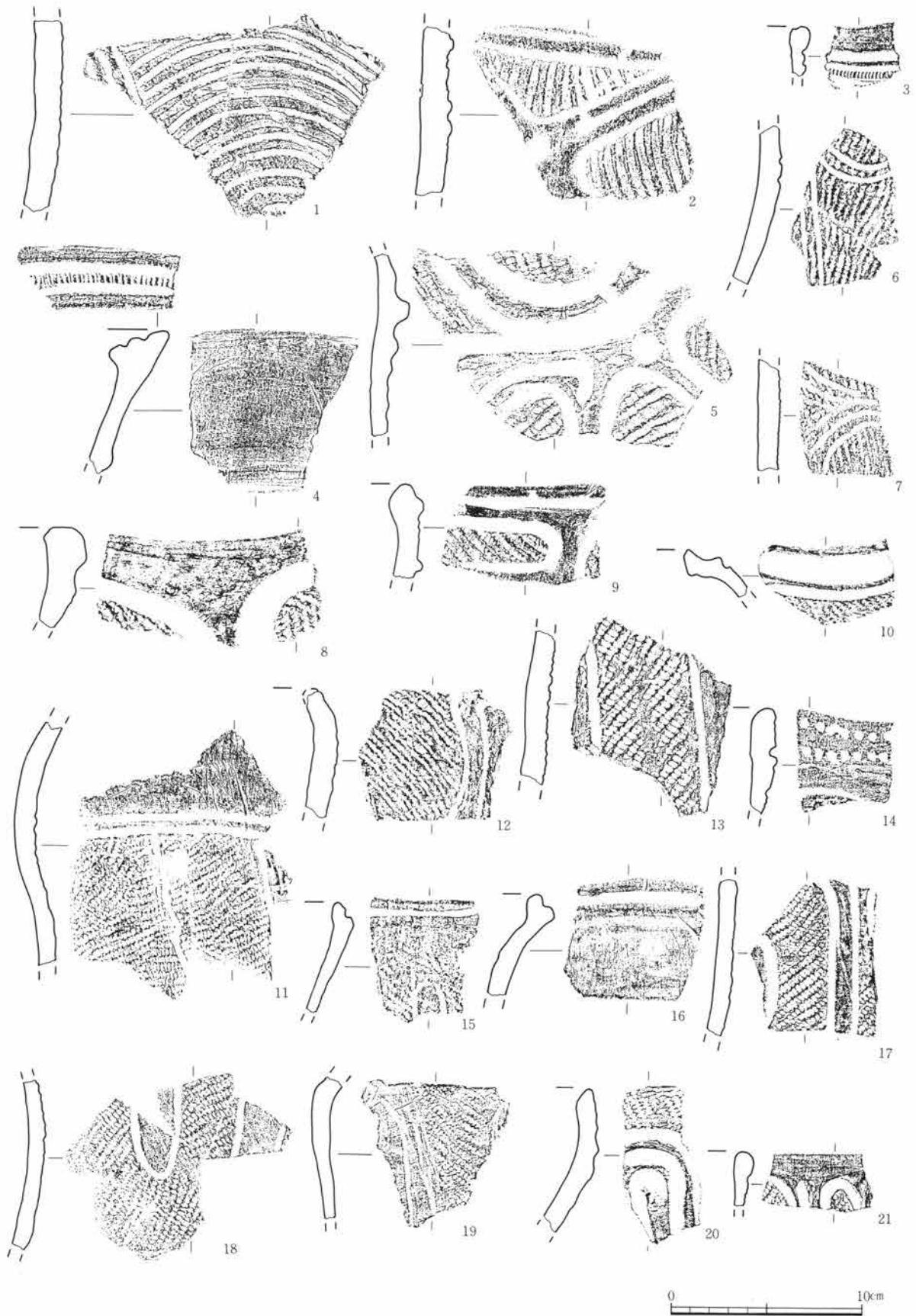


Fig. 67 13区10号住居址出土遺物実測図

13区10号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 68-2	深鉢・口縁部	覆土	砂質	橙	RL	VII	
PL. 33-1	口縁がやや内反し、口縁部が狭い無文となり、胴部に沈線により「〇」状の文様が描かれ、磨り消しをもつ。地文には縄文を施す。						
Fig. 68-3	深鉢・口縁部	覆土	砂質	橙	RL	VII	
PL. 33-1	口縁部が狭い無文となり、胴部に太い沈線により「〇」状の文様が描かれ、文様内部に縄文を施す。						
Fig. 68-4	深鉢・口・胴部	覆土	白色鉱物混入	にぶい黄橙	RL	VII	
PL. 33-1	口縁がやや内反し、胴部に内部磨消となる「〇」状の文様及び小さな「〇」字文を描き、地文には縄文を施す。						
Fig. 68-5	深鉢・胴部	覆土	白色鉱物混入	浅黄橙	LR	VIII	
PL. 33-1	胴部に沈線による蕨手状の文様が描かれ、文様内を磨消する。地文には縄文を施す。						
Fig. 68-6	深鉢・口縁部	覆土	白粒・礫混入	橙	RL	VII	
PL. 33-1	口縁部が無文となり、1条の沈線が巡らされ、胴部には縄文が施される。						
Fig. 68-7	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	にぶい橙	RL	VII	
PL. 33-1	口縁部が無文となり、1条の沈線が巡らされ、胴部には縄文が施される。						
Fig. 68-8	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	にぶい橙	RL	VII	
PL. 33-1	口縁部が無文となり、1条の沈線が巡らされ、胴部には縄文が施される。						
Fig. 68-9	深鉢・胴部	覆土	白色鉱物混入	にぶい橙	LR	VIII	
PL. 33-1	胴部に沈線による縦位に長楕円形が描かれる。						
Fig. 68-10	深鉢・胴部	覆土	白色鉱物混入	にぶい橙	LR	VIII	
PL. 33-1	胴部に沈線による文様が描かれ、文様内部に縄文が施される。						
Fig. 68-11	深鉢・胴部	覆土	白色鉱物混入	にぶい橙	LR	VIII	
PL. 33-1	胴部に沈線による文様が描かれ、文様内部に縄文が施される。						
Fig. 68-12	深鉢・胴部	覆土	小礫少数混入	にぶい橙	LR	VIII	
PL. 33-1	胴部に沈線による文様が描かれ、文様内部に縄文が施される。						
Fig. 68-13	深鉢・口縁部	覆土	小礫少数混入	にぶい橙	LR	VII	
PL. 33-1	口縁部が無文となり1条の沈線を巡らせる。胴部には沈線による文様が描かれ、文様内に縄文が施される。						
Fig. 68-14	深鉢・口縁部	覆土	砂質	明赤灰	RL	VIII	
PL. 33-1	やや内反する波状口縁となり、口縁部が無文で1条の沈線を巡らせる。胴部には沈線による文様が描かれ、地文に縄文を施す。						

13区10号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿 図 番 号	器形・部位	出 土 位 置	胎 土	色 調	縄文原体	時期区分	備 考
図 版 番 号	説 明						
Fig. 68-15	深鉢・口縁部	覆 土	小礫少数混入	橙	LR	VIII	
PL. 33-1	口縁がやや内反し、口縁部が無文となる。胴部に沈線による文様が描かれ、磨り消しをもつ。地文には縄文を施す。						
Fig. 68-16	深鉢・口縁部	覆 土	白色鉱物混入	橙	RL	VII	
PL. 33-1	口縁がやや内反し、口縁部に1条の沈線を巡らせる。						
Fig. 68-17	深鉢・口縁部	覆 土	小礫少数混入	にぶい赤橙	LR	VII	
PL. 33-1	口縁部が狭い無文となり、1条の沈線を巡らせる。胴部には沈線による文様が描かれ、磨り消し及び縄文が施される。						
Fig. 68-18	深鉢・口縁部	覆 土	白色鉱物混入	赤 褐	RL	VIII	
PL. 33-1	口縁がやや内反し、口縁以下に縄文を施す。						
Fig. 68-19	深鉢・口縁部	覆 土	白色鉱物混入	明 赤 褐	RL	VII	
PL. 33-1	口縁がやや内反し、口縁部が狭い無文となり、1条の沈線を巡らせる。胴部には沈線による文様が描かれ、磨り消し及び縄文が施される。						
Fig. 68-20	深鉢・胴部	覆 土	白色鉱物混入	にぶい橙	RL	VI~VII	
PL. 33-1	胴部に沈線による文様が描かれ、磨り消し及び縄文が施される。						
Fig. 68-21	深鉢・胴部	覆 土	小礫少数混入	浅 黄 橙	LR	VIII	
PL. 33-1	胴部に沈線による文様が描かれ、磨り消し及び縄文を施す。						
Fig. 68-22	深鉢・胴部	覆 土	小礫少数混入	橙	RL	VIII	
PL. 33-1	胴部に微隆起帯による文様が描かれ、また円形刺突をもつ。区画内には縄文を施す。						
Fig. 68-23	深鉢・口縁部	炉 址・覆 土	小礫混入	浅 黄 橙	RL	VIII	
PL. 33-1	口縁がやや内反し、口縁部が狭い無文となる。胴部には微隆起帯による「∩」状の文様が描かれ、縄文を施す。						
Fig. 68-24	深鉢・胴部	覆 土	小礫混入	浅 黄 橙	LR	VIII	
PL. 33-1	胴部に微隆起帯による「∩」状の文様が描かれ、磨り消し及び縄文を施す。						
Fig. 68-25	深鉢・胴部	覆 土	小礫混入	にぶい橙		IX	
PL. 33-1	胴部に沈線による「∩」状の文様を描出する。						
Fig. 68-26	深鉢・胴部	覆 土	小礫混入	にぶい赤褐		IX	
PL. 33-1	胴部に沈線による「∩」状の文様を描出する。						
Fig. 68-27	土錘（完形）	覆 土	白色鉱物混入	暗 赤 褐			
PL. 33-2	土器片を使用したもので4.4cm×4.0cmのもので、表面文様は不明である。重さは31.41gである。						
Fig. 68-28	土錘（完形）	覆 土	白色鉱物混入	赤 黒	条 線 文		
PL. 33-3	土器片を使用したもので3.0cm×3.0cmのもので、表面文様には細い条線が施されている。重さは17.89gである。						

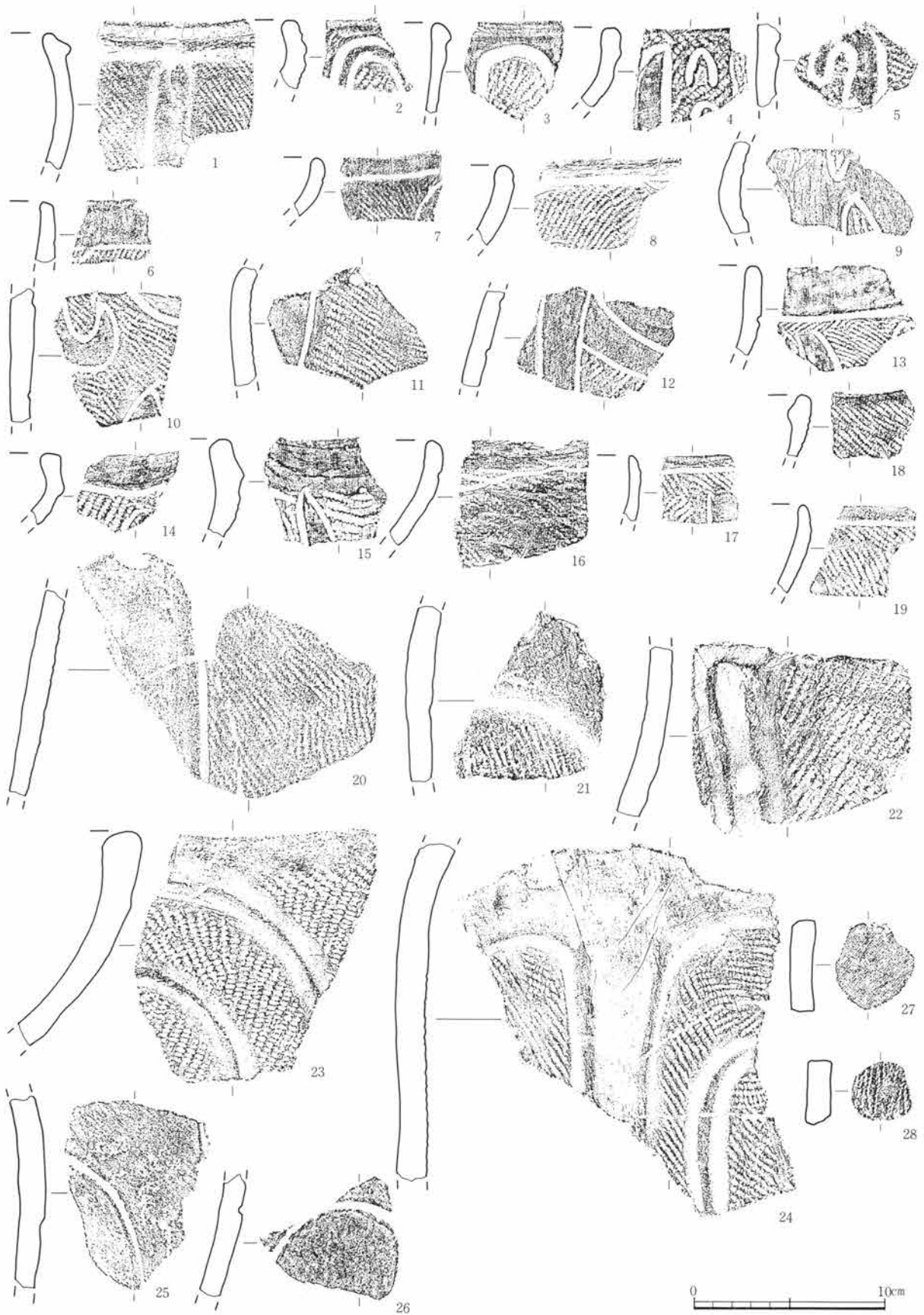


Fig. 68 13区10号住居址出土遺物実測図

13区10号住居址出土遺物一覧表 (石器)

挿図番号	石器の種類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	出土位置
Fig. 69-1	石 鏃	2.4	0.9	0.3	0.5	黒 曜 石	覆土
PL. 33-4	無茎鏃である。小型で細身の石鏃は表裏両面から交互に剥離を細かく行なっている。一部を欠損する。						
Fig. 69-2	打 製 石 斧	7.2	3.4	1.3	32.5	黒 色 頁 岩	覆土
PL. 33-4	小型の短冊形である。基部の一部を欠損する。表裏面とも横方向からの剥離後、細かい剥離を行なっている。						
Fig. 69-3	磨 製 石 斧	(16.8)	6.4	3.9	820.0	緑 色 岩 類	覆土
PL. 33-4	刃部付近は欠損している。形状はよく整っている。基部は叩いた様な痕が僅かに認められる。						
Fig. 69-4	打 製 石 斧	12.0	4.9	2.0	168.3	灰 色 安 山 岩	炉址内覆土
PL. 33-4	短冊形を呈す。刃部は潰れている。裏面には自然面が多く残る。						
Fig. 69-5	打 製 石 斧	11.2	5.3	1.4	114.5	珪 質 頁 岩	覆土
PL. 33-4	短冊形を呈す。表裏とも横方向からの剥離後、細かい剥離を各辺に入れている。刃部と基部を中心に磨耗痕がある。						
Fig. 69-6	打 製 石 斧	8.5	4.1	1.0	32.4	黒 色 頁 岩	覆土
PL. 33-4	短冊形を呈す。裏面は左右から剥離を行ない、細かい剥離が表裏面にみられる。刃部は欠損している。						
Fig. 69-7	打 製 石 斧	15.5	6.8	2.1	250.0	安 山 岩	覆土
PL. 33-4	分銅形を呈す。表裏面とも横方向から剥離を行なっている。表面は刃部を細かく剥離している。裏面は自然面が残る。						
Fig. 69-8	打 製 石 斧	10.1	5.0	2.7	200.0	砂 岩	覆土
PL. 33-4	短冊形を呈す。中間部から刃部にかけて欠損。表面に自然面が残る。側辺部分の剥離部分は潰れている。						
Fig. 69-9	打 製 石 斧	(5.1)	4.3	1.6	46.8	黒 色 頁 岩	覆土
PL. 33-4	刃部・基部ともに欠損している。表裏面とも横方向からの剥離後、細かい剥離を周縁部に行なっている。						
Fig. 69-10	打 製 石 斧	6.0	3.5	1.1	26.6	輝 石 安 山 岩	覆土
PL. 33-4	刃部・基部ともに僅かに欠損。形状は撥形と考えられる。横方向の剥離後、各辺に細かい剥離を行なっている。						
Fig. 69-11	棒 状 石 器	(14.8)	5.1	2.1	245.0	点 紋 雲 母 石 英 片 岩	覆土
PL. 33-4	中間部より基部にかけて欠損している。中間部は表面が剥れている。刃部にあたる部分は丸く磨っている様である。						
Fig. 69-12	打 製 石 斧	(7.8)	10.0	2.6	173.6	黒 色 頁 岩	覆土
PL. 33-4	大型の打製石斧の刃部と推定され、中間部・基部を大きく欠損する。表裏面とも刃部は縦方向に剥離で刃を付けている。						
Fig. 69-13	棒 状 石 器	5.7	1.7	1.0	12.6	黒 色 片 岩	覆土
PL. 33-4	小型の棒状石器である。上下端部は丸味をもつ。端部は磨いたか、自然のものか不明。						
Fig. 70-1	磨 石	13.5	7.2	4.4	720.0	輝 石 安 山 岩	覆土
PL. 33-5	表裏面、周縁部分を良く磨いている。裏面中央には凹穴がある。						

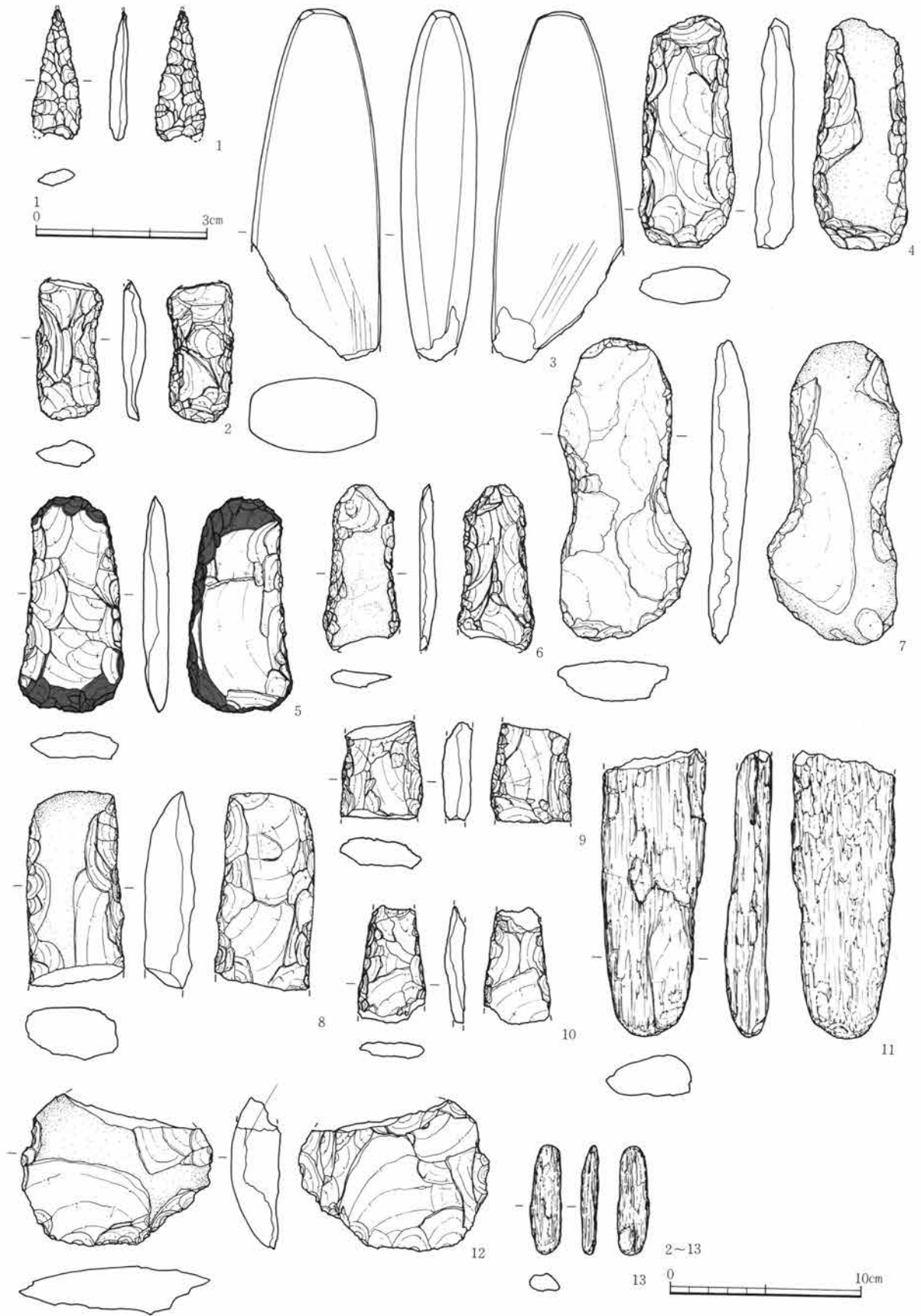


Fig. 69 13区10号住居址出土遺物実測図

第3章 各 説

13区10号住居址出土遺物一覧表 (石器)

挿図番号	石器の種類	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石質	出土位置
図版番号	説 明						
Fig. 70-2	磨石	13.0	(8.3)	3.8	570.0	輝石安山岩	覆土
PL. 33-5	2分の1ほど欠損する。表面の一部と周縁部分に叩いた痕と磨いた痕が僅かに残る。裏面にも磨った痕が残る。						
Fig. 70-3	叩き石	(15.0)	7.2	5.8	960.0	溶結凝灰岩	覆土
PL. 33-5	下端部は叩き欠損した様相を呈す。基部と側縁部分の一部に潰れた状況も観察できる。						
Fig. 70-4	磨製石斧?	12.7	5.1	1.6	270.0	緑色岩類	覆土
PL. 33-5	種類は不明であるが基部が叩かれて磨耗し、側縁部分の一部が対をなす様に潰れている。全体に長い軸方向に磨く。						
Fig. 70-5	凹石	10.2	9.0	10.2	133.1	輝石安山岩	住居址外出土
PL. 33-5	ほぼ球形状を呈す。表面と側面に各1個ずつ凹穴がある。一部分磨石として使用したことも観察できる。						
Fig. 70-6	台石	21.5	13.5	4.7	2,685.0	石英閃緑岩	覆土
PL. 33-5	自然石を利用した台石と考えられる。表面に使用痕が僅かに観察できる。裏面は荒れている。						
Fig. 70-7	石皿	(12.5)	(9.5)	5.1	580.0	輝石安山岩	覆土
PL. 33-5	石皿の破片と推定される。内面底部は曲面を呈し、外面底部は平滑である。						
Fig. 70-8	石皿	(18.0)	(21.5)	6.0	2,680.0	輝石安山岩	覆土
PL. 34-1	2分の1が欠損。内面底部は曲面を呈す。外面底部は平滑にしてある。表裏面とも凹穴はあるが多孔石とは思われない。						
Fig. 71-1	磨石	12.0	10.5	8.8	1,585.0	石英閃緑岩	覆土
PL. 34-2	ほぼ球形状を呈す。僅かに磨った状況と、叩いている部分がある。						
Fig. 71-2	凹石	12.5	7.4	4.3	510.0	輝石安山岩	覆土
PL. 34-2	表裏面とも僅かであるが凹状を呈す。その周辺は磨った状況を呈している。						
Fig. 71-3	磨石	14.8	10.1	4.9	1,260.0	輝石安山岩	覆土
PL. 34-2	表裏面は僅かに磨っており、周縁部分は叩きによる痕が僅かに残る。						
Fig. 71-4	磨石	11.4	4.7	4.0	440.0	輝緑岩	覆土
PL. 34-2	表面中央部付近や面境の角部分が僅かに磨っている。						
Fig. 71-5	磨石	11.7	9.8	7.2	690.0	輝石安山岩	覆土
PL. 34-2	表面の荒い石材である。表裏面は凹穴をもち、磨いた部分がある。						
Fig. 71-6	磨石	11.5	(5.4)	3.5	290.0	輝石安山岩	覆土
PL. 34-2	表面は大きく剝離している。裏面は凹穴があり、周縁部分と共に磨っている。						
Fig. 71-7	磨石	9.8	5.5	1.4	89.0	砂岩	覆土
PL. 34-2	表裏面とも僅かに叩いた痕が残る。周縁部分は磨った様相を呈す。						

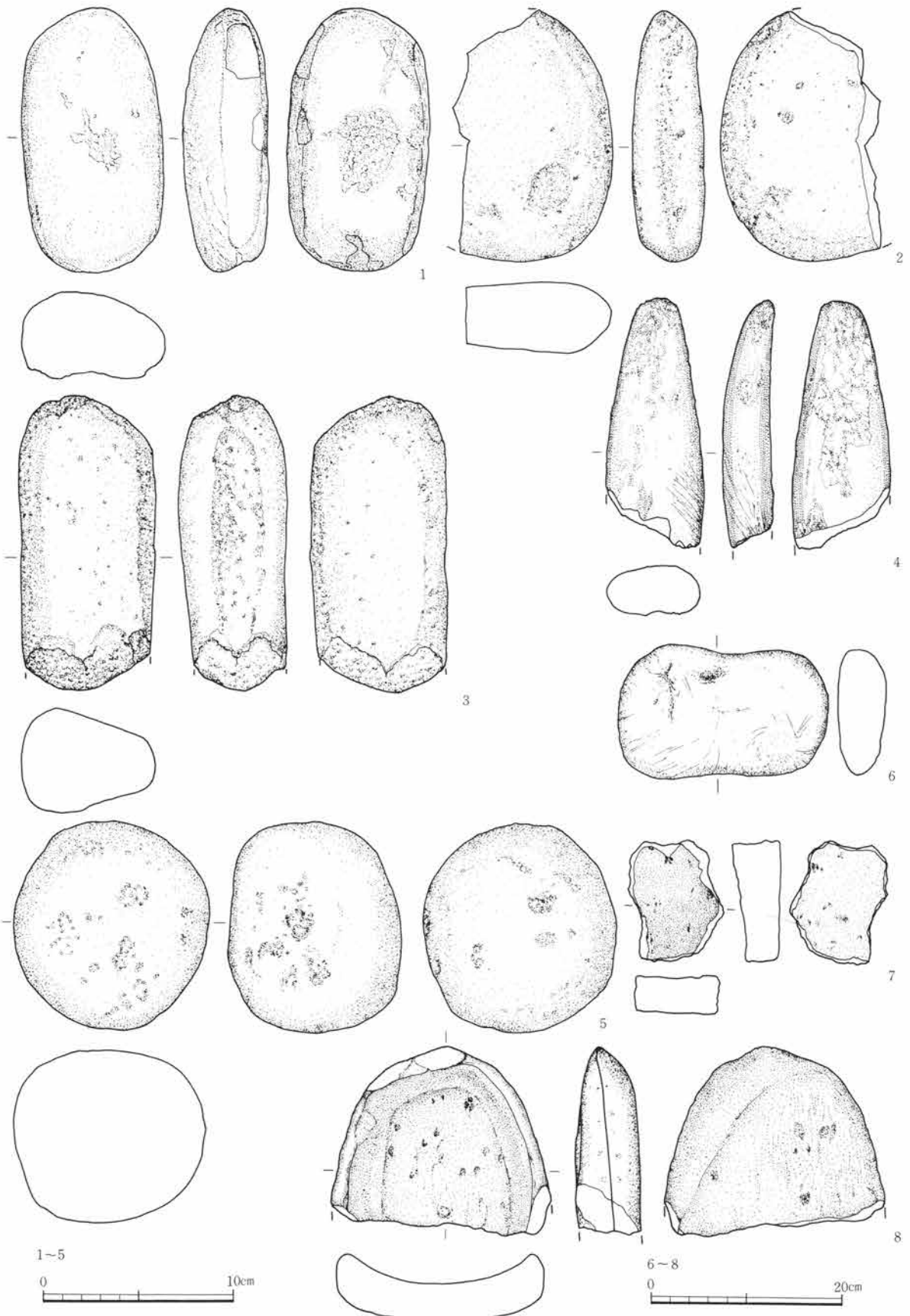


Fig. 70 13区10号住居址出土遺物実測図

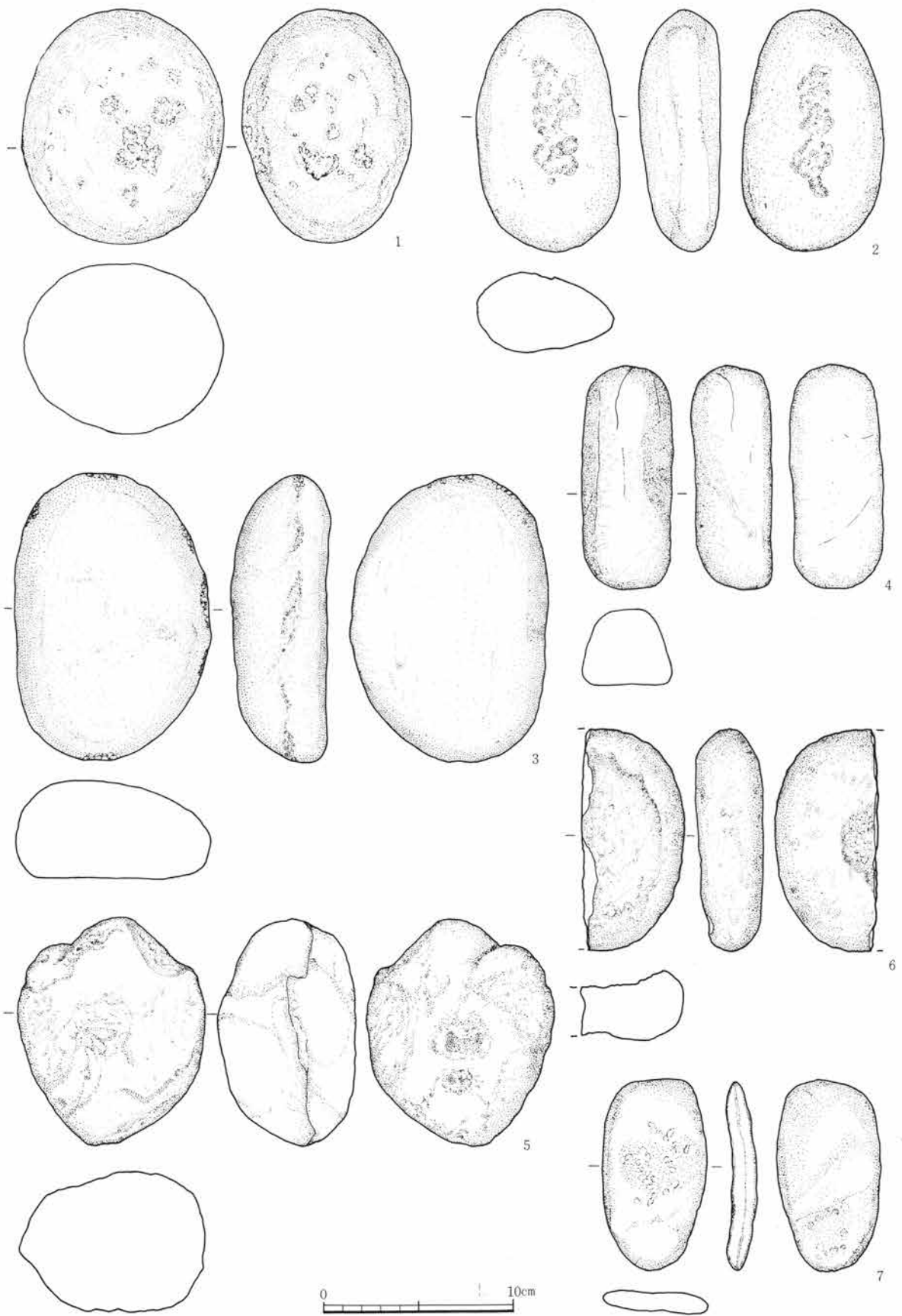


Fig. 71 13区10号住居址出土遺物実測図

13区11号住居址 (Fig. 72・73, PL. 34-3, 35-1・2, 36-1・2)

11号住居址はK-8、L-8・9グリッドで検出した。北側に位置する10号住居址を切っている。陣場泥流残丘の北東部分の裾にある。地山は陣場泥流ではない。住居址は南半部分を明瞭に検出することができなかった。また全体に攪乱をうけている様相を呈している。推定で長軸約5.9m、短軸は4.56mである。長軸の方位はN-45°-Wである。南東隅部分を中心に南壁および東壁は確認が困難であった。北西部分を中心に残存壁の高さは約20cmである。床面の状況は北西部分は平坦であるが、南東を中心にした部分は不安定である。炉址は中央より僅かに北西寄りに位置しており方形の石組で構築されている。規模は長軸約86cm、短軸約80cm、深さ約24cmである。柱穴は13ヶ所にあり、主としてP2、P3、P5、P10、P12、P13はほぼ同じ平面形を呈す。その他P4、P6、P7、P8、P11は小さい。柱穴の規模は下表による。

10・11号住居址からは、覆土中より多数の礫が出土した。礫は扁平な川原石であり、11号住居址北側壁下 (Fig. 73) には部分的な敷石遺構と考えられる地点があった。

13区11号住居址柱穴の規模

規模cm	柱穴名	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12	P 13
長軸×短軸		46×32	48×44	48×40	20×20	66×60	28×28	20×20	24×22	84×72	40×36	44×32	44×44	90×80
深さ		32	49	30	24	28	21	34	38	36	24	44	46	10

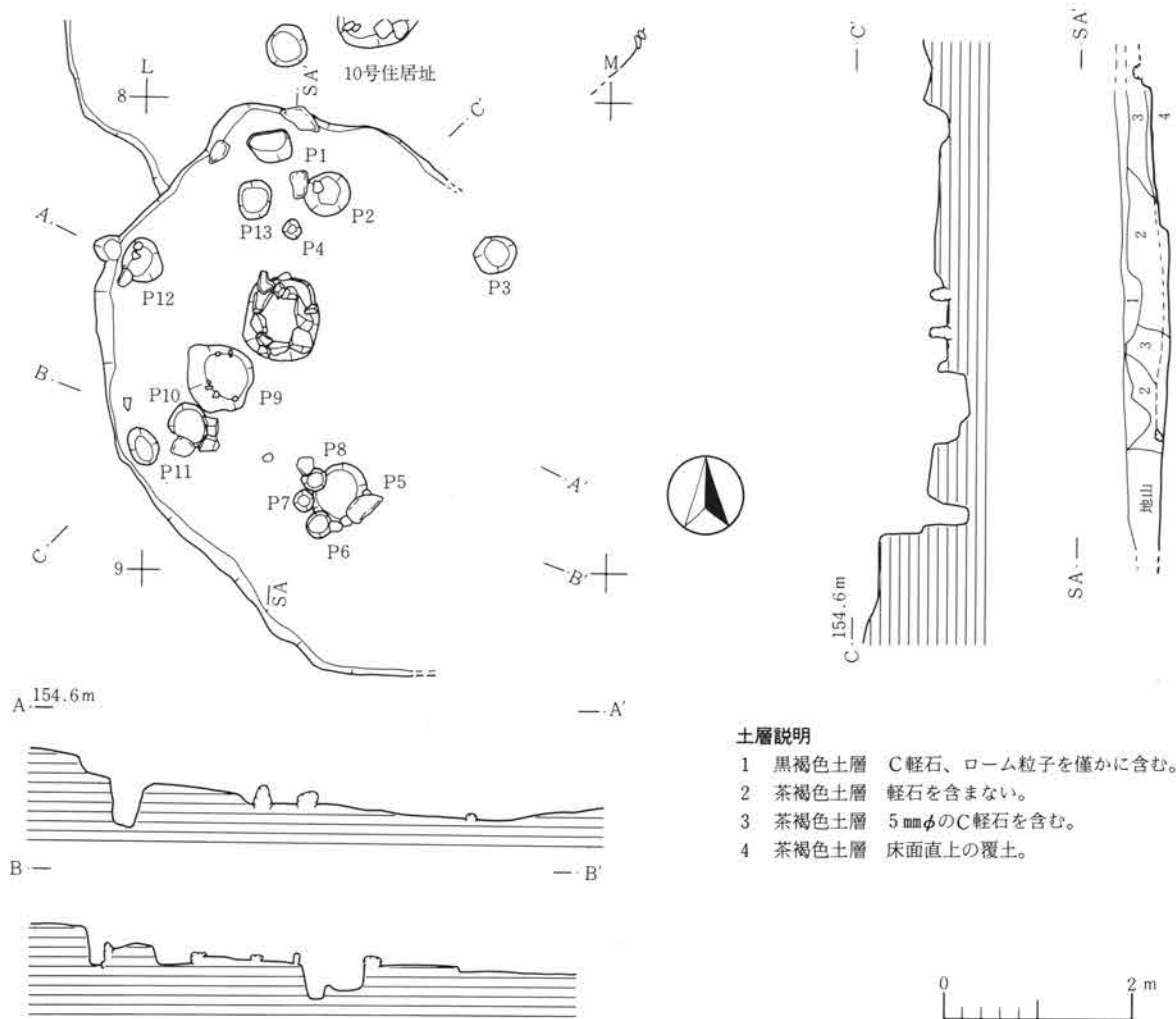


Fig. 72 13区11号住居址実測図

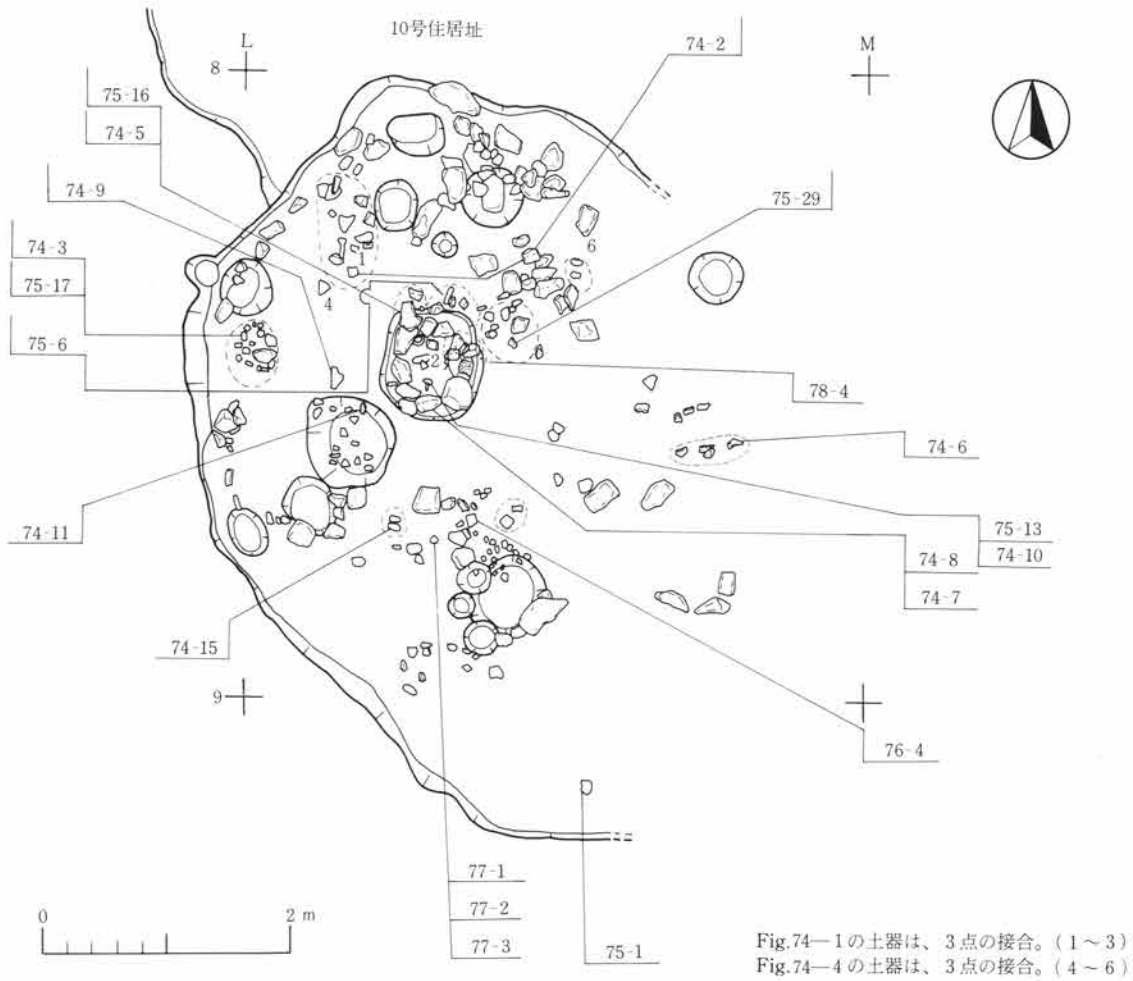


Fig. 73 13区11号住居址遺物出土状況図

13区11号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿 図 番 号	器 形 ・ 部 位	出 土 位 置	胎 土	色 調	縄 文 原 体	時 期 区 分	備 考
図 版 番 号	説 明						
Fig. 74-1	深鉢・胴・底部	覆 土	小礫少数混入	橙	RL	VI~VII	
PL. 36-3	胴部がかなりふくらむ大型の深鉢である。胴部に内部磨消となる懸垂文をもち、地文には縄文を施す。						
Fig. 74-2	深鉢・口縁部	覆 土	黒色鉱物混入	浅黄橙	RL	VIII	
PL. 36-4	内反する波状口縁となり、胴部下半でややくびれる深鉢である。口縁部は幅の狭い無文帯となり、1条の微隆起帯が巡らされる。胴部には微隆起帯による「C」字状の文様を配し、区画内に縄文を施す。						
Fig. 74-3	深鉢・口縁部	覆 土	小礫混入	橙	LL	VII	直前段反燃
PL. 36-4	口縁がやや内反する深鉢である。口縁部は無文帯となり1条の沈線を巡らせる。胴部には沈線による「∩」状の文様を配し、区画内に磨り消しをもつ。地文には縄文が施される。						
Fig. 74-4	深鉢・胴部	床 面 ・ 覆 土	小礫少数混入	にぶい橙	条 線 文	VII	
PL. 36-5	胴部がかなりふくらむ大型の深鉢である。胴部に細い条線が施される。						

13区11号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 74-5	深鉢・底部	覆土	小礫少数混入	橙		VII	
PL. 36-6	小型の深鉢の底部である。胴部及び底部に沈線による円形ないしは楕円形を描き、区画内に刺突を施す。						
Fig. 74-6	深鉢・底部	覆土	白色鉱物混入	淡黄		?	
PL. 36-7	深鉢の底部であり、胴部に懸垂文の端部がみられる。						
Fig. 74-7	深鉢・底部	覆土	砂質	橙		VI~VII	
PL. 36-7	深鉢の底部であり、胴部に懸垂文の端部がみられる。						
Fig. 74-8	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	明赤褐	RL	VI	
PL. 37-1	口縁部に無文帯及び隆帯と沈線による文様が区画され、地文に縄文を施す。						
Fig. 74-9	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	橙	RL	VIII	
PL. 37-1	内反する波状口縁となり、口縁部に無文帯及び隆帯と沈線による文様が区画され、さらに把手を有する。区画内には縄文を施す。						
Fig. 74-10	深鉢・口縁部	床面	白色鉱物混入	橙	RL	VII	
PL. 37-1	口縁がやや内反し、口縁部に無文帯及び隆帯と沈線による文様が区画され、区画内には縄文を施す。						
Fig. 74-11	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	浅黄	RL	VII	
PL. 37-1	口縁がやや内反し、口縁部に無文帯及び隆帯と沈線による文様が区画され、区画内には縄文を施す。						
Fig. 74-12	深鉢・頸部	覆土	小礫少数混入	橙	RL	V-VI	
PL. 37-1	口縁部に隆帯による文様をもち、頸部が狭い無文帯となり、その下部に3条の沈線を巡らせる。胴部には懸垂文及び蛇行する懸垂文をもち、地文に縄文を施す。						
Fig. 74-13	深鉢・口縁部	床面	夾雑鉱物混入	橙	RL	VI-1	
PL. 37-1	口縁部に隆帯と沈線による文様が区画され、区画内に縦位の沈線を施す。胴部には縄文を施す。						
Fig. 74-14	深鉢・胴部	覆土	白色鉱物混入	明黄褐	RL	VII	
PL. 37-1	胴部に内部磨消となる懸垂文及び先端が蕨手状となる懸垂文をもち、地文には縄文を施す。						
Fig. 74-15	深鉢・胴部	覆土	白色鉱物混入	明黄褐	RL	VI~VII	
PL. 37-1	胴部に内部磨消となる懸垂文をもち、地文には縄文を施す。						
Fig. 74-16	深鉢・胴部	覆土	白色鉱物混入	橙	RL	V	
PL. 37-1	胴部に内部磨消となる懸垂文及び蛇行する懸垂文をもち、地文には縄文を施す。						
Fig. 74-17	深鉢・胴部	覆土	白色鉱物混入	灰黄	RL	VI~VII	
PL. 37-1	胴部に内部磨消となる懸垂文をもち、地文には縄文を施す。						

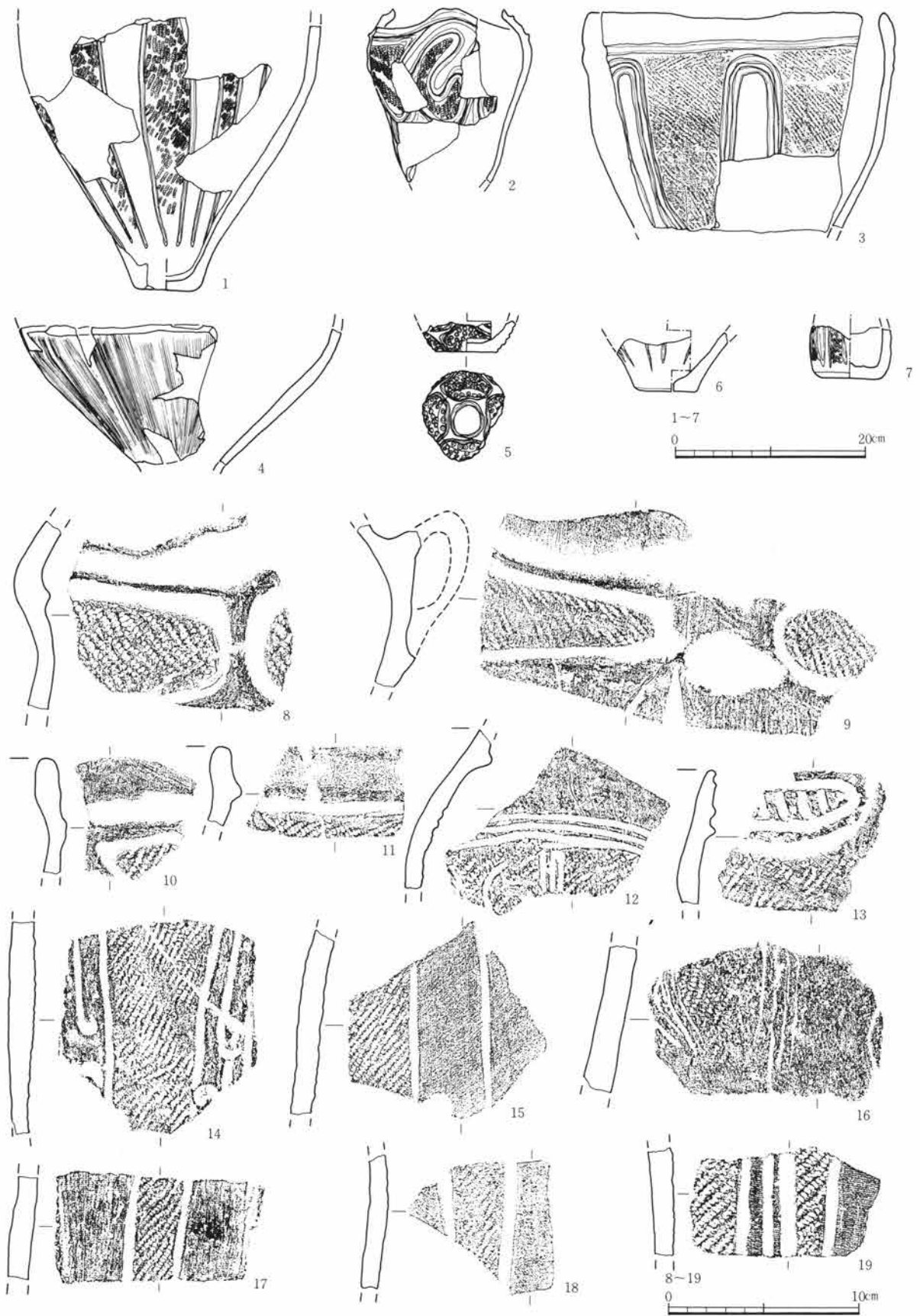


Fig. 74 13区11号住居址出土遺物実測図

13区11号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 74-18	深鉢・胴部	覆土	砂質	黄灰	RL	VI~VII	
PL. 37-1	胴部に内部磨消となる懸垂文をもち、地文には縄文を施す。						
Fig. 74-19	深鉢・胴部	覆土	小礫少数混入	橙	RL	VI~VII	
PL. 37-1	胴部に内部磨消となる懸垂文をもち、地文には縄文を施す。						
Fig. 75-1	深鉢・胴部	覆土	小礫少数混入	橙	条線文	VII	
PL. 37-2	胴部に縦に蛇行する条線を施す。						
Fig. 75-2	深鉢・胴部	覆土	白色鉱物混入	浅黄	条線文	VII	
PL. 37-2	胴部に縦に蛇行する条線を施す。						
Fig. 75-3	深鉢・口縁部	床面	白色鉱物混入	にぶい橙	条線文	VII	
PL. 37-2	口縁部が無文帯となり1条の沈線を巡らせ、胴部に縦に蛇行する条線を施す。						
Fig. 75-4	深鉢・胴部	覆土	黒色鉱物混入	灰黄	条線文	VII	
PL. 37-2	胴部に懸垂文をもち、地文には縦に蛇行する条線を施す。						
Fig. 75-5	深鉢・口縁部	床面	白・黒粒子混入	暗灰黄	RL	VII	
PL. 37-2	口縁がやや内反し、沈線で「∩」状に文様を区画し、区画内を磨り消す。地文には縄文を施す。						
Fig. 75-6	深鉢・口縁部	覆土	小礫混入	浅黄・(黒褐)	LR	VII	
PL. 37-2	波状口縁となり、口縁部に無文帯をもち、胴部に隆帯と太い沈線により文様を描き、地文には縄文を施す。						
Fig. 75-7	深鉢・口縁部	覆土	小礫少数混入	橙		VII	
PL. 37-2	内反する波状口縁となり、口縁部に無文帯をもつ。胴部には隆帯と太い沈線により文様を描出する。なお隆帯部に横位の孔を有する。						
Fig. 75-8	深鉢・口縁部	覆土	少礫混入		RL	VII	
PL. 37-2	口縁がやや内反し、口縁部に無文帯をもち1条の太い沈線を巡らせる。胴部には太い沈線で先端が蕨手状となる懸垂文をもち、地文に縄文を施す。						
Fig. 75-9	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	褐灰	LR・RL	VII	附加条
PL. 37-2	口縁がやや内反し、太い沈線で文様を描く。地文には縄文を施す。						
Fig. 75-10	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	橙	RL	VIII	
PL. 37-2	口縁が内反し、口縁部が狭い無文帯となる。胴部には沈線で「∩」状の文様を配し、区画内を磨消する。地文には縄文を施す。						
Fig. 75-11	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	灰黄褐	RL	VII	
PL. 37-2	口縁が内反し、口縁部が狭い無文帯となる。胴部には沈線で「∩」状の文様を配し、区画内を磨消する。地文には縄文を施す。						

13区11号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿 図 番 号	器形・部位	出 土 位 置	胎 土	色 調	縄文原体	時期区分	備 考
図 版 番 号	説 明						
Fig. 75-12	深鉢・口縁部	覆 土	石英混入	明 赤 褐	RL	VII	
PL. 37-2	口縁は内反し、胴部には沈線で「〇」状の文様を配し区画内は磨消する。地文は縄文を施す。						
Fig. 75-13	深鉢・口縁部	覆 土	小礫少数混入	にぶい黄橙	LR	VII	
PL. 37-2	口縁が内反し、口縁部が狭い無文帯となり1条の沈線を巡らせる。胴部には沈線で「〇」状の文様を配し、区画内に縄文をもち、それ以外を磨消する。						
Fig. 75-14	深鉢・口縁部	覆 土	夾雑鉱物混入	にぶい橙	RL	VII	
PL. 37-2	波状口縁で「〇」状の文様を沈線で描き、区画内に縄文を施す。						
Fig. 75-15	深鉢・胴部	覆 土	白色鉱物混入	橙	RL	VII	
PL. 37-2	胴部に沈線で「〇」状の文様を配し、区画内に縄文をもち、それ以外を磨消とする。						
Fig. 75-16	深鉢・胴部	覆 土	白色鉱物混入	橙	RL	VIII	
PL. 37-2	胴部に橋状の把手をもち、沈線による文様区画がなされ、区画内に縄文をもち。						
Fig. 75-17	深鉢・口縁部	覆 土	白粒・礫混入	橙	LR	VII	
PL. 37-2	口縁が内反し、口縁部が無文帯となり連続する刺突が1条巡らされる。胴部には沈線による文様をもち、磨り消し及び縄文が施される。						
Fig. 75-18	深鉢・口縁部	覆 土	白色鉱物混入		RL	VII	
PL. 37-2	口縁が内反し、口縁部が無文帯となり1条の沈線が巡らされる。胴部には孔を有し、沈線による「〇」状の文様が描かれ、区画内を磨消する。地文には縄文を施す。						
Fig. 75-19	深鉢・口縁部	覆 土	白色鉱物混入		RL	VII	
PL. 37-2	口縁が内反し、口縁部が無文帯となり1条の連続刺突と1条の隆帯及び沈線が巡らされる。胴部には沈線で「〇」状の文様が描かれ、区画内を磨消する。地文には縄文を施す。						
Fig. 75-20	深鉢・口縁部	覆 土	白色鉱物混入	明 灰 黄	LR	VII	
PL. 37-2	口縁が内反し、口縁部が無文帯となり1条の沈線を巡らせる。胴部には縄文が施される。						
Fig. 75-21	深鉢・口縁部	覆 土	白色鉱物混入	にぶい黄橙	RL	VII	
PL. 37-2	口縁が内反し、口縁部が無文帯となり1条の連続刺突が巡らされる。胴部には縄文が施される。						
Fig. 75-22	深鉢・胴部	覆 土	白色鉱物混入	灰 黄 褐	RL	II?	
PL. 37-2	胴部に押し引きによる沈線で平行及び「〇」状の文様を描き、地文に縄文を施す。						
Fig. 75-23	深鉢・口縁部	覆 土	白色鉱物混入	黄 褐	LR	VIII	
PL. 37-2	口縁が内反し、口縁部が無文帯となり1条の沈線が巡らされる。胴部には沈線で「〇」状の文様を描き、区画内を磨消し、地文には縄文を施す。						
Fig. 75-24	深鉢・口縁部	覆 土	白色鉱物混入	にぶい黄橙	LR	VI-2	
PL. 37-2	口縁が内反し、口縁部が無文帯となる。胴部には太い沈線による平行線等の文様が描かれ、地文に縄文を施す。						

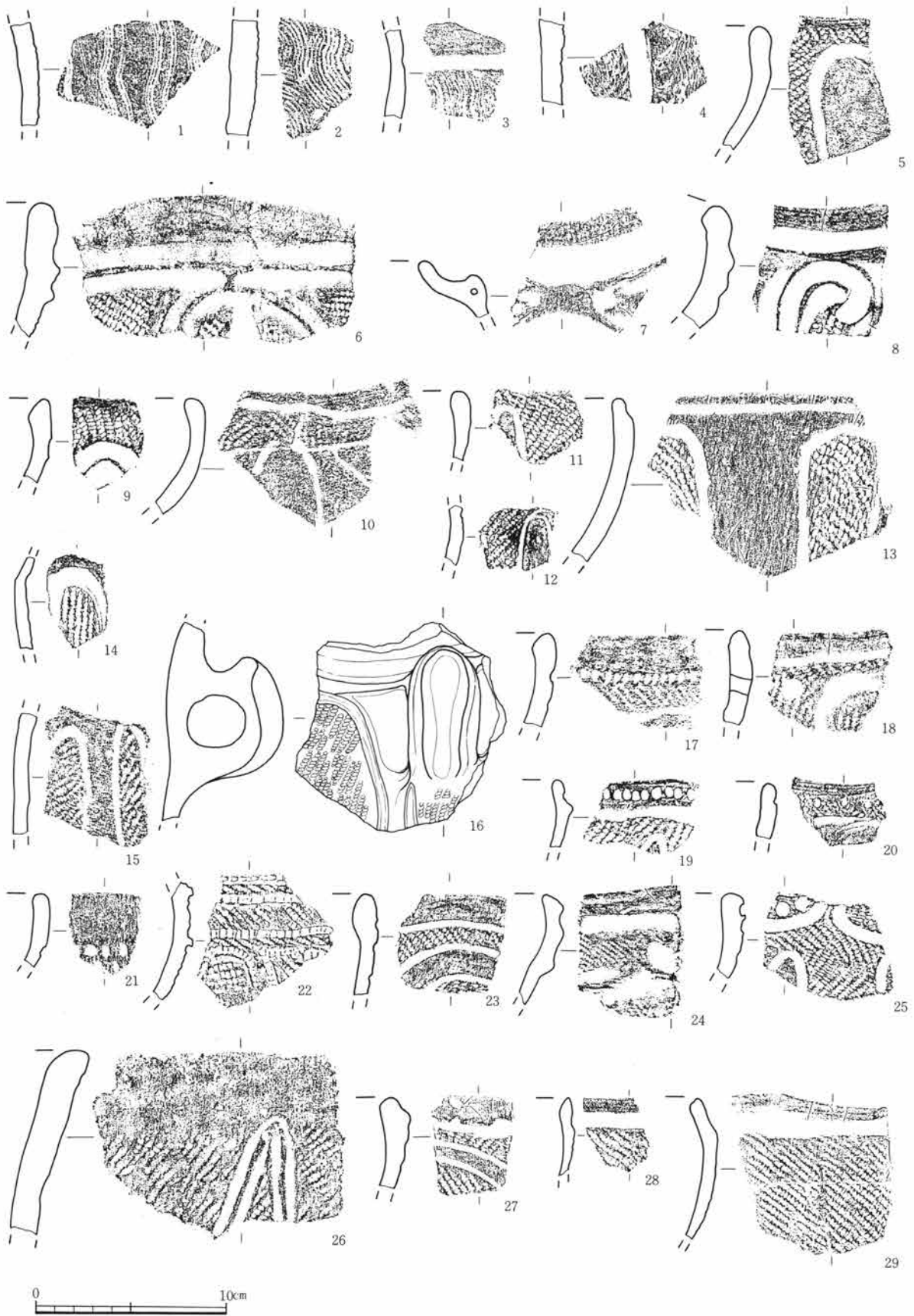


Fig. 75 13区11号住居址出土遺物実測図

13区11号住居址出土遺物一覧表（土器）

挿 図 番 号	器形・部位	出 土 位 置	胎 土	色 調	縄文原体	時期区分	備 考
図 版 番 号	説 明						
Fig. 75-25	深鉢・口縁部	覆 土	白色鈹物混入	にぶい黄橙	RL	VII	
PL. 37-2	口縁が内反し、口縁部に弧状の沈線及び刺突をもち、胴部に沈線で『∩』状の文様を描く。区画内を磨消し、地文には縄文を施す。						
Fig. 75-26	深鉢・口縁部	覆 土	小礫少数混入	にぶい橙	RL	VIII	
PL. 37-2	口縁部が無文帯となり、胴部に沈線で『八』状の文様を描き、地文には縄文を施す。						
Fig. 75-27	深鉢・口縁部	床 面	白色鈹物混入	浅 黄	LR	VIII	
PL. 37-2	口縁が内反し、口縁部が無文帯となり、1条の沈線が巡らされる。胴部には沈線で『∩』状の文様を描き、区画内は磨消し、地文には縄文を施す。						
Fig. 75-28	深鉢・口縁部	覆 土	白色鈹物混入	橙	LR	VII	
PL. 37-2	口縁が内反し、口縁部が無文帯となり、1条の沈線が巡らされる。胴部には縄文が施される。						
Fig. 75-29	深鉢・口縁部	床 面	白色鈹物混入	灰 黄 褐	LR	VIII	
PL. 37-2	内反する波状口縁となり、口縁部が無文帯となり、太い沈線を1条巡らせる。胴部には縄文を施す。						
Fig. 76-1	深鉢・口縁部	覆 土	黒色鈹物混入	にぶい黄橙	RL	VII	
PL. 37-3	口縁が内反し、口縁部が狭い無文帯となり、1条の沈線を巡らせる。胴部には沈線で『∩』状の文様を描き、区画内を磨消させる。地文には縄文を施す。						
Fig. 76-2	深鉢・口縁部	覆 土	砂 質	淡 黄	RL	VIII	
PL. 37-3	口縁部が内反し、口縁部が狭い無文帯となり、1条の太い沈線を巡らせる。胴部には沈線で『∩』状の文様を描き、区画内を磨消させる。地文には縄文を施す。						
Fig. 76-3	深鉢・口縁部	床 面	白色鈹物混入	明 黄 褐	RL	VIII	
PL. 37-3	口縁が内反し、胴部に沈線で『∩』状の文様を描き、区画内を磨消させる。地文には縄文を施す。						
Fig. 76-4	深鉢・口縁部	覆 土	小礫少数混入	にぶい黄橙	RL	VIII	
PL. 37-3	口縁が内反し、口縁部が無文となり1条の隆帯を巡らせる。胴部には縄文を施す。						
Fig. 76-5	深鉢・口縁部	覆 土	白色鈹物混入	橙・(明赤褐)	LR	VIII	
PL. 37-3	口縁が内反し、口縁部が無文となり、胴部には縄文を施す。						
Fig. 76-6	深鉢・口縁部	覆 土	小礫混入	にぶい黄橙		IX	
PL. 37-3	口縁に平行沈線をもち、以下に『八』状の沈線を描く。						
Fig. 76-7	深鉢・胴部	覆 土	白色鈹物混入	にぶい橙		IX	
PL. 37-3	胴部に先端が蕨手状になる文様を沈線で描き出させる。						
Fig. 76-8	深鉢・頸部	覆 土	白色鈹物混入	にぶい赤褐	RL	VII	
PL. 37-3	胴部に内部磨消となる懸垂文及び長楕円を縦位にもち、地文には縄文を施す。						

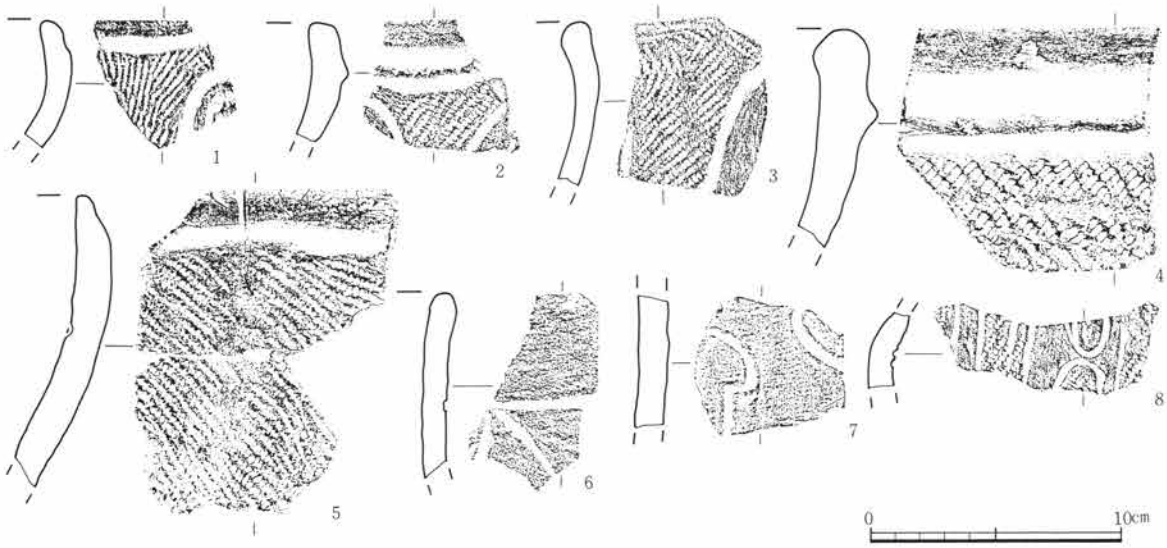


Fig. 76 13区11号住居址出土遺物実測図

13区11号住居址出土遺物一覧表 (石器)

挿図番号	石器の種類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	出土位置
図版番号	説明						
Fig. 77-1	石 鏃	2.6	(1.7)	0.4	1.3	黒色頁岩	覆土
PL. 37-4	基部に扶入のある無茎鏃である。片側の脚部が途中から欠損している。						
Fig. 77-2	石 鏃	(2.0)	2.1	0.4	1.3	黒色安山岩	覆土
PL. 37-4	基部に扶入のある無茎鏃である。先端部分は欠損している。						
Fig. 77-3	石 鏃	3.5	(2.0)	0.4	1.3	流紋岩質安山岩	覆土
PL. 37-4	基部に扶入のある無茎鏃である。片側の脚部が一部欠損している。						
Fig. 77-4	打製石斧	8.7	4.2	1.7	62.3	黒色頁岩	覆土
PL. 37-4	撥形に類似する。刃縁部分は使用時に欠落し、再度刃部調整を行なっている。						
Fig. 77-5	打製石斧	9.6	4.6	1.1	59.9	変質安山岩	覆土
PL. 37-4	裏面には広く自然面が残る。表面は横方向から一撃で剥離を行ない、表裏両面の細部調整を行なっている。						
Fig. 77-6	打製石斧	8.4	3.9	0.8	27.4	黒色頁岩	覆土
PL. 37-4	短冊形を呈す。小型の石器である。表裏面とも横方向の剥離後、細部調整を行なっている。						
Fig. 77-7	打製石斧	(7.9)	5.8	3.0	159.9	灰色安山岩	覆土
PL. 37-4	中間部分から基部にかけて欠損する。側縁部分は刃が潰れ、刃部は再調整を行なっている様相を呈す。						
Fig. 77-8	打製石斧	(8.2)	3.8	1.2	56.9	灰色安山岩	覆土
PL. 37-4	短冊形を呈す。基部を欠損する。裏面は自然面が残る。表裏面とも横方向からの剥離後、細部調整を行なっている。						

第3章 各 説

13区11号住居址出土遺物一覧表（石器）

挿図番号	石器の種類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	出土位置
図版番号	説 明						
Fig. 77-9	打製石斧	(7.6)	4.9	2.1	83.0	輝緑岩	床面下
PL. 37-4	中間部分から基部にかけて欠損する。裏面には一部自然面が残る。横方向から剥離後、細部調整を加え刃部を形成している。一部に磨耗痕がある。						
Fig. 77-10	打製石斧	13.0	7.6	2.6	290.0	黒色頁岩	床面下構築面直上
PL. 37-4	刃部を欠損する。裏面には広く自然面が残る。袈り部分は刃毀れが生じている。						
Fig. 77-11	打製石斧	7.3	4.6	1.3	61.4	黒色頁岩	覆土
PL. 37-4	裏面には自然面が多く残る。刃部の一部が欠損しているのは使用時によるものと考えられる。また後に細部調整を加えている。基部にも細部調整を行なっている。						
Fig. 77-12	打製石斧	(7.8)	3.9	2.0	86.6	黒色頁岩	覆土
PL. 37-4	短冊形と考えられる。中間部分から刃部にかけて欠損する。裏面は自然面が広く残る。表面は横方向からの剥離を行なっている。						
Fig. 77-13	打製石斧	(4.0)	3.9	1.3	23.8	黒色頁岩	覆土
PL. 37-4	基部のみ残存する。表面は横方向の剥離後、基部・側縁部に細部調整を行なっている。						
Fig. 77-14	打製石斧	(5.6)	5.0	1.5	51.6	安山岩	覆土
PL. 37-4	刃部のみ残存する。表面は自然面を残す。裏面は横方向からの剥離後、側辺部分に細部調整を行なっている。刃部が欠損している。						
Fig. 77-15	打製石斧	(8.4)	4.1	1.6	74.7	黒色頁岩	覆土
PL. 37-4	短冊形？ 中間部分から刃部にかけて欠損する。表面基部に自然面が残る。表裏面とも横方向からの剥離後、側辺部に、細部調整を行なっている。						
Fig. 77-16	打製石斧	(5.2)	4.4	1.5	32.5	砂岩	覆土
PL. 37-4	刃部付近が残存するが一部欠損する。横方向からの剥離後、側辺部に細部調整による刃部の作製を行なっている。表面には自然面を残す。						
Fig. 77-17	打製石斧	(5.2)	3.9	1.1	26.7	黒色頁岩	覆土
PL. 37-4	中間部分から刃部にかけて欠損する。表裏面とも横方向からの剥離後、基端部分も含めて細部にわたり調整を行なっている。						
Fig. 77-18	打製石斧	(4.2)	3.7	1.3	24.7	安山岩	覆土
PL. 37-4	刃部および基部を欠損する。表裏面とも横方向の剥離後、細部調整を行なっている。						
Fig. 78-1	打製石斧	(6.2)	5.4	2.3	99.6	輝石安山岩	覆土
PL. 37-5	刃部および基部を欠損する。裏面には自然面が残り、使用痕が観察される。						
Fig. 78-2	打製石斧	(6.4)	3.9	1.3	42.4	砂岩	覆土
PL. 37-5	中間部分から基部が残存する。表面には自然面が残る。裏面は横方向からの剥離後、両側縁部分に細部調整を行なっている。						

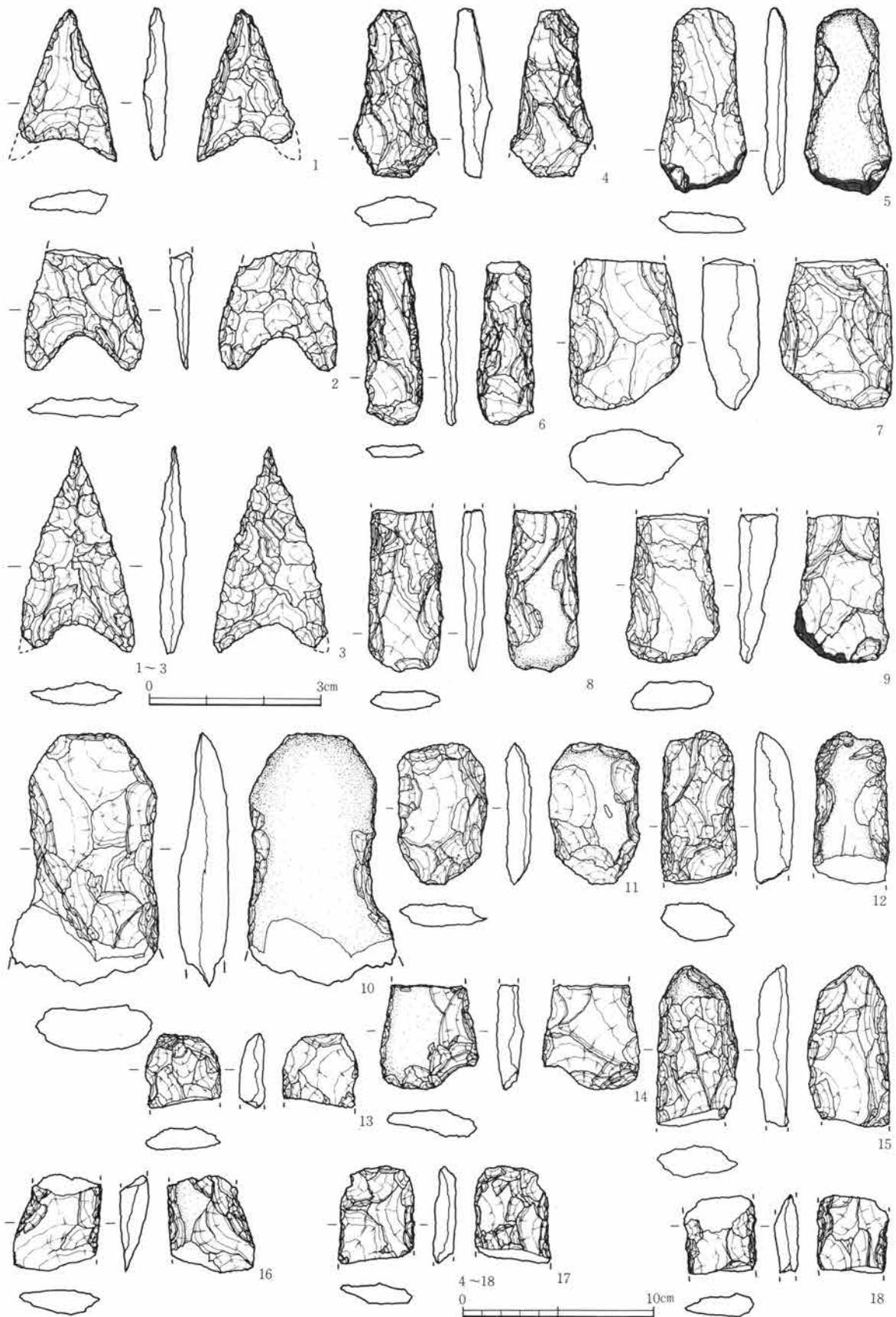


Fig. 77 13区11号住居址出土遺物実測図

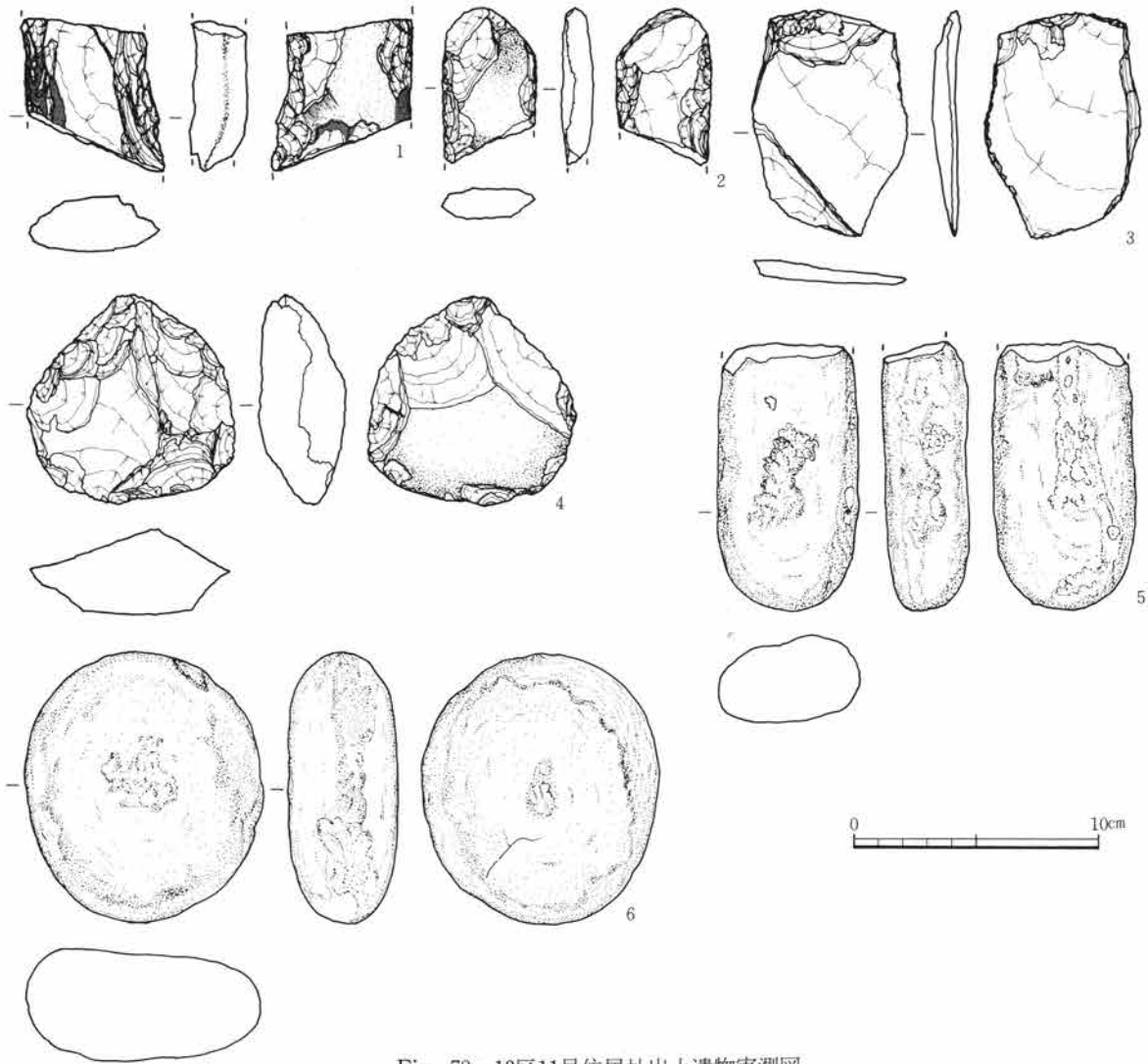


Fig. 78 13区11号住居址出土遺物実測図

13区11号住居址出土遺物一覧表 (石器)

挿図番号	石器の種類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	出土位置
図版番号	説明						
Fig. 78-3	剥片石器	9.2	6.3	0.4	53.6	黒色頁岩	覆土
PL. 37-5	薄く剥れた石材に裏面から細かく調整を行なっている。						
Fig. 78-4	石核	8.4	8.5	3.5	242.1	黒色頁岩	炉址内
PL. 37-5	裏面には自然面が残る。						
Fig. 78-5	磨石	(10.8)	5.8	3.5	365.0	閃緑岩	覆土
PL. 37-5	端部の一部を欠損する。表裏面に僅かな凹がある。側縁部分には叩いた痕がある。						
Fig. 78-6	磨石	10.9	9.6	4.5	780.0	石英閃緑岩	覆土
PL. 37-5	表裏両面に僅かに凹がある。周縁部分は全体に叩いた状況を呈す。						

13区1号土坑 (Fig. 79, PL. 38-1)

1号土坑はD-15グリッドのほぼ中央に位置する。陣場泥流残丘上位西側中央付近にあり、5号住居址が北側約2.5mに近接している。当土坑は隅丸方形を呈し、長軸2.1m、短軸2.0m、深さ30cmを測る。方位はN-30°-Eである。覆土は5層が確認でき、1層および2層には陣場泥流中に含まれている角礫10~20cmの大きさが二次的な流入として確認できる。土層(覆土)からの判断では自然に流入した堆積層と考えられる。遺物は縄文の土器片が出土している。当遺構に近似する遺構としては2号土坑があるが、両方とも性格づけができる根拠をもつには至っていない。

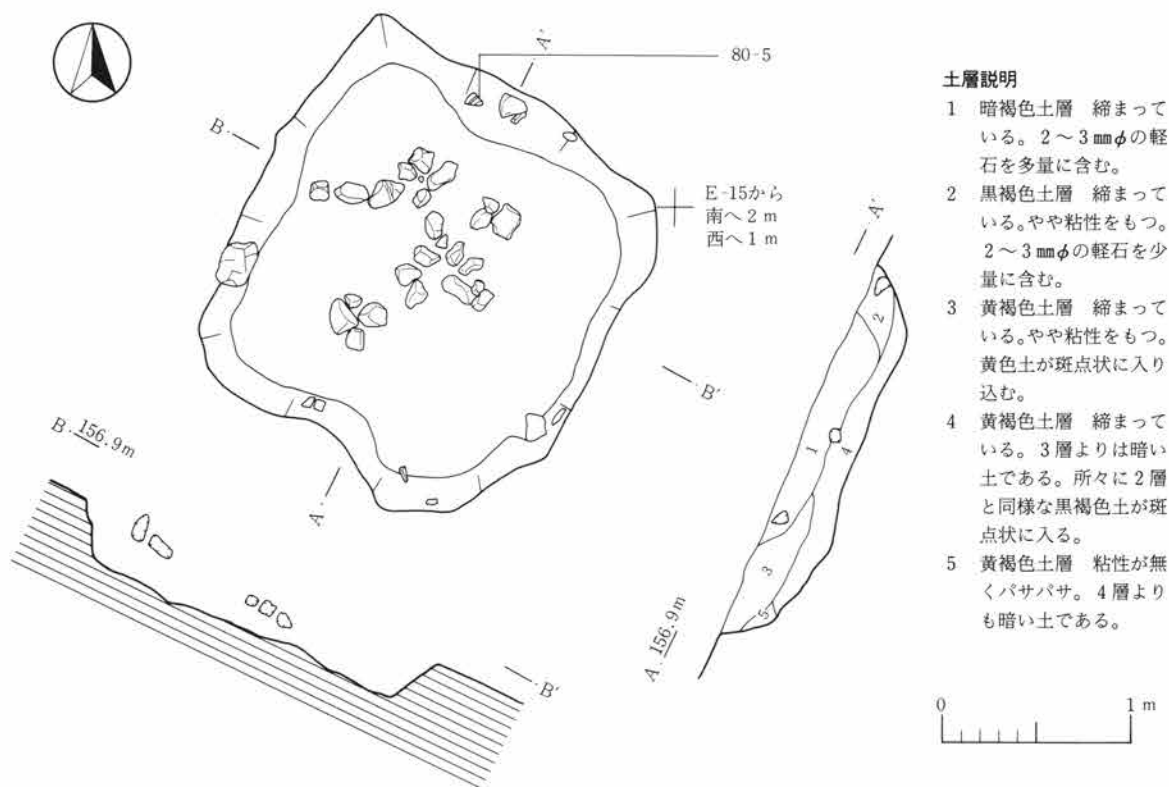


Fig. 79 13区1号土坑実測図

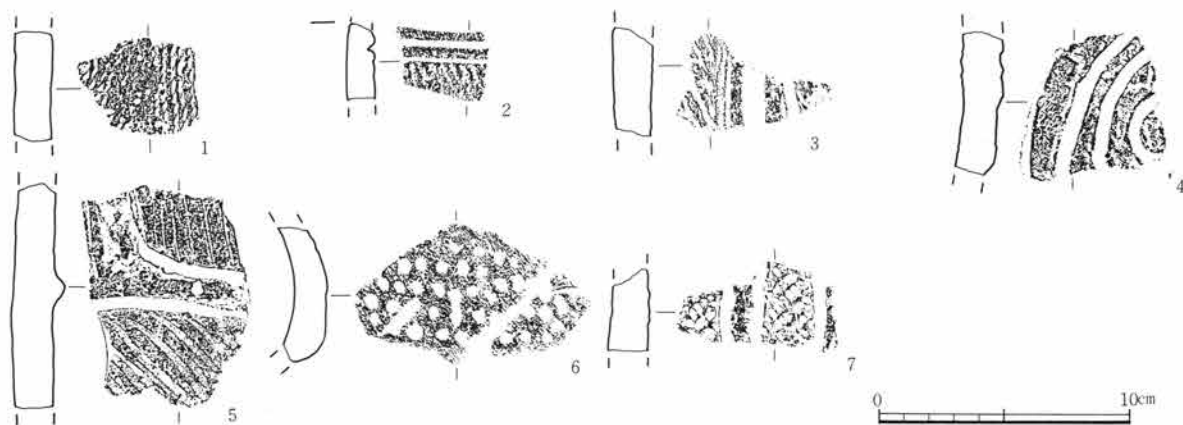


Fig. 80 13区1号土坑出土遺物実測図

13区1号土坑出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 80-1	深鉢・胴部	覆土	小礫混入	にぶい褐	燃糸文	II~IV	
PL. 38-2	胴部に燃糸文を施したものを。						
Fig. 80-2	深鉢・胴部	覆土	白色鉱物混入	浅黄橙	RL	不明	
PL. 38-2	胴部に平行沈線をもち、地文には縄文を施す。						
Fig. 80-3	深鉢・胴部	覆土	白色鉱物混入	明赤褐		VI-1	
PL. 38-2	胴部に沈線による懸垂文をもち、区画内に斜位の細い沈線を施す。						
Fig. 80-4	深鉢・胴部	覆土	夾雑鉱物混入	橙	RL	?	
PL. 38-2	胴部に弧状の沈線を数重に描き、地文には縄文を施す。						
Fig. 80-5	深鉢・胴部	床面	小礫少数混入	にぶい橙		VI	
PL. 38-2	胴部に隆帯及び沈線により文様区画し、区画内に縦位或いは斜位に細い沈線を施す。						
Fig. 80-6	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	にぶい黄橙		VII	
PL. 38-2	口縁部に刺突を施したものを。						
Fig. 80-7	深鉢・胴部	覆土	小礫混入	橙	RL	VI~VII	
PL. 38-2	胴部に懸垂文をもち、地文に縄文を施したものを。						

13区2号土坑 (Fig.81、PL. 38-3)

2号土坑はJ・K-14・15グリッドに広がりをもつ。南側が9号住居址の北西部分に接し、北側約7mに7号住居址が位置している。当遺構は陣場泥流残丘の中央東寄り、東側斜面の中腹部分に検出できた。陣場泥流残丘を掘り込んだ遺構のため、地山は堅く、多くの礫を含んでいる残丘であることがわかる。当土坑の平面形は、方形を意

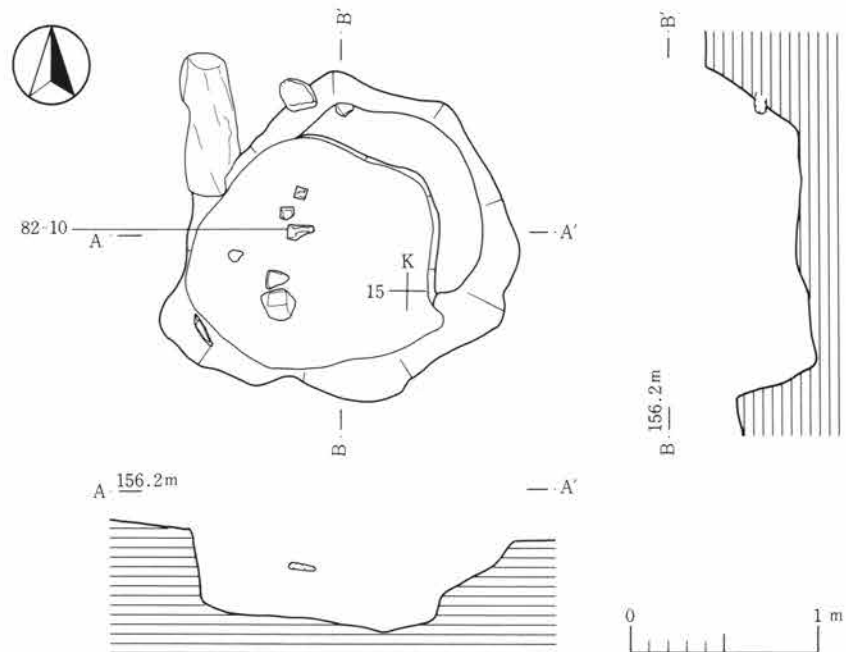


Fig. 81 13区2号土坑実測図

識して掘られたと思われるが、南東および北東隅部分の形状が崩れており、不明瞭なところである。北西および南西の隅を見る限りでは隅丸方形を呈している。長軸1.7m、短軸1.55m、深さ約50cmである。床面は南東部分が僅かに深くなり不安定であるが、他は平坦で安定性がある。壁は斜めに掘り込んでいる。西壁での方位はN-40°-Eである。遺物の出土状況は覆土内からのものが多い。また遺物と同様に陣場泥流内の角礫が混入している。当遺構は、1号土坑と同様なあり方と考えられるが、用途や性格等については不明確であった。

13区2号土坑出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 82-1	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	橙	燃糸文	VI	
PL. 38-4	口縁部は太い沈線間に波状の隆帯及び刺突を施し、以下に燃糸文を施す。						
Fig. 82-2	深鉢・口縁部	覆土	白色鉱物混入	橙	条線文	VI-2	
PL. 38-4	口縁部に隆帯と沈線による文様をもち、胴部に沈線による蛇行する懸垂文を描く。地文には細い条線を施す。						
Fig. 82-3	深鉢・胴部	覆土	小礫少数混入	橙	LR	?	附加条
PL. 38-4	胴部に平行沈線をもち、地文に縄文が施される。						
Fig. 82-4	深鉢・胴部	覆土	白色鉱物混入	橙	燃糸文	?	
PL. 38-4	胴部に燃糸文を施したものの。						
Fig. 82-5	深鉢・胴部	覆土	小礫少数混入	橙	RL	?	
PL. 38-4	胴部に縄文を施したものの。						
Fig. 82-6	深鉢・頸部	覆土	白色鉱物混入	にぶい褐	RL	V~VI	
PL. 38-4	隆帯と沈線をもち、隆帯上に渦巻を描く。地文に縄文を施す。						
Fig. 82-7	深鉢・胴部	覆土	白色鉱物混入	明赤橙	RL	VI~VII	
PL. 38-4	胴部に内部磨消となる懸垂文及び先端が蕨手となる懸垂文をもち、地文に縄文を施す。						
Fig. 82-8	深鉢・胴部	覆土	小礫少数混入	橙	LR	VIII	
PL. 38-4	胴部に『∨』字状等の文様区画を行ない、区画内を磨消する地文には縄文を施す。						
Fig. 82-9	深鉢・胴部	覆土	雲母・礫混入	黄橙	LR	VIII	
PL. 38-4	胴部に『∩』状の文様区画を行ない、区画内を磨消する地文には縄文を施す。						
Fig. 82-10	深鉢・口縁部	覆土	石英混入	にぶい黄橙	LR	VIII	
PL. 38-4	波状口縁となり、波頂部に橋状把手をもち、口縁部が無文となる。胴部には『∩』状の文様区画を行ない、区画内を磨消する。地文には縄文を施す。						

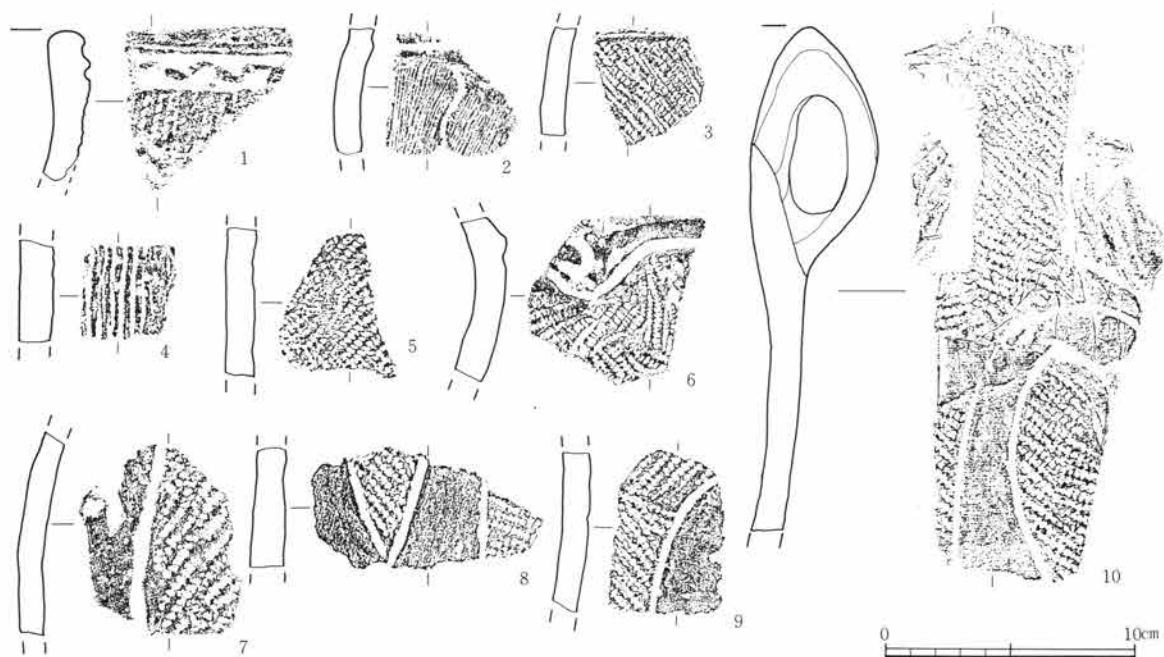
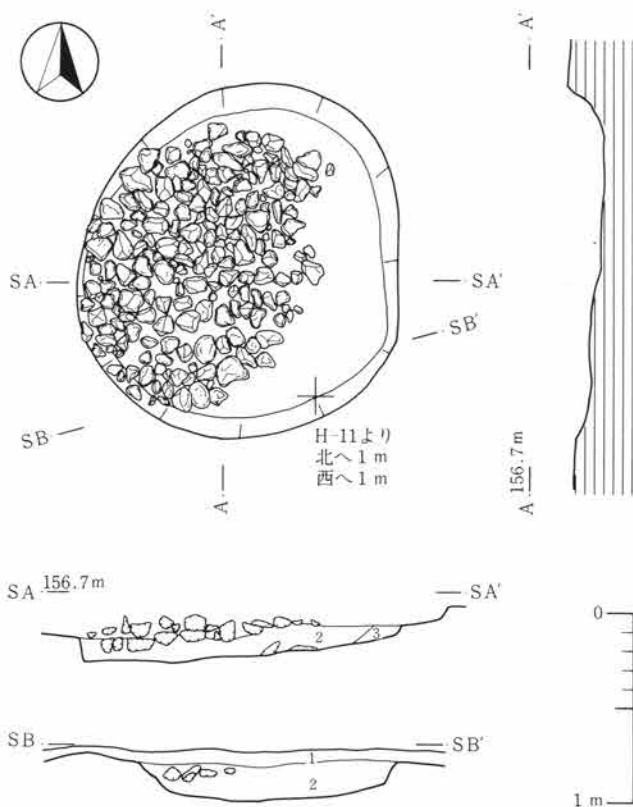


Fig. 82 13区2号土坑出土遺物実測図

13区1号集石 (Fig. 83、PL. 39-1・2)

1号集石はG-10グリッド内南西寄りに検出できた集石遺構である。南西約7mの地点に4号住居址が位置している。陣場泥流丘上平坦部分の北側中央部分にあたり、北は斜面となっている。この斜面には土器だまりが広がっており土器だまりの北側限界に近い部分である。当集石遺構は、ほぼ円形に近い平面形であるが、東側が僅かに変形している。この掘り方の規模は長径1.89m、短径1.72m、深さ約18cmである。この掘り方の覆土2層としてとらえた黄褐色土層は、地山に見られる泥流層の二次堆積土とロームブロックが主であり、この上位に礫が集中して出土した。平均10~15cmφの礫であり、土坑の西側に集中密度が高くなる。概観で上下二段程度の石が敷かれている様相を呈している。明らかに石を敷いた施設と考えてよいものと思われる。



- 土層説明
- 1 褐色土層 ロームブロックを含む。
 - 2 黄褐色土層 地山 (陣場泥流 ロームブロックを混入)。
 - 3 ローム漸移層

Fig. 83 13区1号集石実測図

12・13・27区土器だまり (Fig. 84~888, PL. 40-1~5・41-1・2)

清里・長久保遺跡における縄文時代の集落は12・13・27区に渡って広がりをもつ榛名山東南麓末端の陣場泥流の残丘部分である。この泥流の残丘上を中心に集落が設営されている。遺跡内には大小の陣場泥流丘がいくつか分布することが現地に立つとわかる。主に古墳を中心として泥流丘は利用されている。土器だまりは、13区を中心とし12区の東と27区の北の一部にかかる陣場泥流残丘である。この泥流丘の規模は概ね南北80m、東西70mである。高さは周辺より約3m程度高い。残丘の東南部分は沖積低地が広がる。近接して水田や水路になり、残丘の裾部分は一部が開田の際に削りとられている。泥流の形状は中央部が高く平坦で海拔157.0mである。周辺部に向うにつれて下り傾斜になる。集落がこの泥流丘の上端部に多く分布し、一部が斜面に掛かる。また10・11号住居址は北東斜面の下位に検出した。土器だまりはこの集落を構成する泥流丘の北斜面から西斜面を中心に分布密度が高く、密度は下がるが南斜面付近まで一連の散布状況を呈している。陣場泥流上を覆う土層は、泥流丘上部では薄く、裾部に向い厚く堆積する。この残丘の傾斜面に土器だまり部分がある。土層の確認ではIII-3層、と3層 (Fig. 88) に多くの遺物が出土することが明確である。遺物の中心は、縄文時代中期の土器片と石器が主である他に陣場泥流に包含の土石流を構成する大小の礫が多数出土し、この中に遺物が包含されている様相である。この礫は陣場泥流に見られるものと同一の礫であることから、土器だまりと同一に出土する礫は二次堆積である。

土器だまりの集中地点を Fig. 86で見ると、海拔155.0m~155.5m付近である。

土器だまりの石器出土状況 (Fig. 85) を見ると、土器出土状況 (Fig. 84) とほぼ同じ様な分布密度を呈している。

遺物出土の分布密度で1グリッド(5×5m)あたり1,500点以上の遺物を出土する地区は4グリッドある。13区B-12・13、C-9、E-8グリッドである。いずれも等高線の155.25mが通過する地点である。

遺物出土の分布密度で1グリッドあたり1,000点以上の遺物を出土する地区は6グリッドある。13区B-15、C-8・10、D-8・9、E-9グリッドである。いずれも1,500点以上を出土するグリッドに近接する。

遺物出土の分布密度で1グリッドあたり500点以上の遺物を出土する地区は14グリッドある。13区A-19、B-10・11・14、C-11、D-7、F-8・10、G-8、27区C-2・3、D-2・3、G-1グリッドである。概ね1,000点以上出土する周辺に分布する傾向がある他、南側に10m四方に広がりをもつ部分がある。土器だまりの中心は本泥流丘の北西部分である。密度は下がるが、27区C・D-2・3区付近の遺物の出土状況は土器だまり的な様相をしている。また本残丘の土器だまりの中心から上位、および下位にあたる地点まで満遍無く分布状況が観察できた。また残丘の東側を中心に出土した遺物の数は、総体的には1グリッドあたり少なめである。また出土状況は礫の出土が北西斜面に比して少なく、土器だまりの集中的な出土状況は見られない。

土器だまりから出土する遺物は深鉢を主体に浅鉢、器台、土錘、耳栓などがある。石器は打製石斧、磨石、凹石、多孔石、石匙、叩き石、石核、石棒、台石、石皿、石鏃、スクレイパー、ペンダントなどがある。土器はほとんどが破片である。土器は住居址出土に比して器面は荒れているものが多い。石器も破片が多いが、打製石斧、磨石類、多孔石、石鏃などには完形もある。

本残丘からの出土遺物は、土器49,302点、石器1,834点、総数51,136点である。このうち住居址関係が土器16,133点、石器787点であり、土器だまりの遺物出土率は、土器で67.3%、石器57.1%であり、遺物総体での出土率は66.9%であった。

註) 2つ以上のグリッドで取り上げた遺物はグリッド数で割り、各グリッドに振り分けて分布図を作成した。

第3章 各 説

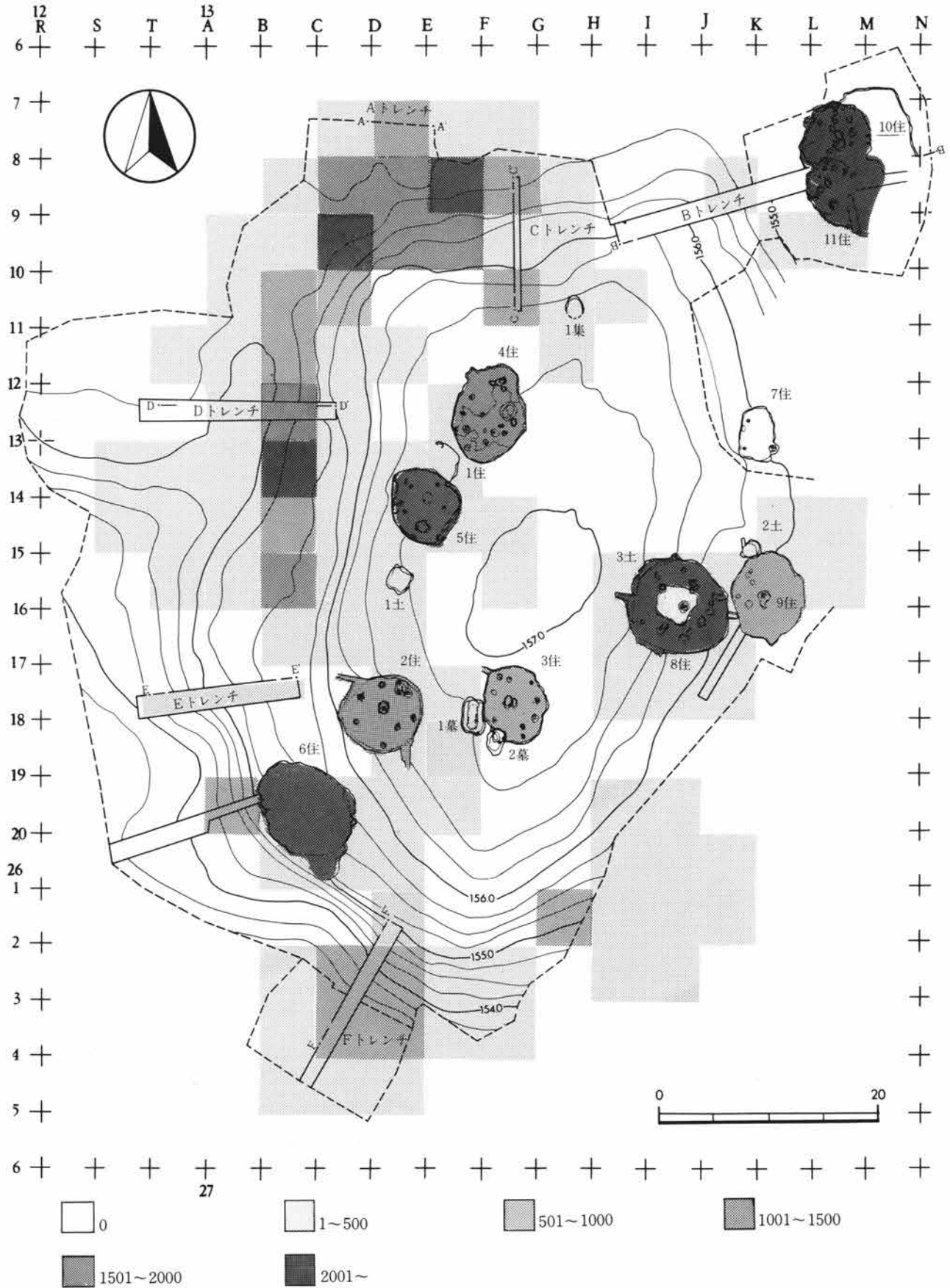


Fig. 84 12・13・27区土器だまり遺物密度分布図 (土器)

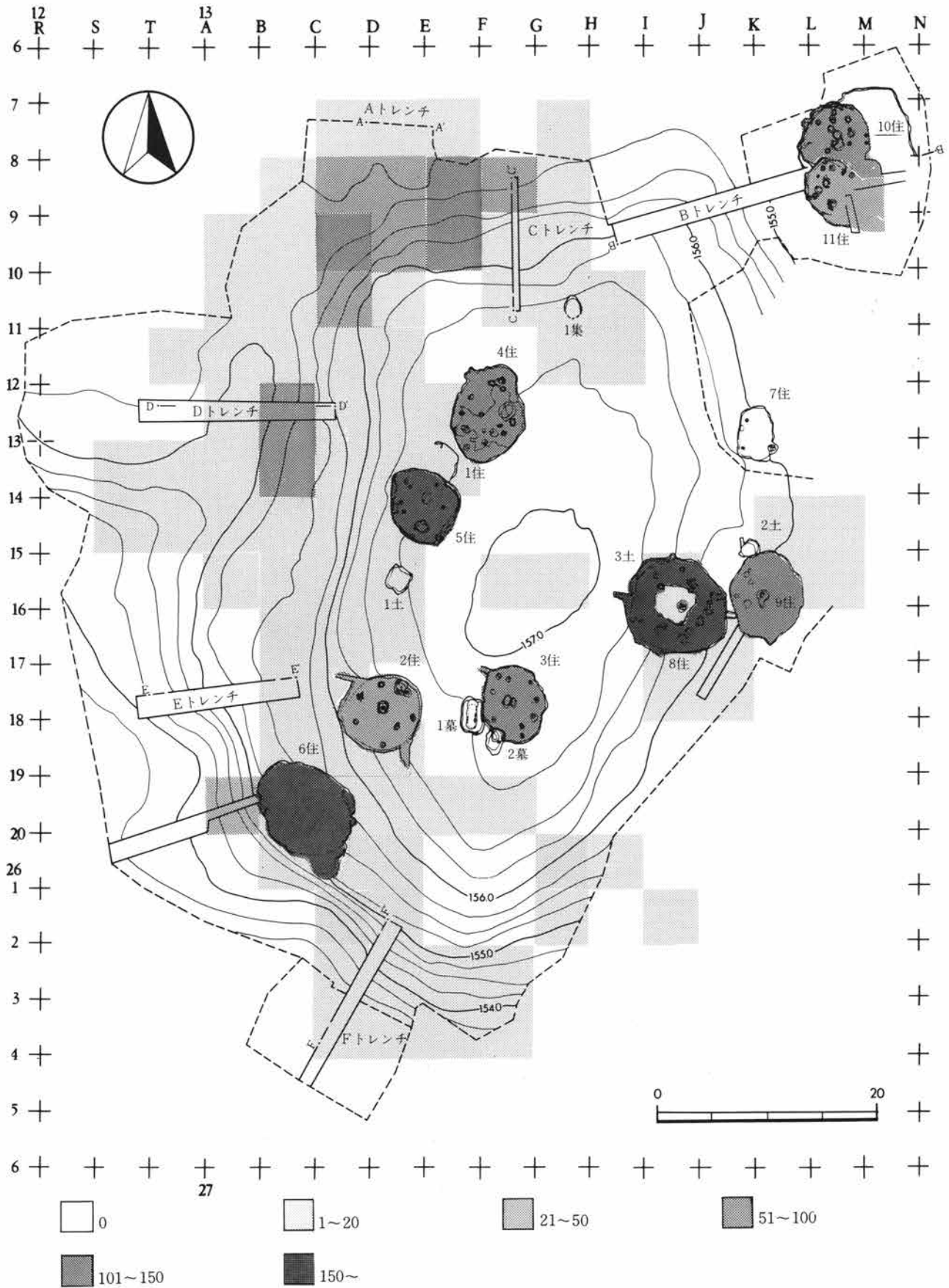


Fig. 85 12・13・27区土器だまり遺物密度分布図 (石器)

第3章 各 説

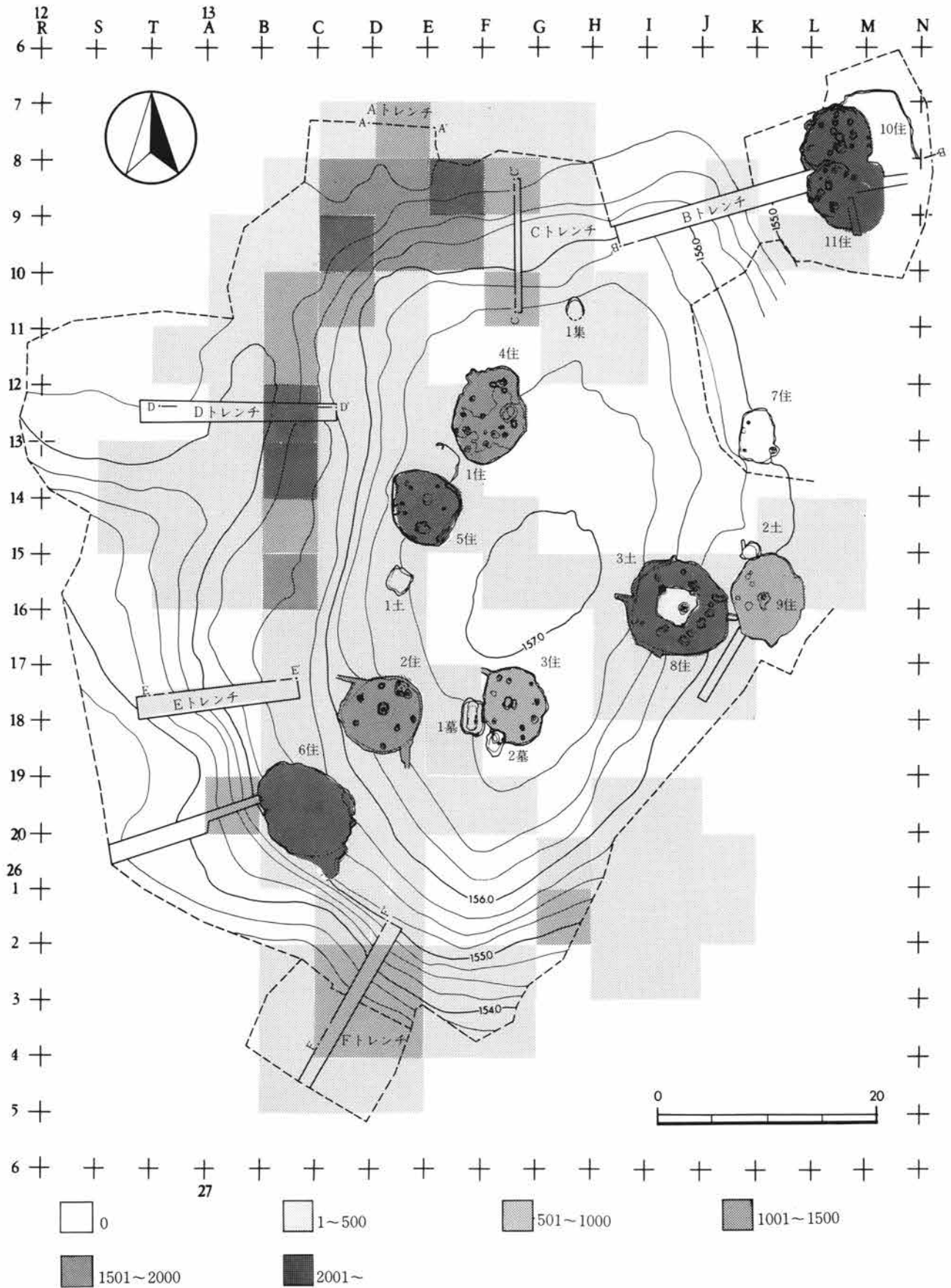


Fig. 86 12・13・27区土器だまり遺物密度分布図(土器&石器)

12・13・27区土器だまり土器・石器出土点数 グリッド別・住居址別

グリッド名	土器	石器	合計
12区 S・T - 13・14	316	10	326
T - 15	32		32
表土層	208		208
表採		5	5
12・13区 T・A - 11	222	5	227
12・13区 表土層	141	8	149
13区 A - 11		1	1
A - 12	2	1	3
A - 13	79	3	82
A - 19	878	27	905
A - 11・12	1		1
A・B - 12	78	7	85
A・B - 14	36		36
A・B - 9・10	599	19	618
A・B - 10・11	580	19	599
A・B - 13・14	363	15	378
A・B - 14・15	321	4	325
B - 8	18		18
B - 10	226	4	230
B - 11	323	6	329
B - 12	1169	43	1212
B - 13	1996	54	2050
B - 14	186	5	191
B - 15	1314	12	1326
B - 16		1	1
B - 17		1	1
B - 12・13	273	11	284
B・C - 8	487	6	493
B・C - 9	313	20	333
B・C - 10		3	3
B・C - 12		8	8
B・C - 14	285	1	286
B・C - 15	25		25
B・C - 19		1	1
B・C - 8・9	76	1	77
B・C - 11・12	550	18	568
B・C - 14・15		1	1
B・C - 15・16	133	1	134
B・C - 18・19		1	1
B・C - 19・20		1	1
C - 8	831	16	847
C - 9	1518	37	1555
C - 10	659	26	685
C - 11	94	2	96
C - 12	205	2	207
C - 13	95	4	99
C - 14	45	3	48
C - 17		1	1
C - 19		1	1
C - 8・9		3	3
C - 9・10	167	3	170
C - 10・11	574	2	576
C・D - 8	1	1	2
C・D - 13	18		18
C・D - 19		6	6
C・D - 7・8	292	4	296
C・D - 19・20		11	11
D - 7	309	7	316

グリッド名	土器	石器	合計
13区 D - 8	793	18	811
D - 9	1301	26	1327
D - 10		1	1
D - 11	33	2	35
D - 12		1	1
D - 13		6	6
D - 14	1	11	12
D - 15	55	3	58
D - 16	46	1	47
D - 18		1	1
D - 19	2		2
D - 20	50	1	51
D - 7・8	429	2	431
D - 8・9	160		160
D - 16・17	1		1
D - 17・18	1		1
D - 7~9	24		24
D・E - 7	26		26
D・E - 8	255	12	267
D・E - 14	112		112
D・E - 7・8	268	19	287
D・E - 8・9	18		18
E - 7		1	1
E - 8	1789	71	1860
E - 9	815	47	862
E - 12	12	3	15
E - 13	83	4	87
E - 17	12		12
E - 18	2		2
E - 19	16	1	17
E - 7・8	324		324
E - 8・9	628	4	632
E・F - 8・9		2	2
F - 8	498	35	533
F - 9	171	1	172
F - 10	601	14	615
F - 14	7		7
F - 15	21	3	24
F - 19		1	1
G - 7		1	1
G - 8	496	10	506
G - 9	378	12	390
G - 10	141	8	149
G - 11	269	12	281
G - 15		1	1
G - 10・11	1		1
H - 10	121	2	123
H - 11		8	8
H・I - 20		1	1
H・I - 15・16	10		10
H~J - 15・16	70		70
H~J - 16・17	175		175
I - 17		2	2
J - 8	12		12
J - 16		5	5
J - 17		2	2
K - 9	136		136
K・L - 14・15	36	2	38

第3章 各 説

グリッド名	土 器	石 器	合 計
13区 L - 8	213		213
L - 9	25		25
P - 15		2	2
13・27区CD20・CD1		1	1
D-20・D-1	50	2	52
GH20・GH1		2	2
HI19~HI2	40		40
HJ20~HJ1	18		18
27区 B - 2~4	3		3
C - 3	1		1
C・D - 2・3	2514	22	2536
C・D - 3・4	92		92
E・F - 2	345		345
E・F - 2・3	561	14	575
G - 1	717	16	733
I - 1		1	1
12ラインより北 北西斜面	204	44	248
13区 A トレンチ	1		1
E トレンチ	106		106
III - 3 層	209	8	217
表 土 層	548	4	552
表 探		3	3

遺 構 名	土 器	石 器	合 計
13区	1085	47	1132
清 ナ		36	36
注記なし		26	26
13区 1号住居址	165	10	175
2号住居址	1005	42	1047
3号住居址	513	61	574
4号住居址	1404	83	1487
5号住居址	1566	103	1669
6号住居址	1893	132	2025
8号住居址	2866	189	3055
8号住内落ち込み	275	18	293
9号住居址	640	60	700
10号住居址	2981	50	3031
11号住居址	2149	39	2188
1号土坑	115		115
2号土坑	223		223
13・27区6号住居址 関係グリッド	338		338
合 計	49302	1834	51136

註 以上の表の中に、住居址出土遺物観察表で記載した住居址外の遺物は、グリッド出土遺物としては扱わず、各々の住居址の中に記載している。

145・146頁の表は12・13・27区土器だまりの遺物出土点数とグリッド別・住居址別の出土点数の集計である。土器だまりの遺物出土は極めて多く、その取り上げについては4グリッド単位で取り扱ったものもある。全てが1グリッド単位では集計できなかった。

土器だまりの遺物は13区ではB-13グリッドやE-8グリッド、C-9グリッドを中心に多く出土した。さらに、その周辺部であるB-12・B-15グリッドやD-9グリッドや27区C・D-2・3グリッドでも比較的多くの遺物が出土した。

石器の出土は13区B-12・13グリッドやE-8・9グリッドで多量に出土し、その他、C-9・10グリッドやF-8グリッドで比較的まとまって出土した。

13区の住居址では8号と10号からは3,000点近くの土器破片が出土した。11号住居址からは2,100点余りと、6号住居址からは1,900点近くの土器破片が出土した。また、8号住居址からは190点、6号住居址からは130点、5号住居址からは100点余りの石器が出土した。

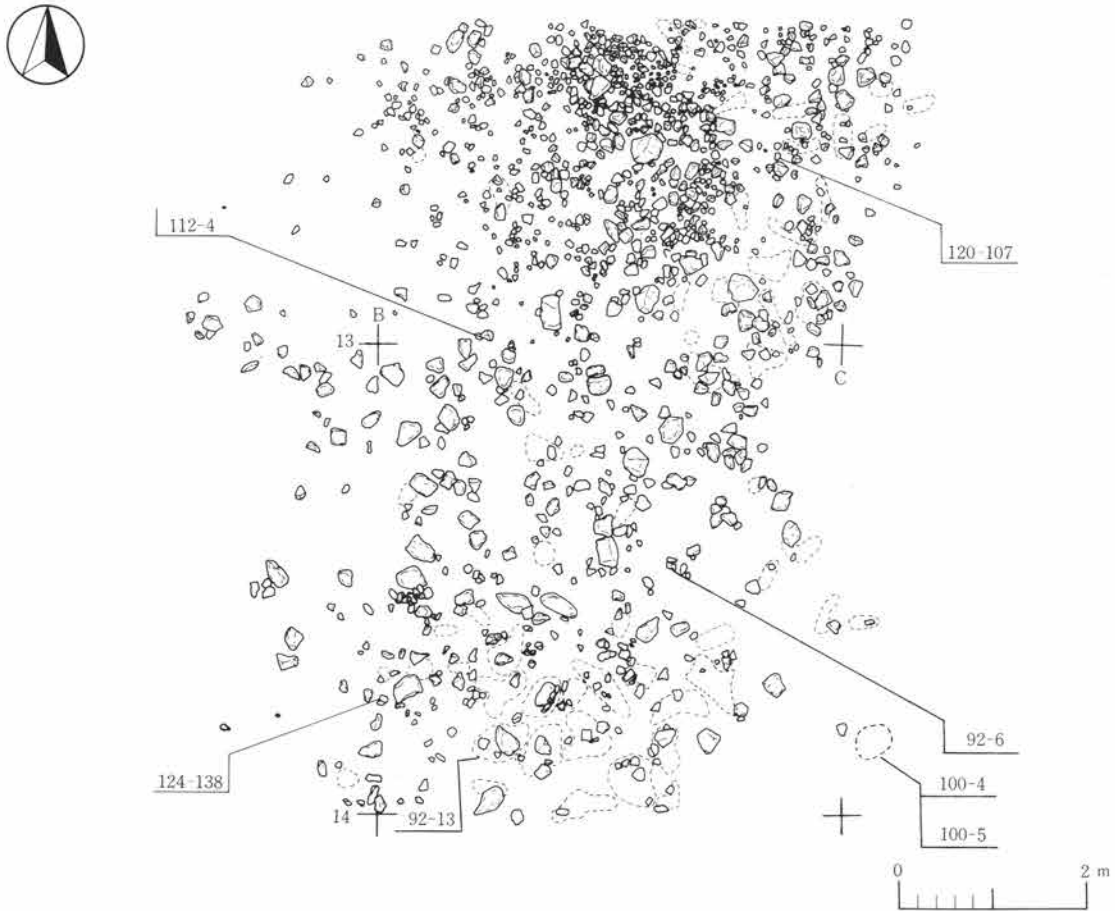


Fig. 87 13区土器だまりA~C-12・13グリッド平面実測図

Fig.87 は住居址の周辺に形成されていた、所謂「土器だまり」の部分出土状態の分布図である。今回の調査において、土器だまりの出土遺物はグリッド単位で取り上げ、詳細な分布図は作成することができなかったため、部分的に出土状態の分布図を作成した。

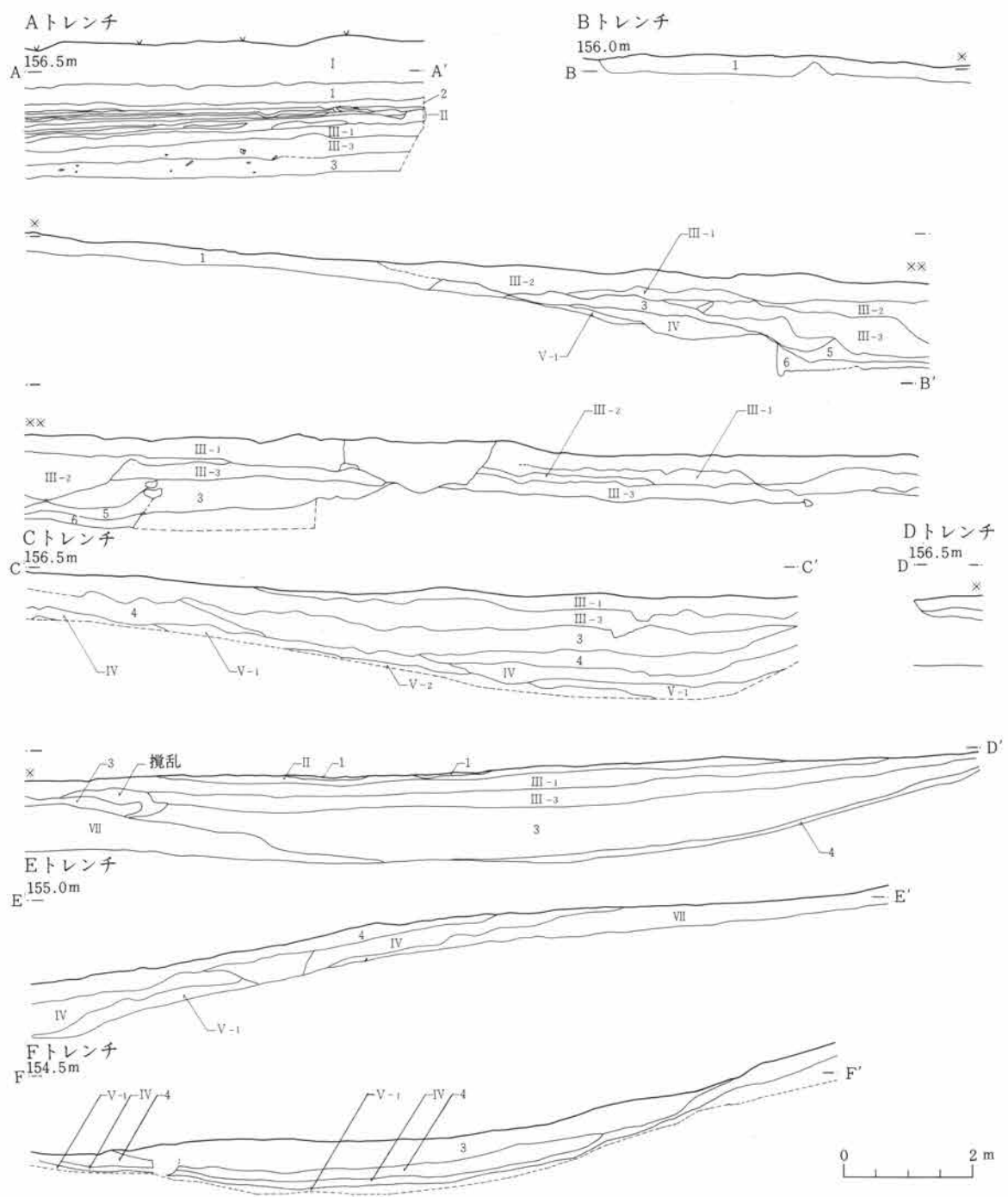
本図で示した分布図はA~C-12・13グリッドの遺物出土状態である。勝坂式から加曾利EIII式土器破片と石器が出土している。

III-3層の黒色で粘質の強い土層中の出土であり、自然礫の混入した中に土器破片が散在していた。土器だまりの遺物出土状態は、その他のグリッドでも類似している傾向が認められた。遺物の出土量が多く、層的な幅をもって出土した部分もあるが、黒色土に自然礫を混入した土層中から、土器破片や石器が出土する状態は共通していた。

これらの遺物が出土する地点は、住居址の形成された平坦部分を取りかこむ斜面部分である。多量の遺物が出土したのであるが、住居や土坑などに該当する遺構は認められなかった。これより、集落の立地する泥流丘の斜面に形成された土器廃棄場所と解釈したのであるが、住居等から出土した土器よりも土器だまりから出土した土器にやや時期の古いものも含まれていた。この点については、今後さらに住居址の土器と土器だまりの資料を詳細に比較検討することが必要であろう。

(中東耕志)

第3章 各 説



土層説明 基本土層

- I 表土 (耕作土)
- II ニツ岳降下火山灰層 部分的に堆積状況は違うが、4 ~ 5unitに分けられる。(FA)
- III-1 浅間C降下軽石層。黒色土中にC軽石を多量に含む。C軽石は1~10mmφ位であり、遺物は何も含まない。
- III-2 黒色土層 やや軟質(粘性をもつ)縄文土器及び礫を含む。
- IV ローム漸移層
- V-1 ローム層

- V-2 ローム層 (ブロック状)
- VII ローム層と陣場泥流の混入土層

- 1 褐色土層 (砂質)
- 2 ニツ岳降下火山灰層と褐色土の中間土層
- 3 茶褐色土 かなり粘性をもち、縄文土器を含む。(上部)砂もわずかに含む。
- 4 茶褐色土層 3層とほぼ同様であるが、粘性が大、遺物を出土しなくなる。
- 5 茶褐色土層 軽石 (5mmφのC軽石を含む。)
- 6 茶褐色土層 11号住居址床面直上の覆土。

Fig. 88 12・13・27区土器だまり土層図

13区土器だまり出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 89-1	深鉢・口縁部	13区A-19Gr III-3層	石英混入	明赤褐		II	
PL. 42-1	口縁は直立し、やや山形となる。口唇直下に横位の隆起線と平行沈線を施す。沈線間に鋸歯状沈線を挿入する。						
Fig. 89-2	深鉢・口縁部	13区A-19Gr III-3層	小礫混入	橙	燃糸r	II	
PL. 42-1	口縁は内湾し、内面は「く」の字状に稜をもつ。口唇部には横位水平の沈線と波状沈線を施す。						
Fig. 89-3	深鉢・口縁部	13区A-19Gr III-3層	小礫混入	明赤褐		II	器面調整良好
PL. 42-1	口縁は「コ」の字形になり、やや表面側に肥厚する。口縁部に横位2条の平行沈線が施される。						
Fig. 89-4	深鉢・胴部	13区A-19Gr 3層	小礫混入	にぶい橙	単節 LR	IV	
PL. 42-1	横位隆起線と半截竹管による水平・曲線状沈線文が施される。						
Fig. 89-5	深鉢・口縁部	13区A-19Gr 3層	雲母・礫混入	にぶい橙	単節 LR	VI-1	表面炭化物付着あり
PL. 42-1	口唇部は内湾する。口縁部は隆帯により渦巻と楕円区画をおこなっている。頸部の屈曲部に横位隆起線をめぐらしている。						
Fig. 89-6	深鉢・口頸部	13区A-19Gr III-3層	雲母・礫混入	にぶい黄褐	単節 RL	VI-1	キャリパー形
PL. 42-1	頸部で外反し口縁部が直立する。口唇直下に隆起線をめぐらし、口縁部文様は楕円区画と逆「の」の字状沈線を施す。						
Fig. 89-7	深鉢・口頸部	13区A-19Gr III-3層	白色鉱物混入	にぶい橙	単節 RL	VI-1	
PL. 42-1	口縁部には隆起線による楕円区画と逆「の」の字状沈線を施す。区画内に縄文を施し、頸部には縦位の沈線を施文する。						
Fig. 89-8	深鉢・口縁部	13区A-19Gr III-3層	白色鉱物混入	にぶい橙	単節 RL	VI	
PL. 42-1	口縁は直立し、口縁平行3条の隆起線を施す。区画内に縄文を施す。頸部は屈曲する。						
Fig. 89-9	深鉢・口縁部	13区A-19Gr III-3層	小礫混入	にぶい黄橙	単節 RL	VI	
PL. 42-1	口縁部はやや肥厚する。口唇直下に横位隆起線を貼付け、以下縄文を施す。						
Fig. 89-10	深鉢・口縁部	13区A-19Gr III-3層	雲母・礫混入	にぶい橙	単節 RL	VI	
PL. 42-1	口唇部は「く」の字状にやや外反する。口唇直下に横位隆起線を施し、隆起線の両脇を沈線で区画する。						
Fig. 89-11	深鉢・口頸部	13区A-19Gr 3層	夾雑鉱物混入	橙		V	
PL. 42-1	口縁部はやや波状を呈する。口縁に沿って沈線と隆起線で区画し、区画内は縦位の沈線を施す。円形隆起線を貼付する。						
Fig. 89-12	深鉢・口頸部	13区A-19Gr III-3層	白色鉱物混入	明赤褐	単節 LR?	V	口唇部炭化物付着
PL. 42-1	口縁部に隆起線で方形の区画をし、縦位の沈線を施す。さらに、隆起線区画内側に沿って沈線をめぐらす。						
Fig. 89-13	深鉢・口頸部	13区A-19Gr III-3層	砂質	にぶい橙		V	
PL. 42-1	口縁部はやや内湾し、隆起線により半月形に区画する。内部は縦位の沈線を施し、さらに隆起線の脇を沈線で区画する。						
Fig. 89-14	深鉢・口頸部	13区A-19Gr III-3層	小礫少数混入	にぶい褐		V	胎土中にパミス混入
PL. 42-1	口唇部は「く」の字状に内湾する。沈線と隆起線により半月形に区画する。Fig.89-13と同様に隆起線は2条となる。						

13区土器だまり出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 89-15	深鉢・口縁部	13区A-19Gr III-3層	砂質	にぶい黄橙		IV?	
PL. 42-1	口縁部は右下りの沈線と左下りの粘土紐を貼付けにより格子目状の文様を構成している。						
Fig. 89-16	深鉢・口縁部	13区A-19Gr 3層	小礫混入	にぶい橙		VI	表裏面とも炭化物付着
PL. 42-1	口縁部は平縁で、断面は「コ」の字形となる。口縁に沿った沈線と弧状の沈線を施している。						
Fig. 89-17	深鉢・口縁部	13区A-19Gr 3層	白粒・礫混入	にぶい橙	撚糸?	VI	
PL. 42-1	口縁に沿って上下交互に竹管工具による刺突を施し、連続「コ」の字文を作出し、以下弧状の沈線を施す。						
Fig. 89-18	深鉢・口頸部	13区A-19Gr III-3層	砂質	浅黄橙	単節 LR	II	口唇直上に炭化物付着
PL. 42-1	口縁部は肥厚する。口縁に沿って鋸歯状沈線を施す。頸部にかけて連弧状の沈線と逆「の」の字状の沈線を施す。						
Fig. 89-19	深鉢・口縁部	13区A-19Gr III-3層	小礫少数混入	にぶい黄橙	単節	II	Fig.89-18と同一個体?
PL. 42-1	Fig.89-18と同様の文様構成となるが、鋸歯状沈線は連弧状沈線と接する部分で終了している。						
Fig. 89-20	深鉢・胴部	13区A-19Gr 3層	砂質	にぶい黄橙		II	
PL. 42-1	沈線により鋸歯状・円形・方形などの文様が施される。						
Fig. 90-1	深鉢・口縁部	13区A-19Gr 3層	小礫少数混入	浅黄橙	単節 RL	VI-2	
PL. 42-2	口縁部はやや内湾する。地文に縄文を異方向に施し、沈線により半月形の区画を構成している。						
Fig. 90-2	深鉢・口縁部	13区A-19Gr III-3層	小礫混入	にぶい橙	単節 RL	VIII	表裏面とも炭化物付着
PL. 42-2	口唇部はやや丸味をもち、口唇直下より縄文を施している。						
Fig. 90-3	深鉢・口縁部	13区A-19Gr 3層	小礫混入	にぶい橙	単節 RL	VIII	表面に炭化物付着
PL. 42-2	口唇部内面は肥厚する。						
Fig. 90-4	深鉢・口頸部	13区A-19Gr 3層	小礫少数混入	橙	単節 RL	VIII	表面に炭化物付着
PL. 42-2	口唇部は丸味をもち、無文となる。以下頸部にかけて縄文のみ施される。						
Fig. 90-5	深鉢・口頸部	A・B-8・9 III-3層	白粒・礫混入	浅黄橙	単節 LR	VI	
PL. 42-2	頸部で屈曲する。口縁部は隆起線により半月形に区画される。内部に縄文を施す。隆起線上にも沈線を施す。						
Fig. 90-6	浅鉢	A・B-9・10 III-3層	白粒・礫混入	にぶい橙		IV	口唇部欠損
PL. 42-2	横位隆起線の間に楕円文と、縦位の沈線間に円形刺突を施している。						
Fig. 90-7	深鉢・口縁部	A・B-9・10 III-3層	小礫少数混入	橙	単節 LR	VI-1	
PL. 42-2	口唇部は内側にそげ、やや肥厚した稜をもつ。口縁部は横位平行の沈線と、楕円区画により構成される。						
Fig. 90-8	深鉢・口頸部	A・B-9・10 III-3層	小礫混入	にぶい橙		V	
PL. 42-2	口唇部は内側にやや傾斜する。口縁部は隆帯の貼付による突起と隆起線により、半月形の文様を構成する。						



Fig. 89 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

13区土器だまり出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 90-9	深鉢・口縁部	A・B-9・10 III-3層	白色鈹物混入	橙		VI	
PL. 42-2	口唇部内面はややそげ三角状を呈している。櫛状工具により縦位の条線を施し、さらに横位の沈線を施している。						
Fig. 90-10	深鉢・口縁部	A・B-9・10 III-3層	小礫少数混入	にぶい黄橙	単節 LR	VIII	表面に炭化物付着
PL. 42-2	口唇部は丸味を呈する。口唇直下は無文となる。						
Fig. 90-11	深鉢・口頸部	A・B-9・10 III-3層	砂質	橙		VII	胎土中に軽石を混入
PL. 42-2	口縁部は波状を呈する。口端に浅く刺突を加え、口縁に沿って1条の沈線をめぐらす。以下、櫛状工具により曲線を施す。						
Fig. 90-12	深鉢・口縁部	A・B-10・11 III-3層	小礫少数混入	にぶい褐		V	
PL. 42-2	口縁部は波状を呈し、波状部に突起を付ける。口縁部は隆起線で半月形に区画し、以下半截竹管による沈線を施す。						
Fig. 90-13	深鉢・口縁部	A・B-10・11 III-3層	雲母・礫混入	浅黄橙	単節 RL	VII	
PL. 42-2	口縁部は波状を呈し、渦巻文が施される。隆起線の断面は三角形に近くなる。渦巻文直下から楕円区画を構成する。						
Fig. 90-14	深鉢・胴部	A・B-10・11 III-3層	小礫混入	橙	単節 LR	IX	
PL. 42-2	横位隆起線上に押圧し、以下幾何学系文様を作出し、部分的に縄文を施している。						
Fig. 90-15	壺・頸胴部	A・B-12Gr III-3層	石英混入	にぶい橙	単節 LR	V	
PL. 42-2	頸部は無文となり、胴上半部に把手が付く。隆起線と沈線により渦巻文を施し、楕円区画する。						
Fig. 90-16	深鉢・胴部	A・B-12Gr III-3層	小礫混入	浅黄橙	単節 LR	VI~VII	
PL. 42-2	縦位2条の隆起線と蛇行隆起線を貼付している。						
Fig. 90-17	深鉢・胴部	A・B-12Gr III-3層	白色鈹物混入	にぶい橙	単節 LR	VIII	
PL. 42-2	磨消縄文。細い沈線で曲線的文様を作出する。						
Fig. 91-1	深鉢・口縁部	A・B-13・14 III-3層	白色鈹物混入	橙		VI-2	
PL. 42-3	口縁部はやや内湾する。口縁部は横位平行の沈線を施し、沈線間に上下交互に連続刺突し、波状隆起線としている。						
Fig. 91-2	深鉢・胴部	A・B-14・15 III-3層	小礫少数混入	褐灰	燃糸	IV	
PL. 42-3	沈線で曲線状の文様を施す。						
Fig. 91-3	深鉢・口縁部	A・B-13・14 III-3層	白粒・礫混入	明赤褐		VI-1	胎土に軽石を混入
PL. 42-3	口縁部はやや内湾する。隆起線による渦巻文と楕円区画を構成する。						
Fig. 91-4	深鉢・頸胴部	A・B-13・14 III-3層	砂質	明赤橙	単節 RL	VI-1	
PL. 42-3	口縁部に寄った部分は縄文を施し、隆起線を貼付する。頸部に隆起線をめぐらし、上下2段の連続刺突を加える。						
Fig. 91-5	深鉢・口縁部	A・B-13・14 III-3層	砂質	橙		V	
PL. 42-3	口唇部は逆「く」の字状に屈曲する。口唇頂上部と口縁部に沈線を施す。口縁部は連弧を描き、波状隆起線を貼付する。						

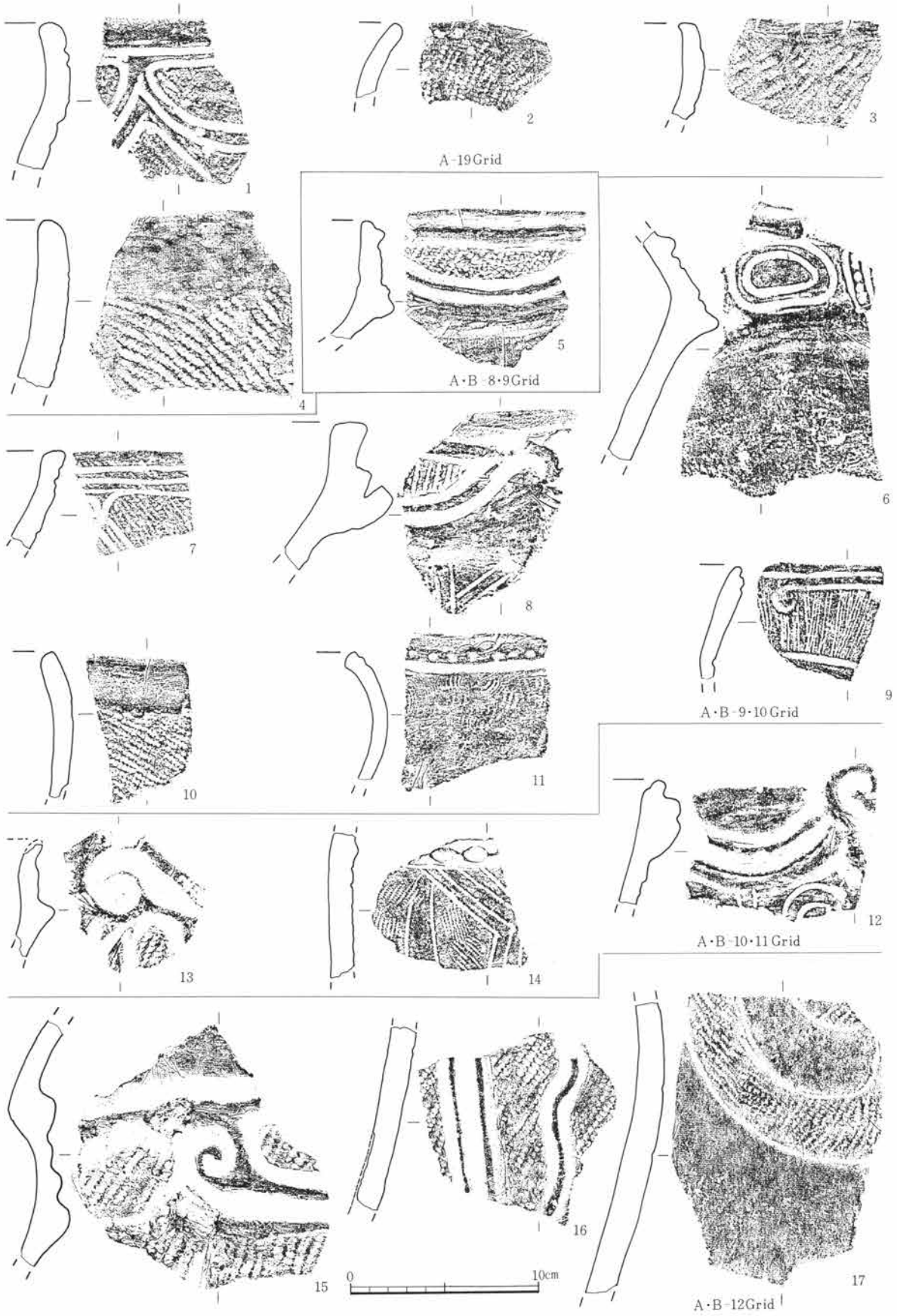


Fig. 90 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

13区土器だまり出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 91-6	深鉢・口縁部	A・B-13・14 III-3層	砂質	にぶい橙	単節 LR?	VI-1	表裏面に炭化物付着
PL. 42-3	口縁部に横位2条の沈線をめぐらし、沈線間に連続刺突を施す。蕨手状懸垂文を垂下させる。						
Fig. 91-7	深鉢・口縁部	A・B-14Gr III-3層	白粒・礫混入	浅黄橙		V	内面の調整良好
PL. 42-3	口唇直下に横位隆起線をめぐらす。隆起線下に綾杉状の沈線を施す。綾杉状文様の上下は沈線で区画する。						
Fig. 91-8	深鉢・胴部	A・B-14・15 III-3層	雲母・礫混入	橙		II	
PL. 42-3	竹管により結節沈線で鋸歯状文様と縦位の平行線を施す。						
Fig. 91-9	深鉢・胴部	A・B-14・15 III-3層	小礫少数混入	にぶい黄橙		II?	内面の調整良好
PL. 42-3	横位平行沈線と沈線間に鋸歯状沈線文を挿入する。						
Fig. 91-10	深鉢・口頸部	A・B-14・15 III-3層	白色鉱物混入	にぶい赤褐	単節 LR	VI	
PL. 42-3	沈線により区画し、区画内は縄文を施す。さらに、縄文上に弧状の沈線を施す。						
Fig. 91-11	深鉢・口縁部	A・B-14・15 III-3層	白色鉱物混入	にぶい橙	単節 RL	VI-1	
PL. 42-3	口縁部は小波状突起となる。隆起線により渦巻と楕円区画を構成する。						
Fig. 91-12	深鉢・頸胴部	13区B-10Gr III-3層	小礫混入	橙	単節 LR?	IV	
PL. 42-3	地文に羽状縄文を施し、頸部には横位2条の隆起線をめぐらす。さらに、縦位の隆起線を垂下させる。						
Fig. 91-13	深鉢・口頸部	13区B-10Gr III-3層	石英混入	橙		V	
PL. 42-3	口唇直上は平口となり、やや肥厚する。沈線により渦巻と楕円区画を構成する。区画内は右下り斜位の沈線を施す。						
Fig. 91-14	浅鉢	13区B-11Gr III-3層	石英混入	橙	単節 RL	IV	Fig.90-6に類似
PL. 42-3	地文に縄文を施し、沈線による楕円文と縦位の楕円区画内に円形刺突を施している。						
Fig. 91-15	深鉢・口頸部	13区B-11Gr III-3層	白色鉱物混入	にぶい橙	燃糸 L	IV	
PL. 42-3	口縁部はやや内湾し、口縁に沿って沈線がめぐる。隆起線と沈線により渦巻文と楕円区画する。						
Fig. 91-16	深鉢・口頸部	13区B-12Gr 3層	雲母・礫混入	にぶい橙		II	
PL. 42-3	口唇部は「く」の字状に外反し内面に稜をもつ。口端部と頸部に刻目を施す。口縁は結節沈線により鋸歯文が作出される。						
Fig. 91-17	深鉢・口縁部	13区B-12Gr 3層	小礫混入	にぶい赤褐	燃糸 L	VI	
PL. 42-3	口縁部はやや波状を呈する。口縁に沿って波状隆起線をめぐらし、上下交互に刺突を施す。						
Fig. 91-18	深鉢・口縁部	13区B-12Gr 3層	白色鉱物混入	にぶい黄橙	単節RL・LR	IV	
PL. 42-3	口縁部はやや波状を呈する。隆起線と沈線により区画する。区画内に羽状縄文を施す。						
Fig. 91-19	深鉢・口縁部	13区B-12Gr 3層	夾雑鉱物混入	にぶい橙	単節 RL	IV	
PL. 42-3	口縁部はやや波状を呈する。口縁に沿って隆起線をめぐらし、さらに沈線で区画する。						

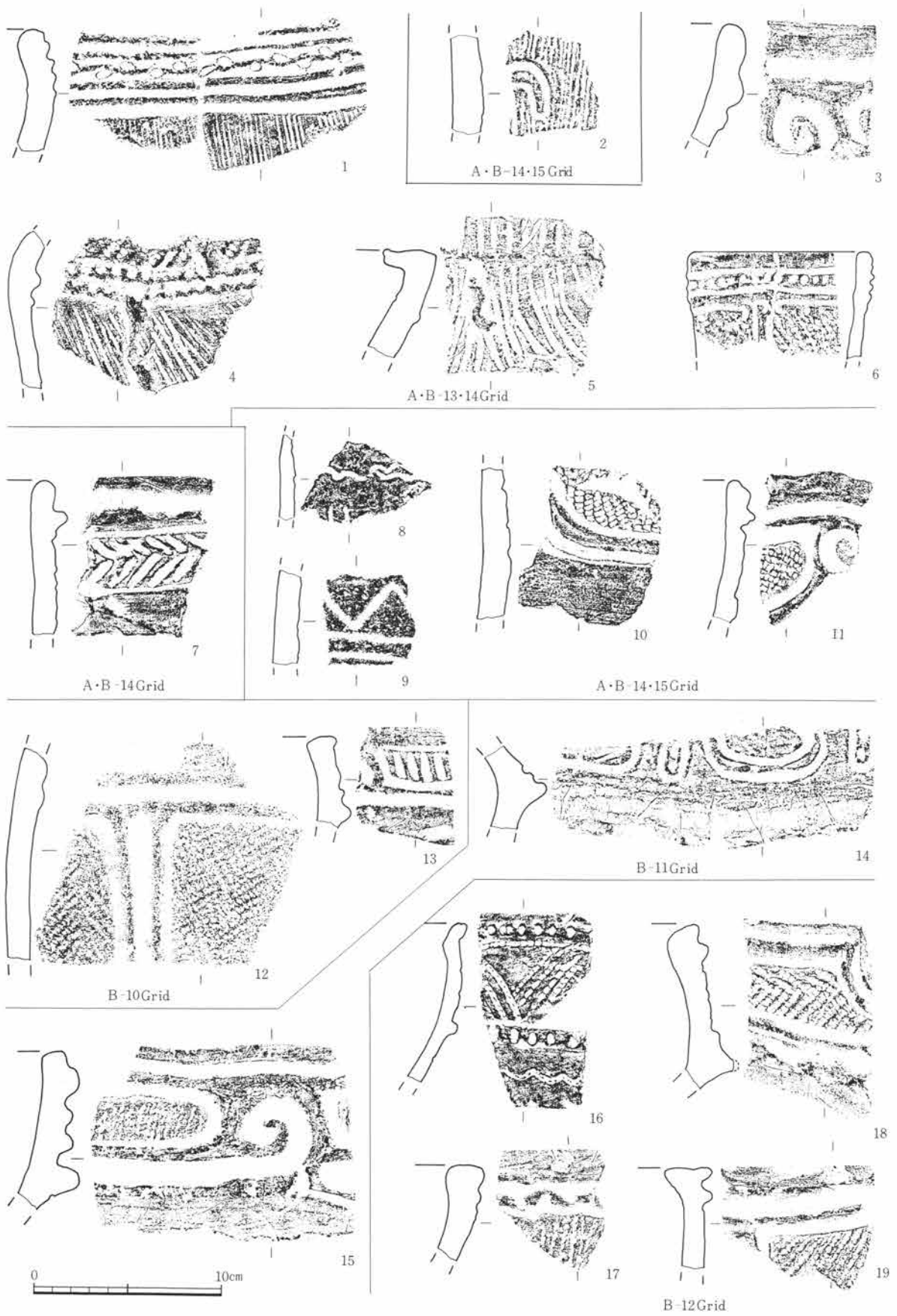


Fig. 91 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

13区土器だまり出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 92-1	深鉢・口縁部	13区B-12Gr III-3層	小礫混入	にぶい橙	単節 RL	IV	
PL. 42-4	口唇部は肥厚し、口縁に沿って隆起線と沈線により方形の区画をする。						
Fig. 92-2	深鉢・口縁部	13区B-12Gr III-3層	白粒・礫混入	にぶい黄橙		II	
PL. 42-4	口唇部は内面に肥厚する。隆起線による文様を作出する。						
Fig. 92-3	深鉢・口縁部	13区B-12Gr 3層	砂質	にぶい橙	単節 RL	IV	
PL. 42-4	口縁部はやや波状を呈し、口縁に沿って隆起線と沈線により方形の区画をする。						
Fig. 92-4	深鉢・口縁部	13区B-12Gr III-3層	小礫少数混入	橙		V?	
PL. 42-4	隆起線と沈線により区画し、区画内に縦位の沈線を施す。						
Fig. 92-5	深鉢・胴部	13区B-12Gr III-3層	白色鉱物混入	にぶい褐	単節 RL	II	
PL. 42-4	隆起線に沿って2条単位の結節沈線と刺突文を施す。						
Fig. 92-6	深鉢・口胴部	13区B-13Gr	砂質	にぶい黄橙		V	
PL. 42-4	口唇部は内面にそげる。隆起線と沈線により渦巻文を施し、楕円区画する。胴部は横位と縦位の浅い沈線で区画する。						
Fig. 92-7	深鉢・口頸部	13区B-13Gr	小礫少数混入	にぶい黄橙	不明	IV	
PL. 42-4	隆起線と沈線により渦巻文を施し、方形の区画をする。						
Fig. 92-8	深鉢・胴部	13区B-13Gr 3層	白・黒粒子混入	橙	単節RL・LR	IV	
PL. 42-4	蕨手状懸垂文と隆起線により区画し、区画内には羽状縄文を施す。						
Fig. 92-9	深鉢・口頸部	13区B-13Gr	小礫混入	橙	燃糸	IV	
PL. 43-1	隆起線と沈線により渦巻文を施し、長楕円形区画をする。区画内には刺突文を施す。胴部には燃糸文を施す。						
Fig. 92-10	深鉢・頸胴部	13区B-13Gr	小礫少数混入	にぶい黄橙		VI?	
PL. 42-4	隆起線と沈線により区画し、区画内は縦位の沈線を施す。						
Fig. 92-11	深鉢・胴部	13区B-13Gr	砂質	にぶい橙		?	内面に炭化物付着
PL. 42-4	横位と縦位の隆起線を施す。						
Fig. 92-12	深鉢・頸部	13区B・C-14Gr 3層	白色鉱物混入	にぶい黄橙	単節 LR	VI-1	Fig.92-15と同一個体
PL. 42-4	横位2条の沈線をめぐらす。						
Fig. 92-13	深鉢・口縁部	13区B-13Gr	白色鉱物混入	にぶい橙		VI-1	
PL. 42-4	口縁部は波状を呈し、口縁に沿って3条の沈線がめぐる。沈線間には竹管工具により刺突文を施す。地文は条線文。						
Fig. 92-14	深鉢・口胴部	13区B-13Gr 3層	小礫少数混入	にぶい橙	複節	VII	
PL. 42-4	沈線により渦巻文を施し、楕円区画する。頸部に沈線をめぐらし、以下縦位の沈線で区画し、区画内の縄文を磨消す。						

13区土器だまり出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 92-15	深鉢・口頸部	13区B-13 III-3層	白色鉱物混入	浅黄橙	単節 LR	VI-1	Fig.92-12と同一個体
PL. 43-2	口縁部は内湾し、口縁に沿って2条の沈線がめぐる。以下、3条単位の沈線により連弧文を施す。頸部にも沈線がめぐる。						
Fig. 92-16	深鉢・口縁部	13区B-13Gr	夾雑鉱物混入	にぶい橙		V	
PL. 42-4	口唇部は内側に折返し、口唇上および口縁部に沈線により重弧文を施す。						
Fig. 92-17	深鉢・口縁部	13区B-13Gr	白色鉱物混入	にぶい赤褐		V	
PL. 42-4	口唇部は内側に張出す。口縁部は斜位の沈線を施す。						
Fig. 92-18	深鉢・頸胴部	13区B-13Gr 3層	夾雑鉱物混入	浅黄橙		IV	
PL. 42-4	頸部下に把手がつき、把手上には刻目を施す。沈線で楕円と縦位に区画し、区画内に沈線文を施す。						
Fig. 93-1	深鉢・頸胴部	13区B-13Gr	夾雑鉱物混入	にぶい黄橙		III-2	
PL. 43-3	隆起線と沈線により蕨手文と渦巻文を作出する。渦巻文内には放射状沈線文を施す。						
Fig. 93-2	深鉢・口縁部	13区B-13Gr	白粒・礫混入	橙		IV	
PL. 43-3	口縁部はやや内湾する。隆起線と沈線により区画し、区画内に刺突文を施す。						
Fig. 93-3	深鉢・口胴部	13区B-13Gr	白色鉱物混入	橙	単節 RL	VI-1	炭化物付着
PL. 43-3	口縁部は沈線により区画し、区画内は丸棒状工具により刺突文を施す。頸部以下は縦位と波状沈線文を施す。						
Fig. 93-4	深鉢・胴部	13区B-13Gr	白色鉱物混入	橙	単節 RL	VI-1	Fig.93-3と同一個体？
PL. 43-3	3条の縦位沈線と波状沈線を施す。						
Fig. 93-5	深鉢・胴部	13区B-14Gr	雲母・礫混入	灰褐		II	
PL. 43-3	沈線と結節ないしは矢羽状沈線で区画し、区画内に三叉状の陰刻を施す。						
Fig. 93-6	深鉢・口縁部	13区B-14Gr	小礫混入	にぶい橙	単節LR(多条)	II	炭化物付着
PL. 43-3	口縁に沿って3条の沈線をめぐらし、沈線間に連続「コ」の字文を施す。						
Fig. 93-7	深鉢・胴部	13区B-14Gr	小礫混入	にぶい橙	単節 RL	II~	整形良好
PL. 43-4	縄文を全面に施す。						
Fig. 93-8	深鉢・口胴部	13区B-14Gr	小礫少数混入	にぶい橙	撚糸 L	II	
PL. 43-3	口縁部に幅4cm余りの無文部をおき、以下撚糸文を施す。						
Fig. 94-1	深鉢・口頸部	13区B-14Gr 3層	小礫混入	明赤褐	単節 LR	II	
PL. 43-5	口縁部には鐮状の張出しを付け、沈線により渦巻文を施す。口唇下と頸部に沈線をめぐらす。						
Fig. 94-2	深鉢・口縁部	13区B-14Gr	白粒・礫混入	にぶい橙		II	
PL. 43-7	太い隆起線と沈線により渦巻文を施す。						

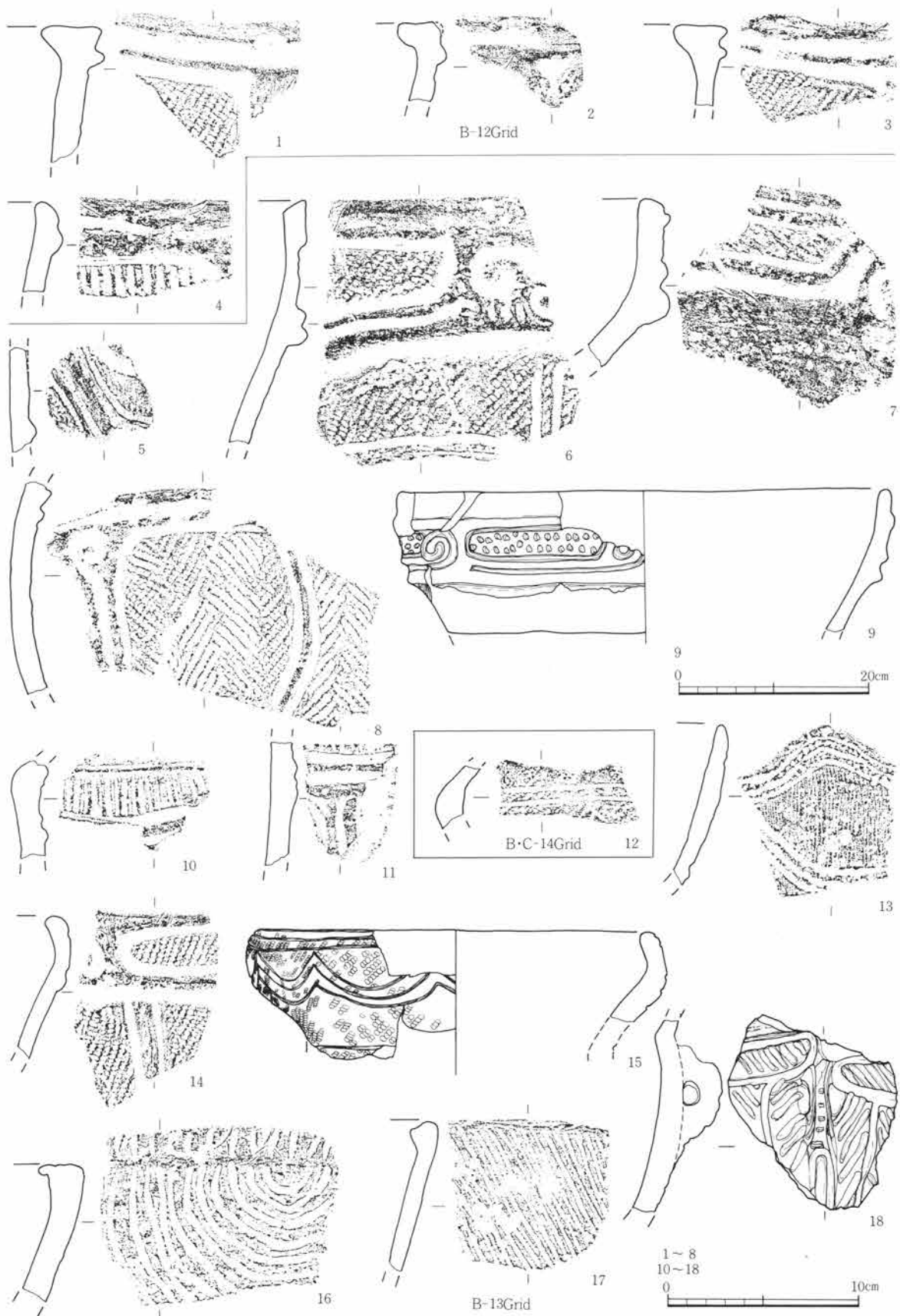


Fig. 92 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

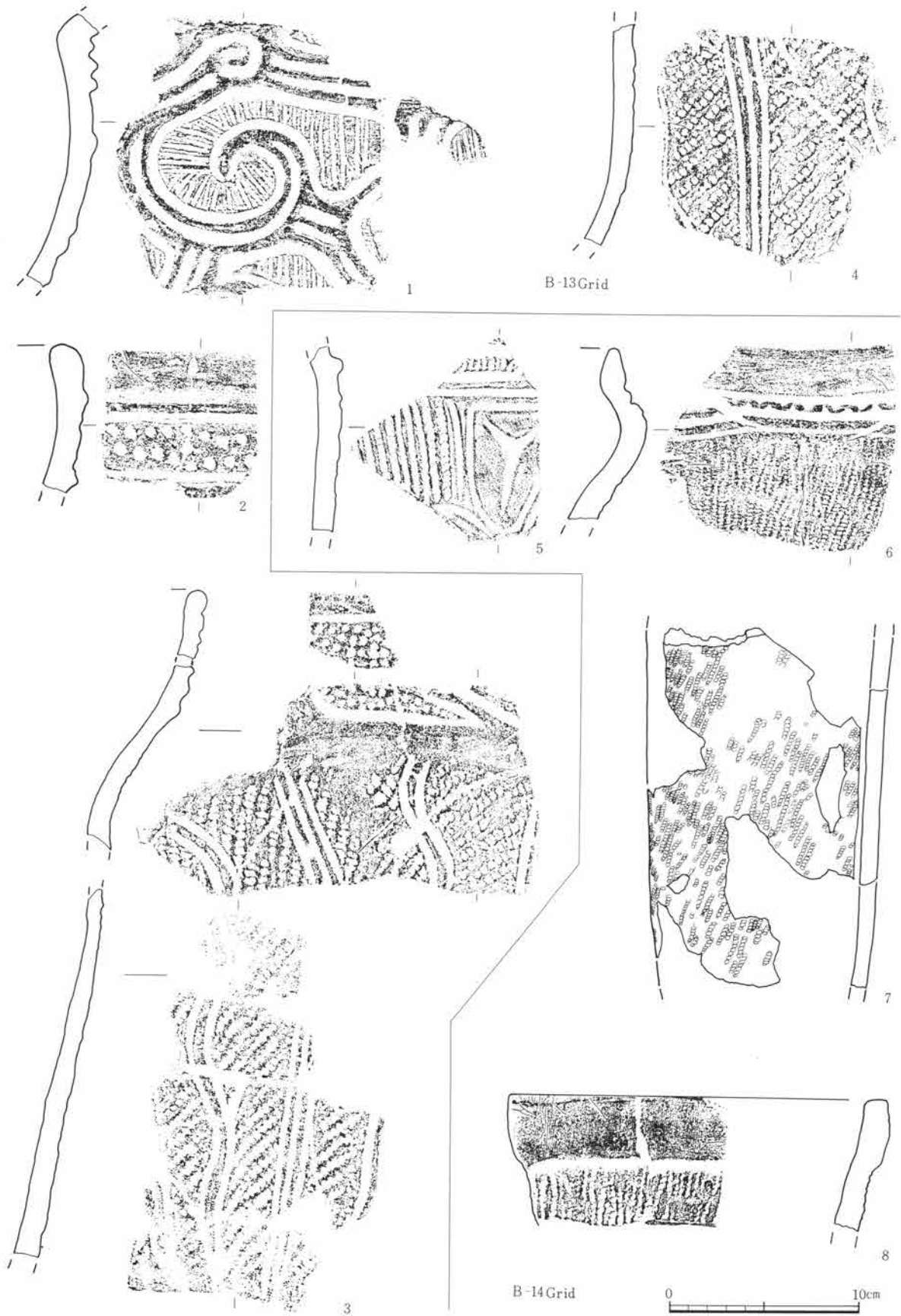


Fig. 93 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

13区土器だまり出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説 明						
Fig. 94-3	深鉢・胴部	13区B-14Gr	石英混入	橙		II	
PL. 43-7	隆帯と沈線により渦巻文を施す。						
Fig. 94-4	深鉢・胴部	13区B-14Gr	白色鉱物混入	褐 灰		II	
PL. 43-7	沈線による曲線文を施す。						
Fig. 94-5	深鉢・頸胴部	13区B-14Gr	白色鉱物混入	橙	単節 LR	II	
PL. 43-7	隆帯をめぐらし、以下横位と波状の沈線を施す。内面には隆起線2条めぐらす。						
Fig. 94-6	深鉢・胴部	13区B-14Gr	白色鉱物混入	橙	単節 LR	II	
PL. 43-7	幅広の隆帯をめぐらし、縄文を施す。以下、無文となる。						
Fig. 94-7	深鉢・胴部	13区B-14Gr	白粒・礫混入	橙	単節 RL	II	
PL. 43-7	隆起線を貼付け区画し、縄文を施す。						
Fig. 94-8	深鉢・胴部	13区B-14Gr	小礫少数混入	橙	燃 糸	II~III	
PL. 43-7	燃糸文を全面に施す。						
Fig. 94-9	深鉢・頸部	13区B-15Gr III-3層	小 礫 混 入	明 赤 褐	単節 LR	II	
PL. 43-7	半截竹管工具により渦巻状沈線を施す。交互刺突文を施し、部分的に縄文を施す。						
Fig. 94-10	不明・口縁部	13区B-15Gr	小礫少数混入	橙		II	
PL. 43-7	口縁部突起であり、突起上には玉抱き三叉状文様を施す。						
Fig. 94-11	深鉢・口縁部	13区B-15Gr	白色鉱物混入	にぶい赤褐	単節 RL	II	
PL. 43-7	波状口縁突起部。口唇上に刻目を施す。						
Fig. 94-12	深鉢・口縁部	13区B-15Gr	夾雑鉱物混入	浅 黄 橙		II	
PL. 43-7	隆起線と沈線により円形文を作出する。						
Fig. 94-13	器台	13区B-13Gr	白色鉱物混入	橙		IV?	
PL. 43-6	2個一対の透穴をつける。						
Fig. 94-14	深鉢・胴部	13区B-15Gr III-3層	白色鉱物混入	にぶい橙	単節 RL	V	
PL. 43-7	弧状沈線と横位「の」の字状沈線を施す。						
Fig. 94-15	深鉢・胴部	13区B-15Gr III-3層	夾雑鉱物混入	灰 褐	燃 糸	III-2	
PL. 43-7	沈線により蕨手状懸垂文を施す。						
Fig. 94-16	深鉢・口縁部	13区B-15Gr 3層	小 礫 混 入	橙	単節 RL	VI-1	
PL. 43-7	隆起線と沈線により渦巻文と楕円区画を施文する。						

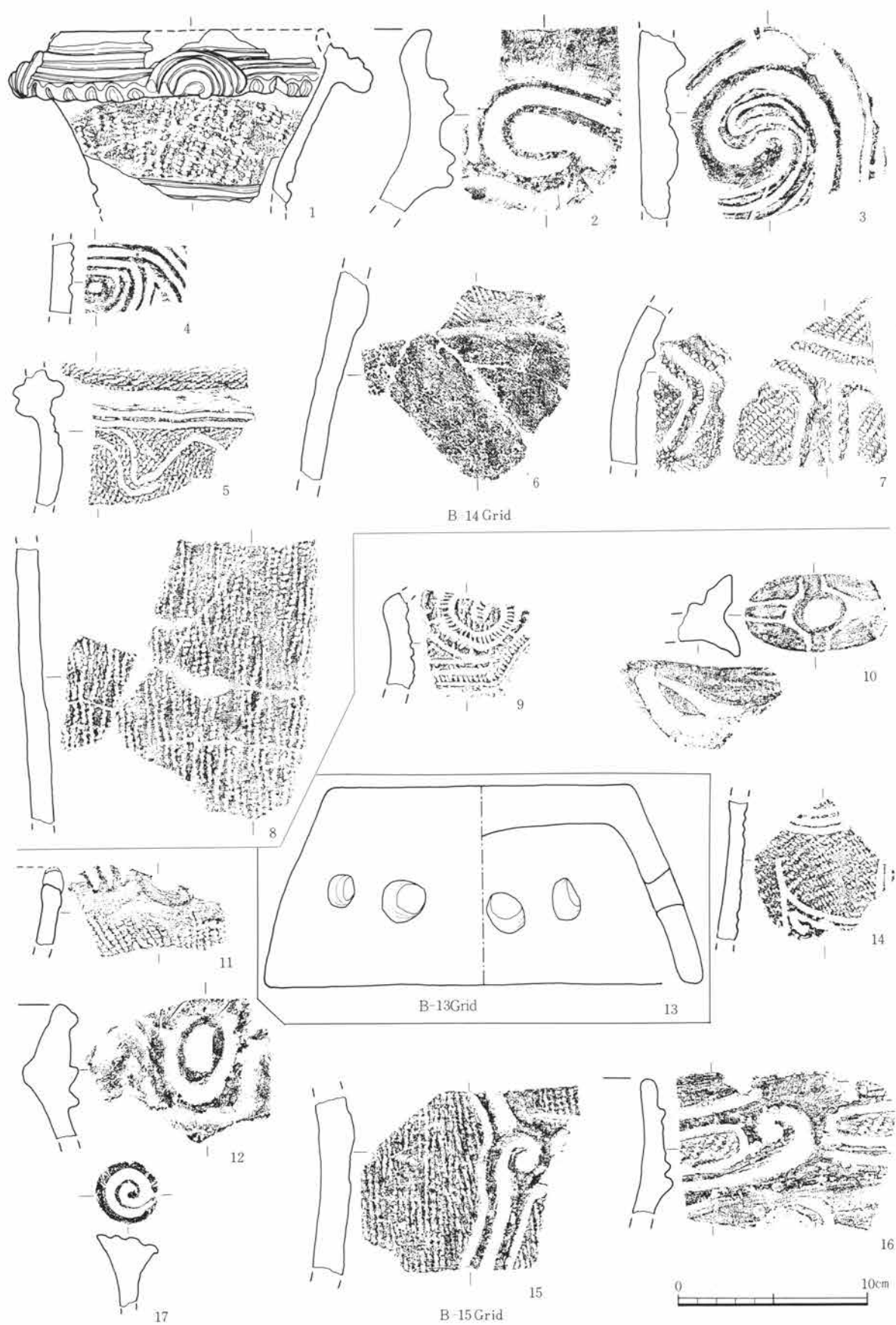


Fig. 94 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

13区土器だまり出土遺物一覧表（土器）

挿 図 番 号	器形・部位	出 土 位 置	胎 土	色 調	縄文原体	時期区分	備 考
図 版 番 号	説 明						
Fig. 94-17	深鉢・口縁部	B-15Gr III-3層	石英混入	にぶい黄橙		IX	
PL. 43-7	口縁部突起部破片。突起上に沈線で渦巻を施す。						
Fig. 95-1	浅鉢・口縁部	B・C-8Gr III-3層	白色鉱物混入	橙		II	
PL. 44-1	口縁部内面はそげる。隆起線により楕円区画をする。但し、右側の下端は区画していない。						
Fig. 95-2	浅鉢・口縁部	B・C-8Gr III-3層	白色鉱物混入	にぶい褐		IV	赤色塗彩
PL. 44-1	口唇部は肥厚し、1条の沈線がめぐる。						
Fig. 95-3	浅鉢・口縁部	B・C-8Gr III-3層	白色鉱物混入	橙		V	表面の整形は良好
PL. 44-1	口縁部は「く」の字状に外反する。口縁部内面には1条の沈線がめぐる。						
Fig. 95-4	浅鉢・口頸部	B・C-8Gr III-3層	白色鉱物混入	にぶい橙	燃糸 r	II	
PL. 44-1	頸部は稜をもち張り出す。横位平行の沈線を施す。						
Fig. 95-5	深鉢・口縁部	B・C-8Gr III-3層	白色鉱物混入	にぶい褐	単節 LR	V	
PL. 44-1	口縁部は波状を呈し、口唇直下に円形竹管工具の交互衝突により、連続「コ」の字文を施す。以下、曲線状の沈線文。						
Fig. 95-6	深鉢・口縁部	B・C-8Gr III-3層	小礫少数混入	橙		VI	
PL. 44-1	楕円区画し、区画内に半截竹管工具で羽状の刺突文を施す。						
Fig. 95-7	深鉢・口縁部	B・C-8Gr III-3層	砂 質	にぶい橙		VI	
PL. 44-1	口縁部に縦位の沈線文を施す。						
Fig. 95-8	深鉢・口縁部	B・C-8Gr 3層	白粒・礫混入	にぶい橙	燃 糸	VI	
PL. 44-1	隆起線と沈線による渦巻文と楕円区画文。区画内に燃糸文を施す。						
Fig. 95-9	深鉢・口縁部	B・C-8Gr III-3層	小礫少数混入	にぶい赤褐	単節 LR	VI?	
PL. 44-1	口縁内面はそげる。横位の沈線を1条めぐらす。						
Fig. 95-10	深鉢・頸胴部	B・C-8Gr III-3層	小礫少数混入	にぶい橙	単節 LR	IV	
PL. 44-1	隆起線と沈線により渦巻文を作成する。以下、縄文を施す。						
Fig. 95-11	深鉢・口縁部	B・C-8Gr III-3層	砂 質	にぶい橙	単節 LR	VII	内面に炭化物付着
PL. 44-1	沈線により楕円区画し、区画内に縄文を施す。						
Fig. 95-12	深鉢・口縁部	B・C-8Gr III-3層	小礫少数混入	橙	単節 RL	VI	
PL. 44-1	断面三角形の隆起線と沈線により、渦巻文と楕円区画をする。						
Fig. 95-13	深鉢・口縁部	B・C-8Gr III-3層	白色鉱物混入	にぶい黄橙	単節 RL	VI	
PL. 44-1	縄文を施し、半截竹管による横位と斜位の沈線を引く。						

13区土器だまり出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 95-14	深鉢・口縁部	B・C-8 Gr 3層	白色鈹物混入	にぶい橙		VI-1	
PL. 44-1	地文に連歯状工具による条痕文。口唇下に連続「コ」の字状。さらに、沈線による曲線文を施す。						
Fig. 95-15	深鉢・胴部	B・C-8 Gr III-3層	白粒・礫混入	明 褐	燃糸 ℓ	VI-2	
PL. 44-1	6本単位の沈線による連弧状の文様を施文。						
Fig. 95-16	深鉢・胴部	B・C-8 Gr III-3層	夾雑鈹物混入	にぶい褐	単節 LR	VI-2	
PL. 44-1	3条の沈線による連弧状の文様と曲線文を施す。						
Fig. 95-17	深鉢・胴部	B・C-8 Gr III-3層	白色鈹物混入	にぶい橙		VI	
PL. 44-1	断面三角形の縦位隆起線で区画し、半截竹管による綾杉状の沈線文。						
Fig. 95-18	深鉢・胴部	B・C-8 Gr III-3層	雲母・礫混入	明 赤 褐	?	?	
PL. 44-1	斜縄文の組合わせによる鋸歯状の文様。						
Fig. 95-19	深鉢・口縁部	B・C-8 Gr III-3層	石英混入	にぶい橙		VI-2	
PL. 44-1	口縁部は内湾する。頸部よりに1条の沈線がめぐる。						
Fig. 95-20	深鉢・口縁部	B・C-8 Gr III-3層	小礫混入	浅黄橙	単節 RL	VIII	
PL. 44-1	口縁部に断面三角形の隆起線が1条めぐり、以下、縄文を施す。						
Fig. 95-21	深鉢・口縁部	B・C-8 Gr III-3層	石英混入	にぶい橙	単節 RL	VII	
PL. 44-1	口縁部は内湾する。沈線により縦位の楕円区画し、区画内に縄文を施す。						
Fig. 95-22	深鉢・口縁部	B・C-8 Gr III-3層	白色鈹物混入	にぶい橙	単節 RL	VIII	
PL. 44-1	口縁部は波状を呈する。口縁に沿って沈線をめぐらす。山形に沈線区画し、区画内の縄文を磨消す。						
Fig. 96-1	把手付壺	B・C-8 Gr III-3層	石英混入	橙	単節 LR	VIII	
PL. 44-2	把手部に浅く縄文を施す。施文方向は不規則である。						
Fig. 96-2	深鉢・口頸部	B・C-9 Gr III-3層	白色鈹物混入	橙	燃糸	VI	
PL. 44-2	口縁部はやや内湾する。口縁に沿って棒状工具による刺突文をめぐらす。下端に沈線を引き、頸部には隆帯をめぐらす。						
Fig. 96-3	深鉢・口縁部	B・C-9 Gr III-3層	結晶片岩混入	橙	燃糸 ℓ	VI	炭化物付着
PL. 44-2	口縁部は波状を呈する。口縁に沿って3条の沈線をめぐらす。						
Fig. 96-4	深鉢・頸胴部	B・C-10Gr III-3層	小礫少数混入	橙	?	IV	
PL. 44-2	地文に縄文を施し、頸部に3条の沈線をめぐらす。胴部には弧状の沈線文を施している。						
Fig. 96-5	深鉢・胴部	B・C-10Gr III-3層	石英混入	にぶい橙	燃糸 R	IV	
PL. 44-2	地文に粗く燃られた燃糸を施し、横位と弧状の沈線を施文する。						

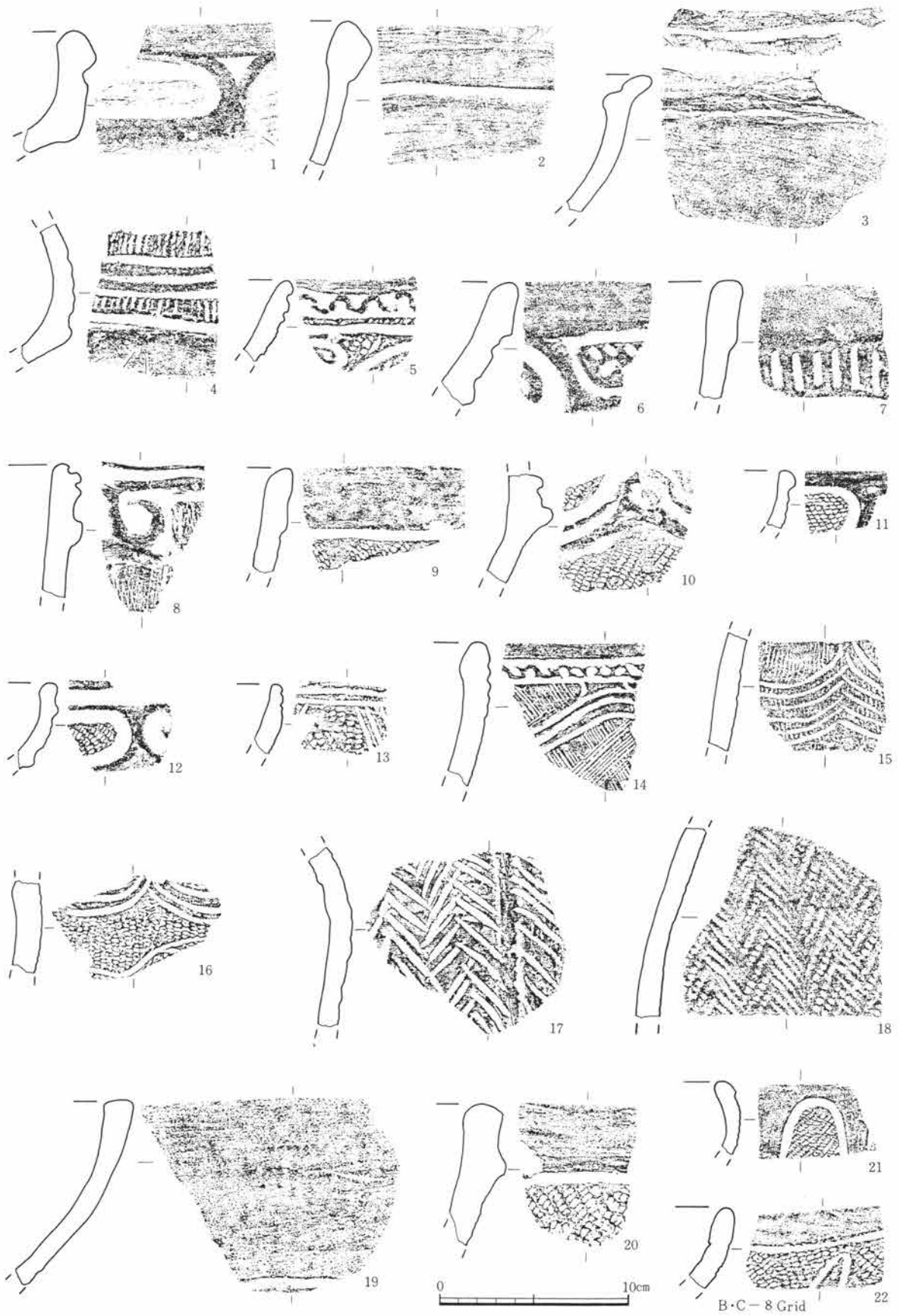


Fig. 95 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

13区土器だまり出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 96-6	深鉢・口縁部	B・C-10Gr III-3層	石英混入	にぶい橙		V	
PL. 44-2	口縁部はやや内湾する。口縁に沿って1条の隆起線をめぐらし、以下縦位の沈線を施す。						
Fig. 96-7	深鉢・口縁部	B・C-10Gr III-3層	白色鉱物混入	橙	単節 RL	VII	
PL. 44-2	口縁部は肥厚し丸味をもつ。口唇部下端に太い沈線をめぐらし、以下縄文を施す。						
Fig. 96-8	深鉢・口縁部	B・C-10Gr III-3層	白色鉱物混入	にぶい橙	?	VII	
PL. 44-2	口縁部は波状を呈する。口縁に沿って2本の沈線をめぐらす。沈線間には角棒状工具で刺突を施す。						
Fig. 96-9	深鉢・口縁部	B・C-11・12 III-3層	小礫少数混入	灰 褐	撚糸	II	
PL. 44-2	口縁部は肥厚し丸味をもち、やや外反する。口縁に沿って2条の沈線をめぐらす。						
Fig. 96-10	深鉢・把手部	B・C-11・12 III-3層	小礫少数混入	にぶい褐		III~IV	赤色塗彩
PL. 44-2	円形の透しをつけ、口縁に沿って沈線がめぐる。						
Fig. 96-11	浅鉢・口縁部	B・C-11・12 III-3層	白粒・礫混入	にぶい橙		II	
PL. 44-2	口縁部は山形の波状を呈し、肥厚している。無文。						
Fig. 96-12	深鉢・口縁部	B・C-11・12Gr	白粒・礫混入	明赤褐	単節 RL	II	
PL. 44-2	口縁部はやや内湾している。2段の縄（RL）を横位と斜位に回転施文している。						
Fig. 96-13	深鉢・頸胴部	B・C-11・12 III-3層	黒色鉱物混入	にぶい橙	撚糸	IV	
PL. 44-2	頸部に鋸歯状の刺突文がめぐり、胴部には横位1条の沈線がめぐる。さらに、沈線による円形文様を施す。						
Fig. 96-14	深鉢・口頸部	B・C-11・12 III-3層	白粒・礫混入	にぶい橙	単節 LR	III-1	
PL. 44-2	隆帯と沈線による渦巻文を施す。隆帯上には円形竹管工具による刺突文。以下、垂下する3条の沈線を施す。						
Fig. 96-15	深鉢・胴部	B・C-11・12 III-3層	砂質	にぶい橙	撚糸（無節）	IV	
PL. 44-2	2条の沈線が横位と斜位に施文され、交点には半截竹管による刺突が加えられる。						
Fig. 96-16	深鉢・頸胴部	B・C-11・12 III-3層	夾雑鉱物混入	にぶい橙	単節 LR	VI-2	
PL. 44-2	把手部は剥落している。隆起線と沈線で楕円形区画し、縄文を施す。						
Fig. 96-17	深鉢・口縁部	B・C-11・12 III-3層	石英混入	浅黄橙	撚糸 L	IV	補修孔あり
PL. 44-2	口縁部断面は「コ」の字状に肥厚する。太い隆起線と沈線により渦巻文を施す。						
Fig. 96-18	深鉢・頸胴部	B・C-11・12 III-3層	砂質	にぶい橙	単節 RL	V~VI	赤色塗彩
PL. 44-2	口縁部内面に稜をもつ。頸部に横位の隆起線をめぐらし、胴部に沈線を施す。						
Fig. 96-19	深鉢・口縁部	B・C-11・12 III-3層	白色鉱物混入	赤 褐	単節	V	
PL. 44-2	口唇部下端に沈線をめぐらす。隆起線と沈線により渦巻文と楕円区画を施す。						

13区土器だまり出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 96-20	深鉢・口縁部	B・C-11・12 III-3層	砂質	橙	単節 LR	VI	
PL. 44-2	隆起線と沈線により渦巻文と楕円区画を施す。						
Fig. 96-21	深鉢・口縁部	B・C-11・12 III-3層	小礫少数混入	橙	単節 RL	VII	
PL. 44-2	口唇部は内面にそげる。沈線で区画する。						
Fig. 96-22	深鉢・口縁部	B・C-11・12 III-3層	白粒・礫混入	にぶい黄橙	単節 RL	VII	整形良好
PL. 44-2	沈線により楕円区画する。						
Fig. 97-1	深鉢・口頸部	B・C-11・12 III-3層	白色鉱物混入	浅黄		VI	
PL. 44-3	口縁部は肥厚し、口縁に沿って沈線がめぐる。口縁部には縦位の沈線を施し、頸部には隆起線と沈線をめぐらす。						
Fig. 97-2	深鉢・口縁部	B・C-11・12 III-3層	石英混入	にぶい橙	単節 LR	VI	表裏面に炭化物付着
PL. 44-3	口縁部は内湾する。隆起線と沈線により渦巻文と楕円区画を施し、区画内に縄文を施す。						
Fig. 97-3	深鉢・口胴部	B・C-11・12 III-3層	砂質	橙		VI	
PL. 44-3	隆起線と沈線により渦巻文と楕円区画を施す。区画内は縦位の沈線、胴部には斜位の沈線を施す。						
Fig. 97-4	深鉢・口胴部	B・C-11・12 III-3層	石英混入	にぶい橙	撚糸 R	VII	
PL. 44-3	口縁部は波状口縁を呈し、波頂部に隆起線と沈線により渦巻文を施す。以下、沈線により縦位に区画する。						
Fig. 97-5	深鉢・口縁部	B・C-11・12 3層	白色鉱物混入	にぶい橙		VI~VII	
PL. 44-3	口縁部に隆起線と沈線により逆「の」の字状の渦巻文を施し、以下垂下する沈線を引く。						
Fig. 97-6	深鉢・胴部	B・C-11・12 III-3層	白粒・礫混入	にぶい橙	単節 RL	VI~VII	
PL. 44-3	地文に縄文を施し、2条の沈線により「コ」の字状に区画する。						
Fig. 97-7	深鉢・胴部	B・C-11・12 III-3層	砂質	橙	単節 LR	VI~VII	
PL. 44-3	地文に縄文を施し、沈線により「コ」の字状に区画する。						
Fig. 97-8	深鉢・胴部	B・C-11・12 III-3層	白色鉱物混入	橙	単節 LR	VI~VII	
PL. 44-3	地文に縄文を施し、波状沈線を引く。						
Fig. 97-9	深鉢・胴部	B・C-11・12 III-3層	白粒・礫混入	にぶい橙	単節 RL	IV~V	
PL. 44-3	1条と2条単位の縦位隆起線により区画する。						
Fig. 97-10	深鉢・胴部	B・C-11・12Gr 3層	白粒・礫混入	浅黄橙		VI~VII	内面炭化物付着
PL. 44-3	地文に縄文を施し、2条単位の縦位沈線により区画する。						
Fig. 97-11	深鉢・胴部	B・C-11・12Gr 3層	黒色鉱物混入	にぶい橙	単節 LR	VI~VII	
PL. 44-3	地文に縄文を施し、縦位の沈線で区画する。区画内の縄文を磨消す。						

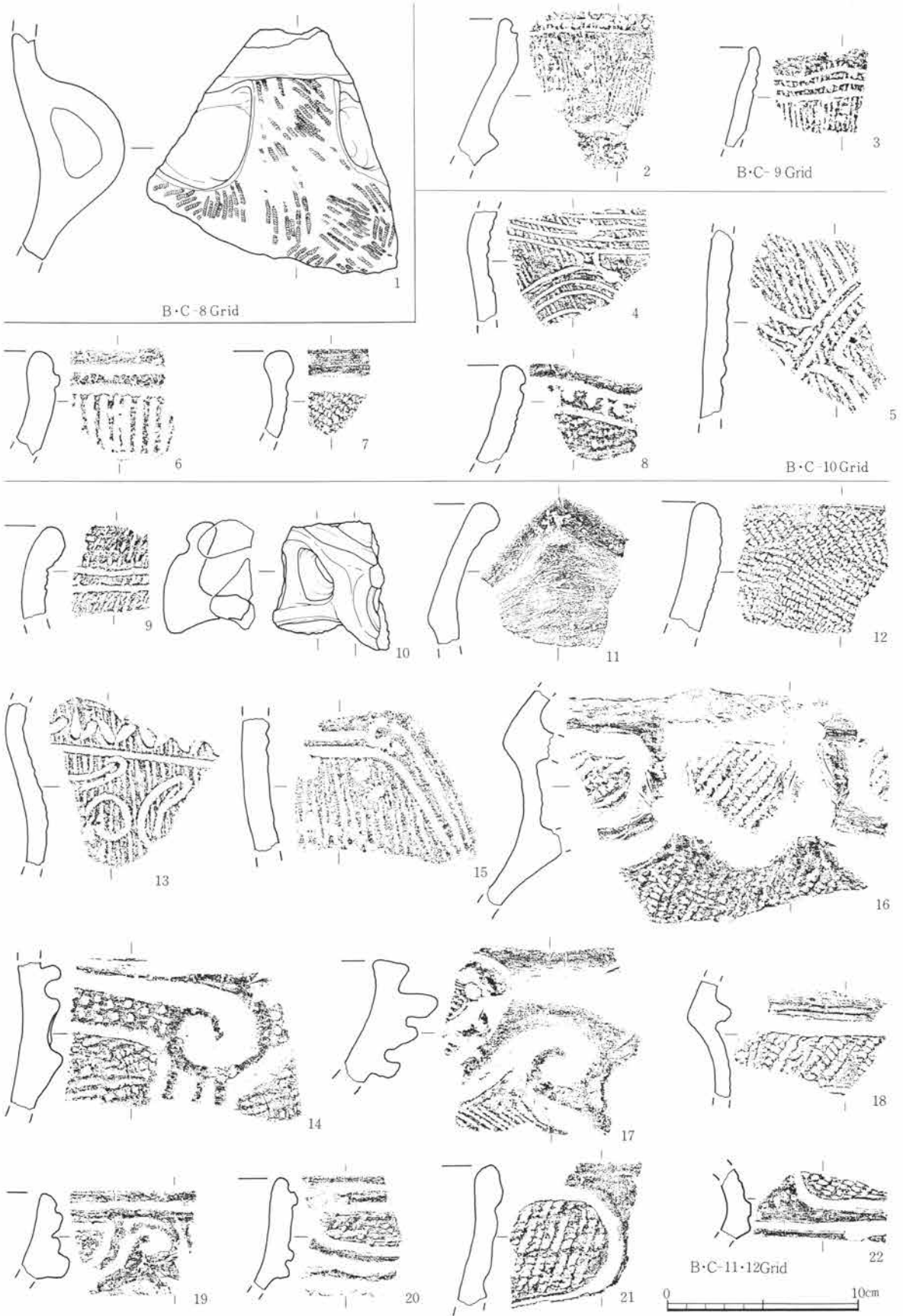


Fig. 96 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

13区土器だまり出土遺物一覧表（土器）

挿 図 番 号	器形・部位	出 土 位 置	胎 土	色 調	縄文原体	時期区分	備 考
図 版 番 号	説 明						
Fig. 97-12	深鉢・胴部	B・C-11・12 III-3層	白色鉍物混入	にぶい黄橙		VIII?	
PL. 44-3	連歯状工具による条線文。						
Fig. 97-13	深鉢・胴部	B・C-11・12 III-3層	白色鉍物混入	橙	燃糸 R	VII	
PL. 44-3	燃糸を施文し、沈線を施す。						
Fig. 97-14	深鉢・胴部	B・C-11・12 III-3層	白色鉍物混入	にぶい黄橙		VIII	
PL. 44-3	連歯状工具による条線文。						
Fig. 97-15	深鉢・胴部	B・C-11・12 III-3層	白色鉍物混入	にぶい橙	燃 糸	?	
PL. 44-3	燃糸を全面施文。						
Fig. 97-16	深鉢・口頸部	B・C-11・12 III-3層	夾雑鉍物混入	灰 黄 褐		V	
PL. 44-3	口縁部は肥厚する。無文。						
Fig. 97-17	深鉢・口頸部	B・C-11・12 III-3層	砂 質	橙		V	
PL. 44-3	口縁部は肥厚し、口縁内面に稜をもつ。無文。						
Fig. 97-18	深鉢・口頸部	B・C-11・12Gr 3層	夾雑鉍物混入	にぶい黄橙		?	
PL. 44-3	無文。						
Fig. 97-19	深鉢・底部	B・C-11・12Gr 3層	石 英 混 入	明 赤 褐		?	
PL. 44-3	網代痕がある。						
Fig. 97-20	深鉢・口縁部	B・C-12Gr III-3層	白・黒粒子混入	明 赤 褐	燃糸 R	III-1	
PL. 44-3	口縁部はやや外反し、口縁に沿って隆起線がめぐる。さらに、粘土紐貼付により剣先状の文様を施す。						
Fig. 97-21	深鉢・口縁部	B・C-12Gr III-3層	石 英 混 入	にぶい褐	燃糸 ?	VI	表面に炭化物付着
PL. 44-3	口縁部は波状を呈し、内湾する。口縁に沿って隆起線と沈線がめぐる。沈線により「U」字状に区画する。						
Fig. 97-22	深鉢・頸胴部	B・C-12Gr III-3層	夾雑鉍物混入	にぶい黄橙	燃糸 L	VI-2	
PL. 44-3	頸部に2条の連続「コ」の字状がめぐる。胴部は隆起線と沈線により波状に区画する。						
Fig. 97-23	深鉢・口縁部	B・C-12Gr III-3層	石 英 混 入	明 赤 褐	単節 LR	VI	
PL. 44-3	口縁部はやや内湾し、口縁に沿って2条の沈線をめぐらす。						
Fig. 97-24	深鉢・口縁部	B・C-14Gr III-3層	白色鉍物混入	にぶい赤褐		II	
PL. 44-3	口縁部に突起があり、突起部に2本の沈線を施す。口縁部には隆起線により三角文を作出する。						
Fig. 98-1	深鉢・口頸部	B・C-14Gr III-3層	白色鉍物混入	にぶい橙		II	
PL. 44-4	口縁部は波状を呈し、内面に隆起線の貼付けにより三角文を作出する。口縁部には隆帯を貼付し、沈線を施す。						

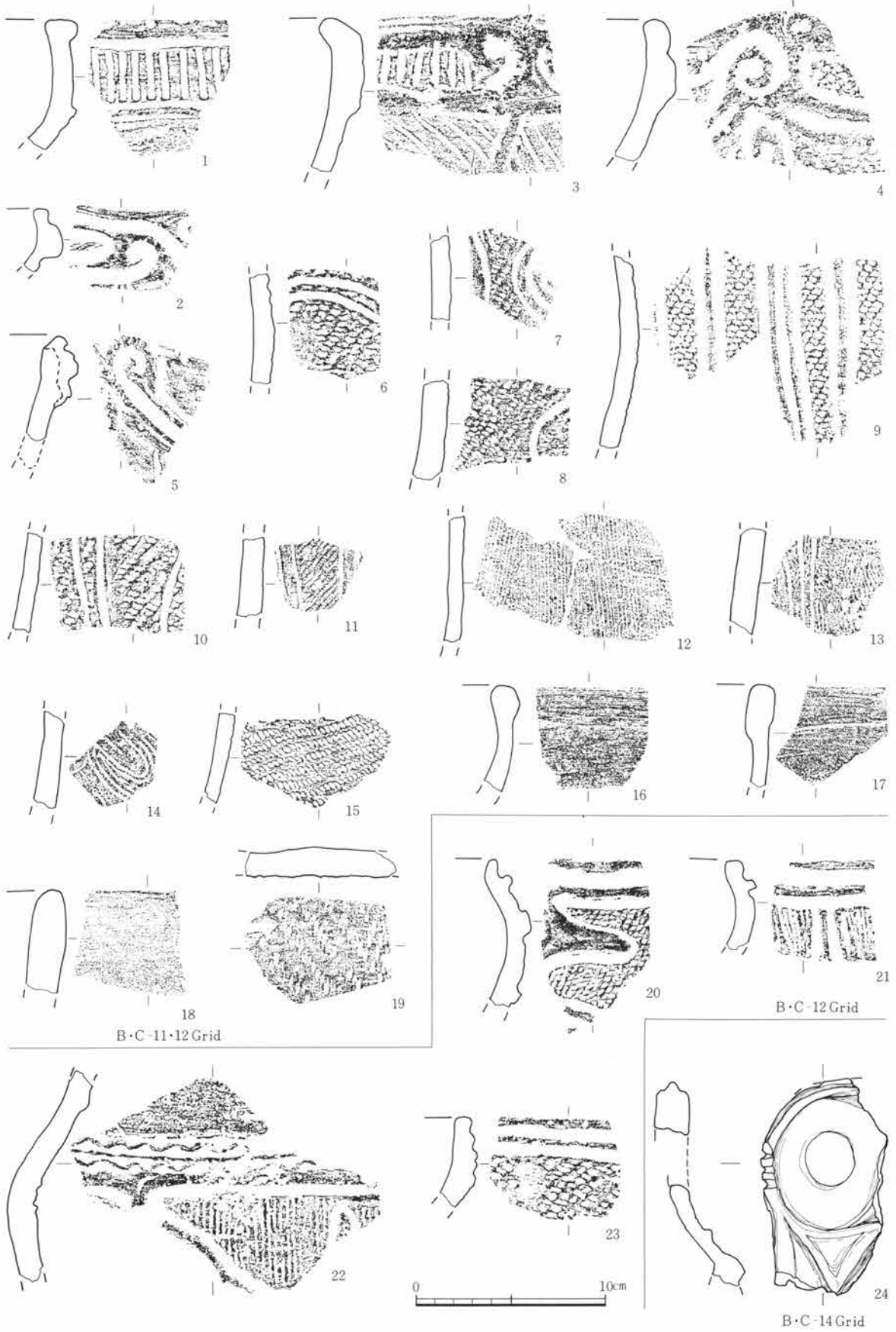


Fig. 97 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

13区土器だまり出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説 明						
Fig. 98-2	深鉢・頸部	13区B・C-14Gr 3層	小礫少数混入	橙		II	
PL. 44-4	頸部の隆帯には刻目を施し、隆起線で区画した内部は沈線により渦巻文を施す。						
Fig. 98-3	深鉢・胴部	B・C-14Gr III-3層	夾雑鉱物混入	にぶい赤褐		II	
PL. 44-4	隆帯と隆帯上の深い沈線により文様作出する。						
Fig. 98-4	深鉢・胴部	B・C-14Gr III-3層	小礫少数混入	にぶい赤褐	単節 RL	II	
PL. 44-4	地文に縄文を施し、横位1条の隆起線をめぐらす。						
Fig. 98-5	深鉢・胴部	B・C-14Gr 3層	結晶片岩混入	灰 褐	単節 RL	II	
PL. 44-4	隆帯と半截竹管の沈線により文様作出。隆帯上に縄文を施す。						
Fig. 98-6	浅鉢・口頸部	13区B・C-14Gr 3層	石英混入	橙	燃糸 R	II	
PL. 44-4	口縁部に横位と波状の沈線を引き、頸部に刻目を施す。						
Fig. 98-7	深鉢・胴部	B・C-14Gr III-3層	小礫少数混入	橙	単節 RL	?	
PL. 44-4	全面に縄文を施す。						
Fig. 98-8	深鉢・口縁部	13区B・C-14Gr 3層	白粒・礫混入	にぶい橙		VI	
PL. 44-4	口縁部は内湾し、稜をもつ。2条の隆起線と沈線により半月形の区画を構成する。						
Fig. 98-9	深鉢・口縁部	13区B・C-14Gr 3層	小 礫 混 入	橙	燃糸 r	VI	
PL. 44-4	口縁部はやや内湾する。隆起線と沈線により区画し、区画内に燃糸を施す。						
Fig. 98-10	深鉢・口頸部	13区B・C-14Gr 3層	夾雑鉱物混入	にぶい橙	単節 LR	VII	
PL. 44-4	横位の沈線と円形刺突を施す。						
Fig. 98-11	深鉢・胴部	13区B・C-14Gr 3層	雲母・礫混入	にぶい橙	単節 LR	VI~VII	内面炭化物付着
PL. 44-4	縦位2条の沈線を施し、沈線間の縄文を磨消す。						
Fig. 98-12	深鉢・口縁部	B・C-14Gr III-3層	白色鉱物混入	にぶい黄橙		VI-1	
PL. 44-4	口縁に沿って2条の沈線と交互刺突による連続「コ」の字文を施す。以下、沈線により連弧文を施す。						
Fig. 98-13	深鉢・胴部	13区B・C-14Gr 3層	夾雑鉱物混入	橙	付加条 R	?	
PL. 44-4	地文に縄文を施し、弧状の沈線を引く。						
Fig. 98-14	深鉢・胴部	B・C-15・16 III-3層	小 礫 混 入	橙	単節 RL	VI'	
PL. 44-4	3条の弧状沈線を施す。						
Fig. 98-15	深鉢・口縁部	B・C-15・16 III-3層	白粒・礫混入	橙		VI	
PL. 44-4	口縁部突起に渦巻沈線文がめぐる。表面無文。						

13区土器だまり出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 98-16	深鉢・口頸部	13区C-8 Gr III-3層	砂質	明赤褐	?	VI~VII	
PL. 44-4	口縁部は内湾する。隆起線と沈線により渦巻文を施す。方形区画し、斜位の沈線を施す。						
Fig. 98-17	深鉢・口頸部	13区C-8 Gr III-3層	夾雑鉱物混入	にぶい橙	無節 R	VI	
PL. 44-4	隆起線と沈線により半月形の区画をおこなう。頸部は無文である。						
Fig. 98-18	深鉢・口頸部	13区C-8 Gr III-3層	夾雑鉱物混入	灰褐		VI-2	
PL. 44-4	口唇部の内面はそげ、稜をもつ。口縁部は無文で、頸部に連続「コ」の字文がめぐる。						
Fig. 98-19	深鉢・口頸部	13区C-8 Gr III-3層	小礫少数混入	にぶい黄橙	単節RL(多条)	VII	
PL. 44-4	口縁部は波状を呈し、波頂部に渦巻文を施す。口縁に沿って沈線をめぐらし、以下蛇行懸垂文を施す。						
Fig. 99-1	深鉢・口縁部	13区C-8 Gr 3層	白色鉱物混入	橙		VI-2	内面整形良好
PL. 45-1	口縁に沿って4条の沈線をめぐらす。以下、3条の沈線による連弧文。地文は連歯状工具による条線文。						
Fig. 99-2	深鉢・胴部	B・C-8 Gr III-3層	白色鉱物混入	明赤褐		VI-2	Fig.99-1と同一個体
PL. 45-1	3条単位の沈線による連弧文。地文は連歯状工具による条線文を施している。						
Fig. 99-3	深鉢・胴部	13区C-8 Gr 6層	砂質	浅黄橙		IX	
PL. 45-1	沈線による不規則な波状文。地文は縄なのか条痕なのか不明。						
Fig. 99-4	深鉢・口縁部	C-8・9 Gr III-3層	小礫少数混入	にぶい橙	燃糸 R	VI	
PL. 45-1	口縁に沿って1条と2条の隆起線で楕円区画する。						
Fig. 99-5	深鉢・口頸部	13区C-9 Gr III-3層	夾雑鉱物混入	にぶい橙	燃糸 L	VII-2	
PL. 45-1	口縁部は無文となり、頸部に3条の沈線を施し、棒状工具で刺突する。						
Fig. 99-6	深鉢・口縁部	13区C-9 Gr 3層	黒色鉱物混入	にぶい赤褐		V	
PL. 45-2	口縁部は肥厚し、やや外反する。口縁に無文部を介在させ、隆起線と沈線にて渦巻文と楕円区画し、縦位の沈線を施す。						
Fig. 99-7	深鉢・口縁部	13区C-9 Gr III-3層	雲母・礫混入	褐		VI-2	
PL. 45-1	口縁に3条の沈線を引き、沈線間に連続「コ」の字文を施す。以下、3条単位の沈線による連弧文。						
Fig. 99-8	深鉢・口縁部	13区C-9 Gr 3層	夾雑鉱物混入	にぶい橙	単節 LR	VIII	
PL. 45-1	口縁部は波状を呈する。曲線状の沈線により区画し、縄文を施す。						
Fig. 99-9	深鉢・口縁部	C-9・10Gr III-3層	雲母・礫混入	にぶい橙	単節 RL	VII	
PL. 45-1	口縁部は内湾し、隆起線と沈線により区画し、縄文を施す。						
Fig. 99-10	深鉢・口頸部	C-9・10Gr III-3層	夾雑鉱物混入	浅黄橙	単節 LR	IV	
PL. 45-1	太い隆起線により逆「の」の字状の渦巻文と楕円区画を作出する。						

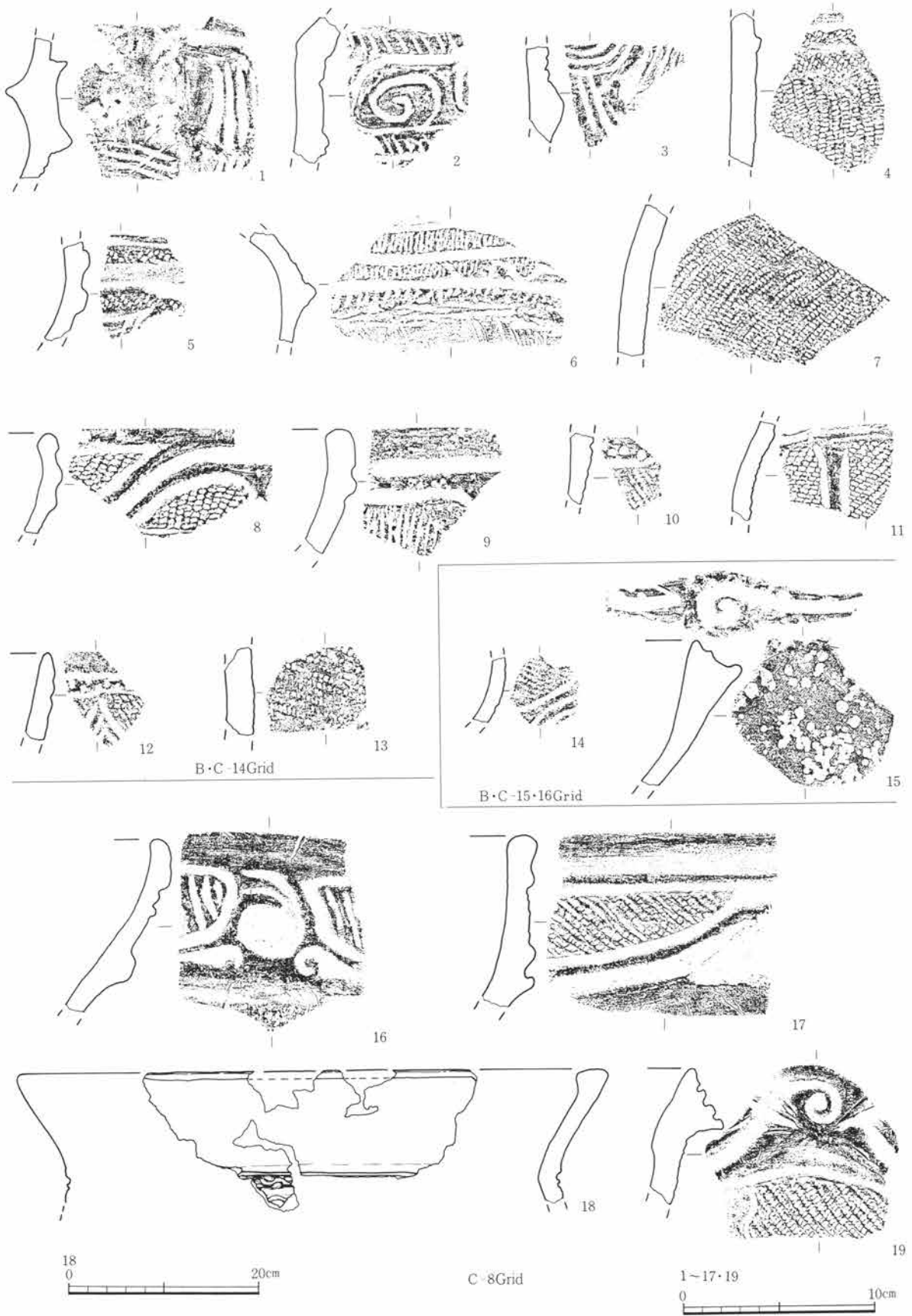


Fig. 98 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

13・27区土器だまり出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 99-11	深鉢・頸胴部	13区C-9・10 III-3層	白粒・礫混入	橙		VI-1	
PL. 45-1	頸部に横位の波状隆起線をめぐらし、口縁部には弧状の沈線文を施す。地文は条線文。						
Fig. 99-12	深鉢・胴部	13区C-10G III-3層	石英混入	にぶい橙	単節 RL	VIII	
PL. 45-1	断面三角形の隆起線で区画する。						
Fig. 99-13	深鉢・口頸部	13区C-10・11 III-3層	小礫少数混入	にぶい橙		VI~VII	表裏面に炭化物付着
PL. 45-1	口縁に沿って沈線をめぐらし、口縁部には沈線で円形と楕円区画する。区画内と頸部には条線を施文する。						
Fig. 100-1	深鉢・完形品	13区C-11Gr 3層	白粒・礫混入	浅黄橙		I	補修孔あり。
PL. 45-3	把手付きの深鉢であり、ほぼ器形復元ができた。連歯状工具で全面に刺突し、三角や柳葉形の陰刻を施す。						
Fig. 100-2	深鉢・口頸部	13区C-11Gr 3層	白粒・礫混入	橙	単節 LR	IV	
PL. 45-4	口縁部を隆起線と沈線で区画し、区画内は羽状の刺突文を施す。頸部に太い隆起線をめぐらす。						
Fig. 100-3	深鉢・口胴部	13区C-11Gr 3層	白粒・礫混入	にぶい黄橙	単節 RL	IV	内面整形良好
PL. 45-4	口縁部に隆起線と沈線により渦巻文を施す。頸部は無文となり、胴部に沈線を施す。						
Fig. 100-4	深鉢・口胴部	13区C-12Gr	小礫少数混入	にぶい赤褐		II	
PL. 45-4	隆起線上に刻目を施し、円形文などを作出する。						
Fig. 100-5	深鉢・口縁部	13区C-12Gr	小礫少数混入	にぶい赤褐		II	
PL. 45-4	口縁部は波状を呈する。把手をつけ、頸部には指頭圧痕を加えた隆起線がめぐる。						
Fig. 100-6	深鉢・胴部	13区C・D-7・8 3層	白粒・礫混入	にぶい橙	?	?	
PL. 45-4	縦位波状の隆起線と曲線状の沈線により文様構成。						
Fig. 100-7	深鉢・口縁部	27区C・D-2・3 III-3層	夾雑鉱物混入	にぶい黄橙	単節 RL	VII	
PL. 45-4	口縁部は内湾し、沈線により渦巻文と楕円文を施す。						
Fig. 100-8	深鉢・口胴部	27区C・D-2・3 3層	白色鉱物混入	浅黄橙	単節 RL	VII	
PL. 45-4	口縁部に隆起線と沈線により渦巻文を施す。以下、縦位の沈線を引き、縄文を施す。						
Fig. 100-9	深鉢・口胴部	27区C・D-2・3 3層	小礫少数混入	にぶい橙	燃糸	VII	
PL. 45-4	口縁部は波状を呈する。口縁に沿って弧状の隆起線と沈線を施す。以下、2条の蛇行懸垂文を施す。						
Fig. 100-10	深鉢・胴部	27区C・D-2・3 III-3層	夾雑鉱物混入	浅黄橙		VI-1	
PL. 45-4	渦巻文と断面三角形縦位波状の隆起線を貼付し、綾杉状の沈線を施す。						
Fig. 101-1	深鉢・口縁部	27区C・D-2・3 3層	石英混入	にぶい橙	単節 RL?	IX	
PL. 46-1	口縁部は波状を呈し、内面に稜をもつ。波頂部に粘土瘤を貼付け、口縁に沿って隆起線をめぐらす。						

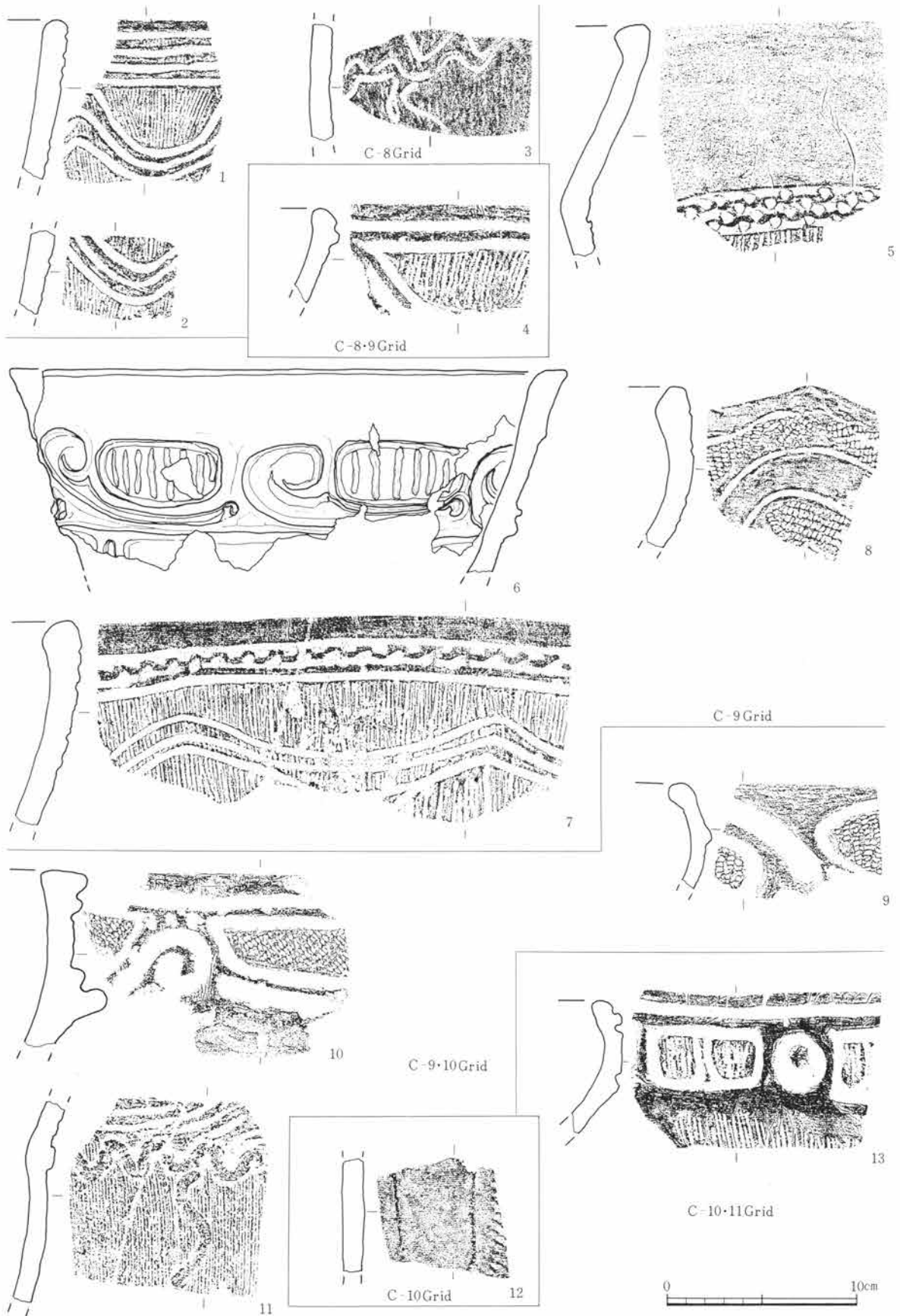


Fig. 99 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

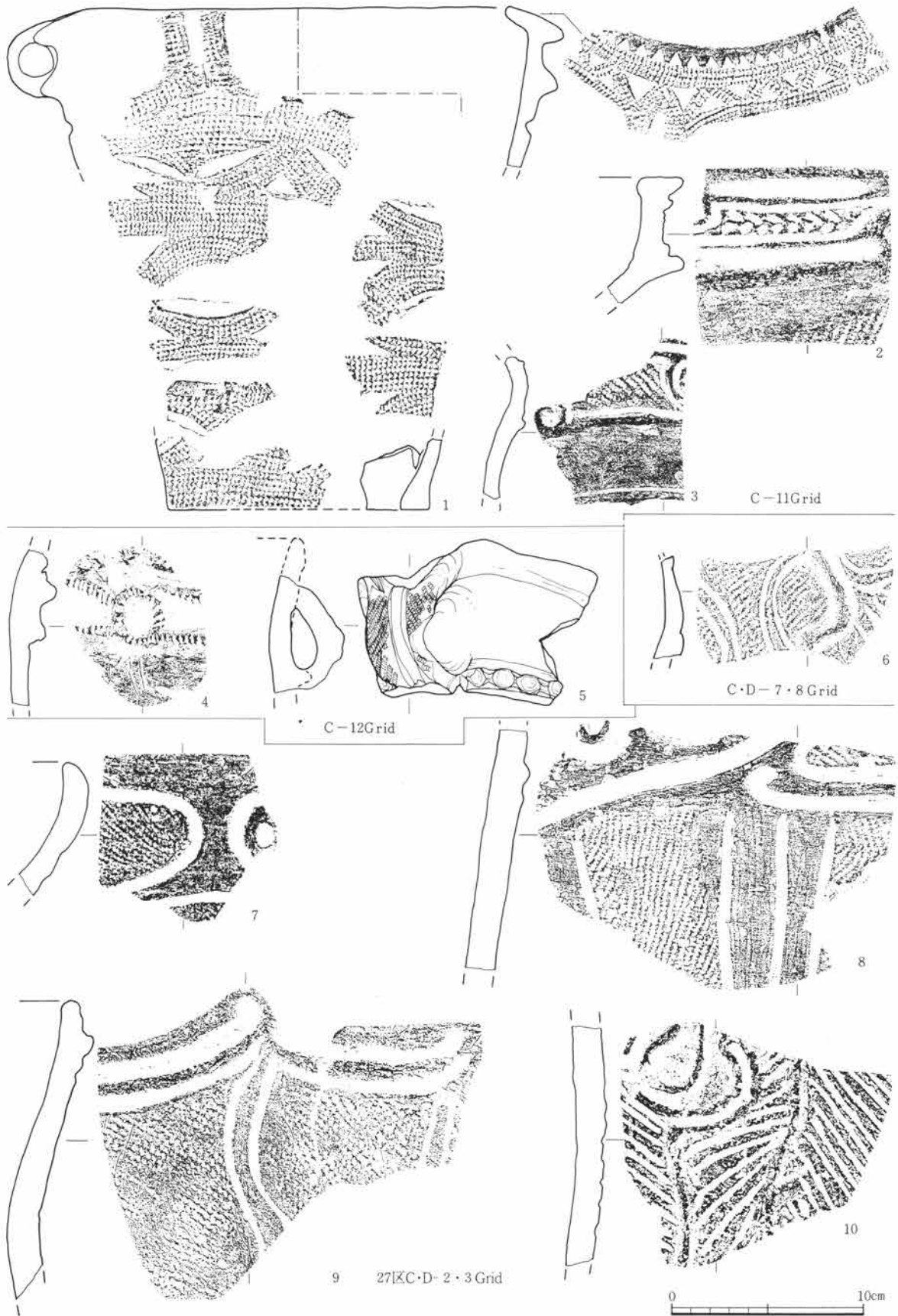


Fig. 100 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

13・27区土器だまり出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説 明						
Fig. 101-2	深鉢・口縁部	27区C・D-2・3 3層	白色鈹物混入	褐 灰	単節 LR	VII	整形良好
PL. 46-1	口縁部は波状を呈し、曲線状の沈線を施す。						
Fig. 101-3	深鉢・胴部	27区C・D-2・3 3層	白粒・礫混入	浅黄橙	単節 LR	IX	
PL. 46-1	地文に縄文を施し、沈線で区画し、菱形状の文様を作成する。						
Fig. 101-4	深鉢・胴部	27区C・D-2・3 3層	白粒・礫混入	浅黄橙	単節 LR	IX	
PL. 46-1	Fig.101-3と同一文様。同一個体の可能性がある。						
Fig. 101-5	深鉢・口胴部	13区D-7 Gr III-3層	白色鈹物混入	にぶい赤褐	単節 RL	VI	
PL. 46-1	口縁部は肥厚する。口縁部は隆起線で区画する。以下、半截竹管工具により沈線を施す。						
Fig. 101-6	深鉢・口縁部	13区D-7・8 Gr 3層	白色鈹物混入	にぶい橙		VI	
PL. 46-1	口縁部内面はそげる。口縁に沿って1条の沈線がめぐり、隆起線と沈線による渦巻と綾杉状沈線文を施す。						
Fig. 101-7	深鉢・口胴部	13区D-7・8 Gr 3層	白色鈹物混入	にぶい橙		VII	
PL. 46-1	口縁部は波状を呈し、波頂部に渦巻文を施す。楕円区画内に縦位の沈線を施す。地文は条線文である。						
Fig. 101-8	深鉢・口胴部	13区D-7・8 III-3層	石英混入	にぶい橙	単節 LR	VI-1	
PL. 46-1	口縁部は隆起線と沈線により渦巻文を施す。区画内には円形刺突文を施す。						
Fig. 101-9	深鉢・口胴部	13区D-7・8 III-3層	白色鈹物混入	にぶい橙	燃糸	VI-1	
PL. 46-1	口縁に沿って3条の沈線がめぐり、以下、3条単位の沈線により連弧状文様を施す。						
Fig. 101-10	深鉢・胴部	13区D-8 Gr III-3層	小礫少数混入	にぶい橙	燃糸 R	II	
PL. 46-1	隆帯上に刻目を施す。区画内には沈線による円形文を作成する。また、隆帯の一部には棒状工具で刺突を加える。						
Fig. 101-11	浅鉢・口胴部	13区D-8 Gr III-3層	砂質	にぶい橙	燃糸 L	II	
PL. 46-1	頸部に張出しの稜をもつ。沈線により上下2段の方形区画を構成する。						
Fig. 101-12	深鉢・口縁部	13区D-8・9 Gr 3層	白色鈹物混入	にぶい橙	単節 RL	VI	
PL. 46-1	口縁は肥厚し、丸味をおびる。口縁に沿って沈線をめぐらす。						
Fig. 101-13	深鉢・口縁部	13区D-8 Gr 3層	白色鈹物混入	にぶい橙		VI	
PL. 46-1	口縁に沿って連続「コ」の字文がめぐり、以下2条の沈線を施す。						
Fig. 101-14	深鉢・口縁部	13区D-8 Gr 3層	小礫少数混入	にぶい橙	単節 LR	VI	
PL. 46-1	Fig.101-13と同様の連続「コ」の字文をめぐらし、縄文を施す。						
Fig. 101-15	深鉢・口胴部	13区D-8 Gr III-3層	白色鈹物混入	橙	単節 RL	VI~VII	
PL. 46-1	口縁部は内湾する。口縁に沿って2条の沈線がめぐり、3条単位の沈線で連弧文を作成する。頸部に沈線と刺突を施す。						

13区土器だまり出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 101-16	深鉢・口縁部	13区D-8 Gr 3層	白色鉍物混入	明赤褐		VI-2	
PL. 46-1	口縁部は隆起線で半月形に区画し、縦位の沈線を施す。						
Fig. 101-17	深鉢・口縁部	13区D-8 Gr III-3層	白色鉍物混入	橙	単節 RL	VI	
PL. 46-1	口縁部は肥厚し、内湾する。隆起線と沈線により楕円区画する。						
Fig. 101-18	深鉢・口胴部	B・C-11・12 III-3層	白色鉍物混入	浅黄橙	?	VII	
PL. 46-1	波状口縁となり、波頂部に渦巻文を施す。地文に縄文を施し、沈線により長楕円区画する。						
Fig. 101-19	深鉢・胴部	13区D-8 Gr 3層	夾雑鉍物混入	にぶい褐		IV	
PL. 46-1	隆起線と沈線により渦巻文と楕円区画をおこなう。区画内は棒状工具にて綾杉状沈線文を施す。						
Fig. 101-20	深鉢・胴部	13区D-8 Gr III-3層	砂質	にぶい褐		I	炭化物付着
PL. 46-1	縦位の隆起線により区画し、連歯状工具による条線文を施す。						
Fig. 101-21	深鉢・口頸部	13区D-8 Gr III-3層	砂質	にぶい赤褐	燃糸 R	VI-1	
PL. 45-5	口縁部は内湾し、口縁に沿って3条の平行沈線を施す。以下、3条単位の沈線により連弧文を施す。						
Fig. 102-1	深鉢・口縁部	13区D-8 Gr III-3層	白色鉍物混入	橙		VII	内面に炭化物付着
PL. 46-2	口縁に沿って1条の沈線をめぐらす。以下、沈線で区画し、区画内に縦位の逆「ハ」の字状刺突文を施す。						
Fig. 102-2	深鉢・胴部	13区D-8・9 Gr 3層	石英混入	赤褐		?	
PL. 46-2	縦位と横位の沈線を井桁状に施文する。						
Fig. 102-3	深鉢・口縁部	13区D-8 Gr 3層	夾雑鉍物混入	にぶい橙	単節 LR	VIII	
PL. 46-2	口縁部は波状を呈し、口唇内面は肥厚し稜をもつ。断面三角形の微隆起線と沈線により区画している。						
Fig. 102-4	深鉢・口胴部	13区D-8 Gr 3層	夾雑鉍物混入	浅黄橙	単節 LR	VIII	
PL. 46-2	口縁に沿って断面三角形の微隆起線をめぐらす。本隆起線から同様の隆起線を垂下させ区画している。						
Fig. 102-5	深鉢・口胴部	13区D-8 Gr 3層	夾雑鉍物混入	にぶい橙	単節 RL	VII	
PL. 46-2	口縁部は波状を呈し、口縁に沿って断面三角形の微隆起線がめぐる。同種の隆起線と沈線により区画し、縄文を施す。						
Fig. 102-6	深鉢・胴部	13区D-8 Gr 3層	砂質	橙		VIII	
PL. 46-2	断面三角形の微隆起線で渦巻文を施す。						
Fig. 102-7	深鉢・胴部	13区D-8 Gr 3層	白粒・礫混入	表-黒・裏-橙		VII	
PL. 46-2	連歯状工具で波状の条線文を施す。						
Fig. 102-8	深鉢・底部	13区D-8 Gr 3層	白色鉍物混入	にぶい橙		IX	整形良好
PL. 46-2	底部は張出す。文様なし。						

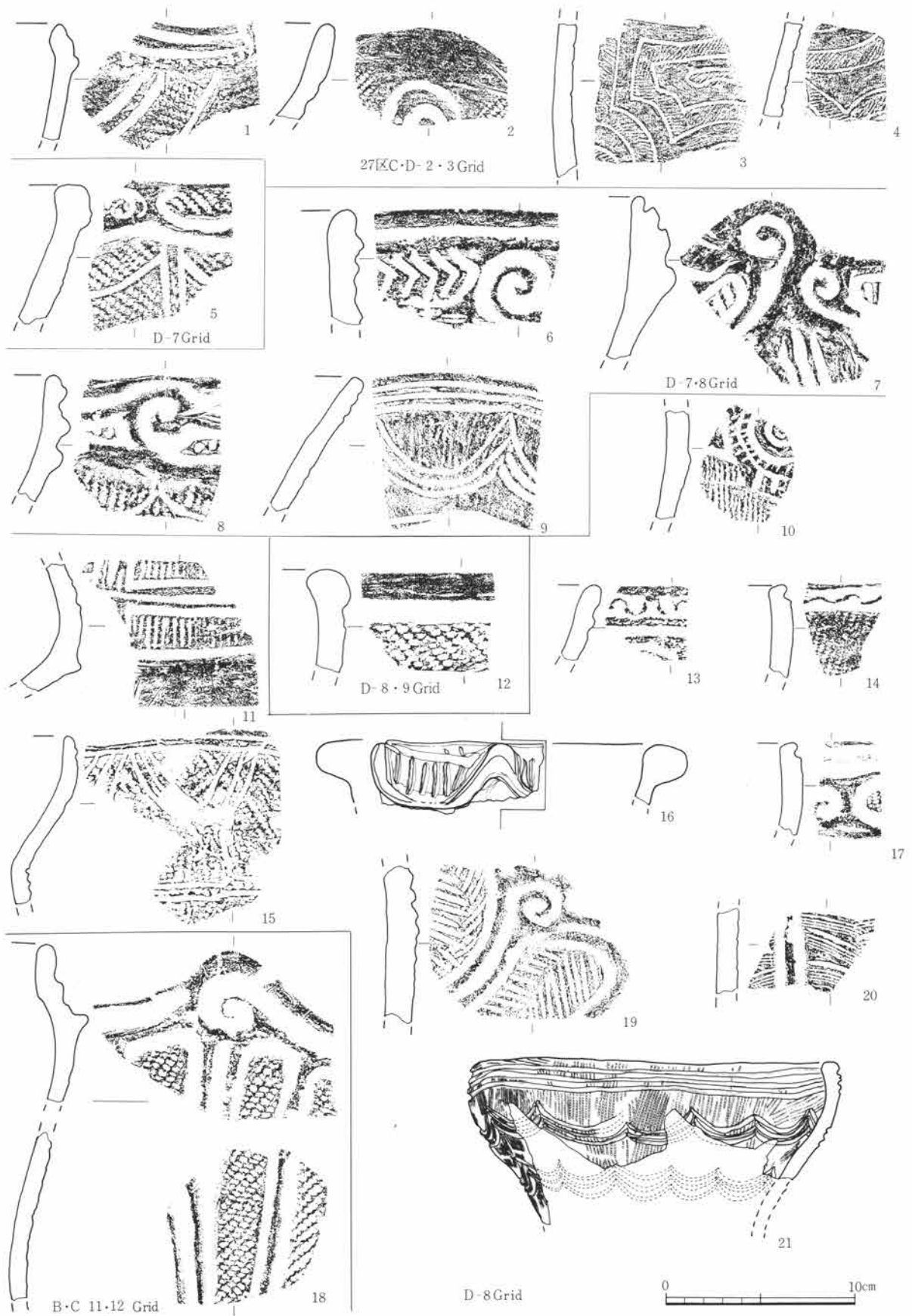


Fig.101 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

12・13区土器だまり出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 102-9	深鉢・胴部	13区D-9 Gr III-3層	夾雑鉱物混入	にぶい赤褐		II	Fig.102-10と同一?
PL. 46-2	隆起線上を矢羽状に刻み区画する。区画内は半截竹管により平行沈線を施す。						
Fig. 102-10	深鉢・胴部	13区E-9 Gr III-3層	夾雑鉱物混入	にぶい赤褐	単節 RL	II	Fig.102-9と同一?
PL. 46-2	横位の隆起線上に矢羽状の刻目を施し、以下縄文。						
Fig. 102-11	深鉢・頸部	13区D-9 Gr 3層	雲母・礫混入	にぶい赤褐		II	
PL. 46-2	横位の隆起線をめぐらし、その上に縦位の刻目を施す。						
Fig. 102-12	深鉢・口縁部	13区D-9 Gr 3層	白色鉱物混入	にぶい橙	単節 LR	V	内面炭化物付着
PL. 46-2	口縁部断面は山形を呈し、口縁に沿って1条の沈線をめぐらす。結節沈線による渦巻文を施す。						
Fig. 102-13	深鉢・口胴部	13区D-9 Gr III-3層	夾雑鉱物混入	にぶい橙		III-1	内面炭化物付着
PL. 46-2	胴上半部が最大径となり、縦位の沈線を施し、沈線上には隆起線による渦巻文を作出する。						
Fig. 102-14	浅鉢・口頸部	13区D-9 Gr 3層	雲母・礫混入	明赤褐		II	整形良好
PL. 46-2	口縁部断面は方形に肥厚する。内面は稜をもつ。無文。						
Fig. 102-15	深鉢・頸部	13区D-9 Gr 3層	小礫少数混入	にぶい赤褐	撚糸 L	VI-1	
PL. 46-2	地文に撚糸文を施し、頸部に横位の沈線を施す。						
Fig. 102-16	浅鉢・口頸部	13区D-9 Gr 3層	夾雑鉱物混入	橙		IV	12区表土
PL. 46-2	口縁部の立ち上がりで段をもち、刻目を施す。口縁部は円形刺突文と沈線を施す。頸部にも円形刺突を施す。						
Fig. 102-17	浅鉢・口頸部	13区D-9 Gr III-3層	白色鉱物混入	にぶい橙	単節 LR	IV	
PL. 46-2	太い隆起線と沈線により区画する。頸部の屈曲部には刻目を施す。						
Fig. 102-18	浅鉢・口頸部	13区D-9 Gr III-3層	夾雑鉱物混入	にぶい赤褐	単節 RL	IV	
PL. 46-2	隆起線を斜位に貼付け、交点には円形竹管工具により刺突を施す。						
Fig. 102-19	深鉢・胴部	13区D-9 Gr III-3層	白色鉱物混入	浅黄橙		?	
PL. 46-2	横位の沈線を連続に施文し、次に、縦位と弧状の沈線を施す。						
Fig. 103-1	深鉢・口胴部	13区D-11Gr III-3層	夾雑鉱物混入	灰黄褐	撚糸 L	III	
PL. 46-3	太い隆起線と沈線により渦巻文を施す。頸部に横位1条の隆起線をめぐらし、以下縦位の沈線により区画する。						
Fig. 103-2	深鉢・胴部	13区D-9 Gr III-3層	夾雑鉱物混入	灰黄褐	撚糸 L	?	
PL. 46-3	全面に撚糸を施文する。						
Fig. 103-3	深鉢・口縁部	13区D-9 Gr 3層	白・黒粒子混入	にぶい橙	単節 LR	V	
PL. 46-3	粘土瘤を貼付け突出部を作り、沈線により渦巻文を施す。両脇は隆起線と沈線により区画する。						

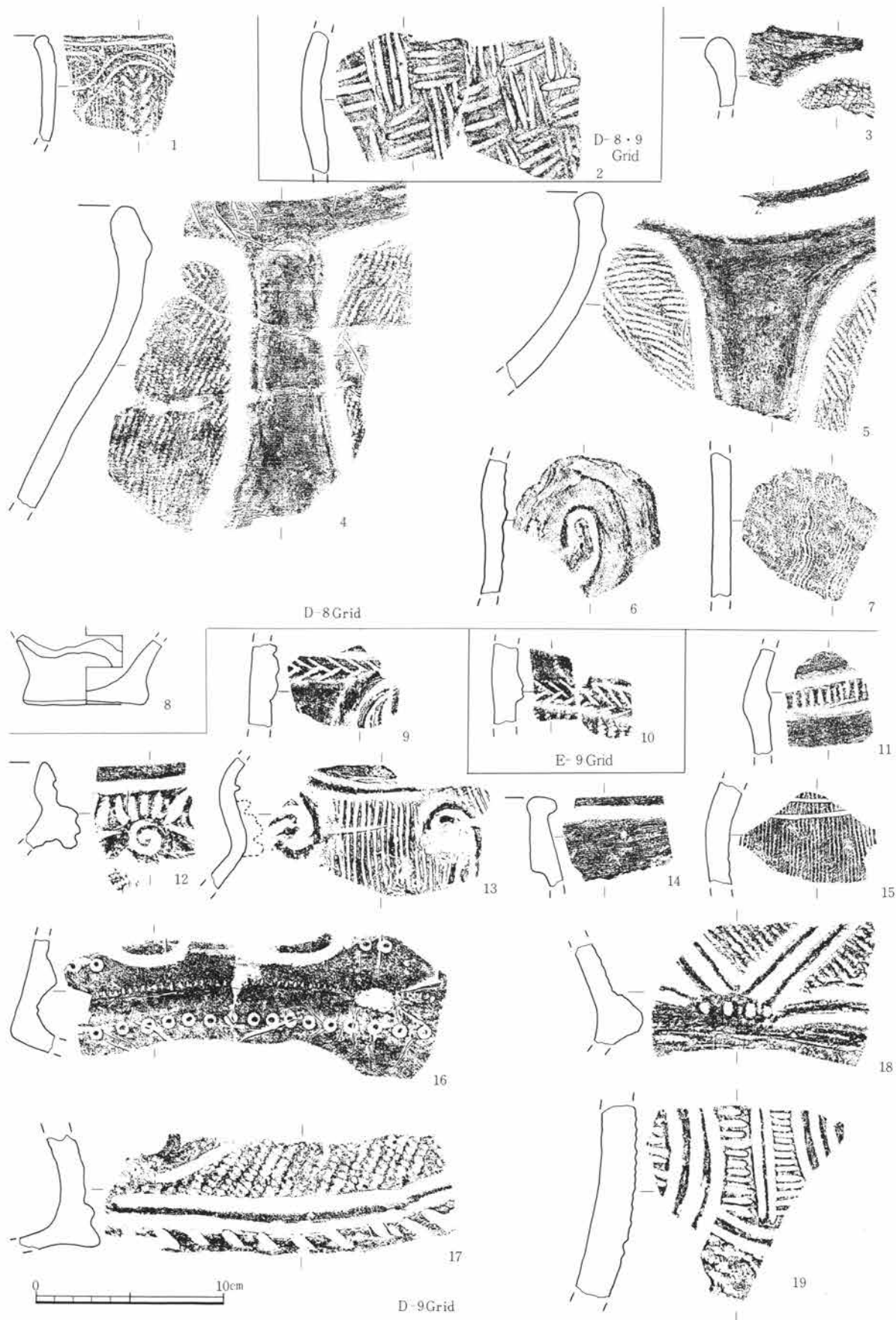


Fig. 102 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

13区土器だまり出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 103-4	深鉢・口縁部	13区D-9 Gr III-3層	白・黒粒子混入	にぶい赤褐		II	
PL. 46-3	口縁部内面に稜をもつ。幅広の無文部を介在させ、粘土瘤の貼付けによる渦巻文を作出する。						
Fig. 103-5	深鉢・口縁部	13区D-9 Gr 3層	白色鈳物混入	にぶい橙	単節 RL	VII	
PL. 46-3	口縁に沿って沈線をめぐらす。以下、沈線により渦巻文を施し、楕円区画する。						
Fig. 103-6	深鉢・口縁部	13区D-9 Gr III-3層	白色鈳物混入	にぶい赤褐	燃糸 L	VI-1	
PL. 46-3	口縁部はやや内湾し、隆起線と沈線により渦巻文を施し、楕円区画する。						
Fig. 103-7	深鉢・口頸部	13区D-9 Gr III-3層	白色鈳物混入	にぶい橙	単節 RL	VI-1	内面に炭化物付着
PL. 46-3	隆起線と沈線で区画し、渦巻部分に円形刺突を施す。頸部は屈曲する。						
Fig. 103-8	深鉢・口縁部	13区D-9 Gr 3層	白色鈳物混入	にぶい橙	単節 LR	V	
PL. 46-3	口縁部は波状を呈する。隆起線と沈線により入組状の渦巻文を作出する。						
Fig. 103-9	深鉢・口縁部	13区D-9 Gr 3層	夾雑鈳物混入	にぶい橙	単節 LR	VI	
PL. 46-3	口縁に沿って1条の断面三角形の微隆起線をめぐらし、下端に2条の隆起線により区画する。						
Fig. 103-10	深鉢・口縁部	13区D-9 Gr 3層	白粒・礫混入	橙	複節 RLR	VI	
PL. 46-3	口縁部はやや内湾し、肥厚する。隆起線と沈線により「L」字状に区画する。						
Fig. 103-11	深鉢・口縁部	13区D-9 Gr III-3層	白色鈳物混入	にぶい橙	単節 RL	VI-1	
PL. 46-3	口縁部は内湾し、肥厚する。口縁に沿って太い沈線がめぐる。隆起線と沈線により渦巻文を施す。						
Fig. 103-12	深鉢・口縁部	13区D-9 Gr 3層	雲母・礫混入	にぶい橙	単節RL(多条)	VI	
PL. 46-3	口縁に沿って隆起線と沈線をめぐらす。						
Fig. 103-13	深鉢・口縁部	13区D-9 Gr 3層	白色鈳物混入	橙	単節 RL	VI	内面に炭化物付着
PL. 46-3	口縁に沿って隆起線と沈線により幅の狭い長方形区画を構成する。						
Fig. 103-14	深鉢・口縁部	13区D-9 Gr III-3層	小礫少数混入	橙		VI	
PL. 46-3	隆起線により長楕円区画し、区画内に縦位の沈線を施す。下端は隆起線上に沈線を施す。						
Fig. 103-15	深鉢・口縁部	13区D-9 Gr 3層	小礫少数混入	にぶい橙		VI~VII	
PL. 46-3	口縁部は波状を呈する。波頂部には渦巻状沈線を施し、以下2本の沈線を引き、沈線間に連続「コ」の字文を施す。						
Fig. 103-16	深鉢・口縁部	13区D-9 Gr 3層	小礫混入	橙		VII	内面に炭化物付着
PL. 46-3	口縁部は波状を呈し、波頂部から垂下する蕨手状懸垂文を施す。沈線区間に条線文を施す。						
Fig. 103-17	深鉢・口縁部	13区D-9 Gr III-3層	白・黒粒子混入	明赤褐	単節 LR	VII	
PL. 46-3	波状口縁となり、波頂部は円形の透し穴とする。縦位の楕円区画内に縄文を施す。						

13区土器だまり出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 103-18	深鉢・口縁部	13区D-9 Gr III-3層	雲母・礫混入	橙	単節 RL	VII	
PL. 46-3	口縁に沿って沈線をめぐらし、以下縄文を施す。						
Fig. 103-19	深鉢・口縁部	13区D-9 Gr III-3層	白粒・礫混入	橙		VI~VII	
PL. 46-3	口縁部は外反し、口縁に沿って沈線をめぐらす。弧状の沈線、頸部には横位の沈線を施す。						
Fig. 103-20	深鉢・口縁部	13区D-9 Gr III-3層	白色鈹物混入	にぶい橙	無節 L	VI~VII	内面に炭化物付着
PL. 46-3	口縁部は波状を呈し、口縁に沿って2条の沈線をめぐらす。以下、縄文を施す。						
Fig. 103-21	深鉢・口縁部	13区D-9 Gr III-3層	白色鈹物混入	にぶい橙	単節 RL	VI-1	
PL. 46-3	口縁部はやや内湾する。口縁に沿って2条の沈線がめぐる。以下、弧状の沈線を施す。						
Fig. 103-22	深鉢・口縁部	13区D-9 Gr III-3層	白色鈹物混入	にぶい褐		VI-1	
PL. 46-3	地文は条線文で、口唇下に2条の沈線をめぐらす。沈線間に円形竹管により連続「コ」の字文を施す。						
Fig. 103-23	深鉢・口縁部	13区D-9 Gr 3層	小礫少数混入	橙	撚糸 ?	VI-1	
PL. 46-3	口縁部はやや内湾する。口縁に沿って3条の沈線を施す。以下3条単位の連弧状沈線を施す。						
Fig. 103-24	深鉢・口縁部	13区D-9 Gr III-3層	白色鈹物混入	にぶい橙		VI-2	
PL. 46-3	地文は条線文で、沈線により連弧状文様と半月形文を施す。						
Fig. 104-1	深鉢・口頸部	13区D-9 Gr III-3層	夾雑鈹物混入	にぶい橙	単節 RL	VIII	
PL. 46-4	口縁部はやや内湾する。断面三角形の微隆起線により区画される。						
Fig. 104-2	深鉢・頸胸部	13区D-13Gr	小礫少数混入	にぶい赤褐		II	
PL. 46-4	幅広の隆帯を「T」字状に貼付する。隆帯上には刻目を施す。区画内は半截竹管により縦位の沈線を施す。						
Fig. 104-3	深鉢・口縁部	13区D-15Gr III-3層	白色鈹物混入	にぶい橙		VI	
PL. 46-4	口縁内面はそげ、断面山形を呈する。口縁に沿って隆起線をめぐらし区画する。内部に縦位の沈線を施す。						
Fig. 104-4	深鉢・胸部	D・E-7・8 Gr 3層	白粒・礫混入	にぶい赤褐		II	
PL. 46-4	隆起線に矢羽状の刻目を施すと同時に、隆起線間に縦位の沈線を施す。						
Fig. 104-5	深鉢・口胸部	D・E-7・8 Gr 3層	白粒・礫混入	にぶい橙	単節 LR	V~VI	
PL. 46-4	口縁部は外反し、口唇上に沈線がめぐる。頸部は鈹状の張出しを付ける。また、口縁に沿って刺突を施す。						
Fig. 104-6	深鉢・口頸部	D・E-8 Gr III-3層	石英混入	にぶい橙	単節 RL	IV	
PL. 46-4	口縁部は内湾し、口縁に沿って沈線がめぐる。隆起線と沈線により渦巻文を施し、楕円区画する。頸部は無文である。						
Fig. 104-7	深鉢・口頸部	D・E-8 Gr III-3層	白粒・礫混入	にぶい橙	単節 RL	IV	
PL. 46-4	口縁に沿って沈線がめぐる。隆起線と沈線により渦巻文を施し、楕円区画する。区画下端に円形竹管で縦位の沈線を施す。						

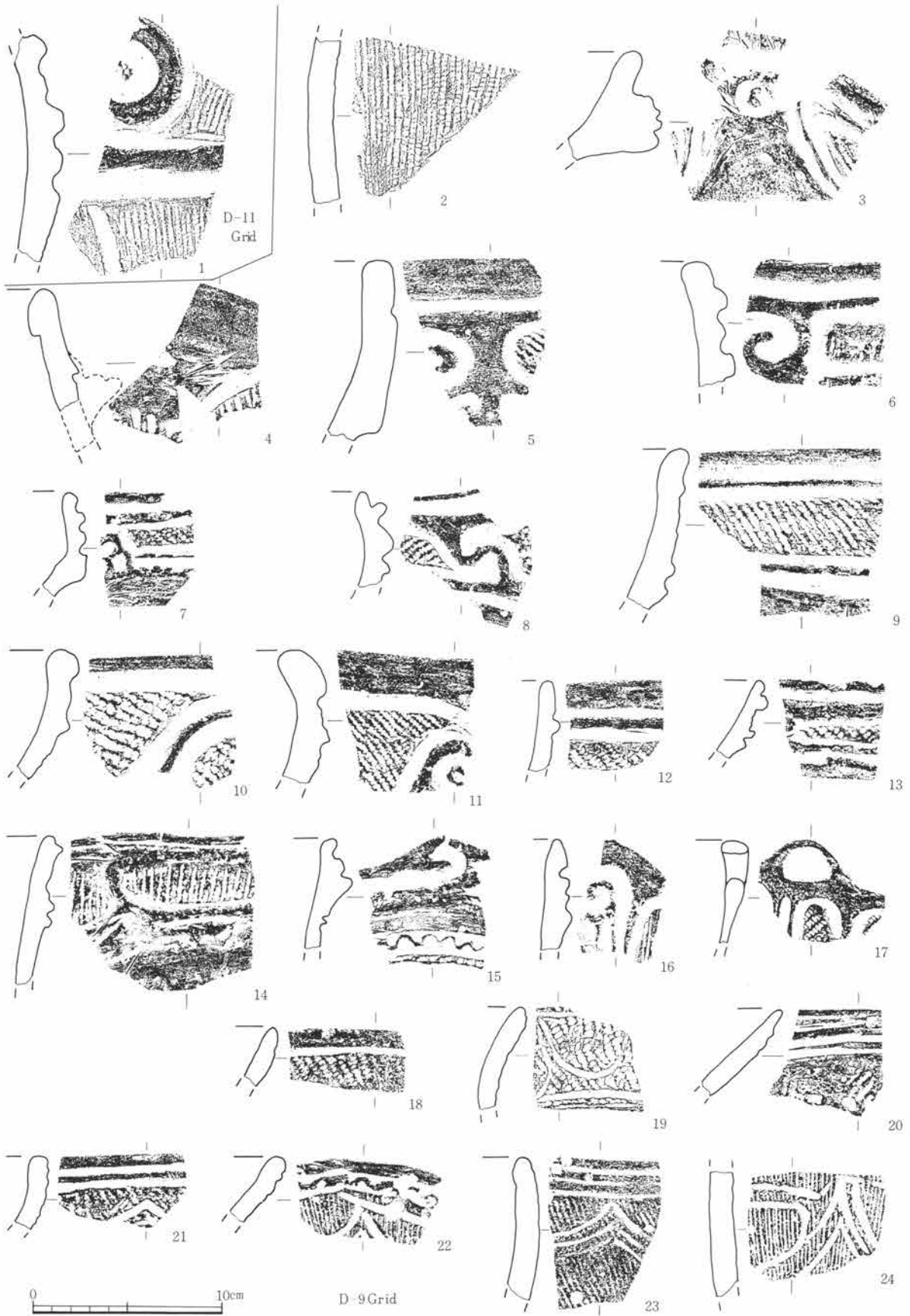


Fig. 103 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

13区土器だまり出土遺物一覧表 (土器)

挿 図 番 号	器形・部位	出 土 位 置	胎 土	色 調	縄文原体	時期区分	備 考
図 版 番 号	説 明						
Fig. 104-8	深鉢・口縁部	13区E-8 Gr 3層	雲母・礫混入	褐 灰		II	
PL. 46-4	口縁は波状を呈し、口唇部に刻目を施す。波頂部から刻目を施した隆起線を貼付する。区画内は結節沈線を施す。						
Fig. 104-9	深鉢・胴部	13区E-8 Gr III-3層	夾雑鉱物混入	橙		II	
PL. 46-4	刻目を施した隆起線により、楕円と円形文様を作出する。区画内は半截竹管工具による刺突文を施す。						
Fig. 104-10	深鉢・胴部	13区E-8 Gr III-3層	夾雑鉱物混入	にぶい赤褐		II	
PL. 46-4	半截竹管工具により沈線文を施し、区画内は「C」字状の刺突を施す。						
Fig. 104-11	深鉢・口縁部	13区E-8 Gr III-3層	白・黒粒子混入	にぶい橙		II	
PL. 46-4	口縁直下より縦位の隆起線を貼付する。隆起線上に矢羽状刺突文を施す。						
Fig. 104-12	深鉢・口胴部	13区E-8 Gr III-3層	石 英 混 入	明 赤 褐	単節 RL	III~IV	
PL. 46-4	剝落しているが、粘土紐貼付けによる把手を作出している。隆起線と沈線により渦巻文を施している。						
Fig. 104-13	深鉢・口縁部	13区E-8 Gr III-3層	小 礫 混 入	にぶい橙		III~IV	
PL. 46-4	口縁部に渦巻状の把手を付けている。把手の下端は沈線により区画している。						
Fig. 105-1	深鉢・口頸部	13区E-8 Gr 3層	小 礫 混 入	にぶい赤褐		III-1	
PL. 47-1	口縁部は「コ」の字状に内湾する。隆起線と沈線により区画し、区画内に剣先状に粘土紐を貼付け、縦位の沈線を施す。						
Fig. 105-2	深鉢・口縁部	13区E-8 Gr III-3層	小 礫 混 入	にぶい橙	単節 LR	VI-1	
PL. 47-1	口縁に沿って隆起線をめぐらし、隆起線と沈線により渦巻文を施し区画する。頸部は無文となる。						
Fig. 105-3	深鉢・口縁部	13区E-8 Gr III-3層	小礫少数混入	にぶい橙	単節 RL	IV	
PL. 47-1	Fig.105-2と同様の文様構成をなす。						
Fig. 105-4	深鉢・口縁部	13区E-8 Gr III-3層	石 英 混 入	橙	単節RL(多条)	VI-1	内面に炭化物付着
PL. 47-1	Fig.105-2と同様の文様構成をなす。						
Fig. 105-5	深鉢・口胴部	13区E-8 Gr III-3層	黒色鉱物混入	にぶい橙	単節 LR	VI-1	内面に炭化物付着
PL. 47-1	口縁部は逆「く」の字状に内湾する。口縁に沿って3条の沈線をめぐらし、沈線間に円形竹管工具にて刺突文を施す。						
Fig. 105-6	深鉢・頸底部	13区E-8 Gr 3層	白色鉱物混入	橙		VI-1	
PL. 47-1	頸部に隆起線をめぐらし、以下縦位の隆起線により区画する。区画内は沈線を施す。						
Fig. 105-7	深鉢・口縁部	13区E-8・9 Gr 3層	砂 質	にぶい橙		II	
PL. 47-1	口唇上に沈線を施す。粘土瘤貼付による突起を作出し、隆起線には半截竹管工具により連続刺突を施す。						
Fig. 105-8	不明・把手部	E-8・9 Gr III-3層	砂 質	にぶい橙		?	貫通孔あり
PL. 47-1	断面三角形に近い形状を呈している。上面と表面・左右の面に連続樹形文様を施す。						

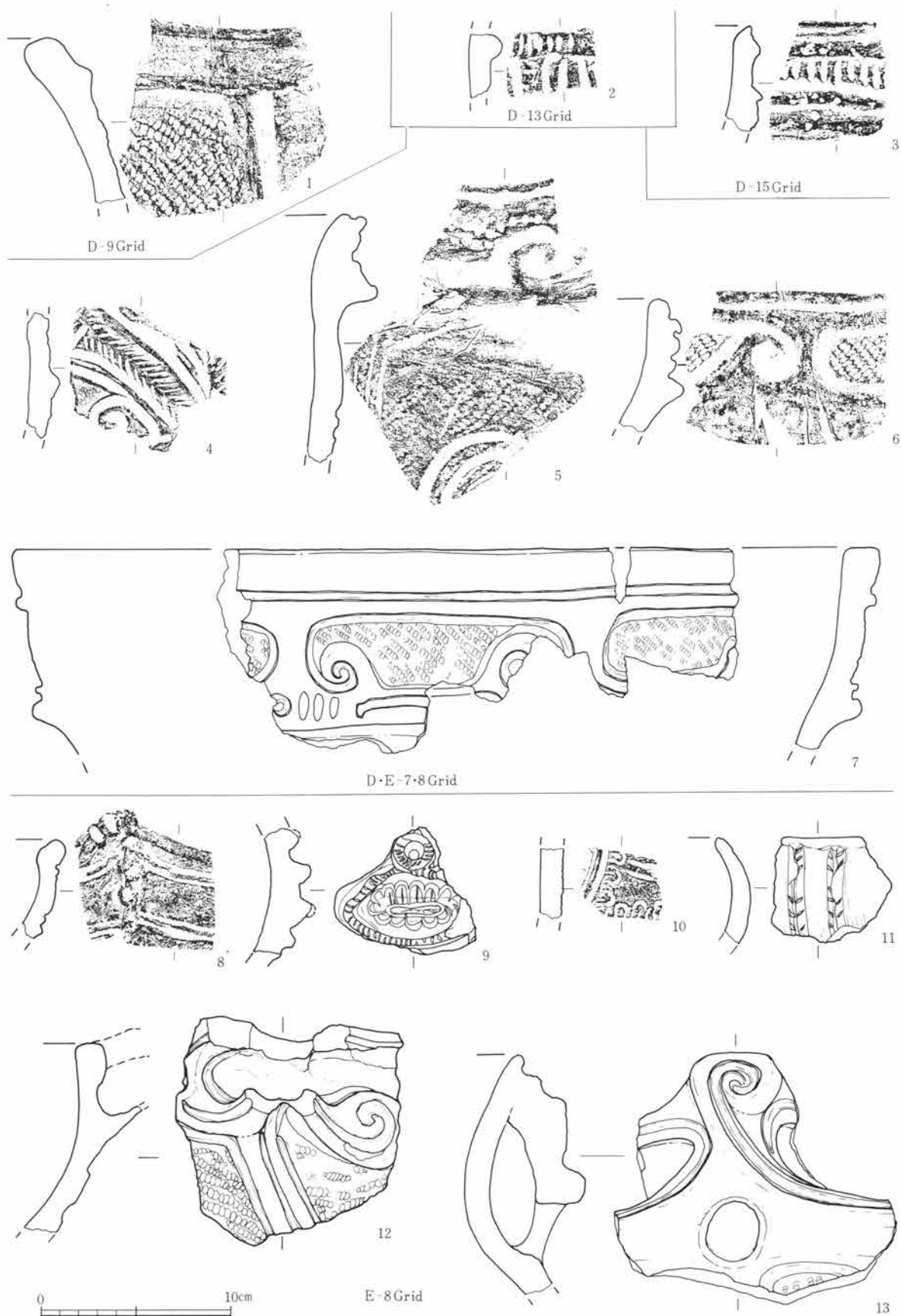


Fig. 104 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

13区土器だまり出土遺物一覧表（土器）

挿 図 番 号	器形・部位	出 土 位 置	胎 土	色 調	縄文原体	時期区分	備 考
図 版 番 号	説 明						
Fig. 105-9	浅鉢・口頸部	E-8・9 Gr III-3層	砂 質	浅 黄 橙		IV	
PL. 47-1	頸部に円形刺突文、口縁部には沈線による楕円文を施す。						
Fig. 105-10	浅鉢・口頸部	13区E-8・9 Gr 3層	夾雑鉱物混入	橙		II	
PL. 47-1	口縁部文様は沈線により作出される。下端には半截竹管による連続「コ」の字文を施す。						
Fig. 105-11	深鉢・口胴部	13区E-8・9 Gr 3層	白粒・礫混入	浅 黄 橙	単節RL・LR	IV	
PL. 47-1	口縁はやや波状を呈し、肥厚する。口縁に沿って2条の沈線をめぐらす。隆起線と沈線により渦巻文を施し、方形に区画。						
Fig. 106-1	深鉢・口胴部	E-8・9 Gr III-3層	白粒・礫混入	にぶい橙		IV	
PL. 47-2	口縁部に渦巻状の把手を付ける。口縁部は隆起線と沈線により区画し、区画内は縦位の沈線を施す。						
Fig. 106-2	深鉢・口縁部	13区E-9 Gr 3層	夾雑鉱物混入	明 赤 褐		II	
PL. 47-2	隆起線の貼付けと沈線により渦巻文を施す。						
Fig. 106-3	深鉢・頸胴部	13区E-9 Gr 3層	白色鉱物混入	にぶい赤褐		II	
PL. 47-2	2条単位の隆起線で「T」字状に区画し、区画内に縦位と斜位の沈線を施す。						
Fig. 106-4	深鉢・口縁部	13区E-9 Gr 3層	白色鉱物混入	にぶい橙	不明	II	内面に炭化物付着
PL. 47-2	口縁部はやや内湾する。隆起線を横位と斜位に施し区画する。						
Fig. 106-5	深鉢・口縁部	13区E-9 Gr 3層	白色鉱物混入	橙		II	
PL. 47-2	口縁部断面は山形を呈し、口唇内面は稜をもつ。幅広の隆帯にて円形文を作出する。隆帯脇に刻目を施す。						
Fig. 106-6	深鉢・口胴部	13区E-9 Gr 3層	砂 質	にぶい赤褐	単節 LR	II	内面に炭化物付着
PL. 47-2	頸部で「く」の字状に屈曲する。頸部に2条の沈線がめぐる。						
Fig. 106-7	浅鉢・口胴部	13区E-9 Gr 3層	石 英 混 入	にぶい橙	単節 LR	IV	
PL. 47-2	頸部上端に刺突文をめぐらす。沈線により渦巻文を施す。						
Fig. 106-8	浅鉢・口胴部	13区E-9 Gr 3層	白色鉱物混入	橙	単節 LR	II	
PL. 47-2	頸部は断面三角形に突出する。上端には篋状工具による刻目を施す。						
Fig. 106-9	深鉢・口縁部	13区E-9 Gr 3層	白色鉱物混入	明 赤 褐	不明	?	
PL. 47-2	口縁部に弧状隆帯を貼付け、縄文を施す。						
Fig. 106-10	深鉢・口縁部	13区E-9 Gr 3層	小礫少数混入	にぶい橙		VII	
PL. 47-2	口縁部は波状を呈し、内面は稜をもつ。口縁に沿って隆起線がめぐる。隆起線上に円形刺突文を施す。						
Fig. 106-11	深鉢・口縁部	13区E-9 Gr 3層	夾雑鉱物混入	橙		VI-2	
PL. 47-2	橋状把手を付け、隆起線と沈線により渦巻文を施す。						

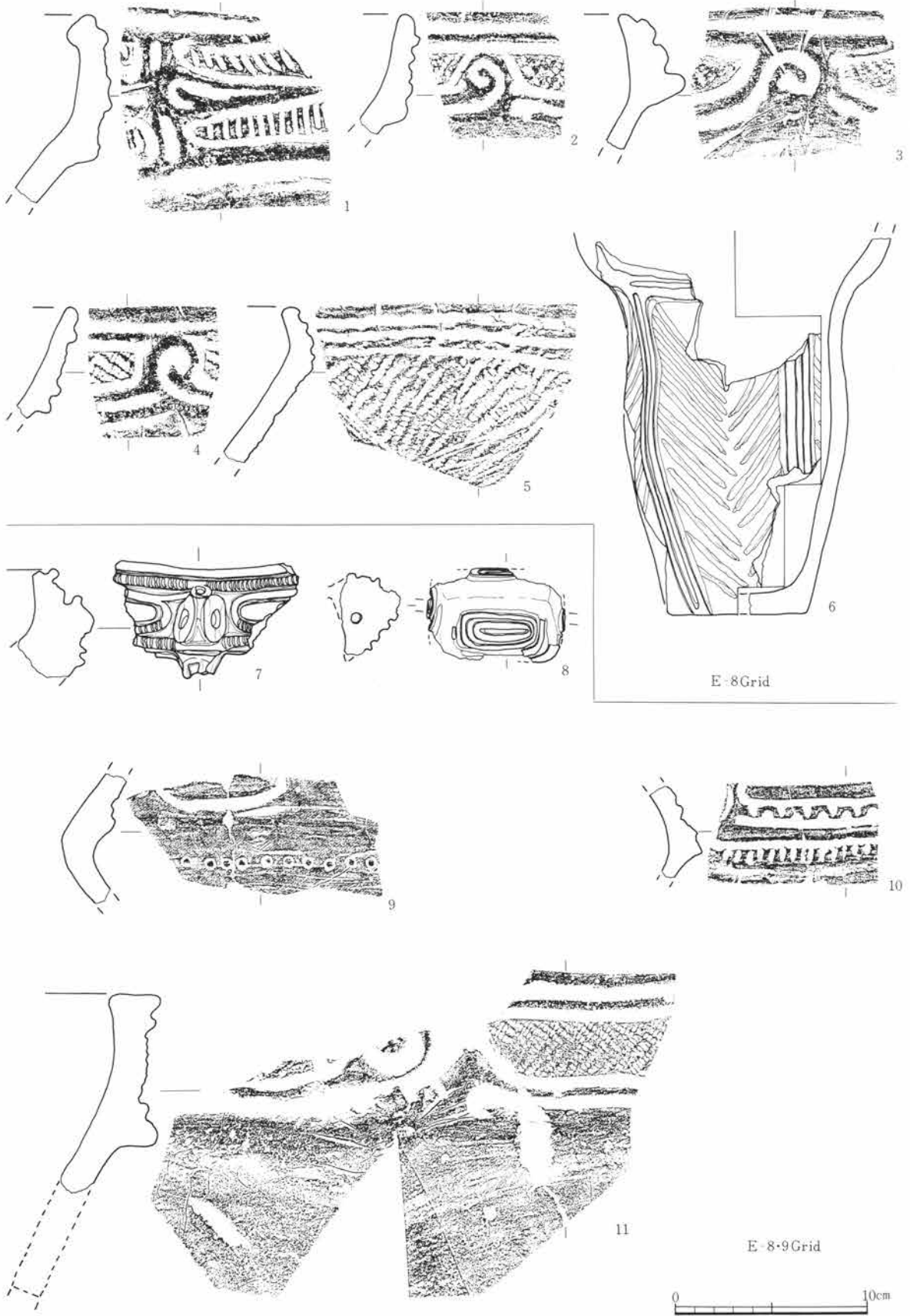


Fig. 105 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

第3章 各 説

13区土器だまり出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説 明						
Fig. 106-12	深鉢・口胴部	13区E-9Gr III-3層	小礫混入	橙	単節 RL	IV	
PL. 47-2	隆起線と沈線により渦巻文を施し、楕円区画する。頸部は無文である。						
Fig. 106-13	深鉢・口胴部	13区E-9Gr III-3層	夾雑鉱物混入	にぶい橙	単節RL(多条)	IV	
PL. 47-2	隆起線と沈線により区画する。頸部は無文である。						
Fig. 106-14	深鉢・口縁部	13区E-9Gr III-3層	小礫少数混入	にぶい橙		IV	
PL. 47-2	口縁部は波状を呈し、口縁に沿って隆起線をめぐらす。弧状隆起線の交点に粘土瘤を貼付ける。						
Fig. 106-15	深鉢・口縁部	13区E-9Gr 3層	小礫少数混入	浅黄橙	燃糸 L	VI	
PL. 47-2	口縁部は内湾する。隆起線と沈線により区画する。						
Fig. 106-16	深鉢・口縁部	13区E-9Gr 3層	砂質	橙	燃糸 R	VI	
PL. 47-2	口縁部は内湾し、波状を呈する。低い隆起線と沈線により区画する。頸部に横位の渦巻状沈線を施す。						
Fig. 106-17	深鉢・口縁部	13区E-9Gr 3層	白色鉱物混入	にぶい橙	単節 RL	VI	
PL. 47-2	口縁部は波状を呈する。口縁に沿って隆起線をめぐらす。以下、縄文を施す。						
Fig. 106-18	深鉢・口縁部	13区E-9Gr 3層	雲母・礫混入	灰褐		VI	
PL. 47-2	口縁部はやや内湾する。口縁に沿って断面三角形の隆起線と沈線をめぐらす。						
Fig. 106-19	深鉢・口縁部	13区E-9Gr III-3層	白粒・礫混入	橙	単節RL(多条)	VI	
PL. 47-2	口縁に沿って隆起線と沈線をめぐらし区画する。						
Fig. 107-1	深鉢・口縁部	13区E-9Gr 3層	夾雑鉱物混入	橙		V	
PL. 47-3	口唇部はやや外反し、波状口縁となる。口縁に沿って隆起線をめぐらす。沈線により区画し、縦位の沈線を施す。						
Fig. 107-2	深鉢・口縁部	13区E-9Gr 3層	白色鉱物混入	暗赤褐		V	
PL. 47-3	口縁に沿って沈線をめぐらし区画する。区画内はやや弧状になる斜位沈線を施す。						
Fig. 107-3	深鉢・口縁部	13区E-9Gr 3層	白色鉱物混入	橙	単節 RL	VI-1	
PL. 47-3	口縁に沿って3条の沈線がめぐる。以下、弧状沈線を施す。						
Fig. 107-4	深鉢・口縁部	13区E-9Gr 3層	砂質	橙	燃糸 R	VI-1	
PL. 47-3	口縁に沿って4条の沈線がめぐる。以下、沈線により楕円形区画をおこなう。						
Fig. 107-5	深鉢・口縁部	13区E-9Gr 3層	夾雑鉱物混入	にぶい赤褐		VII	
PL. 47-3	口縁部は波状を呈する。沈線により渦巻を施す。						
Fig. 107-6	深鉢・口縁部	13区E-9Gr 3層	黒色鉱物混入	橙	単節 LR	VI	
PL. 47-3	口縁に沿って沈線により半月形の区画をおこなう。						

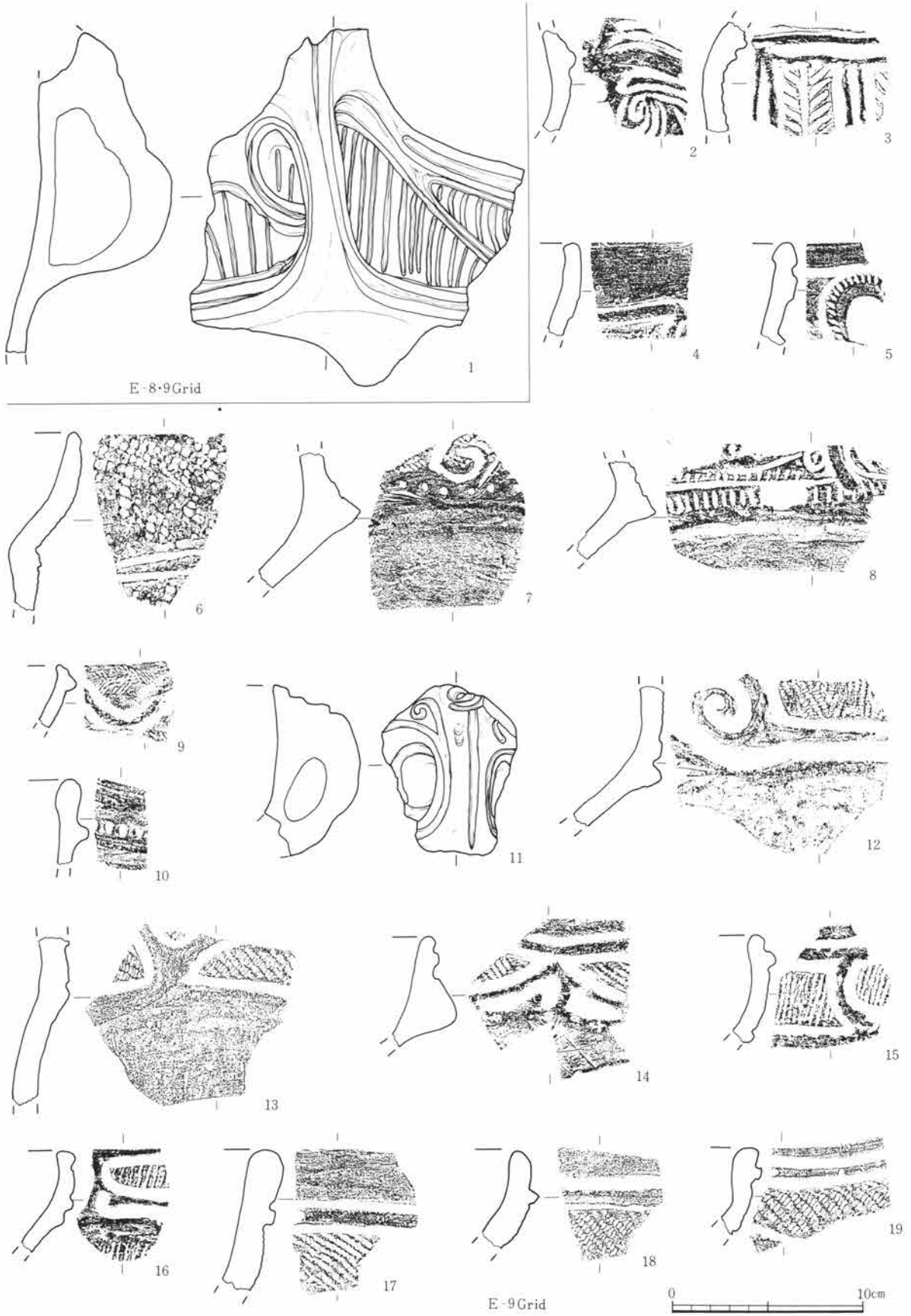


Fig.106 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

13・27区土器だまり出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 107-7	深鉢・口縁部	13区E-9Gr III-3層	黒色鉱物混入	にぶい橙	単節 LR	VI	
PL. 47-3	口唇部は内湾し、交互刺突による連続「コ」の字文を施す。以下、沈線により楕円区画する。						
Fig. 107-8	深鉢・胴部	13区E-9Gr 3層	砂質	橙	撚糸 L	IV-1	
PL. 47-3	3条単位の沈線により連弧状文様を作出する。						
Fig. 107-9	深鉢・口縁部	13区E-9Gr 3層	白色鉱物混入	にぶい橙	単節 LR	VII	
PL. 47-3	口縁部は波状を呈する。口唇下部より縦位3条の沈線を施す。						
Fig. 107-10	深鉢・口縁部	13区E-9Gr III-3層	白色鉱物混入	にぶい橙	単節 RL	VIII	
PL. 47-3	口縁部は内湾し、口唇下部に稜をもつ。沈線により曲線状に区間し、縄文を磨消す。						
Fig. 107-11	深鉢・口縁部	13区E-9Gr 3層	小礫少数混入	にぶい赤褐	無節 R	?	
PL. 47-3	口縁部はやや内湾する。全面に縄文を施す。						
Fig. 107-12	深鉢・胴部	13区E-9Gr 3層	石英混入	にぶい橙	単節 LR	?	
PL. 47-3	全面に縄文を施す。						
Fig. 107-13	深鉢・胴部	13区E-14Gr 3層	白粒・礫混入	にぶい橙		VI-1	
PL. 47-3	沈線で楕円区画し、区画内は連歯状工具にて条線文を施す。						
Fig. 107-14	深鉢・口胴部	13区E-14Gr III-3層	砂質	橙	単節RL・LR	VI	
PL. 47-3	口縁部はやや内湾する。口縁部は沈線で楕円区画し、頸部以下は縦位の沈線により区画する。						
Fig. 107-15	深鉢・胴部	13区E-14Gr III-3層	白・黒粒子混入	橙	単節 LR	VI~VII	
PL. 47-3	縄文を施し、沈線で縦位に区画する。区画内の縄文を磨消す。						
Fig. 107-16	深鉢・胴部	13区E-14Gr III-3層	砂質	浅黄橙	単節 LR	VI~VII	
PL. 47-3	縄文を施し、2条の波状沈線を引き、沈線間の縄文を磨消す。						
Fig. 107-17	深鉢・胴部	27区E・F-2・3 III-3層	夾雑鉱物混入	橙		II	
PL. 47-3	隆起線の両脇に半截竹管による「C」字状刺突文を施す。						
Fig. 107-18	深鉢・口縁部	27区E・F-2・3 III-3層	石英混入	にぶい橙		II	
PL. 47-3	口唇部は内湾し、口縁に沿って2条の沈線がめぐる。以下、縦位の浅い沈線を施す。						
Fig. 107-19	深鉢・口縁部	27区E・F-2・3 III-3層	白・黒粒子混入	橙		II	
PL. 47-3	口縁部は波状を呈する。隆起線と結節沈線により渦巻文を構成する。						
Fig. 107-20	深鉢・口縁部	27区E・F-2・3 III-3層	夾雑鉱物混入	橙	撚糸 L	VI	
PL. 47-3	口縁部はやや内湾し、口縁に沿って4条の沈線をめぐらす。沈線間に交互刺突による連続「コ」の字文を施す。						

13・27区土器だまり出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 107-21	深鉢・口縁部	27区E・F-2・3 III-3層	夾雑鉱物混入	にぶい橙	燃糸 R	VI	
PL. 47-3	口唇部は「く」の字状に内湾する。文様は Fig.107-20と同様である。						
Fig. 107-22	深鉢・口頸部	27区E・F-2・3 3層	夾雑鉱物混入	にぶい赤褐		V	
PL. 47-3	口縁部はやや内湾し、隆起線と沈線により突起状の渦巻文を施す。						
Fig. 107-23	深鉢・口縁部	27区E・F-2・3 3層	石英混入	にぶい橙	単節 RL	VI	
PL. 47-3	口縁部に隆起線と沈線により渦巻文を施し、楕円区画する。						
Fig. 107-24	深鉢・口縁部	27区E・F-2・3 3層	白色鉱物混入	橙	複節 LRL	VI	
PL. 47-3	口唇部内面は稜をもつ。隆起線と沈線により渦巻文を施し、半月形区画する。						
Fig. 107-25	深鉢・口縁部	27区E・F-2・3 III-3層	夾雑鉱物混入	にぶい橙	単節 RL	VI	
PL. 47-3	口縁部はやや内湾する。低い隆起線と沈線により渦巻文を施し、楕円区画する。						
Fig. 108-1	深鉢・口縁部	27区E・F-2・3 III-3層	小礫少数混入	にぶい橙		VII	
PL. 47-4	口縁部は波状を呈する。隆起線と沈線により渦巻文と楕円区画をおこなう。区画内は縦位の沈線を施す。						
Fig. 108-2	深鉢・口胴部	27区E・F-2・3 III-3層	白粒・礫混入	橙	付加条	VI	
PL. 47-4	隆起線により区画し、以下縄文を施す。						
Fig. 108-3	深鉢・口胴部	27区E・F-2・3 3層	白色鉱物混入	にぶい黄橙	単節 RL	VIII	
PL. 47-4	口縁部はやや波状を呈し、口縁に沿って断面三角形の微隆起線がめぐる。以下、沈線で楕円区画する。						
Fig. 108-4	深鉢・口縁部	27区E・F-2・3 3層	夾雑鉱物混入	褐 灰		IX	
PL. 47-4	口縁部は波状を呈する。粘土瘤を貼付け、波頂部の間に沈線で楕円区画し、刺突文を施す。						
Fig. 108-5	深鉢・口縁部	13区F-8Gr 3層	白・黒粒子混入	にぶい褐	単節 RL	?	
PL. 47-4	口縁部は外反し、内面に隆起線をめぐらす。口唇上に押圧を加え、半截竹管により横位と縦位に沈線を施す。						
Fig. 108-6	深鉢・口縁部	13区F-8Gr 3層	石英混入	にぶい橙	燃糸 L	VI-2	
PL. 47-4	口縁部は内湾し、口縁に沿って3条の沈線をめぐらす。沈線間に交互刺突し、連続「コ」の字文を施す。						
Fig. 108-7	深鉢・口縁部	13区F-10Gr 3層	白色鉱物混入	にぶい赤褐	燃糸	II	
PL. 47-4	口縁部はやや内湾し、口唇下部より燃糸を施す。						
Fig. 108-8	深鉢・口縁部	13区F-10Gr III-3層	小礫混入	にぶい橙	単節 RL	VI	
PL. 47-4	口縁部は内湾する。隆起線と沈線により楕円区画する。						
Fig. 108-9	深鉢・口縁部	13区F-10Gr III-3層	砂質	橙	単節 LR	VI	
PL. 47-4	口縁に沿って交互刺突による連続「コ」の字文を施す。						

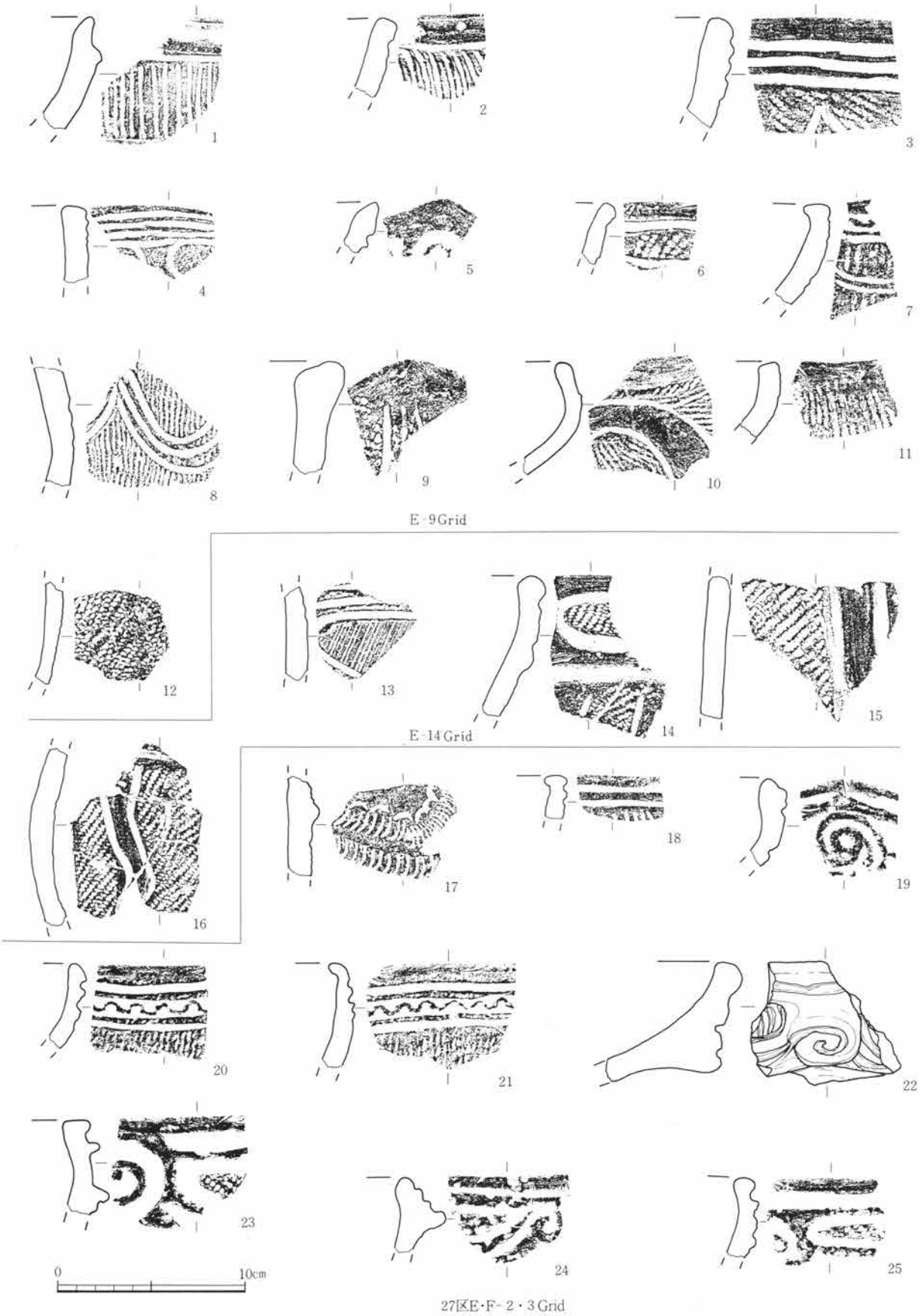


Fig.107 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

13区土器だまり出土遺物一覧表（土器）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 108-10	深鉢・口縁部	13区F-10Gr III-3層	雲母・礫混入	にぶい橙	単節 LR	VI	
PL. 47-4	口縁に沿って2条の沈線をめぐらし区画する。						
Fig. 108-11	深鉢・口胴部	13区F-10Gr 3層	白色鉱物混入	浅黄橙	単節 LR	VI	内面整形良好
PL. 47-4	口縁部に横位1条の隆起線を貼付け区画する。口唇部との間に交互刺突による羽状の刻目を施す。						
Fig. 108-12	深鉢・口胴部	13区F-10Gr III-3層	白色鉱物混入	浅黄橙	燃糸	VI-1	
PL. 47-4	口縁に沿って沈線をめぐらす。以下、3条単位の沈線により連弧状文様を施す。						
Fig. 108-13	深鉢・口胴部	13区F-8Gr 3層	白色鉱物混入	にぶい橙	燃糸	VI-1	表面に炭化物付着
PL. 47-4	Fig.108-12と同様の文様を構成する。						
Fig. 108-14	深鉢・口縁部	13区F-10Gr 3層	雲母・礫混入	にぶい赤褐		VIII	
PL. 47-4	地文は連歯状工具による条線文を施す。口縁に沿って沈線をめぐらす。						
Fig. 108-15	深鉢・口胴部	13区F-10Gr 3層	夾雑鉱物混入	にぶい橙		V	
PL. 47-4	口唇部は内側に張出す。沈線による重弧文を施す。						
Fig. 108-16	深鉢・底部	13区F-10Gr 3層	雲母・礫混入	にぶい赤褐		II	
PL. 47-4	網代痕がある。						
Fig. 108-17	小型壺・口頸部	13区F-15Gr 3層	小礫少数混入	黒		VI-2	
PL. 47-4	頸部に断面三角形の隆起線をめぐらし、鐔状の張出しをつける。貫通孔をめぐらす。						
Fig. 108-18	深鉢・口頸部	13区G-8Gr 3層	雲母・礫混入	にぶい橙		IV	
PL. 47-4	口縁部はやや内湾する。隆起線と沈線により渦巻文と「L」字状区画をおこなう。区画内に縦位の沈線を施す。						
Fig. 108-19	深鉢・胴部	13区G-9Gr III-3層	石英混入	橙	無節 R	II	
PL. 47-4	隆起線と結節沈線により渦巻文を施す。						
Fig. 108-20	深鉢・胴部	13区G-9Gr III-3層	結晶片岩混入	にぶい赤褐		II	
PL. 47-4	隆起線と半截竹管工具による沈線で区画する。隆起線上には刻目を施す。						
Fig. 108-21	深鉢・胴部	13区G-9Gr	結晶片岩混入	明赤褐		II	
PL. 47-4	半截竹管工具による沈線で方形に区画する。区画内縁に刻目を施す。						
Fig. 109-1	深鉢・口胴部	13区G-10Gr 3層	白色鉱物混入	にぶい橙	単節RL・LR	VI-2	
PL. 48-1	口縁部は波状を呈し、口縁に沿って太い沈線による渦巻文と楕円区画をおこなう。以下、縦位沈線で区画し縄文を磨消す。						
Fig. 109-2	深鉢・口胴部	13区G-10Gr 3層	白粒・礫混入	にぶい橙	単節 LR	VII	
PL. 48-1	口縁に沿って沈線をめぐらす。以下、沈線で縦位に長方形区画する。						

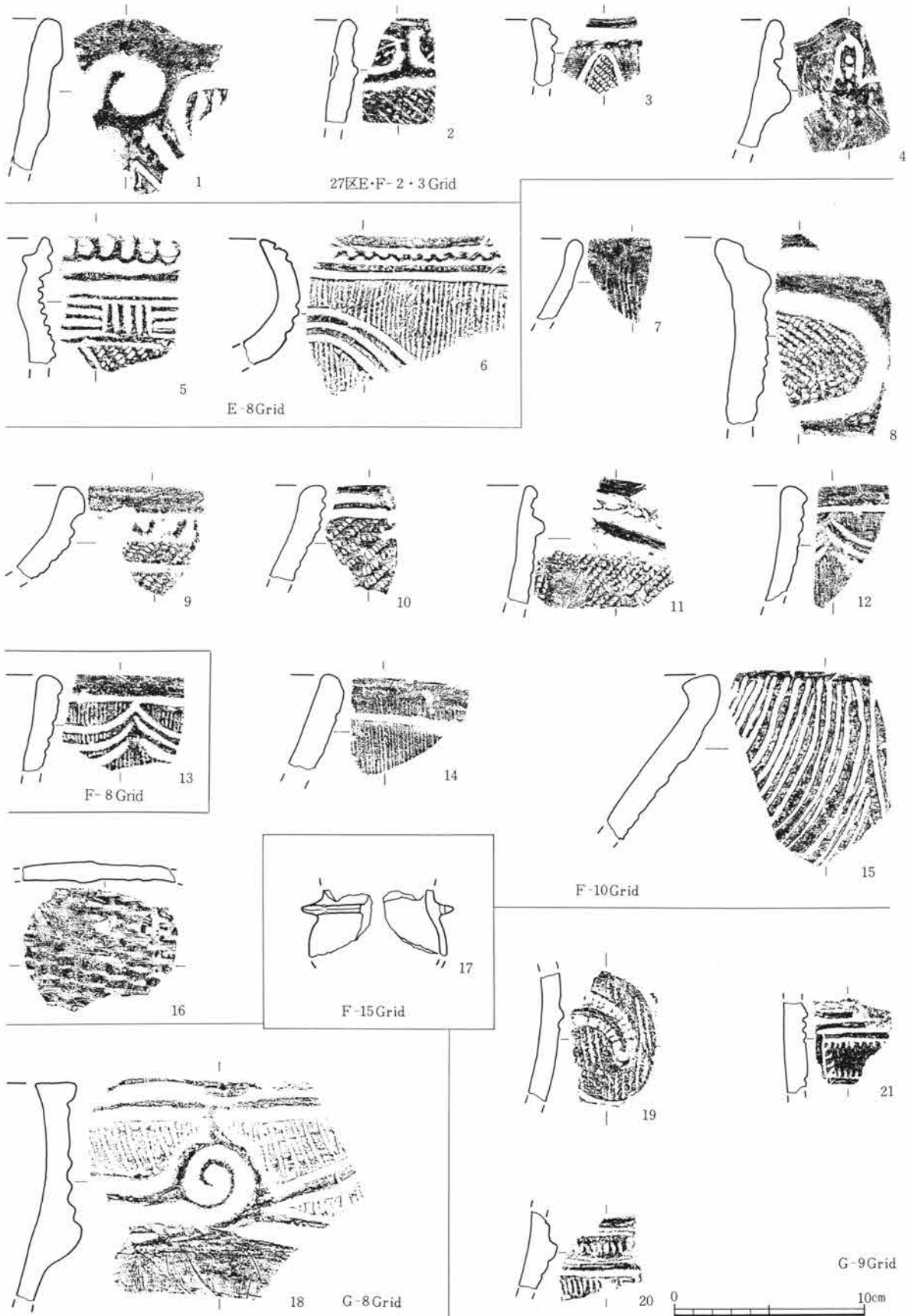


Fig.108 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

12・13・27区土器だまり出土遺物一覧表（土器・土製品）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 109-3	深鉢・胴部	13区G-10Gr 3層	白粒・礫混入	橙	単節 LR	VI~VII	
PL. 48-1	沈線により区画し、縄文を磨消す。						
Fig. 109-4	深鉢・口縁部	27区G-1 Gr 3層	白色鉱物混入	にぶい橙	単節 RL	VIII	
PL. 48-1	口縁に沿って断面三角形の微隆起線をめぐらす。以下、沈線で楕円区画し、区画外の縄文を磨消す。						
Fig. 109-5	深鉢・口胴部	13区K-9 Gr III-3層	雲母・礫混入	にぶい橙	単節 LR	IV	
PL. 48-1	口縁部はやや内湾し、方形に肥厚する。口唇下に太い沈線がめぐる。						
Fig. 109-6	深鉢・口縁部	13区K-9 Gr 3層	白色鉱物混入	浅黄橙	単節 LR	VIII	
PL. 48-1	口縁部は波状を呈し、内湾する。口縁に沿って浅い沈線がめぐる。沈線で区画し、縄文を磨消す。						
Fig. 109-7	深鉢・胴底部	13区北西斜面 III-3層	石英混入	にぶい赤褐	単節 LR	IX	網代痕がある。
PL. 48-1	沈線により区画し、縄文を施す。						
Fig. 109-8	深鉢・口頸部	13区 表 採	夾雑鉱物混入	淡 橙		IV	
PL. 48-1	口縁部に渦巻状の把手をつける。口縁に沿って沈線で区画し、区画内は縦位の沈線で施す。						
Fig. 109-9	浅鉢・口頸部	13区 表 採	白粒・礫混入	灰 白	単節 LR	IV	
PL. 48-1	隆起線と沈線により区画する。頸部の屈曲部は張出し、上端の一部に縦位の沈線を施す。						
Fig. 110-1	深鉢・口縁部	13区 表 採	夾雑鉱物混入	にぶい橙	燃糸 L	VI-1	
PL. 48-2	口縁部は内湾する。隆起線と沈線により渦巻文を施し、楕円区画する。						
Fig. 110-2	深鉢・口縁部	12区S・T-13・14 III-3層	砂 質	にぶい橙	単節 LR	VII	
PL. 48-2	口縁部は内湾し、口縁に沿って2条の沈線をめぐらす。以下、3条単位の沈線により連弧状文様を作出する。						
Fig. 110-3	深鉢・口縁部	12区 表 土	石英混入	にぶい赤褐		VI	
PL. 48-2	口唇部は内側に屈曲する。斜位の沈線により重弧文を構成する。						
Fig. 111-1	土鍾（完形）	13区C-9 III-3層	石英混入	にぶい橙	絡条体 L		
PL. 48-5	長径約3.7cm、厚さ約1.3cm、重さ22.67gである。						
Fig. 111-2	土鍾（破損）	13区B-13Gr	白色鉱物混入	明 赤 褐	絡条体 ℓ		
PL. 48-5	現存部分はおよそ4分の1であり、重さ34.97gである。						
Fig. 111-3	土鍾（完形）	27区C・D-2・3 3層	白・黒粒子混入	橙	絡条体 L		
PL. 48-5	長径約4.7cm、短径約4.2cmの楕円に近い形をしている。重さは22.38gである。						
Fig. 111-4	土鍾（完形）	13区B・C-11・12 III-3層	小 礫 混 入	にぶい赤褐	不明		内面に炭化物の付着
PL. 48-5	長径約4.5cm、短径3.9cm、重さ24.11gである。						

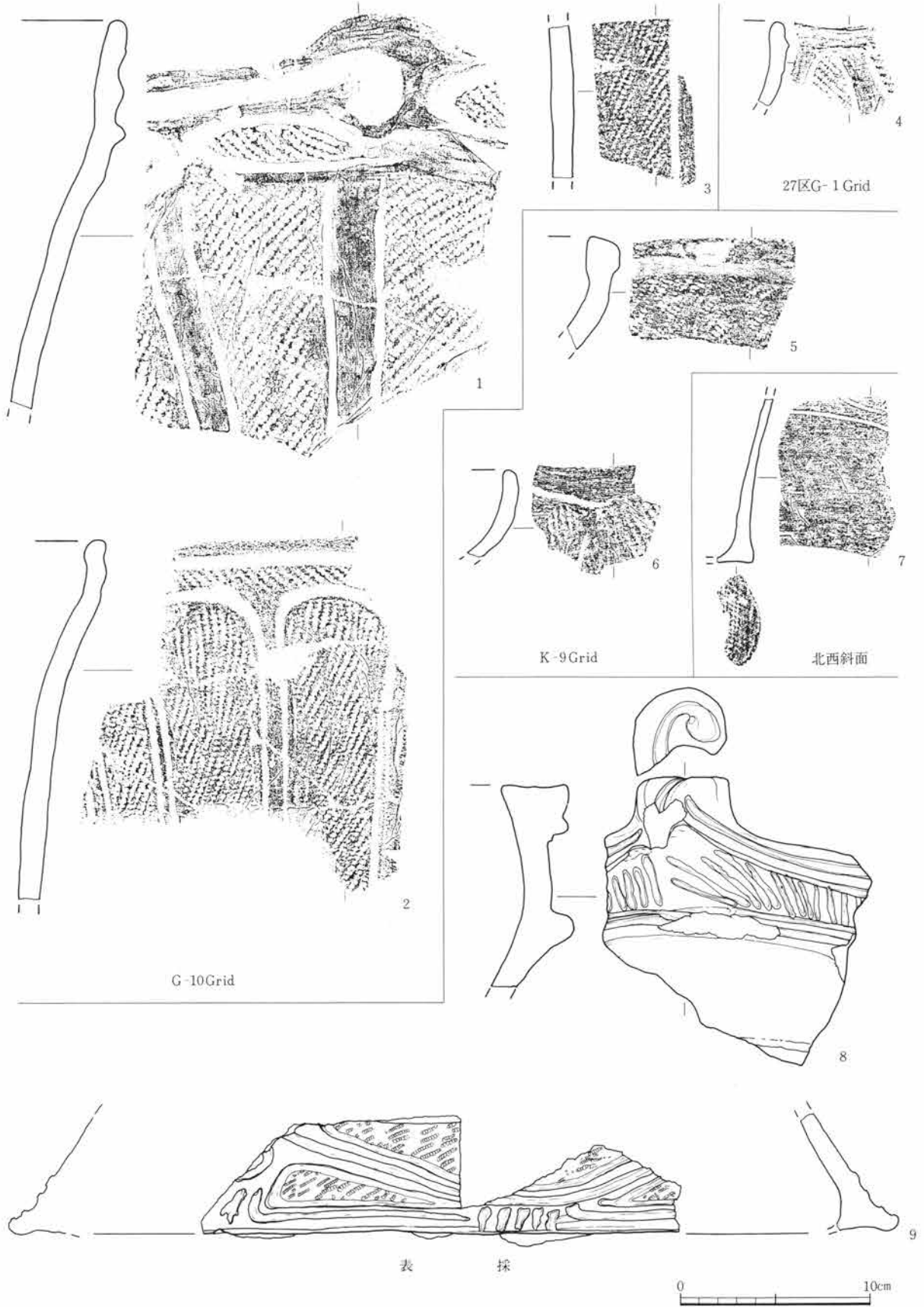


Fig.109 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

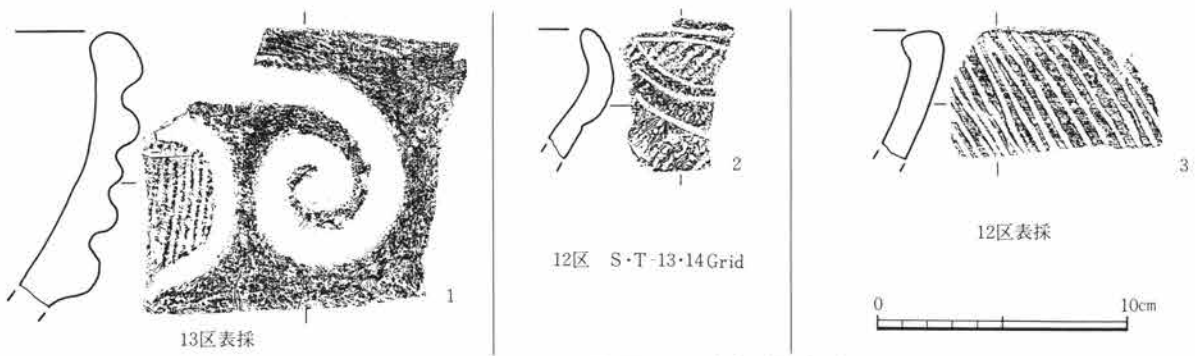


Fig.110 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

12・13・27区土器だまり出土遺物一覧表（土製品）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説明						
Fig. 111-5	土錘（完形）	13区B・C-12III-3層	白・黒粒子混入	にぶい赤褐			
PL. 48-5	長径約3.6cm、短径3.2cm、重さ17.03gである。口縁部破片を使用している。						
Fig. 111-6	土錘（完形）	表採	白色鈹物包含	にぶい橙	単節 LR		
PL. 48-5	径約3.8cm、厚さ0.6cm、重さ13.60gである。						
Fig. 111-7	土錘（完形）	13区E-9 Gr. 3層	小礫混入	にぶい橙			
PL. 48-5	径約3.4cm、厚さ1.1cm、重さ18.69gである。半截竹管による太い沈線と集合沈線文を施した土器破片を使用している。						
Fig. 111-8	土錘（破損）	13区A・B-9・10III-3層	白色鈹物包含	橙			
PL. 48-5	現存率は約2分の1である。厚さ1.0cm、重さ13.57gである。						
Fig. 111-9	土錘（完形）	13区E-9 Gr. 3層	白色鈹物包含	橙	単節 RL		
PL. 48-5	径約3.1cm、厚さ約1.4cm、重さ16.69gである。						
Fig. 111-10	土錘（完形）	12・13区T・A-11Gr.III-3層	雲母・礫混入	明赤褐	単節 RL		
PL. 48-5	径約3.0cm、厚さ約1.0cm、重さ13.57gである。						
Fig. 111-11	土錘（破損）	27区C・D-2・3・3層	小礫混入	橙	単節 RL		
PL. 48-5	長径約4.2cm、短径約3.4cm、厚さ約1.1cm、重さ20.78gである。破損品ではなく未製品かも知れない。						
Fig. 111-12	土錘（完形）	13区E-? Gr. 3層	白粒・礫混入	橙			
PL. 48-5	長径約4.4cm、短径約4.1cm、厚さ1.2cm、重さ31.65gである。						
Fig. 111-13	土錘（破損）	27区C・D-2・3 3層	白色鈹物包含	橙	絡条体		
PL. 48-5	径約4.0cm、厚さ0.9cm、重さ14.94gである。一部分破損している。						
Fig. 111-14	土錘（完形）	13区B・C-14 III-3層	白色鈹物包含	灰褐			
PL. 48-5	径約3.1cm、厚さ1.0cm、重さ15.01gである。隅丸方形の形態をしている。						

12・13・27区土器だまり出土遺物一覧表（土製品）

挿図番号	器形・部位	出土位置	胎土	色調	縄文原体	時期区分	備考
図版番号	説 明						
Fig. 111-15	土錘（破損）	13区D-7 Gr. 3層	雲母・礫混入	褐 灰			
PL. 48-5	径約5.4cm、厚さ1.3cm、重さ45.21gである。一部分破損している。全周が研磨された状態ではなく、未製品かも知れない。						
Fig. 111-16	土錘（完形）	13区E-8・9 III-3層	白粒・礫混入	にぶい橙			
PL. 48-5	径約3.4cm、厚さ1.3cm、重さ19.53gである。						
Fig. 111-17	土錘（完形）	13区C-9 III-3層	小 礫 混 入	橙			
PL. 48-5	長径約3.4cm、短径約2.4cm、厚さ0.6cm、重さ8.64gである。						
Fig. 111-18	土錘（完形）	13区B-12 III-3層	白色鉱物包含	浅 黄 橙			
PL. 48-5	径約3.7cm、厚さ0.9cm、重さ18.51gである。						
Fig. 111-19	土錘（完形）	27区C・D-2・3 Gr.3層	白色鉱物包含	にぶい橙			
PL. 48-5	長軸約4.6cm、短軸約2.7cm、厚さ0.8cm、重さ13.46gである。卵形に近い形態をしている。						
Fig. 111-20	耳 栓	13区C・D-7・8 3層	白色鉱物包含	橙			
PL. 48-3・5	白形状になり、断面は凹みをもつ。両面に細い竹管工具にて刺突している。重さは8.33gである。						
Fig. 111-21	耳 栓	13区C-10・11 III-3層	白色鉱物包含	橙			
PL. 48-4・5	形態は Fig.111-20と類似するが、これよりも大型で重量がある。両面に棒状工具にて刺突している。重さ40.41gである。						
Fig. 111-22	土製品	13区B-13Gr. 3層	砂 質	浅 黄 橙			
PL. 48-5	半截竹管による沈線文様の施された土器破片を使用し、4面を磨き長方形に形づくっている。重さは21.48gである。						
Fig. 111-23	土製品	13区C-10・11 III-3層	白粒・礫混入	にぶい橙			
PL. 48-5	内面は凹み半月形を呈している。左端は破損しているが、平面形は長方形である。重さは22.84gである。						

土器だまりからは土製品が23点出土している。白玉状の耳栓2点と土錘19点、その他用途の不明のものが2点出土している。耳栓は Fig. 111-21が大型であるが、20も棒状工具による刺突を施して両者の文様は類似している。同時期のものと思われる。Fig. 111-22は長方形の土錘かもしれないが、検討の必要がある。Fig. 111-23は把手の剥落したものかも知れないが詳細は不明である。

Fig. 111-1～19は土錘である。そのうち、完形品は14点で、破損品ないしは未製品と思われるものは5点である。14などの全周を丁寧に研磨したものと、15のように周辺を打ちかいただけで研磨の施されていないものがある。また、19の片側に切り込みを加えたと思われるものがあるが、ほとんどのものは切り込みを施していない。さらに、10のように径3cm余りで、厚さ1cm呈の小型で薄い作りのものと、15のように径5cm余りで厚さ1.3cmの大型で厚い作りのものがある。

土器破片を素材として製作しているが、1・2・3・13は撚糸文のみ施されたものを使用している。7は縄文と沈線を施し、無文部を形成する加曾利EIII式段階と思われる破片を使用している。その他、12・15・16などは無文部破片を使用し、5は口縁部破片を使用している。

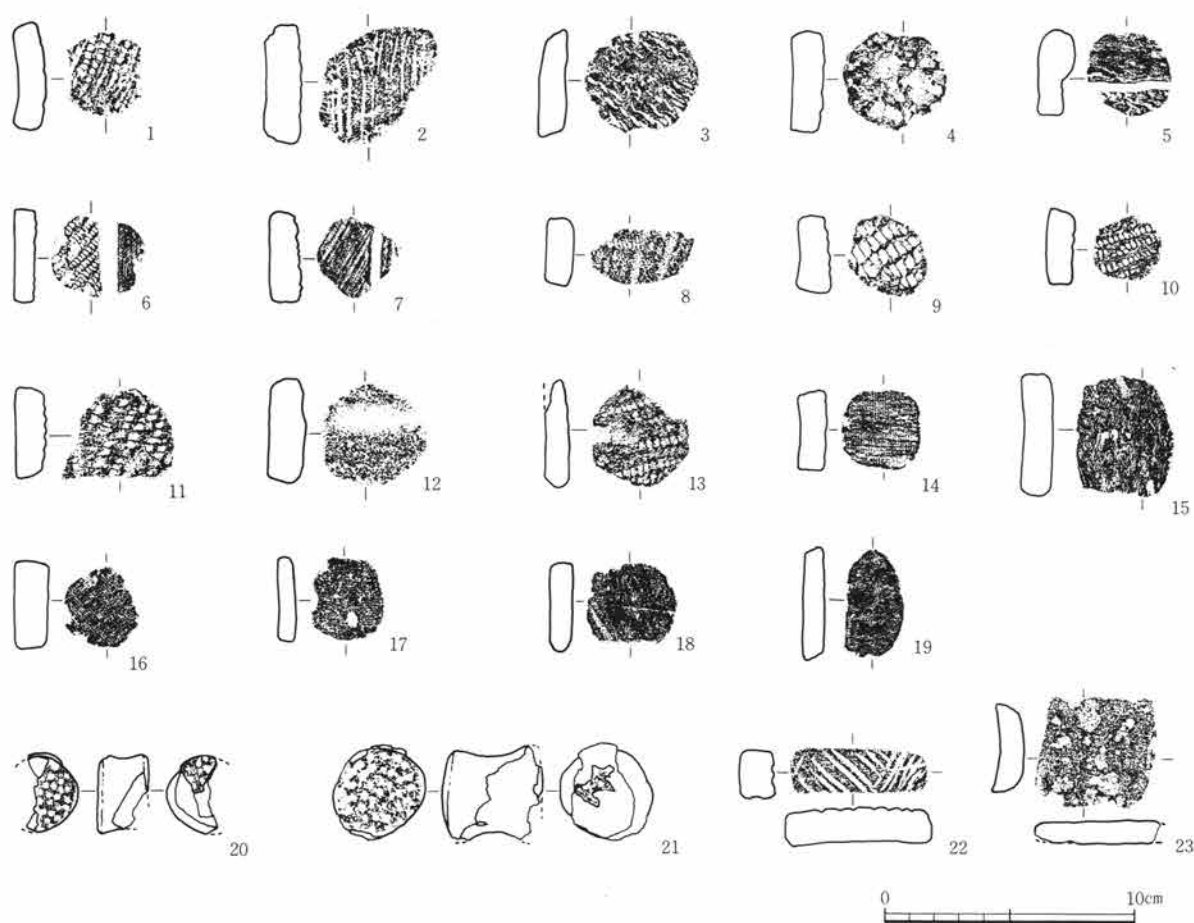


Fig.111 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

耳栓のうち Fig111-21は現存部の重量が40.4gある。土錐で最も重厚があるものは、Fig111-15の45.2gである。最も軽量のものは17の8.6gのものである。数量的には13gから18g程度のもが多く、続いて22g前後のものが多い。

また、土錐の形態は Fig111-3～5などの円形に近いものや、14・18などの隅丸で正方形に近いものなどがある。22は長方形のものであり、本形態のものはこの1点だけである。綾杉状の沈線文を施した曾利式土器文様の破片を素材としている。

Fig111-5は口縁部破片を使用したものであり、片側のみが厚くなっている。その他のものは胴部破片を使用している。

Fig111-23は用途不明である。周辺部の研磨は施されていない。把手の剥落したものの可能性もあるが、詳細は不明なためあえて本項でとりあげた。(中東)

第3章 各 説

12・13区土器だまり出土遺物一覧表 (石器)

挿図番号	石器の種類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	出土位置
Fig. 112-1	打製石斧	(9.8)	6.9	1.8	110.1	黒色頁岩	12・13区A-11Grid III-3層
PL. 48-6	分銅形を呈す。基部の一部を欠損する。左右から大きく抉りが入っている。刃部付近は磨耗が認められる。						
Fig. 112-2	打製石斧	9.8	6.3	2.6	131.7	黒色頁岩	13区A・B-10・11Grid III-3層
PL. 48-6	分銅形を呈す。表面には自然面が多く残る。中央に大きく抉りが入る。細かい剥離は、刃部・基部・抉部にみられる。						
Fig. 112-3	打製石斧	12.5	7.2	2.9	246.3	黒色頁岩	13区B-12Grid III-3層
PL. 48-6	分銅形を呈す。刃部を欠損する。左右両辺に浅い抉りがある。剥離は表裏面とも左右から行なっている。						
Fig. 112-4	打製石斧	10.6	6.3	2.1	189.5	黒色頁岩	13区B-12Grid
PL. 48-6	分銅形を呈す。裏面は多くの自然面を残す。中央に大きく抉りが入る。刃部・基部とも両面から細かい剥離が入る。						
Fig. 112-5	打製石斧	13.5	7.4	2.0	186.3	砂岩	13区B・C-11・12Grid III-3層
PL. 48-6	分銅形の範疇に入ると考えられる。刃部と基部の一部が欠損、裏面には自然面が残る。剥離は横方向から行なっている。						
Fig. 112-6	打製石斧	(8.4)	10.7	2.1	232.6	安山岩	13区B・C-11・12Grid III-3層
PL. 48-6	分銅形を呈すと考えられる。約2分の1を欠損する。刃部は使用時に一部が欠損したものと考えられる。						
Fig. 112-7	打製石斧	(14.7)	8.0	2.9	305.9	変質安山岩	13区C-8・9Grid III-3層
PL. 48-6	分銅形の範疇に入ると考えられる。刃部は欠損している。裏面は自然面を多く残す。中央に抉りがある。						
Fig. 112-8	打製石斧	12.4	7.1	1.9	205.8	灰色安山岩	13区C-10Grid III-3層
PL. 48-6	分銅形を呈す。基部の一部を欠損する。表面には自然面を多く残す。剥離は横方向から行なっている。						
Fig. 113-9	打製石斧	13.3	7.6	2.6	373.9	灰色安山岩	13区J-16Grid 3層
PL. 49-1	分銅形を呈する。中央部分に両面から抉りを入れている。刃部は細かい剥離を行なっている。						
Fig. 113-10	打製石斧	(10.0)	7.1	2.9	239.9	黒色頁岩	13区E-8Grid 3層
PL. 49-1	分銅形に属するものと考えられる。中央部分に僅かな抉りがある。基部は欠損する。						
Fig. 113-11	打製石斧	(12.0)	7.0	2.1	177.5	輝石安山岩	13区E-9Grid 3層
PL. 49-1	刃部は一部が欠損する。刃部中央は尖っている。裏面は自然面が多く残る。一部に磨耗痕がある。						
Fig. 113-12	打製石斧	7.8	4.9	1.4	76.1	灰色安山岩	13区E-8Grid 3層
PL. 49-1	表裏面とも横方向からの剥離を行なった後、各辺とも細かい剥離が入る。刃部は潰れている。						
Fig. 113-13	打製石斧	(10.2)	3.9	2.0	82.7	黒色頁岩	12区S・T-13・14Grid
PL. 49-1	刃部は欠損している。裏面基部と刃部付近には自然面が残る。						
Fig. 113-14	打製石斧	12.4	5.2	1.7	98.6	砂岩	13区A-19Grid
PL. 49-1	撥形に属する。刃部は縦方向からの剥離である。刃部の一部が欠損する。						

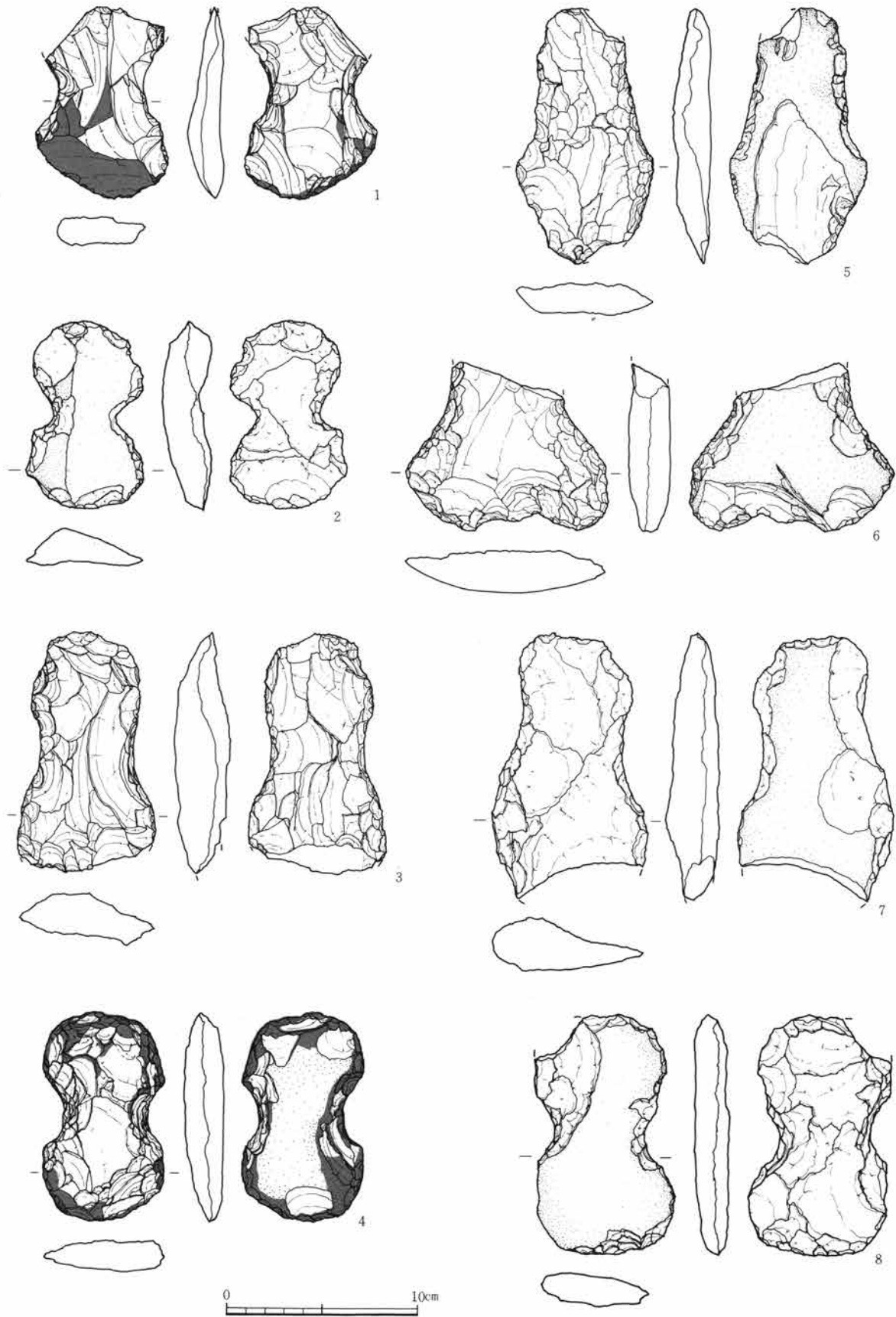


Fig. 112 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

13区土器だまり出土遺物一覧表 (石器)

挿図番号	石器の種類	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石質	出土位置
Fig. 113-15	打製石斧	10.6	4.2	7.0	29.4	黒色頁岩	13区A・B-9・10Grid III-3層
PL. 49-1	中央から基部にかけて一部が欠損する。薄い石器である。						
Fig. 113-16	打製石斧	10.0	4.2	1.4	80.5	黒色頁岩	13区C-9 Grid 3層
PL. 49-1	撥形を呈す。裏面には自然面が残る。刃部は使用時に割れた状況が残る。						
Fig. 113-17	打製石斧	(9.0)	4.8	1.9	93.8	黒色頁岩	13区E-8 Grid 3層
PL. 49-1	刃部・基部ともに欠損している。中央は表裏面とも横方向からの剥離を行なっている。中央には挟りがある。						
Fig. 113-18	打製石斧	(10.0)	4.0	1.8	90.6	黒色頁岩	13区B-12Grid III-3層
PL. 49-1	基部の一部を欠損する。表裏面とも刃部は磨耗痕がある。中央部は両辺とも挟りがあるが浅い。						
Fig. 113-19	打製石斧	(11.1)	4.9	1.6	102.5	黒色頁岩	13区B-12Grid 3層
PL. 49-1	短冊形を呈す。基部は一部を欠損する。裏面には自然面が多く残る。表裏面の一部に磨耗痕がある。						
Fig. 113-20	打製石斧	10.7	6.0	1.3	79.8	黒色頁岩	13区B-13Grid III-3層
PL. 49-1	撥形を呈す。表裏面とも横方向の剥離後、細かい剥離を各辺に行なっている。刃部には両面とも磨耗痕がある。						
Fig. 113-21	打製石斧	14.6	6.2	1.7	158.8	黒色頁岩	13区C-9 Grid 3層
PL. 49-1	撥形に属すると考えられる。刃部は丸味をもつ。剥離は表裏面とも横方向から行なっている。基部を一部欠損する。						
Fig. 113-22	打製石斧	7.6	3.6	1.5	45.7	黒色頁岩	13区D-9 Grid 3層
PL. 49-1	小型の分銅形を呈す。表裏面とも横方向から剥離を行なっている。中央部分には挟りがある。基部を一部欠損する。						
Fig. 114-23	打製石斧	(9.5)	6.4	2.3	142.5	安山岩	13区C-9 Grid 3層
PL. 49-2	中央部分から基部にかけて欠損。剥離は表裏面とも横方向から行なった後、各辺両面から細かい剥離を行なっている。						
Fig. 114-24	打製石斧	(10.8)	4.7	1.7	110.8	黒色頁岩	13区E-8・9Grid III-3層
PL. 49-2	基部が欠損する。表裏面とも横方向からの剥離である。刃部は表裏面とも使用時に割れた縦方向の剥離痕がある。						
Fig. 114-25	打製石斧	10.0	4.8	1.9	81.0	黒色頁岩	13区E-8・9Grid 3層
PL. 49-2	裏面には自然面が多く残る。表面は刃部が縦方向、側面は横方向からの剥離を行なっている。						
Fig. 114-26	打製石斧	(11.4)	5.6	1.6	108.2	輝石安山岩	13区A-19Grid 3層
PL. 49-2	撥形に近い形状を呈すが、先端部が尖っている。表面は自然面が多く残る。裏面の剥離は横方向からである。						
Fig. 114-27	打製石斧	(9.7)	6.2	2.1	134.4	黒色頁岩	13区A・B-13・14Grid III-3層
PL. 49-2	中央から基部と、刃部の一部を欠損する。剥離は表裏面とも主に横方向から行なっている。						
Fig. 114-28	打製石斧	11.8	5.8	1.5	134.0	安山岩	13区A・B-13・14Grid III-3層
PL. 49-2	撥形を呈す。剥離は横方向が主で、刃部は縦方向から行なっている。刃部裏面は細かい剥離がみられる。						

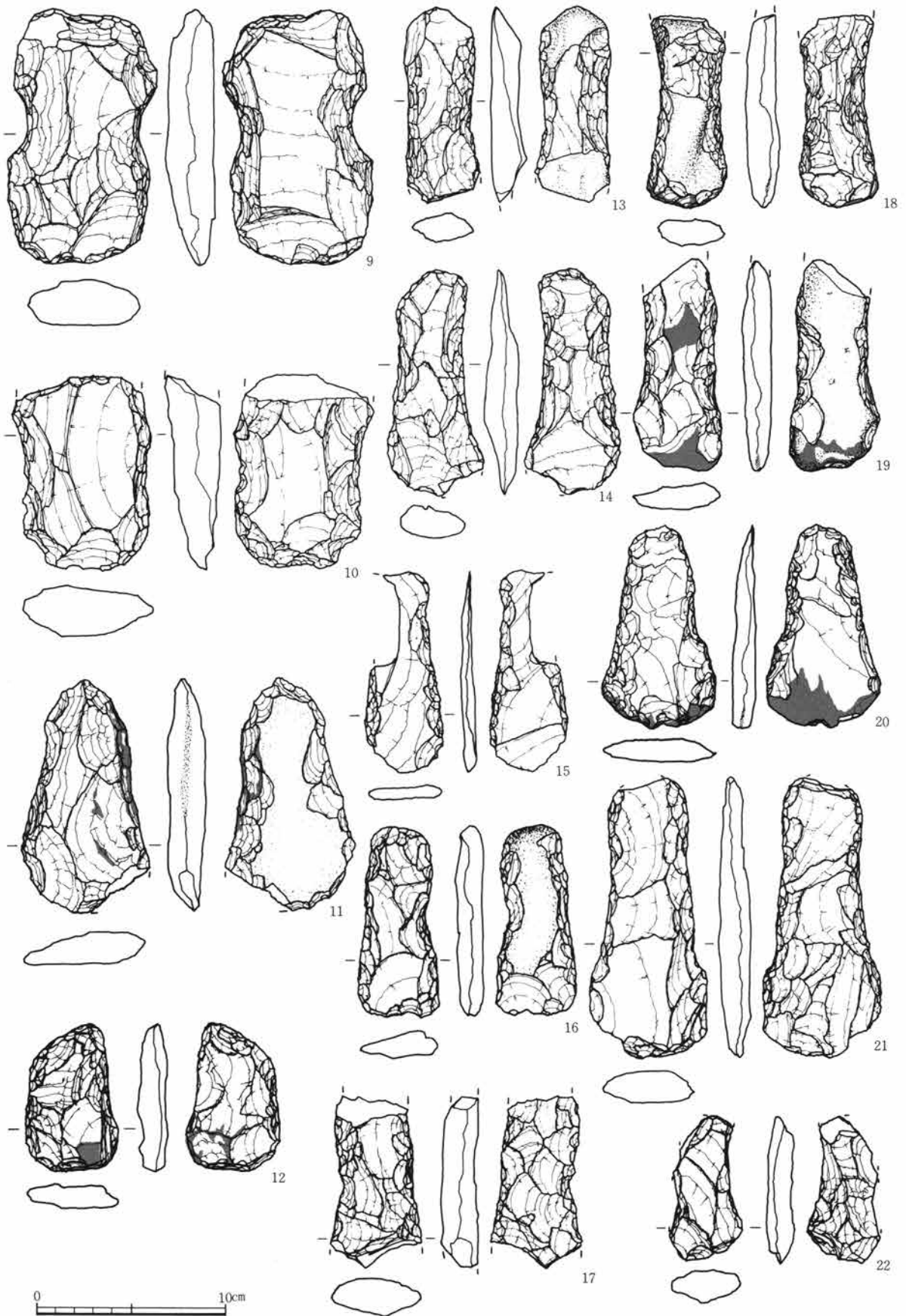


Fig. 113 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

第3章 各 説

13・27区土器だまり出土遺物一覧表 (石器)

挿図番号	石器の種類	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石 質	出 土 位 置
Fig. 114-29	打製石斧	10.0	5.0	1.7	84.4	輝緑岩	13区B-12・13Grid III-3層
PL. 49-2	裏面には擦痕が一定方向(縦方向)に入る。表面は横方向からの剥離を行なっている。						
Fig. 114-30	打製石斧	(10.8)	4.8	2.1	111.3	黒色頁岩	13区B-12・13Grid III-3層
PL. 49-2	中央から刃部にかけて欠損する。裏面は一部に自然面が残る。側面は横方向から細かい剥離が入っている。						
Fig. 114-31	打製石斧	9.0	5.0	1.2	66.5	変質安山岩	13区B・C-15・16Grid III-3層
PL. 49-2	撥形に属すると考えられる。断面は薄い。横方向からの剥離後、周縁部分に細かく剥離を行なっている。						
Fig. 114-32	打製石斧	(8.2)	3.8	1.3	46.2	黒色頁岩	13区C-9Grid III-3層
PL. 49-2	中央から刃部にかけて欠損する。表裏面とも横方向からの剥離を行なった後に細かい剥離を側辺部に行なっている。						
Fig. 114-33	打製石斧	(8.6)	4.6	1.8	58.9	黒色頁岩	13区C-10Grid III-3層
PL. 49-2	小型の石器である。刃部付近が欠損する。表裏面とも一部に自然面を残す。基端部は一部で潰れている。						
Fig. 114-34	打製石斧	(7.9)	4.8	1.4	74.7	黒色頁岩	13区C-10Grid III-3層
PL. 49-2	中央から基部と刃部の一部分が欠損している。側辺部分は一辺には細かい剥離を行なっているが他方は扁平に磨いている。						
Fig. 114-35	打製石斧	(8.2)	4.2	1.2	48.2	点紋頁岩 (ホルンフェルス)	13区C-10Grid III-3層
PL. 49-2	中央部分から刃部にかけて欠損する。表裏面とも風化が激しい。						
Fig. 114-36	打製石斧	(9.2)	4.5	1.8	74.1	黒色頁岩	13区C-10Grid III-3層
PL. 49-2	中央刃部寄りから刃部にかけて欠損する。表面には自然面が残る部分がある。裏面基部は縦方向からの剥離である。						
Fig. 114-37	打製石斧	(11.2)	5.2	1.8	130.7	黒色頁岩	13区D-9Grid 3層
PL. 49-2	中央刃部付近が欠損する。表面には自然面が一部残る。剥離は両面とも横方向から行なっている。						
Fig. 115-38	打製石斧	10.4	5.2	1.4	77.5	黒色頁岩	13区D-9Grid 3層
PL. 49-3	薄い石器である。刃部から中央部付近までは使用時に割れ、刃部を付け直して再使用したものと思われる。						
Fig. 115-39	打製石斧	11.0	4.8	1.8	89.4	黒色頁岩	13区G-9Grid 3層
PL. 49-3	表面には自然面が残る。刃部は尖っている。表裏面とも横方向から2回の剥離後、細かい調整を行なっている。						
Fig. 115-40	打製石斧	(9.8)	4.7	2.4	110.8	黒色頁岩	13区G-11Grid 3層
PL. 49-3	刃部の一部を欠損する。短冊形を呈す。横方向からの剥離後、細部調整を行なっている。表裏面とも横方向からの剥離。						
Fig. 115-41	打製石斧	(7.6)	5.2	1.4	62.4	安山岩	13・27区G・H-20・1Grid 3層
PL. 49-3	撥形と推定できる。中央部分から刃部にかけて欠損する。表面基部は自然面が残る。						
Fig. 115-42	打製石斧	(12.3)	5.0	1.4	106.2	黒色頁岩	13区A-19Grid 3層
PL. 49-3	刃部の一部が欠損する。表面基部は自然面を残す。表裏面とも刃部付近には磨耗痕が残る。						

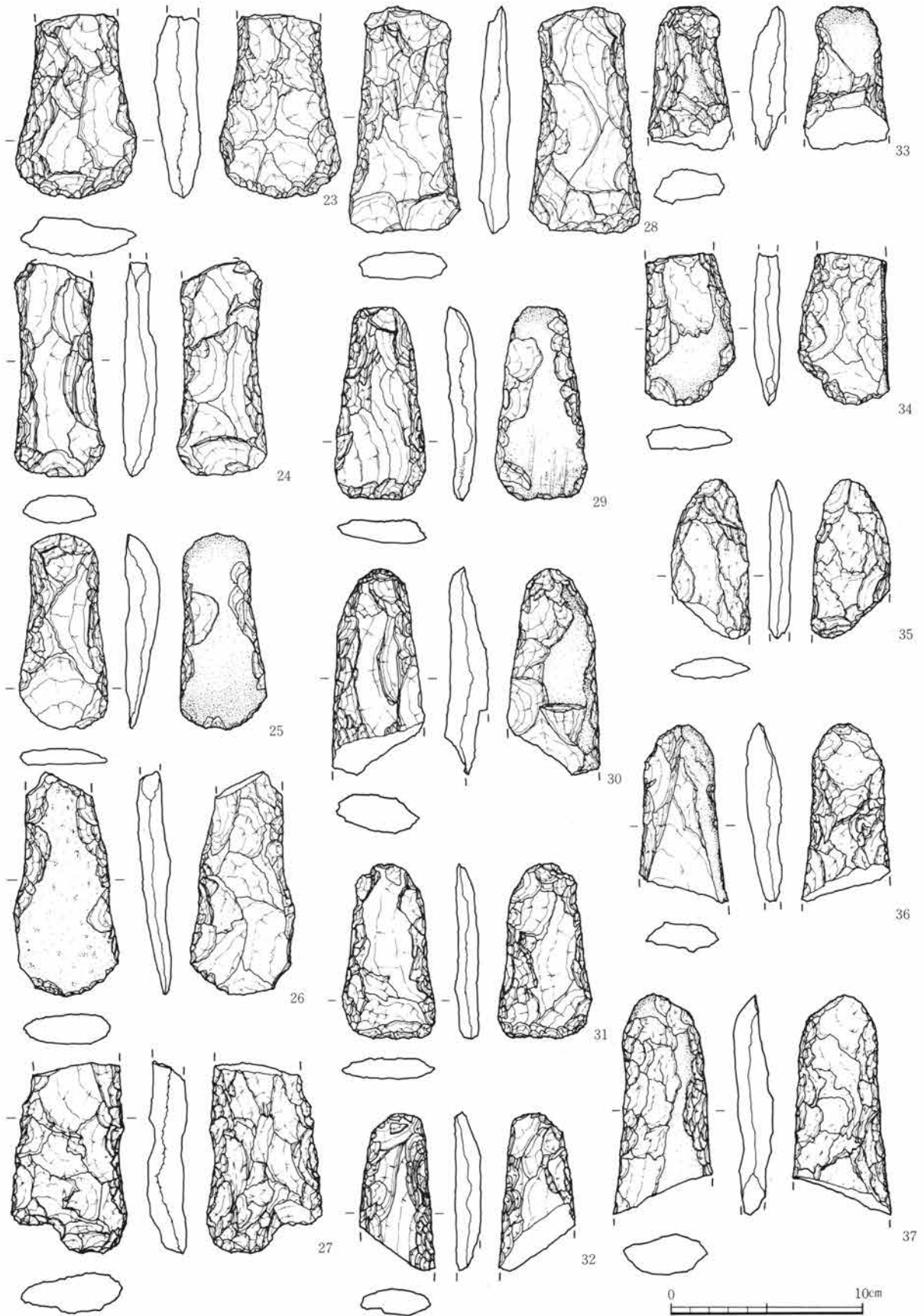


Fig. 114 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

13区土器だまり出土遺物一覧表(石器)

挿図番号	石器の種類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	出土位置
Fig. 115-43	打製石斧	(6.6)	4.2	1.6	39.6	砂岩	13区A-19Grid 3層
PL. 49-3	小型の石器である。基部は欠損する。表裏面とも横方向からの剥離である。						
Fig. 115-44	打製石斧	(11.2)	4.8	2.0	136.3	砂岩	13区B-12Grid III-3層
PL. 49-3	短冊形を呈す。基部を欠損する。裏面には自然面が残る。表裏面とも横方向からの剥離後、細部調整を行なっている。						
Fig. 115-45	打製石斧	(7.8)	4.6	1.9	83.9	灰色安山岩	13区B-12Grid 3層
PL. 49-3	短冊形と推定される。刃部・基部ともに欠損する。両面とも横方向からの剥離後、細部調整を行なっている。						
Fig. 115-46	打製石斧	12.5	4.8	2.8	194.4	灰色安山岩	13区B-12Grid III-3層
PL. 49-3	短冊形に入る。裏面には自然面が残る。この自然面には縦方向の使用痕が残る。						
Fig. 115-47	打製石斧	(12.5)	5.7	3.9	400.4	輝緑岩	13区B-12Grid
PL. 49-3	刃部・基部ともに欠損している。基部は欠損後、調整しているようにもとらえられる。当遺跡内出土例の中では太い。						
Fig. 115-48	打製石斧	(11.4)	4.7	2.3	163.4	輝緑岩	13区B-15Grid III-3層
PL. 49-3	短冊形を呈す。刃部は使用時に刃の一部が剥れた様相を呈す。裏面には自然面が残る。						
Fig. 115-49	打製石斧	(13.6)	4.4	1.7	125.0	黒色頁岩	13区B-12Grid III-3層
PL. 49-3	短冊形を呈す。刃部は一部欠損する。表面基部には自然面が一部残る。						
Fig. 115-50	打製石斧	10.3	4.1	1.3	61.6	黒色頁岩	13区C-8Grid 3層
PL. 49-3	刃部は使用時に剥れ、その後に再度刃部を付けて使用したものと思われる。						
Fig. 115-51	打製石斧	8.8	4.5	1.5	65.8	黒色頁岩	13区C-8Grid 3層
PL. 49-3	裏面には自然面が多く残っている。表面は横方向から剥離を行なった後、表裏面に細かい調整を行なっている。						
Fig. 115-52	打製石斧	(9.2)	2.9	1.2	40.1	黒色頁岩	13区C-8Grid 3層
PL. 49-3	細身の石器である。基部を欠損する。裏面には自然面が一部残る。刃部は潰れている。						
Fig. 116-53	打製石斧	10.2	4.3	1.7	91.1	黒色頁岩	13区C-8・9Grid III-3層
PL. 49-4	短冊形を呈す。表面は自然面を残す。裏面は横方向からの剥離と基部は縦方向からの剥離である。刃部は潰れている。						
Fig. 116-54	打製石斧	12.6	4.5	1.8	116.0	黒色頁岩	13区C-8・9Grid III-3層
PL. 49-4	撥形を呈す。刃部付近は縦方向、他は横方向からの剥離後、細部調整を行なっている。刃部には磨耗痕がある。						
Fig. 116-55	打製石斧	15.0	5.4	1.9	179.1	黒色頁岩	13区C-9Grid III-3層
PL. 49-4	表面基部は一部に自然面を残す。刃部は丸味をもつ。各辺は細かい調整を行なっている。						
Fig. 116-56	打製石斧	10.0	3.8	1.6	80.1	灰色安山岩	13区C-9・10Grid 3層
PL. 49-4	短冊形を呈す。表面基部付近は自然面を残す。刃部は使用による磨り減りがみられる。						

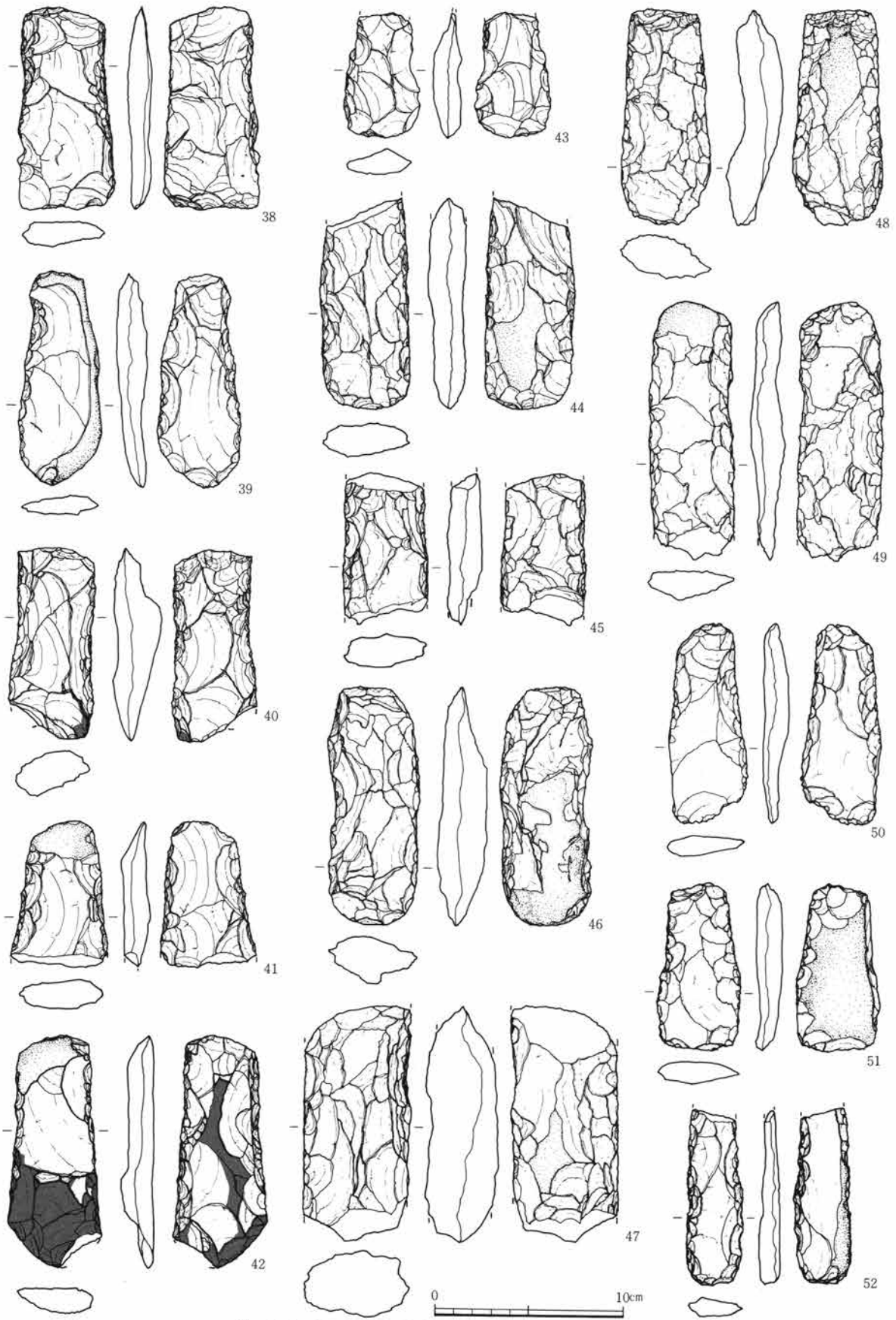


Fig. 115 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

第3章 各 説

13区土器だまり出土遺物一覧表（石器）

挿図番号	石器の種類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	出土位置
図版番号	説明						
Fig. 116-57	打製石斧	(7.8)	4.3	1.1	42.2	黒色頁岩	13区D・E-8Grid III-3層
PL. 49-4	中央部分から刃部にかけて欠損する。横方向からの剥離後、細かく各辺を調整している。						
Fig. 116-58	打製石斧	(8.5)	4.1	1.3	59.5	黒色頁岩	13区C-9・10Grid III-3層
PL. 49-4	短冊形を呈す。基部付近は欠損する。薄い石器であり、刃部は使用時の磨耗痕がある。						
Fig. 116-59	打製石斧	(9.8)	4.6	1.5	91.4	黒色頁岩	13区C-10Grid III-3層
PL. 49-4	短冊形を呈す。基部は欠損する。表面には一部自然面が残る。表裏面とも横方向から剥離を行なっている。						
Fig. 116-60	打製石斧	12.8	5.1	1.8	142.1	輝石安山岩	13区C-10・11Grid 3層
PL. 49-4	短冊形を呈す。刃部は使用時に潰れたり、欠損した後に細部調整を加えて使用したことがうかがえる。						
Fig. 116-61	打製石斧	11.2	4.8	1.6	96.6	黒色頁岩	13区D-9Grid 3層
PL. 49-4	撥形を呈す。表面には自然面が残る。刃部は僅かに丸味をもつ。						
Fig. 116-62	打製石斧	12.3	4.5	1.7	116.9	黒色頁岩？	13区D-11Grid III-3層
PL. 49-4	表面に自然面を残す。刃部は縦方向からの剥離により薄く仕上げている。刃縁部は丸味をもつ。						
Fig. 116-63	打製石斧	(8.5)	4.1	2.1	83.5	黒色頁岩	13区E-8Grid 3層
PL. 49-4	中央部分から刃部にかけて欠損する。表面基部付近には自然面が残る。						
Fig. 116-64	打製石斧	10.4	4.0	1.5	73.9	黒色頁岩	13区E-8Grid III-3層
PL. 49-4	短冊形を呈す。表面基部に自然面が残る。刃部は表裏両面に磨耗痕がある。						
Fig. 116-65	打製石斧	(12.3)	4.8	2.4	155.4	輝石安山岩	13区E-8Grid 3層
PL. 49-4	刃部は欠損している。裏面は自然面が残る。表裏面とも横方向から剥離を行なっている。						
Fig. 116-66	打製石斧	(9.4)	5.5	1.6	133.9	安山岩	13区E-8Grid 3層
PL. 49-4	基部は欠損している。表面は自然面が広く残る扁平な石器である。刃部は表裏面とも磨耗している。						
Fig. 116-67	打製石斧	8.6	5.0	1.7	69.0	黒色頁岩	13区E-8・9Grid 3層
PL. 49-4	基部は欠損している。表面刃部に自然面が一部残る。側辺部分は裏面に多くの細かい調整痕が残る。						
Fig. 117-68	打製石斧	13.0	4.7	2.0	133.4	黒色頁岩	13区E-8・9Grid III-3層
PL. 50-1	短冊形を呈す。刃部は丸味をもつ。裏面には自然面を残す。刃部は刃縁部に向い薄く調整を行なっている。						
Fig. 117-69	打製石斧	10.8	4.3	1.5	61.9	黒色頁岩	13区F-8Grid 3層
PL. 50-1	撥形を呈す。刃部は使用時に割れたものと思われる。						
Fig. 117-70	打製石斧	13.8	5.0	2.5	178.1	輝石安山岩	13区F-8Grid 3層
PL. 50-1	撥形に入るものとする。刃部は丸味をもつ。裏面には自然面が多く、刃部付近には使用痕が残る。						

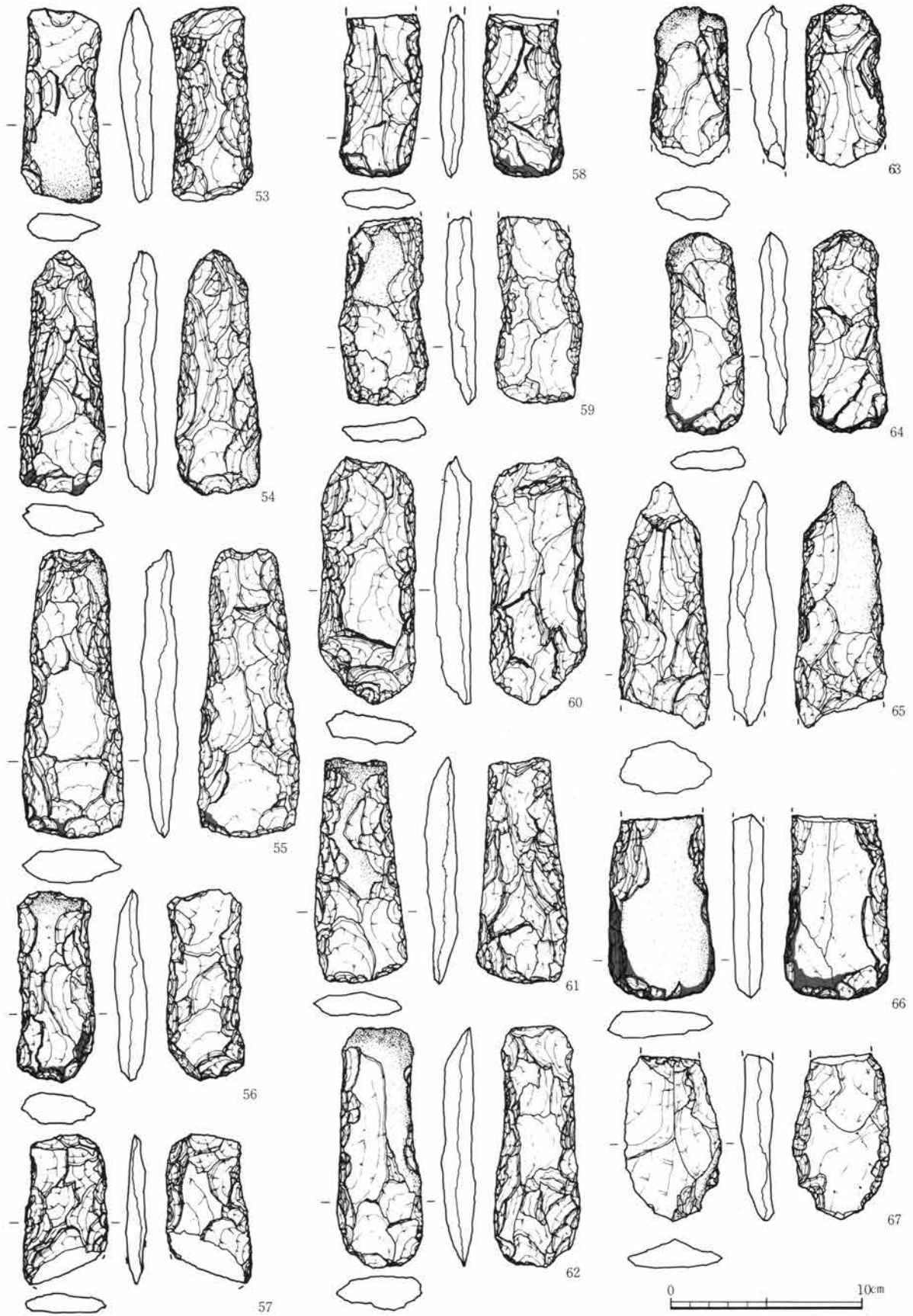


Fig. 116 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

13・27区土器だまり出土遺物一覧表（石器）

挿図番号	石器の種類	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石質	出土位置
図版番号	説 明						
Fig. 117-71	打製石斧	13.5	4.5	2.1	157.0	輝緑岩	13区F-15Grid 3層
PL. 50-1	表面には自然面が残る。刃部付近で薄く、刃部は斜めである。中央付近には僅かであるが抉り痕が残っている。						
Fig. 117-72	打製石斧	10.0	4.0	1.6	68.7	黒色頁岩	13区H-10Grid 3層
PL. 50-1	短冊形を呈す。刃部は丸味をもつ。刃端部は表裏面とも磨耗痕がのこる。						
Fig. 117-73	打製石斧	(12.8)	5.5	2.5	211.1	黒色頁岩	13区B-13Grid 3層
PL. 50-1	側縁部は一方は平坦であり、他方は細かい剥離を行なっている。刃部は縦方向から剥離調整を行なっている。						
Fig. 117-74	打製石斧	(8.7)	5.6	1.9	121.1	黒色頁岩	13区D・E-8 Grid 3層
PL. 50-1	中間部分より基部を欠損する。刃部は丸味をもち、刃部から側縁部にかけて細かい調整を行なっている。						
Fig. 117-75	打製石斧	16.0	5.6	1.9	175.1	黒色頁岩	13区D-7 Grid III-3層
PL. 50-1	撥形になるものと推定される。刃部を大きく欠損するが、丸味をもつものと思われる。側縁部は細かい調整痕がある。						
Fig. 117-76	棒状石斧	11.8	3.0	2.1	90.9	黒色片岩	13区B・C-11・12Grid III-3層
PL. 50-1	両端部分は丸味をもつが、自然面か人工によるものか不明。						
Fig. 117-77	打製石斧	14.5	3.8	1.7	146.7	黒色片岩	13区E-9 Grid III-3層
PL. 50-1	短冊形を呈す。Fig.117-76と同じ石材であるが、製作方法は、他の石材と同様な剥離方法をとっている。						
Fig. 117-78	打製石斧	(12.0)	3.9	2.3	176.2	黒色頁岩	13区G-9 Grid III-3層
PL. 50-1	自然面を三面に残している。刃部は欠損している。基端部は細かい剥離であり、叩いた痕とも考えられる。						
Fig. 117-79	打製石斧	12.2	4.1	1.7	123.5	雲母石英片岩	27区G-1 Grid III-3層
PL. 50-1	刃部・基部が欠損する。側縁部分は不明瞭ではあるが細かい剥離を行なっている。						
Fig. 118-80	石 鎌	3.1	2.5	0.8	5.7	チャート	13区C-9・10Grid III-3層
PL. 50-2	基部は直線的であり無茎である。						
Fig. 118-81	スクレイパー	(5.9)	3.3	0.7	15.9	黒色頁岩	13区A-19Grid 3層
PL. 50-2	一部を欠損する。側縁部分に細かい剥離が入る。						
Fig. 118-82	ペンダント	(3.9)	(3.1)	(1.6)	14.3	翡翠	13区
PL. 50-2	硬玉製大珠に属すると思われる。端部の破片である。						
Fig. 118-83	打製石斧	(3.8)	1.8	0.6	5.9	黒色頁岩	13区D~H-7~10Grid III-3層
PL. 50-2	短冊形を呈す。極めて小型である。						
Fig. 118-84	打製石斧	9.6	6.0	3.0	135.8	黒色頁岩	13区B-13Grid III-3層
PL. 50-2	刃部は使用時に欠損したものと考えられ、刃部は再度作り直し使用している。						

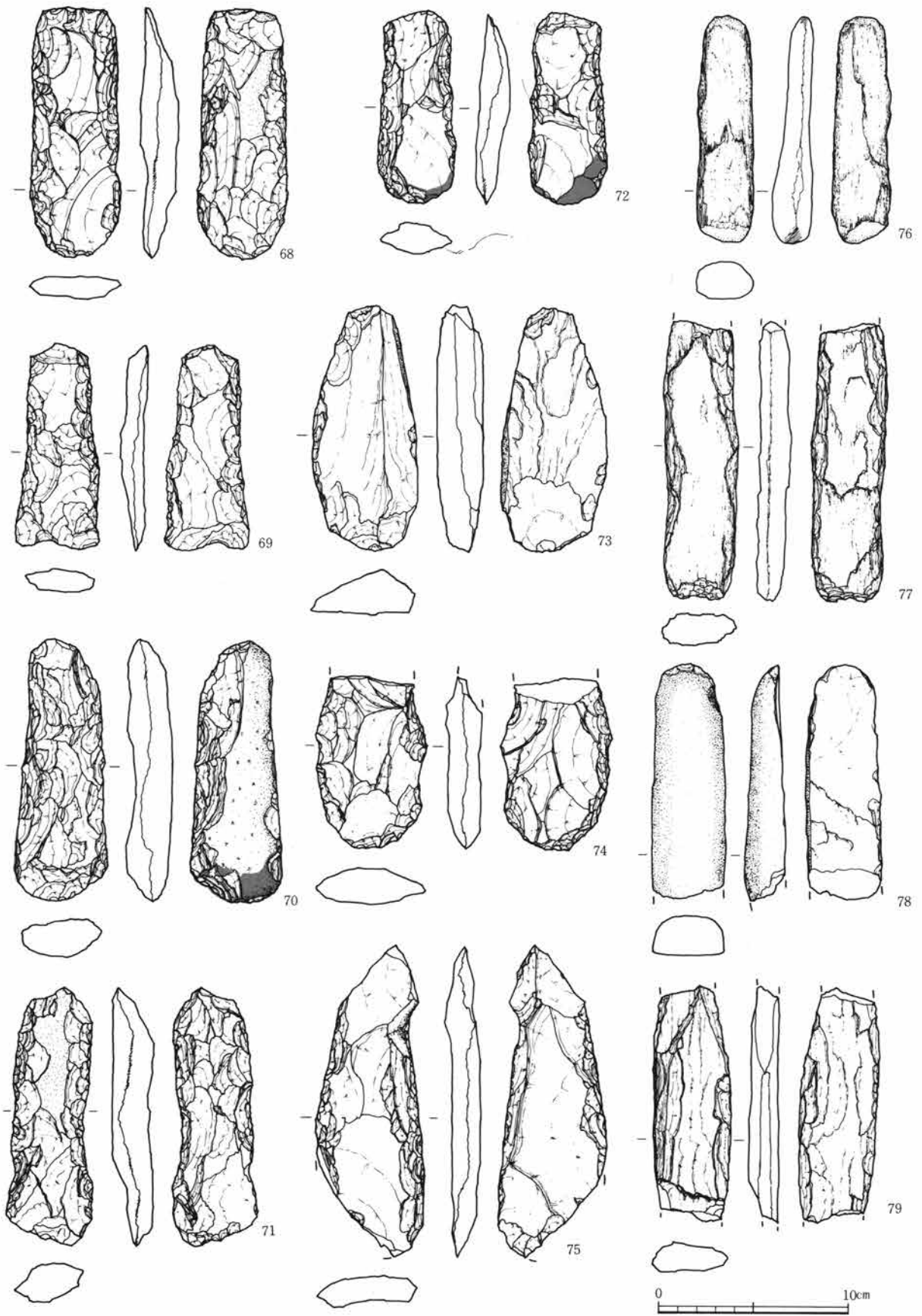


Fig. 117 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

13区土器だまり出土遺物一覧表 (石器)

挿図番号	石器の種類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	出土位置
Fig. 118-85	剥片石器	6.7	4.9	1.3	36.0	黒色頁岩	13区B・C-9Grid
PL. 50-2	剥片の側縁部分に細かい刃部をつけている。全体の形状は明らかでない。						
Fig. 118-86	剥片石器	11.9	4.1	1.2	46.1	黒色頁岩	13区B・C-9Grid
PL. 50-2	一部に自然面が残る。先端は尖っている。側縁部分は表裏両面より細かい調整を行なっている。						
Fig. 118-87	剥片石器	7.0	3.3	0.8	17.3	黒色頁岩	13区B・C-8Grid
PL. 50-2	表面には一部自然面が残る。側縁部分は細かい剥離が入る。						
Fig. 118-88	スグレイバー	7.4	5.1	1.2	44.8	黒色頁岩	13区B・C-11・12Grid
PL. 50-2	一部に自然面が残る。細かい剥離は表面からのみ行なっている。						
Fig. 118-89	剥片石器	5.7	4.7	1.0	22.3	黒色頁岩	13区C-9・10Grid
PL. 50-2	側縁部分の一部に刃部と思われる部分がある。						
Fig. 118-90	剥片石器	4.6	5.4	1.0	26.6	黒色頁岩	13区D-8Grid
PL. 50-2	表面には自然面が残る。表面と裏面に一辺づつ片面に細部調整を行なっている。						
Fig. 118-91	打製石斧	(6.5)	8.4	1.9	89.0	黒色頁岩	13区D-13Grid
PL. 50-2	刃部付近が残存する。刃部は表裏両面から細かい調整を行なっている。刃部中央付近は刃が潰れている。						
Fig. 118-92	剥片石器	7.1	4.7	1.6	49.8	黒色頁岩	13区D-7Grid
PL. 50-2	剥片を利用したものと考えられる。自然面を一部のこし、両側縁部に細かい使用痕が残る。						
Fig. 118-93	打製石斧	5.2	4.6	2.1	75.1	黒色頁岩	13区E-9Grid
PL. 50-2	打製石斧の刃部付近の破片と考えられる。表裏面とも使用時にできた磨耗痕がある。						
Fig. 118-94	剥片石器	5.0	6.0	1.0	37.4	黒色頁岩	13区F-15Grid
PL. 50-2	剥片の一辺に表面を主に刃部を細かく付けてある。一部に自然面が残る。						
Fig. 118-95	剥片石器	7.4	4.5	0.9	23.7	黒色頁岩	13区G-10Grid
PL. 50-2	剥片を利用した石器であり、一辺に両面から刃部を細かく調整して付けてある。						
Fig. 118-96	石 匙	9.9	3.4	0.9	35.6	黒色頁岩	13区
PL. 50-2	表裏面とも横方向からの剥離後、細かい調整により刃部をつけている。						
Fig. 118-97	石 匙	8.8	3.9	1.1	3.0	黒色頁岩	13区D-9Grid
PL. 50-2	先端部分を欠損する。横方向からの剥離後、一辺に刃部をつけている。						
Fig. 119-98	磨製石斧	11.4	5.1	2.3	227.1	変輝緑岩	13区A-19Grid
PL. 50-3	刃部を欠損する。基端部分は叩いた様相を呈す。石器の各面は風化作用をうけている。						

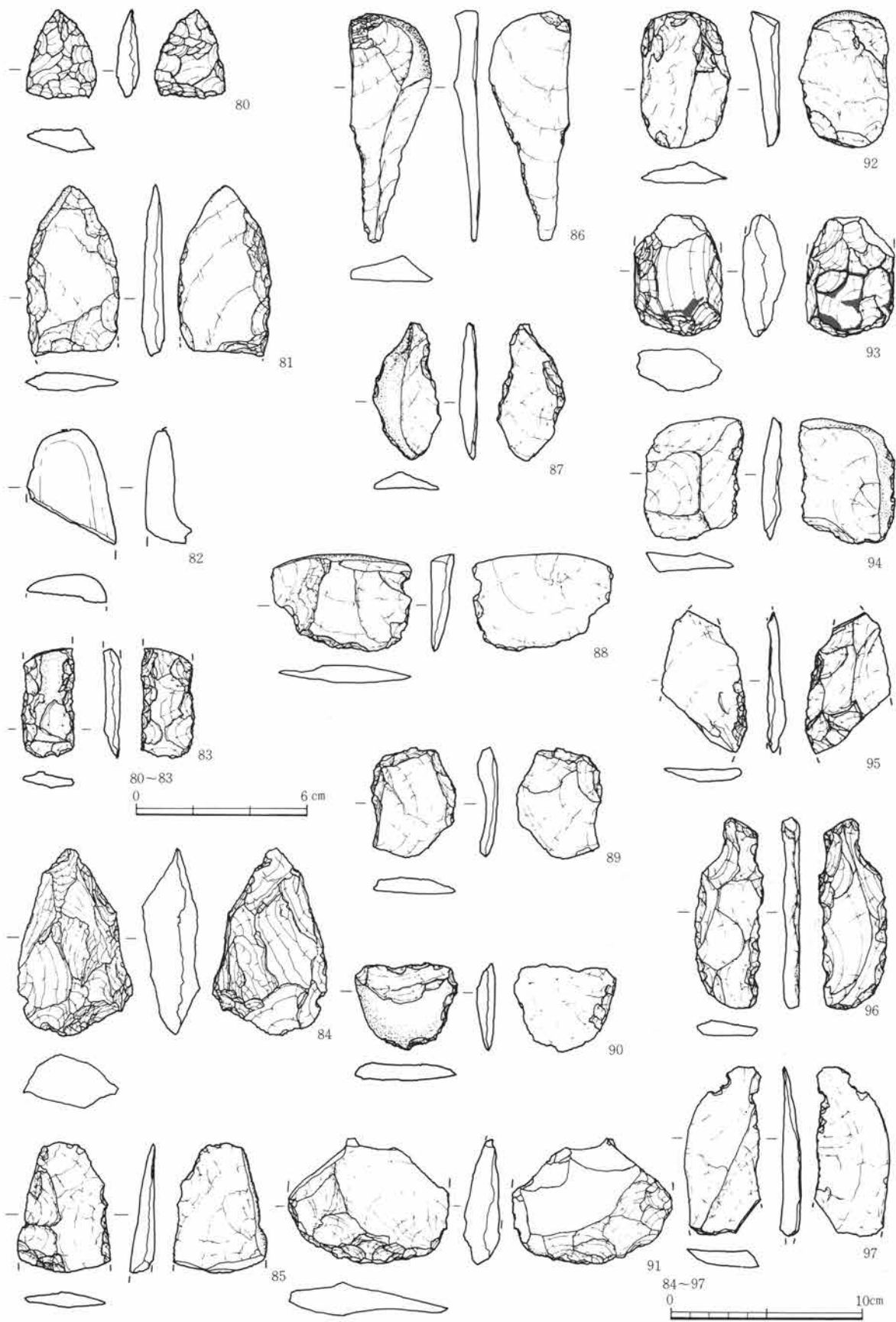


Fig.118 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

第3章 各 説

12・13・27区土器だまり出土遺物一覧表（石器）

挿図番号	石器の種類	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石 質	出 土 位 置
図版番号	説 明						
Fig. 119-99	定角式磨製石斧	(10.5)	5.8	3.7	388.6	輝 緑 岩	13区B-15Grid 3層
PL. 50-3	刃部を欠損する。各面を精密に磨いている。断面は隅丸方形を呈す。基端部分は叩いた様相を呈す。						
Fig. 119-100	磨 製 石 斧	9.2	5.6	2.9	242.3	変 輝 緑 岩	13区B-12Grid 3層
PL. 50-3	側縁部分と基端部分の一部が欠損する。表裏面を精密に磨いている。側縁部分と基端部分は叩いた様相を呈す。						
Fig. 119-101	磨 製 石 斧	(6.3)	3.3	1.3	45.7	変 質 蛇 紋 岩	13区D-9Grid III-3層
PL. 50-3	小型の定角式になるものと考えられる。各面を精密に磨いている。刃部は欠損している。						
Fig. 119-102	磨 製 石 斧	11.9	5.4	3.7	302.2	変 玄 武 岩	13区E-8Grid 3層
PL. 50-3	表裏両面は刃部の方向から力が加わり剥れている。刃部は僅かに残っており、磨耗している。基端部分は剥れている。						
Fig. 119-103	凹 石	(10.1)	8.4	5.1	592.2	輝 石 安 山 岩	12区 表採
PL. 50-3	楕円形を呈す。表裏両面に凹がある。周縁部分には僅かな凹凸がある。						
Fig. 119-104	凹 石	7.1	8.1	2.2	197.2	輝 石 安 山 岩	13区A・B-13・14Grid III-3層
PL. 50-3	半分を欠損する。表面は風化しており明瞭ではないが凹が両面に観察できる。						
Fig. 119-105	磨 石	9.5	6.9	4.5	417.2	輝 石 安 山 岩	13区A・B-14・15Grid
PL. 50-3	ほぼ楕円形を呈す。周縁部分には叩いた様相を呈する痕があるが、表裏面では不明瞭である。裏面に磨り痕がある。						
Fig. 119-106	凹 石	13.7	8.0	4.0	626.1	石 英 閃 緑 岩	13区B・C-10Grid 3層
PL. 50-3	扁平で楕円形を呈す。表裏面とも凹がある。周縁部分にも叩いた痕がある。						
Fig. 120-107	凹 石	10.9	7.4	5.6	497.3	輝 石 安 山 岩	13区B-12Grid
PL. 50-4	表裏面ともに凹がある。側縁部分の一部にも叩いた痕がある。						
Fig. 120-108	磨 石	7.9	6.5	4.1	345.9	輝 石 安 山 岩	13区B-13Grid 3層
PL. 50-4	表裏面とも僅かな凹をもつ。周縁部分には叩いた様相と、磨ったと思われる面をなす部分があるが擦痕は不明瞭。						
Fig. 120-109	磨 石	(12.0)	7.9	4.4	639.8	輝 石 安 山 岩	13区B・C-10Grid 2層
PL. 50-4	表裏面の各2カ所に凹痕がある。凹痕の周辺と、側縁部分は磨き痕、基端部分に当る部分は叩き痕を呈す。						
Fig. 120-110	凹 石	14.7	8.3	3.7	689.0	輝 石 安 山 岩	13区C-8Grid III-3層
PL. 50-4	表裏両面の各2カ所に僅かに凹が認められる。側縁部分中央部には両側とも叩き痕がある。						
Fig. 120-111	凹 石	8.8	6.1	2.3	160.4	変 質 安 山 岩	13区D・E-7・8Grid 3層
PL. 50-4	裏面は2カ所で一部分が欠損している。表裏面とも僅かに凹痕がある。小型で扁平である。						
Fig. 120-112	磨 石	15.5	8.9	6.1	910.3	デイスait質 凝 灰 岩	27区C・D-2・3Grid 3層
PL. 50-4	両側縁部を磨っており、狭い面積であるが平滑化している。						

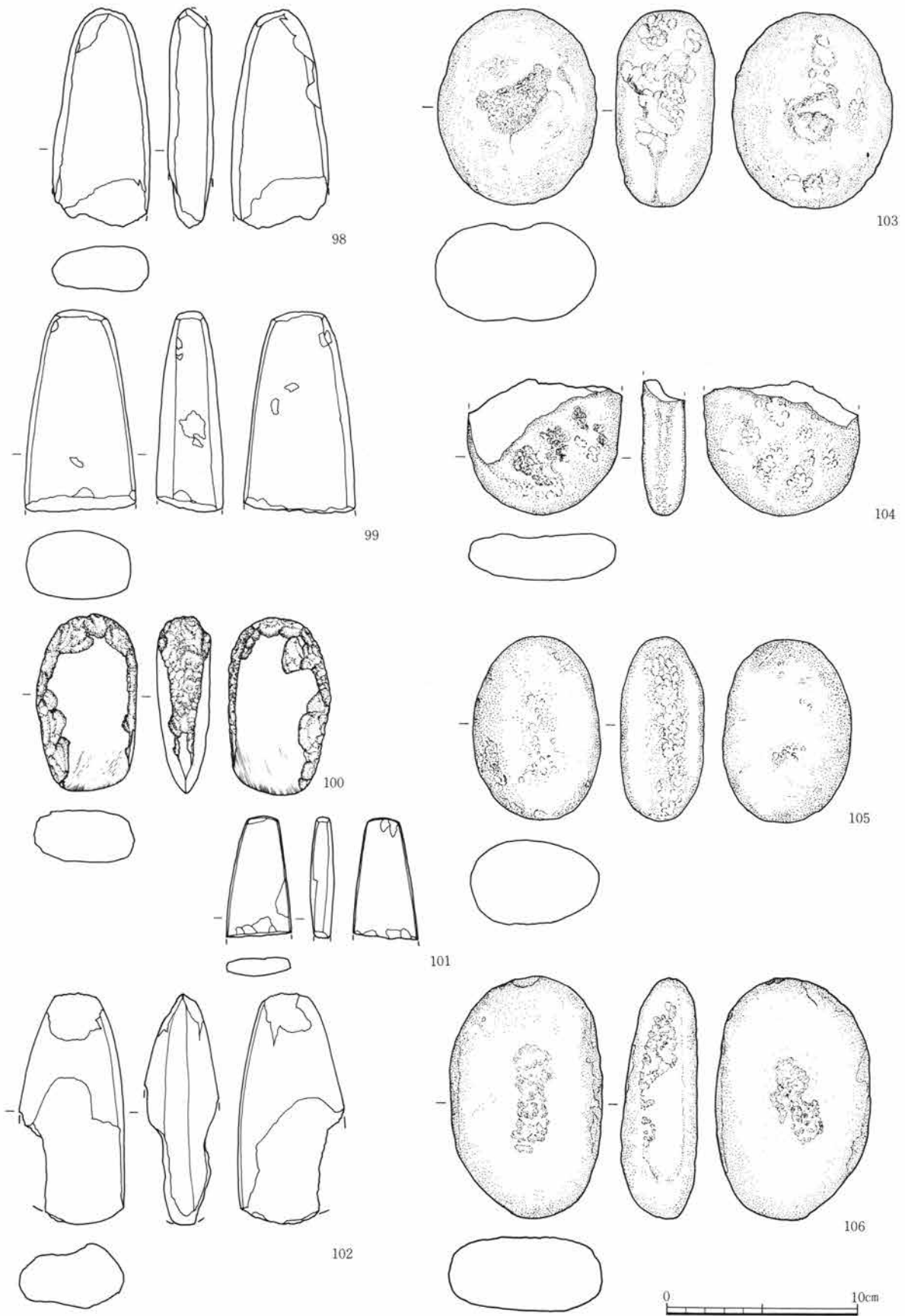


Fig.119 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

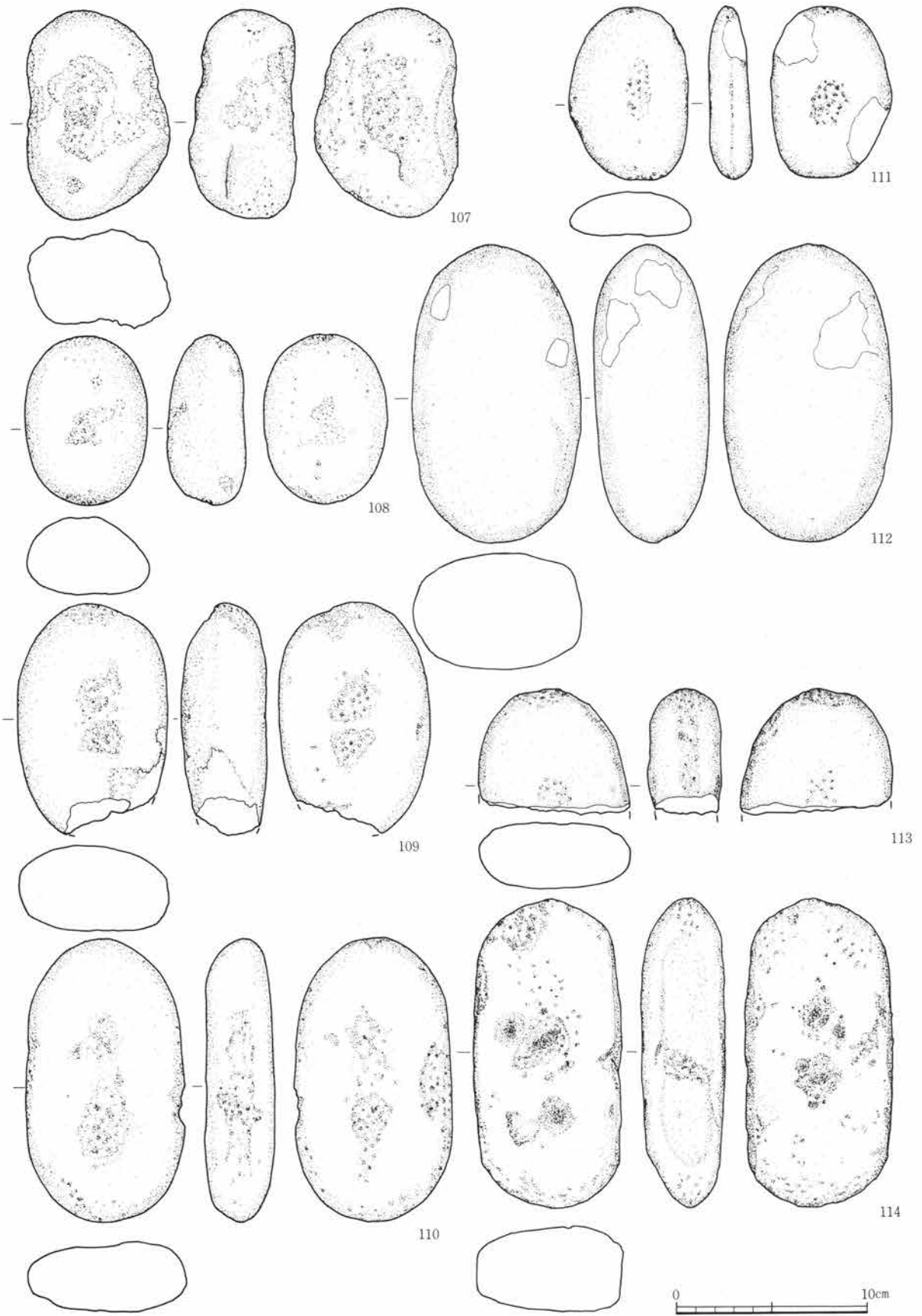


Fig.120 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

13区土器だまり出土遺物一覧表(石器)

挿図番号	石器の種類	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石質	出土位置
図版番号	説明						
Fig. 120-113	磨石	(6.5)	5.8	3.8	291.6	石英閃緑岩	13区E-8 Grid 3層
PL. 50-4	半分が欠損している。両側縁部分を磨っており狭い範囲であるが平滑面がある。基端部分は叩いて欠損している。						
Fig. 120-114	磨石	15.8	7.8	4.4	804.8	輝石安山岩	13区F-8 Grid 3層
PL. 50-4	表裏面とも凹部分は明瞭である。両側縁部分は磨り痕が明瞭である。						
Fig. 121-115	叩き石	11.8	10.4	5.9	1,060.5	輝石安山岩	13区F-8 Grid
PL. 51-1	ほぼ円形を呈す。表裏面と側縁部分に僅かに叩いた様相がある。						
Fig. 121-116	磨石	10.5	8.1	4.3	515.5	輝石安山岩	13区G-10 Grid 3層
PL. 51-1	端部の一部を欠損する。表裏面とも僅かに凹をもつ。表裏面および側縁部分は広い面で磨っている様相を呈す。						
Fig. 121-117	叩き石	12.5	6.3	3.4	397.2	輝石安山岩	13区12ラインより北
PL. 51-1	表裏面、側縁部分は全体に僅かであるが叩いた凹凸がある。						
Fig. 121-118	凹石	9.7	7.3	3.4	389.4	輝石安山岩	13区12ラインより北
PL. 51-1	表裏面とも中央部に1カ所凹がある。周縁部分は僅かに叩いた様相がある。						
Fig. 121-119	磨石	7.4	6.4	6.2	499.5	輝石安山岩	13区12ラインより北
PL. 51-1	不定形な石器であるが底面周縁部分が磨り減っている。						
Fig. 121-120	凹石	12.2	8.0	5.5	813.5	輝石安山岩	13区12ラインより北
PL. 51-1	表裏面とも僅かであるが凹が観察できる。						
Fig. 121-121	凹石	13.1	9.9	5.2	1,070.9	石英閃緑岩	13区12ラインより北
PL. 51-1	楕円形を呈す。表裏面には僅かな凹がある。側縁部分は叩いた状況を呈している部分や磨いた状況を呈する所がある。						
Fig. 121-122	磨石	5.8	5.6	2.4	116.4	石英閃緑岩	13区12ラインより北
PL. 51-1	小型の扁平な丸い石であり、表裏面とも磨り扁平な状況でもある。						
Fig. 122-123	凹石	12.0	7.2	5.6	807.4	輝石安山岩	13区12ラインより北
PL. 51-2	表裏面に凹が認められる。周縁部分は僅かに磨っている。						
Fig. 122-124	凹石	15.4	8.4	3.9	771.1	輝石安山岩	13区12ラインより北
PL. 51-2	一部が欠損する。扁平で楕円形を呈す。表裏面には凹部分がある。側縁部分は叩いた痕と磨いた痕が残る。						
Fig. 122-125	凹石	13.6	9.5	3.6	621.5	輝石安山岩	13区 表採
PL. 51-2	表裏面に僅かな凹がある。石器全体に風化作用が働いており、他の様相はつかめない。						
Fig. 122-126	磨石	13.3	8.7	4.8	512.6	輝石安山岩	13区12ラインより北
PL. 51-2	表裏面には凹がある。側縁部分に細かく叩いた様相がある。						

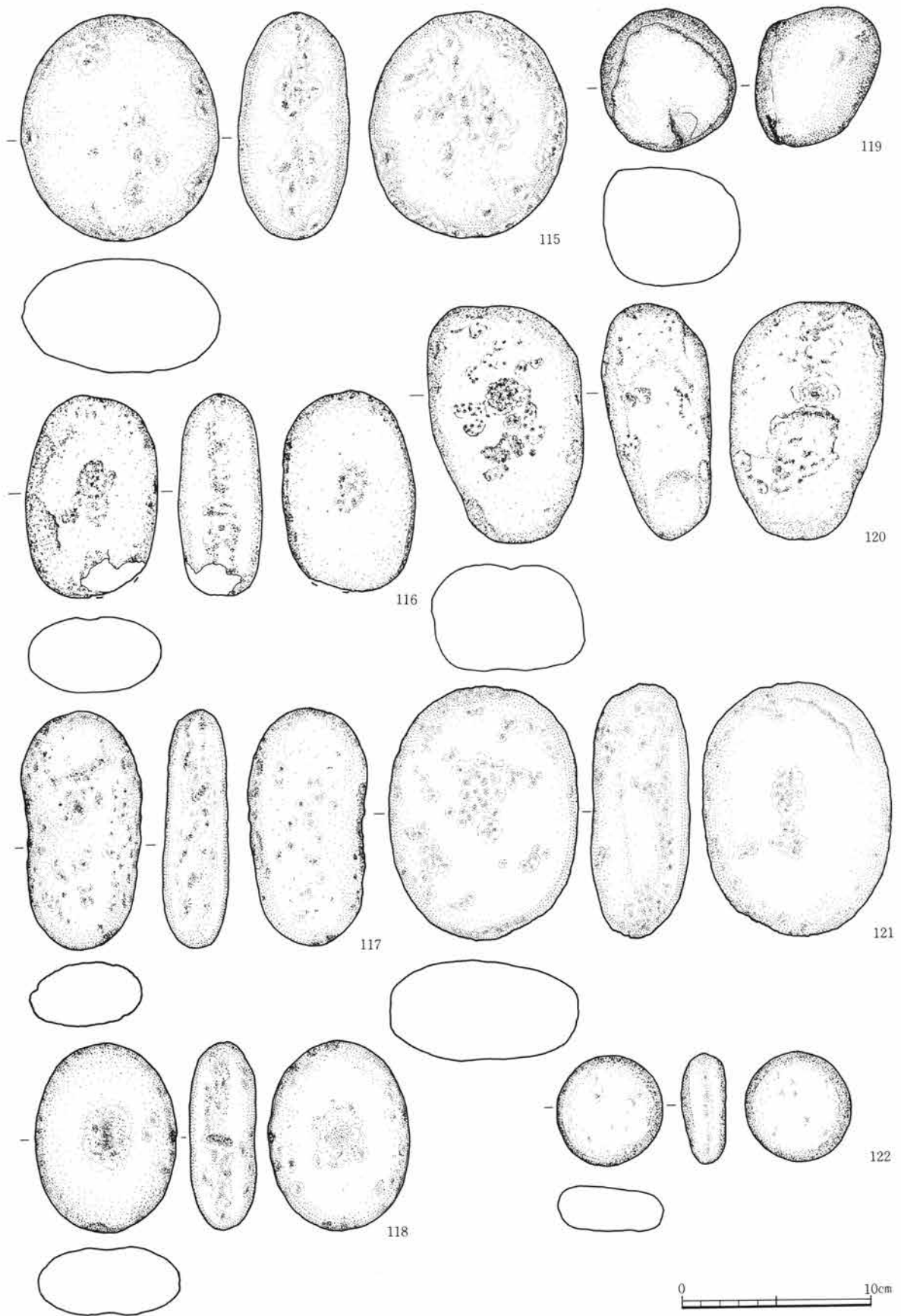


Fig. 121 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

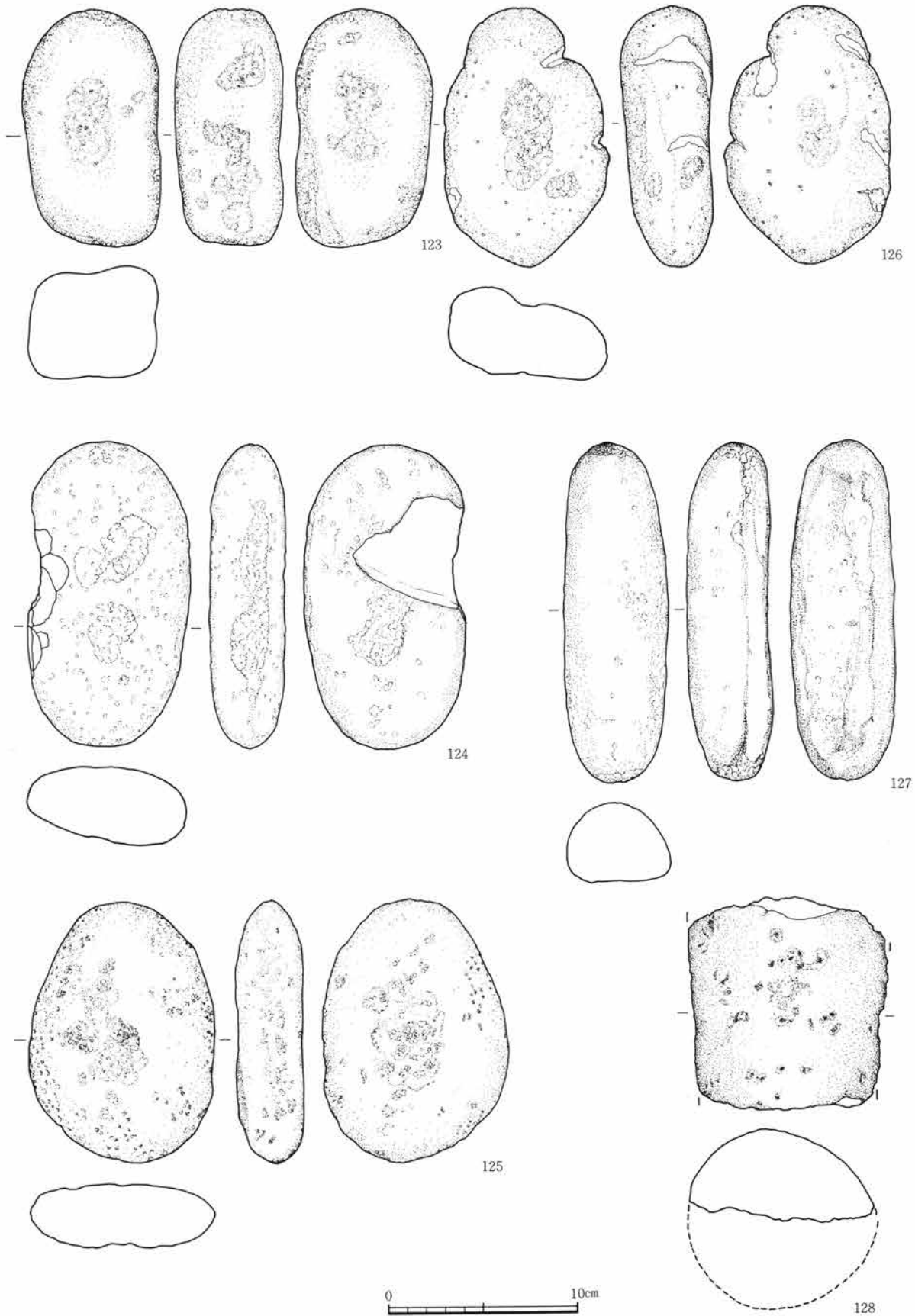


Fig. 122 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

第3章 各 説

13・27区土器だまり出土遺物一覧表(石器)

挿図番号	石器の種類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	出土位置
Fig. 122-127	磨石	17.5	5.4	4.4	651.5	輝石安山岩	27区C・D-2・3Grid 3層
PL. 51-2	両端部は僅かに潰れており、側縁部は磨ってある様相がある。僅かに白っぽく表面が変化しているところがある。						
Fig. 122-128	凹石	(11.0)	10.3	(4.7)	752.4	輝石安山岩	13区C-9Grid 3層
PL. 51-2	表面に1カ所凹が認められる。表面は丸味をもち、全体的に滑らかである。						
Fig. 123-129	石皿	(10.8)	21.5	(6.0)	780.1	輝石安山岩	13区12ラインより北
PL. 51-3	石皿の破片である。周縁部分が高くなる。底面は平滑である。						
Fig. 123-130	石皿	13.0	12.3	5.6	588.2	輝石安山岩	13区A・B-9・10Grid III-3層
PL. 51-4	小型の石皿である。底面は曲面である。周縁部分や外面底部には加工痕はない。						
Fig. 123-131	石核	16.2	9.5	7.1	988.3	黒色頁岩	13区E-8Grid 3層
PL. 51-5	使用した痕は無い。多方向からの剝離痕が認められる。一部に自然面がある。						
Fig. 123-132	石皿	38.5	21.3	12.0	8,260.0	輝石安山岩	13区C-11Grid 3層
PL. 51-6	底面は曲面状を呈し、細かい凹穴が多数ある。外面底部は全面に凹がある多孔石の分類範疇に入る。						
Fig. 123-133	石皿	(20.0)	(13.0)	(8.3)	3,180.0	輝石安山岩	13区A・B-10・11Grid III-3層
PL. 52-1	全体の約6分の1が残存している。内面底部は曲面をなす。外面底部は数個の凹穴がある。						
Fig. 123-134	石棒	(25.5)	10.5	9.8	3,560.0	緑色準片岩	13区C-9Grid 3層
PL. 52-2	基部側が欠損する。有頭形でくびれをもつが一部分が欠落する。有頭端部は磨り減っている。						
Fig. 124-135	多孔石	27.3	22.0	15.9	11,380.0	輝石安山岩	13区北西斜面 3層
PL. 52-3	表裏面とも凹穴を多数もつ。凹は浅い。両面とも比して平滑である。						
Fig. 124-136	多孔石	20.0	17.0	12.5	6,225.0	輝石安山岩	13区12ラインより北
PL. 52-4	表裏面とも凹穴を多数もつ。凹面は平滑な自然面を使用している。						
Fig. 124-137	多孔石	18.5	20.0	9.6	4,395.0	輝石安山岩	13区12ラインより北
PL. 52-5	表裏面とも凹穴を多数もつ。自然石に穴を穿った状況である。						
Fig. 124-138	台石	25.6	15.5	12.0	6,240.0	輝石安山岩	13区B-13Grid
PL. 52-6	台石として使用した様相であるが、叩いた痕はなく、裏面に磨いた様な細い線状の痕が僅かに観察できる。						

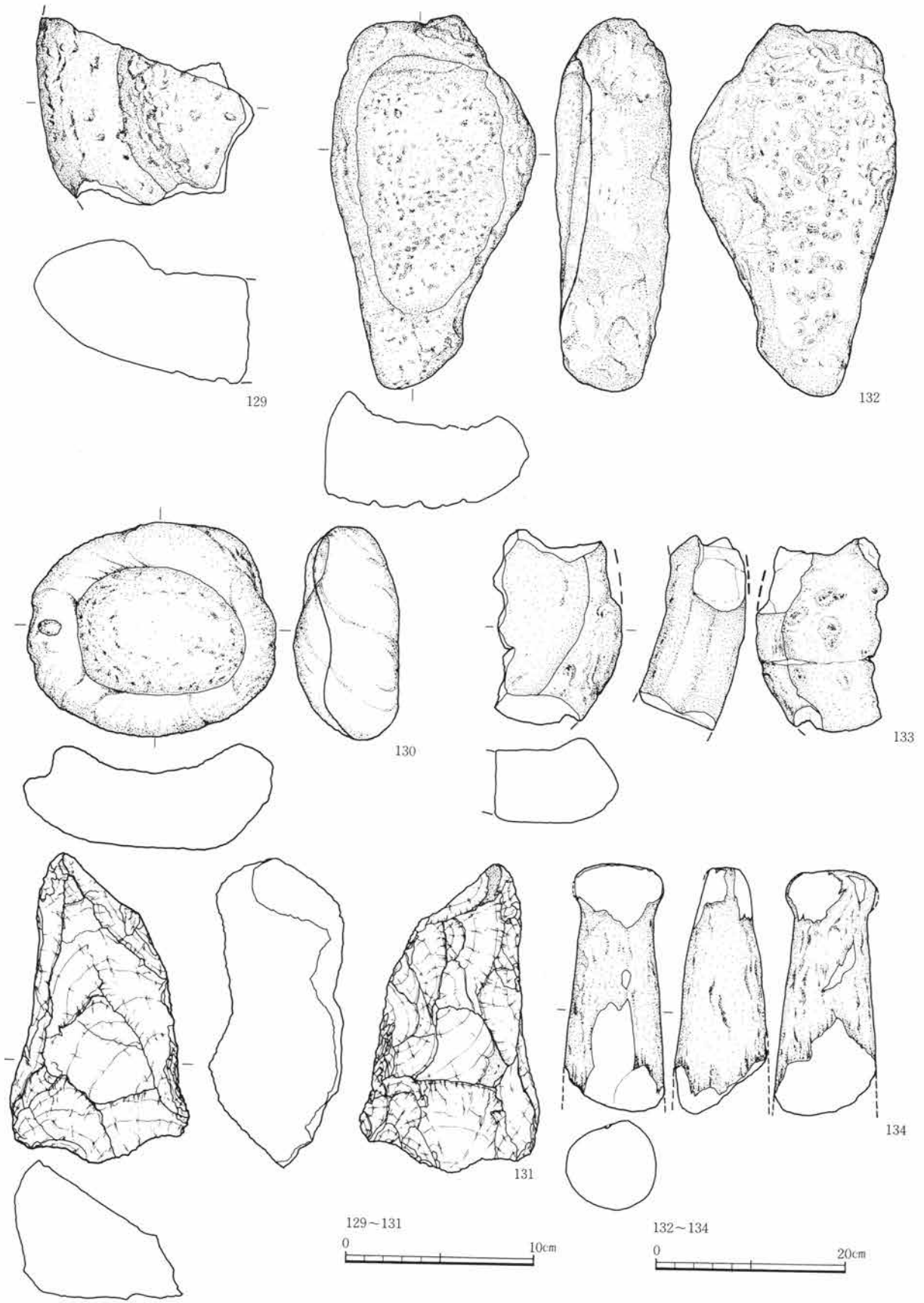


Fig. 123 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

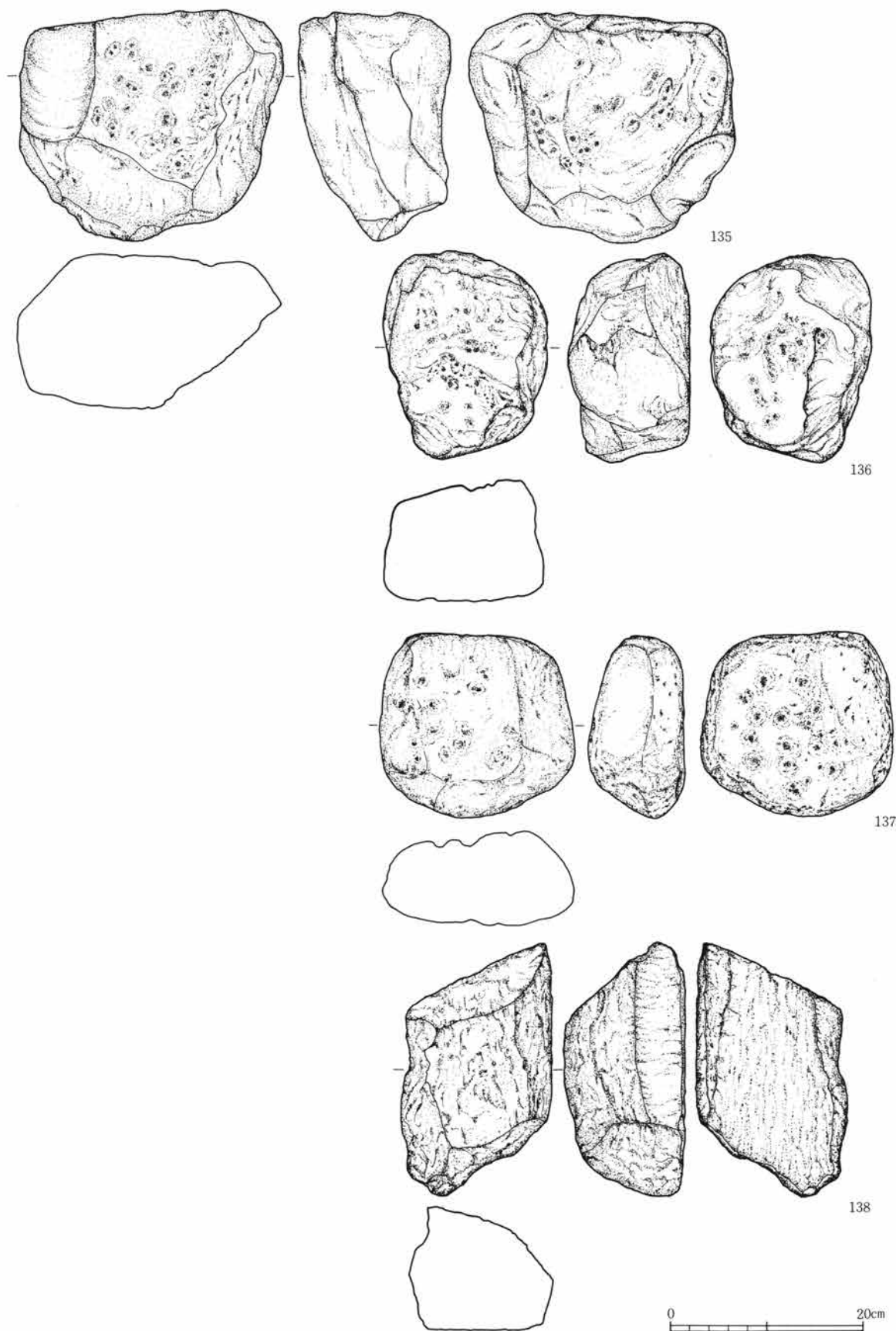


Fig.124 12・13・27区土器だまり出土遺物実測図

第2節 古墳時代

1号墳 (Fig. 125・126・127・128・129・130、PL. 53-1~5・54-1~8)

位置 上毛古墳綜覧旧駒寄村23号墳。清里・長久保遺跡北東隅に位置し、午王頭川右岸に近接している。西には近接し2号墳が位置している。1号墳と2号墳の境は前方後円墳の鞍部と思わせる様な形状をしているが周堀はない。陣場泥流の残丘を利用し、両古墳丘と墳丘等高線図から見た状況で円墳の判断をした。

墳丘と外部施設 陣場泥流の残丘上につくられた古墳で、調査時点では高さ約3m、直径約30m前後の墳丘を残し、比較的原形をよくとどめている。トレンチは東西南北の他周堀確認及び2号墳との通しを入れた。その結果、残丘の占める割合が比較的高く、墳丘は以外に小さいものであったことが判明し、自然残丘上につくられた古墳の特色をよく残していた。

墳丘四方に入れたトレンチの所見によると、墳丘は残丘上に堆積し、古墳構築時の地表を形成していた層以下2~3層を削って墳丘裾部を整形し、その上に約1mの盛土による築成の様子が確認できた。これらの残

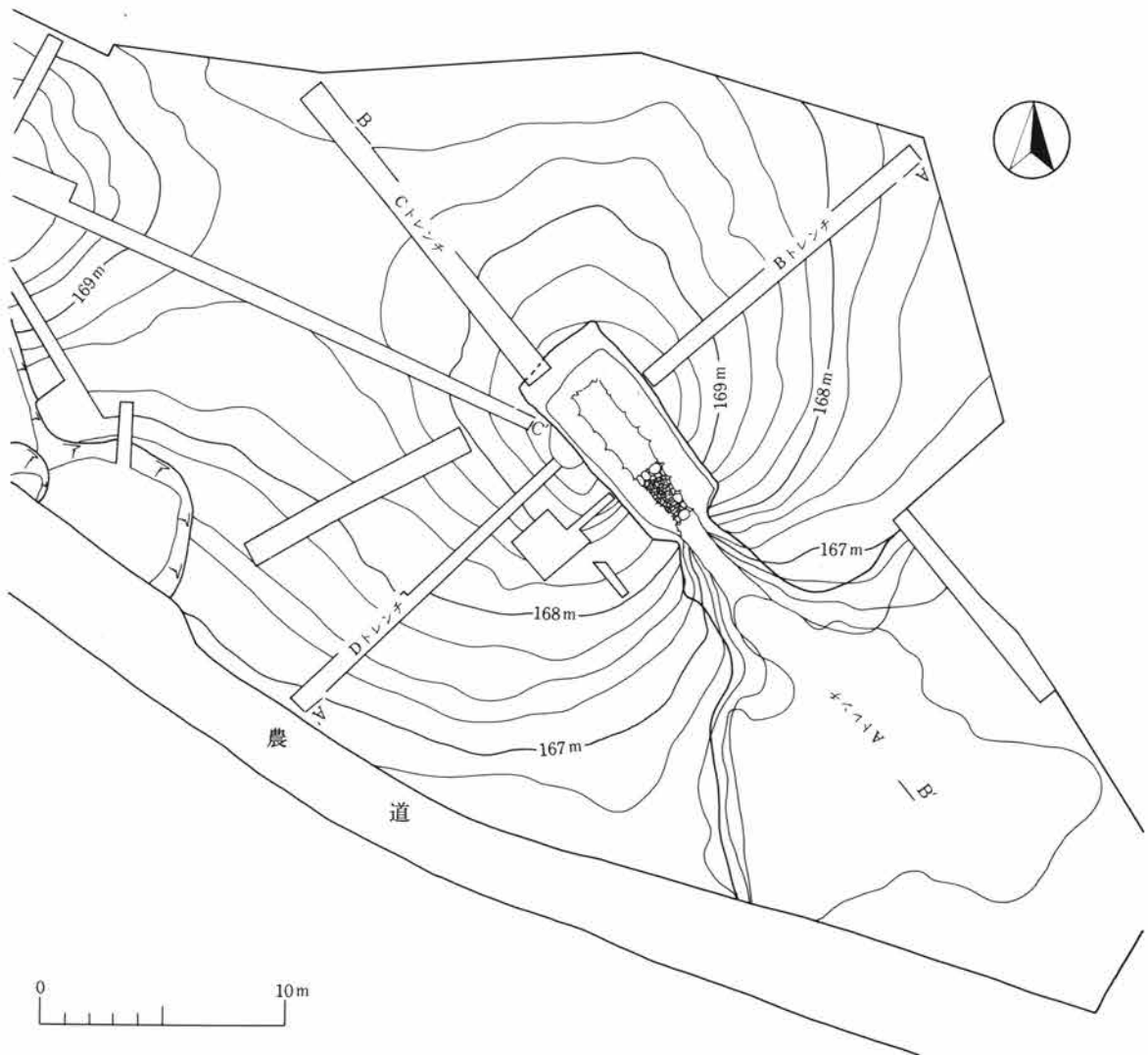


Fig. 125 1号墳墳丘等高線図

第3章 各 説

丘上に堆積した層序の中には、浅間C軽石を含む黒色土層や榛名山二ツ岳噴出のFA層が確認されていることより、当古墳がFA降下後に構築されていることが明らかである。各トレンチでの所見は次の通りである。

南西トレンチでは主体部の掘り込み部分より6.5m付近までFAが確認でき、FA層の切れる部分に葺石が約50cmにわたりFA層上にのる。盛土は主体部掘り込み部分より約4.5m付近で切れる。

北西トレンチでは主体部掘り込み部分より約3.5mまでFA層が確認できる。封土としての盛土は主体部掘り込み部分より約5mまで確認できる。この先1.5mは平坦部がありテラス状の遺構として考えられる。

北東トレンチでは主体部掘り込み部分より約4.5mまでFA層が確認できる。この直上の土層はFA層にC軽石等が混入する土層であるが、主体部掘り込み部分より約3.3m付近に葺石根石がある。またこの部分より約70cm斜めに削り出した約1mの平坦部をつくっている。この平坦部はテラス状の遺構と思われる。この葺石根石より墳頂部にかけては盛土が見られる。以上の土層堆積状況から封土として盛土が確認できた。盛土部分は直径約14m前後であり、現存する封土の高さは約1.1mである。墳丘裾部は整形されていると考えられるが計測することは困難である。

主体部の構造 主体部は自然石を使用した袖無型の横穴式石室である。天井石が玄室奥側に2石残っていた。玄室中央より前、羨道を含めて天井石は取り除かれていた。石室左右壁の壁石は比較的残りが良かった。

石室は前述した様に構築時の地表を掘りくぼめた「掘り方」内に構築している。「掘り方」は深さ約2.1m～1.6mであり、二ツ岳降下火山灰層(FA層)を上面から掘り込み、浅間C軽石混入の黒色土層やローム層を切ってつくられている。「掘り方」の平面形は石室の形に合わせてほぼ長方形であり、上幅は奥で4.40m、中央で約4.00m、前の部分で約3.90m、下幅では奥で3.90m、中央で約3.70m、前の部分で約3.50mとなり前方の墓道へと連続していく。墓道は羨道部付近で狭く、前方に行くに従って広がっていく。「掘り方」底面はほぼ平坦に整形した後に壁石根石を並べ、玄室側と裏込め側から固定させるために小ぶりの石を挟み込んでいる。玄室床面には小石が約5～18cmの厚さに敷かれて、奥壁寄りが薄い。床石中には角閃石安山岩の小転石が入っている。石室壁石と「掘り方」との間には約15～70cmの空間があり、この空間部分に裏込め石やロームブロック混入土を詰めている。石室は袖無型であり奥壁寄りが広く、羨道部前方向に向い徐々に狭くなる。玄室部と羨道部の境には栴石がある。玄門部から栴石部に石垣を組み、この間に小石を入れて閉塞としている。羨道部の床面は玄室より大きめの礫を敷いている。石室の規模は全長6.94m、玄室の長さ4.34m同左壁の長さ4.43m、同右壁の長さ4.37m、羨道の長さ2.60m、同左壁の長さ2.64m、同右壁の長さ2.55m、玄室奥壁幅1.34m、同高さ1.95m、同前幅1.22m、同最大幅1.40m、羨道部前幅約0.85m、同奥幅1.22m、閉塞石組部の長さ2.65mである。石室の主軸はN-39°-Wである。羨道部前方には墓道が続く。墓道は羨道付近の下幅は約1m、上幅は約2mであり、石室床面よりも若干下がり、墓道前方へ傾斜していく。墓道幅は徐々に広がり、約5.50m先にのびた所で大きく広がりをもつ。羨道入口部分から約15mで墓道状の広がりとは自然と消えていく。また羨道部から引き続いて墓道に継がった部分に拳大の石を配している。この石組は左右対象にあり床面部分で幅約0.50m、上幅約1.20m、高さ約1.40m部分まで石を積み上げている。羨門部上位まで積み上げられた墓道の石組は墳丘上にまわる葺石の根石の部分まで延び継がる。

遺物出土状況 1号墳玄室内からの出土遺物は耳環、鉄鏃、土師器、須恵器、人骨などが出土した。石室は攪乱を受けていた。破壊されていた場所は、羨道部と玄室前部分の天井である。

(相京)

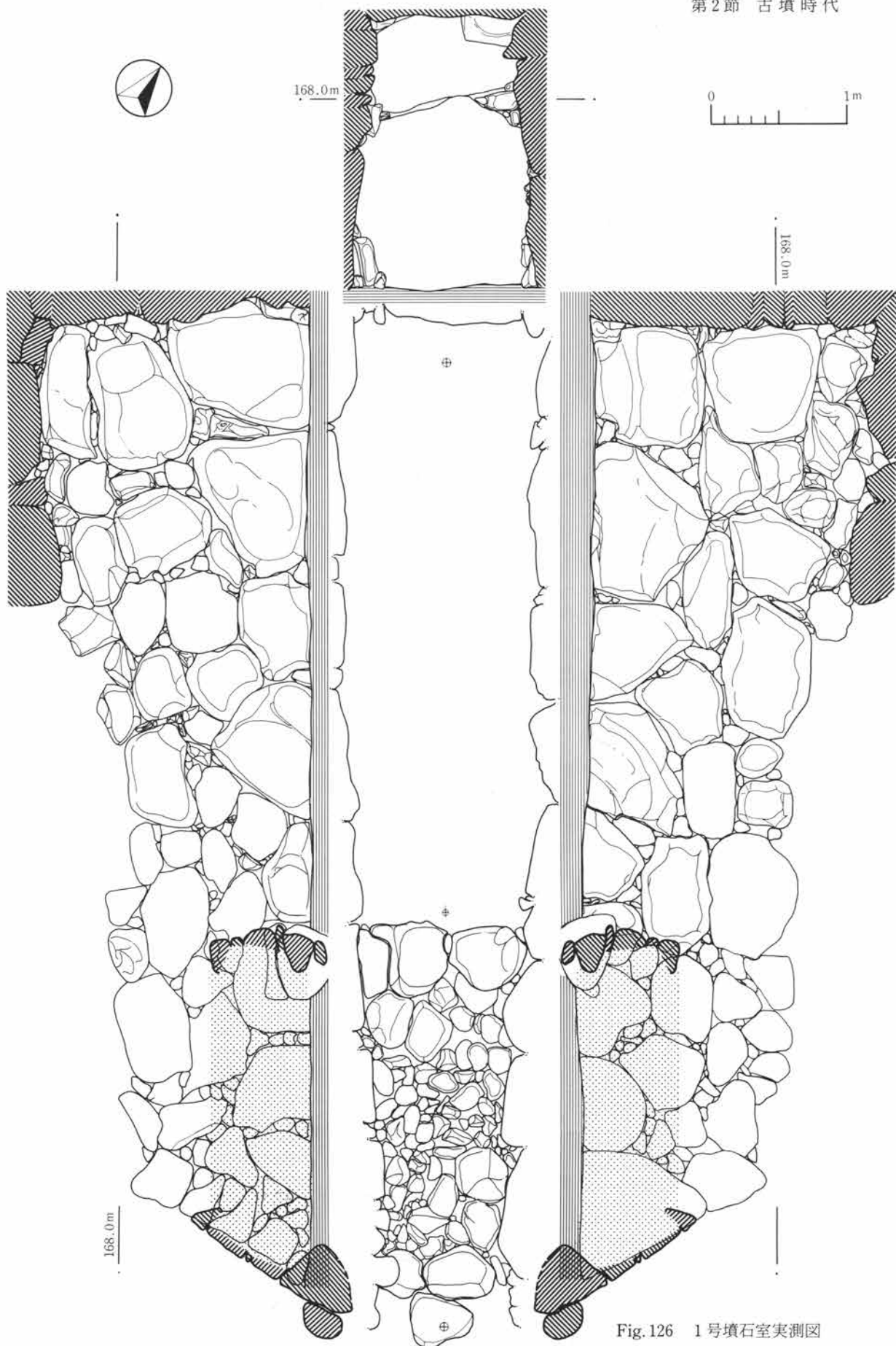


Fig.126 1号墳石室実測図

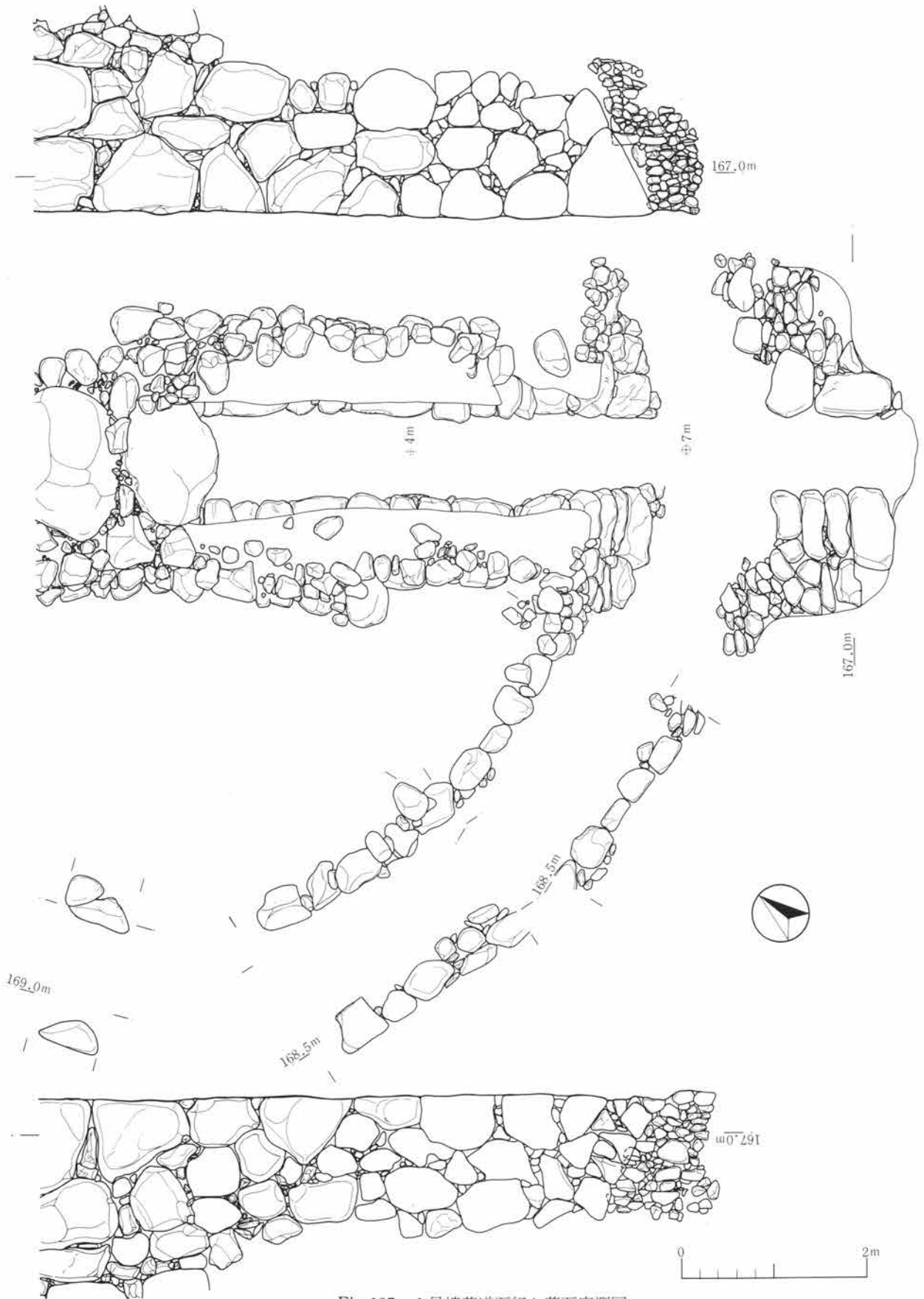


Fig.127 1号墳墓道石組と葺石実測図

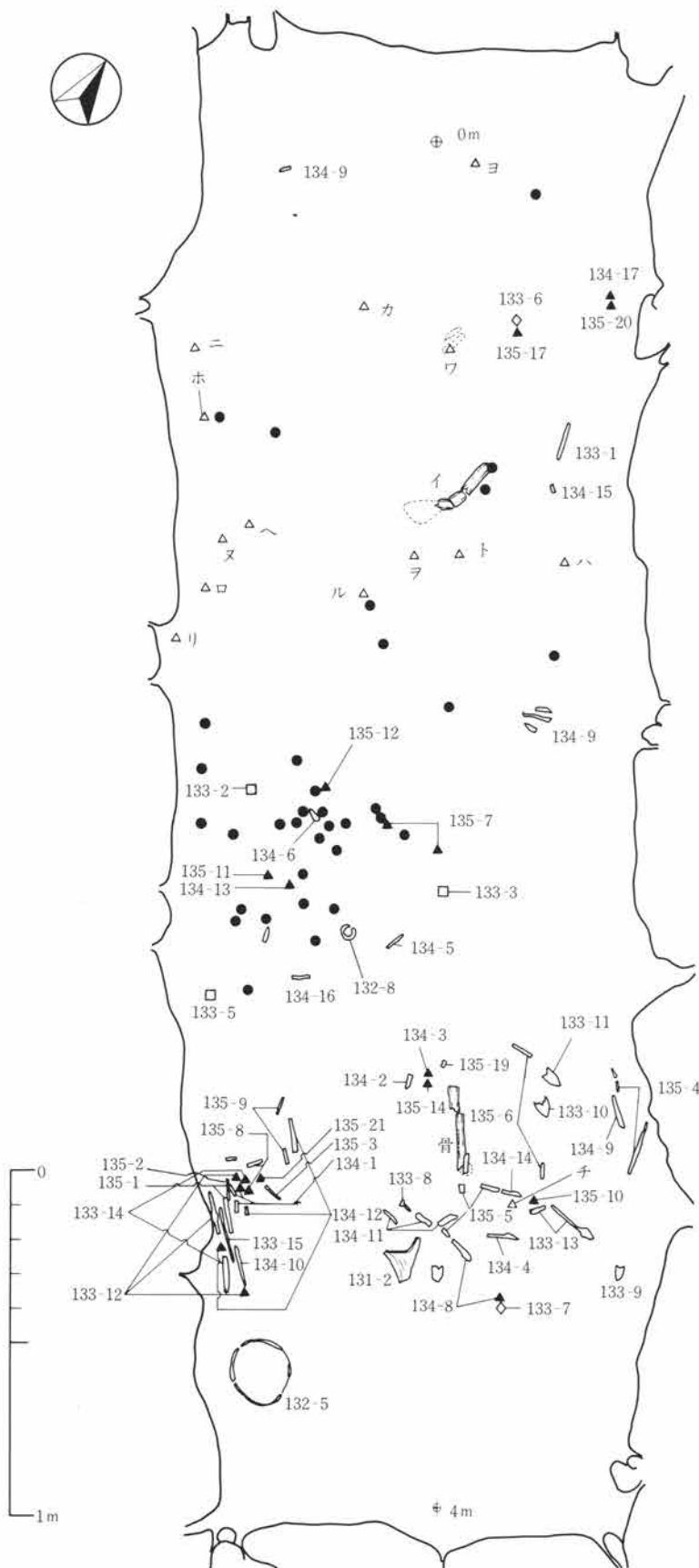


Fig. 128 1号墳石室内遺物出土状況図

出土遺物 (Fig. 131・132・133・134・135・136, PL. 55・56・57)

須恵器

甕 (Fig. 131-1、PL. 55-1) 前庭部覆土内出土。口径21.4cm、頸径17.4cm、最大幅41.6cm、高さ43.2cmである。最大幅部分は肩部にある。底部は丸底を呈している。頸部は垂直に立ち上がり、口縁部付近で外反する。口縁端部は鋭利であり、口唇部は丸味をもつ。胴部外面は平行叩き目文、内面は青海波文がある。口唇部には僅かに波状文が観察できる。頸部には波状文を二段施文している。胎土は長石、石英の他に小礫を含む。焼成は良好である。色調は明灰色である。

甕 (Fig. 131-2、PL. 55-2) 石室内出土の破片と前庭部覆土内出土の破片が接合できる。口径16.2cm、頸径12.3cm、最大幅は肩にあり、径33.3cmである。頸部は口縁部に向けて除々に外反する。口縁端部は鋭利であり、口唇部下位には沈線1本が巡り、上位には波状文を施文している。頸部には1単位の波状文を施文している。胎土は砂粒を含む。焼成は堅く焼き締まっている。色調は灰色である。

甕 (Fig. 132-1、PL. 55-3) 前庭部覆土内出土、口径17.9cm、頸径14.5cmの口縁部の破片である。頸部から口縁部にかけては除々に外反する。口縁端部は鋭利であり、口唇部は中央が高く、上下を強く押し引きしているかの様相を呈す。頸部の下位は横撫でを強く行なっている。また、頸部から口縁部にかけては、内

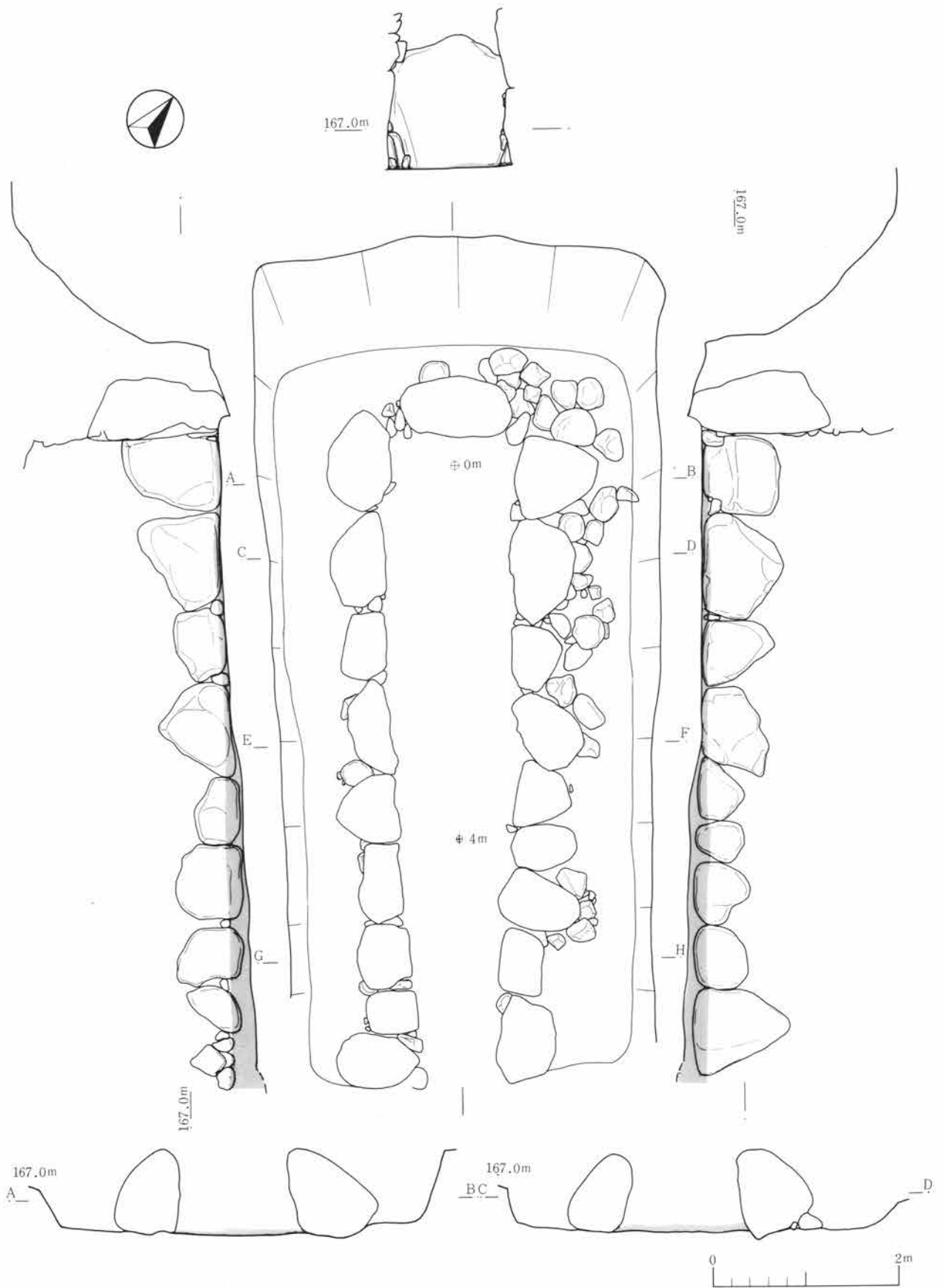


Fig. 129 1号墳石室掘り方と根石実測図

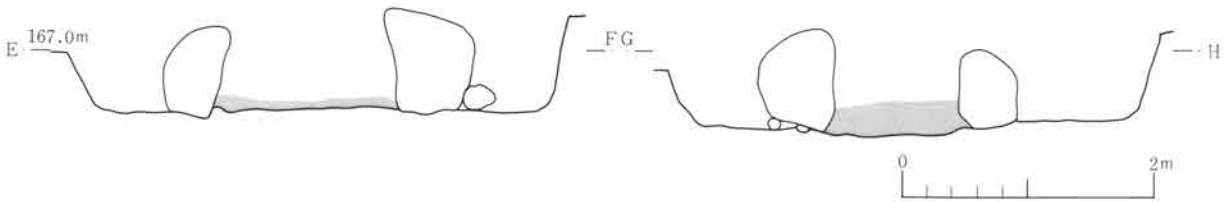


Fig. 130 1号墳石室掘り方と根石断面実測図

外面とも横方向に撫でによる整形を行なっている。胴部外面は平行叩き目文、内面は青海波文がある。胎土は黒色鉱物を含む。焼成は良好である。色調は明灰色である。Fig. 132-4の甕と同一個体の可能性がある。

甕 (Fig. 132-2、PL. 55-7) 南西に入れたトレンチ内出土。胴部の破片である。外面は格子状の叩き目文と、数状からなる平行線文がみられる。内面は青海波文のあて目が明瞭につく。胎土は白色粒子を多量に含み、小礫も僅かに混入する。焼成は良好である。色調は灰色である。

甕 (Fig. 132-3、PL. 55-4) 前庭部覆土内出土。口縁部から肩部にかけての破片である。口径24.0cm、頸径18.6cmである。口縁部分は鋭利であり、口唇部は狭い。口唇部直下は無文帯部分があり、頸部上位に施文した波状文との中間に僅かに隆帯部分をつくり出している。頸部は中位に沈線による横線文が入り、その上下に1単位九条の波状文が入る。波状文は崩れた様相を呈す。肩部から下位の外面には平行叩き目文が入り、内面には青海波文が入る。胎土には長石・石英の他に小礫も含む。焼成は良好である。色調は暗灰色である。

甕 (Fig. 132-4、PL. 55-5) 前庭部覆土内出土、肩部の破片である。頸径15.7cmである。外面は平行叩き目文、内面は青海波文がある。胎土・焼成・色調は Fig. 132-1の甕に類似し、黒色鉱物を含む。焼成は良好であり、明灰色を呈している。頸部径の大きさや、細部にわたる技法も、共通部分が多いため、同一個体の可能性がある。

甕 (Fig. 132-5、PL. 55-7) 石室内出土の破片と前庭部覆土内出土の破片が接合できる。胴下部の破片である。外面は平行叩き目文、内面は同心円文である。胎土は黒色鉱物を多量に含む。焼成は堅く焼かれており、良好である。色調は灰色である。

土師器

鉢 (Fig. 132-6、PL. 55-6) 3分の2が残存する。1号墳前庭部覆土内出土の破片と、2号墳表面採集の破片が接合できた。口径20.4cm、高さ9.8cmである。底部は丸底を呈しているが、平坦部分をつくらうとする意識が働いている。篋削り痕がある。頸部下端には、僅かな段をもち、口縁部へと大きく外反し、口縁端部は丸味をもつ。胴部は横方向の篋削り、口縁部には横撫でによる整形を行なっている。胎土は、白色鉱物を僅かに含む。焼成は良好である。色調は、外面で明赤褐色を呈す。内面は一部を除いて吸炭している。

埴輪

円筒埴輪 (Fig. 132-7、PL. 55-7) 口縁部の破片である。外面は縦方向に刷毛目、外面口縁部と内面は横撫でを行なっている。胎土には小礫を多量に混入している。焼成は良好である。色調は明赤褐色を呈している。

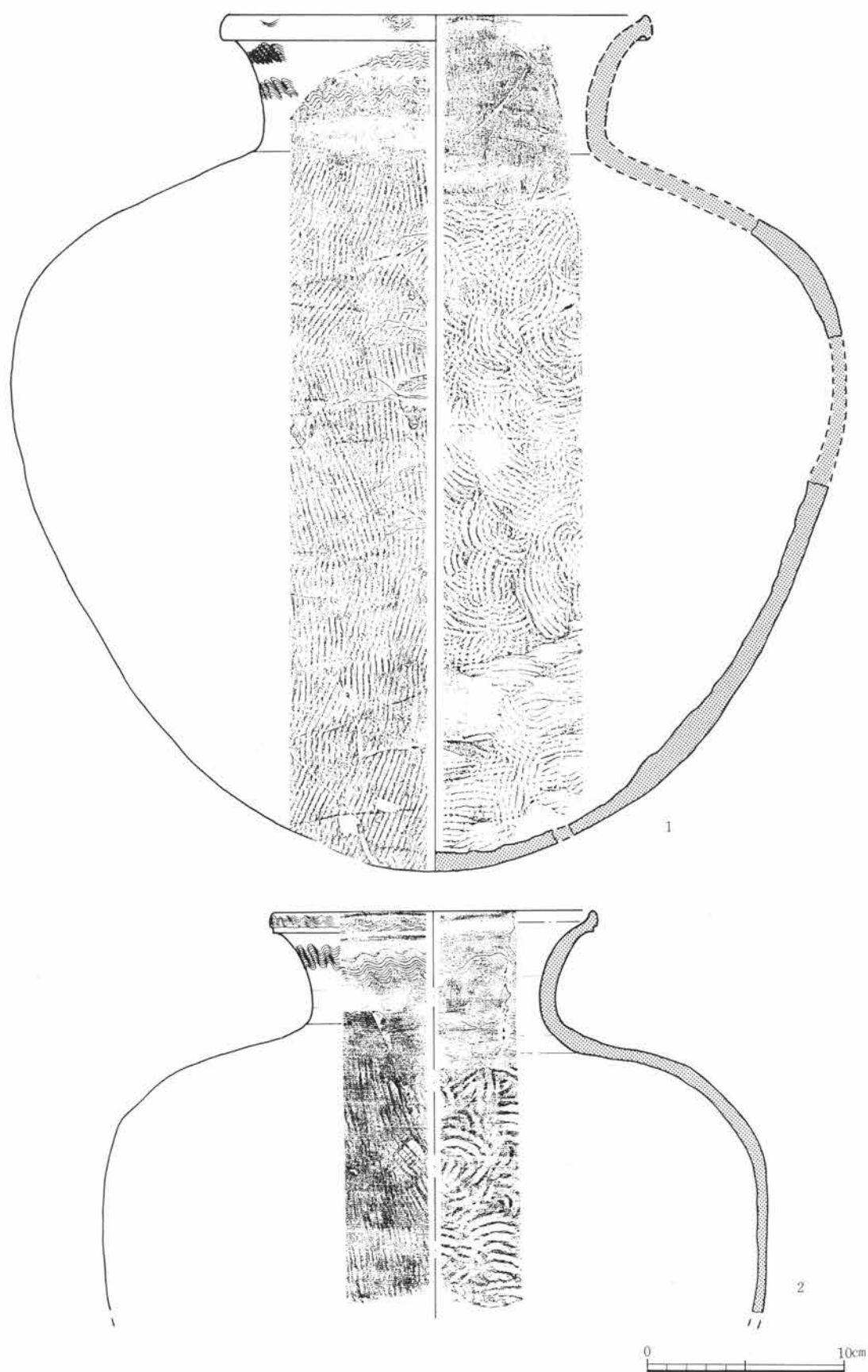


Fig. 131 1号墳出土遺物実測図

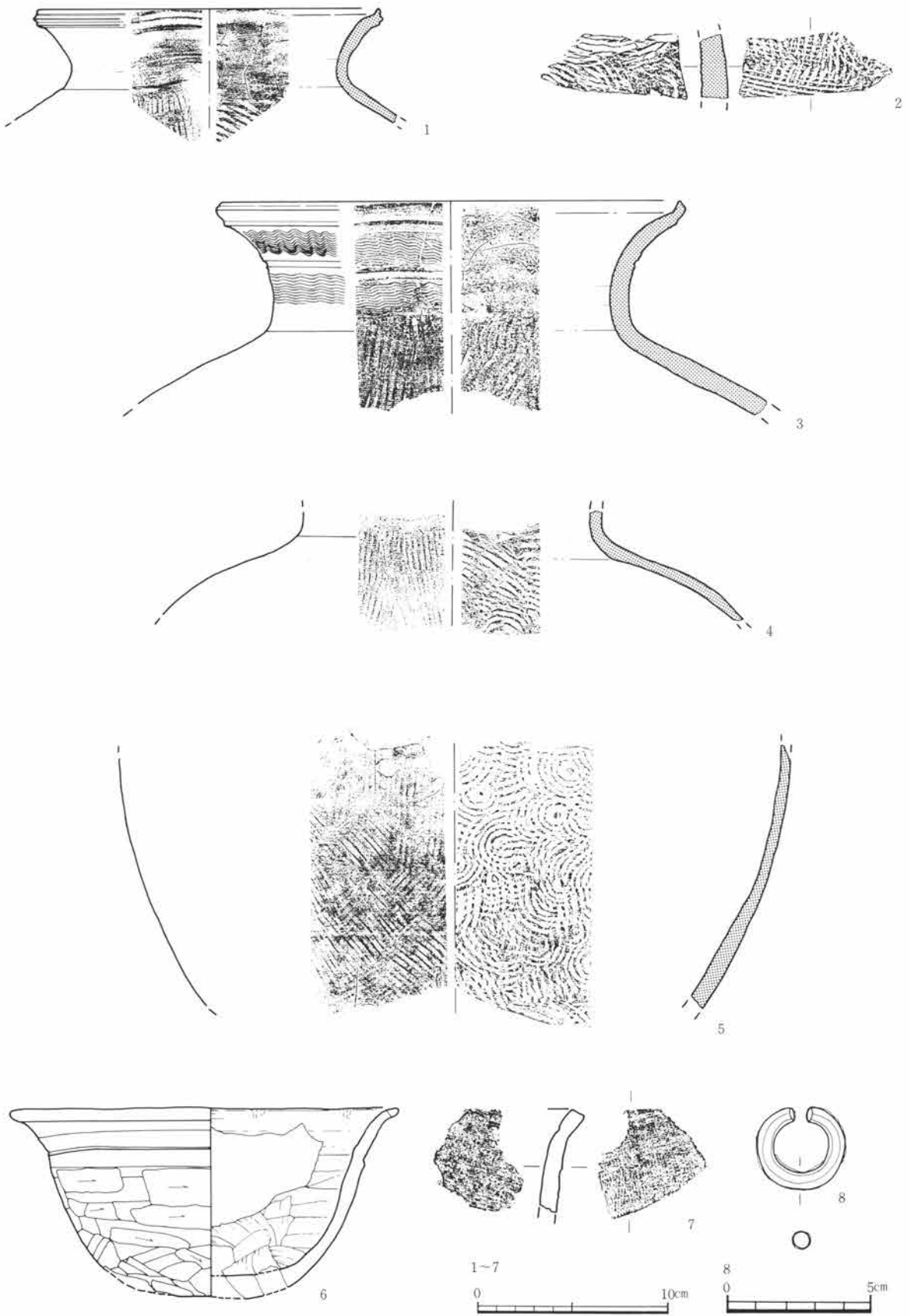


Fig. 132 1号墳出土遺物実測図

1号墳出土遺物一覧表 (耳環)

図版は巻頭

挿 図 番 号	残存状態	外 径(cm)		内 径(cm)		断 面(cm)		重 さ(g)
		a	b	c	d	e	f	
Fig. 132-8	完 形	3.06	2.76	1.90	1.74	0.56	0.59	11.72

1号墳出土遺物一覧表 (鉄器)

挿 図 番 号	種 類	全長(残長) (cm)	刃部(残長) (cm)	篋被部(残長) (cm)	茎部(残長) (cm)	刃 部 の 造り込み	篋被部の 形 状	重さ(g)	そ の 他
Fig. 133-1 PL. 56-1	刀 子	(12.0)	(12.0)					22.28	
Fig. 133-2 PL. 56-1	刀 子	(4.8)	(4.8)					15.57	
Fig. 133-3 PL. 56-1	刀 子	(4.9)	(4.9)					27.91	
Fig. 133-4 PL. 56-1	刀 子	(3.5)	(3.5)					6.56	
Fig. 133-5 PL. 56-1	刀 子	(2.9)	(2.9)					1.90	
Fig. 133-6 PL. 56-1	鉸 具							8.85	
Fig. 133-7 PL. 56-1		3.3						1.57	両頭座金付留金具
Fig. 133-8 PL. 56-1		(2.3)						0.95	両端三又座拵金具
Fig. 133-9 PL. 56-1	鉄 鏃	(4.0)						4.69	有孔脇扶三角形式
Fig. 133-10 PL. 56-1	鉄 鏃	4.9						7.97	有孔広鋒重扶長三角形式
Fig. 133-11 PL. 56-1	鉄 鏃	5.8						8.13	有孔狭根脇扶五角形式
Fig. 133-12 PL. 56-1	鉄 鏃	(19.0)	4.3			片切刃造		22.21	
Fig. 133-13 PL. 56-1	鉄 鏃	17.2	3.8	9.2	4.0	片切刃造	棘篋被	26.61	
Fig. 133-14 PL. 56-1	鉄 鏃	(16.5)	3.2	8.0	(5.3)	片切刃造	棘篋被	10.83	
Fig. 133-15 PL. 56-1	鉄 鏃	(14.8)	3.3	9.0	(2.5)	平造	棘篋被	12.35	
Fig. 134-1 PL. 56-2	鉄 鏃	(13.7)	3.0	8.8	(1.9)	片切刃造	棘篋被	24.08	Fig. 135-1・2 と 錆 に より付着
Fig. 134-2 PL. 56-2	鉄 鏃	(5.2)	3.9	(2.3)		片切刃造		4.34	
Fig. 134-3 PL. 56-2	鉄 鏃	(9.1)	3.5	(5.6)		?		8.08	
Fig. 134-4 PL. 56-2	鉄 鏃	(8.3)	1.8	(6.5)		片切刃造		23.34	
Fig. 134-5 PL. 56-2	鉄 鏃	(4.2)	3.5	(0.7)		片切刃造		2.51	
Fig. 134-6 PL. 56-2	鉄 鏃	(3.3)	(1.0)	(2.3)		片切刃造		2.08	
Fig. 134-7 PL. 56-2	鉄 鏃	(4.5)	(1.3)	(3.2)		片切刃造		2.88	
Fig. 134-8 PL. 56-2	鉄 鏃	(13.4)	(2.2)	(8.7)	(2.5)	片切刃造	棘篋被	10.36	
Fig. 134-9 PL. 56-2	鉄 鏃	(16.1)	1.8	10.3	(4.0)	切刃造	棘篋被	13.04	

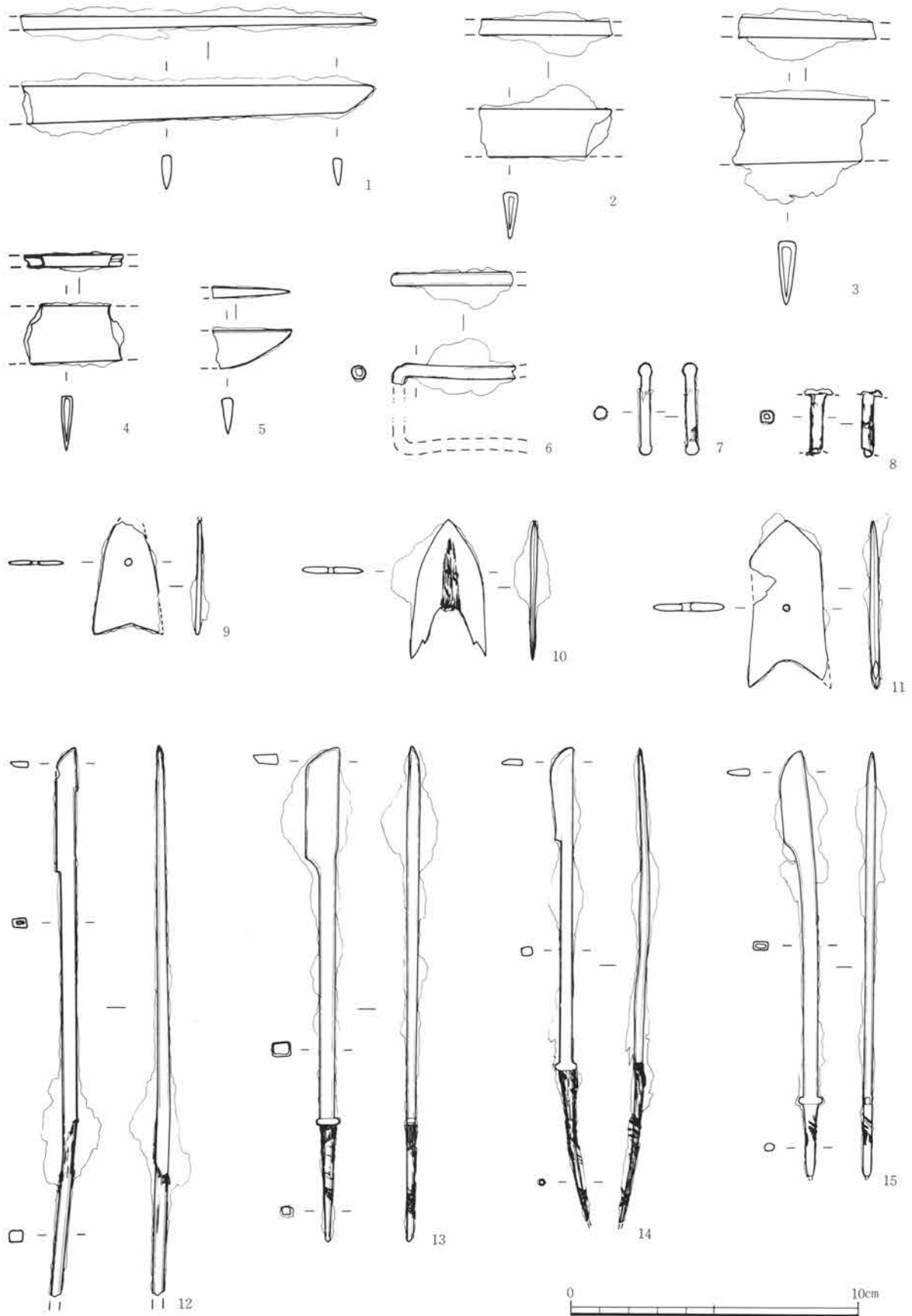


Fig.133 1号墳出土遺物実測図

1号墳出土遺物一覧表(鉄器)

挿 図 版 番 号	種 類	全長(残長) (cm)	刃部(残長) (cm)	筥被部(残長) (cm)	茎部(残長) (cm)	刃部 の 造り込み	筥被部 の 形 状	重さ(g)	そ の 他
Fig. 134-10 PL. 56-2	鉄 鏃	(15.8)	4.2	(7.0)	(4.2)	片切刃造	棘筥被	10.07	
Fig. 134-11 PL. 56-2	鉄 鏃	16.9	1.4	9.9	5.6	片切刃造	棘筥被	11.11	
Fig. 134-12 PL. 56-2	鉄 鏃	18.1	1.9	10.9	5.3	切刃造	棘筥被	21.80	
Fig. 134-13 PL. 56-2	鉄 鏃	(3.5)	(3.5)			片切刃造		1.59	布付着
Fig. 134-14 PL. 56-2	鉄 鏃	(4.0)	(4.0)			片切刃造		2.50	
Fig. 134-15 PL. 56-2	鉄 鏃	(7.0)	2.3	(4.7)		片切刃造		6.10	
Fig. 134-16 PL. 56-2	鉄 鏃	(3.9)	?			?		2.33	
Fig. 134-17 PL. 56-2	鉄 鏃	(3.1)	(1.3)	(1.8)		片切刃造		2.31	
Fig. 135-1 PL. 57-1	鉄 鏃	(15.5)	3.1	9.4	(3.0)	?	棘筥被	24.08	Fig.134-1・135-2 と 錆により付着
Fig. 135-2 PL. 57-1	鉄 鏃	(4.1)	3.3	(0.8)		片切刃造		24.08	Fig.134-1・135-1 と 錆により付着
Fig. 135-3 PL. 57-1	鉄 鏃	(8.3)		(6.4)	(1.9)		棘筥被	5.07	
Fig. 135-4 PL. 57-1	鉄 鏃	(16.5)		(11.1)	(5.4)		棘筥被	17.58	
Fig. 135-5 PL. 57-1	鉄 鏃	(14.4)		(8.7)	(5.7)		棘筥被	12.64	
Fig. 135-6 PL. 57-1	鉄 鏃	(10.7)		(8.0)	(2.7)		棘筥被	7.97	
Fig. 135-7 PL. 57-1	鉄 鏃	(9.3)		(8.2)	(1.1)		棘筥被	6.13	
Fig. 135-8 PL. 57-1	鉄 鏃	(7.4)		(5.9)	(1.5)		棘筥被	2.35	
Fig. 135-9 PL. 57-1	鉄 鏃	(6.3)		(5.8)	(0.5)		棘筥被	3.74	
Fig. 135-10 PL. 57-1	鉄 鏃	(3.3)		(2.1)	(1.1)		棘筥被	1.38	
Fig. 135-11 PL. 57-1	鉄 鏃	(5.6)		(4.8)	(0.8)		棘筥被	5.75	
Fig. 135-12 PL. 57-1	鉄 鏃	(5.0)		(2.4)	(2.6)		棘筥被	4.00	
Fig. 135-13 PL. 57-1	鉄 鏃	(4.9)		(2.2)	(2.7)		棘筥被	4.44	
Fig. 135-14 PL. 57-1	鉄 鏃	(8.1)		(5.1)	(3.0)		棘筥被	5.91	
Fig. 135-15 PL. 57-1	鉄 鏃	(6.1)						5.69	
Fig. 135-16 PL. 57-1	鉄 鏃	(5.0)		(5.0)				12.59	
Fig. 135-17 PL. 57-1	鉄 鏃	(2.9)		(2.9)				1.62	
Fig. 135-18 PL. 57-1	鉄 鏃	(2.9)			(2.9)			0.45	茎部破片
Fig. 135-19 PL. 57-1	鉄 鏃	(2.2)			(2.2)			0.77	茎部破片
Fig. 135-20 PL. 57-1	鉄 鏃	(2.4)			(2.4)			1.05	茎部破片
Fig. 135-21 PL. 57-1	鉄 鏃	(2.7)			(2.7)			1.11	茎部破片

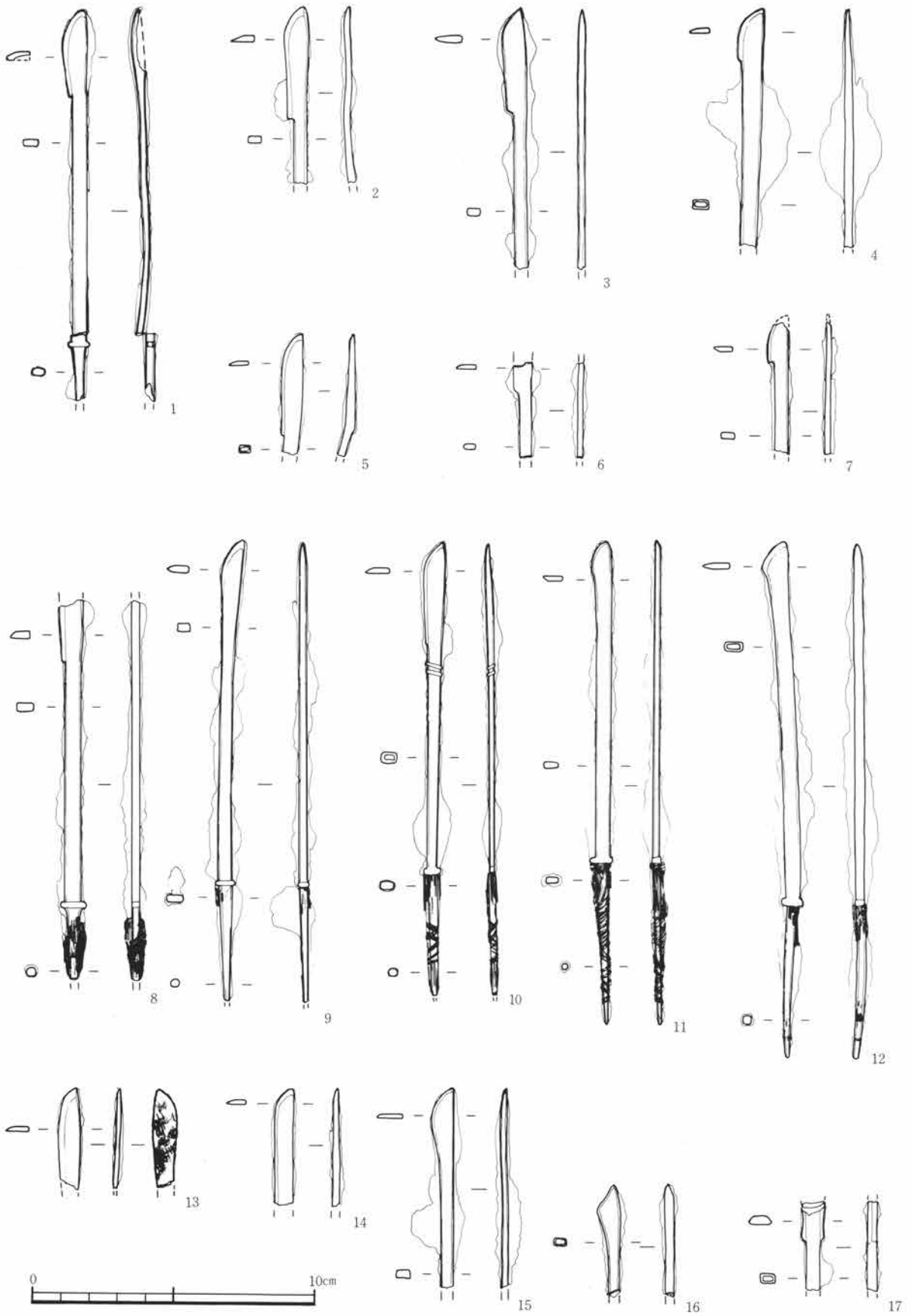


Fig. 134 1号墳出土遺物実測図

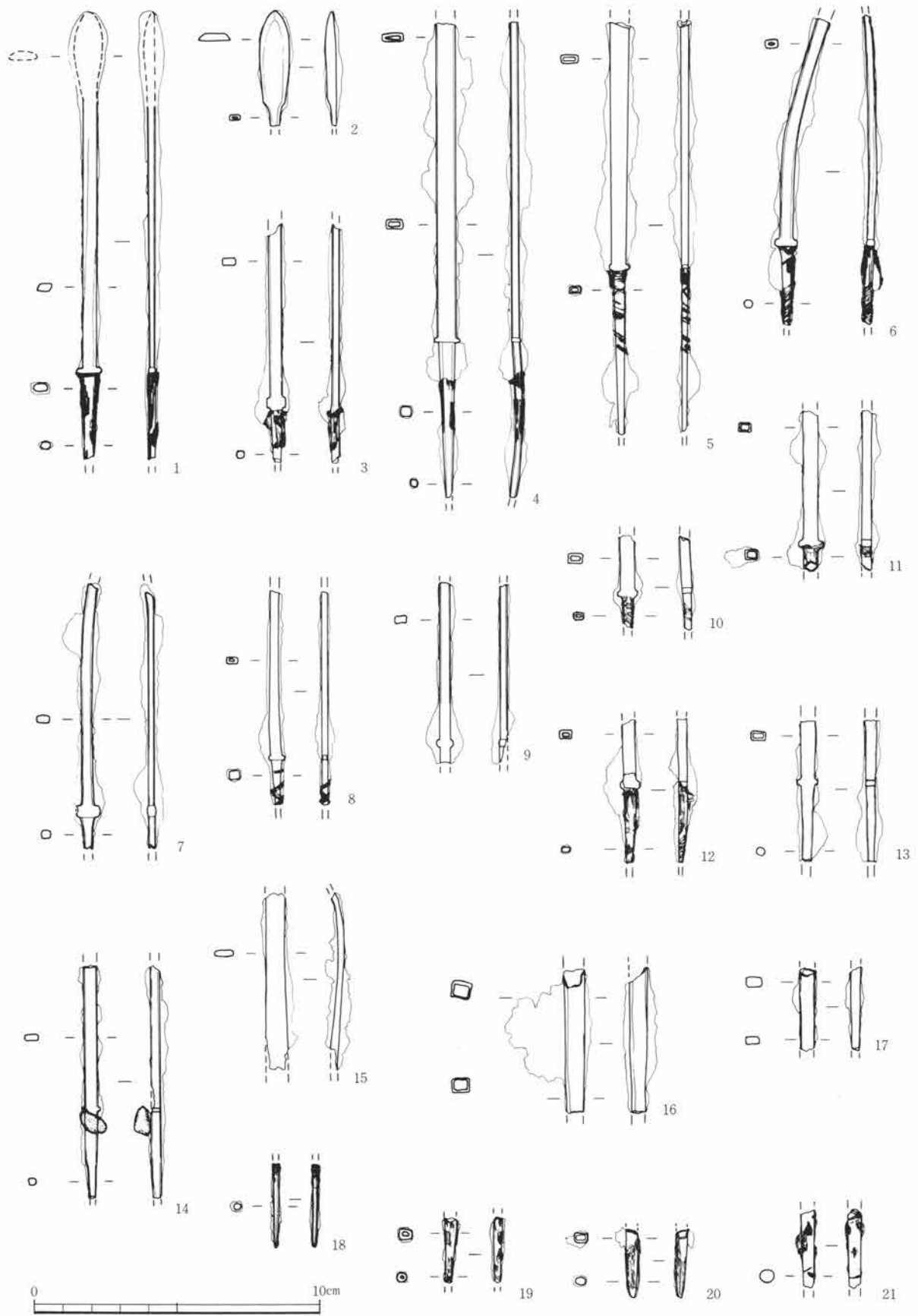


Fig.135 1号墳出土遺物実測図

1号墳出土遺物一覧表 (鉄釘)

挿図 版番 番号	全長(残長) (cm)	釘頭の大きさ (cm)	その他 形重 状さ(%)
Fig. 136-1 PL. 57-2	8.5	1.6 × 1.1	頭は折り曲げた角釘 11.65
Fig. 136-2 PL. 57-2	8.5	1.0 × (0.9)	頭は折り曲げた角釘 10.15
Fig. 136-3 PL. 57-2	(7.7)	1.4 × 0.7	頭は折り曲げた角釘 8.93
Fig. 136-4 PL. 57-2	(7.3)	1.2 × 0.5	頭は折り曲げた角釘 6.26
Fig. 136-5 PL. 57-2	(5.8)	1.2 × 0.8	頭は折り曲げた角釘 6.57
Fig. 136-6 PL. 57-2	(4.7)	1.0 × 0.9	頭は折り曲げた角釘 9.59
Fig. 136-7 PL. 57-2	(4.8)	1.1 × 1.3	頭は折り曲げた角釘 7.04
Fig. 136-8 PL. 57-2	(5.1)	1.4 × 0.6	頭は折り曲げた角釘 7.44
Fig. 136-9 PL. 57-2	(4.1)	1.8 × 1.0	頭は折り曲げた角釘 5.89

挿図 版番 番号	全長(残長) (cm)	釘頭の大きさ (cm)	その他 形重 状さ(%)
Fig. 136-10 PL. 57-2	(2.5)	1.5 × 0.7	頭は折り曲げた角釘 5.81
Fig. 136-11 PL. 57-2	(3.0)	1.3 × 0.7	頭は折り曲げた角釘 5.33
Fig. 136-12 PL. 57-2	(3.0)	1.2 × 0.6	頭は折り曲げた角釘 4.72
Fig. 136-13 PL. 57-2	(3.7)	1.0 × 0.8	頭は折り曲げた角釘 2.64
Fig. 136-14 PL. 57-2	(4.5)		5.63
Fig. 136-15 PL. 57-2	(5.4)		4.85
Fig. 136-16 PL. 57-2	(5.7)		3.67
Fig. 136-17 PL. 57-2	(3.9)		3.94

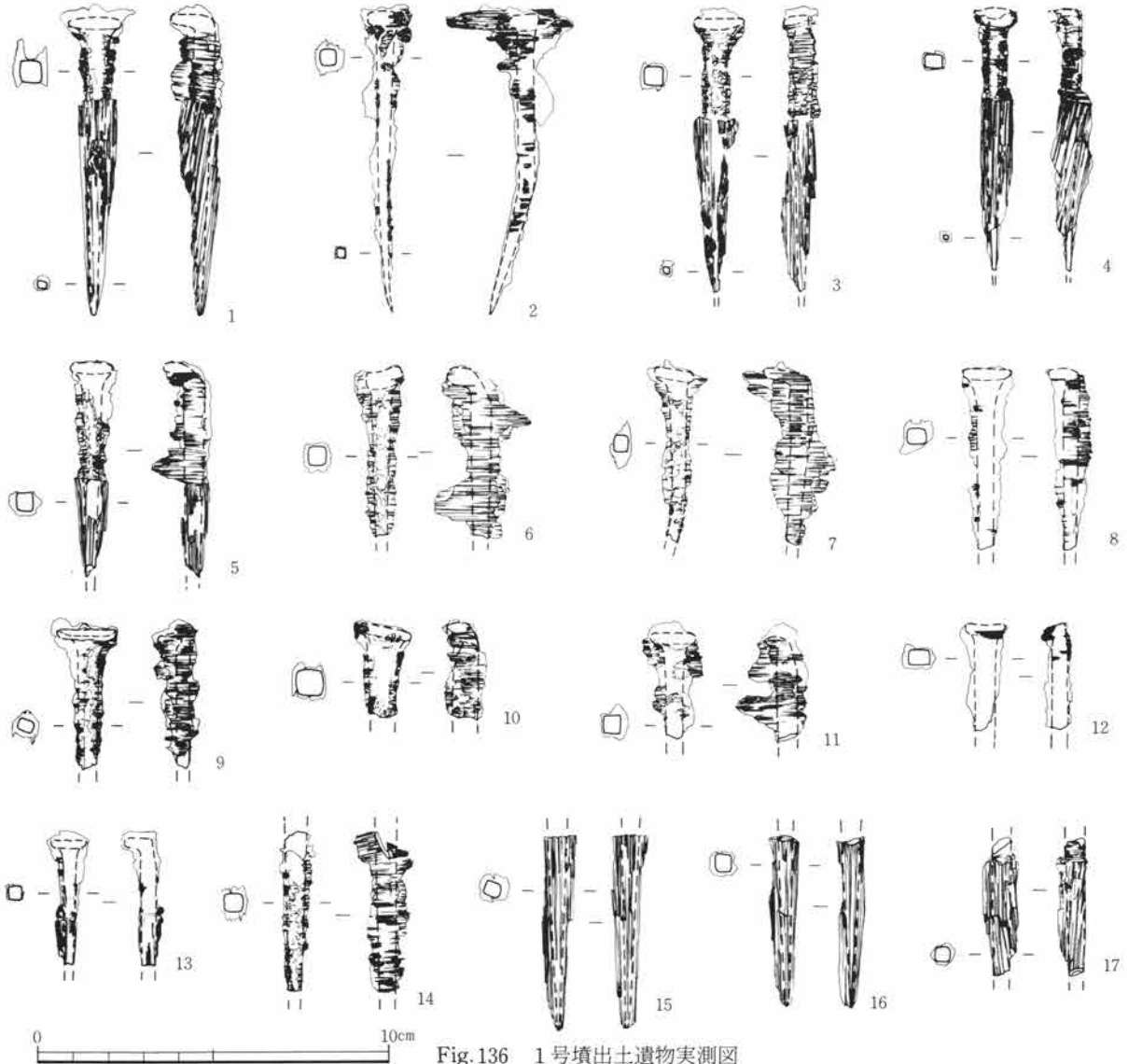


Fig. 136 1号墳出土遺物実測図

2号墳 (Fig. 137・138・139・140、PL. 58-1・2・59-1~8・60-1~4)

位置 上毛古墳綜覧旧駒寄村24号墳。清里・長久保遺跡北東隅、午王頭川に近接する右岸にある。東には近接して1号墳があり、主体部間は約30mの距離がある。両古墳とも周堀が無いので連続しているかの様である。

墳丘と外部施設 陣場泥流の残丘上につくられた古墳で、調査時点では、高さ約2m、直径約14mほどの墳丘を残し、比較的原形をよくとどめているものとみられたが、東西南北にいったトレンチによる墳丘確認調査の結果、残丘の占める割合が比較的高く、墳丘は以外に小さいものであったことが判明し、自然残丘上につくられた古墳の特色をよく残していた。

墳丘四方に入れたトレンチの所見によると、墳丘は、残丘上に堆積し、古墳構築時の地表を形成していた層以下2~3層を削って墳丘裾部を整形し、その上に盛土をして築成している様子が確認された。これら残丘上に堆積した層序の中には、榛名山二ツ岳噴出の火山堆積物であるFP層、FA層が確認されており、本古墳がFP降下後に構築されていることは明らかである。各トレンチでの所見は次のとおりである。

墳丘北（奥壁北）。二ツ岳降下火山灰層、浅間山噴出のC軽石を含む黒色土層及びC軽石を含む茶褐色土層等を約60cm削って墳丘裾部を整形し、その上に盛土をしている。明らかに盛土とみられるものは1層（20

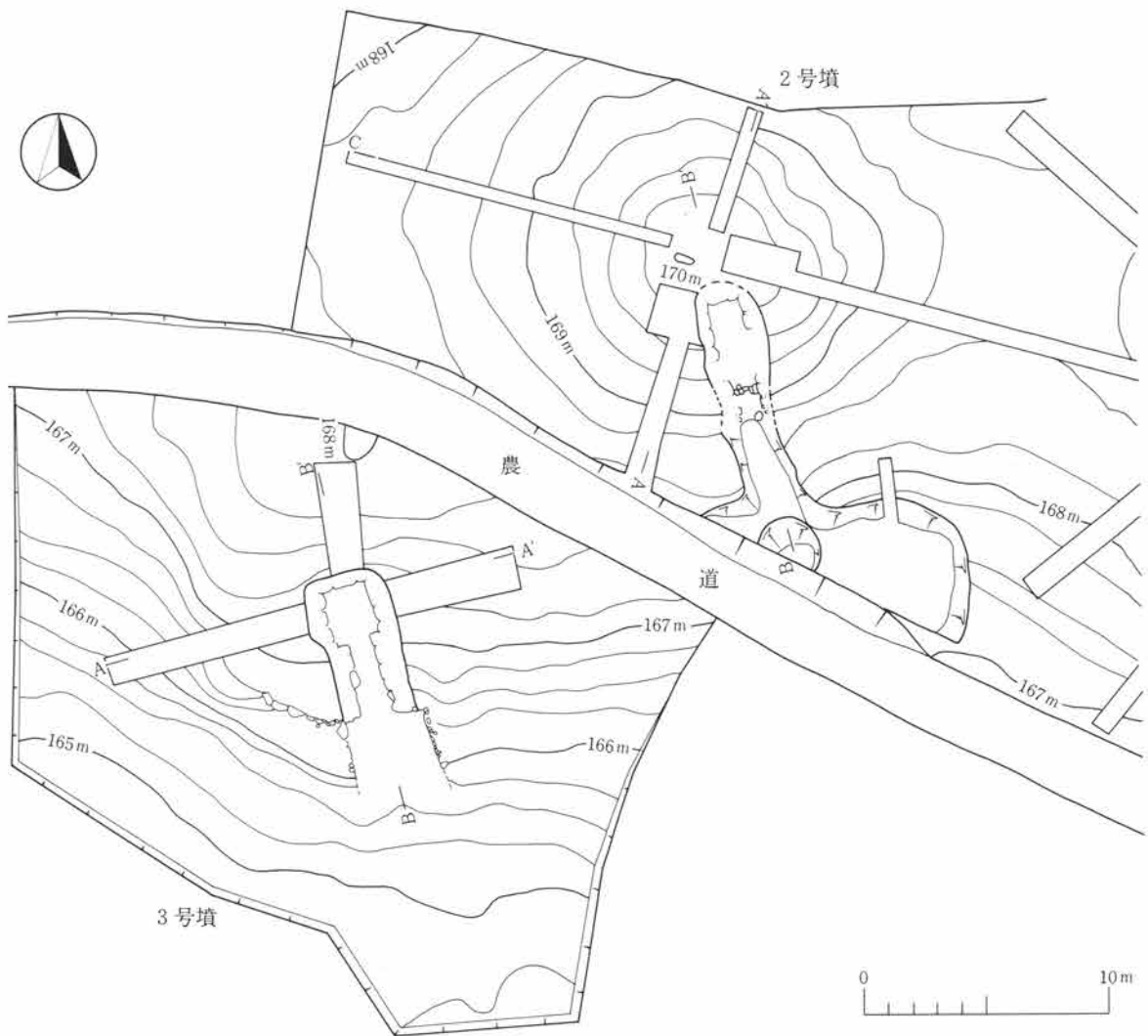


Fig.137 2・3号墳墳丘等高線図

cm)が確認されたのみで、その上は削平されていた。なお、FA層の上面には盛土下の部分でFP層とみられるものが数cmうすく堆積している。

墳丘南(石室西側)。C軽石混入黒色土層、同褐色土層を約30cm削って墳丘裾部を整形し、この上に盛土。確実に盛土とみられるものは1層であり、その上に堆積した30~40cmの層はかなり攪乱され現在の地表となっている。これら攪乱層も盛土であった可能性は強い。なお整形された墳丘末端から20cmほど上ったところで幅60cmほどのテラス状平坦面をつくり、さらに約30度の傾斜で削り出している。このテラス状の平坦面は40~60cmの幅で他のトレンチでも確認できる。

墳丘東・西のトレンチでも同様の所見が得られており、これらを総合すると、本古墳は墳丘裾部は旧地表以下の層を削って整形した直径約14mの円墳と考えられる。周堀はない。

墳丘裾部は、石室西のトレンチの所見から、後述する横穴式石室入口部へ接続するものと考えられるが、石室もまた旧地表を掘り込んだ「掘り方」内につくられており、石室入口前には、石室への出入の便に供する墓道状の遺構が墳丘外へのびている。墓道は、上幅約2m、下幅約1m、石室床面から約10cm下った面でゆるやかな傾斜でのびる。石室入口から約4mのところまでは前述の幅で続くが、ここから先で左右に大きくひろがる。その先端及び左側部分は道路で切られ不明であるが、右側部分でみると墓道中軸線から約6.6mのところまで前方へ曲がる。なおこの拡大部分では墓道正面に直径2.6m、深さ約50cmの掘り込みがある。

主体部の構造 主体部は自然石を使用した袖無型の横穴式石室であるが、両側壁の石の大半は取り除かれ根石の一部が残っていたにすぎない。石室は、前述のように構築時の地表を掘りくぼめた「掘り方」内に構築している。「掘り方」は、深さ1.3m~1.5mあり、C軽石を含む黒色土層以下ローム層、さらに残丘を形成した陣場泥流丘にまでおよぶ。「掘り方」平面形は石室の形に合わせてほぼ長方形であり、上幅は奥で3.92m、中央で3.73m、前の部分では2.70mで幅はせまくなり、前述の墓道へと連続していく。長さは、中央部で10.18mである。「掘り方」底面はほぼ平坦に整形した上、ロームブロックを含む茶褐色土を敷きならし、この上に石室壁石を据えている。壁石根石の下には石を敷き並べて基礎としている所と、掘り方底面をさらに掘りくぼめ、この中に石を据えている所とがある。石室壁石の裏込めは、厚さ約30~40cmで「掘り方」法面にまでは達していない。裏込めと法面との間約40cmの間隙はロームブロックまじりの土で埋めている。

石室の側壁部分は前述のとおりその大半が取り除かれ、根石の無い部分も多いがこの部分については、幸い根石設置跡の痕跡があり、袖無型の石室と確認することができる。埋葬部床面は、「掘り方」底面の上に10cm前後の厚さに土を敷きならし整地している状況を確認できたが、この上に敷石を敷きならべたか否かは攪乱著しいため明らかでない。ただ、わずかに残った遺物出土地点の状況からすると、敷石の類はなかったものとも考えられる。玄室部と羨道部の境には、やや大きめの川原石5石を並べ両者を区画している。この石は両者を区画した梱石の意味あいをもつとともに、後述の石室閉塞の小礫を止める石組根石の機能をしている。羨道部では、前述の梱石とともに、石室入口部分にも大ぶりの石を並べ、両者の間隙には小礫を詰め込んで石室を閉塞している。羨道部床面には、埋葬部にみられた土の敷きならしによる整地はみられず、「掘り方」底面直上から小礫を置いている。石室の規模は、全長5.76m、玄室部長左壁4.15m、同右壁4.03m、同奥幅1.36m、同前幅1.19m、羨道部長1.76m、同前幅1.19mである。なお奥壁は大石2石を積み上げておりほぼ原形を保っている。その高さは1.77mである。石室高さもこれを大きく上まわることはなからう。

遺物出土状況 石室攪乱著しく残された遺物は少ない。玄室部北西隅に直刀、鉄鏃各1本、同中央部で人骨、同前半部左壁に接して須恵器の甕の破片が出土したのみである。墳丘部から墳輪が出土している。

小結 榛名山二ツ岳噴出のFP降下後の構築である。

(松本浩一)

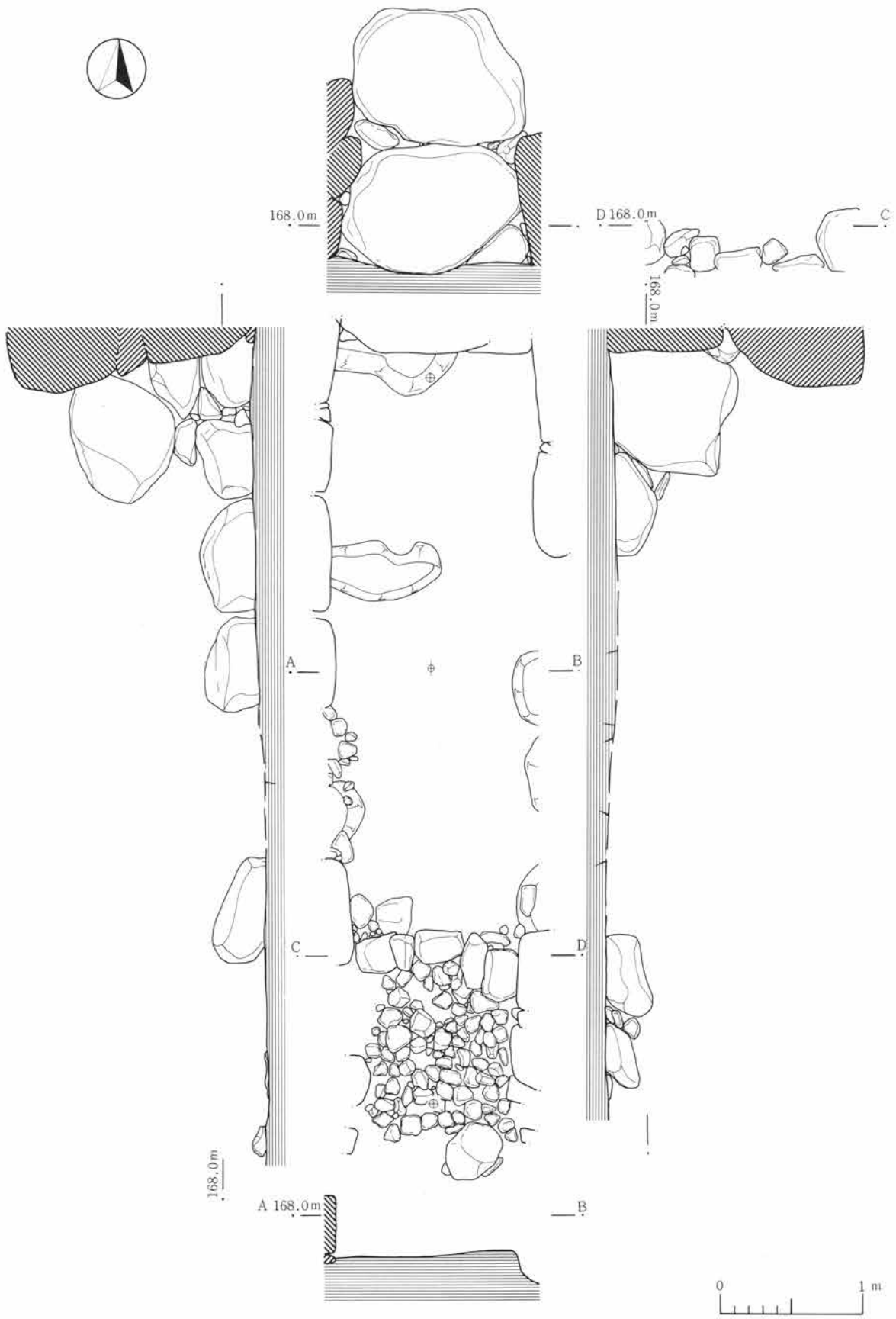


Fig.138 2号墳石室実測図

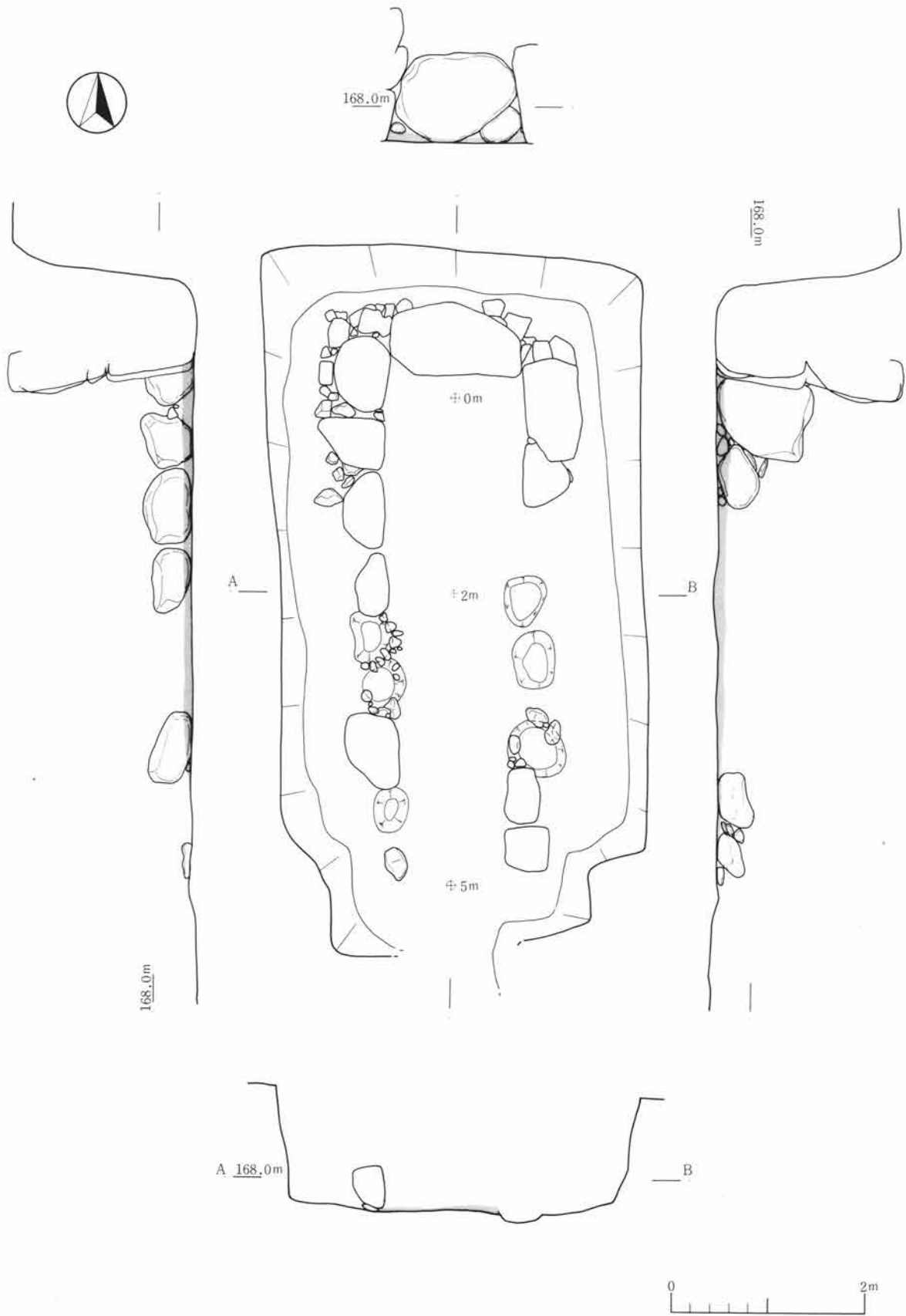


Fig. 139 2号墳石室掘り方と根石実測図

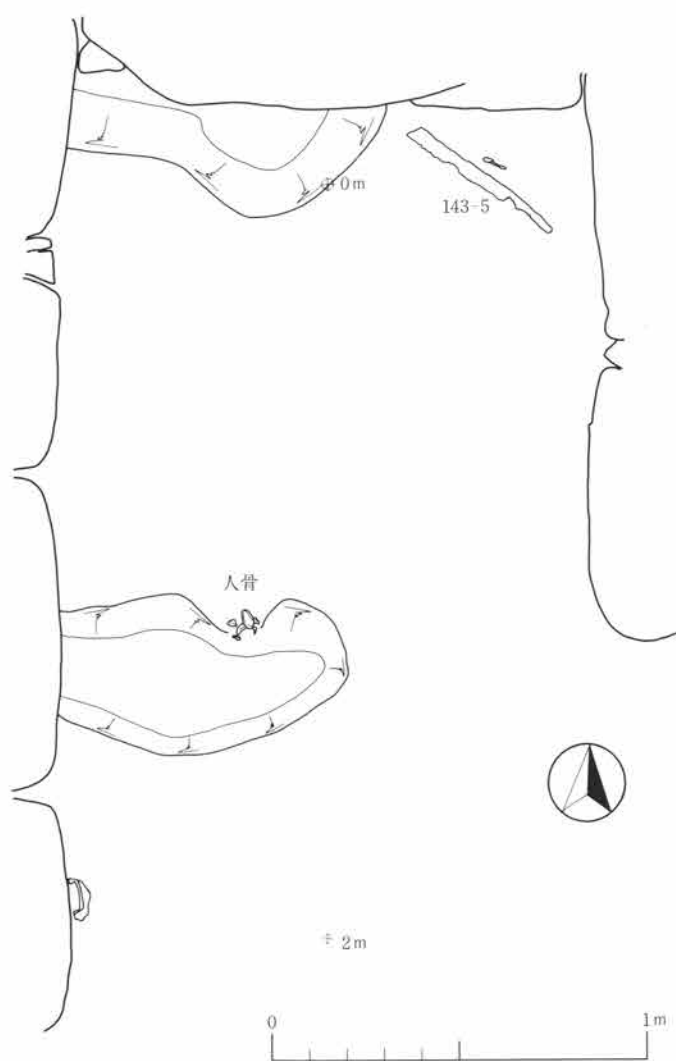


Fig. 140 2号墳石室内遺物出土状況図

出土遺物 (Fig. 141~146、PL. 60-5
~7・61-1~9・62-1~10)

須恵器

杯 (Fig. 141-1、PL. 61-3) 前庭部
出土 5 分の 1 残存。口径13.2cm、底径9.2cm、
高さ3.8cmである。胎土中には黒色鉱物を含
む。焼成は良好である。色調は灰色を呈す。

杯 (Fig. 141-2、PL. 61-3) 前庭部
覆土内出土。5 分の 1 残存。口径15.2cmで
ある。胎土中には小礫を多く含んでいる。
焼成は良いが他の遺物と比して軽く感じ
る。色調は灰白色である。後世の流れ込み
と考えられる。

高杯 (Fig. 141-3、PL. 60-5) 前庭
部の出土である。杯部と脚部は同一個体と
考えられるが接合は不可能。脚部は二段透
しの器形になると考えられる。杯部は口径
13.2cm、脚部裾の径は15.2cmである。胎土
は白色粒子を含み、焼成は良好である。色
調は灰色である。杯部は歪みがある。

甕 (Fig. 141-4、PL. 60-6) 前庭部
覆土内出土である。口縁部と胴部は同一個
体と考えられるが接合は不可能。胴中位に
は櫛歯状の刺突文が一周する。胴下位に 1
条の沈線が入り、沈線より下位は手持ちに

による篋削りを行なっている。胎土は白色粒子を含む。焼成は良好である。色調は灰色である。

短頸壺 (Fig. 141-5、PL. 60-7) 前庭部出土。3 分の 2 残存。口径9.4cm、頸径8.1cm、胴最大幅14.6cm、高さ10.8cm。口縁部は僅かに外反し、端部は内側に傾斜する。底部は胴下半部から手持ち篋削りを行ない丸底状を呈す。器面は数ヶ所に火膨れ状の部分がある。胎土は黒色粒子を含み焼成は良い。色調は灰色。

台付直口壺 (Fig. 141-6、PL. 61-1) 前庭部覆土内出土、胴部中位から頸部にかけての破片。頸径は10.0cm、胴最大幅径25.1cmである。胴部には櫛状工具による波状文があり、近接する上位に1本、下位に2本の沈線文を施文する。胎土は白色粒子を含む、焼成は良好である。色調は灰色、外内肩部に自然釉付着。

甕 (Fig. 141-7、PL. 61-2) 前庭部覆土内出土、口縁部から頸部にかけての破片。口径23.0cm、頸径18.4cmである。口縁部は大きく外反し口唇部に至る。端部内面は段状を呈す。外面は櫛状工具により波状文がある。この下部に沈線がまわる。頸部中央には2条の平行沈線文がある。口縁端部との間には櫛状工具による波状文を施文している。胎土は白色粒子を含み、焼成は良い。色調は灰色である。

甕 (Fig. 141-8・9・10、PL. 61-3) 8は2号墳表採、9・10は前庭部覆土内出土である。いずれも甕胴部の破片である。外面は叩き目、内面は青海波文と同心円文のあて目がある。

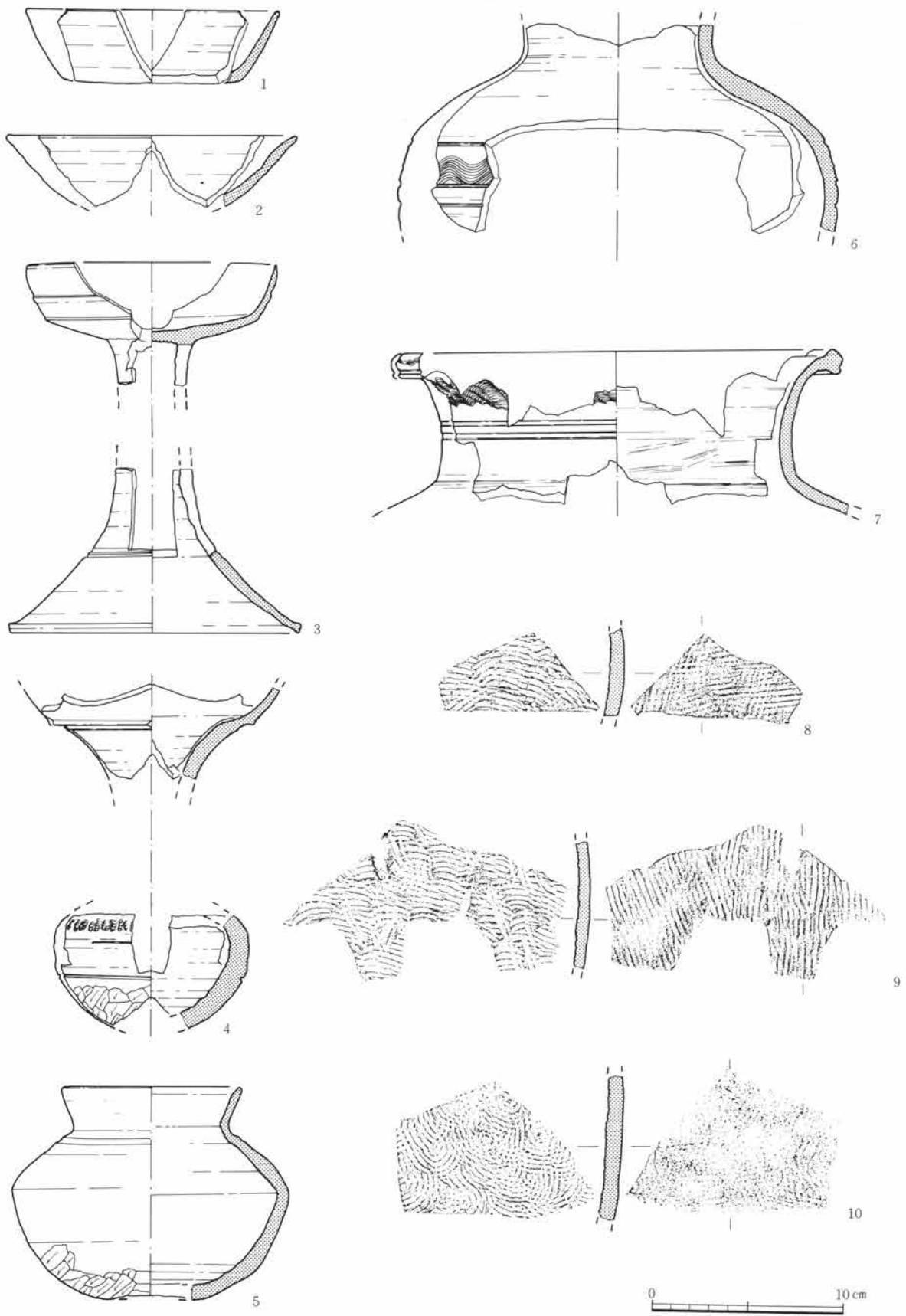


Fig. 141 2号墳出土遺物実測図

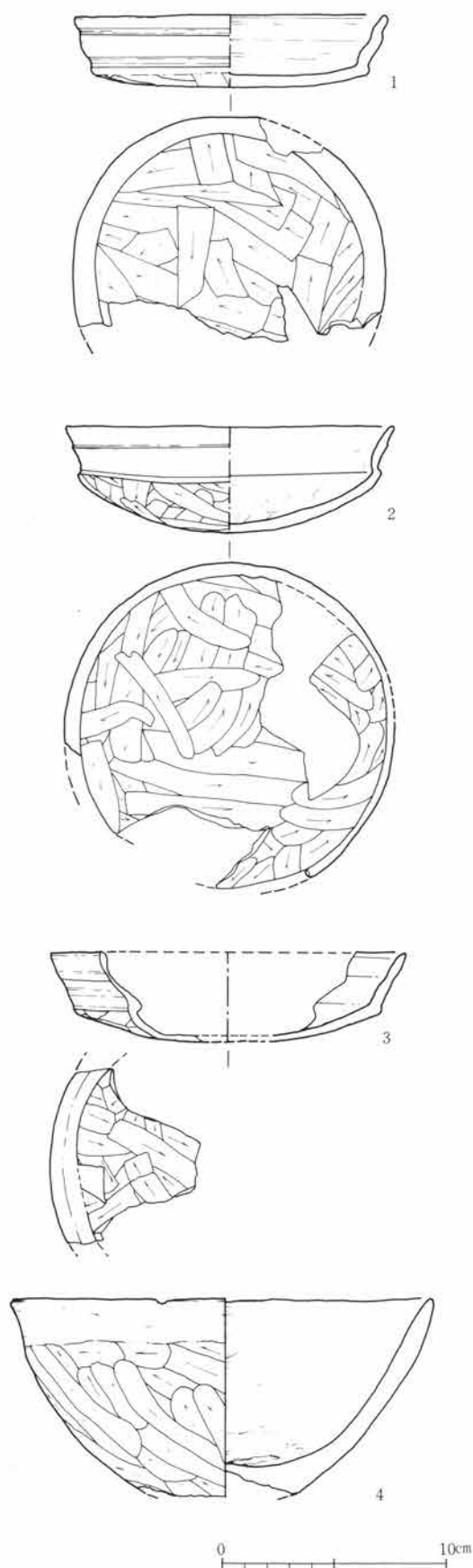


Fig. 142 2号墳出土遺物実測図

土師器

杯 (Fig. 142-1、PL. 61-4) 墓道より出土。3分の2残存。口径は14.0cm。高さ3.2cmである。底部は手持ちによる篋削り、口縁部は横撫でを行なっている。胎土内には小礫を多量に含む。焼成は良好である。色調は暗黄褐色である。

杯 (Fig. 142-2、PL. 61-5) 墓道より出土。4分の3残存。口径14.7cm、高さ4.7cmの底部は手持ちの篋削りにより丸味があり、口縁部は横撫で整形しており、外反する。胎土は砂質である。焼成は良好である。色調は赤褐色である。

杯 (Fig. 142-3、PL. 61-6) 墓道覆土内出土。5分の1残存。口径は15.4cm高さ4.0cm。底部は手持ちの篋削り、口縁部は横撫でを行なっている。口縁端部は直線的に内傾する。

鉢 (Fig. 142-4、PL. 61-7) 墓道床面出土、底部の一部を欠損。口径19.0cm、高さ9.2cmである。底部から胴部にかけては口縁部方向に篋削り、口縁部は横撫でを行なっている。

鉄器

釘 (Fig. 143-1、PL. 61-8) 石室内攪乱層出土、頭は半球状を呈し先端部を欠損する。頭の長径は約1.5cm、短径は約1.2cmである。断面は四角形を呈す。現存する長さは4cmである。

釘 (Fig. 143-2、PL. 61-8) 石室内攪乱層出土。頭は半球状を呈し先端部は欠損する。頭の長径は約1.7cm、短径は1.6cmである。断面は四角形を呈す。現存する長さは3.5cmである。

鉄鏃 (Fig. 143-3、PL. 61-8) 石室内攪乱層出土。棘篋被を中心とした破片であり、篋被部と茎部の一部が残存する。両部分とも断面は四角形を呈す。現存する長さは3.9cmである。篋被部残長2.5cm、茎部残長1.4cmである。

刀子 (Fig. 143-4、PL. 61-8) 石室内攪乱層出土。切先部分の破片と推定される。腐蝕が激しく細部までの観察は不可能である。

直刀 (Fig. 143-5、PL. 61-9) 石室内床面奥壁付近、(Fig. 140)から出土した。刀身中央から切先部分と茎尻を欠損する。残長44.8cm、刀部の残長31.2cm、茎残長13.6cmである。刃区部分は欠損している。刀身は歪んで出土した。茎部分には目釘穴が2箇所ある。区付近での幅は約3.6cm、厚さ9mmを測る平棟造りである。茎の幅は2cm前後を測る。目釘穴の径は約4mmである。目釘穴間は約5.5cmである。

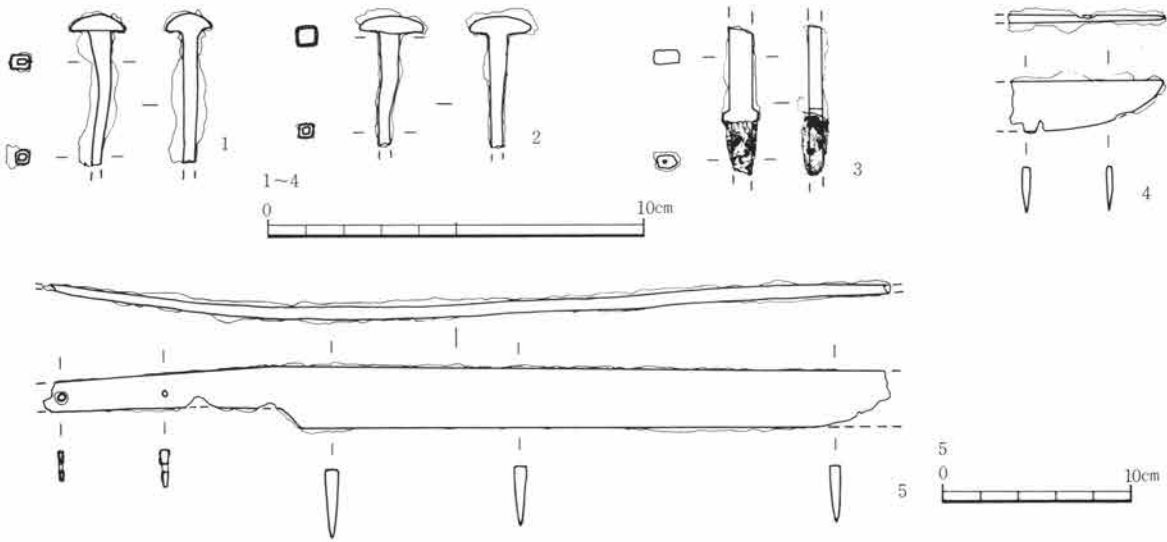


Fig. 143 2号墳出土遺物実測図

2号墳出土遺物一覧表 (円筒埴輪)

単位: cm

挿図番号 図版番号	器高 (残高)	口径	底径	透孔		突帯		胎土	焼成	色調	成形・調整・刷毛目・備考
				上段 (推定)	下段 (推定)	上	下				
Fig. 144-1 PL. 62-1	(11.2)	(24.4)		(4.8)		1.0		主に砂質、礫を一部包含	良好	橙	突帯の上位に横方向の沈線が一部入る。刷毛目は荒い。
Fig. 144-2 PL. 62-2	(15.4)	31.0				1.6		主に砂質、礫を一部包含	良好	明赤褐	外面は主として縦刷毛、内面は斜方向に刷毛目がある
Fig. 145-1 PL. 62-3	(15.7)	(36.6)				0.8		主に砂質、礫を一部包含	良好	橙	朝顔形である。外面は縦刷毛、内面は横刷毛である。
Fig. 145-2 PL. 62-7	40.2	20.4		(3.9)		1.0	1.0	砂質に雲母・石英を含む	良好	にぶい橙	内外面とも縦刷毛、内面基部は篋撫で。
Fig. 145-3 PL. 62-4	(16.8)					1.2	1.3	小礫混入	良好	にぶい赤褐	外面は縦刷毛、内面は縦方向に撫で調整。
Fig. 145-4 PL. 62-5	(19.2)			(4.6)		1.4	1.2	小礫混入	良好	明赤褐	外面は縦刷毛。内面は横刷毛、筆記号あり。
Fig. 145-5 PL. 62-6	(27.0)		13.0		(4.2)	1.5	1.4	小礫混入	良好	にぶい赤褐	内外面とも縦方向に器面調整。
Fig. 145-6 PL. 62-6	(21.3)		11.0		(4.0)	1.3		小礫混入	良好	明赤褐	外面縦方向に器面調整。内面上位は刷毛。下部は撫で。
Fig. 145-7 PL. 62-8	(12.6)		(16.0)					小礫混入	良好	赤褐	外面は縦方向に器面調整。内面は斜方向に撫で。
Fig. 145-8 PL. 62-9	(12.8)		(16.0)					小礫混入	あまい	橙	外面底部は板おさえ。内面底部は強い横撫で。

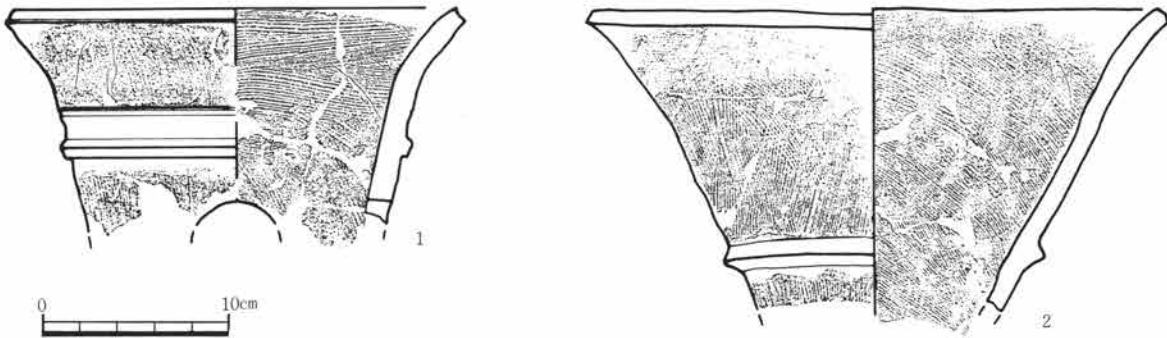


Fig. 144 2号墳出土遺物実測図

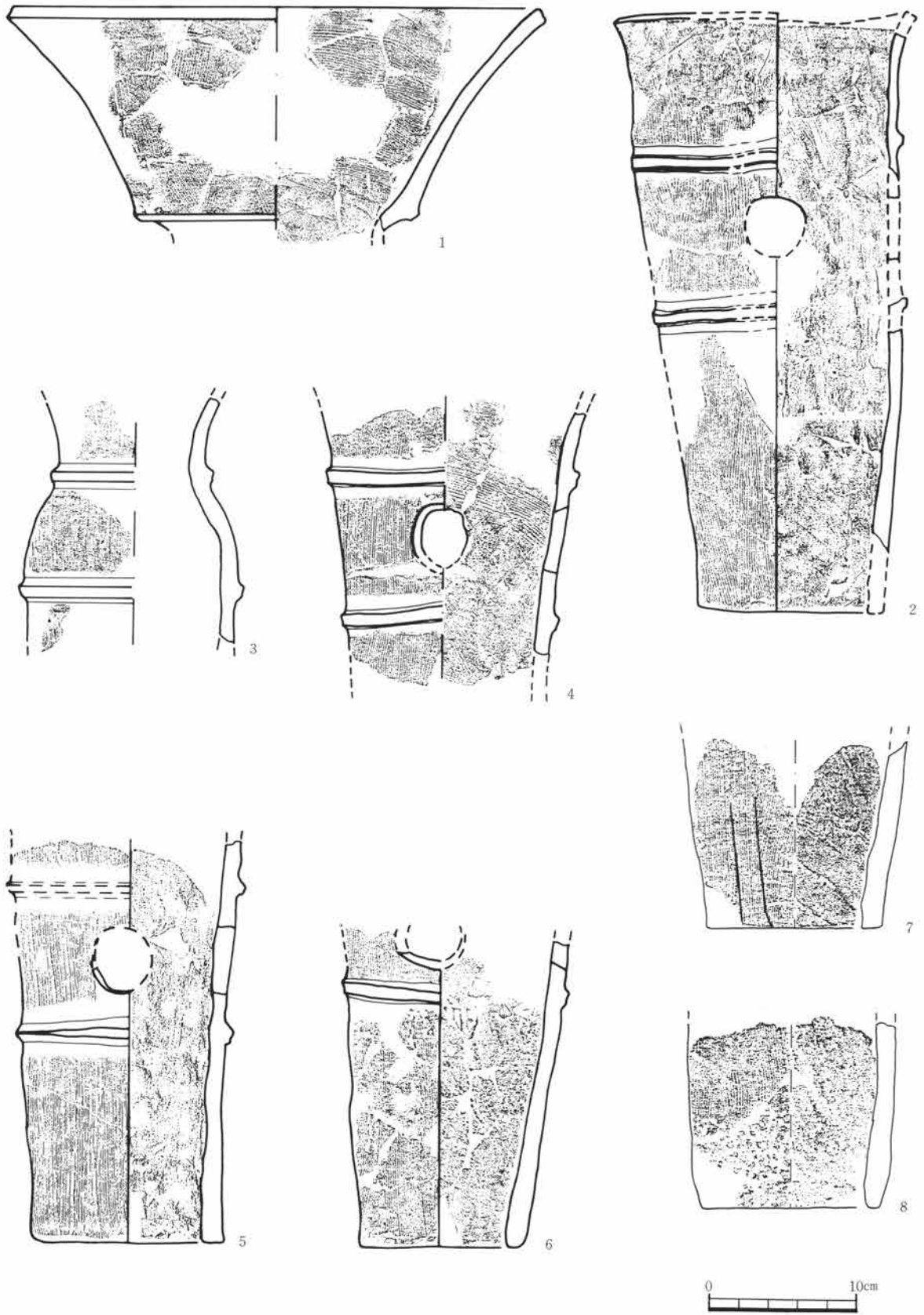


Fig. 145 2号墳出土遺物実測図

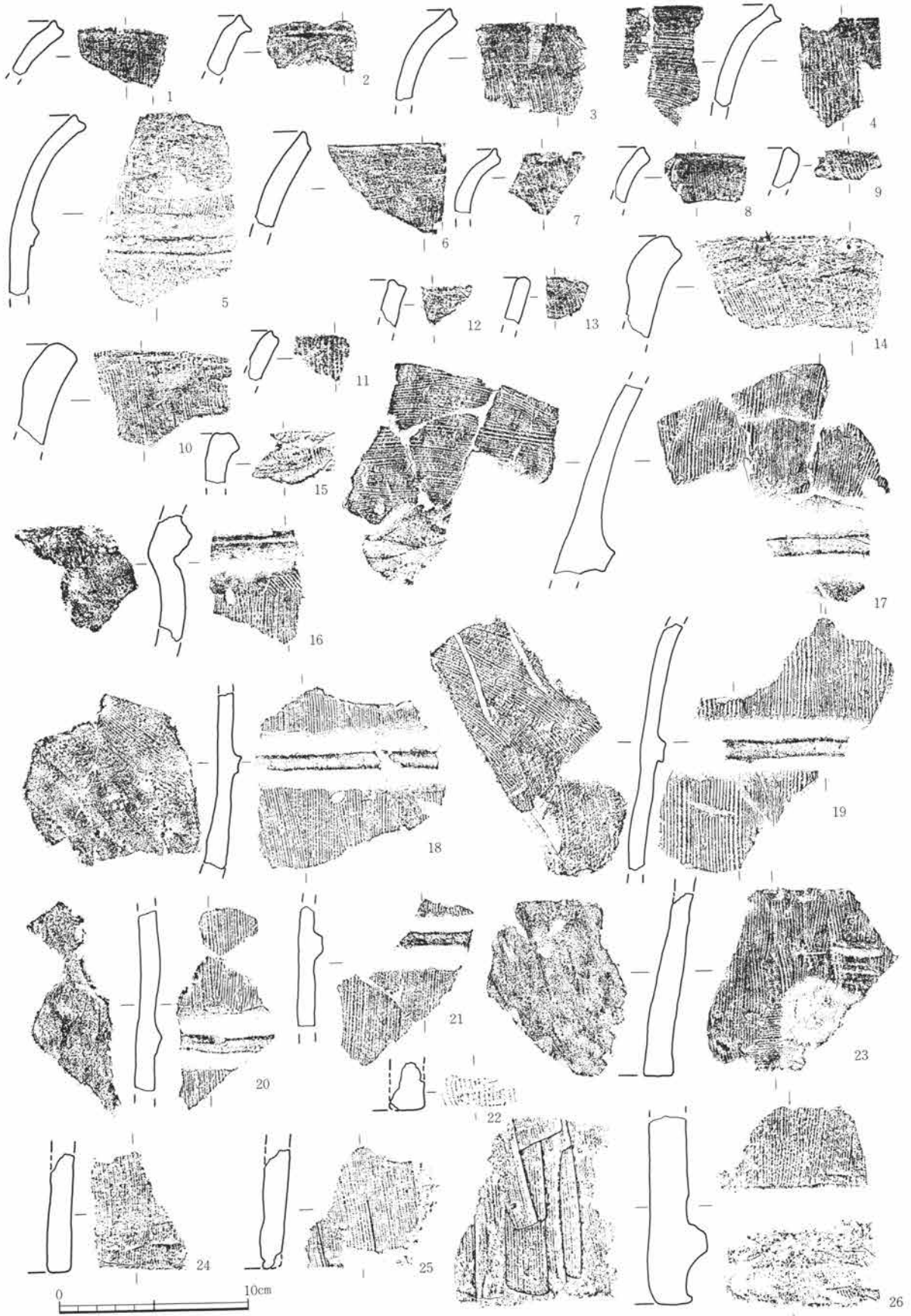


Fig. 146 2号墳出土遺物実測図

3号墳 (Fig. 137・147・148・149、PL. 63—1～2・64—1～8・65—1～3)

位置 上毛古墳綜覧記載漏。清里・長久保遺跡の北東部に位置している。北側に道路をはさんで2号墳がある。石室間の距離は約20mである。2号墳からの南傾斜部分に連続してつくられている。

墳丘と外部施設 いわゆる陣場泥流の残丘南斜面につくられた山寄せ式の円墳。調査時点では傾斜面にわずかな高まりが見られた程度で盛土はほとんど削平されていた。傾斜地につくられているところから、特に南半部において残丘上に堆積した黒色土層等を削り出し墳形を整えた形跡が著しい。しかし、北半部にあつては、地層観察の結果においても、構築時の地山を削った形跡はない。この上にどれほどの盛土がなされたかは削平のため明らかでない。

墳丘西側のトレンチでみると、傾斜地に堆積した浅間C軽石を含む黒色土層を削って墳丘裾部を整形した形跡が認められる。また、墳丘西側にあつては、石室入口から続く葺石根石列が一部残存していた。この根石は構築時地山(黒褐色土層)上に直接置かれていた。この根石列は墳丘東西及び北側には認められない。葺石は、墳丘前面、すなわち、石室入口の両側に葺かれたものであろうか。

前庭。石室入口前には平面長方形の前庭がある。奥の石組は前述の葺石石組であり、これに左右壁の石組が接している。葺石石組をまわした後に左右壁をとりつけたものである。前庭の幅は、後述する石室「掘り方」の幅にほぼ一致している。前庭部分も構築時地山(黒褐色土層)を40cmほど掘り下げ、その法面に石を積み上げている。前庭部先端の位置と東側トレンチにみられた墳丘裾部削り出しの位置とは、石室奥壁からほぼ同距離にある。少なくとも、前庭先端に対応する位置から、石室入口に接する葺石根石に至るまでの間は地山を整形して墳形を整えていることは明らかである。墳丘中半に葺石根石があることから二段築成に見せることを意図していたとも考えられる。墳丘北は道路、東は切り取りにより未確認部分も多いが以上のことから墳丘の直径は16m前後、葺石根石列に連続するところで直径10m前後のものと考えられる。前庭の規模は奥幅3.45m、前幅3.65m(推定)、奥行2.70m(右)である。周堀、埴輪は無い。

主体部の構造 自然石使用の両袖型横穴式石室である。石室の主軸方位はN-7°-Wである。石室は、奥幅3.85m、前幅3.40m、長さ6.40m、深さ90cmの「掘り方」の中に構築している。使用している石材はすべて川原石であり、比較的大ぶりの石を平積にしている。特に玄室においてこの傾向が強い。奥壁は1.1×1.3mほどの大石を中央に据え、その両側に小ぶりの石を寄せて積んでいる。奥、側壁ともに上半部が除去されているため、石室の高さは明らかでない。玄室入口には、たて長の石を立て玄門を設置しているが、羨門はない。石室壁石は、いずれも「掘り方」底面に直接設置している。石室床の構成は、玄室と羨道とでは異なる。玄室では「掘り方」底面上に5～10cmほどの厚さに土を入れて整地し、その上に直径10cm前後の小礫を一面に敷きつめて床としている。これに対し、羨道では、「掘り方」底面上へ土は入れず、直径30cm前後の人頭大の石を底面に直接置いている。玄室床は上面がほぼ平坦になるよう配慮されているのに対し、羨道部は、最下面で使用している石も不ぞろいで面もそろっていない。羨道部分は、この上にさらに閉塞のため礫が詰め込まれているのが通例である。壁石裏面と「掘り方」法面との間にできた10～20cmの間隙には礫を投げ入れて裏込めとしている。これら裏込め石もすべて取り除き、壁石を露出させてみると、使用している石のほとんどが、裏側はそれぞれ凹凸があるが、石室壁面は平らな面を有している。石室はすでに盗掘、攪乱され、須恵器・土師器片の出土が僅かにある。石室の規模は、全長5.87m、玄室左壁長2.40m、同右壁2.25m、同奥幅1.85m、同最大幅1.95m、同前幅1.80mで多少胴張りの傾向がある。羨道長3.60m、同奥幅0.87mである。

小結 本古墳は、玄門を有する両袖型横穴式石室を主体部とする円墳で、石室前には石組をもつ前庭がある。全長、玄室長、同奥幅、羨道長等に唐尺使用の傾向も認められる。(松本)

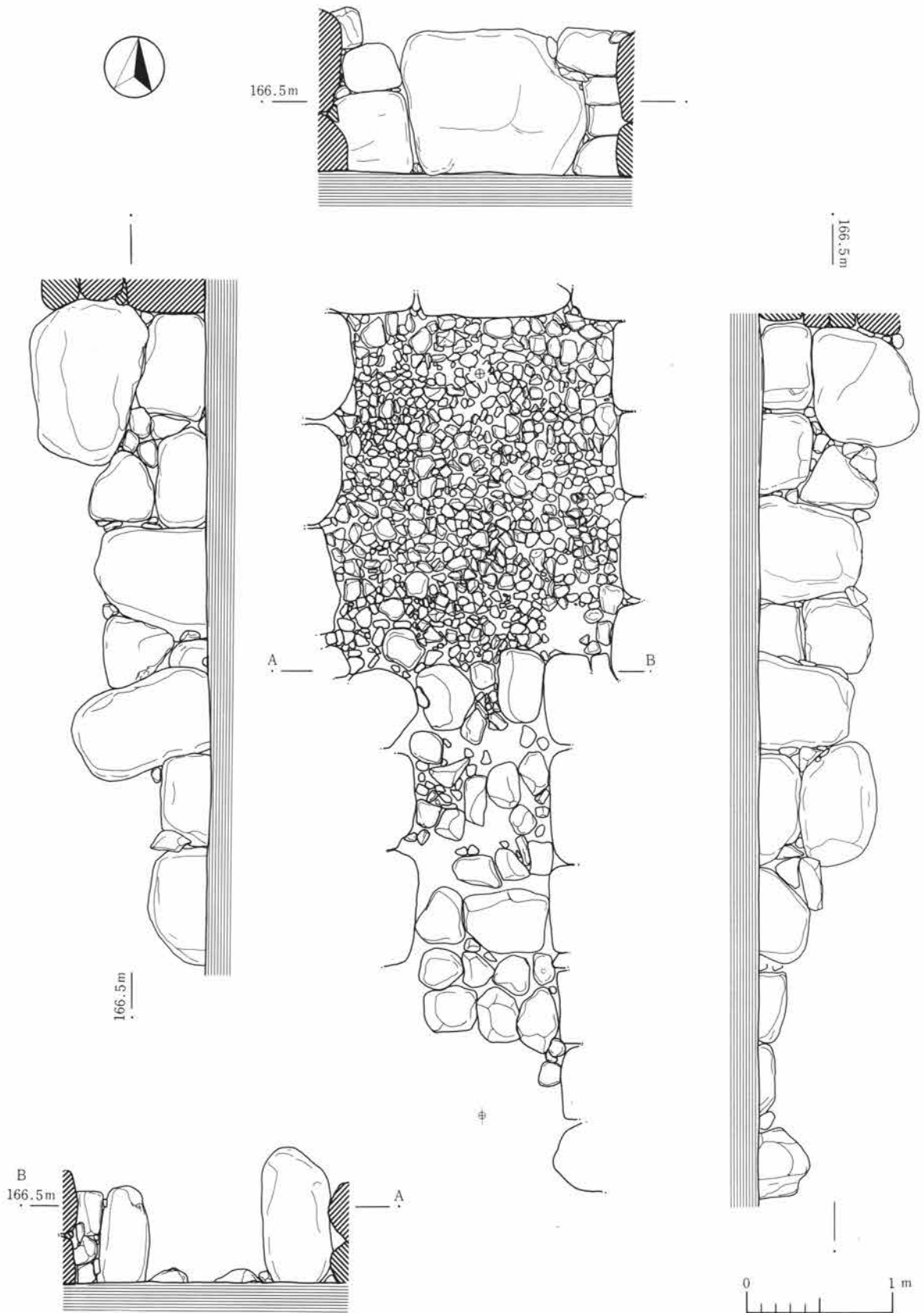


Fig. 147 3号墳石室実測図

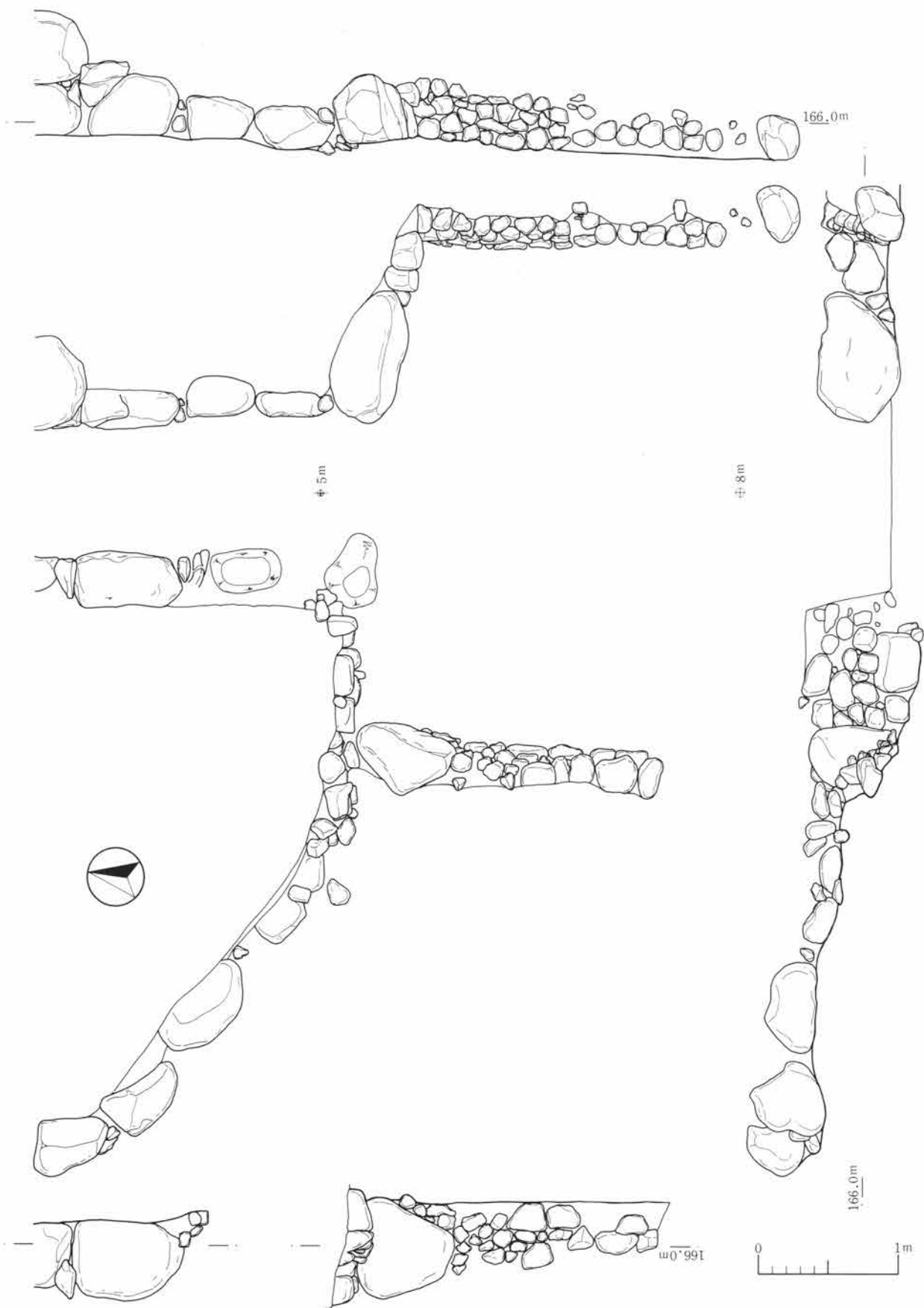


Fig.148 3号墳前庭部石組と葺石実測図

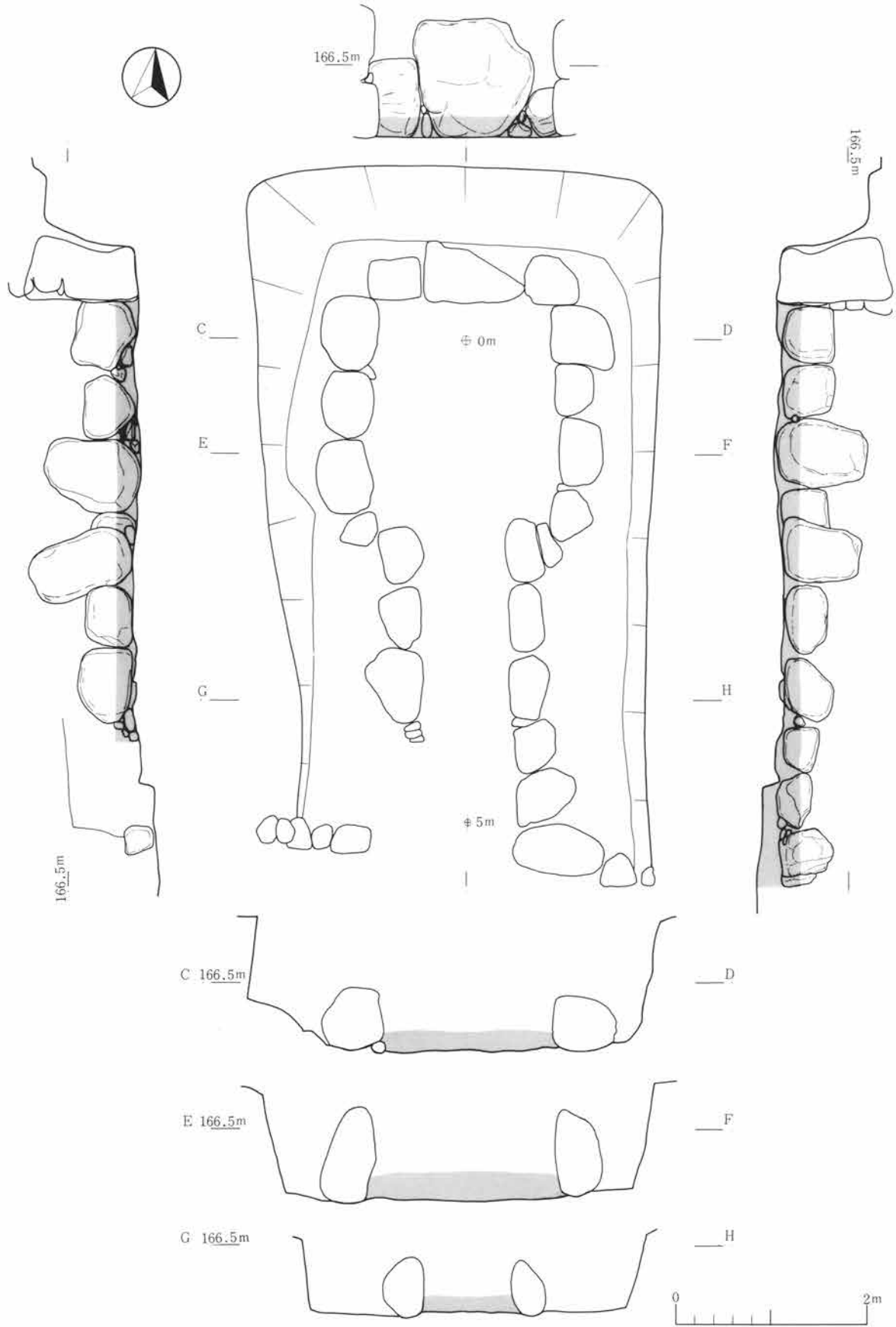


Fig. 149 3号墳石室掘り方と根石実測図

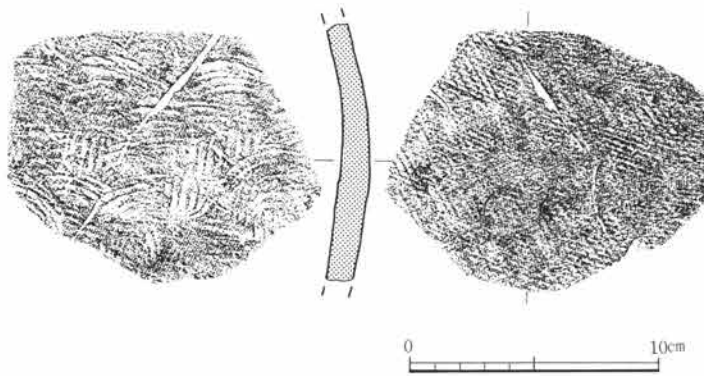


Fig. 150 3号墳出土遺物実測図

出土遺物

須恵器

甕 (Fig. 150、PL. 65—4) 石室内堆積土中出土。胴部の破片である。外面は叩き目、内面は青海波文のあて目がある。胎土は白色粒子を多数、黒色粒子を少量含んでいる。焼成は良好である。色調は灰色である。

4号墳 (Fig. 151・152・153、PL. 65—5・66—1～5)

位置 上毛古墳綜覧記載漏。清里・長久保遺跡北東部の午王頭川右岸に近接している。北には1号墳、西には3号墳が位置している。1号墳主体部からの距離は約40mの間隔がある。

墳丘と外部施設 北から南へ向って下る緩斜地につくられた山寄せ式の円墳である。調査時点では、墳丘大半は削平され、傾斜角およそ3度の傾斜面上にわずかに高まりをみせていたにすぎない。

墳丘東西にいた2本のトレンチにより周堀の存在が確認されたため、周堀部についてはさらに拡張して調査した結果、墳丘北半部から西半部にかけて周堀を検出することができた。周堀の様子から、本古墳は、直径約8m(周堀内側)の規模の円墳とみてよい。周堀外周線は直線部分も多く円形にはなっていないがその規模は東西でおよそ12.6mである。

墳丘盛土は、調査時点では全て削平されており、墳丘部にいたトレンチ調査によっても確認し得なかった。しかし、墳丘築成にあたっては、2号墳の墳丘と同様に構築時地表を削り出して墳丘裾部を整形していたとみられる。トレンチによる所見は次のとおりである。

墳丘西、後述する石室「掘り方」法面から西へ約2.9mのところ、榛名山二ツ岳噴出のFA層及びその下層の浅間C軽石を含む黒色土層を削り出して墳丘状に整形している。前述の周堀の立ち上りは、この地山削り出し部分からさらに2m外側、すなわち、石室「掘り方」法面から4.9mのところ確認される。この幅2mの間は、浅間C軽石含黒色土層の下層にあたるローム漸移層を上面としており、上にあるべき2つの層はみられない。FA層及び黒色土層の2層を取り除きテラス状平坦面をつくり出したものとみられる。周堀もこのローム漸移層から掘り込んでいる。また、周堀外周外側部分でもFA層、黒色土層はみられない。この部分でも上層を除去し、地山を整形することで、二段築成の墳丘の形態をつくり出し、墳丘の見かけの高さを増す手法をとっているものと考えられる。

墳丘東、上面の削平のため、墳丘西のトレンチに比較して墳丘の状況は把握しにくい。ただ、石室「掘り方」から4.7mの所で、ローム漸移層を掘り込んだ周堀立ち上りが確認できる。テラス状遺構及び墳丘整形の様子は本トレンチでは明らかでない。

墳丘北西部で周堀と墳丘との関係を見ると、周堀内側に幅1.2mほどのテラス状平坦面とみられる部分がある。前述のとおり、傾斜地にあり、上面削平の著しい本古墳では、構築時の墳丘の実態は不明な点が多いが、一部トレンチの所見から、周堀内側に地山を整形してテラス状平坦面及び墳丘裾部をつくり出し、二段築成の形態にととのえた円墳と考えることができよう。平坦面を含めた規模は約12.6m、墳丘部径約8mである。石室入口は墳丘部先端に開口し、石室前のテラス部分には浅い前庭状の切り込みがみられる。

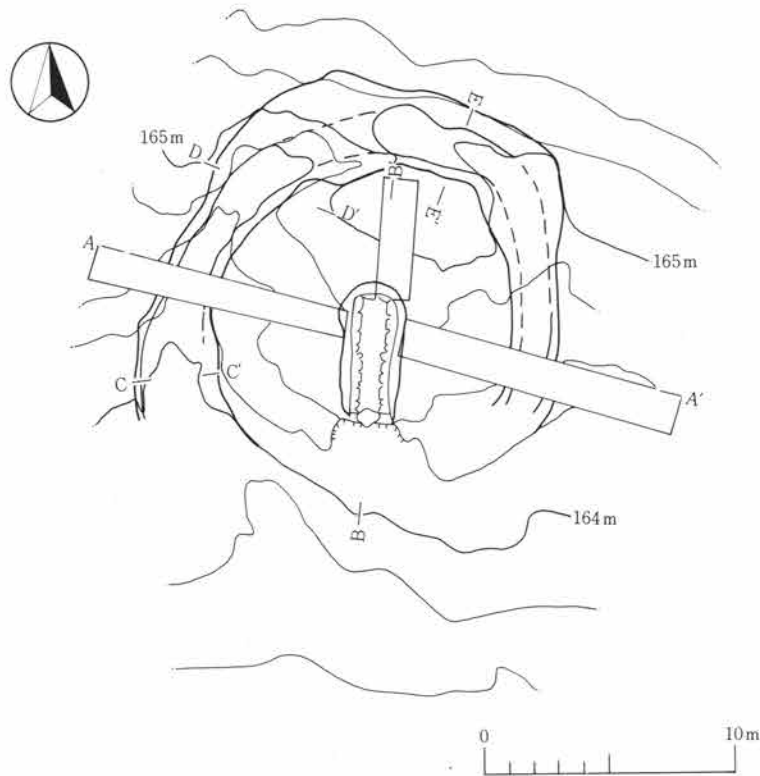


Fig. 151 4号墳墳丘等高線図

周堀は、墳丘南側を除いた部分で確認された。調査時点で残された状況は、西及び東の部分ではしっかりした形状を把握できたが、北側部分ではかなり浅くなっている。地形的に最も高い位置にある北側で最も深くなるものと考えられるが、この部分で浅いことからするとここに「わたり」的な構造があったとも考えられる。南側は地形的に低い所でもあり、石室入口前には周堀はなかったものとも考えられる。周堀の規模は場所によって差があるが、北東部の最もしっかりした部分でみると、上幅2.60m、下幅1.60m、深さ0.2mである。埴輪の配列はない。

主体部の構造 主体部は、自然石（川原石）を使用した両袖型の横穴式石室である。石室は、調査時点の状況でみると、褐色粘質土層を約80cm（奥壁近辺）の深さに掘り込んだ「掘り方」の中に構築している。この褐色土層の上には黒色土層、FA層等の堆積もあったものと考えられ、構築当初の「掘り方」の深さは1mをこえたものと考えられる。「掘り方」平面形は、多少の凹凸はあるがほぼ隅丸長方形で、奥幅2.67m、前幅2.80m、長さ5.50mである。

石室各壁の根石は、上記「掘り方」底面に直接据えているが、根石の下に小礫を詰め込んだり、「掘り方」底面を掘り込んで据える等の方法で座りを安定させている。使用している石のほとんどは川原石である。側壁・奥壁とも上半部はすでに取り除かれ下半部を残すのみである。側壁は小口積を主体とするが、玄室では根石にやや大ぶりの石を使用しており、平積のものも認められる。奥壁はほぼ同大の石2石を並列して設置している。ともに平積である。この上にさらに1～2段の石積があったものと考えられる。石室床は、「掘り方」底面上に人頭大の川原石を主体とした敷石を石室内いっばいに敷き並べている。特に玄室では上面が平らな石を選んで敷いている傾向がある。玄室では、さらにこの上に小礫を敷きつめて床としたと考えられる。これに対し、羨道では敷石上面にかなり凹凸がみられ、上面を平らにする意図はうすい。この上に石室閉塞

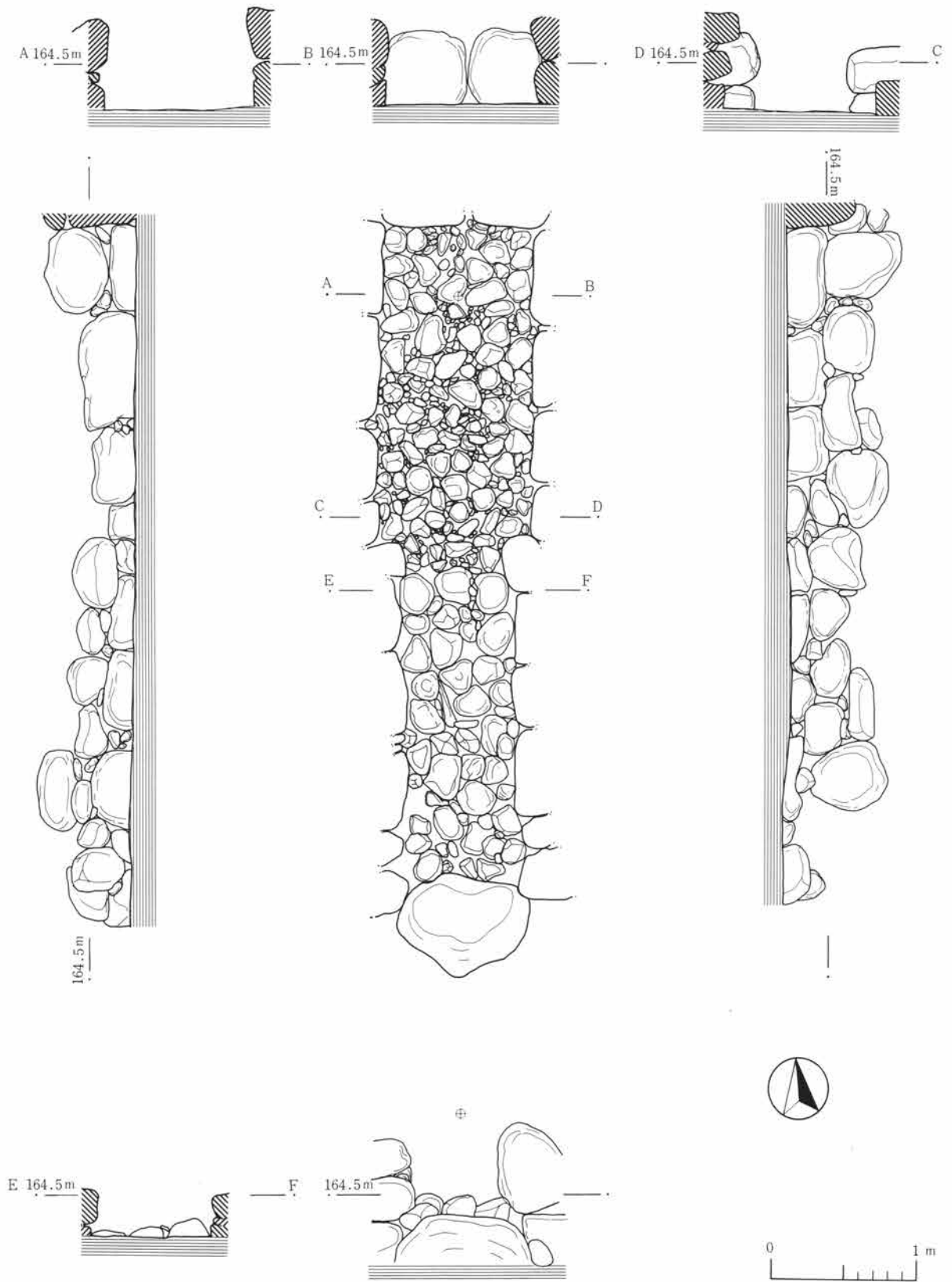


Fig. 152 4号墳石室実測図

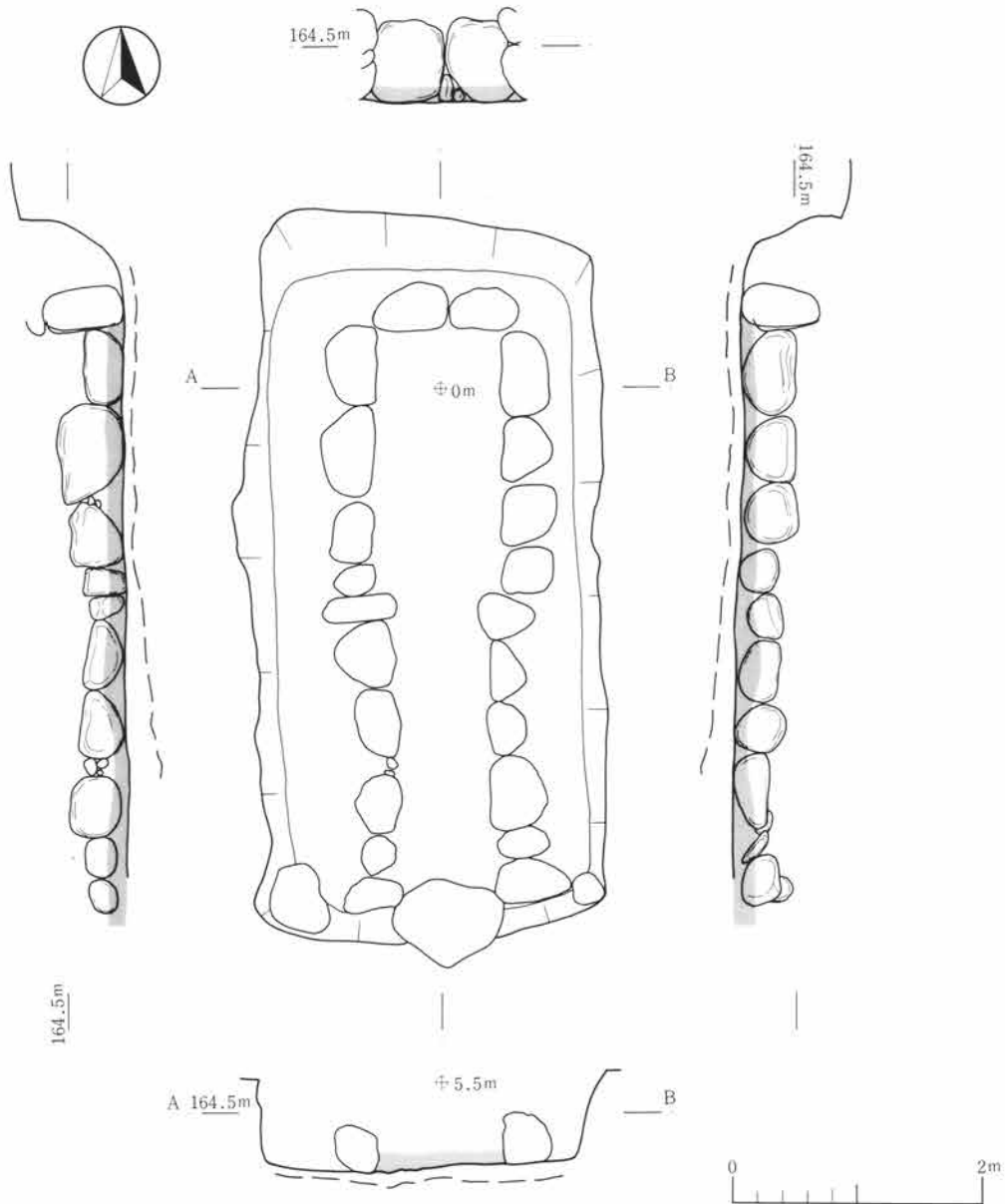


Fig.153 4号墳石室掘り方と根石実測図

の礫を投げ込んでいったものであろう。注目すべきは、石室入口部床面上に羨道幅いっぱいに据えられた90cm×70cmの大石である。石室入口の左右側壁の根石下端はこの石の上のっており、石を据えた後に壁石を積んでいることは明らかである。石室の全長、入口の位置、入口幅等をあらかじめ定めた後に壁石を積んでいることを如実に物語る資料である。玄門、羨門はない。なお、副葬品は全く残されていなかった。

壁石の裏側は、図版に見るように、壁石裏面と「掘り方」法面との間にできた20～30cmの間隙いっぱいに礫を投げ込んで裏込めとしている。「掘り方」上面から上に出た部分については、本古墳では不明である。

石室の規模は、全長4.60m、玄室長は右壁で2.05m、左壁で2.13m、同奥幅1.03m、同前幅1.05m、羨道長は右壁で2.45m、左壁で2.50m、同奥幅0.65m、同前幅0.73mである。主軸方位はN-1°-Eである。

小結 本古墳は、榛名山噴出のFP降下後に構築された両袖型横穴式石室を主体部とする円墳である。玄門、羨門はなく、高麗尺使用の傾向が認められる。 (松本)

5号墳 (Fig. 154・155・156・157・158、PL. 67-1~2・PL. 68-1~8)

位置 上毛古墳総覧旧駒寄村22号墳に比定でき、前方後円墳となっているが周堀は未確認であった。北北東に地形が延びるが、円墳のくずれた可能性がある。当古墳は午王頭川の右岸南へ約100m、1号墳と7号墳のほぼ中間に当たり、両古墳からそれぞれ約150mの位置にある。

墳丘と外部施設 陣場泥流残丘上につくられた古墳であり、残丘を利用した高さ約4m、直径約20mを計測できる。墳丘は北側にくずれた様相がある。主体部は墳頂部から南東傾面に掘り込んでいる。墳形を整えた形跡は4本のトレンチの一部で確認できた。

墳丘南西のトレンチで土層を観察したところ、墳頂部からおよそ8~9mの地点までは陣場泥流堆積物が露出している。この地点より裾部にかけて墳形を整形したと考えられる。北東、北北東、北西部に入れたトレンチでも墳頂部付近で6~7mの地点まで陣場泥流堆積物が露出している。この3本のトレンチで約6~7mの地点で段状に20~70cmほど削り込み、再び裾部へ向い緩傾斜で下がっている。墳丘上には明確な形状での葺石は見られない。

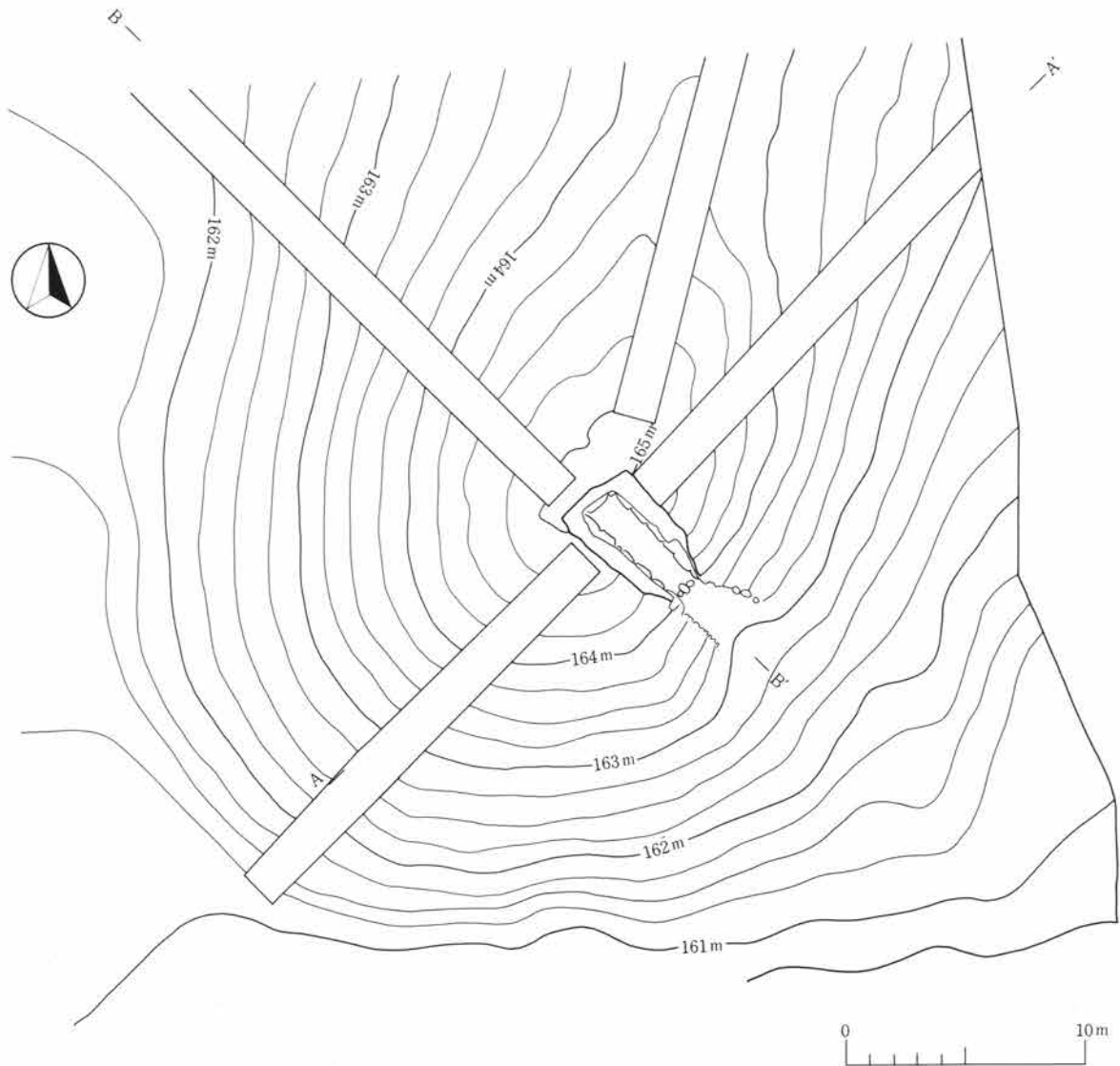


Fig. 154 5号墳墳丘等高線図

前庭。南東方向に開口する石室の前には台形状を呈する前庭部がある。前庭部左壁の石組は玄室左壁に平行している。長さは羨道部入口から前方へ約1.85mの間石組が見られる。一方前庭部右壁の石組は外側前方（東北東）に向けて直線的に延び、石室入口から約2.2mである。前庭部先端の幅は約2.5m、石室寄り部分の幅は約1.55mである。前庭部の石組は石室構築後に取り付けられたものである。前庭部石組の構築方法は、地山の「掘り方」法面に自然石丸石を積み上げている。前庭部先端で1石、石室寄りで7石が残っており、高さ約0.5mを測る。前庭部先端の前には南に方向を変えながら幅約2mで墓道と推定される僅かな落ち込みが確認できた。土層と前庭部からの状況で段状に削り出した部分までの大きさは直径約20m、裾部までの計測では不明確であるが、周辺の平坦地までの境とすれば約40mとなる。

主体部の構造 自然石乱石積の袖無型の横穴式石室である。石室の主軸方位はN-42°-Wである。調査時点ですでに天井石は全て無く、壁石も玄室部で2段、羨道部で根石のみが残存するにすぎなかった。石室の構築は陣場泥流丘（墳頂部）を掘り込んで「掘り方」をつくっているが、墳頂部の封土は表土以外確認できなかった。「掘り方」の平面形は羽子板状を呈しており、石室入口部分が狭くなっている。「掘り方」長軸の上幅は約5.6m、下幅5.2m、「掘り方」玄室部の短軸は上幅約3.4m、下幅約3m、石室入口部分（羽子板状掘り方の柄にあたる部分）は、上幅約2.2m、下幅約1.8mである。深さは約1.3mである。「掘り方」底面はほぼ平坦に整形した後に壁石根石を並べ、玄室側と裏込側から固定させるために小ぶりの石を挟み込んでいる。「掘り方」法面と壁石との間隔は狭い。この空間部分に、裏込めとして川原石と小礫を多量に含む暗灰褐色土を詰めている。

石室は袖無型であり、奥壁寄りが僅かに広く羨道部前方に向い除々に狭くなる。玄室部と羨道部の境には榎石がある。玄室部床面の細かな石に対して、羨道部床面は10~20cm大きさの川原石が敷かれている。「掘り方」から床面までは10cm前後の礫を敷いている。

石室の規模は全長5.0m、玄室部の長さ2.95m、同左壁の長さ2.98m、同右壁の長さ2.97m、羨道部の長さ2.05m、同左壁の長さ2.25m、同右壁の長さ1.97m、玄室奥壁幅1.16m、同高さ残存高は1.56m、同前幅1.14m、同最大幅1.24m、羨道部前幅0.99mである。奥壁は巨石が2つ積み重ねられているが、この上に1石乗るかは不明である。

遺物出土状況 玄室内からの出土遺物は鉄器類がある。玄室全体に拡がりをもつ。平根鏃・刀子・馬具の他、鉄片がある。玄室中央部分に須恵器片がある他、玄室入口右壁寄りにほぼ完形で長頸壺が出土した。また人骨片と歯は玄室中央から奥壁にかけて出土しているが、かなり移動している様子である。一方前庭部先端中央部からの出土遺物は土師器の杯、短頸壺の他、須恵器の高杯脚部片などがある。前庭部右壁先端部石組上から提瓶が出土している。

小結 当古墳の土層堆積状況で周辺古墳と同一視できる部分は、黒色土中に浅間C軽石が混入している土層の上位に二ツ岳降下火山灰層（FA層）の堆積が北西トレンチで見られる。このFA層の上位の土層は耕作土となっているため結論づけがたいが、FA層の一部を削って裾部をつくった可能性がある。また出土遺物の長頸壺は東海地方からの搬入品と思われる。（相京）

出土遺物 (Fig. 159・160・161, PL. 69-1~7・70-1~3)

土師器

杯 (Fig. 159-1, PL. 69-1) 前庭部出土。2分の1残存。口径12.3cm、高さ4.8cmである。底部は丸底であり手持ちによる篋削りを行なっている。肩には僅かに稜をもち、口縁部は内湾ぎみである。胎土には小礫が混入している。焼成は良好。にぶい橙色を呈す。一部は吸炭している。

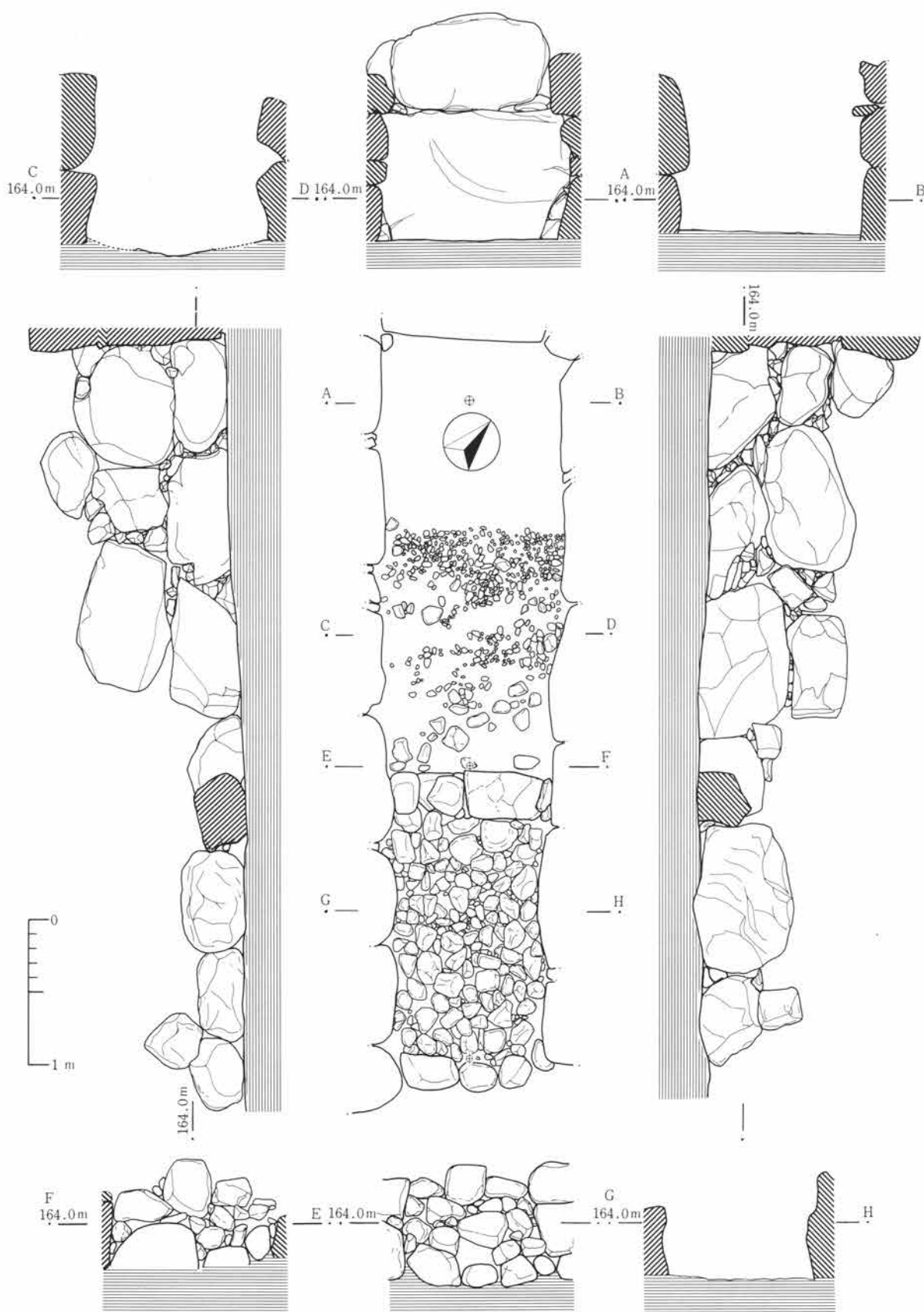


Fig.155 5号墳石室実測図

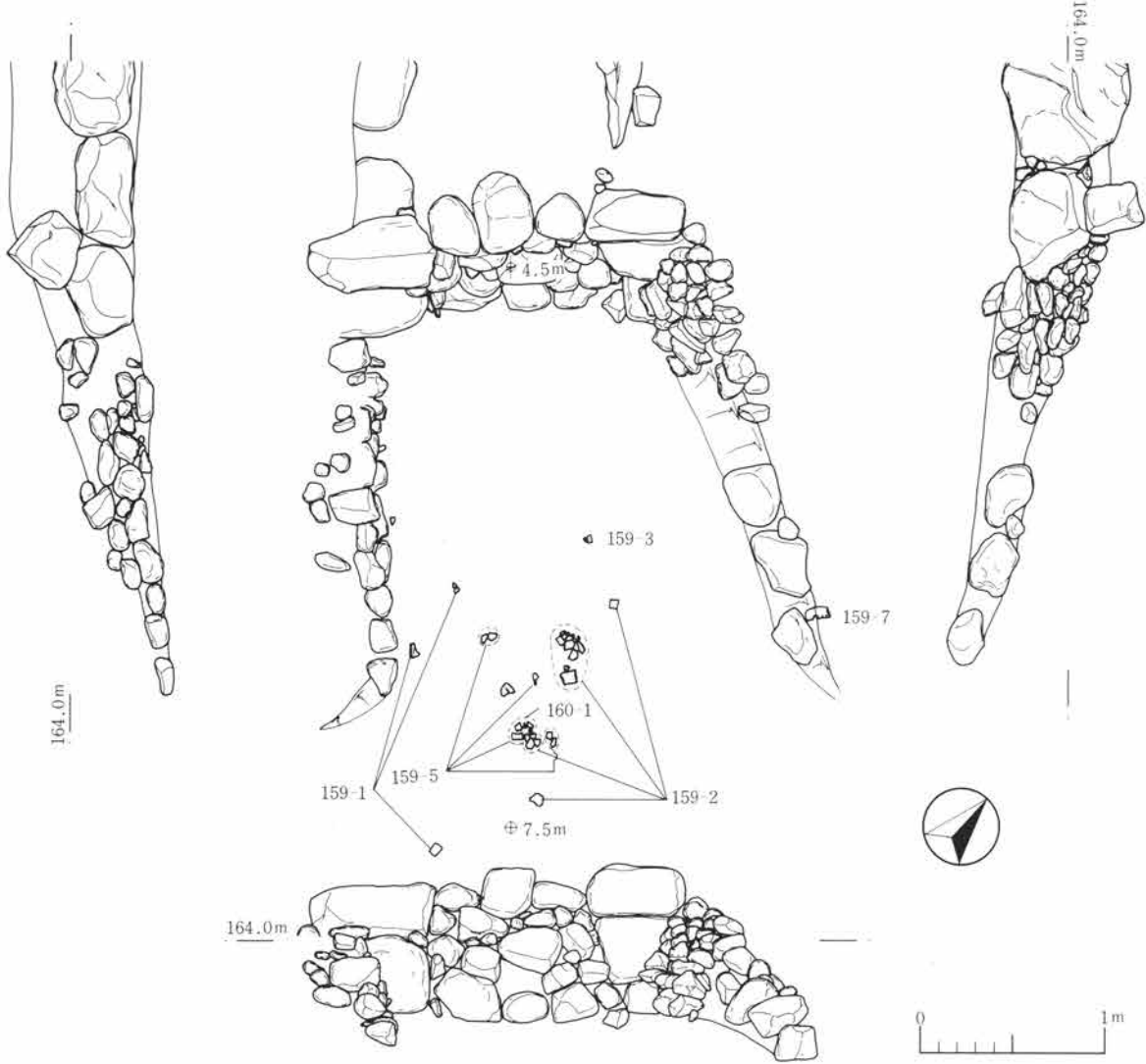


Fig.156 5号墳前庭部石組と遺物出土状況図

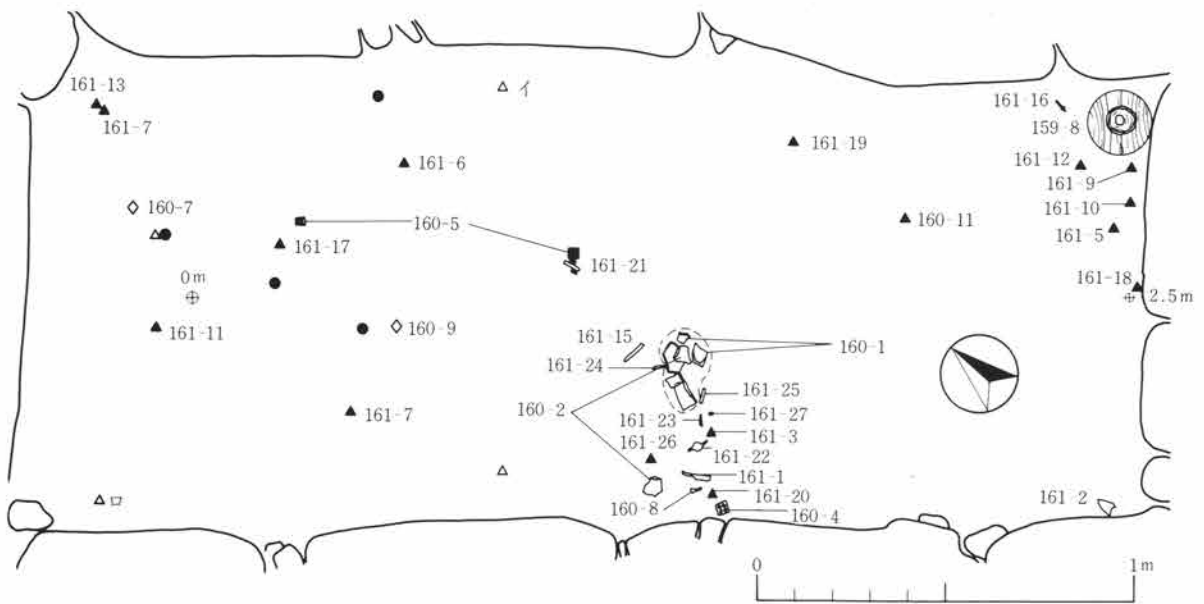


Fig.157 5号墳石室内遺物出土状況図

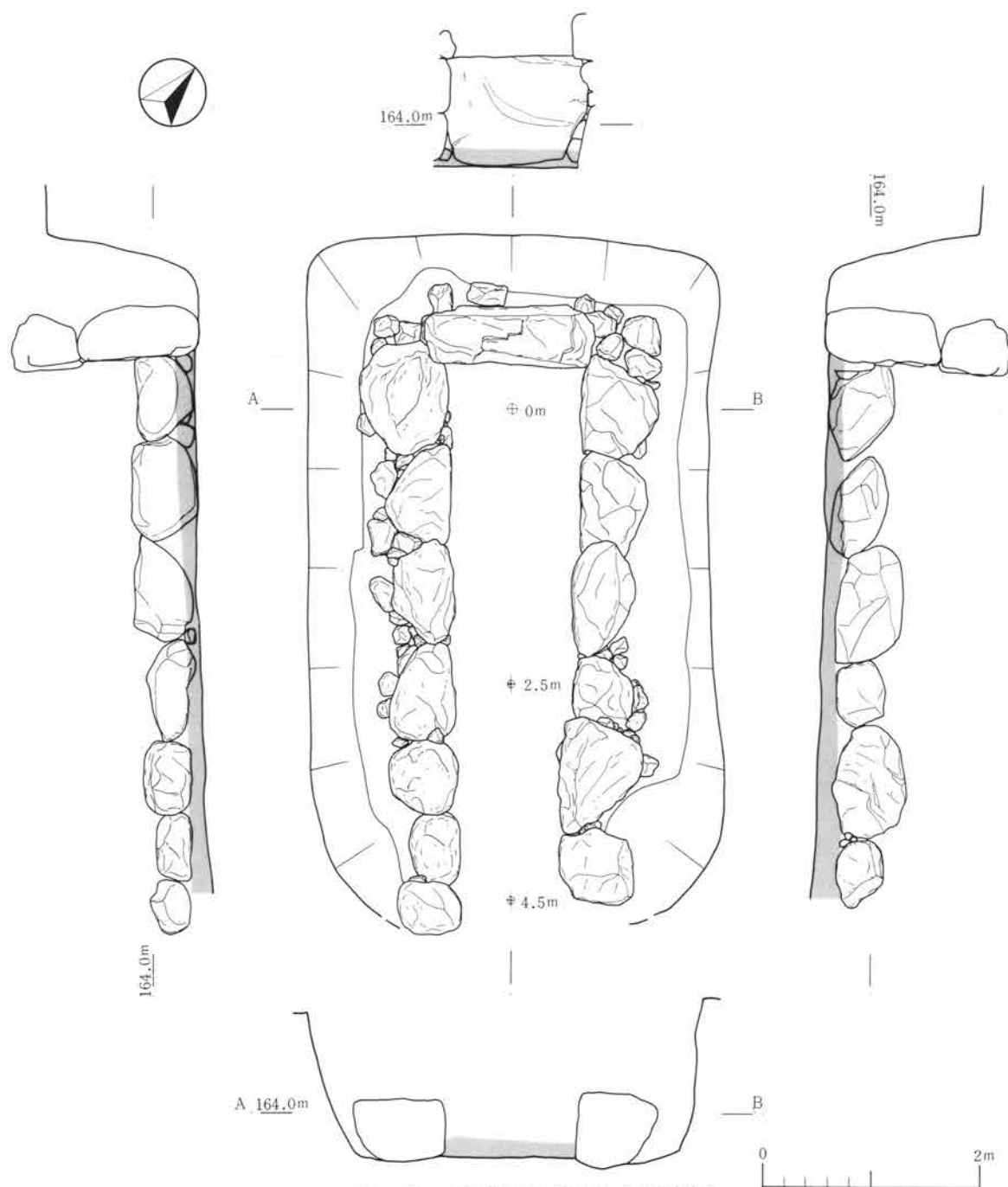


Fig. 158 5号墳石室掘り方と根石実測図

短頸壺 (Fig. 159-2、PL. 69-2) 前庭部出土。口径10cm、器高11.8cm。丸底を呈し、胴部は球形状である。口縁部は直立し、口縁中位で段をもつ。胴部は篋磨き、口縁部は横撫で、焼成は良好。橙色を呈す。

須恵器

不明 (Fig. 159-3、PL. 69-3) 前庭部出土。袋物胴部破片、径12.1cm、轆轤による引きが強い。胎土は白色鉾物を多量に含む。焼成は良好である。色調は灰色である。

短頸壺 (Fig. 159-4、PL. 69-5) 前庭部覆土内出土、胴上半部を欠損する。頸径約11.0cm、胴最大幅径14.3cm、底径5.4cmである。外面胴下半分は回転篋削りによる器面調整を行なっている。胎土は白色粒子と

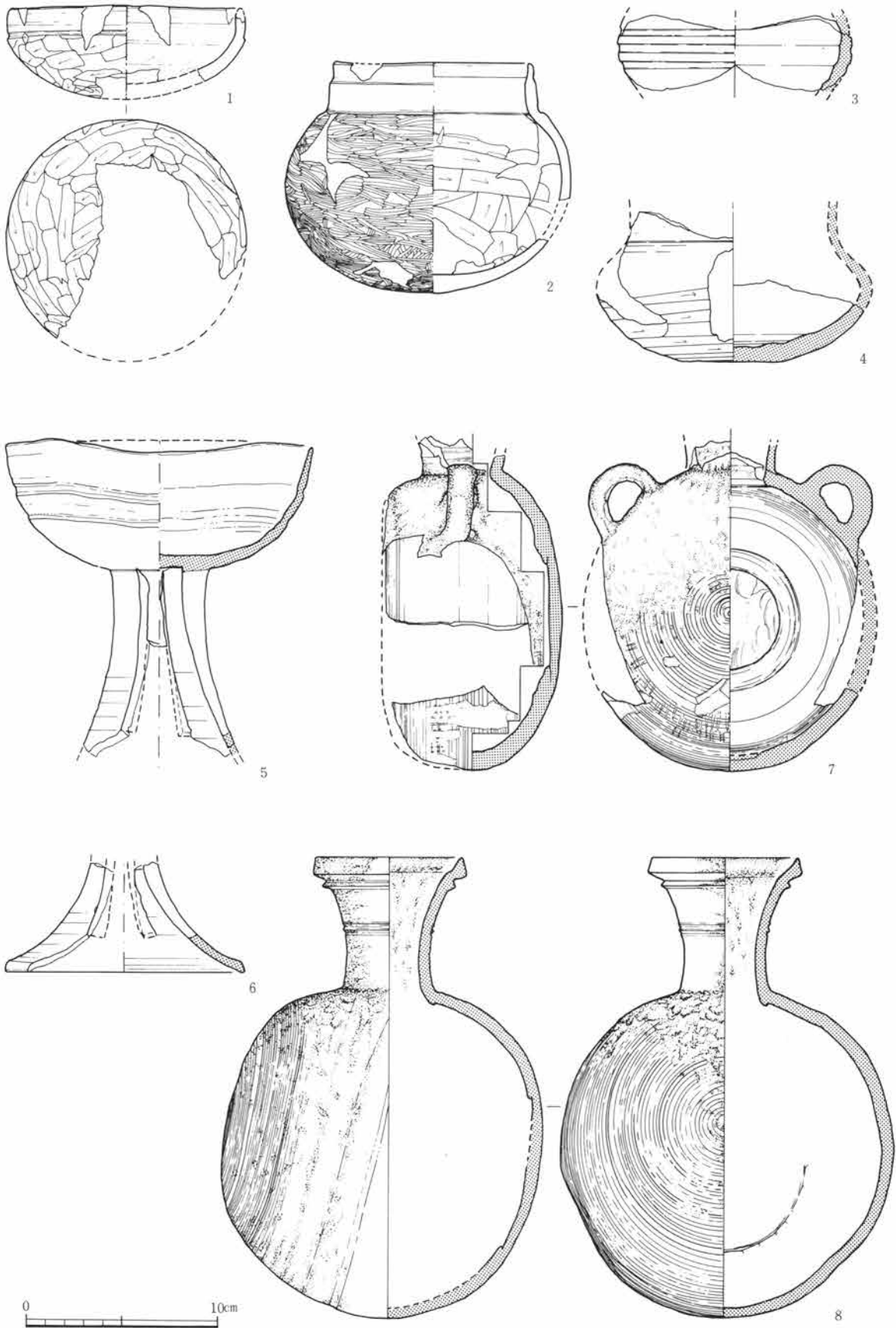


Fig.159 5号墳出土遺物実測図

黒色粒子が多量に混入する。焼成は良好である。色調は灰色である。

高杯 (Fig. 159-5、PL. 69-4) 前庭部出土。杯部と脚部の破片であるが接合不可能。杯部は歪んでいる。口径16.1cm、杯の高さ6.7cm、脚部の規模は不明、脚部は紋りが認められる。透し窓は三方にある。胎土は白色粒子と黒色粒子があり、一部解けはじめた状況である。焼成は良好。色調は灰色である。

高杯 (Fig. 159-6、PL. 69-3) 前庭部出土。高杯脚部の破片である。脚部径12.0cm、脚部には三方に透し窓がある。胎土は白色粒子と黒色粒子が混入している。焼成は良好である。胎土は灰色である。

提瓶 (Fig. 159-7、PL. 69-6) 前庭部出土、2分の1残存。頸径4.5cm、胴径15.0cmである。胴中央部を円形粘土版で覆う際に胴部を絞り込む。肩に耳をもつ。胴部は掻き目整形痕が残る。胎土は細かく白色粒子を僅かに含み、黒く溶解をはじめた状態である。焼成は良好。色調は黒褐色を呈し、肩部には灰の付着が認められるが、灰釉として溶解していない。

長頸壺 (Fig. 159-8、PL. 69-7) 石室内床面出土。口縁部の一部を欠損する。口径7.7cm、頸径4.4cm、胴径17.3cm、胴厚さ16.8cm、高さ23.8cmである。底部は丸底を呈す。口縁部は成形時に胴中央部に接合。口

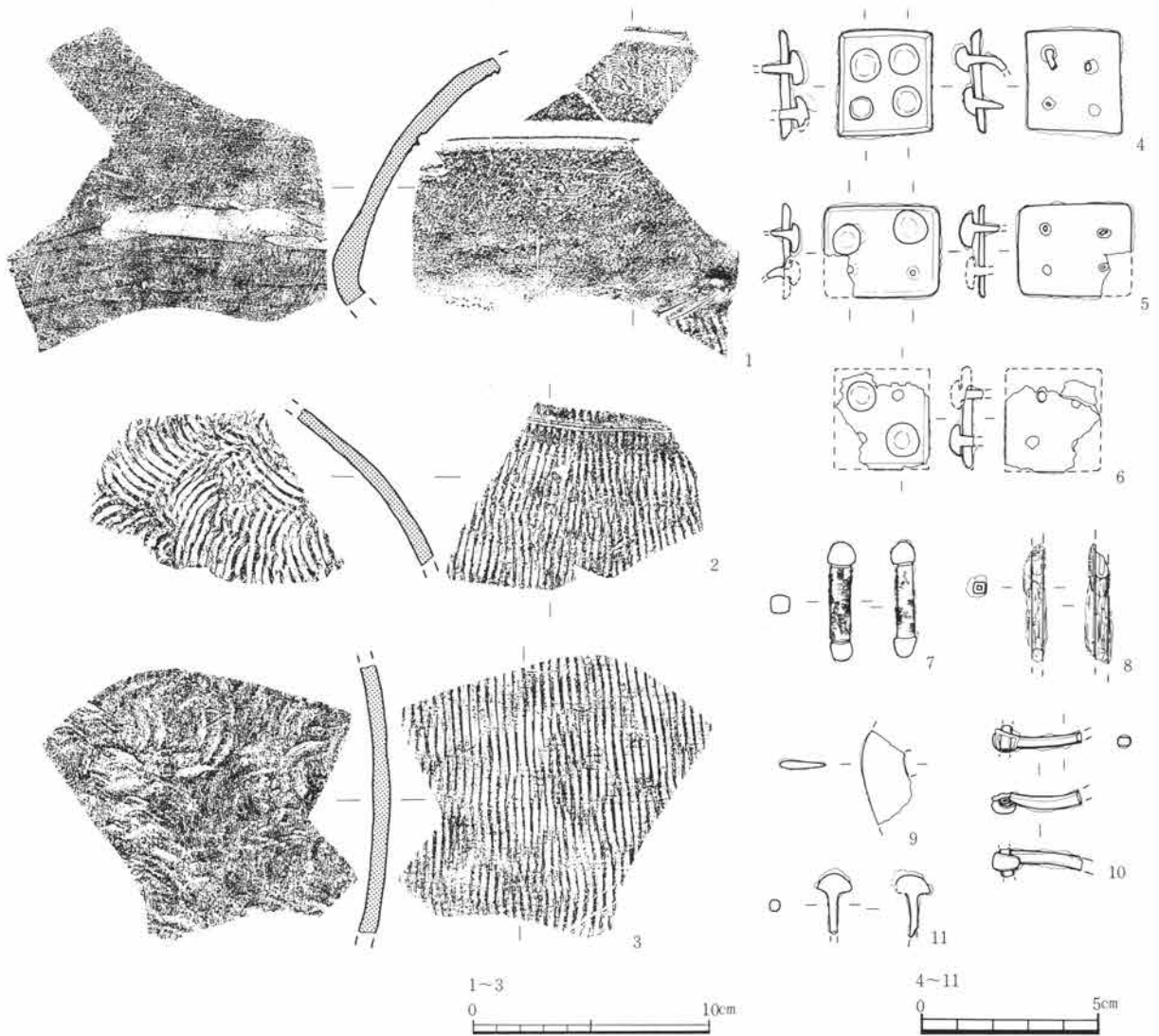


Fig. 160 5号墳出土遺物実測図

縁部は二段構成である。胴部は掻き目整形を行なっている。胎土は細かいが小礫や白色粒子を含む。焼成は良好であるが一部未還元部分がある。色調は灰白色と暗褐色である。口縁部から胴部にかけて自然釉（オリブ灰色）がみられる。

甕 (Fig. 160-1、PL. 70-1) 石室内の破片と前庭部の破片が接合できる頸部の破片である。頸部中央と口縁部付近には2条の平行沈線が巡り、中間の稜線は浮き上がって見える。口縁部に近接して櫛状工具による波状文がある。胎土は細かく白色粒子が混入している。焼成は良好である。色調は灰色である。

甕 (Fig. 160-2、PL. 70-1) 石室内出土、甕胴部の破片である。外面は平行叩き目文、内面は青海波文のあて目がある。胎土中には白色粒子と小礫が混入している。焼成は良好である。色調は灰色である。

甕 (Fig. 160-3、PL. 70-1) 前庭部覆土内出土。胴部の破片である。外面は平行叩き目文、内面は青海波文のあて目がある。胎土は細かく白色粒子を含む。焼成は良好である。色調は黒褐色である。

鉄 器

馬具 (Fig. 160-4、PL. 70-2) 飾金具である。石室床面奥壁中央左壁寄り出土した (Fig. 157)。長辺3.0cm、短辺2.6cm、厚さ約3mmの板状の鉄板の四辺を片面から面取りを行ない、板には4つの鋌を打っている。鋌は半球形の頭部をもち、径約9mm、長さは短い鋌で1.1cm、その他は先端が欠損しており全長は不明であるが差はあまりないと思われる。鋌の先端は直線的なものと、曲げられたものがある。重さは9.14gである。

馬具 (Fig. 160-5、PL. 70-2) 飾金具である。石室床面中央奥壁から1mで出土した (Fig. 157)。長辺3.2cm、短辺2.6cm、厚さ約2mmであり一部を欠損する。各部位は Fig. 160-4 と同様の製作を行なっている。鋌は4ヶ所にあった痕跡をもつが、頭部は2ヶ所、先端は3ヶ所で残存する。鋌の大きさも前例とほぼ同様である。重さは7.44gである。

馬具 (Fig. 160-6、PL. 70-2) 飾金具である。石室内排土を篩にかけたところ鉄数片が出土した。(Fig. 157)。一辺2.7cm、厚さ約3mmであり二辺が欠損する。各部位は Fig. 160-4 と同様の製作を行なっている。鋌は4ヶ所に確認できるが、欠損部分が多い。重さ5.73gである。

両頭座金付留金具^註 (Fig. 160-7、PL. 70-2) 石室内出土、全長3.3cm、円筒長2.1cm、両頭座金部分の径は約8mmである。円筒形状の製作は相対する部分（円筒長軸）を鐵付け風に接合している様相を呈す。片側の頭と円筒形部の接点は溝状に凹がある。円筒部には木質部分が残る。重さ2.9gである。

釘 (Fig. 160-8、PL. 70-2) 石室内出土、断面は四角形を呈す。両端部分を欠損している。外面は木質が錆の付着により残っている。残存長3.3cm、重さ1.55gである。

不明 (Fig. 160-9、PL. 70-2) 石室内出土、鉄片。幅1.2cm、厚さ2mm、重さ1.57gである。部位名、用途はわからない。

鉸具 (Fig. 160-10、PL. 70-2) 石室内出土、刺金と考えられる。鉄の芯棒に刺金の元部分を巻き付けてある。刺金部分は撓んでいる。先端部分は欠損している。残長2.5cm、重さ1.09gである。

鋌 (Fig. 160-11、PL. 70-2) 石室内出土、先端部分を欠損する。頭は半球形を呈す、残長1.6cm、頭の径は9mmである。重さ1.14gである。馬具の飾金具の鋌と考えられる。

註 両頭座金付留金具の名称については、市毛 勲「古墳出土の鉄製留金形小品について」—その名称と用途をめぐって—『古代学研究』第85号 1978年7月による

第3章 各 説

5号墳出土遺物一覧表（鉄器）

挿図 版 番号	種 類	全長(残長) (cm)	刃部(残長) (cm)	竈被部(残長) (cm)	茎部(残長) (cm)	刃部 造り込み	竈被部の 形 状	重さ(g)	そ の 他
Fig. 161-1 PL. 70-3	刀 子	(6.9)	(2.7)		(4.2)			8.29	
Fig. 161-2 PL. 70-3	鉄 鏃	5.9						8.07	有孔狭根腸扶五角形式
Fig. 161-3 PL. 70-3	鉄 鏃	(5.4)						8.68	有孔狭根腸扶三角形式
Fig. 161-4 PL. 70-3	鉄 鏃	(4.5)						5.52	有孔狭根腸扶五角形式
Fig. 161-5 PL. 70-3	鉄 鏃	(9.8)	3.0	(6.8)		片切刃造		7.82	両関片切刃箭式
Fig. 161-6 PL. 70-3	鉄 鏃	(4.9)	2.9	(2.0)		片切刃造		3.48	
Fig. 161-7 PL. 70-3	鉄 鏃	(4.3)	2.4	(1.9)		片平鑄		3.46	
Fig. 161-8 PL. 70-3	鉄 鏃	(3.9)	3.3	(0.6)		片切刃造		3.09	
Fig. 161-9 PL. 70-3	鉄 鏃	(3.4)	(3.4)			片切刃造		2.39	
Fig. 161-10 PL. 70-3	鉄 鏃	(3.8)	(3.0)	(0.8)		片切刃造		3.38	
Fig. 161-11 PL. 70-3	鉄 鏃	(3.0)	(0.6)	(2.4)		片切刃造		2.01	
Fig. 161-12 PL. 70-3	鉄 鏃	(5.9)	(1.4)	(4.5)		片切刃造		3.86	
Fig. 161-13 PL. 70-3	鉄 鏃	(7.5)		(5.2)	(2.3)		棘篋被	6.11	
Fig. 161-14 PL. 70-3	鉄 鏃	(7.1)		(6.6)	(0.5)		棘篋被	6.88	
Fig. 161-15 PL. 70-3	鉄 鏃	(5.9)		(2.5)	(3.4)		棘篋被	2.18	
Fig. 161-16 PL. 70-3	鉄 鏃	(4.7)		(2.0)	(2.7)		棘篋被	3.46	
Fig. 161-17 PL. 70-3	鉄 鏃	(3.1)		(1.2)	(1.9)		棘篋被	2.74	
Fig. 161-18 PL. 70-3	鉄 鏃	(3.2)		(2.3)	(0.9)		棘篋被	1.99	
Fig. 161-19 PL. 70-3	鉄 鏃	(1.3)		(0.8)	(0.5)		棘篋被	1.39	
Fig. 161-20 PL. 70-3	鉄 鏃	(4.8)			(4.8)			2.53	
Fig. 161-21 PL. 70-3	鉄 鏃	(4.3)		(4.3)				3.52	
Fig. 161-22 PL. 70-3	鉄 鏃	(5.1)		(5.1)				3.36	
Fig. 161-23 PL. 70-3	鉄 鏃	(4.2)		(4.2)				3.43	
Fig. 161-24 PL. 70-3	鉄 鏃	(4.1)		(4.1)				4.55	
Fig. 161-25 PL. 70-3	鉄 鏃	(3.0)		(3.0)				2.90	
Fig. 161-26 PL. 70-3	鉄 鏃	(3.1)		(3.1)				2.30	
Fig. 161-27 PL. 70-3	鉄 鏃	(1.0)			(1.0)			0.20	

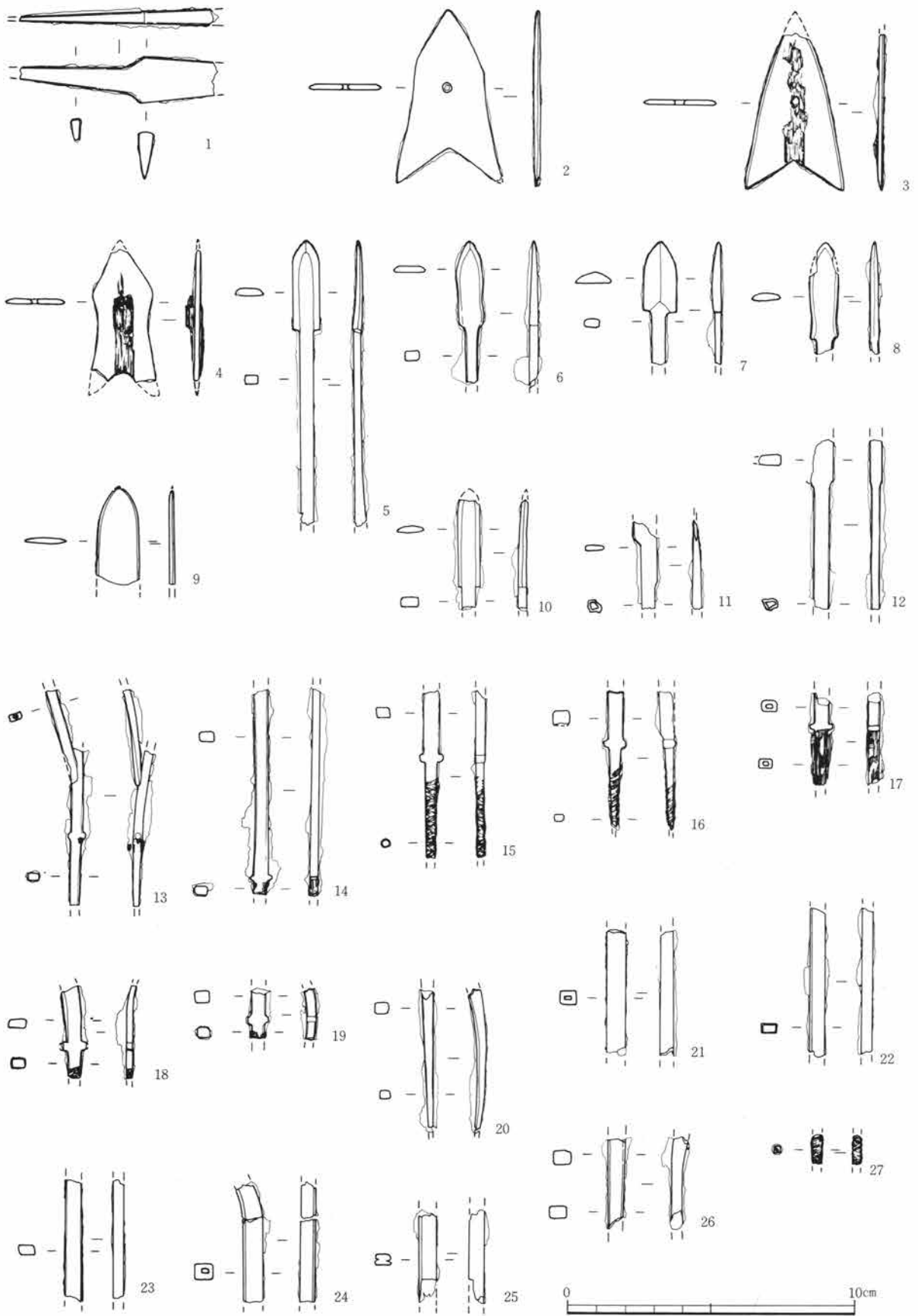


Fig.161 5号墳出土遺物実測図

6号墳 (Fig. 162・163・164、P L. 71-1~3)

位置 上毛古墳綜覧記載漏。遺跡の中央やや東側に位置している。北に5号墳、北東に7号墳が位置している。北西から緩傾斜の地形であるが古墳の南側は傾斜を増して東南東から入る谷状の地形に継がる。

墳丘と外部施設 墳丘及び主体部のほとんどが平夷され、調査時点では石室の根石がわずかに4石残されていたにすぎない。墳丘は、2号墳等と同様に古墳構築時地山の黒褐色土層、ローム漸移層等を約40cmほど削り出して墳丘裾部を整形し、その上に盛土をして構築したものである。墳丘規模も詳細は明らかでないが直径12~15m前後の円墳であったとみられる。周堀の有無も不明。周辺に埴輪の破片等は一切ない。

主体部の構造 自然石を使用した横穴式石室を主体部とする。調査時の状況でみると、石室は前述の黒褐色土層を掘り込んだ「掘り方」中に構築している。「掘り方」の規模は、奥幅2.8m、前幅約2.7m、長さ約4.8mである。深さは40~50cmで1段目根石の高さとほぼ同じ程度であり、さほど深くはない。「掘り方」前面中央からは墓道状の浅い掘り込みが前方にのびるが、その先端は切られており全容は不明。この掘り込みは、「掘り方」接続部で幅約90cm、前方でラップ状にひろがり、覆土から須恵器、土師器が出土した。

石室は奥半分の根石が残されたのみであり、形状、規模等の詳細は不明である。石室壁の根石には、比較的大ぶりの石を使用し、残されたものを見る限り、いずれも平積の手法をとっている。根石は、「掘り方」底面に直接設置しているが、安定度を増すため、いずれも「掘り方」底面を石の大きさに合わせて掘りくぼめた中に据えている。石の抜かれた部分でもこの痕跡が確認された。壁石の裏込めは「掘り方」法面と壁石裏との間20~30cmのところを小礫をいれて補強している。石室底面には小礫を敷きならして床とした。

遺物出土状況 石室奥寄りの床から鉄製品(直刀、刀子の茎の破片)が出土している。(松本)

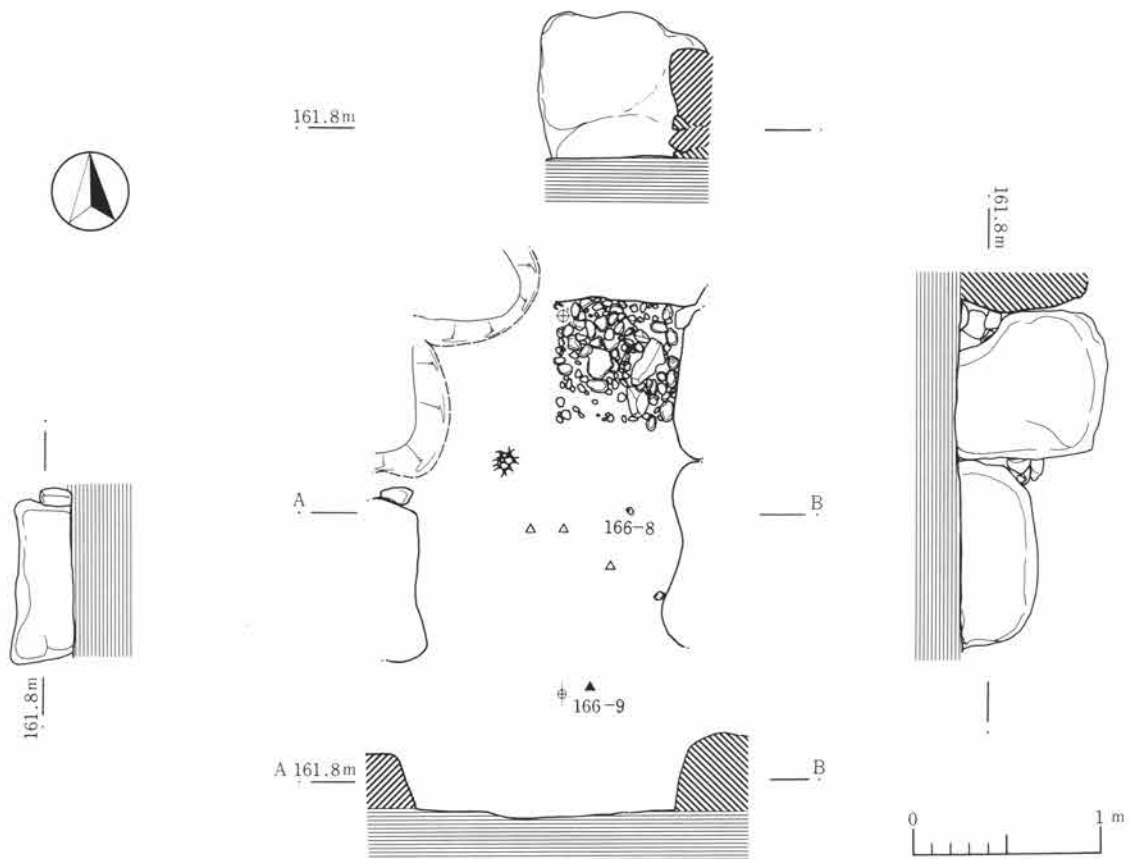


Fig. 162 6号墳石室実測図

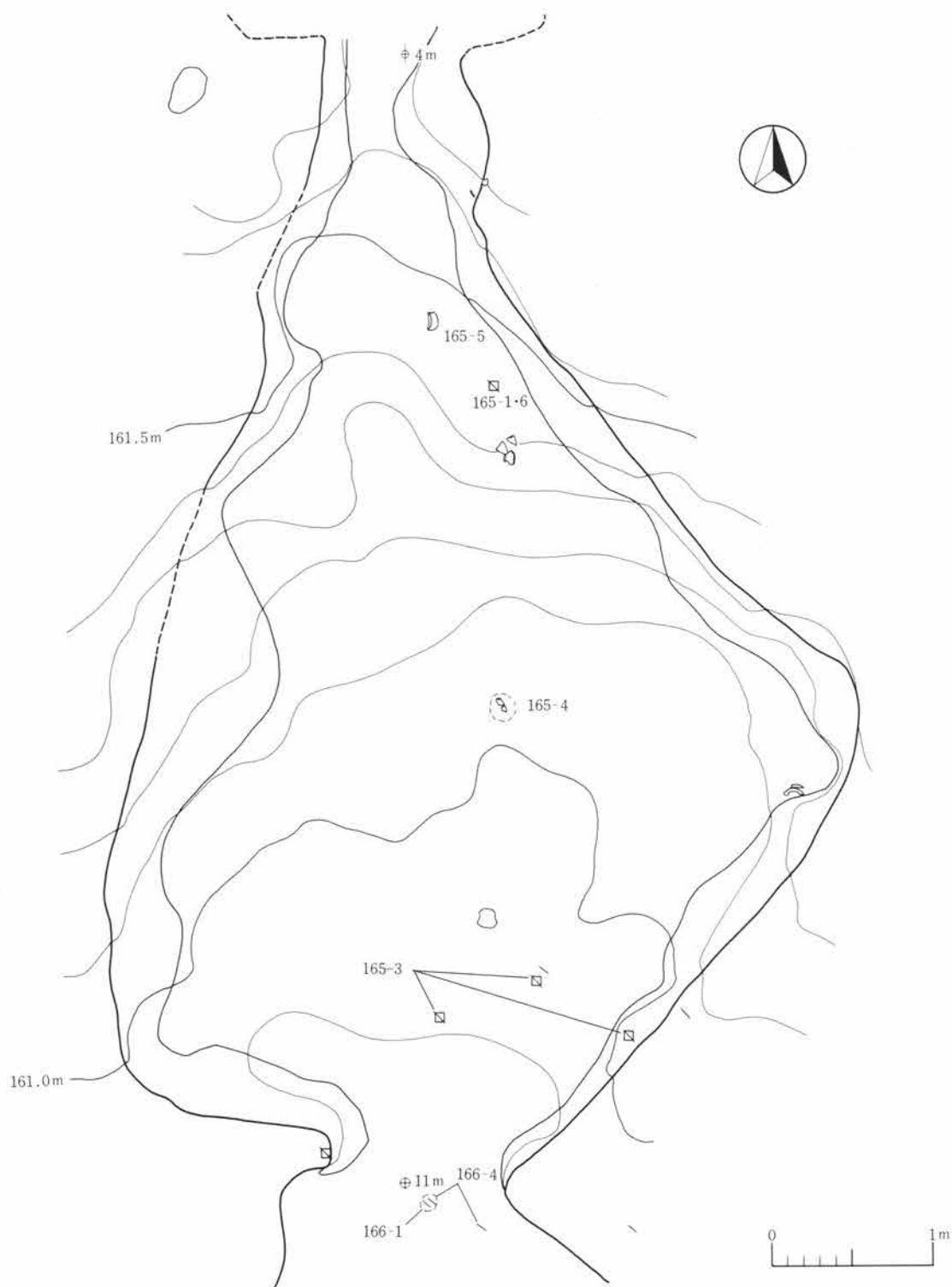


Fig. 163 6号墳墓道実測図

出土遺物 (Fig. 165・166、PL. 71-4～5・72-1～11)

短頸壺 (Fig. 165-1、PL. 71-4) 前庭部覆土内出土。口径10.0cm、胴最大幅13.8cm、高さ9.2cmである。口縁は直立し、最大径は肩寄りにある。底部は手持ちによる筧調整を行なっている。肩部に波状文を施文する。胎土は小礫を多く混入している。焼成は良好である。色調は灰色である。

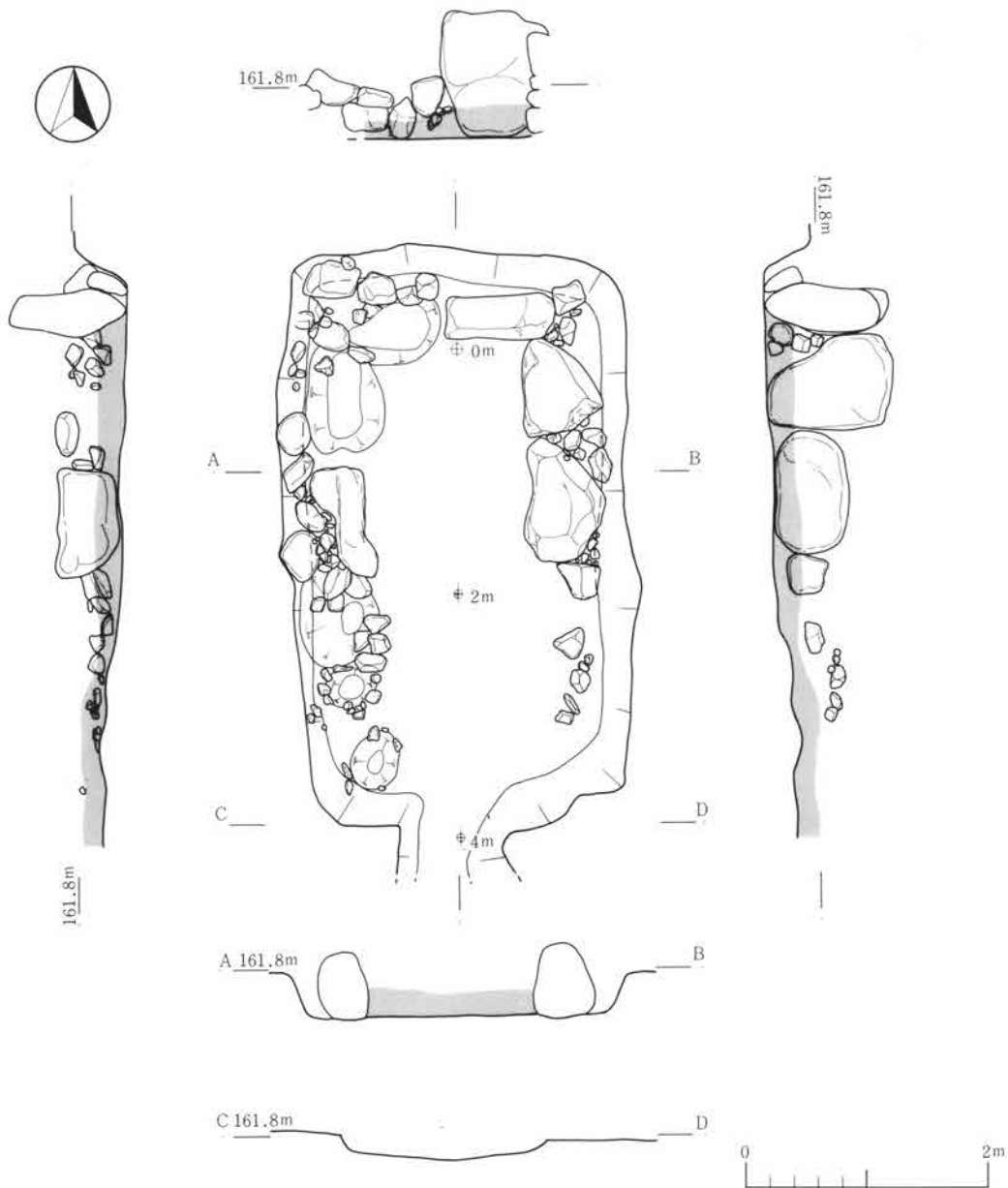


Fig. 164 6号墳石室掘り方と根石実測図

甕 (Fig. 165-2、PL. 71-5) 覆土内出土。口径22.0cm、頸径15.2cmの肩部から口縁部にかけての破片である。肩部外面は平行叩き目文、内面はあて目の青海波文がある。胎土は白色粒子を含み、焼成は良好である。色調は灰色である。

甕 (Fig. 166-6、PL. 72-9) 前庭部覆土内出土、胴部の破片である。外面は平行叩き目文、内面はあて目の青海波文がある。胎土は白色粒子を少量含む。焼成は堅く焼き締まっている。色調は灰色である。

提瓶 (Fig. 165-3、PL. 72-1) 前庭部覆土内出土。扁球形と推測されるが、球形部の破片の出土であり、図は球形部を転回して作図したため本来の器形とは相違が生じている。体部は円形になると推測される。表面と側面に沈線と波状文を交互に施文する。把手は未確認。体部中央付近は絞り痕がある。胎土は白色粒子と黒色粒子を僅かに含む。焼成は未還元である。色調は淡黄色である。

杯 (Fig. 165-4、PL. 72-2) 前庭部覆土内出土。口径13.4cm、高さ4.5cm、口縁部中間に僅かな段をも

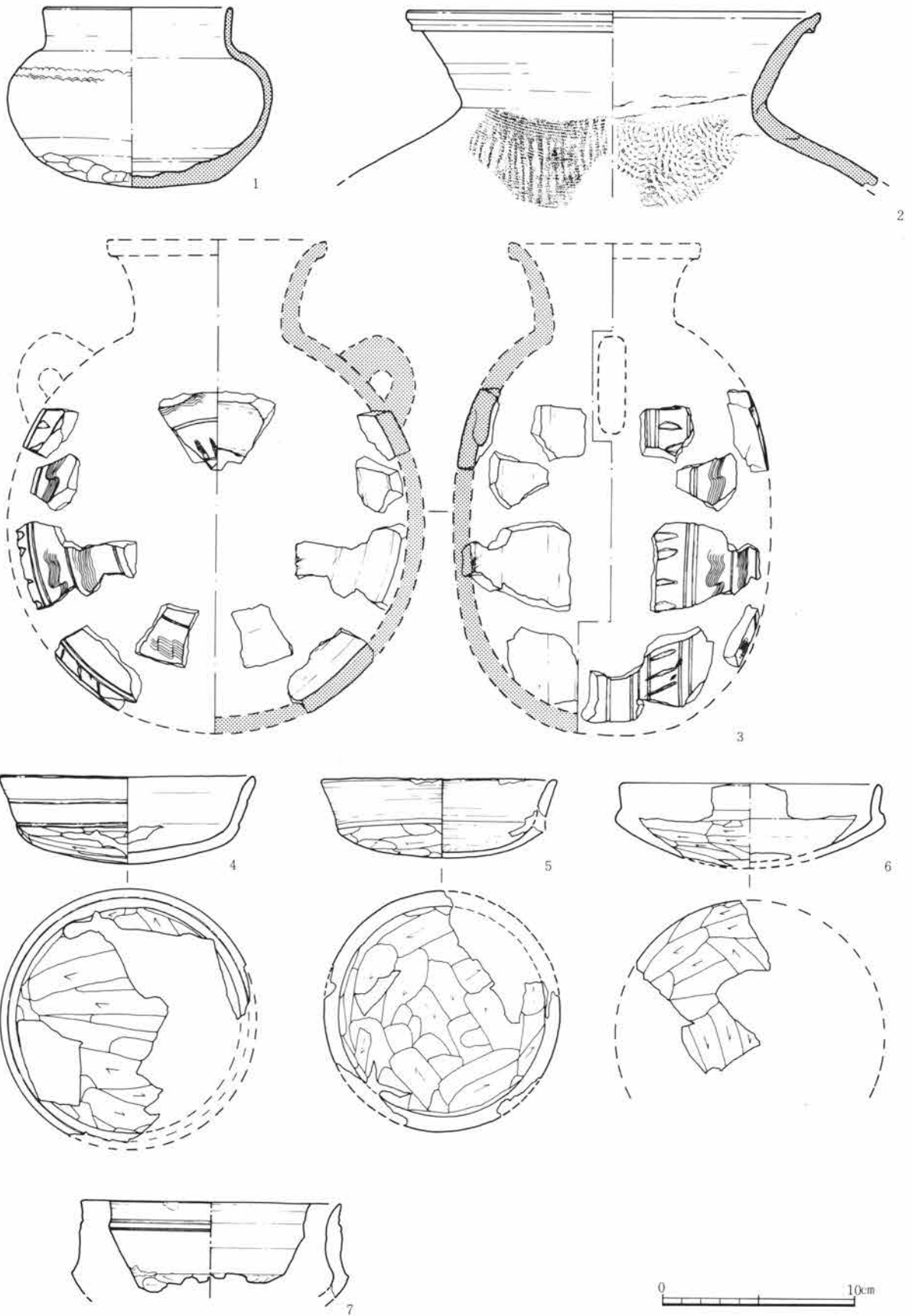


Fig. 165 6号墳出土遺物実測図

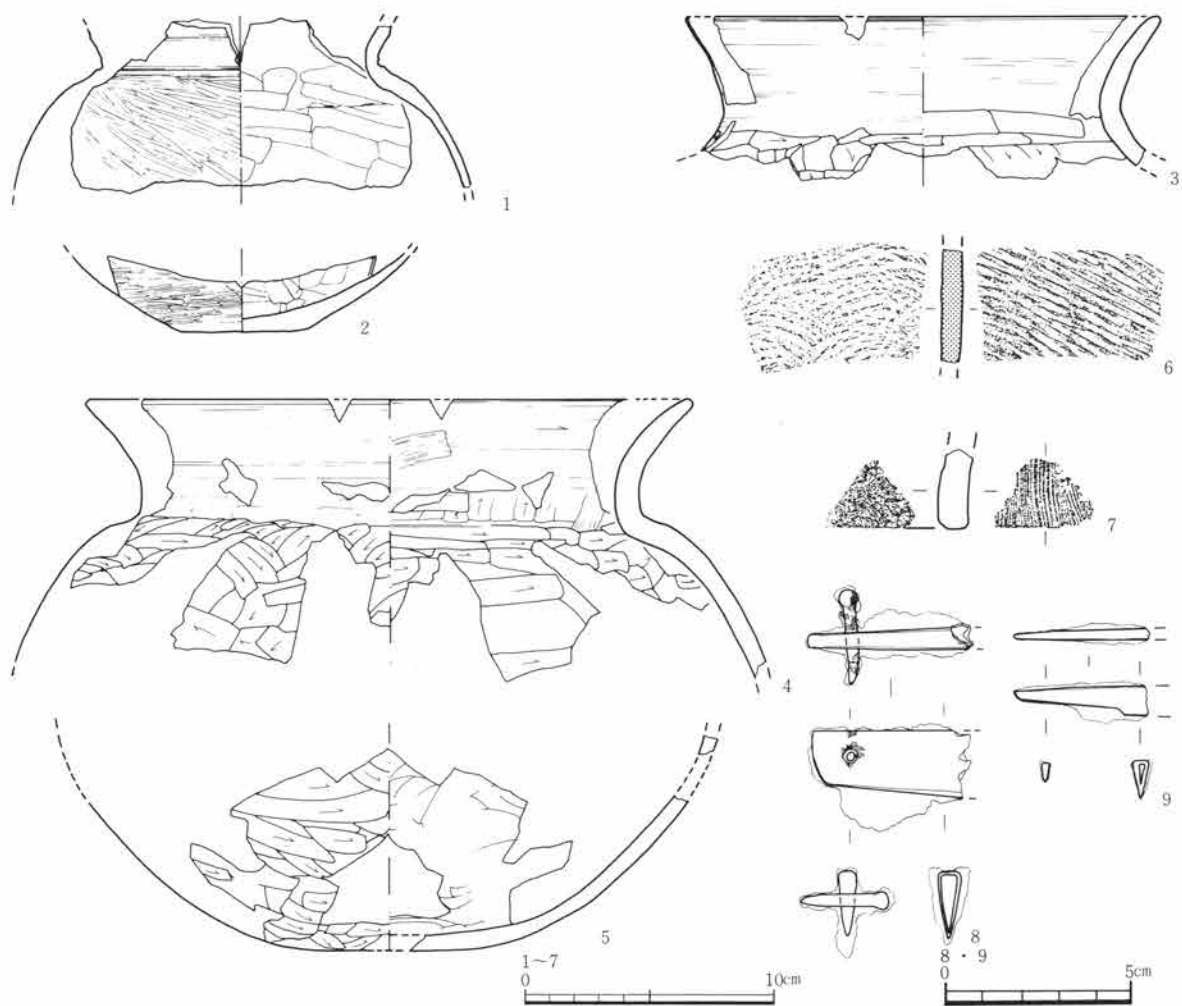


Fig.166 6号墳出土遺物実測図

ち、外反する。底部は手持ちによる篋削り、口縁部は横撫で調整を行なっている。胎土中に小礫を含む。焼成は良い。色調はにぶい黄橙色である。

杯 (Fig.165-5、PL.72-3) 口径12.6cm、高さ4.0cm。口縁部は外反する。焼成はやや軟質。橙色。

杯 (Fig.165-6、PL.72-4) 口径約13.8cm、高さ4.6cm、焼成は良い。にぶい黄褐。整形は4と同様。

杯 (Fig.165-7、PL.72-5) 口縁部の破片である。口縁部は上位に段をもち、僅かに外反する。口径約13.7cm、横撫で整形である。胎土・焼成・色調は6と同様である。

小型甕 (Fig.166-1・2、PL.72-6) 1・2は同一個体と考えられる。前庭部出土であり底部は床面からである。外面は篋磨きを行なっている。胎土は細かく、焼成は良い。色調は橙色である。

甕 (Fig.166-3、PL.72-7) 前庭部出土。口縁部の破片である。胎土は小礫を多量に含み、焼成は良い。にぶい褐色である。

甕 (Fig.166-4・5、PL.72-8) 口縁部と底部の破片である。4と5は同一個体と考えられる。口径24.6cm、頸部径20.3cmである。胎土、焼成は3に類似する。色調は橙色である。

小刀 (Fig.166-8、PL.72-11) 床面出土、茎の一部であり目釘が残る。

刀子 (Fig.166-9、PL.72-11) 刀子の茎から区にかけての破片である。

埴輪 (Fig.166-7、PL.72-10) 円筒埴輪の底部の破片である。外面には縦方向の刷毛目が入る。

7号墳 (Fig. 167・168・169・170・171・172、PL. 73—1～5・74—1～8・75—1～2・76—1～4)

位置 上毛古墳綜覧旧駒寄村21号墳に比定でき、前方後円墳となっているが周堀は未確認であった。墳形は明確でなく円墳としてのきめてもないが墳頂部は等高線が円状にまわり、裾部はくずれているが様相から円墳として考えたい。当古墳の位置は清里・長久保遺跡内の古墳では最も東に位置している。午王頭川の南約200m、5号墳の南東約150mの陣場泥流丘上に掘り込まれた主体部をもつ。南東150m付近には谷地状の水田がせまっており、その周辺の低台地上は桑園が主である。

墳丘と外部施設 陣場泥流の残丘上につくられた古墳で、調査時点では高さ約3m、直径約12mであり、墳形は裾部がかなり崩れていた。古墳は泥流丘の特色を生かした構築方法をとっている。

墳丘に入れたトレンチの土層からの所見は次の通りである。西側トレンチでは陣場泥流の上位に浅間C軽石を含んだ黒色土が堆積し、この上層にFA層が堆積している。FA層は主体部「掘り方」から約4.5m西まではほぼ水平堆積しているものの、この付近から裾部にかけてはまったく見られない。この部分で僅か15cmほど削り出し、1mほどのテラス状の平坦部をつくり再び裾方向に緩やかに墳丘を整形している。一方「掘り方」は、FA層より上層から掘り込んでいる。「掘り方」法面と左壁との間隔は約1mあり、この間を川原石で左壁を裏からおさえ、壁石根石のおさえを再びおさえる形状を呈する埋土である。左壁2段目も同様に間層を入れた後に同じ方法を繰り返して裏込め補強を行なっている。3段目の石ないし天井石が次に来ると、FA層上位に盛土として大きく見て3層あるが、この上層に封土が乗るものと考えられる。

北側トレンチで観察できる土層は西トレンチ同様基本土層として陣場泥流の上位に浅間C軽石を含んだ黒色土が堆積し、この上層にFA層が堆積している。FA層は「掘り方」部から約5.4m付近で消える。この付近は表土層からの切り込みや、墳丘封土の流れ落ちたと考えられる土層が下部に堆積していることは別に墳丘を削り出している部分の可能性もある。この部分ではテラス状の平坦面は確認できなかった。この地点から裾部に向い平坦部に至るまで傾斜は緩やかに下がる。

東側トレンチは西側・北側トレンチと基本土層は変わらない。FA層は主体部掘り込み部分より約5m東まで確認できる。削り出し部分は明確にとらえられない。以上3本のトレンチで共通して観察できるのはFA層上面とFA層の混入層としてとらえられる上位の土層面が他の土層に比較して凸凹がある。このことは、掘り込み面と関係し、石室構築時における作業面が想定できる。

石室前面の土層堆積は羨道部前面の閉塞部分から流れ込み土層が5層確認できる。流れ込みの土層の中には葺石に使用していたと考えられる川原石が多数混入しており浅間B軽石の上に一部が乗ることより崩壊の著しい時期はB軽石降下以降と考えられる。一方前庭部として確認できる平坦部分は羨道部前面約2.7mであり、前庭部前面より墳丘裾部に向けて約10度の傾斜で下がっている。

主体部の構造 主体部は陣場泥流丘の頂上部から南南東の方向に隅丸長方形に近い形状で掘り込まれている。石室部よりも前面は前庭部から墓道へと徐々にひらく様に掘り、墳丘の傾斜に自然と融合している。こうして掘り込まれた「掘り方」の床面は平坦に整形され、自然石を使用した両袖型の横穴式石室を構築している。石室の壁石は根石の他2段目までがほとんど残っているが3段目と天井石は無い。奥壁寄りの左右側壁の石材の積み方は平積が主であり石室前方に向い小口積が主となる。「掘り方」は深さ約1.6mであり法面と石室に使用した石材との間は約50～80cmの間隔がある。この間には川原石を詰め、壁石を固定させるように裏込めの土砂を詰めている。石室の規模は全長6.67m、玄室の長さ3.8m、玄室左壁の長さ3.76m、同右壁の長さ3.72m、羨道部の長さ2.87m、羨道部の左壁の長さ2.76m、同右壁の長さ3.04m、玄室奥壁の幅1.75m、現存する奥壁の高さ1.25m、玄室の前幅1.98m、同最大幅2.06m、羨道部前幅0.94m、同奥幅1.24m、玄室左

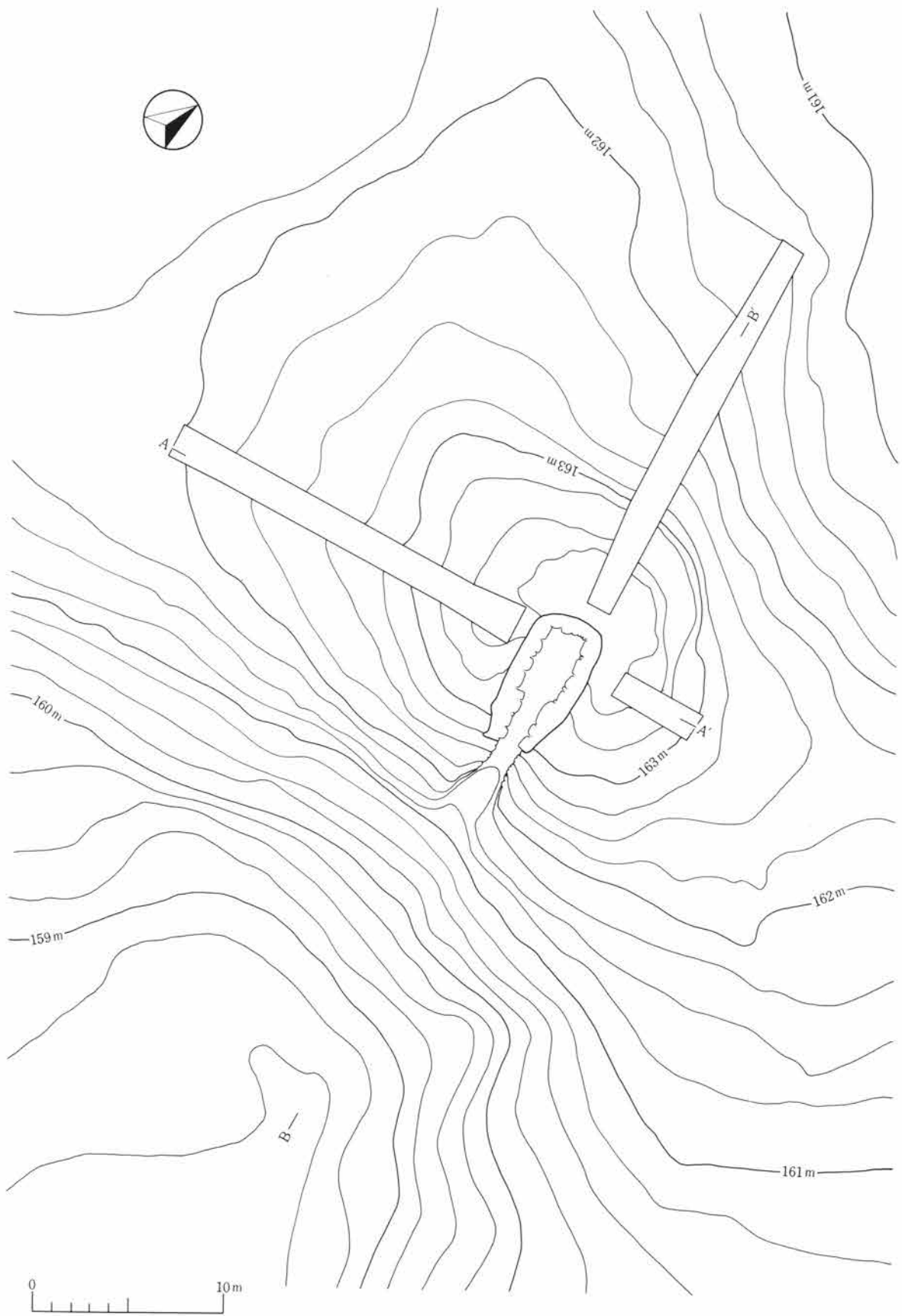


Fig. 167 7号墳丘等高線図

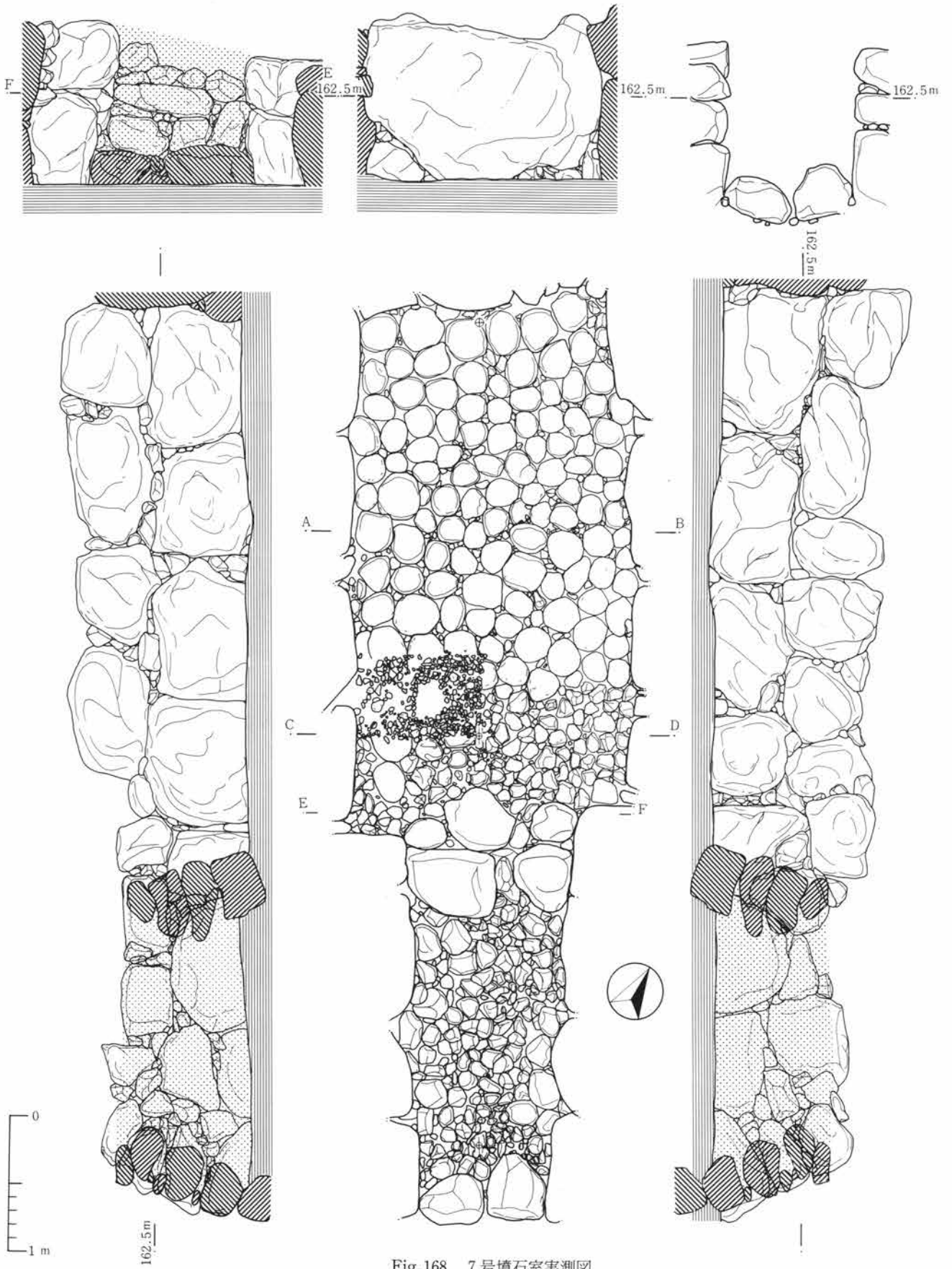


Fig. 168 7号墳石室実測図

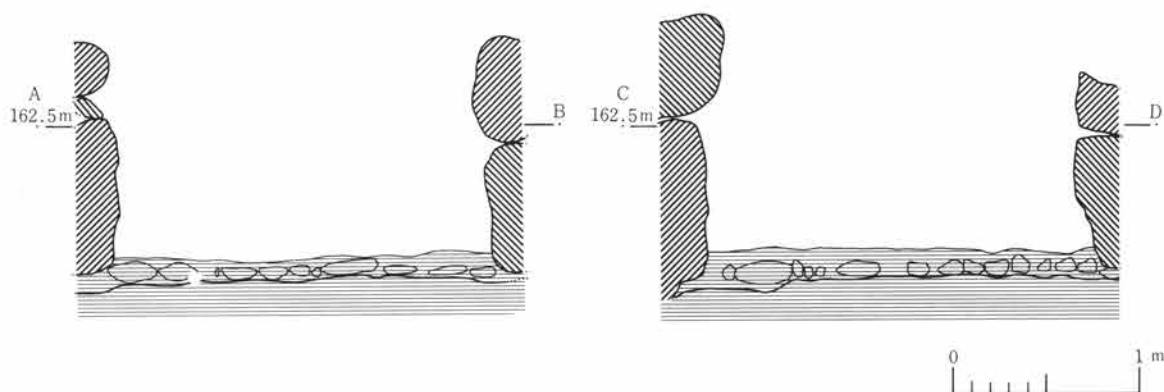


Fig. 169 7号墳石室断面実測図

袖幅0.4m、同右袖幅0.34mである。羨道部と玄室部の境は梱石をもって区画し、この梱石を根石として玄室寄りに4段石を組み、羨道部入口にも石垣を高さ約0.8m、長さ2.65m間を閉塞部としてこの石垣内に20cm前後の川原石を詰め込んでいる。石室内玄門部は玄門柱としている。玄室内の床面は奥壁から約2.7m付近までは「掘り方」床面直上に扁平で形状の整った直径20cm前後の川原石を敷きつめた上に小礫を入れてある。この小礫の中には角閃石安山岩が含まれている。玄室入口部約0.8mと羨道部の床面は小ぶりで稜のとれかかった川原石を敷き込んでいる。床面に敷き込んだ扁平な石と小礫の厚さは約15cmである。主体部内の状況は玄室内の左壁が直線上に配石されているのに対し、右壁は胴張りを呈している。また玄室の左壁と右壁の長さが異なる。石壁の主軸方位はN-27°-Wで南南東方向に開口している。

前庭部は石室入口前方向に平面長方形に広がる。石室に接する部分の石組は、羨道部入口の左に僅かに残る葺石に接するまで積まれており、右側もほぼ同様の位置に石組をもつ。この石組の設置は前述した「掘り方」の法面に沿って構築されている。前庭部先端の位置と墳丘に入れた西、北、東の3本のトレンチに堆積していたFA層の消える部分、すなわち削り出したと推定される部分は石室奥壁からの距離がほぼ同じである。このことから石室入口に接する葺石根石に至るまでの間は地山を整形して墳形を整えていることは明確である。また墳丘の西側の一部に葺石があることから二段築成を意図として構築した可能性がある。しかし墳丘裾部はどこまでを計測してよいか困難であるがFA層を切っている部分から墳頂部にかけて盛土を行ない前庭部先端部までは確実に手を入れている。裾部は整形して墳丘として形状を整えていることも考えられる。

遺物出土状況 当古墳で出土した遺物は玄室内床面から直刀、小刀、勾玉、金環、鉄鏃、小玉、須恵器提瓶片などである。墳丘からは埴輪の破片が出土している。前庭部からは土師器の杯と甕・須恵器の提瓶と甕などが出土している。

小結 7号墳の土層観察からFA層直上ないし、FA層上位層から掘り込まれ築造された古墳であることがわかる。

(相京)

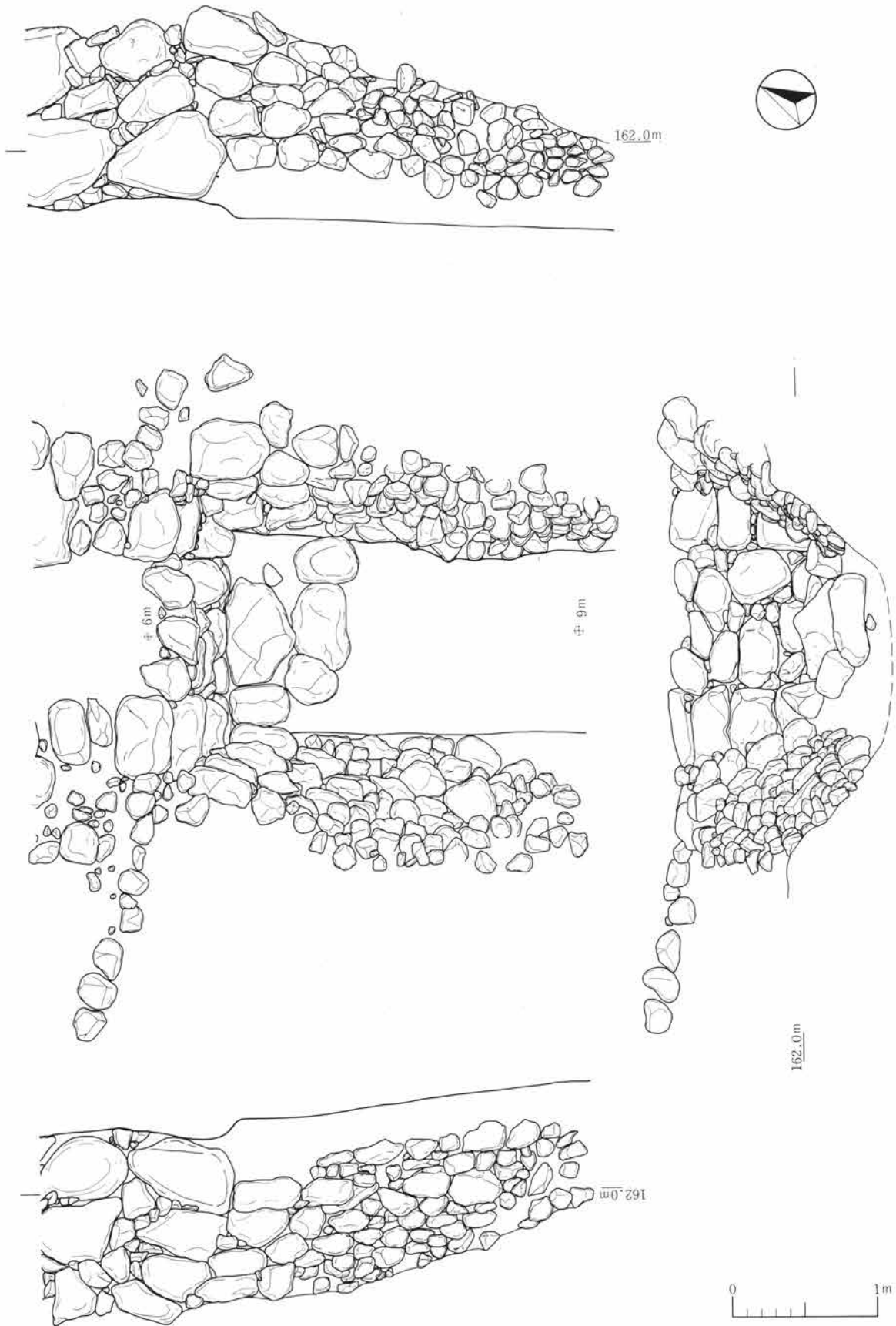


Fig.170 7号墳墓道石組と葺石実測図

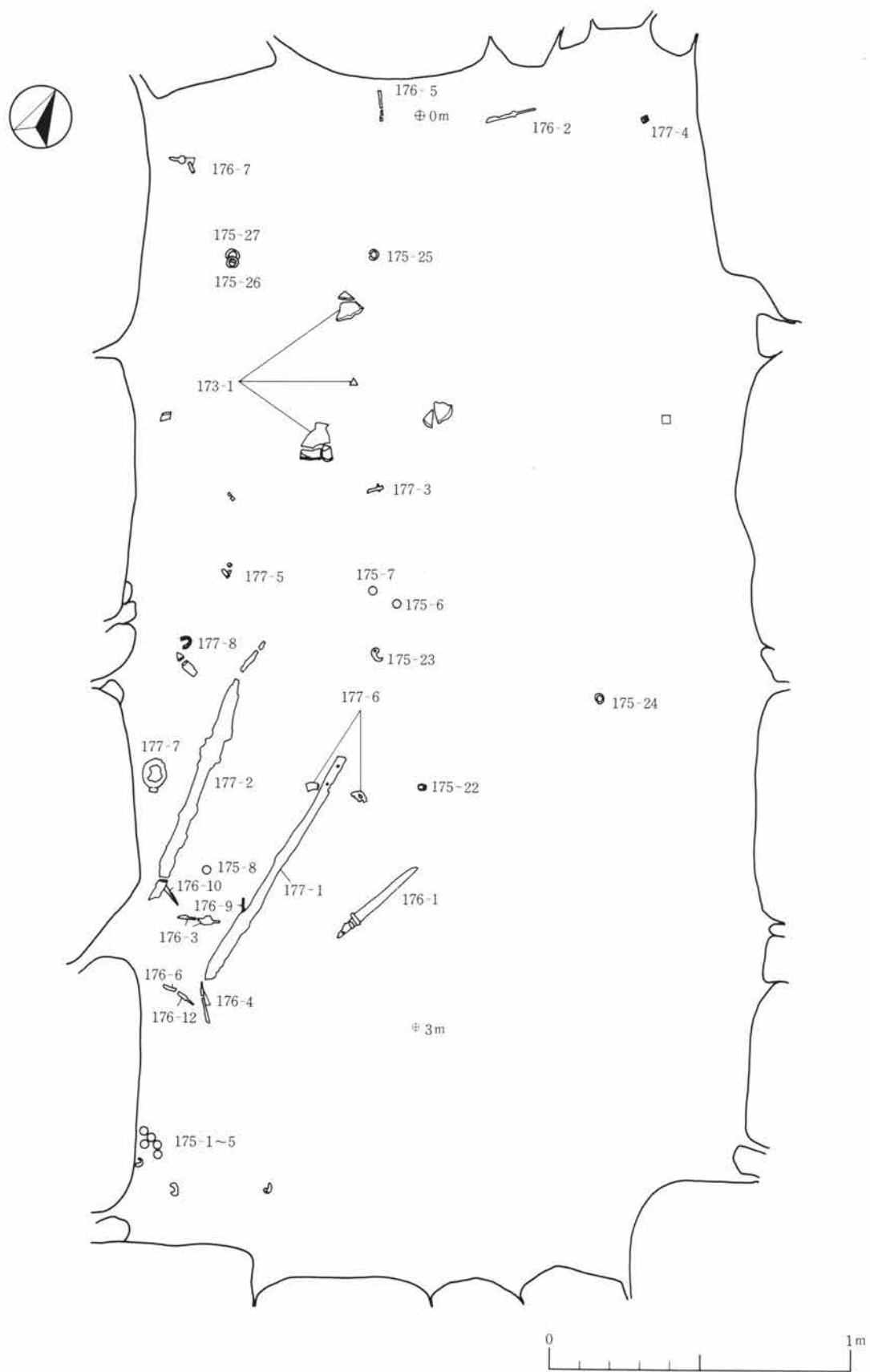


Fig. 171 7号墳石室内遺物出土状況図

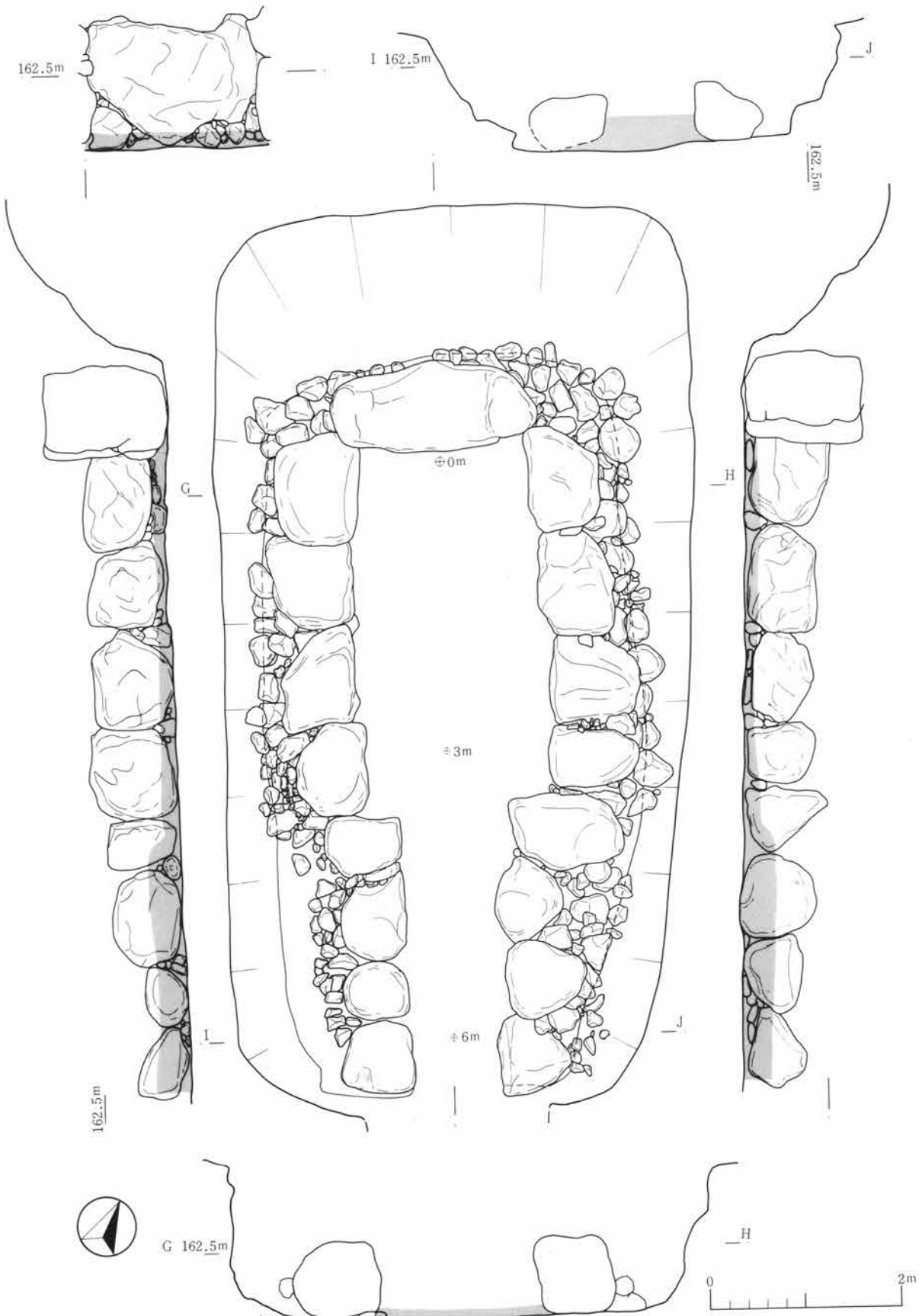


Fig. 172 7号墳石室掘り方と根石実測図

出土遺物 (Fig. 173~184, PL. 76-5~7・77-1~5・78-1~2・79-1~4・80-1~4)

須恵器

提瓶 (Fig. 173-1, PL. 76-5) 石室内床面出土。胴部2分の1残存。胴最大幅径17.6cm、厚さ14.4cmである。側面部を中心に櫛目文様を施文している。側面中央と胴部には2条の平行沈線文を施文している。胎土中には白色粒子と黒色粒子が混入している。焼成は堅く均一に焼き締まり、良好である。色調は灰色である。一部に自然釉がみられる。底部に粘土紐による環状の焼き台の一部が付着している。(図は推定復元を試みた。破線の部分が推定線である。)

甕 (Fig. 173-2, PL. 76-6) 墓道出土。口径14.0cm、頸径10.3cm、胴最大径21.4cm、高さ22.8cmである。口縁部は大きく外反し、口縁端部は1条の沈線を巡らす。底部は丸底を呈す。胴部外面は平行叩き目文、内面は青海波文のあて目をつけている。胎土は白色粒子を含む。焼成は良好である。色調は外面が灰色、内面は赤褐色を呈す。

不明 (Fig. 173-3, PL. 77-1) 墳丘南西部出土。口縁部破片。口縁部上位と下位および口縁端部に各1本の比較的シャープな沈線が巡る。胎土には白色粒子を含む。焼成は堅く焼き締まり良好である。色調は灰色を呈す。

不明 (Fig. 173-4, PL. 77-1) 口縁部破片、口縁部は頸部上位で段をもつ。頸部は櫛描波状文をもち、口縁部は横撫でを行なっている。胎土は白色粒子を含む。焼成は堅く焼き締まり良好である。色調は灰色である。

提瓶 (Fig. 173-5, PL. 77-1) 前庭部出土。肩部の破片。頸部接続痕がみられる。外面には櫛状工具による搔き目と沈線文が巡る。胎土中には白色粒子が多量に、黒色粒子が少量混入する。焼成は良好であり灰の付着が白くみられ、溶解までには至らない。色調は灰白色である。

甕 (Fig. 173-6, PL. 76-7) 前庭部出土。口縁部は接合不可能。口径13.4cm、頸径4.8cm、胴幅9.5cm、高さ約16.0cmである。頸部下位には絞りが入る。胴下半分は回転篋削りを行なっている。胎土中には白色粒子と黒色粒子を含んでいる。焼成は良好であり、灰の付着が白く残り、溶解までには至らない。色調は灰色である。

提瓶 (Fig. 173-7, PL. 77-1) 前庭部覆土内出土。胴部の破片と考えられる。外面には搔き目がみられる。胎土中には白色粒子と黒色粒子を多量に含んでいる。焼成は堅く焼き締まり良好である。色調は灰色を呈す。

甕 (Fig. 173-8, PL. 77-1) 頸部から口縁にかけての破片である。外面には2本の平行沈線文の上下に櫛描波状文を施文している。内面には×印の線刻文がある。胎土は細かく僅かに白色粒子を含む。焼成は良好である。色調は灰色である。

甕 (Fig. 173-9, PL. 77-1) 墓道覆土内出土。胴部の破片である。外面は平行叩き目文があり内面は同心円文のあて目がある。胎土は細かく、白色粒子を含む。焼成は堅く焼き締まり良好である。色調は灰色を呈す。

短頸壺 (Fig. 173-10, PL. 77-1) 胴部破片、胴中央部に櫛描波状文を施文している。胎土中には白色粒子と黒色粒子を含んでいる。焼成は良好であるが、火膨れしている。色調は灰色である。

土師器

甕 (Fig. 174-1, PL. 77-2) 墓道覆土内出土、5分の4残存。口径13.3cm、頸径12.8cm、高さ17.3cmであり底部は丸味をもつ。口縁部は横撫で整形を行なっており、胴部は縦方向に篋削りを行なっている。内

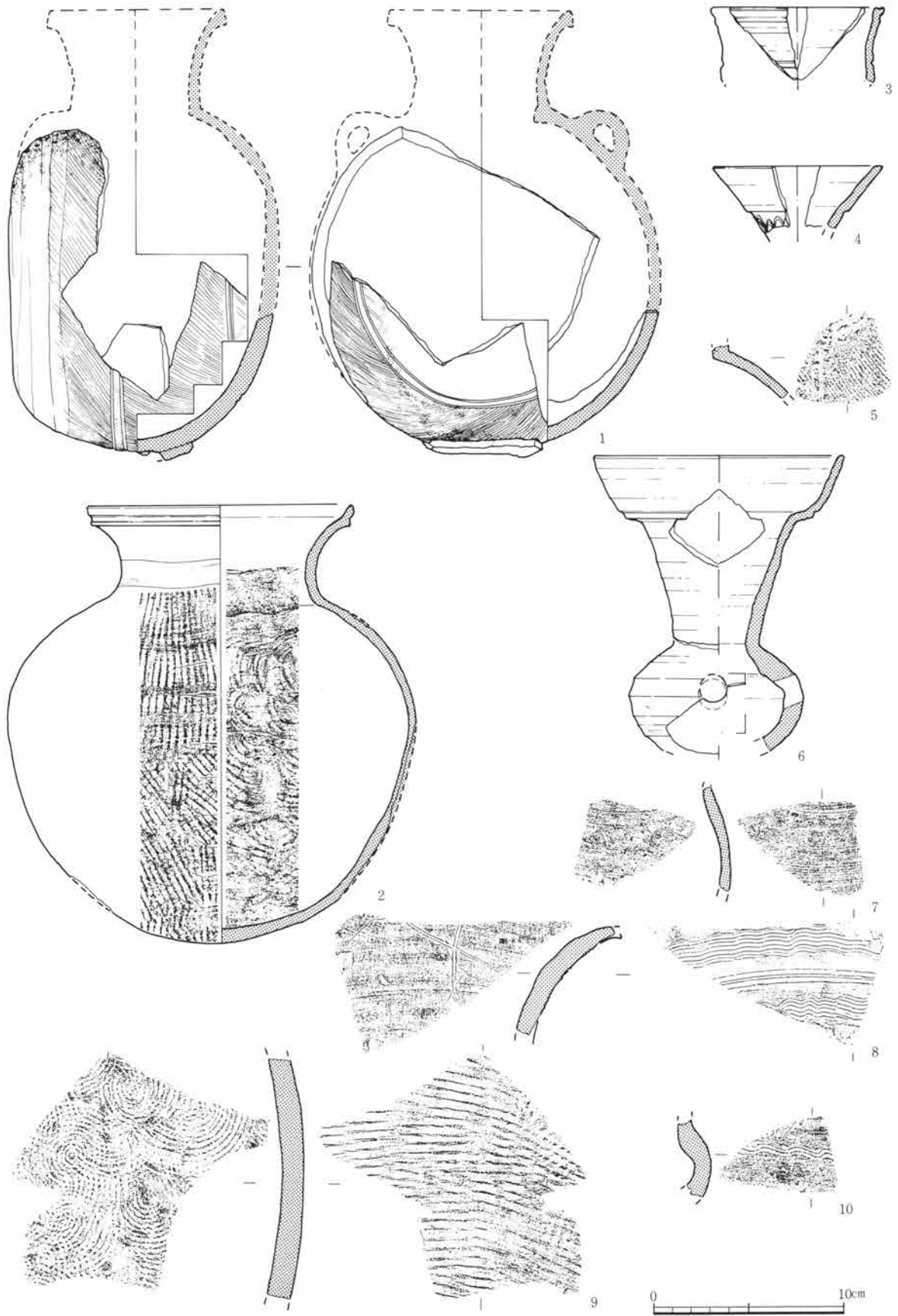


Fig. 173 7号墳出土遺物実測図

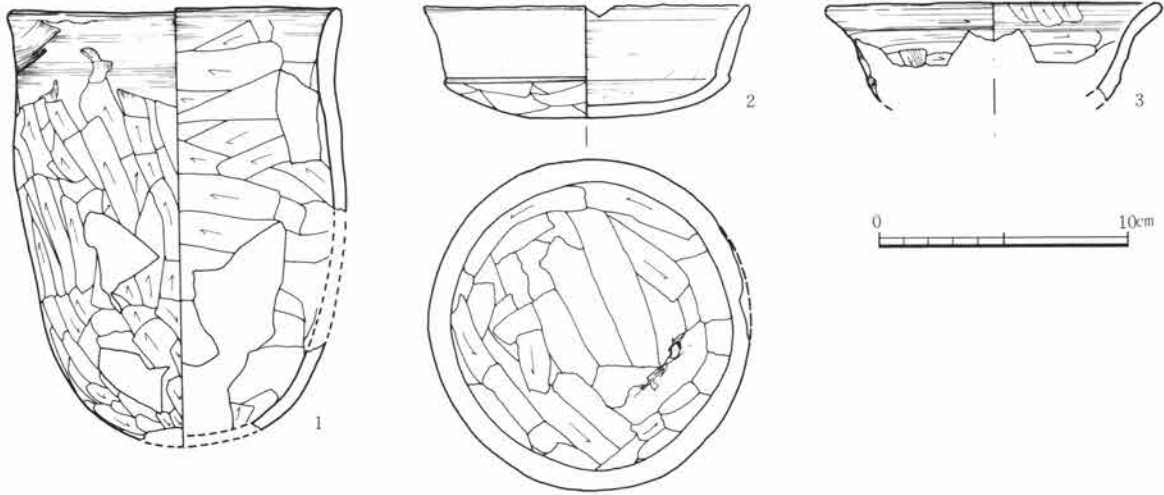


Fig. 174 7号墳出土遺物実測図

面は横方向に篋撫でを行なっている。胎土中には小礫を多数含み、表面は小礫のうごきで整形方向がわかる。

杯 (Fig. 174-2、PL. 77-3) 墓道覆土内出土。口径13.1cm、高さ4.5cmである。口縁部は外反する。口縁部は横撫でを行なっており、底部は篋削りを行なっている。胎土中には夾雑粒子を含む。焼成はやや甘く器面が荒れている。色調は橙色である。

杯 (Fig. 174-3、PL. 77-4) 墳丘上より出土。口径13.4cm、口縁部は外反する。胎土中には夾雑粒子を含む。焼成は良好である。色調はにぶい橙色である。

7号墳出土遺物一覧表 (玉類)

図版は巻頭

挿図番号	名称	残存状態	材質	計 測 値 (cm)						重 量 (g)	色 調
				a	b	c	d	e	f		
Fig. 175-1	小 玉	完 形	ガ ラ ス	0.61	0.57	0.45	0.88	0.16	0.15	0.58	紺青色
Fig. 175-2	小 玉	完 形	ガ ラ ス	0.51	0.54	0.52	0.78	0.20	0.20	0.44	紺青色
Fig. 175-3	小 玉	完 形	ガ ラ ス	0.45	0.60	0.61	0.82	0.15	0.15	0.38	紺青色
Fig. 175-4	小 玉	完 形	ガ ラ ス	0.54	0.48	0.50	0.74	0.12	0.15	0.42	紺青色
Fig. 175-5	小 玉	完 形	ガ ラ ス	0.52	0.45	0.47	0.78	0.16	0.16	0.44	紺青色
Fig. 175-6	小 玉	完 形	ガ ラ ス	0.43	0.40	0.43	0.65	0.11	0.16	0.27	紺青色
Fig. 175-7	小 玉	完 形	ガ ラ ス	0.44	0.39	0.40	0.59	0.14	0.12	0.24	紺青色
Fig. 175-8	小 玉	完 形	ガ ラ ス	0.53	0.33	0.43	0.72	0.15	0.12	0.42	紺青色
Fig. 175-9	小 玉	完 形	ガ ラ ス	0.69	0.42	0.39	0.56	0.13	0.12	0.37	藍色
Fig. 175-10	小 玉	完 形	ガ ラ ス	0.47	0.50	0.57	0.76	0.22	0.24	0.41	紺青色
Fig. 175-11	小 玉	完 形	ガ ラ ス	0.52	0.36	0.27	0.59	0.13	0.10	0.23	藍色
Fig. 175-12	小 玉	完 形	ガ ラ ス	0.30	0.54	0.58	0.63	0.20	0.22	0.16	紺青色
Fig. 175-13	小 玉	完 形	ガ ラ ス	0.35	0.46	0.50	0.61	0.15	0.16	0.18	藍色
Fig. 175-14	小 玉	完 形	ガ ラ ス	0.24	0.55	0.18	0.63	0.53	0.19	0.12	新橋色
Fig. 175-15	小 玉	完 形	ガ ラ ス	0.55	0.50	0.51	0.82	0.13	0.15	0.55	紺青色
Fig. 175-16	小 玉	完 形	ガ ラ ス	0.53	0.45	0.45	0.64	0.14	0.13	0.34	縹色(2)
Fig. 175-17	小 玉	完 形	ガ ラ ス	0.51	0.46	0.53	0.75	0.12	0.15	0.39	紺青色
Fig. 175-18	小 玉	完 形	ガ ラ ス	0.43	0.64	0.68	0.84	0.19	0.20	0.51	紺青色
Fig. 175-19	小 玉	完 形	ガ ラ ス	0.49	0.56	0.57	0.85	0.17	0.18	0.50	紺青色
Fig. 175-20	小 玉	完 形	ガ ラ ス	0.30	0.23	0.12	0.40	0.23	0.09	0.06	支子色
Fig. 175-21	小 玉	完 形	ガ ラ ス	0.27	0.22	0.09	0.33	0.14	0.07	0.02	青色
Fig. 175-22	囊 玉	完 形	蛇紋岩(?)	1.50	0.54	0.73	1.08	0.35	0.27	2.69	白色
Fig. 175-23	勾 玉	完 形	瑪 瑙	2.39	1.40	—	0.66	0.39	0.35	2.70	黄茶色

註 石室内左袖付近から出土した勾玉3点を粉失したため図示することが不可能である。

第2節 古墳時代

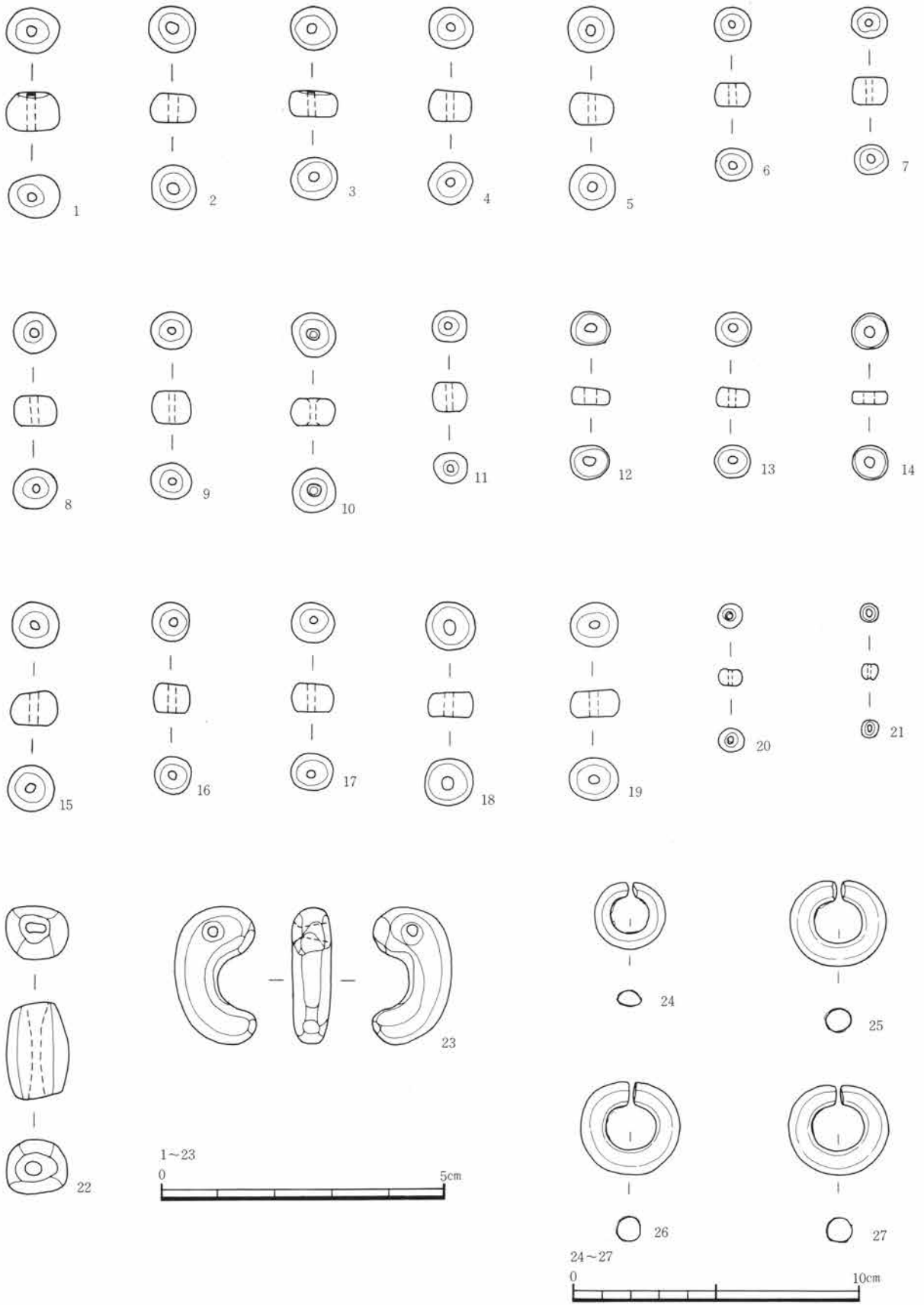


Fig. 175 7号墳出土遺物実測図

7号墳出土遺物一覧表 (耳環)

図版は巻頭

挿 図 番 号	残存状態	外 径(cm)		内 径(cm)		断 面(cm)		重 さ(g)
		a	b	c	d	e	f	
Fig. 175-24	完 形	2.45	2.28	1.37	1.25	0.82	0.55	14.61
Fig. 175-25	完 形	3.34	3.00	1.74	1.48	0.82	0.80	25.12
Fig. 175-26	完 形	3.48	3.19	1.76	1.61	0.81	0.85	32.65
Fig. 175-27	完 形	3.46	3.13	1.80	1.57	0.83	0.80	31.23

7号墳出土遺物一覧表 (鉄器)

挿 図 番 号 図 版 番 号	種 類	全長(残長) (cm)	刃部(残長) (cm)	筥被部(残長) (cm)	茎部(残長) (cm)	刃 部 の 造り込み	筥被部の 形 状	重さ(g)	そ の 他
Fig. 176-1 PL. 77-5	小 刀	34.4	26.7		7.7			165.58	目釘穴
Fig. 176-2 PL. 77-5	鉄 鏃	17.0	2.8	8.2	6.0	片切刃造	裾広筥被	13.66	
Fig. 176-3 PL. 77-5	鉄 鏃	(14.0)	2.6	10.0	(1.4)	片切刃造	裾広筥被	17.46	
Fig. 176-4 PL. 77-5	鉄 鏃	(15.6)	3.5	8.4	(3.7)	片切刃造	裾広筥被	18.72	
Fig. 176-5 PL. 77-5	鉄 鏃	(9.8)	2.7	7.1		片切刃造		10.08	
Fig. 176-6 PL. 77-5	鉄 鏃	(9.0)	3.6	(5.4)		片切刃造		15.84	
Fig. 176-7 PL. 77-5	鉄 鏃	(8.6)	3.4	(5.2)		片切刃造		9.00	
Fig. 176-8 PL. 77-5	鉄 鏃	(4.1)	(1.7)	(2.4)				3.53	
Fig. 176-9 PL. 77-5	鉄 鏃	(3.7)		(3.7)				2.78	
Fig. 176-10 PL. 77-5	鉄 鏃	(11.1)		(5.3)	5.8		裾広筥被	13.27	
Fig. 176-11 PL. 77-5	鉄 鏃	(9.7)		(4.2)	(4.5)			6.80	
Fig. 176-12 PL. 77-5	鉄 鏃	(6.4)		(2.1)	(4.3)		棘筥被	5.11	
Fig. 176-13 PL. 77-5	鉄 鏃	(3.5)		(3.5)			棘筥被	4.27	
Fig. 177-1 PL. 78-1	直 刀	(90.0)	(73.0)		17.0			803.10	目釘穴
Fig. 177-2 PL. 78-1	直 刀	(89.5)	(78.5)		(11.0)			452.04	
Fig. 177-3 PL. 78-2	刀	(5.3)			(5.3)			7.86	茎部(目釘)
Fig. 177-4 PL. 78-2	刀 子	(2.0)	(1.0)		(1.0)			2.21	
Fig. 177-5 PL. 78-2	刀 子	(4.1)	(2.2)		(1.9)			5.51	
挿 図 番 号 図 版 番 号	種 類	長軸(残長) (cm)	短軸(残長) (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ(g)	そ の 他		
Fig. 177-6 PL. 78-2	鐔	(6.8)	6.8	2.2	0.3	28.10	卵倒形を呈し梯形窓をもつ		
Fig. 177-7 PL. 78-2	鐔	(10.2)	(7.8)	2.4	0.4	47.37	卵倒形を呈し梯形窓をもつ		
Fig. 177-8 PL. 78-2	縁金具	(4.6)	2.6	1.4	0.2	9.94	銀象嵌は界線内側に扁行唐草(蕨手)文を両面に施す		

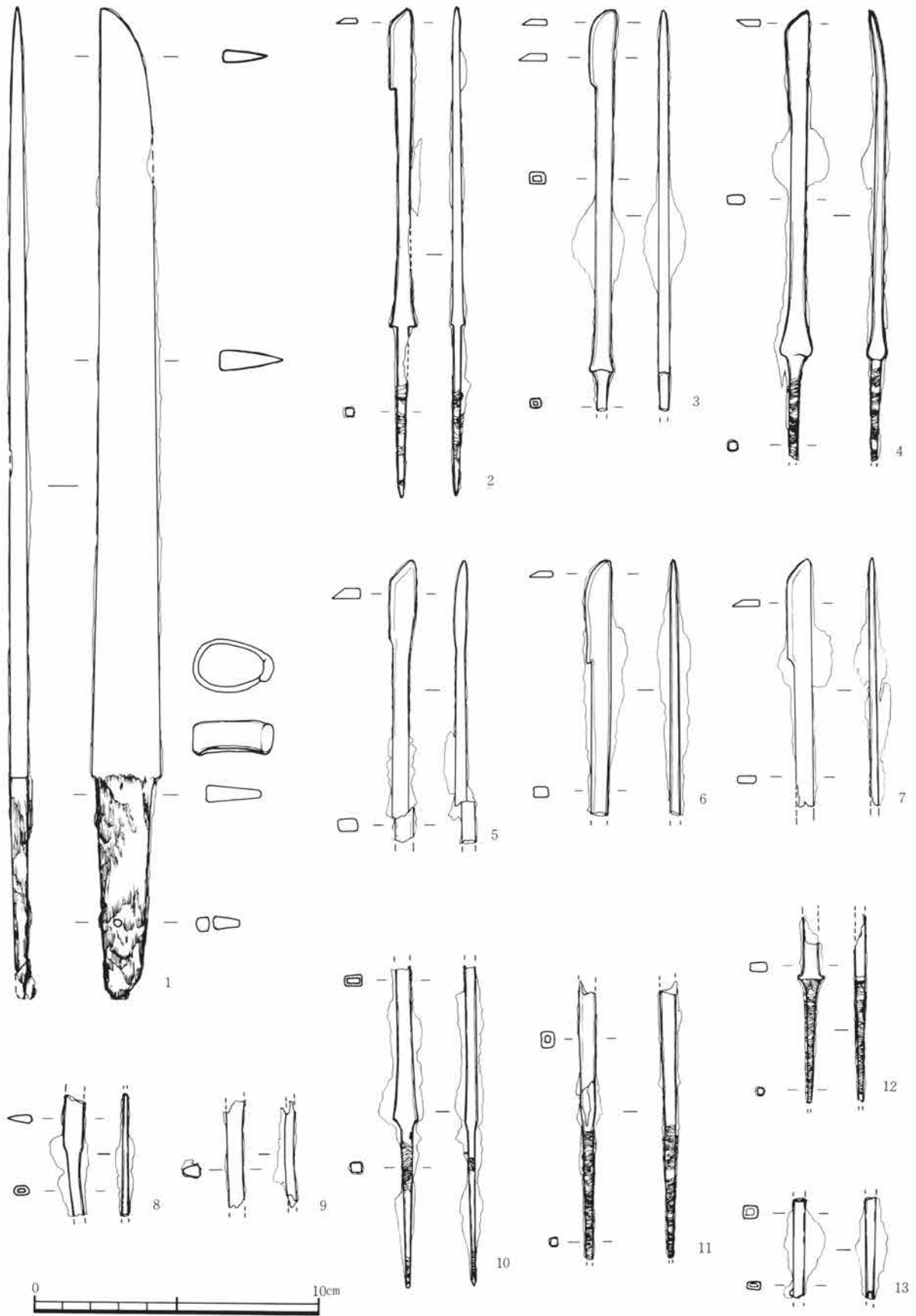


Fig. 176 7号墳出土遺物実測図

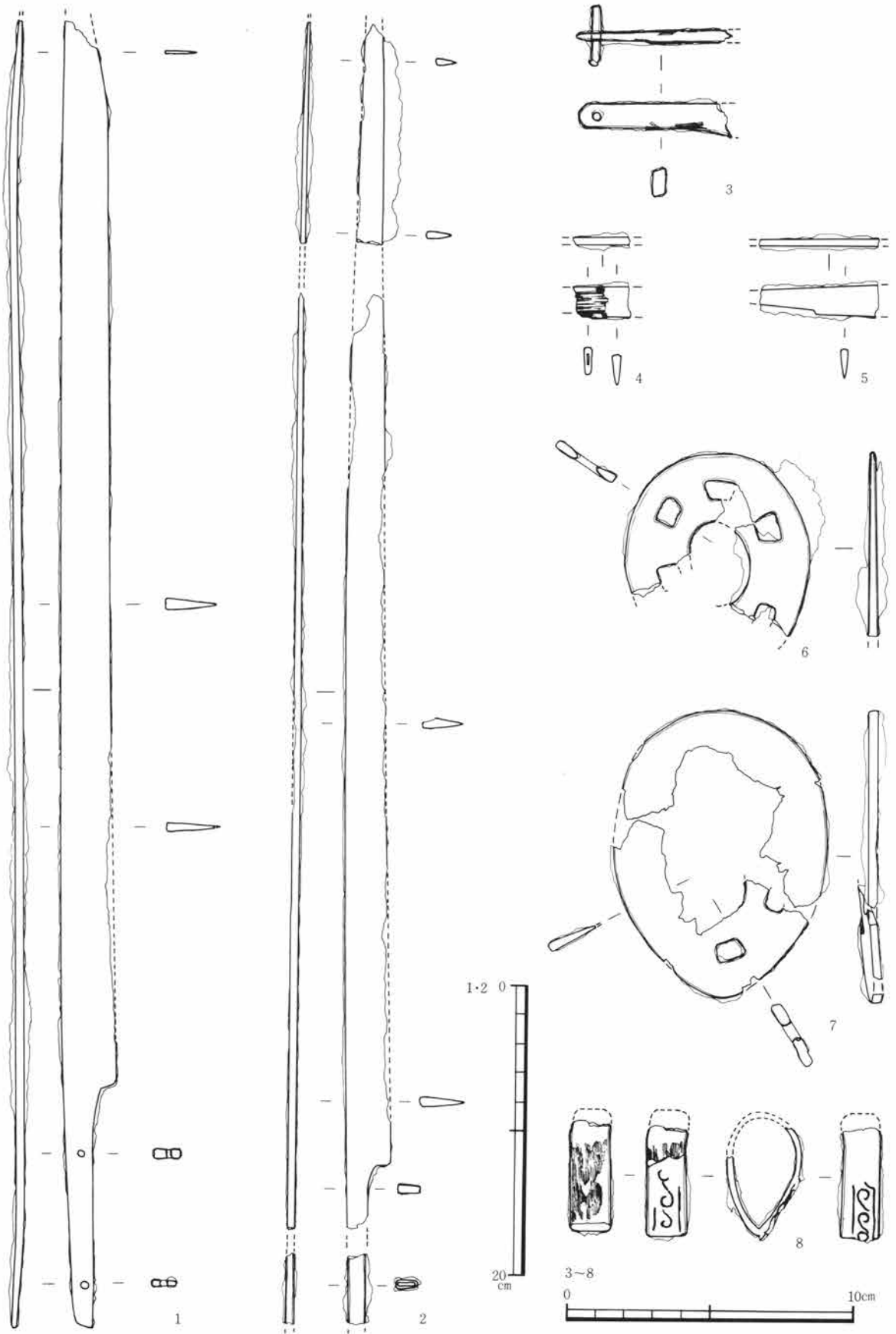


Fig. 177 7号墳出土遺物実測図

第2節 古墳時代

7号墳出土遺物一覧表 (円筒埴輪)

単位: cm

挿図番号 図版番号	器高 (残高)	口径	底径	透孔		突帯		胎土	焼成	色調	成形・調整・刷毛目・備考
				上段 (推定)	下段 (推定)	上	下				
Fig. 178-1 PL. 79-1	(22.5)	(20.0)		あり		2.0	2.6	小礫混入	僅かに あまい	橙	外面縦方向器面調整。内面 口縁付近斜、中位は縦刷毛。
Fig. 178-2 PL. 79-1	(18.4)	(22.4)		(4.2)		2.0	2.6	小礫混入	良好	暗赤褐	外面は縦方向に器面調整。 内面は縦刷毛。
Fig. 178-3 PL. 79-1	(17.8)	(21.4)		(3.4)		2.1		小礫混入	良好	橙	外面縦方向器面調整。内面 口縁付近斜、中位は縦刷毛。
Fig. 178-4 PL. 79-1	(12.2)	(20.2)				2.2		砂質に雲母・ 石英を含む。	僅かに あまい	赤褐	外面縦方向器面調整。内面 口縁付近横、下は斜刷毛。
Fig. 178-5 PL. 79-1	(11.0)	(22.4)				2.2		砂質に雲母・ 石英を含む。	僅かに あまい	明赤褐	外面縦方向器面調整。内面 口縁付近斜、中位は縦刷毛。
Fig. 178-6 PL. 79-1	(10.3)	(22.4)				1.8		小礫混入	僅かに あまい	橙	外面縦方向器面調整。内面 口縁付近縦、中位は縦刷毛。
Fig. 178-7 PL. 79-1	(8.8)	(21.4)				1.4		砂質に雲母・ 石英を含む。	僅かに あまい	にぶい赤褐	外面は縦方向に器面調整。 内面は縦刷毛。
Fig. 178-8 PL. 79-1	(12.1)	(22.0)				2.4		小礫混入	僅かに あまい	にぶい橙	外面縦方向器面調整。内面 口縁部横撫で、以下縦刷毛。
Fig. 178-9 PL. 79-1	(14.7)	(24.2)				3.0		砂質に雲母・ 石英を含む。	良好	明赤褐	内外面とも縦方向に荒い調 整痕。
Fig. 180-1 PL. 79-3	(10.1)			(4.0)		2.0		小礫混入	良好	明赤褐	外面縦方向器面調整。内面 口縁付近斜、中位は縦刷毛。
Fig. 180-2 PL. 79-3	(10.7)			3.4			3.0	砂質に雲母・ 石英を含む。	良好	明赤褐	内外面とも縦方向に器面調 整。
Fig. 180-3 PL. 79-3	(9.3)			あり		1.6		主に砂質、礫 を一部包含	良好	にぶい橙	外面は縦方向に器面調整。 内面は縦刷毛。
Fig. 180-4 PL. 79-3	(8.9)			(4.0)		2.2		砂質に雲母・ 石英を含む。	良好	明赤褐	内外面とも縦方向に器面調 整。
Fig. 180-5 PL. 79-3	(7.2)			(4.0)			1.4	砂質に雲母・ 石英を含む。	良好	明赤褐	外面は縦方向に器面調整。 内面は縦刷毛。
Fig. 180-6 PL. 79-3	(10.0)					1.4		小礫混入	良好	橙	外面は縦方向に器面調整。 内面は縦刷毛。
Fig. 180-7 PL. 79-3	(12.1)					2.4		砂質に雲母・ 石英を含む。	良好	橙	外面は縦方向に器面調整。 内面は縦刷毛。
Fig. 180-8 PL. 79-3	(13.5)					2.0		砂質に雲母・ 石英を含む。	良好	にぶい橙	外面は縦方向に器面調整。 内面は縦刷毛。
Fig. 180-9 PL. 79-3	(12.2)					2.0		小礫混入	良好	明赤褐	内外面とも縦刷毛。外面に 篋記号×印がある。
Fig. 180-10 PL. 79-3	(14.5)					2.0		砂質に雲母・ 石英を含む。	良好	にぶい赤褐	内外面とも縦刷毛。
Fig. 180-11 PL. 79-3	(9.4)					2.2		小礫混入	良好	明赤褐	外面は縦方向に器面調整。 内面は縦刷毛。
Fig. 180-12 PL. 79-3	(7.7)					1.6		小礫混入	良好	明赤褐	外面は縦方向に器面調整。 内面は斜方向に刷毛。
Fig. 180-13 PL. 79-3	(12.6)		(11.0)				2.6	砂質に雲母・ 石英を含む。	良好	明赤褐	内外面とも縦刷毛。
Fig. 182-1 PL. 80-1	(15.8)		(15.4)				1.6	砂質に雲母・ 石英を含む。	良好	明赤褐	内外面とも荒い縦刷毛。整 形後外面は板おさえ。
Fig. 182-2 PL. 80-1	(16.3)		(16.0)					主に砂質、礫 を一部包含	良好	明赤褐	外面は縦刷毛、内面は荒い 刷毛。
Fig. 182-3 PL. 80-2	(14.0)		(16.6)					砂質に雲母・ 石英を含む。	良好	明赤褐	内外面とも荒い縦刷毛。底 部に粘土の合わせ目が残る
Fig. 182-4 PL. 80-1	(12.4)		(14.4)					砂質に雲母・ 石英を含む。	良好	明赤褐	内外面とも縦刷毛後、外面 底部付近は板おさえ。
Fig. 182-5 PL. 80-1	(10.6)		(14.8)					砂質に雲母・ 石英を含む。	良好	明赤褐	内外面とも荒い縦方向の刷 毛調整を行なっている。

7号墳出土遺物一覧表（円筒埴輪）

単位：cm

挿図番号 図版番号	器高 (残高)	口径	底径	透孔		突帯		胎土	焼成	色調	成形・調整・刷毛目・備考
				上段 (推定)	下段 (推定)	上	下				
Fig. 182-6 PL. 80-2	(11.8)		15.8					砂質に雲母・ 石英を含む。	良好	明赤褐	内外面とも荒い縦刷毛。
Fig. 182-7 PL. 80-1	(11.7)		(14.0)					砂質に雲母・ 石英を含む。	良好	橙	内外面とも縦刷毛。
Fig. 182-8 PL. 80-1	(8.8)		(14.4)					砂質に雲母・ 石英を含む。	僅かに あまい	橙	外面は縦刷毛後底部付近を 板おさえ、内面縦刷毛。
Fig. 182-9 PL. 80-1	(9.6)		(14.0)					砂質に雲母・ 石英を含む。	良好	橙	外面底部付近は板おさえ、 内面は縦方向の撫で整形。
Fig. 182-10 PL. 80-1	(8.0)		(14.2)					砂質に雲母・ 石英を含む。	良好	明赤褐	外面底部付近は板おさえ、 内面は縦方向の撫で整形。
Fig. 182-11 PL. 80-1	(8.3)		(14.6)					砂質に雲母・ 石英を含む。	僅かに あまい	橙	外面底部付近は板おさえ、 内面は縦方向の撫で整形。
Fig. 182-12 PL. 80-1	(6.5)		(13.8)					砂質に雲母・ 石英を含む。	僅かに あまい	橙	外面は縦方向に器面調整。 内面は縦刷毛。
Fig. 182-13 PL. 80-1	(7.4)		(14.0)					砂質に雲母・ 石英を含む。	良好	橙	外面は荒い目による調整。 内面は撫で調整。
Fig. 182-14 PL. 80-1	(6.7)		(14.6)					砂質に雲母・ 石英を含む。	僅かに あまい	橙	内外面とも縦刷毛。外面斜 方向に数条の平行線が入る
Fig. 182-15 PL. 80-1	(6.4)		(12.0)					主に砂質、礫 を一部包含。	良好	橙	内外面縦方向に器面調整。

埴輪

円筒埴輪 (Fig. 178~183、PL. 79-1~4・80-1~3)

7号墳出土の円筒埴輪は墳丘の崩壊により墳丘上より出土したものや、墓道内覆土から破片として出土したものがあつた。このため完存するものは無い。ここで取り扱う破片についてはある程度計測可能なものに限る (Fig. 178・180・182) 前表にそれぞれの計測結果と特色を記入した。また、7号墳出土の円筒埴輪の数を求めることが困難な状況であることは知りつつ、口縁部と底部に関しては拓本として観察できるものはここに拓本を全て登載した。前表を含め、口縁部の出土点数 (同一個体分も当然含まれていると考えられる) 40点であり、小破片の口縁部では71点である。このため口縁部の合計は111点である。底部の出土点数は47点であり、口縁部同様他に20点の小破片を加えると、底部合計は67点である。胴部の破片は、図示できた数は17点であり、比して代表的な特色をもつものを選んだ。その他は小破片が主であり、1074点を加え、胴部の破片合計は1091点になる。これらの破片の総数は1269点になる。

口縁部の形状は普通、円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪に分けることができる。主として普通、円筒埴輪がほとんどを占める。

円筒埴輪の製作技法は粘土紐による巻き上げ作りである。外面は、刷毛による整形を主とする他に突帯部分は粘土を粘り付け、断面は台形と三角形を呈したものに二分できる。突帯部分とその上下は横方向に指撫を行なっている。口唇部も同様な手法により整形したと考えられる。また底部付近には板おさえ痕が刷毛目整形後に斜方向に付けられている。外面は、刷毛による整形を行なっており、主として縦方向である。また透孔の確認できるものとしては、Fig. 178-1~3・9と、Fig. 180-1~5であり、形状の明瞭なものはないが、弧の状況から判断して円形乃至円形に近似するものと推測できる。内面の観察から明らかになることは、紐作り痕が一部で確認できる。底部付近に自重による縮みが皺となつて残るものがある (Fig. 181-16・



Fig. 178 7号墳出土遺物実測図

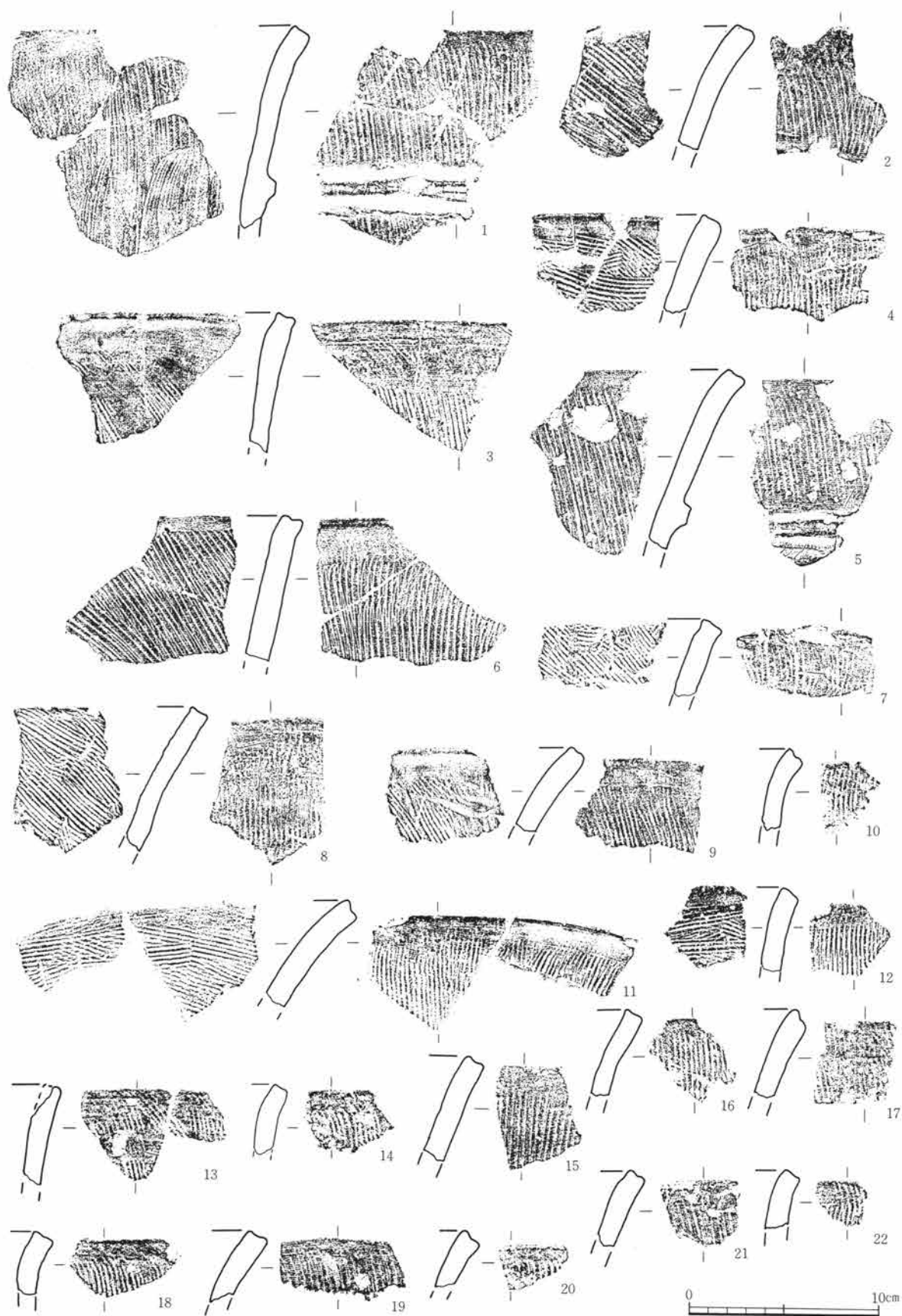


Fig. 179 7号墳出土遺物実測図

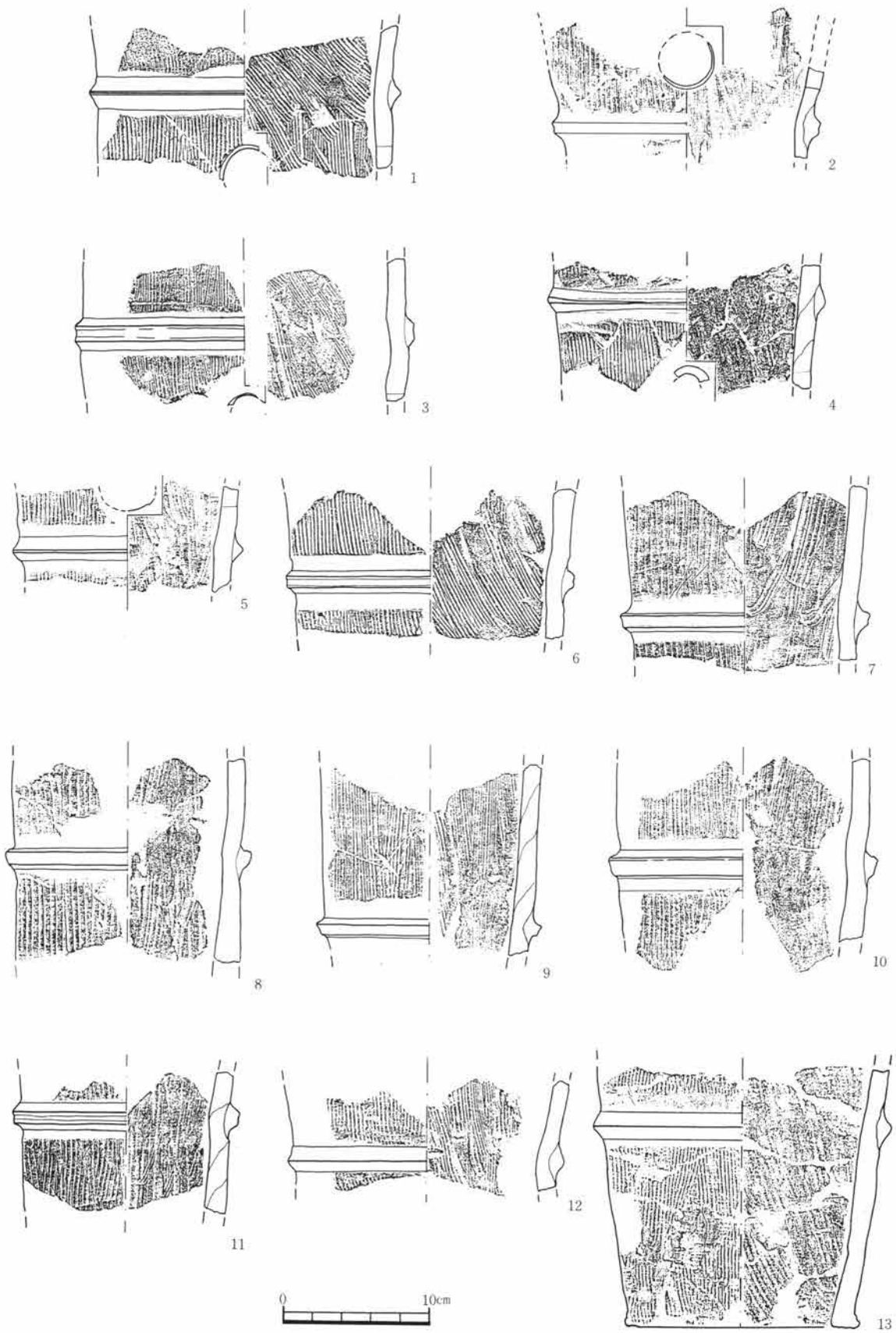


Fig. 180 7号墳出土遺物実測図

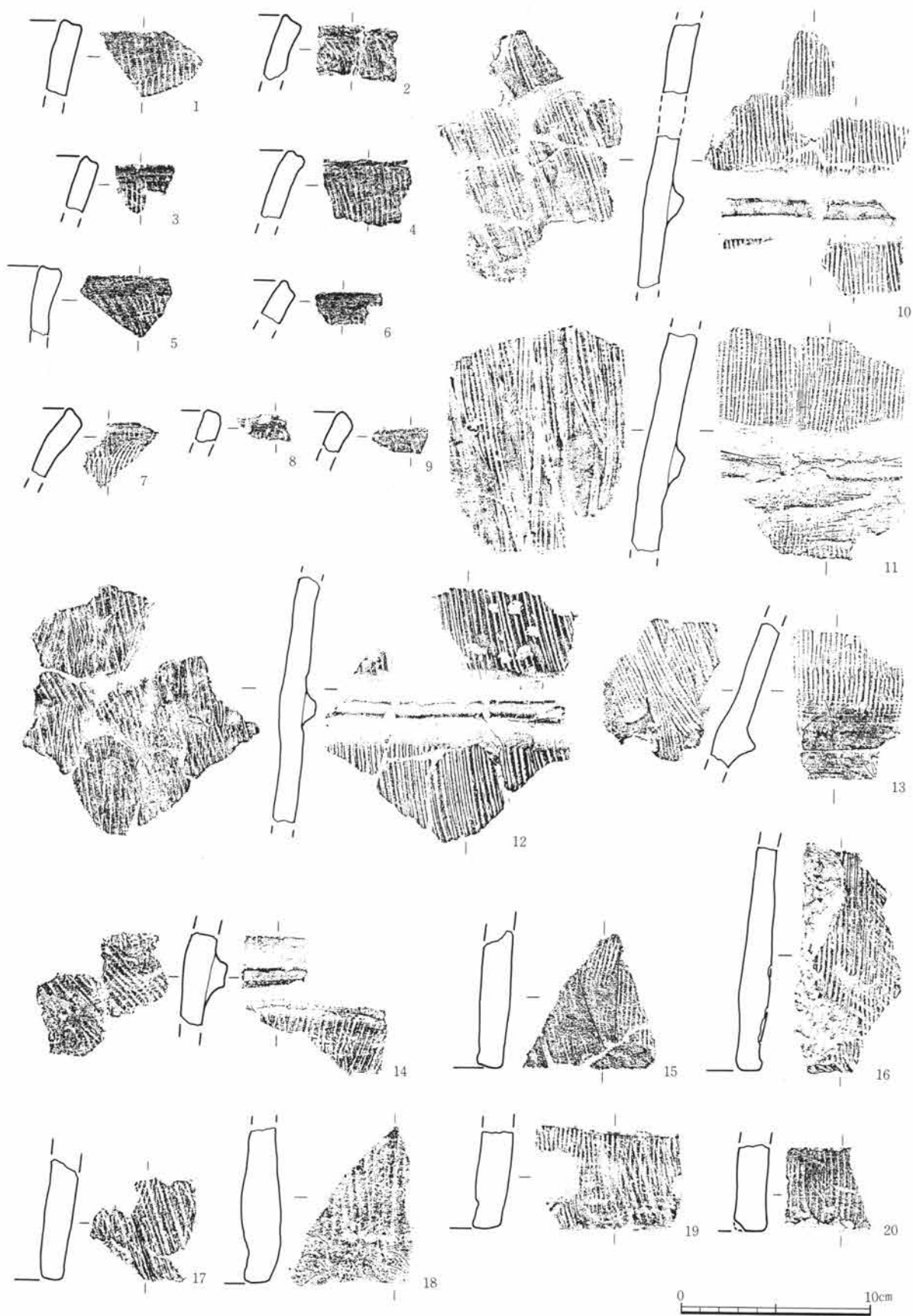


Fig. 181 7号墳出土遺物実測図

第2節 古墳時代

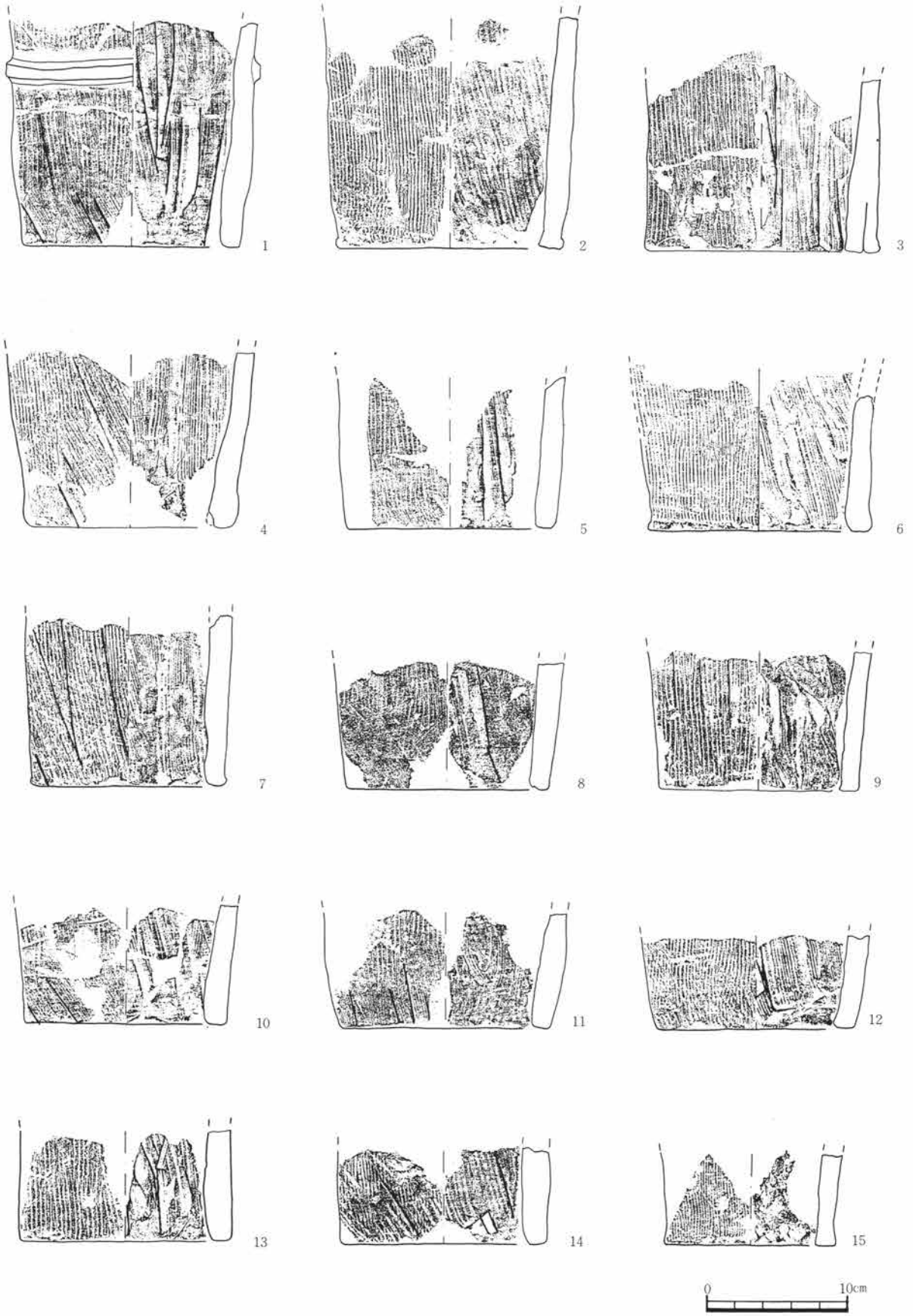


Fig.182 7号墳出土遺物実測図

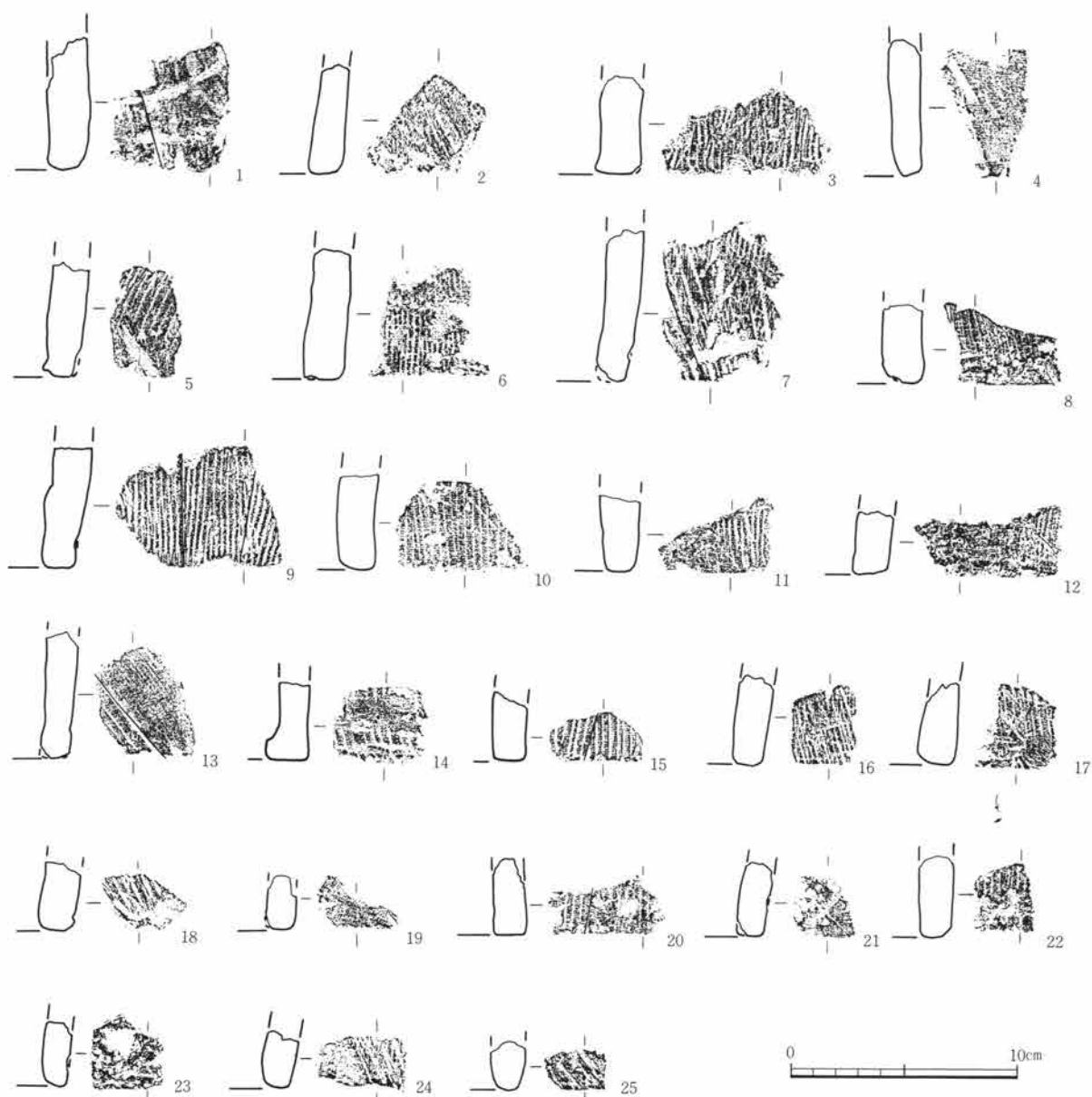


Fig.183 7号墳出土遺物実測図

19など)。整形は口縁部を横撫で、また刷毛による整形は横、斜、縦方向の4種類がある。胴部から底部にかけては縦方向の刷毛目が主であるが、底部付近には縦方向、または斜方向に指と思われる整形痕が残るものが小破片の中に見られる。底部内面には一部の破片であるが、篋と思われる工具により横方向に面取りを行っているものもある。

また、埴輪の表面に黒色の細かい吹き付け状のツブツブが多く見られる。内面にも僅かに見られるものがある (Fig. 180-6・181-11、PL. 79-3・4など)。

形象埴輪 (Fig. 184—1～12, PL. 80—4) 7号墳の墳丘上面は削平されており、石室の天囲石や壁石の上位のものは取り除かれている。ここで取りあげる12点は、当古墳の墳丘上の東南部寄りから出土したものが多く、一部は北、西、前庭部覆土内より出土の破片もある。これらはいずれも家形埴輪の破片と考えられる。

1. 棟部分の破片と考えられる。2つの破片が接合、1片は墳丘上南東部分、他1片は墳丘上北西部分からの出土であった。棟の部分は内面に当たる部分と外面に当たる部分は粘土を貼り付けて成形されるものと考えられ、一部分が剥れている。板状の屋根を2枚合わせる部分であり、棟部分を裏から粘土を押しつけてある様にも観察できる。この接合部分には棟長軸方向に刷毛目が入る。胎土は黒色粒子の他に僅かに小礫が混入している。焼成は良いが、後に器面が荒れたものと考えられる。色調は表裏面とも赤褐色を呈すが、剥れた部分は灰褐色を呈す。

2. 棟部分の破片と考えられる。出土地点は墳丘上北側である。1と同様な様相を呈すが、裏面からの粘土の押し付けでは無く、しっかりと固定させている様である。また端部に粘土が押し付けられて高くなっていることは切り妻屋根に破風を取りつけた際の粘土の固定状況を表わしているものかもしれない。一部棟付近で剥れた部分が見られる。ここは1同様に刷毛目が入っている。胎土には白色鉱物が混入している。焼成は良いが、表面が荒れている。裏面は刷毛目が僅かに見られる。色調は表裏面とも赤褐色を呈す。裏面は器面に黒色（添加物？）の付着物がみられる。

3. 破風と考えられる。2つの破片が接合できる。両者とも墳丘上の南東部分からの出土である。破風の表面の幅は約3.4cmである。胎土は白色の鉱物を僅かに含む。焼成は良好である。色調は赤褐色を呈す。破風の表面は長軸方向に撫で整形を行なっている。

4・5・6 軒廂？ 4は墳丘上南東部分から出土した2片が接合できる。6は墳丘上の北東から出土した破片である。4・6は胎土に白色鉱物と小礫を含み、焼成は良いが、器面が僅かであるが荒れている。色調は3片とも赤褐色を呈す。5の胎土は、4と6に類似はするが結晶質の石英片岩が入る。5は裏面が剥れた様相を呈している。3片の共通点は表面の器面調整を目的の荒い刷毛目整形を横方向に行なった後に、平行線による鋸歯文を施文している。

7～11は屋根の破片と考えられる。7・10・11は前庭部の覆土内から出土している。8・9は墳丘上南東部分から出土している。11を除いていずれも横方向に刷毛目整形した後に重弧文を細かい沈線で描いている。ただし、破片により重弧文の幅の違いや、横刷毛の相違が見られる。10・11は端部が反りをもっていることから、軒部分になる可能性がある。胎土は7・8が僅かに砂質を帯び、白色鉱物を僅かに含んでいる。9・10・11は小礫を含み、僅かではあるが結晶質の石英片岩を含んでいる。10・11は表面に黒色の付着物が僅かに見られる。焼成は良好であるが、後に器面が荒れたものに7・8・9があげられよう。色調は全て赤褐色を呈すが、11が僅かに明るい色をしている。

12. 壁または屋根、墳丘上南東部分から出土した。類例の多くは屋根に重弧文をもつものが多いので、屋根の可能性もある。外面は横方向に刷毛目があり頭部は横撫でを行なっている。裏面は縦と斜方向に僅かであるが刷毛目があり、端部に近接して横方向の刷毛目がある。胎土は白色鉱物を含み、僅かであるが礫がある。また結晶質石英片岩が含まれている。焼成は良好である。色調は表裏面とも赤褐色である。

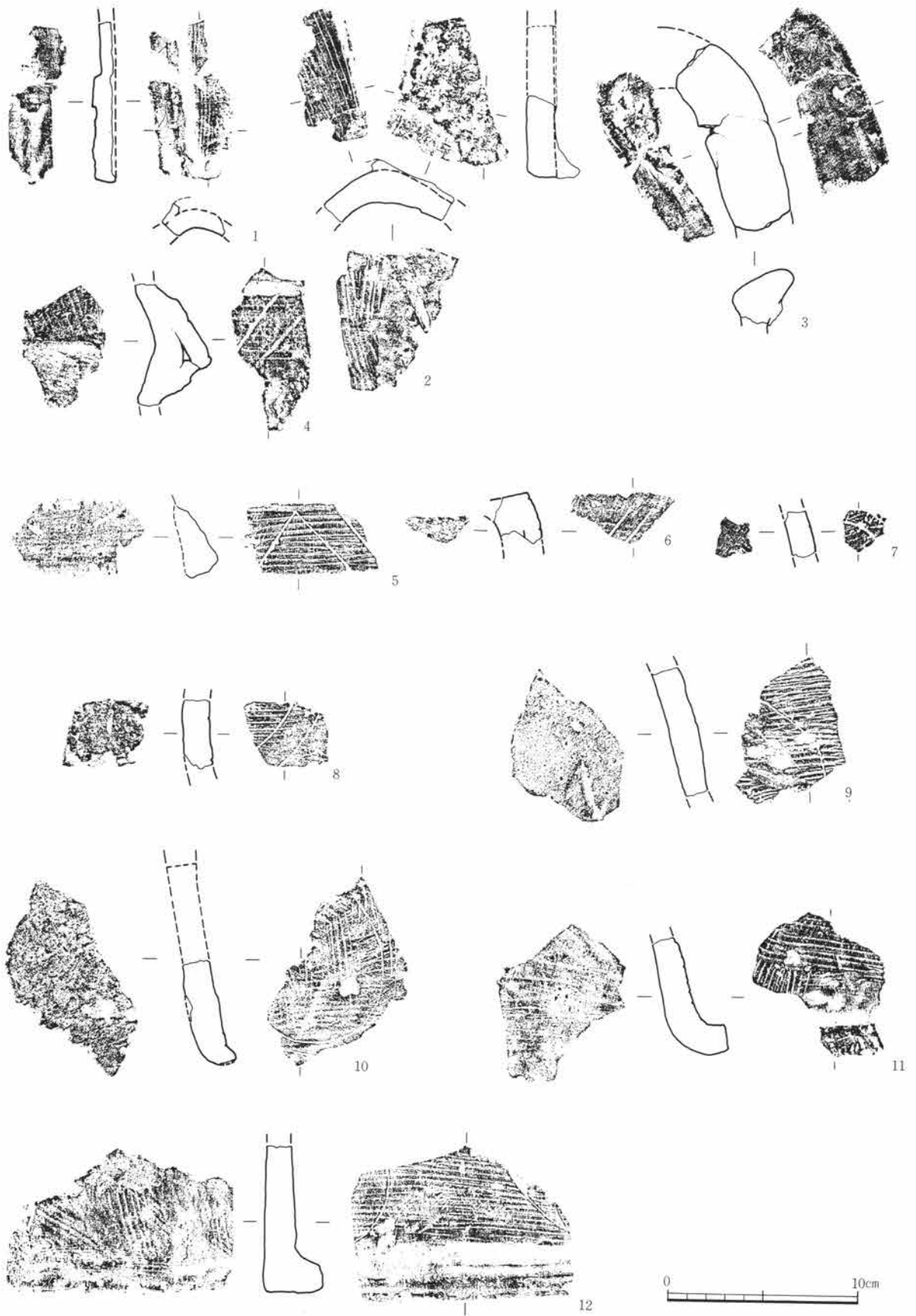


Fig. 184 7号墳出土遺物実測図

8号墳 (Fig. 185・186、PL. 81-1~2・82-1)

位置 長久保遺跡の北西部にあたる。2号墳の西にあたるが、2号墳との間に13号墳があり、関越自動車道関係の調査報告で解明されることになる。

墳丘及び外部施設 小高く盛り上ったいわゆる陣場泥流残丘を巧みに利用した円墳。調査時点では、南及び東側部分は墓地によって切られてはいたものの、高さ約3m、直径約25mの円形の高まりを見せ、盛土をもった円墳として原形をよくとどめているものと考えられた。しかし、表土を約20cm除去した面で図版で見るように陣場泥流層が露出し、残った高まりは全体が陣場泥流堆積層によって形成されていることが明らかになった。残丘裾部で周堀の有無確認のため入れたトレンチの所見によると、上記泥流層はほぼ同傾斜で地中へのび、その上にローム層、暗褐色土層、浅間C軽石層等が堆積し、古墳構築時においても現在と同程度の高まり、すなわち、円墳として手頃な大きさの残丘であったことが判明した。古墳構築にあたって、この残丘部を巧みに利用し、古墳としての形に整えたものである。この上にどれほどの盛土をしたかは明らかではない。しかし、後述する石室根石設置面は、現在の頂上部レベルとさほどの差はなく、石室高を2m弱と考えた場合、盛土は3m前後であったろうか。周堀はない。墳丘東側から埴輪片が出土した。

主体部の構造 主体部は横穴式石室であったと考えられるが、石室本体はすでに破壊しつくされ、石室構築時の「掘り方」及び石室裏込め石の一部とみられる礫群が一部残っていたにすぎない。「掘り方」南端も墓地により切られ全容は不明。現状では幅3.4~3.5m、長さ6m前後、深さ10~30cmである。

遺物出土状況 攪乱された「掘り方」の中から耳環1点と須恵器高杯が出土している。 (松本)

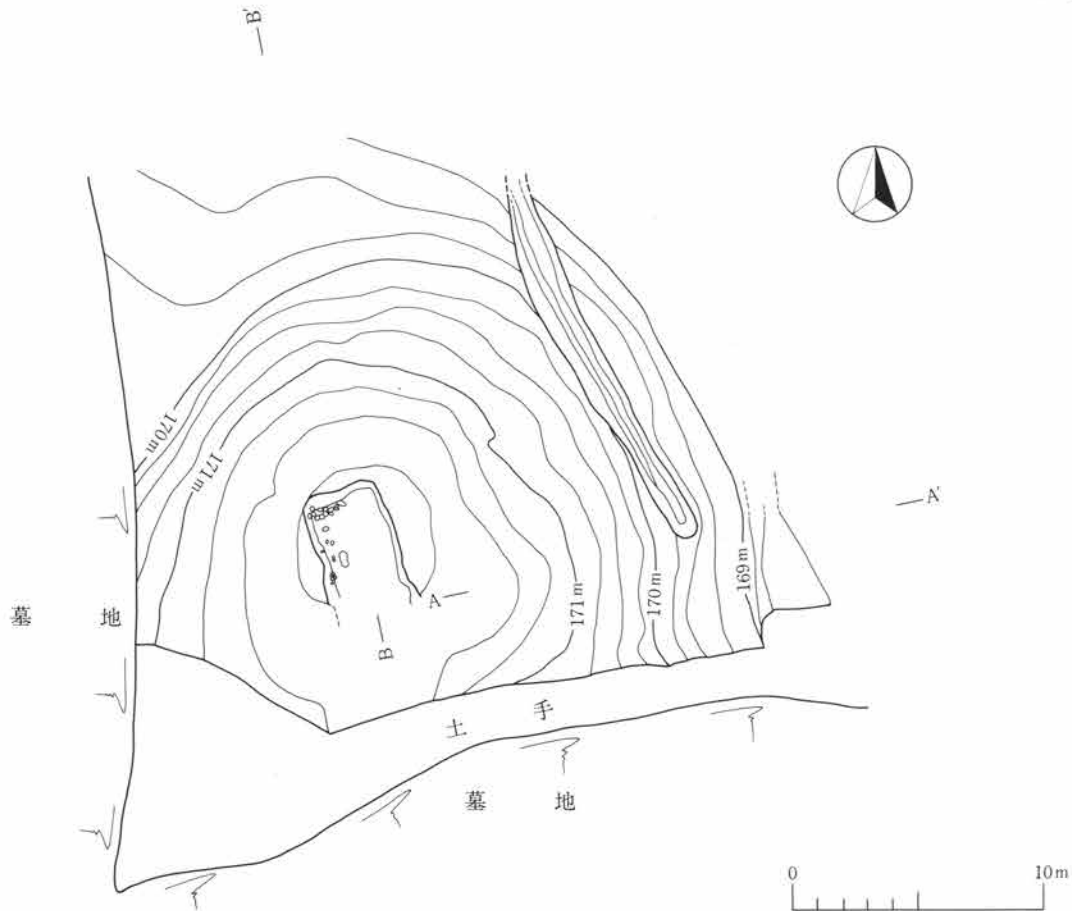


Fig. 185 8号墳墳丘等高線図



Fig. 186 8号墳掘り方実測図

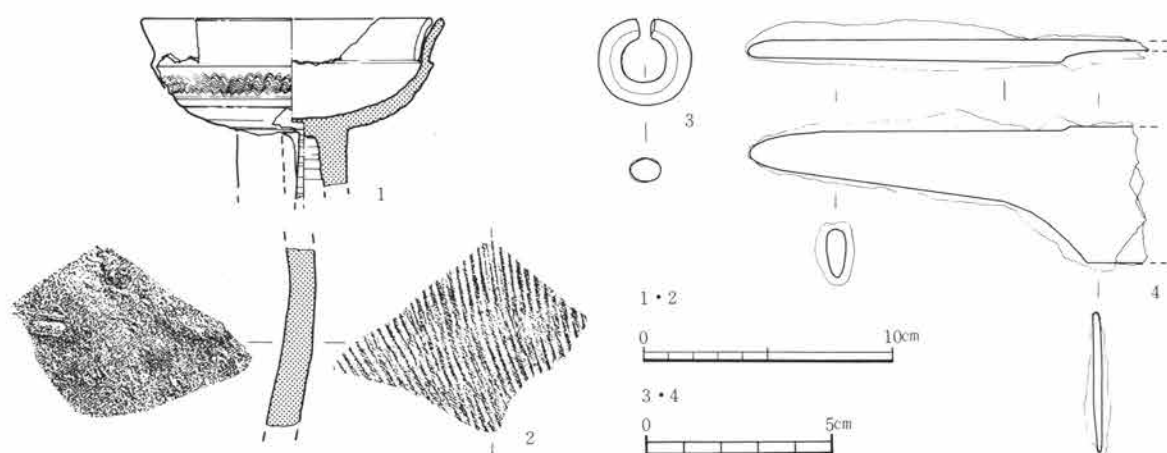


Fig. 187 8号墳出土遺物実測図

出土遺物 (Fig. 187・188、PL. 82-2～5)

須恵器

高杯 (Fig. 187-1、PL. 82-2) 石室内攪乱層から出土。脚部の大部分を欠損する。杯部は約2分の1残存する。口径12.0cm、杯部の高さ4.6cmである。脚部には三方透し窓がある。杯部は稜下位に櫛描波状文が入る。胎土には白色粒子を多量に含む。焼成は良好である。外面は自然釉で黒色の光沢をもつ。内面は灰の付着がみられる。

甕 (Fig. 187-2、PL. 82-3) 8号墳墳丘東側にほぼ南北に走る溝がある。新しい溝であるが時期は不明。この溝内より甕の破片が出土。外面は平行叩き目文、内面は撫でが入り、あて目は確認できない。胎土中には白色粒子が多量に入る。焼成は僅かにあまい。色調は灰色である。

8号墳出土遺物一覧表 (耳環)

図版は巻頭

挿図番号	残存状態	外 径 (cm)		内 径 (cm)		断 面 (cm)		重 さ (g)
		a	b	c	d	e	f	
Fig. 187-3	完 形	2.48	2.27	1.22	1.13	0.79	0.64	3.49

鉄 器

直刀 (Fig. 187-4、PL. 82-4) 主体部の掘り方内覆土からの出土である。残長10.5cm、区部から茎にかけての破片である。刃部の残長1.5cm、茎部残長9.5cmである。錆がひどく、細部にかけての状況は不明な点が多い。

埴 輪

円筒埴輪 (Fig. 188、PL. 82-5) 8号墳の埴輪出土状況は、古墳の南側を切りとられ、東側は新しい溝に切り込まれ、墳丘上位(封土)はほとんど削りとられている。このため石室構築の石材はすべて取り除かれており、埴輪が出土した地点は東側溝の中の二次堆積土内である。記載した15点の他は底部3点と胴部57点があり、総出土点数75点である。円筒埴輪口縁部6点のうち Fig. 188-2は、横撫での指おさえが弱く、他は当遺跡出土の全般的な横撫で技法である。胴部の破片は7点ある (Fig. 188-7～13)。突帯は台形状を

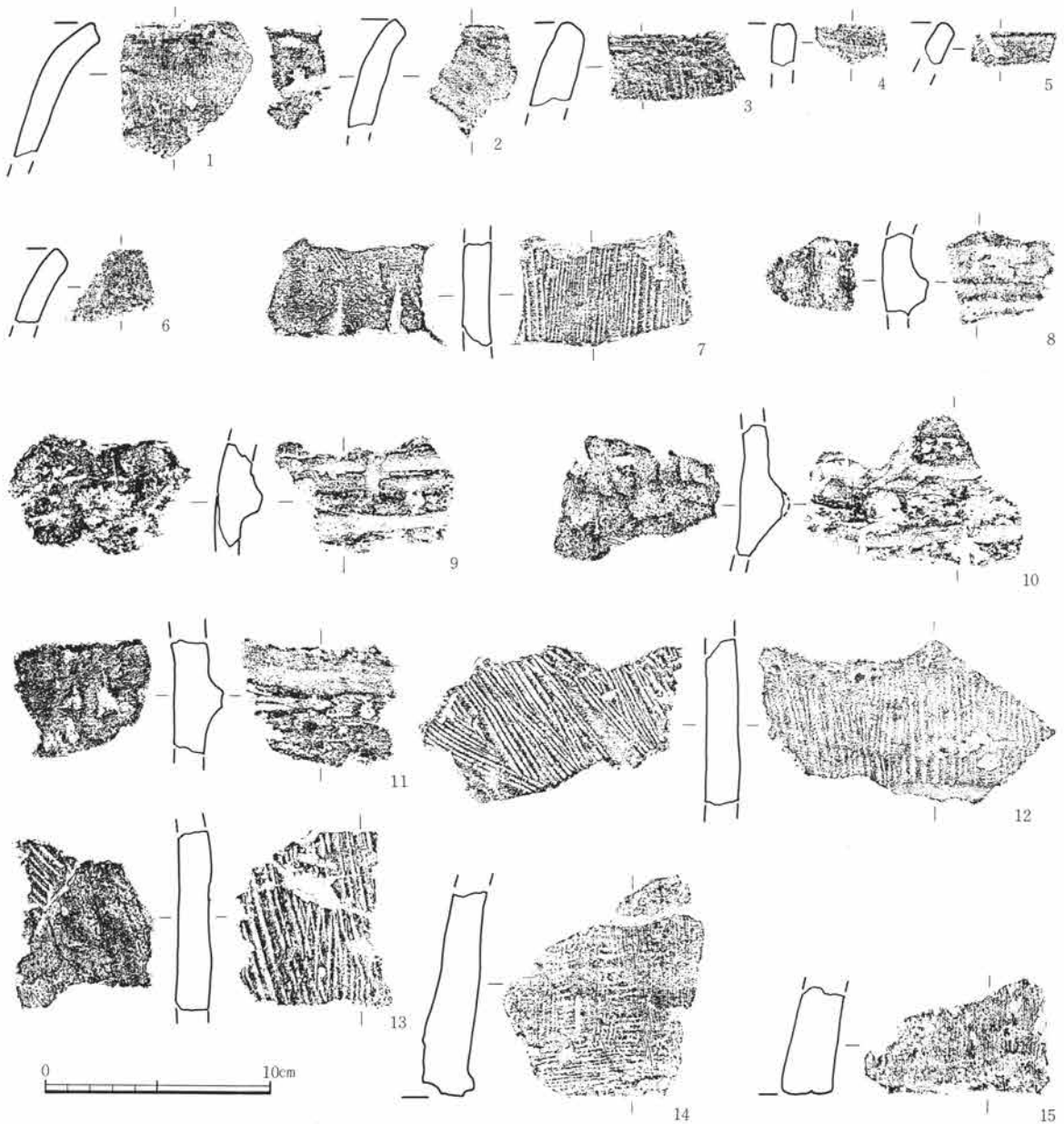


Fig.188 8号墳出土遺物実測図

呈するものが多い。突帯部分およびその上下は、指による横撫でが観察できる (Fig. 188—8～11)。また透孔のある破片は2点 (Fig. 188—7・11) ある。7はほぼ円形になると推測できるが、11は形状を定めるまでの状態を呈していない。底部は2点 (Fig. 188—14・15) あり、14は外面に自重による縮みが皺となってみられるが、これを横方向の刷毛で整形を行なっている。14・15とも底面に幅3mmの棒状の圧痕が明瞭に残る。また15は底面に粘土の合わせ目がある。整形方法は外面は主として縦方向の刷毛目があり、口縁部や突帯部分は横方向の撫でを行なっている。内面は斜または縦方向の刷毛目が多く、底部付近の破片では指による縦方向の器面調整を行なっている。胎土中には小礫を全体に含む他に、白色・黒色鉱物も混入する。焼成は焼き締まりが良いものが多いが、製作時以後と思われるが器面が荒れているものもある。色調は全般的に赤褐色のものが多い。

9号墳 (Fig. 189・190、PL. 83-1~2・84-1)

位置 上毛古墳総覧旧清里村第5号墳。南北に長い陣場泥流の頂上南端部に主体部をもつ古墳であり、西は低く水田となっている。東には10号墳が近接して東斜面に構築されている。

墳丘と外部施設 陣場泥流残丘の南斜面を利用して構築した山寄せ式の円墳。調査時点では、盛土、石室壁石等はすべて削平され、主体部の「掘り方」等一部が残されていたにすぎない。「掘り方」東西に入れたトレンチの所見により、本古墳も古墳構築時地山を削って墳丘裾部を整形していることが確認できた。東側では榛名山二ツ岳噴出の火山灰層 (FA) 及びその下の浅間C軽石を含む黒色土層を約40cm (調査時) 削り、東側では前述の黒色土層及びローム層を約65cmほどの深さまで削って整形している。北側については明らかでないが、上記の点を基準にすると、直径約13mの円墳と考えられる。石室入口前には、ハの字形に開く前庭があったようで、前庭右側の石組根石の一部が残されていた。全体形状、規模は明らかでない。周堀、埴輪は無い。

主体部の構造 横穴式石室を主体部とすることは明らかであるが、壁石は全て抜き取られ、その形状、規模は不明。石室は前述の黒色土層から掘り込んだ深さ1.3m (奥)~0.7m (前)、奥幅約4.2m、前幅約3.0mの平面羽子板状の「掘り方」の中に構築された。調査時点では石室裏込め石の一部が「掘り方」法面に接して残っただけである。残った石の配置等をみると両袖型であった可能性が強い。

遺物の出土状況 前庭部から土師器広口壺、須恵器短頸壺が出土している。土師器甕は、前庭部奥寄り中央部で、残された石組の西側1mのところにかたまっているが完全な1個体とはならない。須恵器壺は、前庭前端に近いところでほぼ1個体。他に覆土中に須恵器、土師器の破片が出土。 (神保)

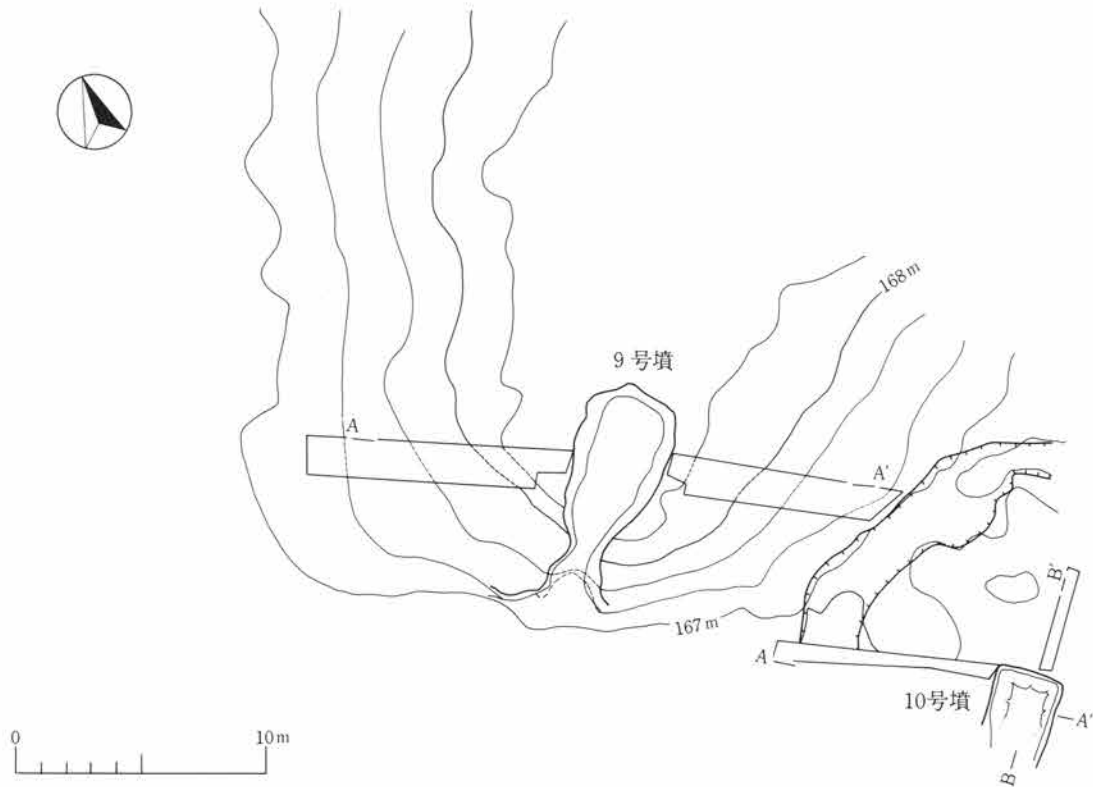


Fig. 189 9・10号墳墳丘等高線図

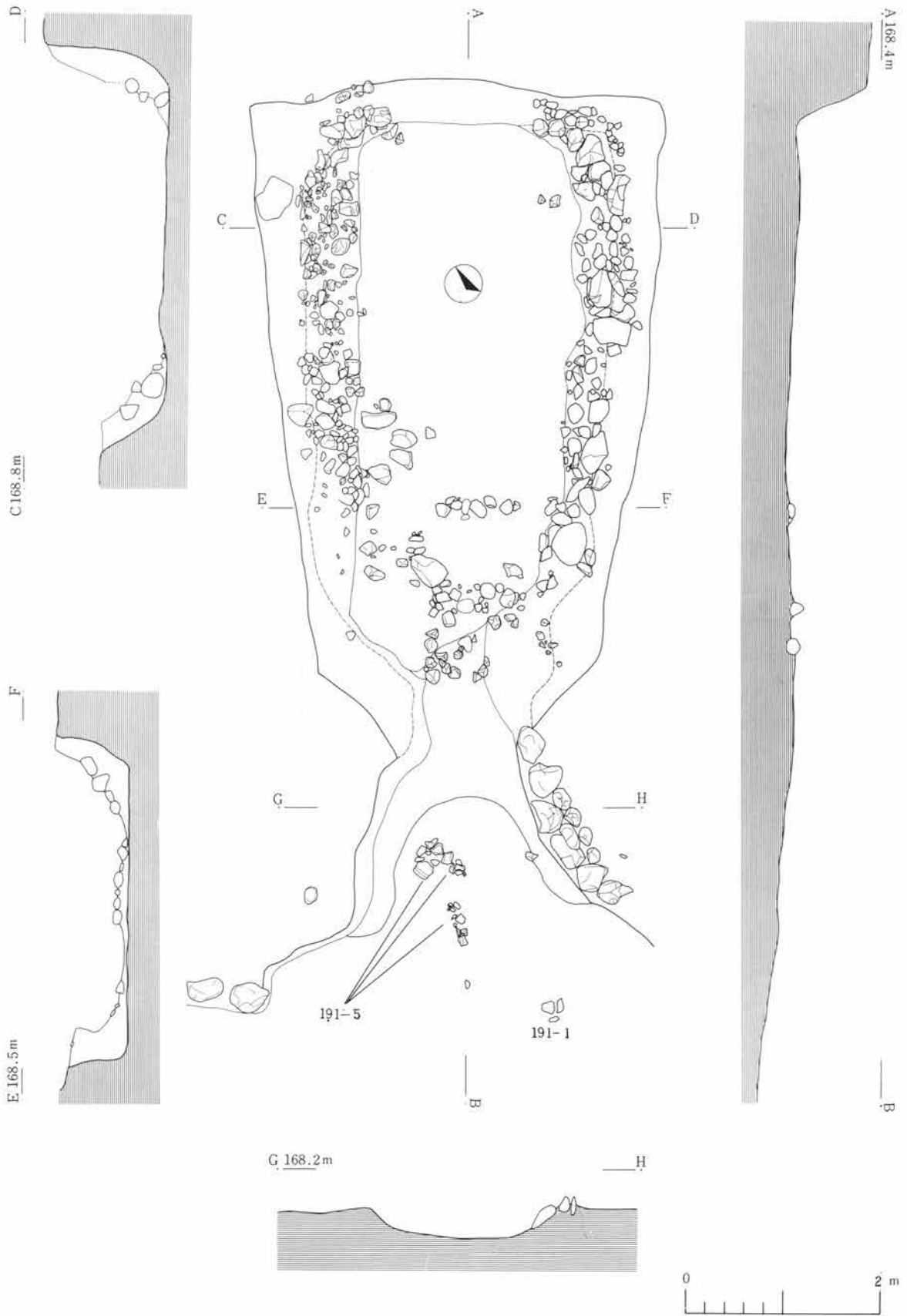


Fig.190 9号墳石室実測図

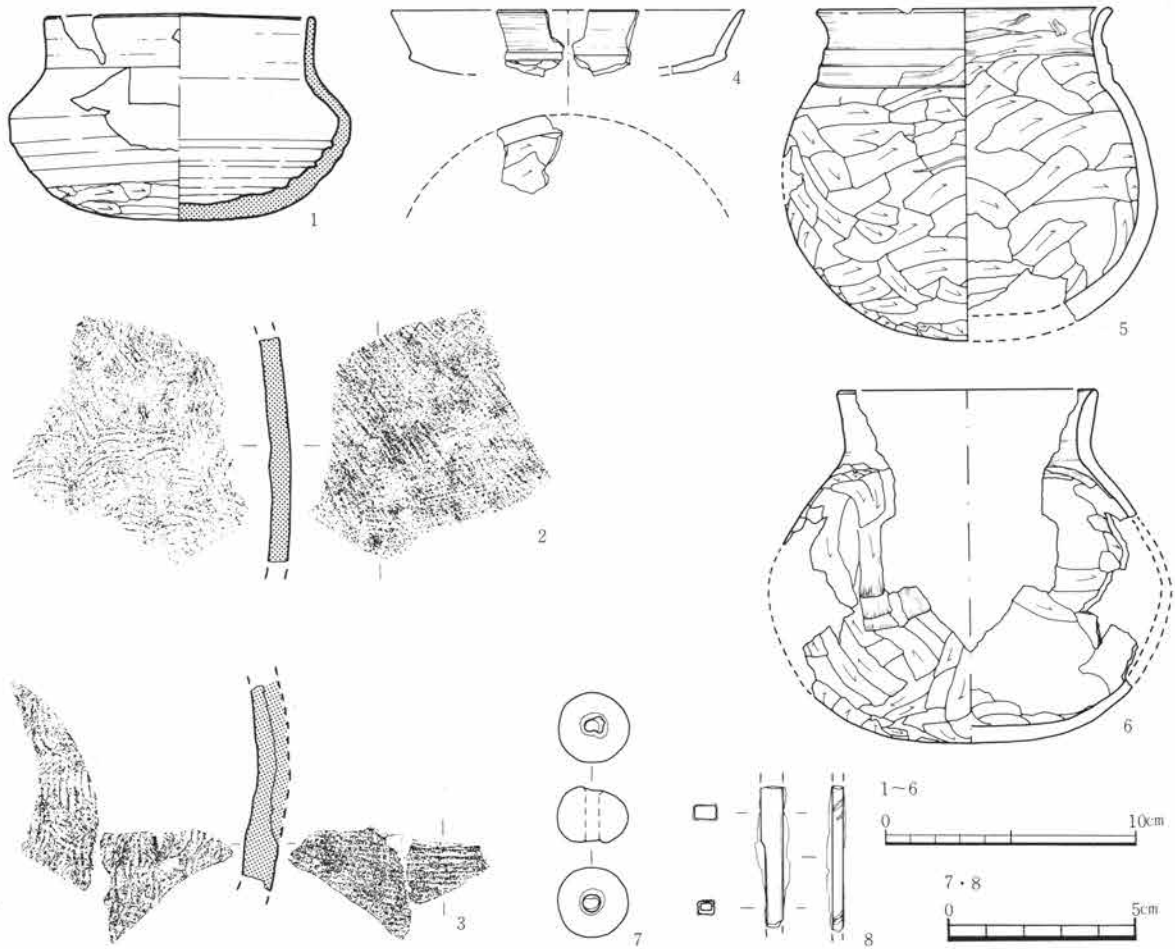


Fig. 191 9号墳出土遺物実測図

出土遺物 (Fig. 191、PL. 84-2~6)

須恵器

短頸壺 (Fig. 191-1、PL. 84-2) 墓道覆土内出土。2分の1残存。口径10.7cm、胴最大幅13.8cm、高さ13.8cm。底部は回転篔削り後一部手持ちの篔調整。胎土は夾雑粒子を含む。焼成は僅かにあまい。灰白色。

甕 (Fig. 191-2、PL. 84-3) 墓道覆土内出土。胴部の破片。外面は格子状の叩き目、内面は青海波文のあて目がある。胎土中には小礫や白色鉱物を含む。焼成は良好である。色調はオリーブ黒である。

甕 (Fig. 191-3、PL. 84-3) 墓道覆土内出土。胴部の破片。外面は平行叩き目文。内面は青海波文のあて目がある。胎土中には小礫が多数入る。焼成は良好である。色調は灰色である。

土師器

杯 (Fig. 191-4、PL. 84-3) 墓道覆土内出土。口縁部の破片である。稜を僅かにもつ。口縁部は横撫で、底部は篔削りを行なっている。胎土は夾雑鉱物を含む。焼成はあまい。色調は橙色である。

広口壺 (Fig. 191-5、PL. 84-5) 墓道出土。6分の5残存。胴部は球形状を呈し底部は丸底である。口縁部は外反する。口縁部中央に段をもつ。

広口壺 (Fig. 191-6、PL. 84-6) 墓道覆土内出土。4分の1残存。球胴、丸底を呈す。口縁部はほぼ直立する。胴部は篔削り、口縁部は横撫で整形を行なっている。胎土は夾雑鉱物を含む。焼成は良いが器面

が荒れている。色調はにぶい橙色である。

鉄 器

鉄鏃 (Fig. 191-8、PL. 84-4) 鉄鏃の箆被部の破片と考えられる。

9号墳出土遺物一覧表 (丸玉)

図版は巻頭

挿図番号	名 称	残存状態	材 質	計 測 値 (cm)						重 さ (g)	色 調
				a	b	c	d	e	f		
Fig. 191-7	丸 玉	完 形	ガ ラ ス	1.39	0.74	0.68	1.86	0.48	0.45	6.41	灰 汁 色

10号墳 (Fig. 189・192・193、PL. 85-1～5)

位置 上毛古墳総覧旧清里村5号墳。南北に長い陣場泥流は東西に低く、この東南の斜面に主体部を掘り込んだ当古墳は、9号墳の東に近接している。

墳丘と外部施設 墳丘の大部分は、墳丘南半分を占める宅地により平夷されていた。調査時点ではわずかに墳丘の形状を留めていた。墳丘の西に入れたトレンチにより、径17m(推定)の規模を有する円墳であることが明らかとなった。周堀は圍繞していることが判明したものの、既に削平されている東部分もあり、正確な規模等は不明である。西トレンチから推定できる墳丘の大きさは約12m、周堀の幅2.7mである。

主体部の構造 主体部は自然石の輝石安山岩を使用した横穴式石室である。主軸方位はN-14°-Eである。石室は玄室の中央部から羨道部にかけては、宅地にかかるため削平され、既に壁石等は取り去られてい

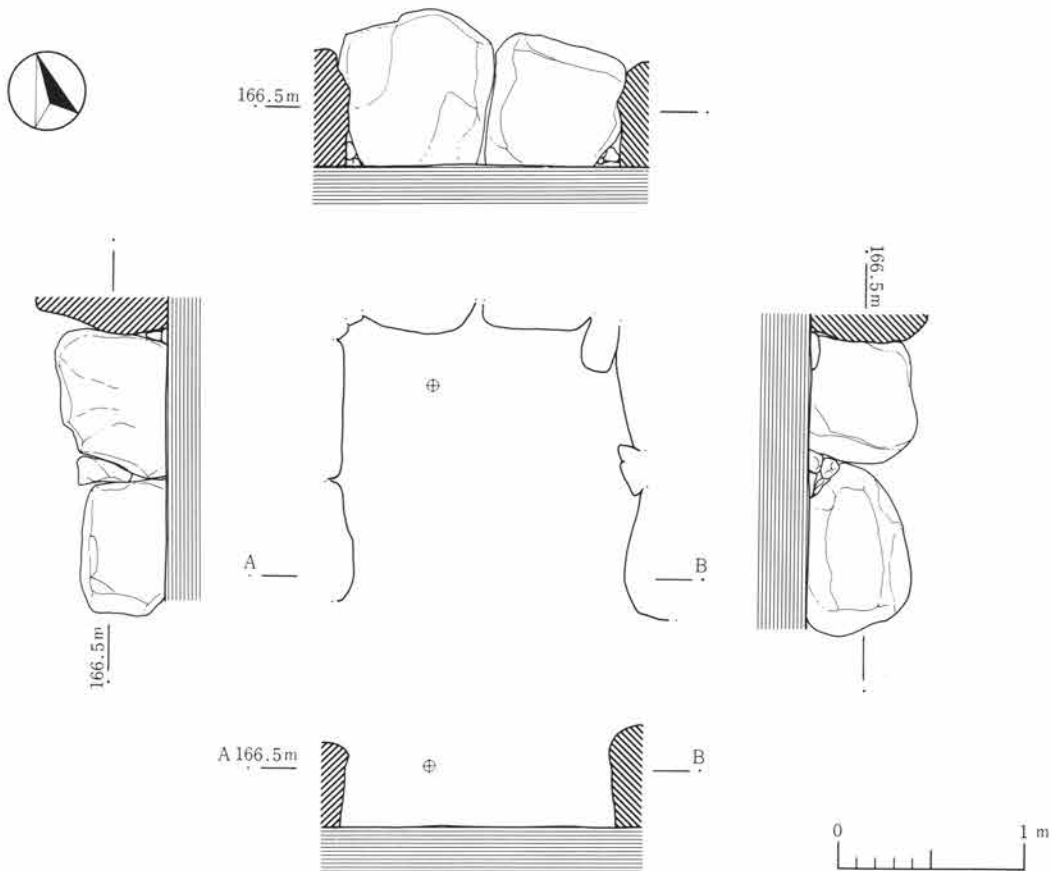


Fig. 192 10号墳石室実測図

た。壁石として残存していたのは玄室奥の一部で奥壁、左右両壁いずれも2石が残っていた。この玄室奥壁石により、玄室が平積の方法を用いていることが明らかとなったものの、石室の規模は玄室奥壁幅が1.46mの数値を計れる以外は不明である。また、石室は「掘り方」の中に構築している。「掘り方」の規模は東西径が3.7mであるが、南北径は不明である。

遺物出土状況 石室の壁石の大部分が抜き取られ、しかも一部残っていた玄室内も攪乱を受けていたため、石室内に残された遺物はない。また、墳丘からの出土品もない。

小結 本古墳は墳丘、石室がわずかに残っているにすぎなかったため、古墳の築造時期を推定する資料に欠けるが、本古墳群の他の古墳に著しく相違しない。(神保)

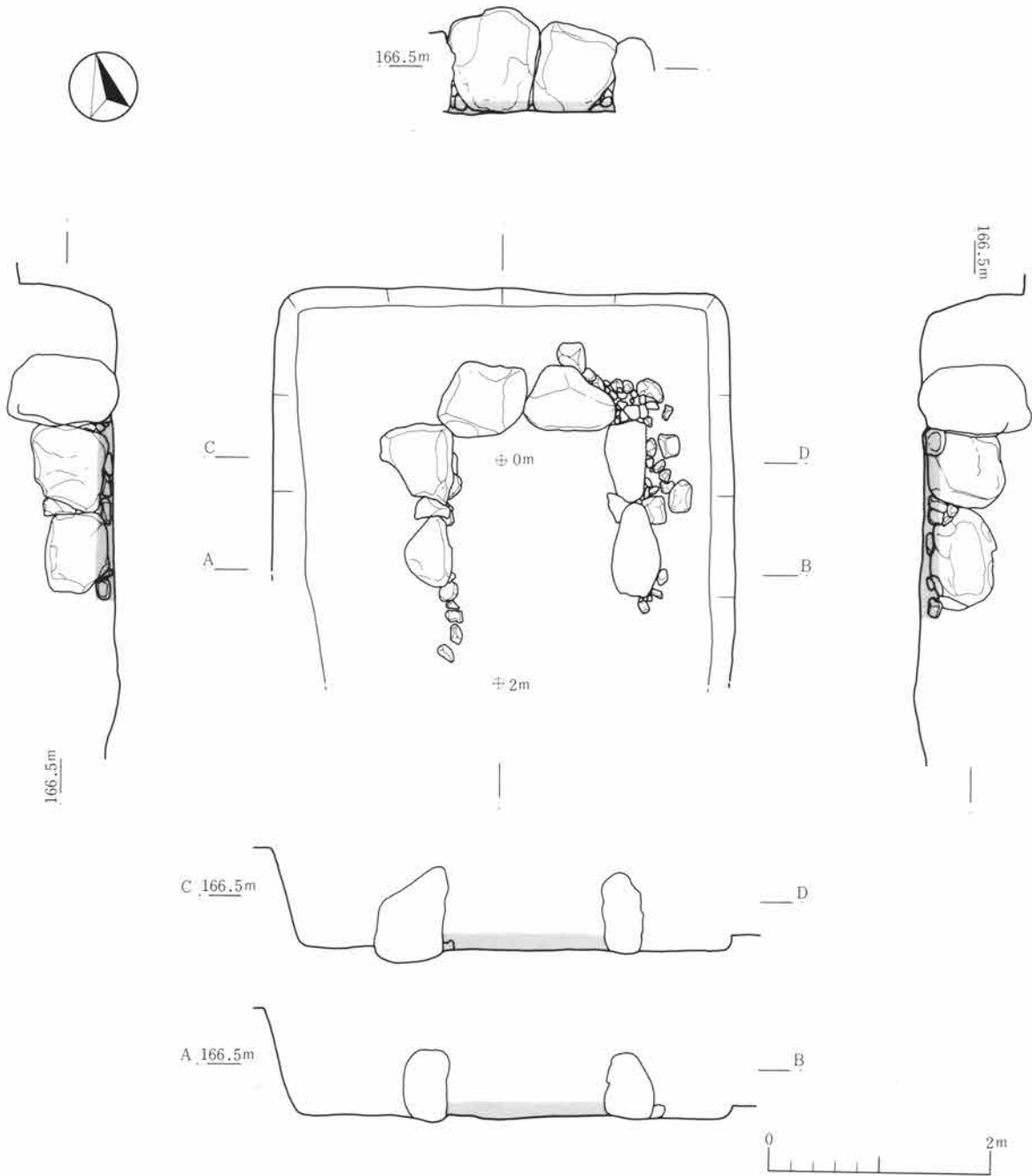


Fig.193 10号墳石室掘り方と根石実測図

11号墳 (Fig. 194・195・196、PL. 86-1~5)

位置 上毛古墳総覧旧清里村10号墳。清里・長久保遺跡内の古墳で南西端にあたる位置にある。12号墳の南に近接し、南北に長い流れ山状を呈する陣場泥流丘の南端を切り込み主体部をつくっている。西側には小さな谷が入り込んでいる。

墳丘と外部施設 陣場泥流の残丘上に築造された古墳で、調査時点では高さ約1m、径12mほどの墳丘を残していた。墳丘の北(奥壁北)、西(石室左壁西)東(石室右壁東)に入れたトレンチによる墳丘確認調査の結果、墳丘東のトレンチでは、墳丘は、残丘上に堆積し、古墳構築時の地表を形成していた層以下2~3層を削って墳丘裾部を整形し、その上に盛土をして築成している様子が確認されたものの、他のトレンチでは墳丘の盛土が削平されており、正確な墳丘規模は見出し難かった。また、周堀も不明である。

主体部の構造 主体部は自然石を使用した袖無型の横穴式石室である。主軸方位はN-21°-Eである。石室は、天井石が取り去られていた以外は埋葬部、閉塞部とも比較的良好な状態で残っていた。

石室は「掘り方」の中に構築している。「掘り方」は陣場泥流の残丘に堆積しているFA降灰層より掘りこんでいる。「掘り方」の形は、石室の形に合わせて、ほぼ長方形である。その規模は、「掘り方」上幅の長さは中央部で4.8m、下幅は4.4mである。「掘り方」の幅は奥の方の上幅2.96m、下幅1.97m、中央部分の上幅2.9m、下幅2.15m、前の方の上幅2.30m、下幅2.10mで、前の方へ来るとやや狭くなる傾向を持っている。深さは約0.7~0.8mであるが、前の方へ来るに従い浅くなる。「掘り方」の底面は、ほぼ平坦に整形しており、その上にはロームブロックを含む茶褐色土を敷きならしている。

石室はこの「掘り方」の下端より、やや内側に入ったところに壁石根石を据えて構築している。壁石根石

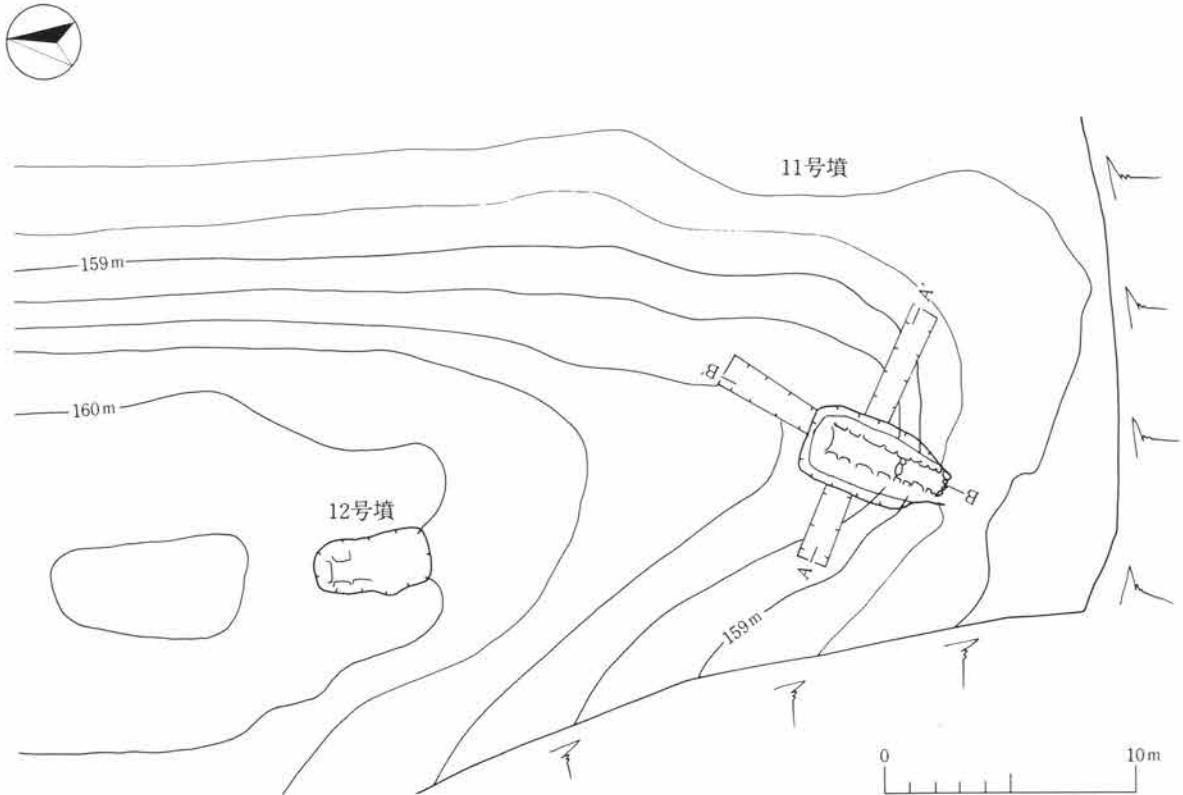


Fig.194 11・12号墳墳丘等高線図

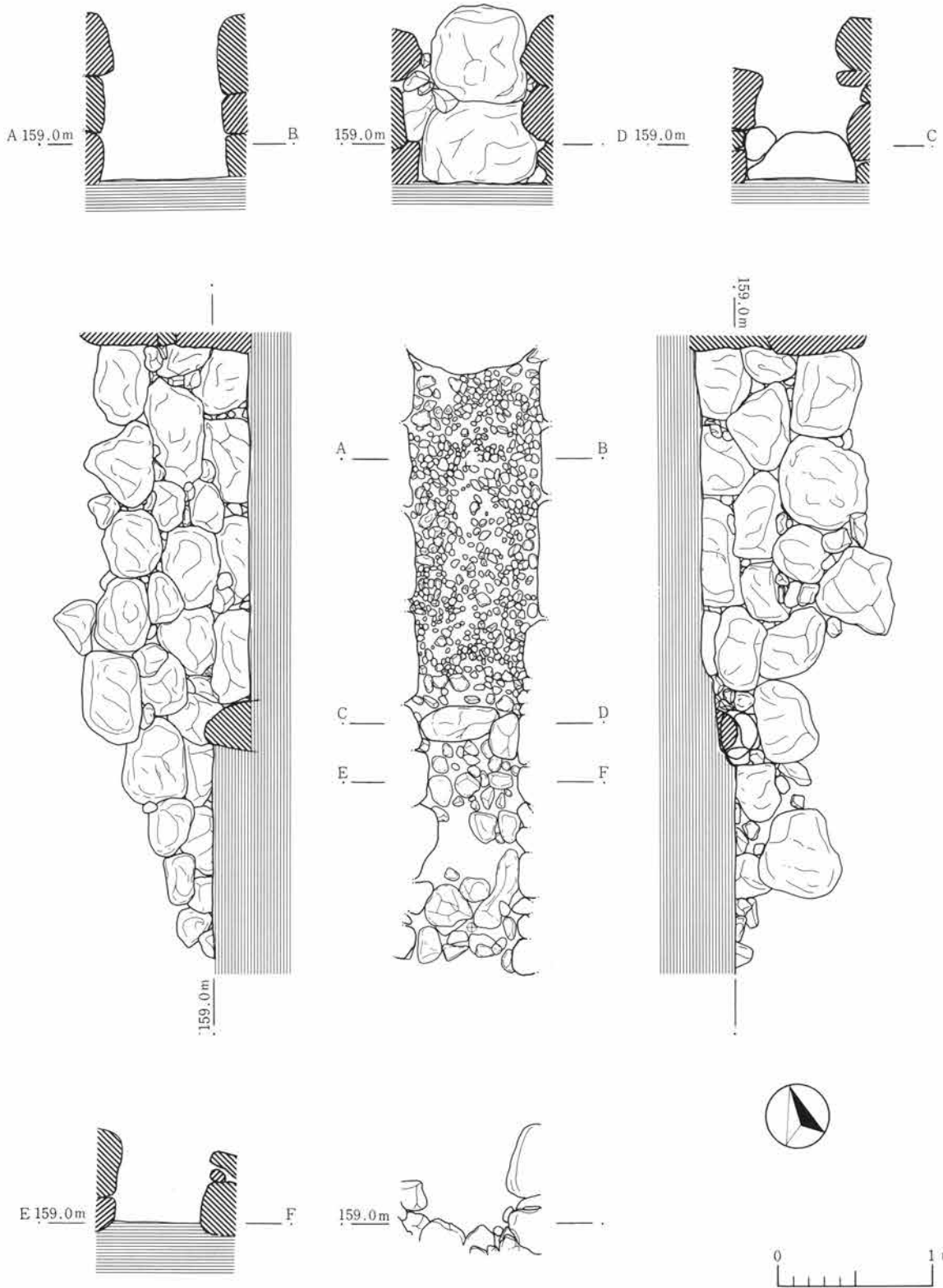


Fig. 195 11号墳石室実測図

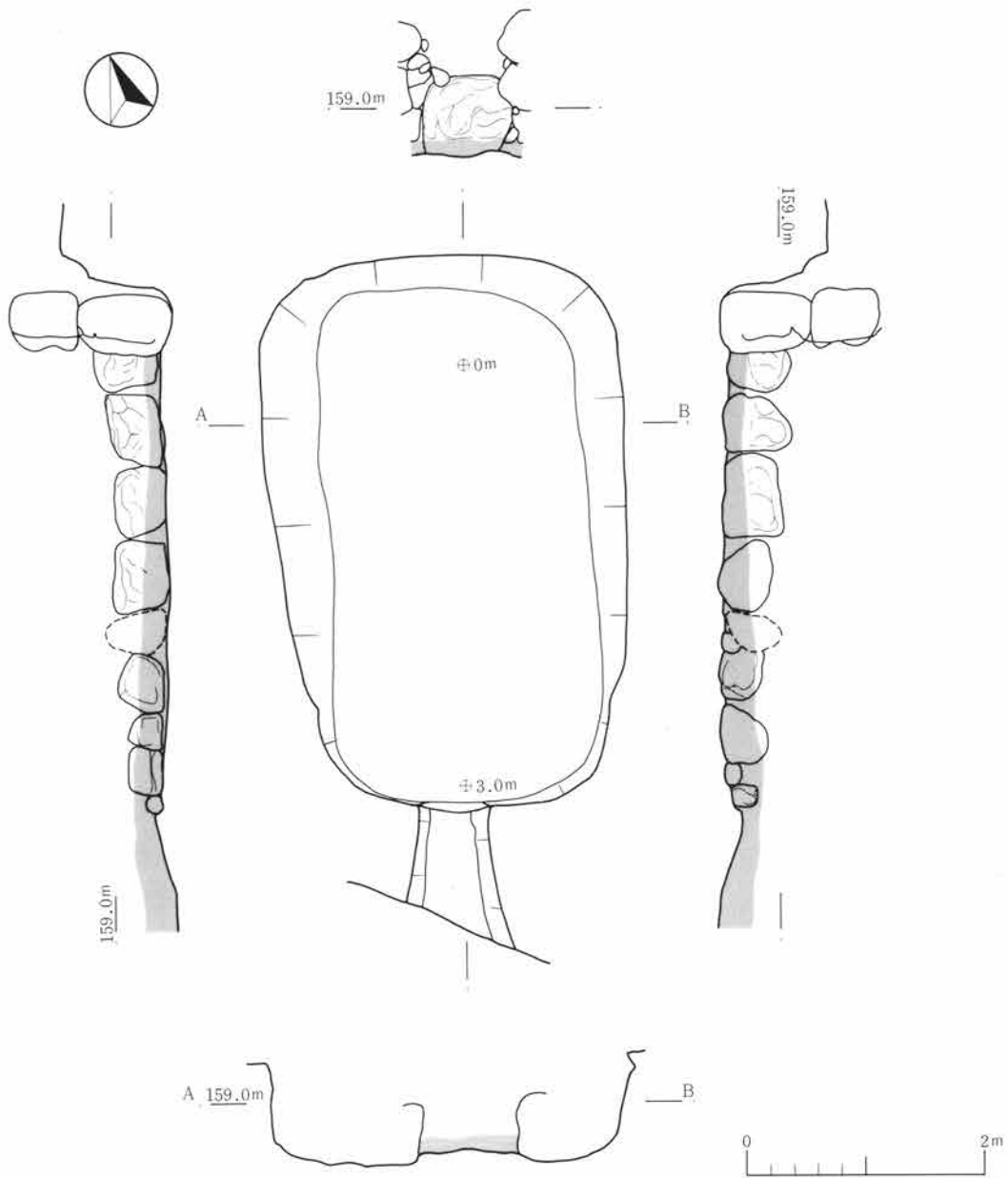


Fig. 196 11号墳石室掘り方と根石実測図

は上述のロームブロックを含む茶褐色土上位に直接据えている石と、この茶褐色土層をやや掘りこんで据えている石、それに川原石を据えてその上に壁石根石を据えている例が見られる。埋葬部の奥壁の根石は一石で、横74cm、縦65cmほどの大石2石を平積しており、ほぼ原形を保っているように見られる。左右壁はいずれも幅50cmぐらいの石4石を根石として据え、比較的大きい石は横積にし、小さい石は小口積の方法をとっている。閉塞部は大旨、小口積である。

埋葬部と閉塞部の境は25×52cmほどの石で両者を区別している。この石は両者を区画した梱石と考えられ、同時に後述の閉塞部の石室閉塞の礎を止める根石の役割も果しているようである。この梱石の部分には袖になる根石がないため、本古墳の石室は前述の如く袖無型の石室である。

石室の規模は、石室全長3.86mである。石室埋葬部の長さは2.15m、埋葬部左壁の長さ2.21m、右壁の長さ

2.29m、奥壁幅は0.81m、奥壁高さ1.15m(現存)、埋葬部最大幅0.83m、前幅0.65mである。閉塞部の長さは1.71m、閉塞部左壁の長さ1.65m、右壁の長さ1.68m、前幅0.65m、奥幅0.65mである。

埋葬部の床面は、比較的良好な状態で残存していた。床面は「掘り方」床面の上に20cmほどの盛土を行ない、その上に川原石を用いて敷石とし、敷石の上に小礫をしいている。敷石、小礫の中には角閃石安山岩が入っているのが目についた。閉塞部は約15×10cmの川原石と小礫を用いて閉塞されていた。石室入口の状況は不明である。前庭部は現状では不明である。

遺物出土状況 本古墳石室は前述の如く石室の保存状態が比較的良好で、しかも埋葬部床面もしっかりしていたため、かなりの副葬品の出土が期待されたが、石室は既に盗掘を受けており、埋葬部床面からの出土遺物は何もなかった。また、墳丘も削平された部分が多かったため、ここからの出土遺物はない。

小結 本古墳の場合、墳丘は陣場泥流の残丘を利用して築造し、しかも石室はFA 降下灰層より掘りこんだ「掘り方」の中に構築され、袖無型の横穴式石室であること、また石室埋葬部床面の敷石の中には角閃石安山岩が利用されていること等が特色としてあげられる。(神保)

12号墳 (Fig. 194・197, PL. 87-1・2)

位置 上毛古墳総覧記載漏。本古墳は11号墳の北に近接している。陣場泥流丘は11号墳と同じであり南北に長く東西に低くなっている残丘上の頂上部に位置している。

墳丘と外部施設 陣場泥流の残丘上に構築された古墳である。圃場整備工事中に発見された古墳である。墳丘の大部分は破壊され、わずかに石室が残存していたにすぎない。このため墳丘の規模、周堀については不明である。残された石室から推察すると本古墳の主体部は、自然石の輝石安山岩を使用した横穴式石室である。主軸方位はN-1°-Wである。石室は玄室中央部より羨道部にかけては既に破壊されていた。残存の玄室は奥壁1石と奥壁に接する左右壁2石であり、奥壁より1.65mの部分の壁石の各根石が残っていた。石室の数値は玄室奥壁幅0.85mを知るのみで、その他は不明である。石室は約55cmほど掘り下げた「掘り方」の中に構築している。「掘り方」の規模は南北径4.37m、東西径2.47mである。奥壁は「掘り方」上端より0.65m入った位置に根石の壁面を置いて、縦0.62m、横0.92mの大石一石を奥壁根石として据えている。左壁は「掘り方」西の上端より0.88m入った位置に、右壁は東端より0.6m入った位置に根石を据えて構築している。左右壁は場所により根石の下に割石をしいて、その上に根石を据えている。壁石と「掘り方」の間は割石を使用した裏込めがしてあった。石室床面は現状では不明である。

遺物出土状況 石室の石の大部分が抜き去られ、しかも一部残っていた玄室内も攪乱を受けていたため、石室内の遺物はない。また、墳丘からの出土品もない。

小結 本古墳は、石室がわずかに残っていたにすぎなかったため、古墳の築造時期を推定する資料に欠けるが、本古墳群の他の古墳に著しく相違しない。(神保)

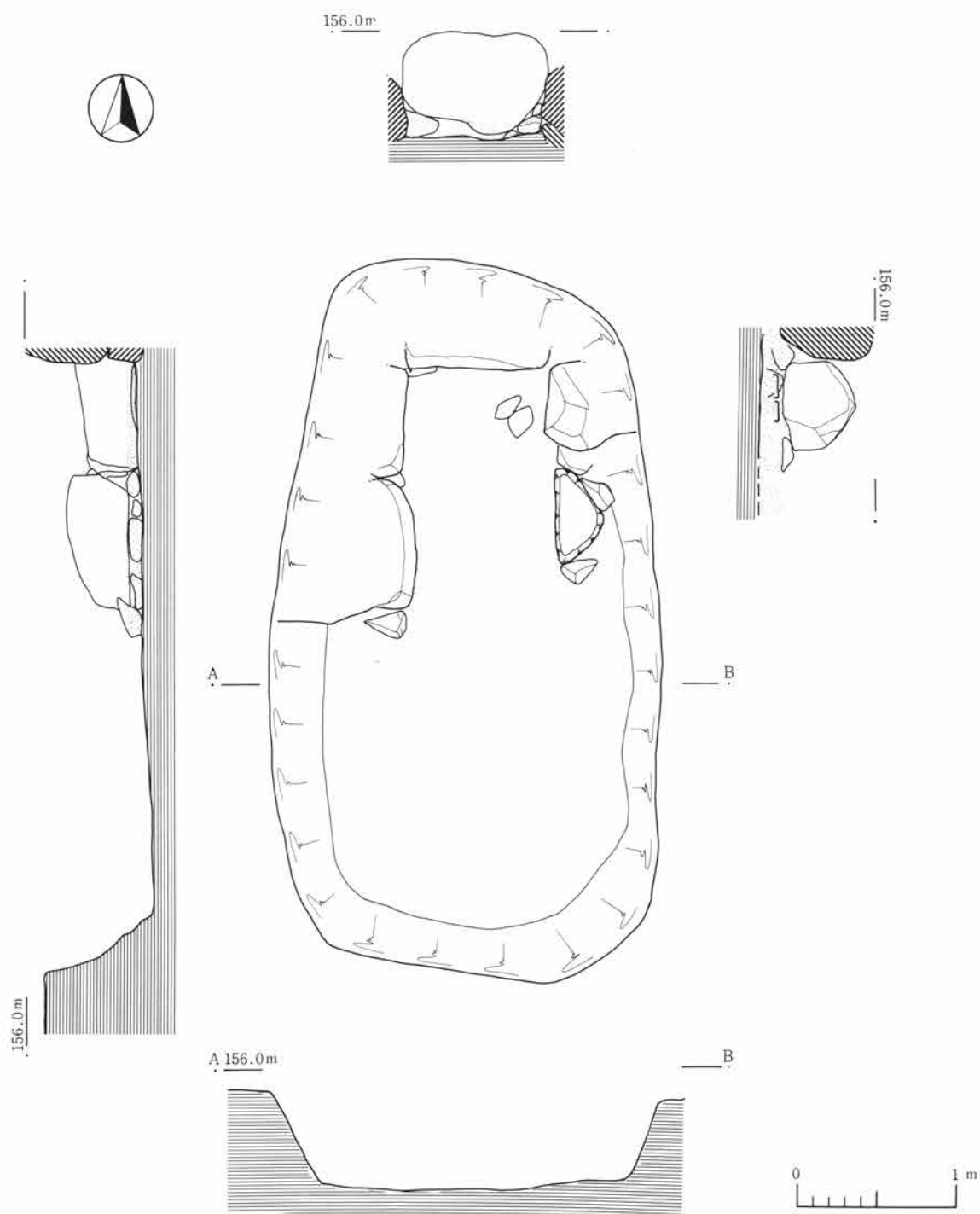


Fig. 197 12号墳石室実測図

庚申塚1号墳 (Fig. 198・199・200, PL. 88-1~2・89-1~5・90-1~4)

位置 上毛古墳総覧記載漏。本古墳は前年度に調査した庚申塚遺跡の北西部分にあたる平坦部の畑地内に位置している。庚申塚2号墳の東南約40m、長久保遺跡11号墳から約330m南西の位置にあたる。

墳丘と外部施設 調査時点においては南北径4.2m、東西径4.3m、高さ1mほどの墳丘が残っていた。しかし、墳丘の盛土はほとんど取り除かれており、石室の一部が露出していた。墳丘上には石宮が祀られてあった。墳丘の規模確認のため、墳丘の東・西・南・北・西北にトレンチを入れ調査した結果、本古墳は南北径12.7m、東西径12.6mの円墳であることが明らかとなった。墳丘は浅間C軽石を含む黒色土層をベースにして盛土を行ない構築している。墳丘西から北にかけての墳裾には石が据えられている。墳丘の盛土の大部分が取り去られているため判断の材料に欠くが、墳裾の石は、墳丘葺石の根石と考えられる。

墳丘の東半分には、墳丘北から東南の方向にかけて、FA降灰下後、本古墳構築前の溝1条が走っていた。墳丘は、この溝を埋めて盛土を行ない構築している。周堀は、墳丘西・北・東では確認されたものの南では確認できなかった。周堀の規模は、墳丘北西で幅1m、東で1.2mほどである。

主体部の構造 主体部は自然石を使用した両袖型の横穴式石室である。主軸方位はN-0°-Eである。石室は、既に天井石は取り去られていた。また、壁石等も一部取り去られており、完全な状態では残っていなかった。しかし、壁石の根石は羨道部の入口部分を除いては残存していたので、ある程度石室の規模は知ることができた。石室は、浅間C軽石を含む黒色土層を掘りこんだ「掘り方」の中に構築している。「掘り方」の規模は東西4.6mであり、南北は5.9mである。石室壁石の根石は、「掘り方」底面に直接据えられてあり、壁石の裏には川原石の裏込めがなされている。石室の規模は現状で全長4.73mであり、石室玄室部は長さ2.95m、左壁の長さ2.95m、右壁の長さ3.03m、奥壁の幅0.85m、奥壁高さ0.55m(現状)、玄室最大幅2.09m、玄室前幅2.0mである。羨道部の長さは1.74m(現状)、左壁の長さ1.74m、右壁の長さ1.25m、羨道奥幅0.95mである。両袖の部分は左袖の幅が0.52m、右袖幅が0.53mである。玄室奥壁は80×110cmほどの石2石を根石

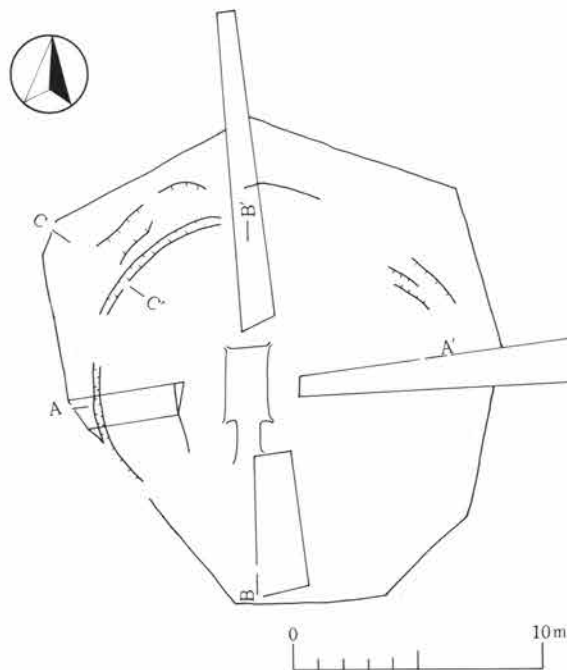


Fig. 198 庚申塚1号墳全体図

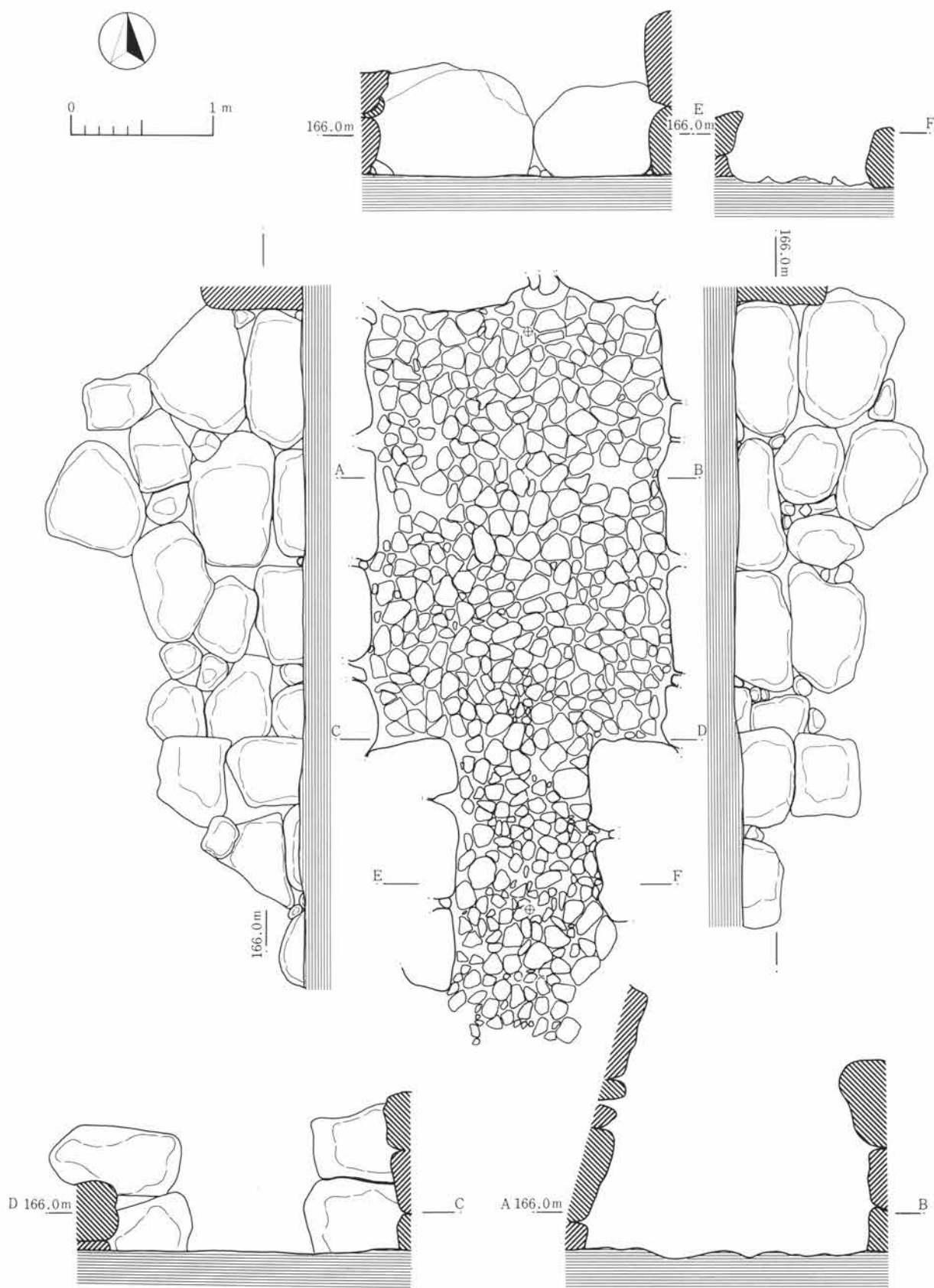


Fig. 199 庚申塚1号墳石室実測図

第3章 各 説

としている。玄室左右壁は80×60cmほどの石を乱積にしている。玄室床面は、「掘り方」底面に10～15cmほどの川原石を敷石とし、その上に小礫をしいている。川原石・小礫の中には角閃石安山岩が含まれている。羨道部は左壁で3石、右壁で2石残っている。床面は玄室と同様である。床面の上には人頭大の川原石で閉塞されている。羨道部入口は石が取り去られていたため不明である。

遺物出土状況 本古墳からの出土遺物は玄室内より人骨と鉄釘が出土している。人骨は床面上と床面下より出土しているので、追葬したのではないかと見られる。鉄釘も人骨同様に床面上と床面下から出土しているが前者は11点、後者は43点出土している。両者の釘の中には釘の頭の部分に板目の付着が見られるものもあるので、この釘は本古墳の埋葬者を入れた木棺に使用されたのではないかと考えられる。玄室内からはこの他の出土遺物はない。

小結 本古墳は、墳丘構築の際、FA降灰下後に掘られた溝を埋めて構築していること、石室の床面の敷石に角閃石安山岩が含まれていること、石室が両袖型の横穴式石室であること等が特色としてあげられる。
(神保)

出土遺物

石室床面より鉄製の釘が出土した。計測値は下表の通りであり、Fig. 201-1～11までは床面、12～15までは床面下出土である。実測可能な数は30点であった。また人骨も出土しており、人骨の計測値等については第5章 第2節において佐倉 朔氏により調査結果をいただいているので参照されたい。

庚申塚1号墳出土遺物一覧表（鉄釘）

挿図番号 挿図版番号	全長(残長) (cm)	釘頭の大きさ (cm)	形重 状 さ (g)	挿図番号 挿図版番号	全長(残長) (cm)	釘頭の大きさ (cm)	形重 状 さ (g)
Fig. 201-1 PL. 90-5	8.7	1.2 × 1.2	頭は折り曲げた角釘 7.43	Fig. 201-16 PL. 90-5	(3.0)		1.69
Fig. 201-2 PL. 90-5	(6.3)	0.8 × (0.3)	5.57	Fig. 201-17 PL. 90-5	(1.4)		1.06
Fig. 201-3 PL. 90-5	(4.5)		2.96	Fig. 201-18 PL. 90-5	(3.5)		1.93
Fig. 201-4 PL. 90-5	(4.5)		4.37	Fig. 201-19 PL. 90-5	(5.0)		2.26
Fig. 201-5 PL. 90-5	8.2		頭は折り曲げた角釘 8.40	Fig. 201-20 PL. 90-5	(3.5)		1.45
Fig. 201-6 PL. 90-5	5.0	0.9 × 1.1	頭は折り曲げた角釘 3.51	Fig. 201-21 PL. 90-5	(5.6)		4.12
Fig. 201-7 PL. 90-5	6.0	0.9 × 0.8	頭は折り曲げた角釘 5.13	Fig. 201-22 PL. 90-5	(3.5)		2.72
Fig. 201-8 PL. 90-5	(3.0)		2.34	Fig. 201-23 PL. 90-5	(7.8)	(0.8) × (?)	4.69
Fig. 201-9 PL. 90-5	(2.6)	0.9 × 0.8	頭は折り曲げた角釘 2.42	Fig. 201-24 PL. 90-5	(3.1)	(1.2) × (1.7)	頭は折り曲げた角釘 4.63
Fig. 201-10 PL. 90-5	(3.0)	0.9 × 1.3	頭は折り曲げた角釘 4.83	Fig. 201-25 PL. 90-5	(3.7)		1.44
Fig. 201-11 PL. 90-5	(5.8)		3.85	Fig. 201-26 PL. 90-5	(4.5)		2.27
Fig. 201-12 PL. 90-5	(7.0)	(0.2) × (0.6)	3.57	Fig. 201-27 PL. 90-5	(5.0)		3.06
Fig. 201-13 PL. 90-5	(3.0)	0.7 × 0.8	頭は折り曲げた角釘 3.06	Fig. 201-28 PL. 90-5	(5.8)		1.93
Fig. 201-14 PL. 90-5	(3.6)		1.77	Fig. 201-29 PL. 90-5	(7.5)	0.9 × 0.9	頭は折り曲げた角釘 5.54
Fig. 201-15 PL. 90-5	(6.0)	0.8 × 0.7	頭は折り曲げた角釘 3.33	Fig. 201-30 PL. 90-5	(1.7)		1.00

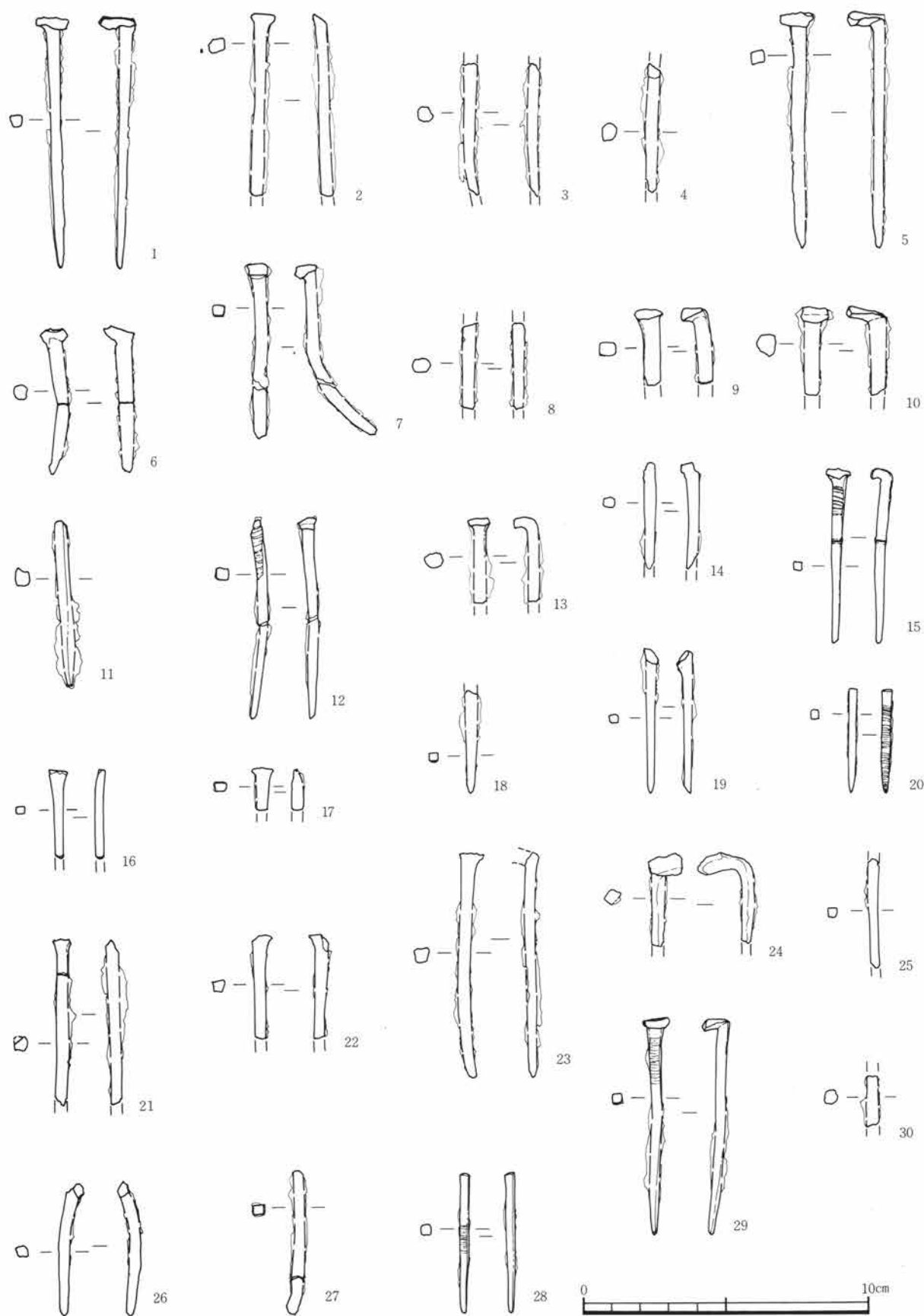


Fig. 201 庚申塚1号墳出土遺物実測図

庚申塚2号墳 (Fig. 202・203・204・205、PL. 91—1～2・92—1～8・93—1)

位置 上毛古墳綜覧記載漏。庚申塚遺跡1号墳北西に位置している。平坦部に作られた古墳である。長久保遺跡11号墳の西南西約330mの畑地の中にある。

墳丘と外部施設 調査時点においては、石室の一部が露出し、わずかに墳丘の形を留めていた古墳である。墳丘の東・西・北に入れたトレンチの所見によれば、墳丘はFA降下灰土層を主体とした再堆積土層を墳丘構築面として、この上に盛土をして構築している。古墳の規模は径約15.9mの円墳である。

周堀は、墳丘構築面を掘り下げた「袂状周堀」が墳丘の東及び西において確認された。墳丘東の周堀は、幅3.4m、深さ0.5m程の規模である。墳丘西の周堀は、幅3.8m、深さ0.2m程の規模である。墳丘西の周堀は、墳丘構築面の土層とほぼ同レベルで浅間B軽石が堆積しているのが見られるので、東・西の周堀そのものは浅間B軽石降下時には、既に埋っていたことが明確である。

主体部の構造 主体部は自然石を使用した横穴式石室である。主軸方位はN-14°-Eである。石室は天井石、壁石の一部が取り去られているものの、玄室及び羨道部の壁石根石は完全な状態で残っていたので、ある程度の石室の状態は把握することができた。

石室は、墳丘構築面の地表を約30cmの深さに掘り下げた「掘り方」の中に構築している。「掘り方」の規模は南北の長さ約5.80m、東西の幅は、奥で4.28m、中心部で4.50m、前で4.10mで、奥に対し前がややせまい。「掘り方」の形は、石室に合わせて長方形である。「掘り方」の床面は、ほぼ平坦に整地されている。

石室は、この「掘り方」の底面に壁石根石を据えて構築している。玄室の左壁は、「掘り方」西法面より約1.35m入った位置に根石壁面を置き、右壁は「掘り方」東法面より約1.5m入った位置に根石壁面を置いて構

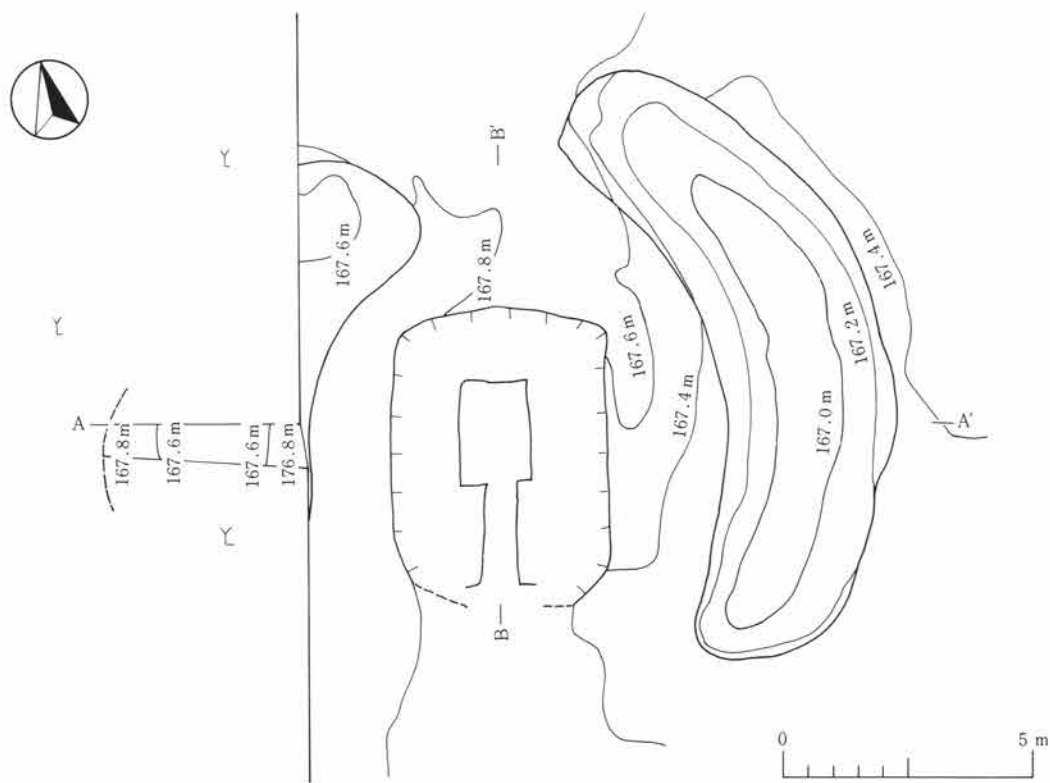


Fig. 202 庚申塚2号墳全体図

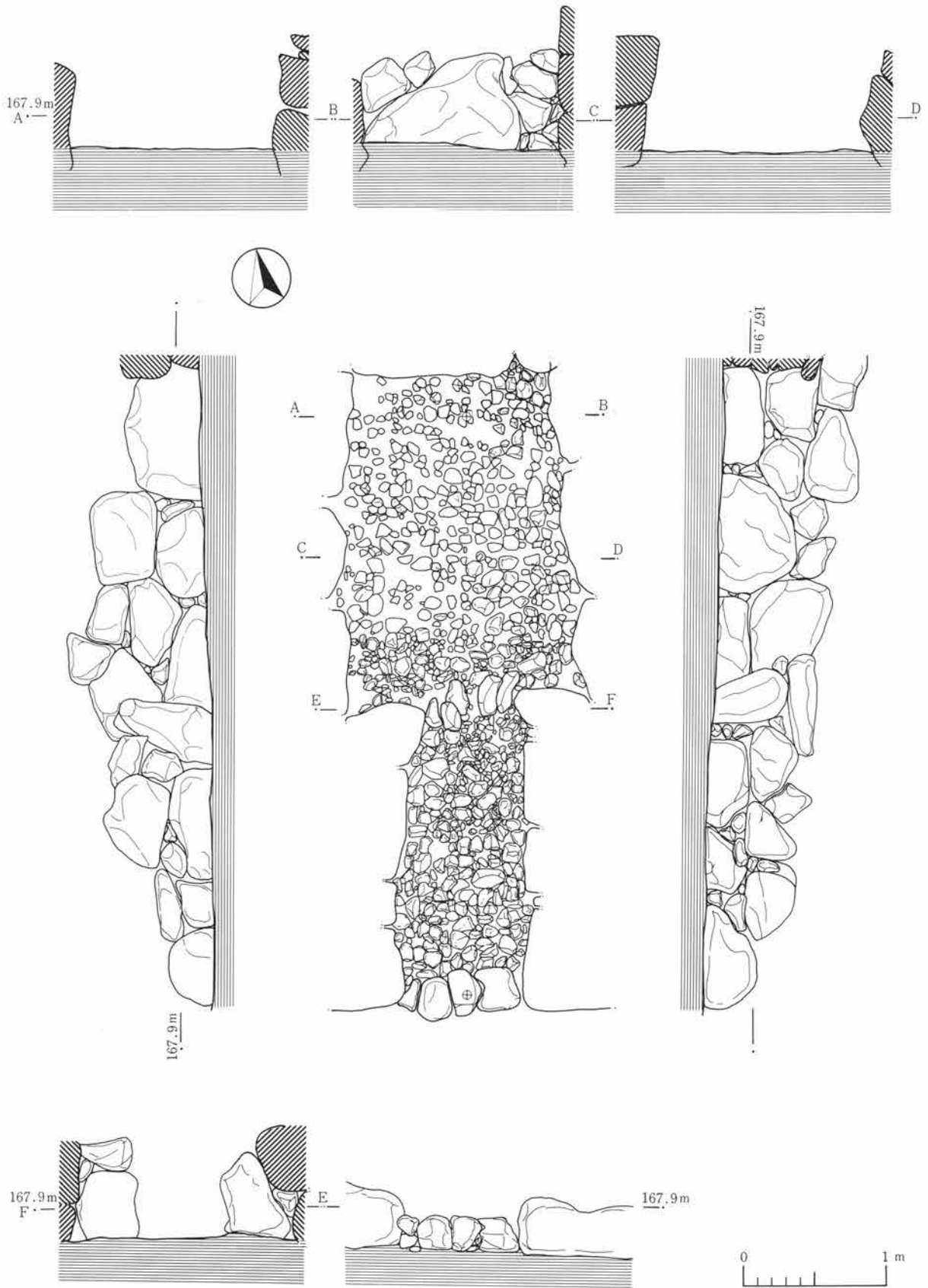


Fig. 203 庚申塚2号墳石室実測図

築している。奥壁は、「掘り方」北法面より1.4m入った位置である。羨道部壁面は、ほぼ中央部で、「掘り方」西法面より1.45m、東法面より1.60m入った位置に、左右壁面の根石を据えている。石室壁石の裏込めは、「掘り方」の範囲内に、川原石でもって裏込めとしている。「掘り方」法面近くは、裏込めの石の崩落を防ぐため、比較的大きい石を使用している。壁面のうち、奥壁は110×60cmの大石1石を根石としている。左右壁は、自然石を乱石積にして構築している。

石室の床面は、玄室は「掘り方」の底面に若干盛土を施し、この上に10×15cmほどの川原石を用いて敷石とし、更に小礫を敷いている。川原石・小礫には角閃石安山岩が含まれているのが注意された。羨道の床面は玄室同様である。羨道部床面の上は、人頭大の川原石で閉塞されている。玄室と羨道部の境の袖石付近には栴石らしきものがあるが、断じ難い。羨道入口は一石のみしか残っていないが、左壁は45×80cm、右壁は35×105cmほどの石を据えている。羨道入口の左、右は各々石積が見られたが、前庭があったか否かは不明である。

本古墳の石室の規模は、上に述べてきたことより、石室の全長4.37m、石室玄室の長さ2.20m、左壁の長さ2.35m、右壁の長さ2.20m、玄室奥幅1.36m、玄室最大幅1.58m、玄室前幅1.58m、羨道部の長さ2.17m、左壁の長さ2.10m、右壁の長さ2.22m、羨道奥幅0.62m、前幅0.85m、袖部は左袖部0.54m、右袖部0.42mの数値を数えることができる。この数値よりして、石室は玄室と羨道がほぼ1：1の比で構築されていることが指摘できよう。

遺物出土状況 本古墳からの出土遺物は、石室玄室内及び周堀から出土している。石室玄室は前述の如く、床面が比較的良好な状態で残っていたため、かなりの出土遺物が期待されたが、既に玄室内は盗掘を受けていて、わずかに人骨と須恵器が出土したのみであった。人骨は玄室左壁の中央部より南の付近で少量出土した。須恵器は杯の蓋1点と高台付碗1点であり、いずれも完形品である。蓋、碗いずれも玄室左壁の袖部付近より出土している。杯の蓋は9世紀前半頃に、碗は10世紀頃に比定されるものである。両者とも後述する本古墳の築造時期と著しく年代が相違するのが注意される。周堀からの出土遺物は、須恵器の高台付碗の破片である。この碗は、玄室内の杯の蓋と同時期に比定されるものである。

小結 本古墳は、再堆積のFA降灰下層に墳丘が構築されていること、石室玄室の床面の敷石に、角閃石安山岩が含まれていること、両袖型の横穴式石室であること等の特色をあげることができる。(神保)

出土遺物 (Fig. 206, PL. 93-2~5)

須恵器

蓋 (Fig. 206-1, PL. 93-2) 石室内床面出土。摘み径4.0cm、同高さ0.9cm、蓋径18.9cm、高さ3.9cmである。轆轤は右回転である。胎土中には白色粒子、黒色粒子を含む。焼成は良好である。色調は灰色。

杯 (Fig. 206-2, PL. 93-4) 石室内床面出土。口径13.8cm、高さ5.4cm、高台径5.8cm、高台の高さ0.4cmの付高台であり、杯底部に糸切痕が残る。胎土中には夾雑鉱物を多量に含んでいる。焼成はあまい。色調は灰白色である。

杯 (Fig. 206-3, PL. 93-5) 周堀内出土。底部付近が残る。高台径9.4cm、高台の高さ1.0cm、杯底部は糸切であり、付高台である。胎土は細かく、白色粒子を多量、黒色粒子を少量含む。焼成良好、灰色。

土師器

杯 (Fig. 206-4, PL. 93-3) 石室内出土。5分の1残存、口径12.2cm、底径8.2cm、高さ3.2cmである。胎土は細かい。焼成は良好。色調はにぶい黄橙色である。

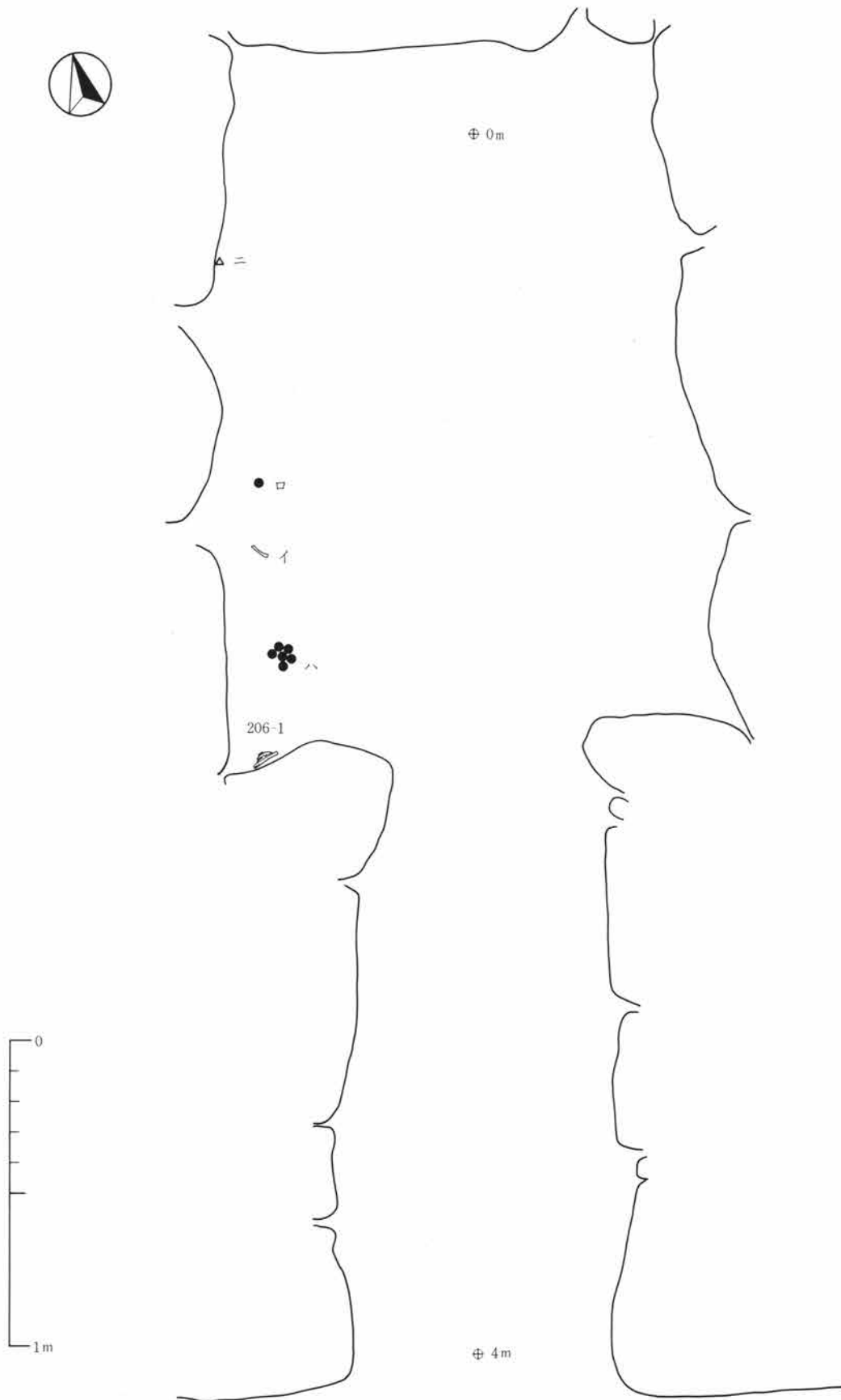


Fig. 204 庚申塚2号墳石室内遺物出土状況図

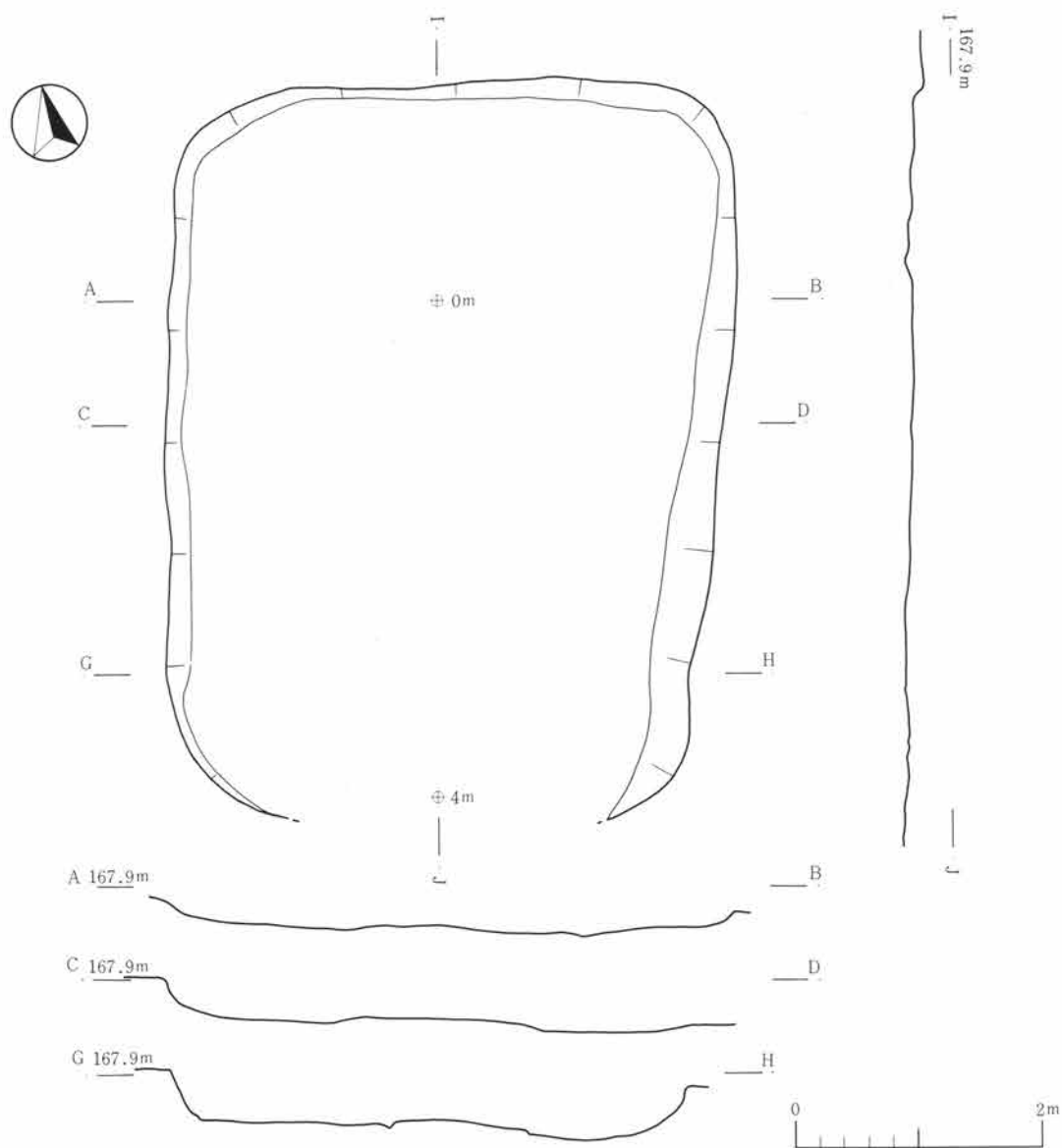


Fig. 205 庚申塚2号墳石室掘り方実測図

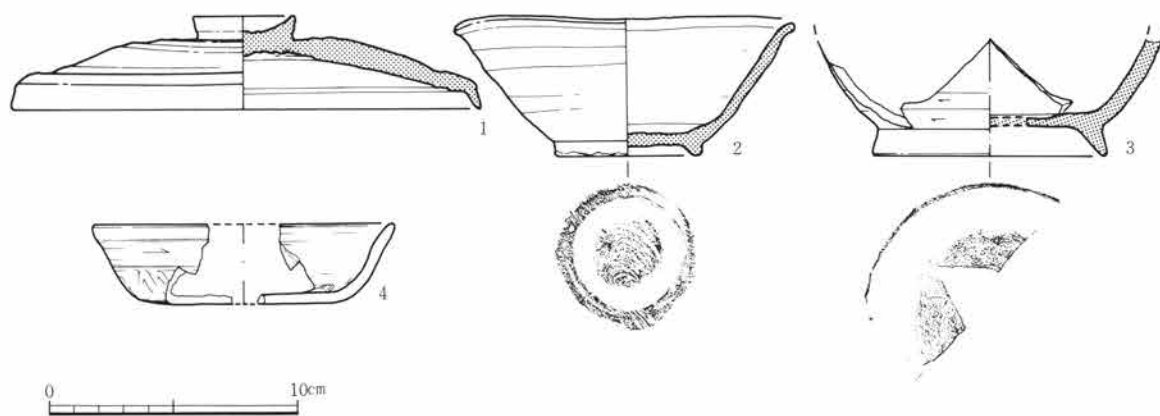


Fig. 206 庚申塚2号墳出土遺物実測図

各古墳の土層と説明

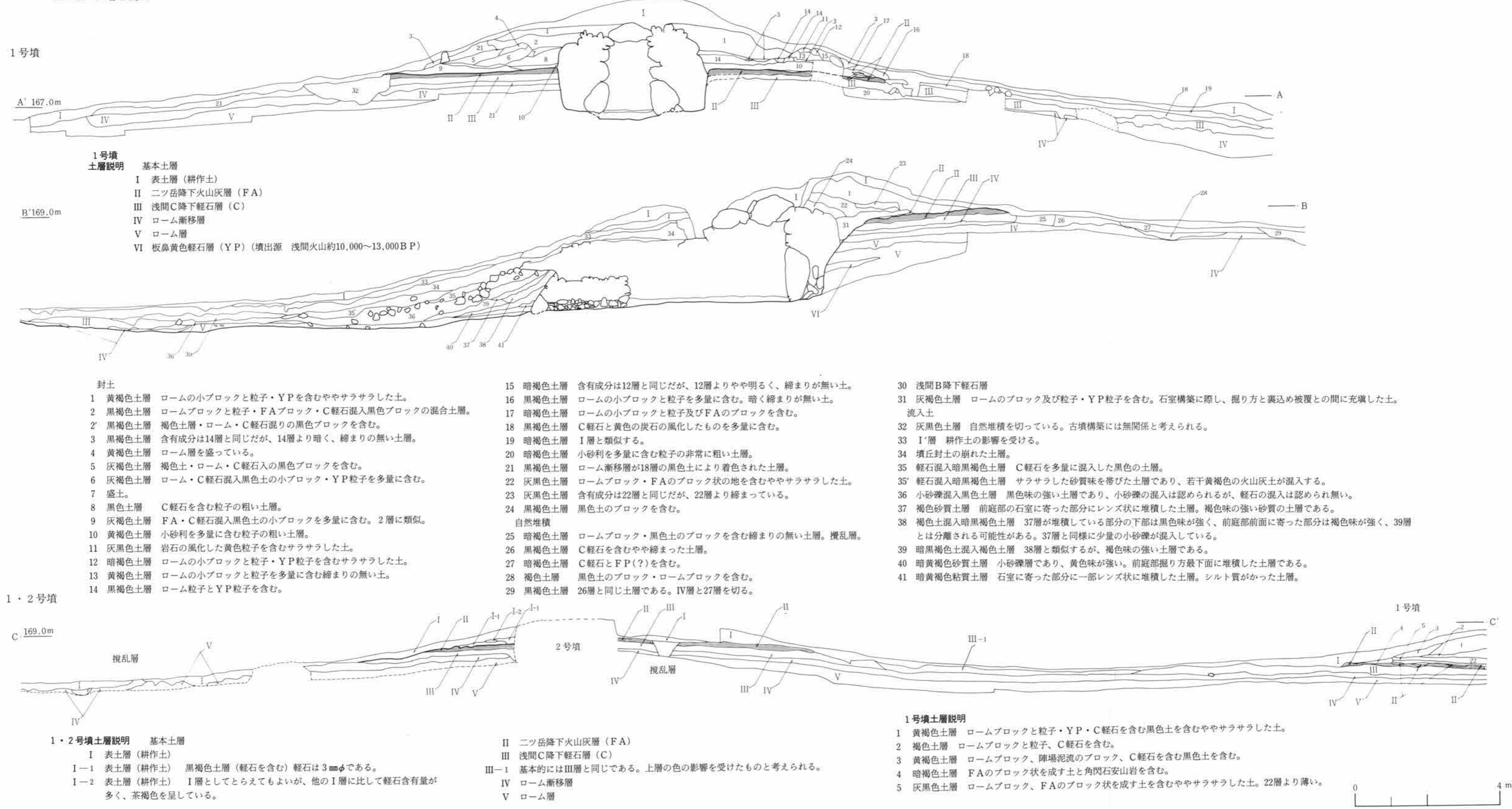


Fig. 207 1号墳、1・2号墳通し土層図

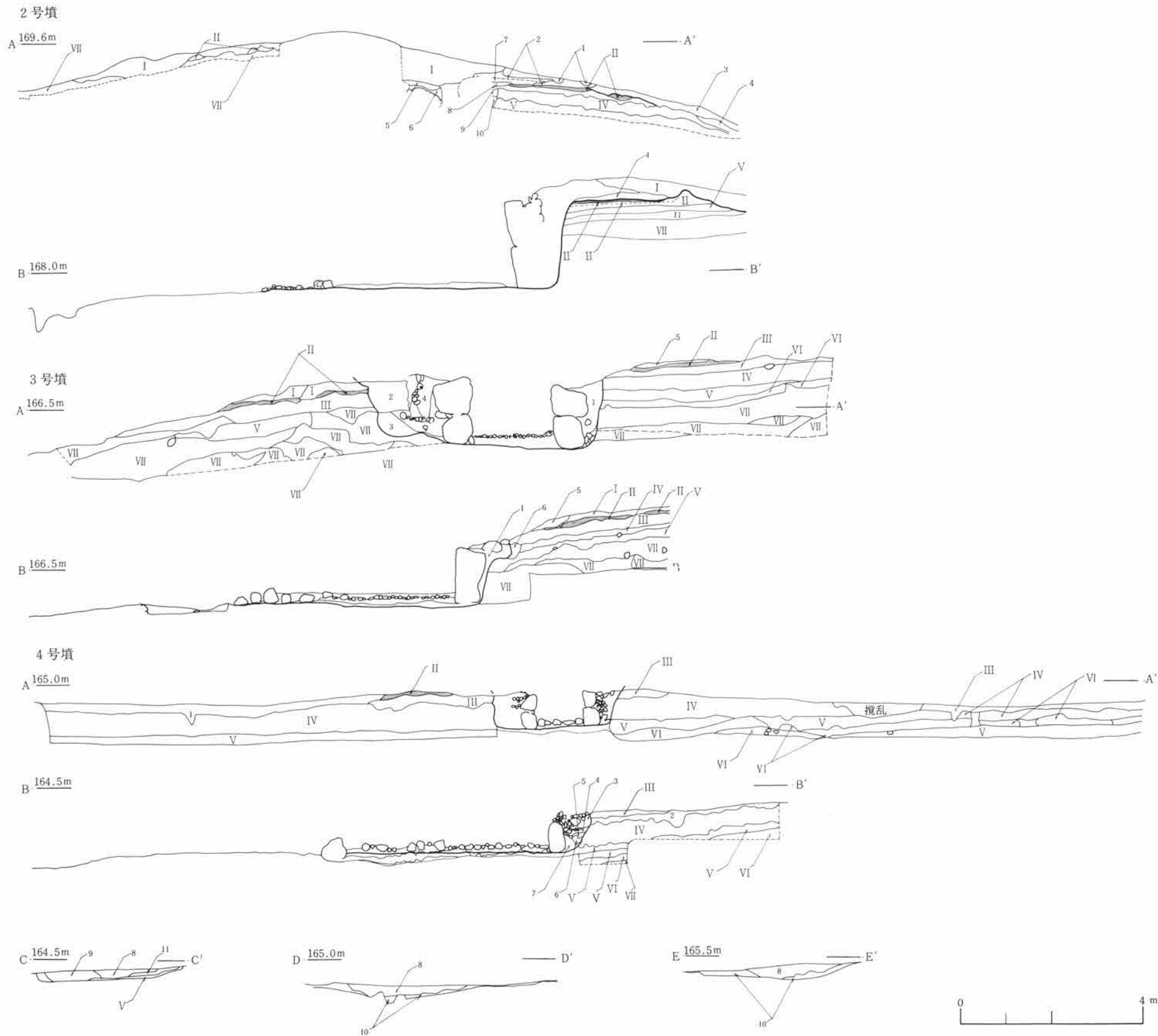


Fig. 208 2号墳、3号墳、4号墳土層図

2号墳
土層説明

- 基本土層
- I 表土層 (耕作土)
 - II ニツ岳降下火山灰層 (FA)
 - III 浅間C降下軽石層 (C)
 - IV ローム漸移層
 - V ローム層
 - VI 板鼻黄色軽石層 (YP) 填出源浅間火山約10,000~13,000 B P
 - VII ローム層と陣場泥流の混入土層
- 封土
- 1 軽石黄褐色火山灰混入硬質褐色土層
 - 2 小砂礫混入黄褐色粘質土層
 - 3 軽石混入暗褐色土層 1層に類似するが、黒色土の混入は認められ無い。
 - 4 盛土、汚れた茶褐色土層

裏込め

- 5 軽石・黒色土混入軟質暗褐色土層
- 6 軽石・黄褐色火山灰混入暗褐色土層
- 7 小砂礫混入暗褐色粘質土層 墳丘盛土。5mmφ程度の小砂礫を混入している。黄色味の強い土層。
- 8 小砂礫混入黄白色粘質土層 墳丘盛土。石室主体部掘り方の上部を覆う土層。
- 9 暗黄褐色粘質土層 7層に類似する土層であるが、小砂礫の混入は認められ無い。石室主体部掘り方内覆土であり、石室裏込め礫を固定した粘土層である。
- 10 礫混入黄灰色粘質土層 裏込めの小礫5cmφ余りの礫を混入している。9層同様に石室主体部掘り方内は流した土である。

3号墳
土層説明

- 基本土層
- I 表土層 (耕作土)
 - II ニツ岳降下火山灰層 (FA)
 - III 浅間C降下軽石層 (C)
 - IV ローム漸移層
 - V ローム層
 - VI 板鼻黄色軽石層 (YP) 填出源浅間火山約10,000~13,000 B P
 - VII ローム層と陣場泥流の混入土層
- 裏込め
- 1 黒褐色土層 ロームの小ブロックと粒子、FAの小ブロック・C軽石を含む砂質土層。石室を構築するために地山を掘り窪め裏込めの外側まで埋土した。
- 自然堆積
- 2 灰白色土層 灰白色の小礫を多量に含む粒子の粗い土層。C軽石を含む砂質土層。石室を構築するために、地山を掘り窪め裏込めの外側まで埋土した。
 - 3 黄褐色土層 小礫を含むロームで、黒色土のブロックを含む。C軽石を含む砂質土層、石室を構築するために、地山を掘り窪め裏込めの外側まで埋土した。
 - 4 灰褐色土層 小礫及び川原石を含む粒子の粗い土層。C軽石を含む砂質土層。石室を構築するために、地山を掘り窪め裏込めの外側まで埋土した。
 - 5 灰桃色土層 FA・角閃石安山岩の粒子を含む。

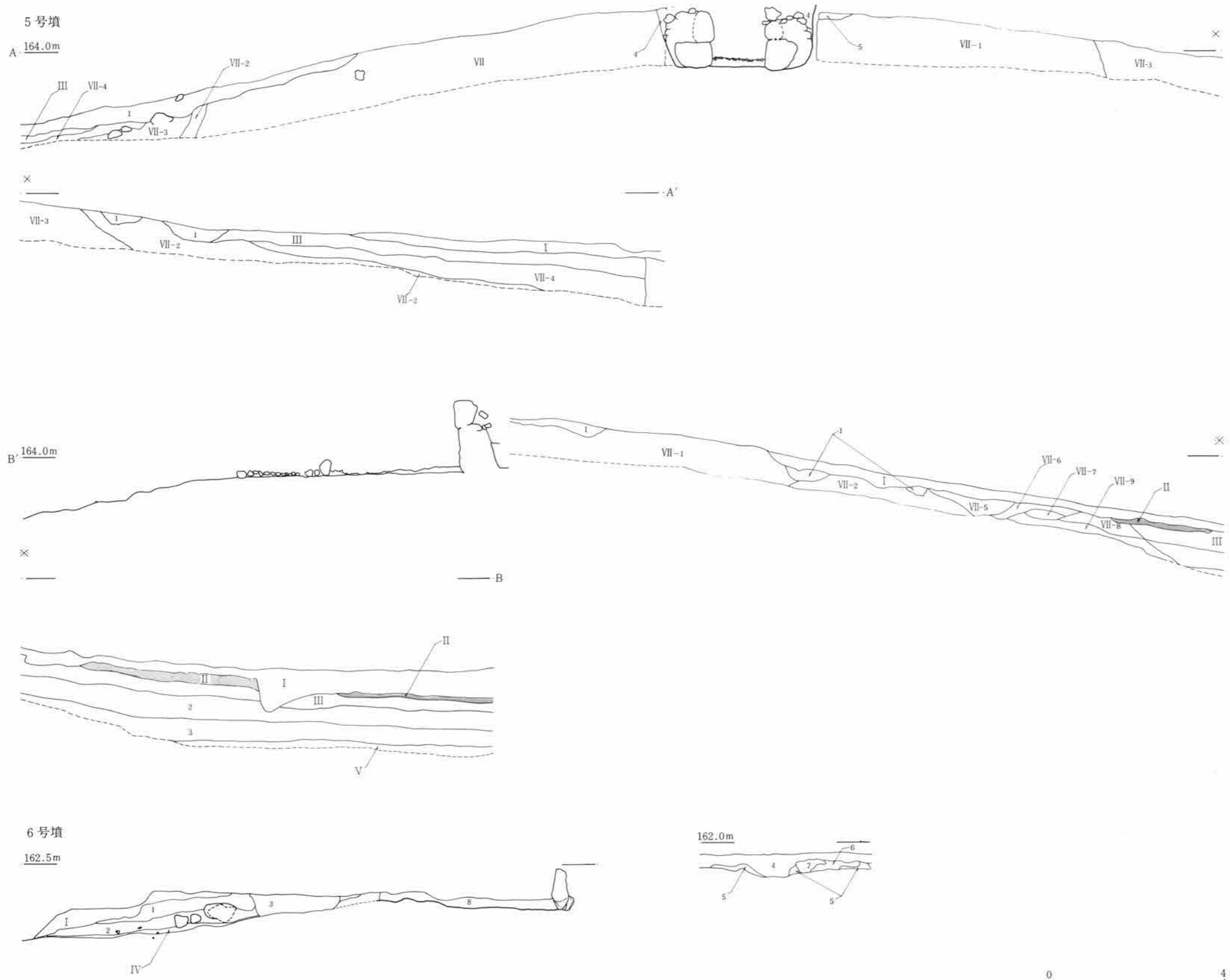
4号墳
土層説明

- 基本土層
- I 表土層 (耕作土)
 - II ニツ岳降下火山灰層 (FA)
 - III 浅間C降下軽石層 (C)
 - IV ローム漸移層
 - V ローム層
 - VI 板鼻黄色軽石層 (YP) 填出源浅間火山約10,000~13,000 B P
 - VII ローム層と陣場泥流の混入土層
- 自然堆積
- 1 C軽石混入灰黒褐色土層 III層に類似するがやや灰色味を帯びている。C軽石の混入も希薄である。
 - 2 少量のC軽石を混入、黄褐色粘質土が斑点状に入る。IV層に比較してやや黒色味を帯びた土層。
- 裏込め
- 3 褐色土混入暗褐色土層 黄褐色石質土と褐色土の混合土層
 - 4 C軽石混入褐色土層 C軽石を含んだ黒色土の混合土層
 - 5 褐色土混入暗褐色土層 3層とほぼ同様な土層
 - 6 暗褐色土層 肌理の細かな褐色味の強い土層
 - 7 ロームブロック混入暗褐色土層 6層にロームブロックを混入した土層

周堀内土層

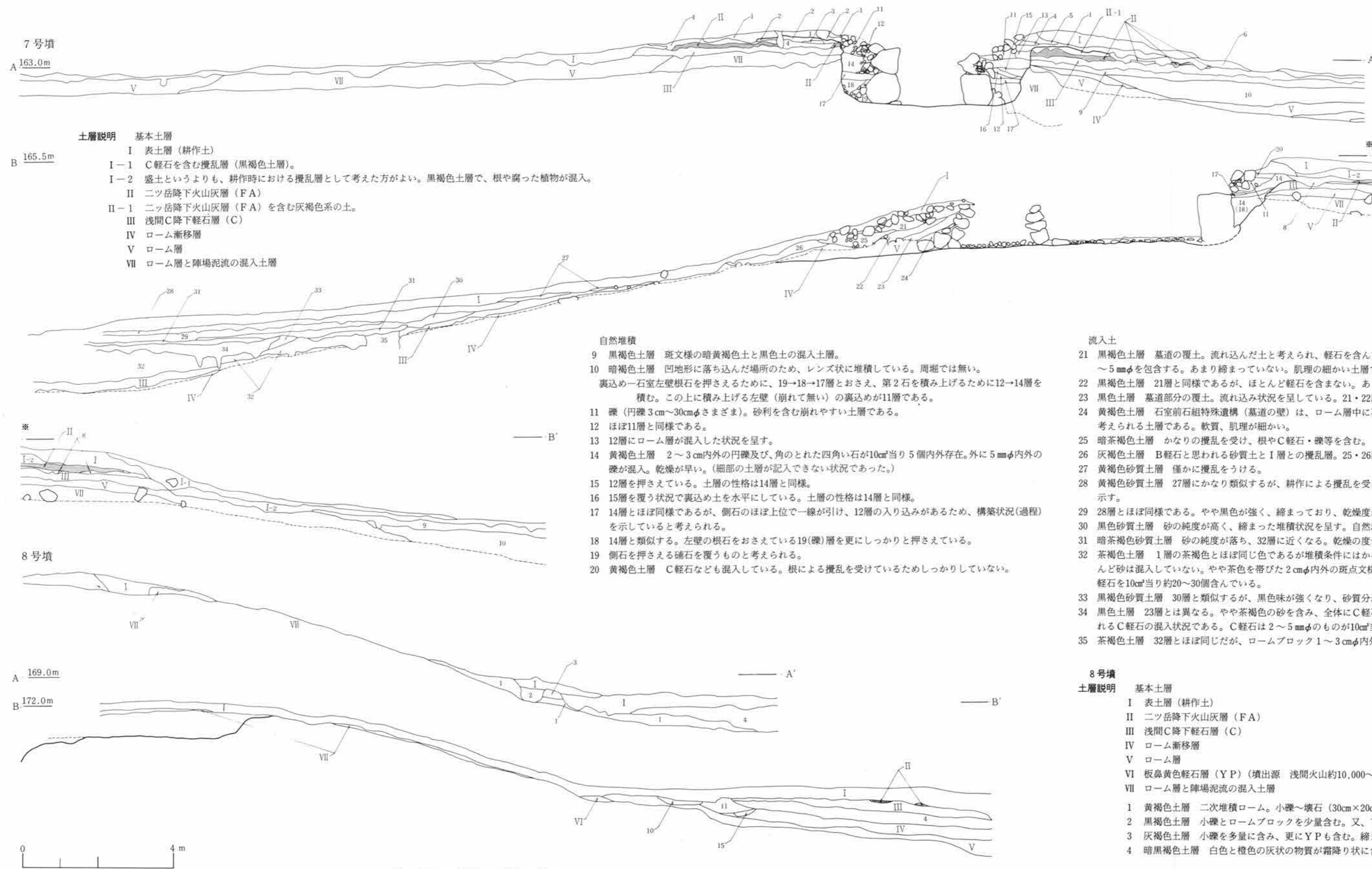
- 8 C軽石混入黒褐色土層 C軽石が霜降り状に混入する黒色土層中に斑点状に褐色土が混入。
- 9 C軽石混入暗黒褐色土層 11層に類似するが、黒色味の強い土層。
- 10 暗黄褐色粘質土層 C軽石・YP・ロームブロックを少量混入したやや黒色味を帯びた褐色の粘質土層。
- 11 C軽石混入暗灰褐色土層 少量のC軽石と炭化物を混入し、やや砂質部分があるが、締まった土である。





- 5号墳**
- 土層説明**
- 基本土層
- I 表土層 (耕作土)
 - II ニッ岳降下火山灰層 (FA)
 - III 浅間C降下軽石層 (C)
 - V ローム層
 - VII ローム層と陣場泥流の混入土層 (分けると下記の通り)
- VII-1 灰褐色土層 灰白色の小礫とその小壊石を多量に含む粒子の粗い土層。…地山
 - VII-2 黄白色土層 ローム層…二次堆積
 - VII-3 黄白色土層 小壊石を多量に含む。土質はVII-2層と同じ。
 - VII-4 暗黄褐色土層 小礫を含むローム漸移層。…二次堆積
 - VII-5 暗褐色土層 小礫、ローム粒子を含むややサラサラした土層。
 - VII-6 暗黄褐色土層 小礫、ローム粒子とロームブロックを含むややサラサラした土層。
 - VII-7 灰黒色土層 小礫、ローム粒子を含む締まりの無い土層。
 - VII-8 黒色土層 小礫、ローム粒子、ロームブロック、YP粒子を含む。
 - VII-9 黄褐色土層 一次堆積ローム層。
- 自然堆積
- 1 黒褐色土層 拳大の小石やその小壊石を多量に含む。
 - 2 黒褐色土層 黄褐色の石の崩壊した粒子、白色の火山灰(?)が霜降り状に入っており、湿気を帯びている。
 - 3 暗褐色土層 黄褐色の石の崩壊した粒子、白色の火山灰(?)が霜降り状に入っており、湿気を帯びている。
- 裏込め
- 4 暗灰褐色土層 灰白色の小礫を多量に含む粒子の粗い締まりの無い土層、裏込めの川原石が入っており、石室構築のため、地山VII-1層を掘り込んでいる。
 - 5 4層と同じ土質 石室の裏側に充填したものである。
-
- 6号墳**
- 土層説明**
- 基本土層
- I 表土層 (耕作土)
 - IV ローム漸移層
- 埋土
- 1 茶褐色土層 篠の根による攪乱層
 - 2 黒褐色土層 この土層では下部から土師器の出土をみる。
 - 3 攪乱層
 - 4 表土層、攪乱土層 締まっている。粘性は無い。
 - 5 黄褐色土層 ロームブロックを少量含む。締まっている。粘性は無い。
 - 6 褐色土層 ロームブロックを少量含む。ロームが斑点状に入る。よく締まっている。粘性は無い。
 - 7 黒色土層 黄色粒子を含む。締まっている。粘性がある。
 - 石室床礎石
 - 8 2~5cmφを中心とする礎石と、茶褐色土層。全体の石のほぼ10%が角閃石安山岩である。

Fig. 209 5号墳、6号墳土層図



- 封土
- 1 暗黄褐色土層 根による攪乱が激しい。
 - 2 暗黒褐色土層 根による攪乱が激しい。
 - 3 黄褐色土層 根による攪乱が激しい。
 - 4 黒灰色土層 黒色土とII層 (FA) が混入し、C軽石を若干含む。
 - 5 黄褐色土層 墳丘盛土の第2番目の土層になるが、裏込め部分を覆う状況を呈している。かなりしっかりとした堆積状況を示す。僅かに礫を含む。
 - 6 暗灰褐色土層 II層の攪乱土層と考えられる。
 - 8 黄褐色土層 ローム土が混っている。

土層説明 基本土層

- I 表土層 (耕作土)
- I-1 C軽石を含む攪乱層 (黒褐色土層)。
- I-2 盛土というよりも、耕作時における攪乱層として考えた方がよい。黒褐色土層で、根や腐った植物が混入。
- II ニッ岳降下火山灰層 (FA)
- II-1 ニッ岳降下火山灰層 (FA) を含む灰褐色系の土。
- III 浅間C降下軽石層 (C)
- IV ローム漸移層
- V ローム層
- VII ローム層と陣場泥流の混入土層

自然堆積

- 9 黒褐色土層 斑文様の暗黄褐色土と黒色土の混入土層。
- 10 暗褐色土層 凹地形に落ち込んだ場所のため、レンズ状に堆積している。周堀では無い。裏込め一石室左壁根石を押さえるために、19→18→17層とおさえ、第2石を積み上げるために12→14層を積む。この上に積み上げる左壁 (崩れて無い) の裏込めが11層である。
- 11 礫 (円礫 3cm~30cmφさまざま)。砂利を含む崩れやすい土層である。
- 12 ほぼ11層と同様である。
- 13 12層にローム層が混入した状況を呈す。
- 14 黄褐色土層 2~3cm内外の円礫及び、角のとれた四角い石が10cm²当り5個内外存在。外に5mmφ内外の礫が混入。乾燥が早い。(細部の土層が記入できない状況であった。)
- 15 12層を押さえている。土層の性格は14層と同様。
- 16 15層を覆う状況で裏込め土を水平にしている。土層の性格は14層と同様。
- 17 14層とほぼ同様であるが、側石のほぼ上位で一線が引け、12層の入り込みがあるため、構築状況 (過程) を示していると考えられる。
- 18 14層と類似する。左壁の根石をおさえている19 (礫) 層を更にとしっかりと押さえている。
- 19 側石を押さえる礫を覆うものと考えられる。
- 20 黄褐色土層 C軽石なども混入している。根による攪乱を受けているためしっかりとされていない。

流入土

- 21 黒褐色土層 墓道の覆土。流れ込んだ土と考えられ、軽石を含んでいる。10cm²当り約20個の黄色味を帯びた軽石 2~5mmφを包含する。あまり締まっていない。肌理の細かい土層である。
- 22 黒褐色土層 21層と同様であるが、ほとんど軽石を含まない。あまり締まりの無い土層であるが、肌理が細かい。
- 23 黒色土層 墓道部分の覆土。流れ込み状況を呈している。21・22層と同様な性格の土層である。
- 24 黄褐色土層 石室前石組特殊遺構 (墓道の壁) は、ローム層中に石を組み込んでいる。ここからの土の流れ込みと考えられる土層である。軟質、肌理が細かい。
- 25 暗茶褐色土層 かなりの攪乱を受け、根やC軽石・礫等を含む。
- 26 灰褐色土層 B軽石と思われる砂質土とI層との攪乱層。25・26層いずれも耕作時での攪乱か。
- 27 黄褐色砂質土層 僅かに攪乱をうける。
- 28 黄褐色砂質土層 27層にかなり類似するが、耕作による攪乱を受けていない様相を呈す。地形変換点で厚い堆積を示す。
- 29 28層とほぼ同様である。やや黒色が強く、締まっており、乾燥度ははやい。
- 30 黒色砂質土層 砂の純度が高く、締まった堆積状況を呈す。自然地形面に適合するような土層堆積である。
- 31 暗茶褐色砂質土層 砂の純度が落ち、32層に近くなる。乾燥の度合が上・下層に比してはやい。締まりは無い。
- 32 茶褐色土層 1層の茶褐色とほぼ同じ色であるが堆積条件にはかなりの隔りがあると考えられる。ここではほとんど砂は混入していない。やや茶色を帯びた2cmφ内外の斑点文様の染と、1mmφ内外の白色また、黄色味を帯びた軽石を10cm²当り約20~30個含んでいる。
- 33 黒褐色砂質土層 30層と類似するが、黒色味が強くなり、砂質分が弱くなる。
- 34 黒色土層 23層とは異なる。やや茶褐色の砂を含み、全体にC軽石を含む。自然堆積というより流れ込みと考えられるC軽石の混入状況である。C軽石は2~5mmφのものが10cm²当り20~30個混入。
- 35 茶褐色土層 32層とほぼ同じだが、ロームブロック1~3cmφ内外を多量に含む。砂も含む。軟質。

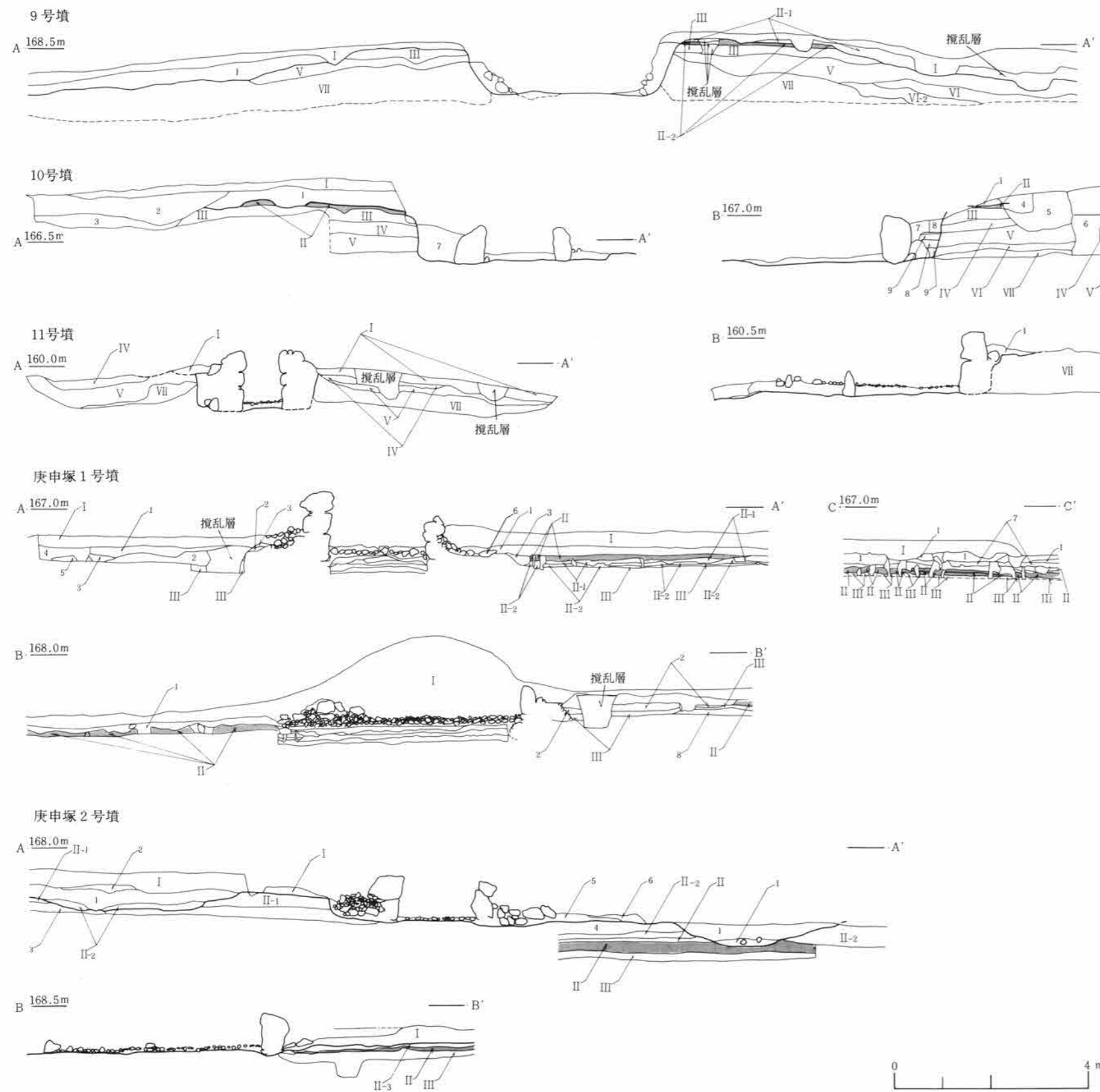
8号墳

土層説明 基本土層

- I 表土層 (耕作土)
- II ニッ岳降下火山灰層 (FA)
- III 浅間C降下軽石層 (C)
- IV ローム漸移層
- V ローム層
- VI 板鼻黄色軽石層 (YP) (墳出源 浅間火山約10,000~13,000BP)
- VII ローム層と陣場泥流の混入土層

- 1 黄褐色土層 二次堆積ローム。小礫~壊石 (30cm×20cm×10cm) を含む。
- 2 黒褐色土層 小礫とロームブロックを少量含む。又、YPを多量に含む。…攪乱
- 3 灰褐色土層 小礫を多量に含む、更にYPも含む。締まりの無い土層…攪乱
- 4 暗黒褐色土層 白色と橙色の灰状の物質が霜降り状に含まれる。やや締まった土層。

Fig. 210 7号墳、8号墳土層図



9号墳

- 土層説明 基本土層
- I 表土層 (耕作土)
 - II ニッ岳降下火山灰層 (FA)
 - III 浅間C降下軽石層 (C)
 - V ローム層
 - VI 板鼻黄色軽石層 (YP) (填出源 浅間火山約10,000~13,000BP)
 - VI-2 灰黄褐色土層 YP粒子とVII層に含まれる小礫が混る。
 - VII ローム層と陣場泥流の混入土層。
- 自然堆積
- 1 黒褐色土層 B軽石、小礫を含むややサラサラした土層。

10号墳

- 土層説明 基本土層
- I 表土層 (耕作土)
 - II ニッ岳降下火山灰層 (FA)
 - III 浅間C降下軽石層 (C)
 - IV ローム漸移層
 - V ローム層
 - VI 板鼻黄色軽石層 (YP) (填出源 浅間火山約10,000~13,000BP)
- 封土
- 1 黒褐色土層 ロームブロックと粒子とを含むサラサラした土層。
- 攪乱層
- 2 黒褐色土層 ロームブロック、粒子、川原石…古墳使用の裏込め石と思われる灰白色の小礫を多量に含む。
 - 3 褐色土層 ロームブロック、粒子、灰白色の小礫を含む。
 - 4 褐色土層 ロームブロック、粒子、YPを含むややサラサラした土層。
 - 5 暗褐色土層 ロームブロック、粒子、軽石を含む。
 - 6 暗褐色土層 ロームブロック、粒子や軽石を含む、ややサラサラした土層。5層よりやや締まっている。
- 裏込め
- 7 小石を詰めている。
 - 8 黒色土層 YP粒子、ロームブロックと粒子を含む。
 - 9 黄褐色土層 ロームブロックとYP粒子の混合土層。

11号墳

- 土層説明 基本土層
- I 表土 (耕作土) 層下部
 - IV ローム漸移層
 - V ローム層
 - VII ローム層と陣場泥流の混入土層
- 封土
- 1 ロームブロック混りの土層

庚申塚 2号墳

- 土層説明 基本土層
- I 表土層 (耕作土)
 - II ニッ岳降下火山灰層 (FA)
 - II-1 軽石・FA混入茶褐色粘質土層 少量のFAがブロック状を成し軽石を混入した褐色味の強い土層。
 - II-2 軽石・砂粒混入FA再堆積土層 本古墳構築面になっている土層。おそらくFAを主体とした再堆積層。
 - II-3 やや攪乱を受けたFA層
 - III 浅間C降下軽石層 (C)
 - 1 軽石混入暗褐色土層 霜降り状に軽石を混入。あまり締まりの無いフカフカした土層。周堀内堆積土層
 - 1' 軽石・円礫混入黒褐色粘質土層 1層に類似するが黒色・粘質ともに強い土層。周堀内堆積土層
 - 2 浅間B降下軽石層
 - 3 灰褐色粘質土層と砂質土との混入土層
 - 4 軽石混入褐色土層 霜降り状に軽石 (FP) を混入。鉄分沈殿による橙色部分がある。
- 封土
- 5 FP混入褐色土層 鉄分沈殿による橙色部分と、軽石を混入している。
 - 6 軽石・褐色土混入暗褐色土層 やや褐色を帯びた土層、1層に類似する。

庚申塚 1号墳

- 土層説明 基本土層
- I 表土層 (耕作土)
 - II ニッ岳降下火山灰層 (FA)
 - II-1 II層に類似するがFAがブロック状に入る。
 - II-2 II層に類似するがFAが少なくなる。
 - III 浅間C降下軽石層 (C)
 - 1 軽石混入褐色硬質土層 I層に類似するがやや褐色又は、黄色味を帯びた土層で締まりをもっている。
 - 2 黄褐色粘土ブロック。C軽石混入暗褐色土層
 - 3 黄褐色土と暗褐色土の混入土層
 - 4 I層とほとんど変化が認められ無いが、やや締まりを帯びている。
 - 5 黄褐色土層
 - 6 黄褐色砂質粘質土層
 - 7 軽石混入黒色土層
 - 8 C軽石混入暗黒褐色粘質土層

Fig. 211 9号墳、10号墳、11号墳、庚申塚1号墳、庚申塚2号墳土層図

第3節 歴史時代

13区7号住居址 (Fig. 212・213、PL. 94-1~3)

7号住居址はJ・K-12・13グリッドに広がりをもつ。縄文時代の遺構が陣場泥流残丘上の平坦部から斜面にかけての移行部分に円を描く様に分布する切れ目にあるかのように、東斜面北寄り部分に位置している。縄文時代の遺構として確認した2号土坑の北側約7mに位置している。1号集石址までは北西約17m、北北東にある11号住居址まで約18mを測る。当住居址は南東に長い隅丸長方形の住居址であり、東壁の南寄りにかまどが築かれている。規模は長軸約4.8m、短軸約3.1mである。深さは約20cmであるが、掘り方面は削りとられており、本来はもっと深いことは確実である。床面も不安定であり、柱穴は2ヶ所に確認できた。かまどは上位が削りとられ、床面と袖の一部が残る程度であった。またかまど内からは、かまど構築時に使用されたと考えられる大型の石が出土している。

柱穴は西壁寄りに併行に検出でき、北側の柱穴はほぼ楕円形を呈し、長軸約32cm、短軸約24cm、深さ約20cmを測る。南側の柱穴はほぼ円形に近く、径約24cmであり、深さ約19cmである。

かまどの規模は残存状況での測定で、かまど主軸方向は約1m、壁部分にかまどを取り付けた裾の外側部分の幅約1mであるが、主軸部分は多少とも長くなることが考えられる。かまどの袖の幅も測定困難な状況であり、落ち込みだけを測定するにとどめざるをえなかった。土層等の検討を行なっても明瞭な状況を呈示することが不可能に近い状況であった。また、住居址中央西壁寄りに床面下から土坑が検出できた。長軸方向は東西にあり、長さ約1.4m、幅80cm、深さ30cmであり、楕円形を呈している。

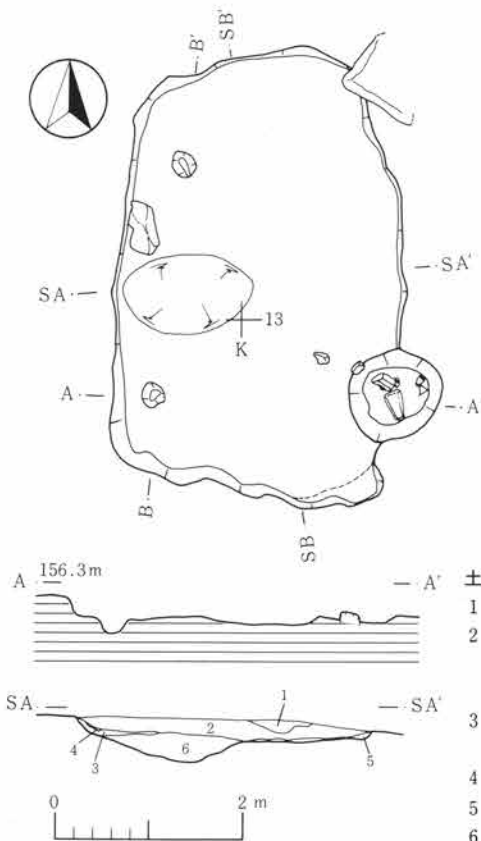
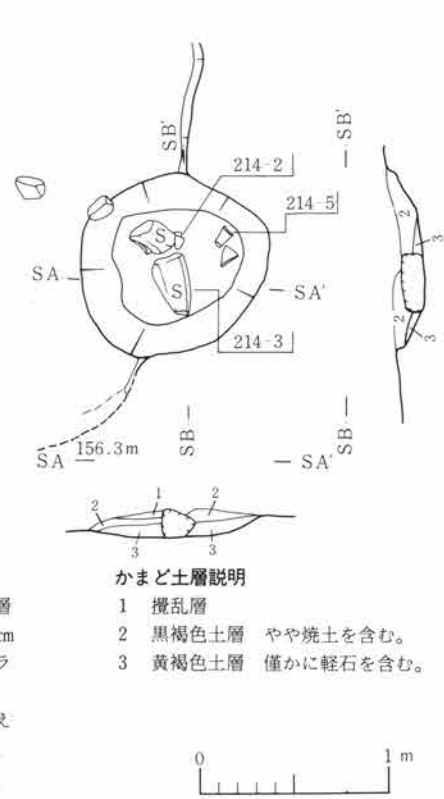


Fig. 212 13区7号住居址実測図

土層説明

- 1 黒色土層 上部からの攪乱土層
- 2 黒褐色土層 住居址覆土。0.5cm φ内外の軽石を全面に含むサラサラした土である。
- 3 暗黄褐色土層 流れ込みと考えられるボソボソした土である。
- 4 暗黄褐色土層 1層に類似。
- 5 黄褐色土層 (ローム漸移層)
- 6 褐色土層 床面下の土坑。土器片や礫を含む。



かまど土層説明

- 1 攪乱層
- 2 黒褐色土層 やや焼土を含む。
- 3 黄褐色土層 僅かに軽石を含む。

Fig. 213 13区7号住居址内かまど実測図

出土遺物 (Fig. 214、PL. 94-4~6)

石製品

丸柄 (Fig. 214-1、巻頭図版-3・4、PL. 94-4) 覆土内出土、幅4.5cm、高さ3.0cm、厚さ8mmである。表面と側面を丁寧に磨いている。裏面には3対のかがり穴を有す。石材は変質蛇紋岩である。19.89g。

灰釉陶器碗 (Fig. 214-2、PL. 94-5) かまど内出土。口径17.6cm、底径7.9cm、器高5.7cmである。付高台を有す。内外面とも刷毛による施釉がある。内外面の一部に炭素が付着する。

須恵器

甕 (Fig. 214-3、PL. 94-6) かまど内出土。胴部の破片であり、外面は平行叩き目文、内面は青海波文がみられる。焼成は良好である。色調は灰色である。胎土は白色鉱物を多量に含んでいる。

土師器

甕 (Fig. 214-4、PL. 94-6) 覆土内出土、「コ」の字状口縁の甕である。口縁部から肩部にかけての破片である。口径約16.9cmである。口縁部は横撫で整形を行なっている。肩部は篋削りを行なっている。

羽釜 (Fig. 214-5、PL. 94-6) かまど内出土、口縁部破片、口径19.1cm、鏝径22.8cmである。口縁部は内湾している。胎土は小礫を僅かに含む。焼成は良好である。色調はにぶい黄橙色である。

杯 (Fig. 214-6、PL. 94-6) 覆土内出土、高台付杯である。推定口径14.5cm、高台径8.2cm、器高約6.2cmである。杯底部には糸切痕がある。胎土は小礫が混入。器面は荒れている。色調は灰白色である。

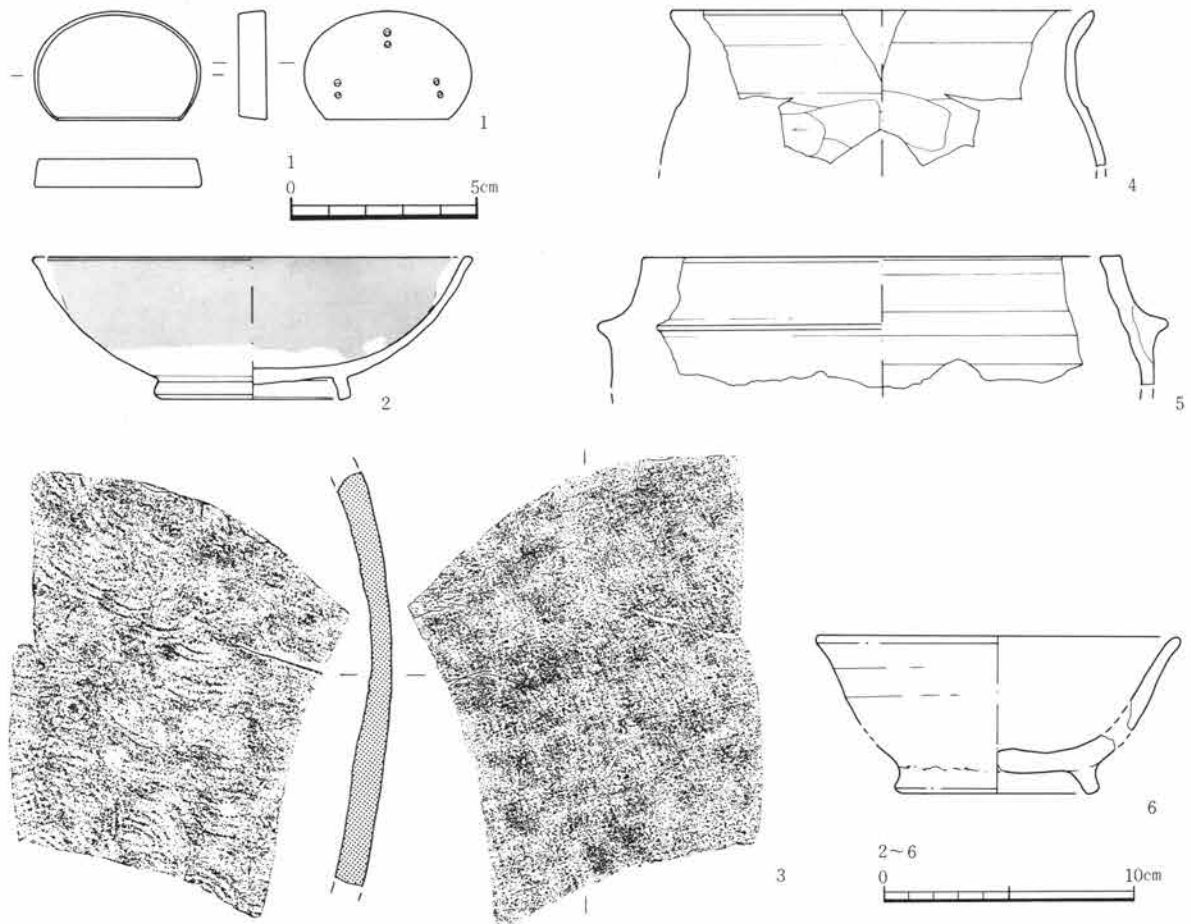


Fig. 214 13区7号住居址出土遺物実測図

13区1号墓壙 (Fig. 215、PL.95-1・2)

1号墓壙はE・F-17・18グリッドに広がりをもつ。陣場泥流残丘上の上位平坦部分の南西に位置し、3号住居址西壁に接している。南東には近接して2号墓壙が検出できた。当墓壙の平面形は、長軸をほぼ南北にもつ隅丸長方形である。長径約3.15m、短径約2.05m、深さ約85cmである。当墓壙は、二段掘りになっており、内側は長径約2.3m、短径約90cmの上端を測り、下端は長径約2.1m、短径約70cmである。墓壙のほぼ中位に段をもっている。覆土は同様な土を繰り返し埋めた状況がベルトで観察できる。また墓壙の床面からは、東壁に沿って、緑釉の輪花椀・皿、内黒の土師器高台付杯、南西隅からは灰釉の耳皿が出土した。他、北辺部と南辺部を主に鉄釘が検出できた。

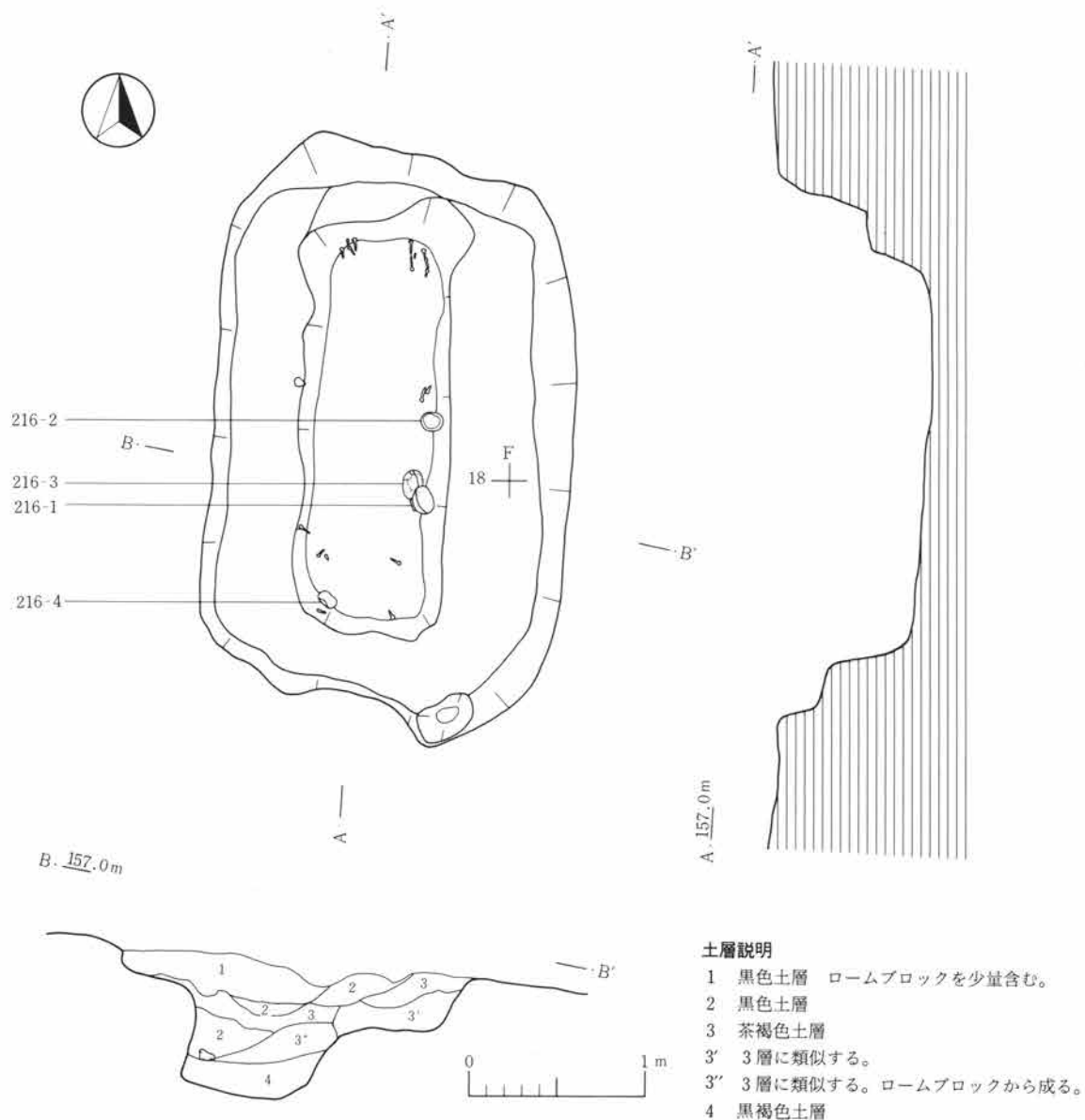


Fig. 215 13区1号墓壙実測図

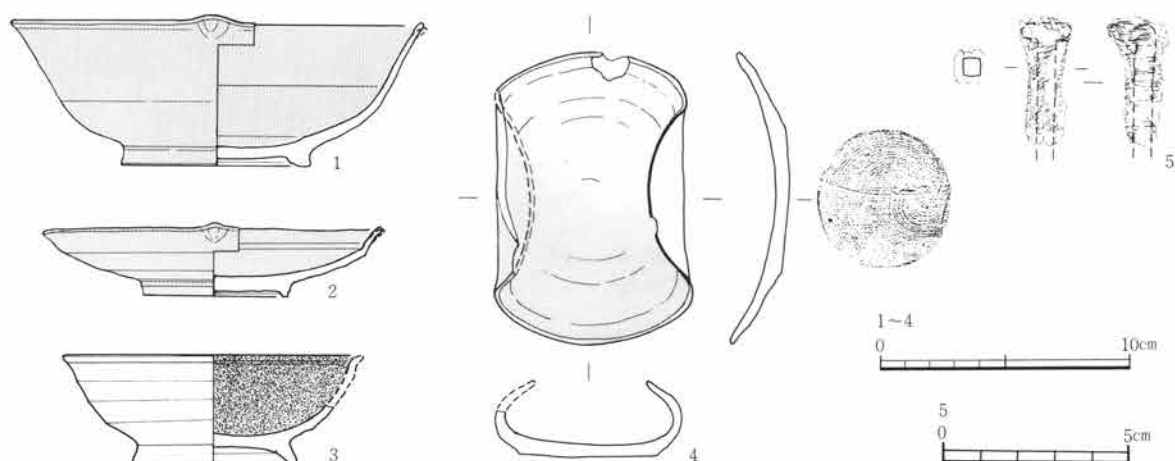


Fig. 216 13区1号墓墳出土遺物実測図

出土遺物 (Fig. 216、PL. 95—3～5)

緑釉陶器

輪花碗 (Fig. 216—1、巻頭図版—5) 床面出土。完形。口径16.5cm、高台径7.6cm、器高5.7cmである。高台は削り出しており、高さ4mmを測る。口縁部の輪花数は4輪花である。内面中位には一本の細い沈線が巡っている。底部には重ね焼きの痕がある。外面胴下半部分は器面調整を回転(右回転)の削りにより行っており、高台も同様である。削り出し高台部分は、内側の稜に当る部分を再度削っている。緑釉の施釉状態は内外面、全体に及んでおり、内面は緑灰色が強く、外面胴下半部は弱くなる。胎土は細かく白色粒子を含む。焼成は堅く焼き締まっている。

輪花皿 (Fig. 216—2、巻頭図版—6) 床面出土。完形。口径13.6cm、高台径5.8cm、器高2.8cmである。高台は削り出しており、高さ5mmを測る。口縁部の輪花数は4輪花である。体部中位を屈曲させている。内面底部は重ね焼き痕が残る。外面は体部中位まで回転篋磨きを行っており、右回転である。削り出し高台部分は内側の稜に当る部分を再度削り取っている。緑釉の施釉状態は内外面とも施している。内面は厚めの施釉であり、外面は斑である。焼成は堅く焼き締まっており良好である。胎土は細かく白色粒子を含んでいる。

土師器

杯 (Fig. 216—3、PL. 95—3) 床面出土。口縁部の一部を欠損する。口径12.0cm、高台径6.3cm、器高4.4cm、高台の高さ7mmの三角高台を付けている。底部には僅かに糸切痕がある。胴部はゆるやかに張りを持ち、口縁部は外反している。内面は光沢をもつ所謂内黒土器であり、外面口縁部付近にも黒く燻しがかかっている。胎土は砂粒を僅かに含む。焼成は良好である。色調はにぶい橙である。

灰釉陶器

耳皿 (Fig. 216—4、PL. 95—4) 床面出土。口縁部の一部を欠損する。口径11.6cm、底径5.4cm、器高2.2cmである。釉は自然釉であり、内面と耳外部にかかる。底部には糸切痕が残る。胎土は極細密である。焼成はたいへん良い。色調は灰白色である。釉の色調は明オリーブ灰色である。

鉄製品

釘 (Fig. 216—5、PL. 95—5) 覆土内出土。角釘であり、下半部分欠損。重さ6.99g。

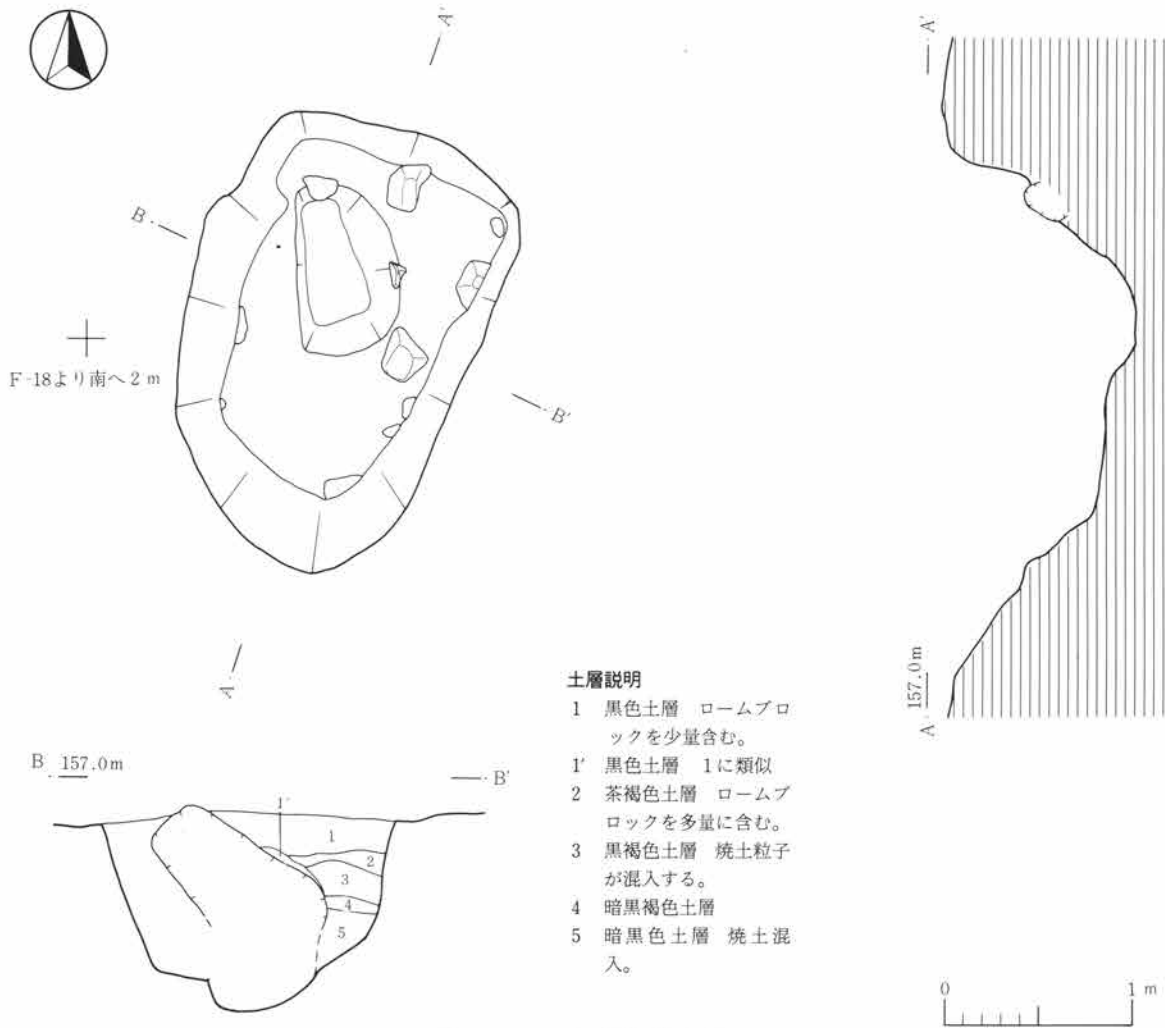


Fig. 217 13区2号墓墳実測図

13区2号墓墳 (Fig. 217、PL. 96-1・2)

2号墓墳はF-18グリッド北西寄りに検出できた。3号住居址の南西隅部分を切り、1号墓墳を北西約1mにもち、陣場泥流残丘のほぼ南側中央平坦部分に築いている。平面形は、ほぼ隅丸長方形を呈すが南壁が僅かに歪む。主軸方位はN-25°-Eである。長軸約2.4m、短軸約1.5mを測る。中央に大きな石が入り込み、土層や床面が確実にとらえられない状況であった。深さは約90cmと推定できる。土層図、立面図で中央に深い部分があるのは大石があった場所であり、床面より一段下がっている状況であった。内面からは鉄釘が1本検出できた。

出土遺物

鉄製品

鉄釘 (Fig. 218、PL. 95-6)

2号墓墳覆土出土。全長5.5cm、重さ4.21gである。釘の頭は円形である。径1.3cmである。釘本体の断面は方形を呈しており、先端に向い細くなる。

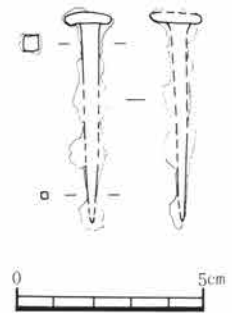
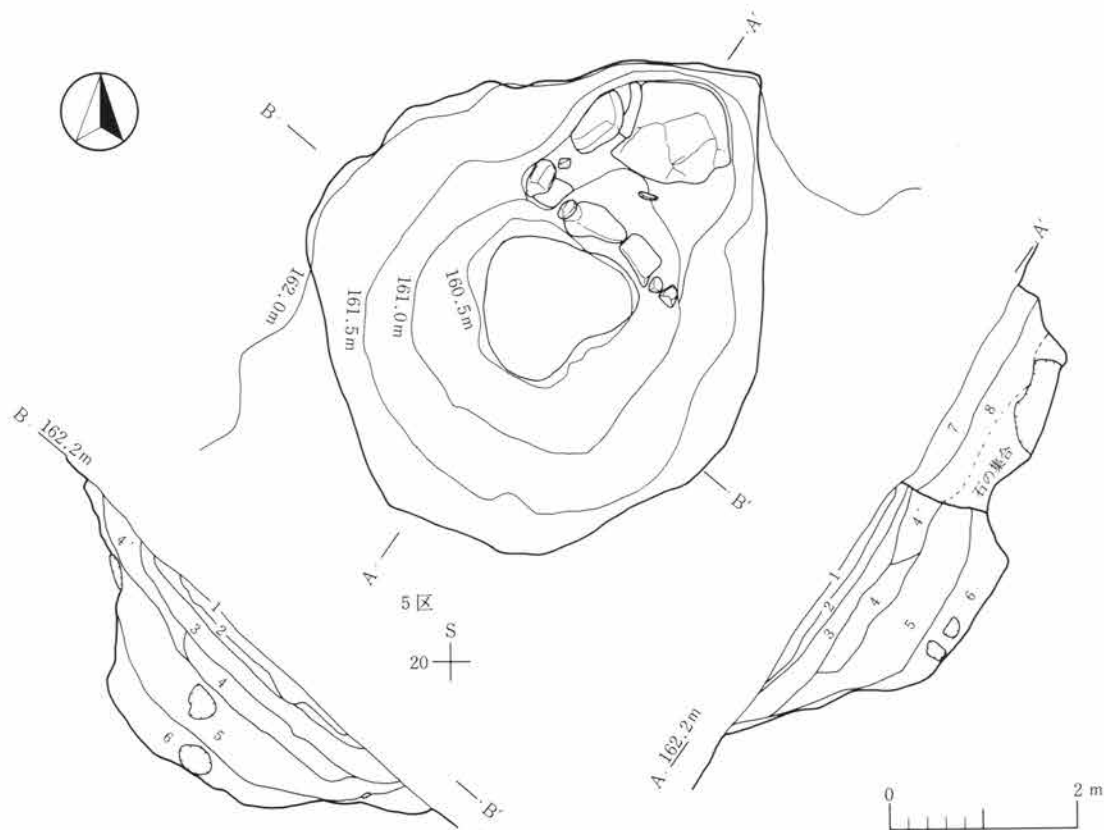


Fig. 218 13区2号墓墳出土遺物実測図

第4節 時期不明

5区1号土坑 (Fig. 219、PL. 97-1・2)

1号土坑はR・S-19グリッドに検出できた。7号墳の南東部分に位置している。7号墳は陣場泥流の残丘を利用した古墳であり、この残丘の裾の部分にあたる。当土坑は北東部分を切られ、大小の礫が多量に入っている。本来、円形に近い平面形と考えることができる。既ね径5mであり、深さ約1.56mを測る。床面は鍋底状を呈している。覆土からの観察では、土坑最上位に浅間B降下軽石層の純層の堆積がみられ、3・4層には黒色土中に浅間C降下軽石がある。これは純層か否か不明である。5・6層には陣場泥流内に包含する角礫が二次堆積として流入していることを確認した。1～6層までは自然の流れ込み状況を呈している。土坑内からの遺物は未検出であった。以上のことから当土坑の年代や性格を決定すべき点は少ないが、土層の堆積状況から浅間B降下軽石層の降灰期(1108年)にはほぼ全体が埋まった状態になっていたことは明瞭である。また浅間C降下軽石層の堆積状況から4世紀以前の遺構として考えることが可能となるであろう。



土層説明

- | | |
|------------------------------------|--|
| 1 浅間B降下軽石層 | 5 褐色土層 |
| 2 浅間B降下軽石層 (砂質)乾燥度が強い。 | 6 ローム漸移層 黄色土が床面近くにあり、上部は砂質(かなり細かい)のほそほそした灰褐色土層 |
| 3 黒褐色土層 C軽石を僅かに含む。 | 7 新しい掘り込み(砂質土層) |
| 4 黄褐色土層 茶褐色の3~5cmφの斑点をもつ。 | 8 // ほそほその砂礫層 |
| 4' 黒色土層 C軽石を僅かに含む。やや角のとれた10~15cmφの | |

Fig. 219 5区1号土坑実測図

第4章 ま と め

第1節 縄文時代

清里・長久保遺跡では前記したように、1区および、13区は縄文時代の住居址および土坑が検出された。さらに、13区に営まれた住居址の縁辺部12・13・27区には、多量の土器破片を出土する所謂「土器だまり」が形成されていた。本節ではこれらの土器を分類し、各住居址の時期を把握しまとめにする。なお、土器の分類にあたっては、財団法人埼玉県立埋蔵文化財調査事業団刊行「縄文中期土器群の再編」(『研究紀要 1982』1982年12月25日)に準拠した。『研究紀要 1982』による分類を本稿では「埼玉編年」と呼称した。本編年を基準として各住居址から出土した土器を分類するとともに、各資料の時期区分をし、住居址の時期を設定した。さらに、土器だまりの資料を住居址出土のものと比較し、12・13区と27区に形成された集落の年代を推察してみた。

(1) 土器の時期区分

第I期	前期終末段階
第II期	阿玉台式・勝坂式土器・中峠式土器段階(「埼玉編年」第IV・V・VI・VII・VIII期)
第III—1期	「埼玉編年」第IXa期段階
第III—2期	「埼玉編年」第IXb期段階
第IV期	「埼玉編年」第X期段階
第V期	「埼玉編年」第XI期段階
第VI—1期	「埼玉編年」第XIIa期段階
第VI—2	「埼玉編年」第XIIb期段階
第VII期	「埼玉編年」第XIII期段階
第VIII期	「埼玉編年」第XIII期段階
第IX期	後期前半段階

(2) 住居址出土土器分類

1区1号住居址

本住居址からは第I・IX期の土器が出土している。覆土からは第I期の諸磯b・c式土器や十三菩提式土器が出土したが、床面に埋設されていたものはFig. 6—1の無文土器であった。これより、本住居址は第IX期の後期初頭段階に形成されたものと判断した。

13区1号住居址

本住居址からは第III—1・IV・V・VI・VII・VIII・IX期の土器が出土している。出土資料は少なく、5号住居址により切られていた。床面からは第III—1・IV・VII期の資料が出土し、覆土からは第V・VI～VII・VIII・IX期の資料が出土した。床面から出土した資料のうち、Fig. 10—7の第VII期に属するものが1点含まれていたが、第IV期(「埼玉編年」第X期以下、括弧内の時期は「埼玉編年」を示す。)に位置づけられるものが多い。これより、本住居址の構築年代は第IV期と考えたい。

13区2号住居址

第4章 まとめ

本住居址からは第III-1・IV・V・VI-1・VI-2・IX期の土器が出土している。そのうち、第V・VI-1期の資料が比較的多く出土している。本住居址出土遺物の特徴は、他の住居址に比較し、加曾利E式土器の系統のものが混在していることである。

Fig. 15-5・6は第III-2期(第IXb期)に位置づけられ、頸部に平行沈線をめぐらし交互刺突文を施す。地文は燃糸文で、渦巻状の隆帯を施す。大木8b式土器文様と関連するものであろう。Fig. 14-5は第VI-1期(第XIIa)に位置づけられよう。口縁部文様帯は平面的な渦巻文と楕円区画により構成されるが、頸部が無文となるため、古い要素もうかがわれる。Fig. 14-3・4は第V期(第XI期第1群A類ないしはG類)に位置づけられる。口縁部文様帯は渦巻が弧状に連結した隆帯により区画され、区画内は縦位の沈線が施されている。Fig. 14-2も第V期(第XI期第3群A類ないしはC類)に含まれる。連弧状沈線の接合部に渦巻文が描かれている点が注目される。Fig. 14-1も第V期(第XI期第1群I類と第4群C類の複合)に位置づけられる。本土器文様は口縁部文様帯に「埼玉編年」第XI期第1群I類、ないしは第4群の渦巻をもつ連弧状区画と楕円区画がなされ、胴部は唐草文の系統を引くモチーフで構成されている。Fig. 15-8も第V期(第XI期第4群A類)に位置づけられる重弧文土器文様系統を引くものである。Fig. 16-5・6は第VI-1期(第XIIa期第3群B類・C類)に位置づけられる連弧文土器である。その他、Fig. 16-3などの第IX期に属するものが覆土上部から出土した。

以上、2号住居址の覆土および床面から出土した主要な土器文様の分類と時期を記したが、そのうち床面から出土したものはFig. 14-2・5・12、Fig. 15-2・3・4・5・6、Fig. 16-6・9・10・12・13の深鉢とFig. 14-8・9・10の浅鉢とFig. 14-7の有孔小型土器である。これらの資料の時期は第III-2期から第VI-2期までと時間幅をもっている。また、Fig. 14-3が炉埋設土器であり第V期に属する。これらのことより本住居址の形成年代は第VI期と考えられ、第VI期でも古い段階と位置づけられる。

13区3号住居址

本住居址からは第IV・VI-1・VI-2・VII・VIII期の資料が出土している。出土量は第VI期から第VII期にかけてのものが多。Fig. 20-1は第IV期(第X期)に位置づけられる。大木8b式土器文様と関連するものである。頸部は無文となり、胴部には縄文を施し、沈線と隆帯により渦巻文と曲線文を作出している。Fig. 20-3、Fig. 21-2は第VI-2期(第XIIb期第1群B類)に位置づけられる。渦巻文と楕円区画文が変形し、連続したようなモチーフとなっている。胴部は磨消懸垂文と蛇行する懸垂文が施されている。Fig. 21-14も第VI-2期(第XIIb期)に属するものであるが、口頸部に沈線による渦巻文を施している。Fig. 20-2も第VI-2期(第XIIb期第3群A類)に位置づけられる。地文は、条線文を施し、連弧文は波状文に変化している。Fig. 20-16、Fig. 21-5は第VII期(第XIII期第1群A類ないしはC類)に位置づけられる。口縁部文様帯は隆帯と幅広の沈線により楕円区画ないしは三角形区画文を構成し、胴部文様帯には内部を磨消す懸垂文を施し、幅広の縄文帯と無文帯を交互に配置している。

本住居址の床面からはFig. 20-2・4・8・16、Fig. 21-2・5・6・8・11・13、Fig. 22-2・12の深鉢と、Fig. 21-10の浅鉢が出土している。これらの資料の時期は、第IV期から第VII期にわたる。これより、本住居址の形成時期は第VII期と考えられよう。

13区4号住居址

本住居址からは第V・VI-1・VI-2・VII・VIII・IX期の資料が出土している。そのうち、第VI-2期から第VII期にかけての資料が比較的多い。Fig. 27-7は第V期(第XI期第4群)に位置づけられる重弧文土器文様の系統を引くものである。Fig. 27-2・4は第VI-2期(第XIIb期第1群A類ないしはB類)に位置づけ

られる。口縁部文様帯は太い沈線と隆帯により渦巻文と楕円形区画で構成されるが、崩れたモチーフとなっている。口縁部文様帯直下から懸垂文を施し胴部文様帯を作出している。懸垂文の間には蛇行と蕨手状の懸垂文を挿入している。Fig. 27-1は第VII期（第XIII期第1群B類）に位置づけられる。口縁部文様帯は太い沈線と幅広の隆帯により、渦巻文と楕円区画が構成され、渦巻文の間に円形の刺突が施される。渦巻文の直下から沈線による区画文を施している。Fig. 28-20は第VII期（第XIII期第2群A類）に位置づけられると思われる。蛇行懸垂文と蕨手状懸垂文を施している。Fig. 27-19と Fig. 28-18は第VII期に位置づけられる。口縁部に刺突文を施し、以下、櫛歯状工具による波状の条線文を施している。Fig. 28-4も第VII期（第XIII期第2群）に位置づけられる。口縁部は内湾し、地文に縄文を施し、沈線により「∩」形区画する。区画内の縄文は、磨消す。

本住居址の床面からは、Fig. 27-2・3・6・8・15・16、Fig. 28-7・12・14・15・16・19・21などの深鉢が出土している。これらの資料は第VI～VII期にわたる。これより、本住居址の年代は第VI期ないしは第VII期に属するものと思われる。

13区5号住居址

本住居址からは第III-1・III-2・V・VI-1・VI-2・VII・VIII期の資料が出土している。そのうち、第VI-1からVII期にかけての資料が多く出土している。Fig. 34-8は第III-1期（第IX a期第1群）に属すると思われる。地文に撚糸文を施し、「十字」状に類する文様を作出したと思われる。Fig. 34-4は第III-2期（第IX b期）に位置づけられる。大木8 b式土器文様の流れをくむものと思われる。胴部には沈線と隆帯により、渦巻文と曲線文を作出している。Fig. 36-3は第V期に位置づけられる。沈線により渦巻文を作出し、区画内に縄文を施す。大木9式土器文様と関連するものであろう。Fig. 34-2、Fig. 35-1・4は第VI-1期（第XII a期第1群A類）に属する。口縁部文様帯は渦巻文と楕円区画文で構成され、胴部には磨消懸垂文が施されている。Fig. 35-12、Fig. 36-2も第VI-1期（第XII a期第3群）に位置づけられる。地文に撚糸文ないし縄文が施され、連弧文が作出されている。Fig. 34-12～16は第VI-1期（第XII a期第1群G類）に位置づけられよう。口縁部文様帯は欠落しているが、胴部文様帯は縦位の沈線と綾杉状の沈線を施している。曾利IV式土器文様との交流がうかがわれる。Fig. 34-1は第VI-2期に位置づけられる。「埼玉編年」第XII b期第1群B類に類似するものであろう。口縁部文様帯は渦巻文と楕円区画文より構成されていることから、第VI-1期に近い要素も留めているものと思われる。Fig. 35-11も第VI-2期（第XII b期第3群A類）に位置づけられる。地文に撚糸文を施し、連弧文は波状化している。Fig. 36-5は第VII期（第XIII期第1群D類ないしはE類）に位置づけられよう。口縁部は波状を呈し、口縁部には沈線による楕円区画文が施されている。Fig. 36-11は第VIII期（第XIV期第2群D類ないしは第3群）に位置づけられる。口唇部直下を無文とし、口縁に沿って横位1条の断面三角形の微隆起線を貼付する。なお、Fig. 34-17は第V期に位置づけられ、重弧文土器文様の流れをくむものである。Fig. 34-7は第IV期から第V期に位置づけられる浅鉢である。「埼玉編年」第X期から第XI期第5群に対比されよう。Fig. 34-6は第VI-2期（第XII b期第7群A類）に含まれると思われる有孔鏝付土器である。胴部は沈線により区画されている。

以上の資料のうち床面から出土したものは、Fig. 34-9であり、Fig. 34-1は埋甕である。Fig. 34-1は第VI-2期に位置づけられる。これより、本住居址は第VI期ないし第VII期に形成されたものと考えられる。

13区6号住居址

本住居址からは第II・III-2・IV・V・VI-1・VII・VIII・IX期の資料が出土している。そのうち、第IV期から第VI-1期の資料が比較的多く出土し、その他第VIII期から第IX期の資料も他の住居址と比較してみると

出土量は多い。Fig. 43-20・22・24は第II期に位置づけられる勝坂式土器である。Fig. 42-1、Fig. 43-13は第IV期（第X期第1群A類ないしはD類）に位置づけられる。連結する渦巻文と区画文を構成し、口縁部下端には縦位で短い沈線を施している。頸部文様帯は無文となる。Fig. 44-1・2・6・8・9も第IV期に位置づけられる。大木8b式土器文様と関連するものであろう。地文に縄文を施し、沈線により渦巻文や曲線文を施す。Fig. 43-2・3は第VI-1期（第Ⅱa期第1群A・B類）に位置づけられる。口縁部文様帯は渦巻文と区画文により構成され、渦巻文の直下から懸垂文が施されている。Fig. 44-3・4・7は第VI-1期に位置づけられる連弧文土器である。Fig. 44-16も第VI期（第Ⅱa期第6群B類）に位置づけられると思われる浅鉢である。胴部は「く」の字状に強く屈曲し、渦巻と楕円文を施す。Fig. 43-19は第VI期に位置づけられると思われる。口唇直下に横位の連続「コ」の字文がめぐる。Fig. 44-12は第VIII期（第XIV期第2群）に位置づけられる。口唇直下は無文となり、微隆起線をめぐらす。以下、地文に縄文を施し、沈線により区画し、一部を磨消縄文とする。

本住居址の床面から出土した資料は、Fig. 43-2～4・7・8・10・11・13・16・19・20・23、Fig. 44-6・14・16であり、第III-2期から第VI期のものが含まれている。しかし、床面下よりFig. 44-11の第VII期に位置づけられる資料が出土している。これより、本住居址はVII期に位置づけられよう。

13区8号住居址

本住居址からは第III-2・VI-1・VI-2・VII・VIII期の資料が出土した。そのうち、第VII期から第VIII期の資料が多く認められたが、器形復元できたものは、第VI-1期ないしは第VI-2期に位置づけられるものであった。Fig. 50-9は第III期（第IX期）に位置づけられ、大木8b式土器文様の流れをくむものである。沈線による楕円区画と渦巻文の間に「S」字状の沈線文を施している。Fig. 49-2・3は第VI-1期（第Ⅱa期第1群A類）に位置づけられる。口縁部文様帯は隆帯と太い沈線により渦巻文と楕円区画文で構成し、胴部文様帯は沈線による内部磨消となる懸垂文を施している。Fig. 49-4、Fig. 56-1は第VI-2期（第Ⅱb期第1群A類ないしはB類）に位置づけられる。口縁部文様帯は渦巻文と区画文がやや崩れ、連結したモチーフとなっている。Fig. 51-4、Fig. 56-2も第VI-2期に位置づけられる。Fig. 51-4は口縁部に渦巻と楕円区画を構成し、胴部文様は櫛歯状工具による条線文を施している。Fig. 49-6、Fig. 50-3は第VII期（第XIII期第1群A類ないしはC類）に位置づけられる。Fig. 50-3の口縁部文様帯は隆帯と太い沈線により波状文を作出し、その間に楕円区画文を挿入している。胴部は内部を磨消す懸垂文と蛇行懸垂文を施している。Fig. 56-3も第VII期（第XIII期第5群D類）に位置づけられる。口縁直下から沈線により「∩」状に区画し、区画の間には蕨手状と「S」字状懸垂文を施す。Fig. 51-7も第VII期（第XIII期第3群A類）に位置づけられ、口縁部に円形刺突文がめぐる。Fig. 56-16も第VII期（第XIII期第2群B類）に位置づけられる。地文に縄文を施し、2本の沈線により「∩」状に区画し、区画外は磨消縄文とする。Fig. 49-18も第VII期（第XIII期第8群）に位置づけられる。縄文だけを施文するものであり、口縁部上端は無文となり、以下1条の沈線をめぐらす。沈線の下部には縄文を施す。Fig. 51-2～4は第VIII期（第XIV期）に位置づけられるものである。口縁部上端は無文となり、1条の沈線をめぐらし、以下櫛歯状工具による条線文を施す。

本住居址は中央部に落ち込みがあり、この中からは第VI-1期から第VII期にかけての資料が出土した。他の部分の床面から出土した資料はFig. 49-1～3・5、Fig. 50-1・2、Fig. 51-2・4であり、Fig. 49-2は埋甕である。これらの土器は第VI-1期から第VIII期にかけてのものである。これより、中央部落ち込み床面から出土した土器の年代は第VI期ないしは第VII期と考えられる。また、住居址の床面から出土したものは、第VIII期に属すると考えられる Fig. 51-2を除くと第VI期ないし第VII期に位置づけられる。Fig. 49-2は埋

甕であり、第VI—1期に属する。以上のことより本住居址の年代は第VII期に形成されたものと考えられる。しかし、本住居址の構築年代は第VI期まで遡る可能性もあろう。

13区9号住居址

本住居址からは第III—2・VI—1・VI—2・VII・VIII期の資料が出土している。第VI—2期や第VIII期の資料に注目されるものが含まれている。第VII期と第VIII期の資料の出土が多い。Fig. 60—5は第III—2期（第IXb期第1群F類ないしはG類）に位置づけられよう。口縁部は隆帯による渦巻文が把手状に付く。以下、隆帯と沈線により区画する。Fig. 62—19は第VI—1期（第XIIa期第1群）に位置づけられる。口縁部文様帯は隆帯と沈線により楕円区画文を構成する。頸部無文帯は喪失し、懸垂文を施す。Fig. 60—6は第VI—2期（第XIIb期第1群B類）に位置づけられる。口縁部文様帯は隆帯と幅広の沈線により楕円区画する。区画の直下から内部を磨消す懸垂文を施す。Fig. 60—1・3は第VI—2期に位置づけられると思われるが比較資料を欠いている。口縁部や胴部に「S」字状の沈線文を施すことや、口縁部に弧状の沈線文および連弧文の変形と思われる波状文を施すことから、「埼玉編年」第XIIb期第3群との対比が可能であろう。Fig. 60—7・8は第VII期（第XIII期第1群A類ないしはC類）に位置づけられる。口縁部は太い沈線により渦巻文と楕円区画文を作出し、渦巻文の内部には縄文を施す。Fig. 62—15は第VII期に位置づけられる。胴部には平行沈線を引き、刺突を施す。沈線の下部には蕨手状懸垂文を施す。Fig. 61—7・8は第VIII期（第XIV期第1群C類ないしは第2群D類）に位置づけられるものと思われる。口縁部上端は無文となり、沈線や断面三角形の微隆起線で区画する。

本住居址の床面から出土した資料は、Fig. 60—2・3・6・12・14、Fig. 61—6、Fig. 62—4であり、第VI期と第VII期のものが含まれている。これより、第VI期ないし第VII期に構成されたものであろう。また、出土量からみると第VII期に近いとも類推される。

13区10号住居址

本住居址からは第II・III—2・IV・V・VI—1・VII・VIII・IX期の資料が出土した。時期的なばらつきがあり、そのうち、第V・VII・VIII期の資料が多いようである。Fig. 67—3、Fig. 66—11は第II期の勝坂式土器である。Fig. 67—5は第III—2期（第IXb期）に位置づけられる。大木8b式土器文様と関連する。Fig. 67—6・7は第IV期（第X期）に位置づけられると思われるが、Fig. 67—5などの大木8b式土器などよりも、やや新しく位置づけられよう。Fig. 66—1は第V期（第XI期第1群B類、F類ないしはH類）に位置づけられる。口縁部文様帯は隆帯と沈線により、横位「S」字状文様を作出し、矢羽状の沈線を施す。同種のものはFig. 66—9・10でも認められる。Fig. 66—2の口縁部文様帯も同様な文様構成をするが、地文は縄文を施している。Fig. 67—1も第V期に位置づけられ、重弧文土器文様の流れをくむものである。Fig. 67—20は第VII期（第XIII期第2群C類）に位置づけられる。波状沈線の間には蕨手状の懸垂文を施している。Fig. 68—22・24は第VIII期（第XIV期第2群）に位置づけられる。断面三角形の微隆起線により曲線文を描く。微隆起線の間は磨消縄文とする。Fig. 68—25・26は第IX期に位置づけられる称名寺式土器である。

本住居址の床面から出土した資料は、Fig. 66—12・18、Fig. 67—9であり、第IV期から第VI期に位置づけられるものである。これより、本住居址の年代は第VI期として位置づけられよう。

13区11号住居址

部分敷石の住居址である。第V・VI—1・VII・VIII期の資料が出土している。そのうち、第VII・VIII期に位置づけられる資料が多い。Fig. 74—3は第VIII期（第XII期第5群B類）に位置づけられる。「∩」状の懸垂文が施され、区画内は磨消縄文としている。Fig. 75—17～21は第VII期に位置づけられる。口縁部には円形刺突文を

第4章 ま と め

施している。Fig. 75—1～4も第Ⅶ期に含まれる。櫛歯状工具による波状の条線文を施している。Fig. 74—2は第Ⅷ期（第Ⅳ期第2群）に位置づけられる。地文に縄文を施し、微隆起線により「C」字状の曲線文を作出している。Fig. 75—16も第Ⅷ期（第Ⅳ期第5群）に位置づけられる。把手はやや凹みをもつ。Fig. 76—6・7は第Ⅸ期に位置づけられる称名寺式土器である。

本住居地の床面から出土した資料は、Fig. 74—10・13、75—3・5・27・29、Fig. 76—3であり、第Ⅵ—1から第Ⅷ期に位置づけられる。これより、第Ⅷ期に属するものと思われる。

13区1号土坑

本土坑からは第Ⅵ—1期ないしは第Ⅶ期までの資料が出土している。

13区2号土坑

本土坑からは第Ⅵ期および第Ⅷ期までの資料が出土している。

(3) 集落と土器だまり

以上、各住居地出土の土器の分類と時期区分をし、住居地と土坑の年代を推察してみた。これらのものをまとめると下記のように考えられよう。

13区1号住居地 本住居地は5号住居地に切られ、これよりも古い時期のものである。第Ⅳ期に位置づけられ、「埼玉編年」の第Ⅹ期に対比される。「協会編年」（日本考古学協会シンポジウム「北関東を中心とする縄文中期の諸問題」昭和56年度秋季大会 1981）の第Ⅶ期（加曾利E I式新）段階に位置づけられよう。清里・長久保遺跡の中では最も古い段階の住居地と考えられよう。これ以前の第Ⅰ～Ⅲ期の段階の遺構は確認されなかった。

13区2号住居地 本住居地には第Ⅴ期に属する炉埋設土器がある。また、住居地の床面から出土した土器は第Ⅲ—2期から第Ⅵ—2期にかけてのものであった。これより、第Ⅵ期に位置づけ第Ⅵ期でもやや古い段階の様相もうかがわれるものと解釈した。「埼玉編年」の第Ⅻ期でも第Ⅻa期に類似し、「協会編年」の第Ⅷ期（加曾利E II式）に対比されよう。

13区3号住居地 本住居地の床面からは第Ⅵ期から第Ⅶ期にかけての土器が出土している。これより、第Ⅶ期に位置づけられると解釈した。「埼玉編年」第Ⅻ期、「協会編年」の第Ⅸ期（加曾利E III式）に対比されよう。

13区4号住居地 本住居地の床面からは第Ⅵ期から第Ⅶ期にかけての土器が出土している。また、本住居地からは第Ⅶ期の資料が多く出土している。これより、第Ⅶ期に位置づけられ、第Ⅵ期の古い様相をもったものと考えた。「埼玉編年」の第Ⅻ期、「協会編年」の第Ⅷ期（加曾利E II式）と第Ⅸ期（加曾利E III式）の間に対比されるものであろう。

13区5号住居地 本住居地からは第Ⅵ—2期に位置づけられる埋甕が出土している。なお、床面からは第Ⅶ期の資料も出土している。これより、第Ⅵ期ないしは第Ⅶ期初頭にかけての段階として把握できよう。「埼玉編年」の第Ⅻb期から第Ⅻ期にかけて、「協会編年」第Ⅷ期（加曾利E II式）から第Ⅸ期（加曾利E III式）の間に位置づけられるものであろう。

13区6号住居地 本住居地の床面からは第Ⅲ—2期に位置づけられる、大木8b式の系統を引くものと第Ⅵ—1期に位置づけられる資料が検出された。また、床面下より第Ⅶ期の資料が出土したことより、本住居地の年代は第Ⅶ期とした。「埼玉編年」の第Ⅻ期、「協会編年」の第Ⅸ期（加曾利E III式）に対比されるものと考えられよう。

13区8号住居址 本住居址の中央部には落ち込みがあり、本部分からは第VI期から第VII期のものが出土している。また、第VI-1期に位置づけられる埋甕が出土している。また、本住居址からは第VI期の良好な資料が出土している。床面からは第VI期から第VII期にかけての資料が多く出土した。これより、本住居址は第VII期に形成されたもので、構築年代は第VI期後半まで遡る可能性もあると推定した。これは、「埼玉編年」の第XIII期に、「協会編年」の第IX期（加曾利E III式）に対比されるものと考えた。

13区9号住居址 本住居址の床面からは第VI期と第VII期にかけての資料が出土した。これより、第VI期ないしは第VII期に位置づけられるものと解釈した。「埼玉編年」の第XIII期、「協会編年」の第IX期（加曾利E III式）に位置づけられよう。

13区10号住居址 本住居址の床面からは第IV期から第VI期の資料が出土している。これより、本住居址の年代は第VI期に位置づけられ、「埼玉編年」の第XII期、「協会編年」の第VIII期（加曾利E II式）に対比されよう。

13区11号住居址 本住居址は部分敷石であり、床面からは第VI-1群から第VIII群の資料が出土している。これより、本住居址は第VIII群に位置づけられ、「埼玉編年」の第XIV期、「協会編年」の第X期（加曾利E IV式）に対比される。

また、1号土坑は第VI-1期から第VII期、2号土坑は第VI期から第VIII期に位置づけられる。

以上、清里・長久保遺跡の13区からは10軒の住居址と2基の土坑が検出された。第IV期に位置づけられる住居址が1軒（1号住居址）、第VI期が2軒（2・10号住居址）、第VI期から第VII期にかけてが2軒（5・9号住居址）、第VII期が4軒（3・4・6・8号住居址）、第VIII期が1軒（11号住居址）であった。これより、清里・長久保遺跡13区の集落は第IV期から第VIII期にかけて形成されたものであり、最盛期は第VI期から第VII期にかけての時期であったと推定される。また、各時期の集落構成をみると、時期の古い段階のものは本残丘の西斜面から南斜面にかけて立地する。第VI期の住居は北東斜面にも構築されている。そして、最盛期の第VII期には本残丘の頂部をとり囲むように形成されている。第VIII期の加曾利E式終末期には北東斜面へと移動している状態がうかがわれる。

次に、集落の周辺部に形成されていた「土器だまり」について若干の検討を加えておきたい。「土器だまり」のうち最も集中的に多くの資料を出土したのは、C～F-7～9グリッドとB-12・13グリッド周辺部である。そして、10・11号住居址の位置する本残丘の北東斜面での出土量は少なかった。C～F-7～9グリッド出土資料には、少なからず第II期の資料も含まれている。これは、住居址より出土した資料と比較すると注目される。また、B-12・13グリッド周辺部からは第I期に位置づけられる資料を含み、第II期から第VI期の資料が量的には多く出土している。第VII期ないしは第VIII期の資料は減少する。この傾向は「土器だまり」から出土した資料の全体に共通していることと思われる。

なお、前記してきた住居址の年代は、今回報告した資料の分析により決定したものである。全出土資料の詳細な土器型式の分類をおこない決定したものではない。今後の資料検討により多少の変更が加わるかもしれないことを付記しておきたい。

(4) 石器の材質

長久保遺跡で確認された石器使用石材は不明のものを除くと41種類であった。そのうち、黒色頁岩が62%をしめていた。その他、輝石安山岩が14.6%、黒色安山岩とこれに類する灰色安山岩が9.4%であった。この4種類の石材が全体の86%を占めている。黒色頁岩は利根川の支流である赤谷川の上流地域に産出する岩石

第4章 ま と め

であり、群馬県の旧石器時代から縄文時代にかけて多用された石材である。また、黒色安山岩と灰色安山岩は同種類のものであるが、県内に黒色安山岩を産出する場所が一カ所だけでないことが判明したため、石材決定でも名称を区分してみた。灰色安山岩は黒色安山岩の中でも色調が灰色味をおびたものを指している。黒色安山岩ないしは灰色安山岩も黒色頁岩と同様に、群馬県内では多用された石材である。

その他、少量ではあるが赤色珪質岩や翡翠が混入している点は注目されよう。翡翠は明らかに他地域からの搬入品であるが、各遺跡で少量ながら出土する赤色珪質岩は特徴的なものであり、検討する必要がある。

清里・長久保遺跡 総出土石器の岩石種別 (%) = 出土総数に対する割合

岩石種類	住居址内	土器だまり	版組以外の数	合計・(%)	岩石種類	住居址内	土器だまり	版組以外の数	合計・(%)
黒色頁岩	84	65	993	1142(62.03)	珪質準片岩			2	2(0.11)
輝石安山岩	35	33	201	269(14.61)	石英斑岩			2	2(0.11)
黒色安山岩	7		88	95(5.16)	赤色珪質岩			2	2(0.11)
灰色安山岩	16	7	55	78(4.24)	花崗岩	1			1(0.05)
安山岩	19	5	15	39(2.12)	凝灰岩質砂岩	1			1(0.05)
輝緑岩	11	5	11	27(1.47)	珪質蛇紋岩	1			1(0.05)
砂岩	7	4	15	26(1.41)	点紋雲母石英片岩	1			1(0.05)
変質安山岩	1	4	20	25(1.36)	閃緑岩	1			1(0.05)
雲母石英片岩	4	1	17	22(1.20)	流紋岩質凝灰岩	1			1(0.05)
黒色片岩	2	2	10	14(0.76)	点紋頁岩 <small>(ホルンフェルス)</small>		1		1(0.05)
珪質頁岩	2		11	13(0.71)	デイサイト質凝灰岩		1		1(0.05)
石英閃緑岩	7	4	1	12(0.65)	翡翠		1		1(0.05)
緑色片岩	2		7	9(0.49)	変玄武岩		1		1(0.05)
黒曜石	1		8	9(0.49)	変質蛇紋岩		1		1(0.05)
点紋頁岩			8	8(0.43)	緑色準片岩		1		1(0.05)
ひん岩	1		6	7(0.38)	グラノファイアー			1	1(0.05)
変質玄武石			7	7(0.38)	変質岩			1	1(0.05)
緑色岩類	3		1	4(0.22)	変斑礫岩			1	1(0.05)
頁岩	1		3	4(0.22)	ホルンフェルス			1	1(0.05)
チャート			4	4(0.22)	不明			1	1(0.05)
溶結凝灰岩	2			2(0.11)					
変輝緑岩		2		2(0.11)					
合計	212	138	1501	1841 [≒] (100)					

(中東耕志)

第2節 古墳時代

古墳

1. 外部施設について

清里・長久保遺跡は午王頭川右岸に位置し陣場泥流丘が点在しており、これを利用して古墳が構築されている。又、約330m南西の位置の畑地に2基の古墳が存在している。開墾により削平が著しく、封土を除去された5・6・8・9・12号墳、僅かではあるが封土を残した1・2・10号墳、庚申塚1・2号墳、やや封土を残している3・4・7・11号墳とがある。庚申塚1・2号墳は平坦地に構築されたものである。又、午王頭川右岸に点在する陣場泥流丘を利用した古墳は、長久保遺跡1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12号墳である。頂部を利用したのが、1・2・5・6・7・8・9・12号墳、南緩斜面を利用したのが、3・4・10・11号墳である。これらの古墳は、自然丘を利用して構築された山寄せ古墳であり、墳丘の削平の度合に比較して、主体部の残りが良かったと考えられる。

墳丘の形成については、古墳構築時の地山を削り墳形を整えている。以下、各古墳について概略を述べる。

1・2号墳共に古墳構築時の地山を整形してテラス状の平坦面を造り出し、墳丘を整えている。

3号墳は陣場泥流丘の南緩斜面に築造されているため、南半部は残丘上の自然堆積土を削り出して墳形を整えているが、北半部では地山を削った形跡は未確認である。

4号墳は古墳構築時の地表を削り出して墳丘裾部を整形し、更にテラス状の平坦面を造り出している。地山を整形することにより、2段築造の墳丘の形態をとり、墳丘の見かけの高さを増す工法をとっている。

5号墳は封土が削平により残っておらず、墳丘裾部において地山を整形し、墳形を整えている。

6号墳は陣場泥流丘の頂部に構築されたが、破壊が著しいため詳細は不明である。

7号墳は墳丘の西側部分で、古墳構築時の地表を約15cm削り出し、幅1m程のテラス状の平坦地を作り裾方向に緩やかな墳丘を整形している。

8号墳の封土は全て失われており、陣場泥流丘そのものが墳形に手頃な大きさであったと考えられる。泥流丘を整形し、古墳としたものと推定される。

9号墳は封土の全てが削平されているが、古墳構築時に地山を削って墳丘裾部を整形したものである。

10号墳は墳丘の南半部が宅地により平夷されていた。残部も平夷されていたので詳細は不明である。

11号墳は古墳構築時の地表を削って墳丘裾部を整形し、その上に盛土した様子が判明している。

12号墳は陣場泥流丘を利用した古墳であるが、平夷が著しいため詳細は不明である。

庚申塚1号墳は南北径4.2m、東西径4.3m、高さ約1mの墳丘を残しており、浅間C軽石を含む黒色土層まで地業を行ない、構築面にして盛土をしている。

庚申塚2号墳は僅かに封土を残しており、FAを主体とした再堆積土層を構築面として盛土したものである。

陣場泥流丘を利用した古墳では、1・2・3・4・5・7・9・11号墳が地山を削って墳形を整えており、平夷が著しい6・8・10・12号墳も前古墳同様に地山を削って墳形を整えたであろうことが推定される。

尚、古墳構築にあたり地山を整形した古墳にあっても、陣場泥流丘の頂部を利用した古墳と泥流丘の南緩斜面を利用した古墳とは、整形の仕方が異なっている。つまり、頂部を利用した古墳では、陣場泥流丘の形状と古墳を築く位置とにより各古墳に多少の異なりはあるものの、主体部を中心として墳形を整えるよう

第4章 まとめ

に地山を整形している。南緩斜面を利用した古墳では、石室の前の整形は僅かであるが、これ以外の部分では整形を大にして墳形を築成している。

○墳形について

墳形については調査した14基の古墳の破壊が著しく、葺石や周堀の確認も判明しない古墳が多い。墳形の判明した古墳は6基にとどまざるをえなかった。その中で、1・2・3・10号墳、庚申塚1・2号墳が円墳であり、4・5・7・9号墳が円墳と推定され、6・8・11・12号墳は推定不可能の状況であった。

墳丘の規模についても墳形同様の状況にあり、又、墳丘断割りによる確認作業でも未確認であった。更に、墳丘の等高線測量にあたって、陣場泥流丘を利用して構築された古墳では、墳丘裾部が平夷されているため、明確に成し得ない要因ともなっている。かような状況下においての調査結果から墳丘の規模について計測すると下記の通りである。

1号墳	直径	約14m	高さ	約1.1m	8号墳	直径	約25m	高さ	約3m
2号墳	〃	約14m			9号墳	直径	約13m		
3号墳	〃	約16m			10号墳	直径	約12m		
4号墳	〃	約12.6m (周堀を含む)			11号墳		不明		
	墳丘部径	約8m			12号墳		不明		
5号墳	直径	約20m			庚申塚1号墳	直径	12.7m×12.6m		
6号墳	〃	約12m～15m			庚申塚2号墳	〃	約15.9m		
7号墳	〃	約12m							

墳丘の規模は上記の通りであり、5・8号墳が径20m以上である。8号墳が径25mを測るが、墳丘自体が陣場泥流丘であり、5号墳同様墳丘が他の古墳と比較して泥流丘の規模の大きいものを利用しているからである。墳丘を計測した他の古墳は、いずれも墳丘径が20m以下であるが、陣場泥流丘を利用していることにより、実質の墳丘以上に壮大に見えたのではなからうか。この想定があてはまるのであれば、この程度の規模の古墳で十分であったと考えられる。

○葺石について

葺石について確認されたのは、1・3号墳のみであり、7号墳及び庚申塚1号墳で存在が想定され、これ以外の古墳では未確認である。

1号墳では、古墳構築時での地山であるFAの切れる位置で、FA上に確認されている。

3号墳では、墳丘西側で、石室入口から葺石の根石が一部残存し、この根石は古墳構築時の地山上に置かれている。

7号墳は墳丘上の流れ込みの土層の中に、葺石に使用したと考えられる川原石が多数混入しており、更に庚申塚1号墳では、墳丘の西から北にかけての裾部分に石が据えられている。これは葺石の根石と考えられるが、葺石と判定する資料に乏しいため、断定は不可能である。

○周堀について

周堀について確認されたのは、4・10号墳・庚申塚1・2号墳の4基のみである。4・10号墳は陣場泥流丘の南緩斜面に、庚申塚1・2号墳は平坦地に位置している。

4号墳は墳丘南側を除いた部分で確認され、西及び東部分では明確に確認できたが、北側部分ではかなり浅い状況である。

10号墳は墳丘の北側部分でほぼ1/4が確認され、幅2m～3m程度であり、他の部分は削平が著しく未確認である。

庚申塚1号墳は墳丘の北・西・東部分で確認した。幅約1mである。南部分では未確認である。

庚申塚2号墳は「玦状周堀」が墳丘の東及び西部分で確認され、東部分では幅3.4m、深さ0.5m程度、西部分では幅3.8m、深さ0.2m程度である。

陣場泥流丘を利用して構築された12基の古墳のうち2基の古墳で周堀が確認され、他の10基については未確認である。庚申塚1・2号墳は、陣場泥流丘を利用して構築された古墳で最南端に位置する11号墳から、約330m南西に位置している。これらのことにより、この地域の古墳は周堀を伴わない傾向があるとは考え難い。むしろ、平坦地に構築された庚申塚1・2号墳や他地域の古墳同様に周堀を伴う慣習があり、これが4・10号墳の周堀につながるものと考えるのが妥当であろう。

○石室前の構造について

調査した14基の古墳のうち8基の古墳が、石室の前に何らかの構造をもっていた。1・2・6・7号墳は、石室入口から前方へ比較的狭い墓道状の遺構を有し、その先端については、1・2号墳が大きな広がりをもつ。7号墳は小さな広がりをもつ。特に1・7号墳は、墓道状の遺構の両側面に石積みをなし、その規模は、1号墳が石室入口で上幅約2m、下幅約1m、右壁側上端0.6m、下端0.5m、高さ1.6m、左壁側上端1.1m、下端0.4m、高さ1.35m、7号墳は、上幅約4.50m、下幅約2.0m、長さ約3.90m、深さ約2.10mである。更に両古墳共に石積みをせずに地山を掘り込んで造った墓道状の遺構が続き、両者を合計すると、1号墳の墓道状の遺構の長さは約5.5m、7号墳も約5.5mとなる。2号墳は破壊を受けているため全容は明らかではないが、調査時での計測値は、石室入口で上幅約2m、下幅約1m、長さ約4mである。尚、1・7号墳では墓道状の遺構内で石室入口前に長さ約1.9m、約2m、幅約1.0m、約0.7mの転石が置かれており、この転石が埋葬時等に何らかの機能を果たしていたことが想定される。

3・5号墳には石室の前に石積みをもつ前庭が付設されており、平面形は3号墳が長方形、5号墳が台形状をなしている。その計測値は、3号墳が右壁長2.70m、左壁長2.20m、奥幅3.45m、前幅3.65m、5号墳が、右壁長2.20m、左壁長1.85m、奥幅1.55m、前幅2.50mである。前庭の構築については、3号墳が石室入口の石組みを利用し、その前に付加し、5号墳は、石室入口の壁に付加した形をとっている。両側壁は3号墳が石室構築の掘り方の延長線上に位置しているが、5号墳は左壁が石室の左壁の延長線上であり、右壁は石室の右壁から約30度開いた形をとっている。

4号墳は、石室前に台形状の遺構をもつが、上部が平夷されているために上部の様相は不明であるが、石室入口を一石の大きな転石で閉塞し、この石から前方へと広がっている。従って、他の古墳と異なり、石室前の石組みや石室の側壁とやや離れた位置に存在する。

9号墳は、石室入口前に右側だけ石積みをもつ遺構を有している。本古墳は破壊が著しいため、詳細を明らかにすることが不可能であるが、この石室前の遺構は、石室構築の掘り方に続くものである。

石室の前に何らかの遺構をもつ古墳について、その概要を述べたが、これらの古墳に共通していることは、古墳構築時の地山を掘り込んで構築していることである。これは、これらの古墳が陣場泥流丘を利用して構築された山寄せ古墳に起因するものであり、平地に構築された古墳と異なった様相を呈している。

第4章 まとめ

これを大別すると、石室前に墓道状の遺構を有し、なお石積みをも有する古墳（1・7号墳）、前庭部を有する古墳（3・5号墳）、他に墓道状の遺構を有する古墳（2・6号墳）、台形状の遺構を有する古墳（4号墳）、片側だけに石積みをも有する古墳（9号墳）とである。

2. 主体部について

調査した古墳は程度の差はあれ破壊を受けていたが、平面形や壁体が判明した1・2・3・4・5・7・11号墳及び庚申塚1・2号墳の石室の構築をまとめると下記の通りである。

○1号墳

横穴式袖無型石室で、自然石を用材とした乱石積みの石室である。石室の平面形は、石室入口が最も狭く、順次奥が広い矩形であり、梱石により填塞部と埋葬部に区分している。埋葬部は奥壁下の幅を基準とし、この長さを一辺とした正方形をおよそ3個分合わせた広さをもつと推定される。填塞部は奥壁下の幅を一辺とした正方形2個分を合わせたと考えられるが、石室入口は奥と比較して、多少狭くなっている。又、埋葬部の左壁は中央部にやや広がり認められ、概して、左壁が右壁に比較して平面形に整然さがみられる。自然石を使用しているが、左右側壁の平面形を考えると、右壁は意図的に整然さに欠ける構築をしたとも考えられる。

○2号墳

横穴式袖無型石室で、自然石を用材とした石室であり、梱石により填塞部と埋葬部に区分している。石室の平面形は埋葬部の中央部がやや広く、石室入口が狭い矩形であり、奥壁下の幅を基準とし、この長さを一辺とした正方形3個分の位置に梱石を付設している。尚、右壁の中央部は壁石が除去され、根石痕が発見されたのみであるため詳細は不明である。填塞部は、石室入口が破壊されているので定かでないが、現状では埋葬部の基準とした長さを一辺とした正方形1個分の広さを計る。

○3号墳

横穴式両袖型石室で、自然石を用材とした乱石積みの石室である。玄室の構築は、奥壁下の幅を基準とし、その二等分線を石室の中心線(推定)とし、これに相対する位置に両側壁を築き、両側壁にやや胴張りの傾向を見せている。右壁は壁石の平面を用いて壁面を揃えている。右袖部は、左袖部より約0.14m石室の奥に位置し、根石2石で構築されている。羨道部の構築は、右壁が石室の中心線(推定)より3度外側に開いており、玄室と同様に壁石の平面を用いて壁面を揃えている。左壁は石室入口部分が破壊されているため定かでないが、石室の中心線(推定)とほぼ平行に構築されている。玄室部、羨道部共に、右壁は用材の平面を用いて壁面を揃えているが、左壁は用材の面が不揃いで凹凸を見せている。石室の平面形は、奥壁下の幅を基準とし、この長さを一辺とした正方形と、これの $\frac{1}{2}$ の長方形を合わせた広さで玄室を築き、羨道部は、玄室部の基準の $\frac{1}{2}$ を羨道幅とし、長さは玄室部の基準の長さの2倍として構築したと推定される。

本石室の構築にあたっては、側壁の用材の扱い方の違い、羨道両側壁が平行でないこと、両袖部の位置の違いにより左右対称となることを意識的に避けたと考えられる。

○4号墳

横穴式両袖型石室で、自然石を用材とした石室である。玄室の構築は、奥壁下の幅を基準とし、その二等分線を石室の中心線と仮定すると、これに相対する位置に両側壁を築き、整然とした平面形を示している。袖部は、右袖部が左袖部よりやや玄室の方向に位置する。羨道部は、玄室部で仮定した石室の中心線を基準とすると、右壁は3度外に開き、左壁はほぼ平行に構築している。右壁は用材の面を揃えているが、左壁は右壁に比較して不揃いの傾向が見られる。

石室の平面形については、奥壁下の幅を基準とし、玄室部はそれを一辺とした正方形2個分、羨道部は基準の長さの $\frac{2}{3}$ を幅とし、長さは玄室部の基準の2倍と $\frac{1}{3}$ を合わせたものと推定される。

本石室の構築にあたっては、両袖部の位置の違い、羨道部の位置と用材の扱い方の違いにより、左右対称となることを意識的に避けていると考えられる。

○5号墳

横穴式袖無型石室で、自然石を用材とした乱石積みの石室であり、梱石により填塞部と埋葬部とに区別されている。埋葬部は奥壁際が広く、梱石付近が狭くなる。左壁は奥壁にほぼ垂直で直線をなしているが、右壁は梱石付近が石室の内側に傾く傾向をもっている。填塞部については、左壁が埋葬部の右壁の延長線上にあり、右壁は左壁にほぼ平行に築かれている。

石室の平面形については、奥壁下の幅を基準とし、埋葬部はその基準の長さを一辺とした正方形2個分とそれの $\frac{1}{4}$ を加えた形をとり、羨道部は埋葬部で基準とした長さの $\frac{3}{4}$ を羨道の幅とし、その1.5倍の長さを羨道の長さとしたと推定される。

○7号墳

横穴式両袖型石室で、自然石を用材とした乱石積みの石室である。石室の構築については、奥壁と右壁との延長線の交点と、奥壁と左壁との交点とを基準としたと推定し、構築を考えることとする。奥壁は右壁寄りが張り出す。右壁は奥壁寄りが内側に張り出しており、左壁は用材の面を揃え、ほぼ直線的である。両袖部は右袖部が左袖部より内側に位置している。羨道部は石室入口が狭くなっている。

石室の平面形については、玄室部が上記の基準と考えた長さを一辺とした正方形1個とその $\frac{1}{2}$ を加えた広さもち、羨道部は玄室部で基準と考えた長さの $\frac{1}{2}$ を幅とし、約1.3倍を長さとしたと推定される。

本石室の構築にあたっては、玄室の奥壁の張り出し、右壁の内側への張り出し、両袖部の位置のずれをみると、左右対称になることを意識的に避けたものと推定される。

○11号墳

横穴式袖無型石室で、自然石を用材とした乱石積みの石室であり、梱石により填塞部と埋葬部とに区別されている。埋葬部は、左壁はほぼ直線的に築かれているが、右壁については、奥壁より約 $\frac{1}{5}$ が外に張り出した形となっている。填塞部は、埋葬部とは逆の様相を呈しており、左壁が平面形に凹凸が見られるが、右壁はほぼ直線的に築かれている。

石室の平面形については、奥壁下の幅を基準としたと仮定すると、埋葬部はその長さの3.5倍の位置に梱石を付設し、右壁の奥壁寄りを外側に張り出して石室を広くした感がある。填塞部は、埋葬部で仮定した基準の長さを幅とし、その2倍を長さとしたと推定される。

第4章 ま と め

○庚申塚1号墳

横穴式両袖型石室で、自然石を用材とした乱石積みの石室である。石室の平面形は長方形を呈しており、自然石を用材としているため、多少の凹凸が見られる。石室の構築は、奥壁下の幅を基準とし、その二等分線を石室の中心線と仮定すると、それに対称の位置に両側壁を築いている。玄室部については、上記の基準とした長さを短辺とし、それを一辺とした正方形の対角線の長さを長辺とした長方形の広さをもつ。羨道部は玄室部で基準とした長さの $\frac{1}{2}$ を幅としている。長さは石室入口が破壊されているため不明である。

○庚申塚2号墳

横穴式両袖型石室で、自然石を用材とした乱石積みの石室である。自然石を用材としているために平面形に凹凸が見られるが、玄室部は奥壁を短辺とし、両袖部を長辺とした台形を呈している。羨道部は、右壁はほぼ直線的であるが、左壁は弧を描くような平面形をなしている。

石室の平面形については、他の古墳と異なり、やや複雑な形をなしており、図面上に方眼を重ね操作し、奥壁下の幅を基準と仮定すると、玄室部は奥壁の左右隅から各々約4度外側へ開いた位置に両袖部を付設していることが推定される。仮定した基準の長さを短辺とし、その1.75倍を高さとした台形となると考えられ、羨道部は玄室部で基準と考えた長さの1.5倍を長さに、 $\frac{1}{2}$ を幅としたと推定される。

以上9基の古墳の石室について概略を述べたが、横穴式袖無型石室と横穴式両袖型石室についてまとめると以下の如くである。

(1) 横穴式袖無型石室

1・2・5・11号墳であり、石室は柵石により填塞部と埋葬部とに区分されている。填塞部は大小の転石により填塞されており、埋葬部からは人骨や遺物が出土している。石室の平面形は、基本的には奥壁寄りが広く、石室入口寄りになるにつれて狭くなる傾向を示しており、奥壁下の幅を石室構築の基準にしたと推定される。構築にあたっては、推定した基準の長さの整数倍で石室を構築したものと、そうでないものとに分けられる。石室に大きさの違いはあるが、平面形については、1・2・5号墳に類似性がみられるが、11号墳のみには埋葬部の右壁の奥壁寄りに張り出しの如き部分がある。

尚、石室の主軸方向については、1号墳 N-39°-W、2号墳 N-2°-W、5号墳 N-42°-W、11号墳 N-21°-Eであり、2・11号墳を除くと真北から西方向へ大きなずれが見られる。

(2) 横穴式両袖型石室

3・4・7号墳及び庚申塚1・2号墳が該当し、羨道部と玄室部とに区分されており、玄室部からは人骨、遺物が出土したが、羨道部は大小の転石により填塞されていた。石室の構築にあたっては、3・4号墳及び庚申塚1・2号墳が、奥壁下の幅を基準としたと推定される。石室の平面形については、庚申塚1号墳の石室入口付近が破壊のため明らかでないが、他の4基については、左右対称となることを意識的に避けているようである。つまり玄室部については、7号墳の両側壁と奥壁のずれ、3・4・7号墳及び庚申塚2号墳の両袖部の付設位置のずれがある。又、羨道部については、3・4号墳の右壁が外側へ開き、庚申塚2号墳の左壁が弧状となっている。このことについては、自然石を用材としているためのずれも考えられるが、用材の平面を利用して直線的な平面形を形づくっていることを考えると、用材の形に起因するところより、石室構築の際の考え方によるところが強いと考えられる。

尚、石室の主軸方向については、3号墳 N-7°-W、4号墳 N-1°-E、7号墳 N-27°-W、庚

申塚1号墳 N-0°-E、庚申塚2号墳 N-14°-Eとなり、かなりのばらつきがみられる。

○石室の企画性

調査した14基の古墳の石室の寸法を示すと下記の表の通りである。

単位=m

石室の規模													
古墳名	全長	羨道						玄室					
		左壁	中央	右壁	奥幅	前幅	最大幅	左壁	中央	右壁	奥幅	前幅	最大幅
1号墳	6.94	2.64	2.60	2.55	1.22	0.85		4.43	4.34	4.37	1.34	1.22	1.40
2号墳	5.76		1.76			1.19		4.15		4.03	1.36	1.19	
3号墳	5.87		3.60		0.87			2.40		2.25	1.85	1.80	1.95
4号墳	4.60	2.50		2.45	0.65	0.73		2.13		2.05	1.03	1.05	
5号墳	5.00	2.25	2.05	1.97		0.99		2.98	2.95	2.97	1.16	1.14	1.24
6号墳													
7号墳	6.67	2.76	2.87	3.04	1.24	0.94		3.76	3.80	3.72	1.75	1.98	2.06
8号墳													
9号墳													
10号墳											1.46		
11号墳	3.86	1.65	1.71	1.68	0.65	0.65		2.21	2.15	2.29	0.81	0.65	0.83
12号墳											0.85		
庚1号墳	4.73	1.74	1.74	1.25	0.95			2.95	2.95	3.03	0.85	2.00	2.09
庚2号墳	4.37	2.10	2.17	2.22	0.62	0.85	0.85	2.35	2.20	2.20	1.36	1.58	1.58

石室の企画について推定可能な古墳は、1・2・3・4・5・7・11号墳及び庚申塚1・2号墳の9基であり、石室の構築にあたっては、何らかの「ものさし」^註を用いたと考えられ、推定復元を試みると下記の通りである。

1号墳は高麗尺を使用し、石室全長700cm（高麗尺20尺）、填塞部長245cm（高麗尺7尺）、填塞部奥幅122.5cm（高麗尺3.5尺）、填塞部前幅105cm（高麗尺3尺）、埋葬部長455cm（高麗尺13尺）、埋葬部幅140cm（高麗尺4尺）。

2号墳は高麗尺を使用し、石室全長は石室入口の欠損のため不明、填塞部奥幅105cm（高麗尺3尺）、埋葬部長420cm（高麗尺12尺）、埋葬部奥幅140cm（高麗尺4尺）、埋葬部前幅105cm（高麗尺3尺）。

3号墳は唐尺を使用し、石室全長600cm（唐尺20尺）、玄室長240cm（唐尺8尺）、玄室幅180cm（唐尺6尺）、羨道長360cm（唐尺12尺）、羨道幅90cm（唐尺3尺）、両袖部を各々45cm（唐尺1.5尺）。

4号墳は高麗尺を使用し、石室全長455cm（高麗尺13尺）、玄室長210cm（高麗尺6尺）、玄室幅105cm（高麗尺3尺）、羨道長245cm（高麗尺7尺）、羨道幅70cm（高麗尺2尺）、両袖部を各々17.5cm（高麗尺0.5尺）。

5号墳は高麗尺を使用し、石室全長525cm（高麗尺15尺）、填塞部長210cm（高麗尺6尺）、填塞部幅105cm（高麗尺3尺）、埋葬部長315cm（高麗尺9尺）、埋葬部幅105cm（高麗尺3尺）。

7号墳は高麗尺を使用し、石室全長665cm（高麗尺19尺）、玄室長385cm（高麗尺11尺）、玄室幅210cm（高麗

第4章 まとめ

尺6尺)、羨道長280cm(高麗尺8尺)、羨道奥幅140cm(高麗尺4尺)、羨道前幅105cm(高麗尺3尺)、両袖部を各々35cm(高麗尺1尺)。

11号墳は高麗尺を使用し、石室全長385cm(高麗尺11尺)、填塞部長140cm(高麗尺4尺)、填塞部幅70cm(高麗尺2尺)、埋葬部長245cm(高麗尺7尺)、埋葬部幅70cm(高麗尺2尺)。

庚申塚1号墳は唐尺を使用し、石室入口が欠損のため石室全長と羨道長は不明。玄室長300cm(唐尺10尺)、玄室幅210cm(唐尺7尺)、羨道幅90cm(唐尺3尺)、両袖部を各々60cm(唐尺2尺)。

庚申塚2号墳は高麗尺を使用し、石室全長455cm(高麗尺13尺)、玄室長(右壁)227.5cm(高麗尺6.5尺)、玄室長(左壁)245cm(高麗尺7尺)、玄室奥幅140cm(高麗尺4尺)、玄室前幅175cm(高麗尺5尺)、羨道長(右壁)227.5cm(高麗尺6.5尺)、羨道長(左壁)210cm(高麗尺6尺)、羨道幅105cm(高麗尺3尺)、両袖部を各々35cm(高麗尺1尺)として、各々の石室を構築したものと推定される。

以上の9基の石室について推定復元を試みたわけであるが、平面図及び計測値とは一致していない点もある。石室の構築にあたって、自然石を用材としていること、陣場泥流丘を利用して築かれた古墳は、それを掘り込んで石室の掘り方としているために、構築に制限が加えられたであろうこと、更に前述の如く、石室構築にあたって、左右対称となることを意識的に避けている傾向が考えられること等によるものと考えられる。

上記の石室の埋葬部における幅と長さとの割合を示すと、1号墳 3.1倍、2号墳 3.0倍、3号墳 1.3倍、4号墳 1.9倍、5号墳 2.7倍、7号墳 2.0倍、11号墳 2.5倍、庚申塚1号墳 1.5倍、庚申塚2号墳 1.7倍の値となる。この値によって値の大きい順に古墳をおきかえると、1号墳、2号墳、5号墳、11号墳、7号墳、4号墳、庚申塚2号墳、庚申塚1号墳、3号墳となる。これらについて、出土遺物、地層及び火山噴出物等からの考察も考えると、本遺跡において復元可能な石室を有する古墳の構築は、ほぼ上記の順で築造されたと推定される。

以上、石室の企画性について論じたわけであるが、各古墳の築造年代については上記の事と合わせて考えると下記の通りである。

1号墳 6世紀末～7世紀初頭、2号墳 6世紀末～7世紀初頭、3号墳 7世紀末、4号墳 7世紀前半～7世紀中葉、5号墳 6世紀末、6号墳 不明、7号墳 6世紀末～7世紀初頭、8号墳 不明、9号墳 7世紀後半、10号墳 7世紀前半、11号墳 7世紀初頭～7世紀中葉、12号墳 7世紀前後、庚申塚1号墳 7世紀初頭～7世紀中葉、庚申塚2号墳 7世紀代と推定される。

註 推定復元可能な9基の古墳の石室には高麗尺、又は唐尺を使用したと推定される。しかし高麗尺は現在のものさしに換算して、35cm、唐尺は30cmとして考えたものである。

○主体部の掘り方について

調査した古墳で主体部を構築するにあたり、古墳構築時の地山を掘り込んでいる古墳については、下記のようなのである。(尚、測定場所は本来上場を測るべきであるが、削平部分が多いため下場を測定した。)

1号墳 平面形は、ほぼ隅丸の長方形を呈し、石室入口で開いた形となっている。主体部左右の掘り方は直線的であるが、奥壁側に向い僅かに広がる。規模は、長さが右壁側7.27m、左壁側7.52m、幅が奥壁側3.70m、石室入口3.40mを測る。

2号墳 平面形は、ほぼ隅丸の長方形を呈し、主体部左右の掘り方は直線的であるが、石室入口部分が階段状になっている。奥壁側は左壁側が僅かに外に張り出す形となっている。規模は、長さが右壁側5.

25m、階段状の部分6.25m、左壁側6.37m、幅が奥壁側3.10m、石室入口1.05mを測る。

3号墳 平面形は、ほぼ隅丸の長方形を呈し、石室入口が開いた形となっている。これは前庭部の掘り方につづくものである。右壁側は直線的、左壁側は袖部分が内側に僅かに張り出しており、奥壁側は左壁側が僅かに外に張り出す。規模は、長さが右壁側6.05m、左壁側5.92m、幅が奥壁側3.10m、石室入口3.45mを測る。

4号墳 平面形は、隅丸の長方形を呈す。規模は、長さが右壁側4.55m、左壁側4.73m、幅が奥壁側2.25m、石室入口2.23mを測る。

5号墳 平面形は、ほぼ隅丸の長方形を呈し、石室入口で開いた形となっている。掘り方は左右壁とも直線的であるが、石室入口部分が内側に曲がっている。奥壁側は左壁側が僅かに外に張り出す。規模は、長さが右壁側4.20m、4.70m、左壁側5.15m、幅が奥壁側2.88m、石室入口1.80mを測る。

6号墳 平面形は、ほぼ隅丸の長方形を呈し、石室外へと続いている。両側壁側は直線をなし、石室入口部分が内側に曲がり、奥壁側は左壁側で僅かに張り出す。規模は、長さが右壁側3.35m、左壁側4.08m、幅が奥壁側2.38m、石室入口2.28mを測る。

7号墳 平面形は、ほぼ隅丸の長方形を呈し、前庭部の掘り方へと続く。右壁側はゆるく外に張り、左壁側はほぼ直線であり、石室入口部分両壁とも内側に曲がる。規模は、長さが右壁側7.30m、左壁側7.00m、幅が奥壁側3.68m、石室入口2.45mを測る。

11号墳 平面形は、ほぼ隅丸の長方形を呈するが、多少の歪みをもっている。規模は、長さが右壁側3.65m、左壁側3.75m、幅が奥壁側1.97m、石室入口2.10mを測る。

庚申塚2号墳 平面形は、ほぼ隅丸の長方形を呈し、石室入口が開いた形となっている。左右壁ともほぼ直線である。規模は、長さが右壁側5.70m、左壁側5.67m、幅が奥壁側4.28m、石室入口3.70mを測る。

各古墳の掘り方について記したが、平面形については、ほぼ隅丸の長方形を呈しており、各々に多少の歪み等をもって壁石を囲むような形のもの、石室入口部分で切れる形のもの、石室入口から前方へと延びる形のものに分けることができる。掘り方の法面は傾斜しており、法面と壁石については、1・2・3・4・5号墳がある程度の空間をもつが、6・7号墳は殆ど空間をもたない状況である。

掘り方の平面図に30cmと35cmの方眼をのせ操作すると、下記の結果が得られる。

掘り方の構築にあたっては、掘り方のコーナーを基準としたと想定され、直線的に掘ったものが主である。35cm方眼にあう古墳（1・2・4・5・7・11号墳・庚申塚2号墳）、30cm方眼にあう古墳（3号墳）とに分けることができる。このことより、掘り方の構築には企画性をもたせて行ない、石室の構築とも関係するようであり、掘り方と石室の構築とが同じ「ものさし」を使用して行なったことが推定される。

各々の古墳については、1号墳は長さが35cmの22倍、幅が11倍、2号墳は長さが35cmの19倍、幅が9倍、3号墳は長さが30cmの21倍、幅が11倍、4号墳は長さが35cmの14.5倍、幅が7倍、5号墳は長さが35cmの16倍、幅が8.5倍、6号墳は長さが35cmの12倍、幅が7倍、7号墳は長さが35cmの22倍、幅が11倍、11号墳は長さが35cmの12倍、幅が6倍、庚申塚2号墳は長さが35cmの17倍、幅が12倍であると推定される。

3. 古墳の構築について

前述の如く、調査した全古墳が破壊が著しいために残存状態ははかばかしくないが、本遺跡における自然丘を利用して構築された古墳の築造について、1号墳及び7号墳を例として述べる。

1号墳は陣場泥流丘の頂部を利用して構築された古墳であるが、主体部は頂部から東南緩斜面を利用して

第4章 まとめ

おり、古墳構築の地表面はFA上に推積したFAを含む灰褐色土層である。墳形の整形については、「1、外部施設について」で述べた通りである。主体部構築のために旧地表面である灰褐色土層から掘り込み、B及びDトレンチでは深さ1.30m～1.55mで内反りに、Cトレンチでは深さ2.20m～2.50mで外反りに弧を描くように掘り方を築いている。石室と掘り方については、Bトレンチ及びDトレンチでは掘り方の上面から石室の床下構造の基底部まで1.55mであり、天井石上部までが1.10m、又、Cトレンチでは、石室の床下構造の基底部まで2.50m、天井石上部までが0.6mである。

主体部の設置状況は、古墳の横断面によると、右壁は掘り方の法面から1.5mの地点を石室の壁面とし、壁石は輝石安山岩の自然石で三角形状である。壁石の平面を壁面とするために三角形状の壁石を立てて設置し、その不安定さを解消するために壁石の背後の下の部分に小ぶりの石をさし込み安定させている。側壁及び奥壁の最下段には大きな壁石を用い、順次積み上げ、天井石の部分では小ぶりの自然石を用いている。掘り方の存在する部分については、法面と壁石との空間を裏込めで埋填し、掘り方の法面を裏込め被覆として使用している。掘り方のない部分については、壁石の背後を裏込めで充填し、その外側に裏込め被覆を施し、この外側に盛土している。

盛土の状況は、ロームを含んだ褐色土を主体として斜め積みをしており、石室上部を粘土で覆い、更に盛土している。Bトレンチ（石室右壁側）では、二層の盛土をほぼ水平に行ない、Dトレンチ（石室左壁側）では、裏込め被覆より石室の外側へ斜めに盛土し、裏込め被覆の上部でほぼ水平にしている。この盛土上に天井石を覆うように水平に盛土し、更にこの上部に墳丘を整えるように盛土をなしたものである。

古墳の縦断面によると、石室の壁面を大にするため壁石を立てて使用し、掘り方の法面との空間を裏込めで充填し、掘り方の下底から垂直に上方1.30mまでは掘り方の法面を裏込め被覆として利用し、この上に裏込め被覆が覆っている。掘り方の上半部の法面が外反りしているため、法面と裏込め被覆との空間にローム塊を含んだ灰褐色土を充填させ上面をほぼ水平にし、この上に石室を覆うように封土を斜めに積み上げている。

石室の構築にあたっては、壁面を平面的に広く築く必要があるため、壁の裏側は非常に不安定な状態にある。そのため、適当な大きさの川原石を壁石の間隙にさし込み安定性を増している。又、天井石の架構については、両側壁と奥壁とにわずかに架構されているのみで、壁石の間隙にさし込まれた小ぶりの川原石を除去すると、そこに間隙が生じ千数百年間、崩壊せずに今日までその姿を保ったと感心せざるをえない。このことにより、石室は天井石の下への重圧により支えられていると考えられ、更に当時の高度な技術に驚嘆を禁じえないと共に、天井石が除去された石室が簡単に崩壊するであろうことが推察される。

7号墳は、1号墳同様に陣場泥流丘の頂部を利用して構築された古墳で、主体部は頂部から東南緩斜面を利用しており、古墳構築時の地表はFA上に推積したFAを含む灰褐色系の土層である。墳丘の整形については「1、外部施設について」で述べた通りである。古墳構築時の地山を削り掘り方を築き、古墳の横断面では深さ1.45m～1.65mで、右壁側は法面に凹凸がみられ、両側壁側共に底部のコーナーは丸味をおびている。壁面から掘り方の法面までは、右壁側が1.30m、左壁側が1.45mを測る。壁石を積み上げるにあたり、1号墳同様に壁石の不安定さを防ぐために、壁石の間隙に小石をはさんでいる。壁石の裏側には、裏込めを施すと同時に土による充填が数回行なわれ、掘り方内には裏込め被覆が存在しない。掘り方の上方になると、裏込め、土の充填を行ない、その外側に裏込め被覆をし、地山の上に斜めに盛土している。

古墳の縦断面では、奥壁の裏側の掘り方の法面が外側に43度の傾斜をもち、深さは1.65m～1.70mで裏込めと土の充填、法面の利用は横断面と同じ工法をとっている。

4. 結

清里・長久保遺跡は、榛名山東南麓に源流を求め東南流し利根川にそそぐ午王頭川と八幡川とによって分断された標高約165mの台地上で、午王頭川の右岸に位置し、陣場泥流丘が点在している。この陣場泥流丘を利用して構築された12基の古墳と、南西約330mの位置に存在している清里・庚申塚遺跡の2基の古墳について調査した。古墳構築時の地山には、浅間山C軽石、榛名山FA・FPが確認され、本遺跡の古墳の究明に示唆を与えている。

陣場泥流丘を利用して構築された古墳は山寄せ古墳で、泥流丘の頂部又は南緩斜面を利用しており、地形を利用して構築された古墳の特徴をよく残している。

- 墳丘は陣場泥流丘が大部分を占め、盛土は比較的少ない。
- 墳丘は陣場泥流丘を削り整形し、墳丘としての形を造り出している。
- 石室は陣場泥流丘を掘り込んで構築している。
- 裏込めは比較的薄く、裏込め被覆は陣場泥流丘を掘り込んだ部分には存在せず、盛土部分のみに存在する。
- 石室前特殊構造は陣場泥流丘を掘り込んで構築している。

内部構造については横穴式石室を有し、袖無型と両袖型、不明とに分けることができる。横穴式袖無型石室では、平面形が類似していること、石室を構築するのに企画性をもっていること、側壁の方向性のずれがあり、横穴式両袖型石室では、構築にあたって企画性をもたせていること、壁の方向性のずれ、袖部のずれがあげられる。従って、石室の構築にあたっては、企画性をもたせ、左右対称を意識的に避ける構築法をとっていたと推定される。

陣場泥流丘を利用した12基の古墳は、すべて後世の何らかの破壊を受けており、構築時の姿そのものではないが、現状においては、円墳ないしはそれと推定でき、横穴式石室を有していた。石室については、袖無型石室と両袖型石室とがほぼ時期を同じにして築きはじめられ、やがて両袖型石室のみとなる。本遺跡の古墳の構築は、陣場泥流丘の頂部から南緩斜面へと移行したものと考えられる。その時期は、前者が6世紀末～7世紀初頭、後者は7世紀初頭～7世紀末に比定されるであろう。(細野雅男)

第3節 歴史時代

清里・長久保遺跡で検出した歴史時代の遺構は、13区7号住居址 (Fig. 212・213・214, PL. 94—1～6)

1号墓壇 (Fig. 215・216・PL. 95—1～5) 2号墓壇 (Fig. 217・218, PL. 96—1・2) である。

7号住居址からは「コ」の字状口縁を有す甕、羽釜、糸切底に高台を付けた杯、灰釉陶器の椀を従来の編年から概ね10世紀中頃と考える。

1号墓壇からは緑釉陶器の輪花椀、輪花皿、土師器内黒の杯、灰釉陶器の耳皿と角釘が出土している。緑釉陶器の輪花の入れ方や折り口皿の立ち上がりの特色から小塩産の可能性があると^{註1}の指摘を受けた。概ね光ヶ丘～大原2期にかけて比定できることより、10世紀中～後半にかけてと考えている。

また、近接する清里・陣場遺跡出土の中にも同期の遺物を見る^{註2}ことができる。

2号墓壇内からは釘の出土があったが、土壇の形態から1号墓壇と同じ性格としてとらえることができよう。(相京)

註1 松沢 修氏の御教示による。

2 中沢 悟 『清里・陣場遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982. 3. 31

第4章 まとめ

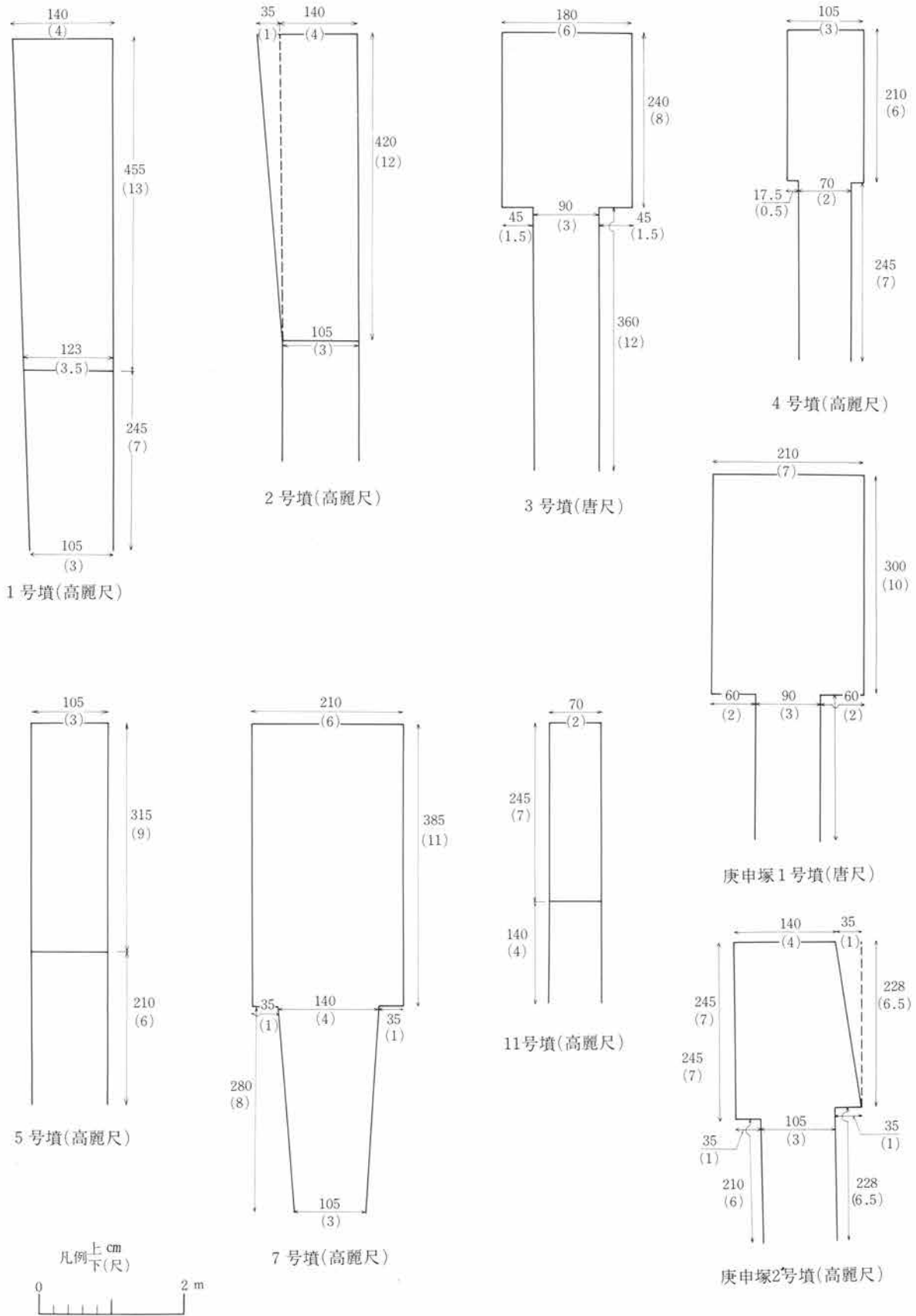


Fig. 220 各古墳の企画

第5章 付 編

第1節 清里・長久保遺跡7号墳出土の小^{ちいさがたな}刀の研磨について

——群埋文第1号刀の研磨——

はじめに

整理担当者から7号墳 Fig. 176—1 に示された小刀について研磨依頼があり、本稿はそれを受けて実施した結果報告である。その依頼目的、経過については次のとおりである。

整理担当者から金属器を実見し、整理上に寄与して欲しいとの申し込みがあったため細かな金属製品を除外し、大刀、小刀についてのみ実見した。大刀類は板目から流れごろに錆化が進み、我々が日頃、見慣れた刀姿と錆化状態であった。しかし Fig. 176—1 刀は保存処理後であったが、身の中程で径約7mmの柰目状を、その上、下で柰目から流れ込むようにして板目状を、切先にかけては流れごろとなった柰目状を呈する状態を観察し得た (Fig. 221—2)。その様は、前2例の大刀や他例の大刀に比べ極めて質の高い精鍛造によることを示していた。さらに Fig. 221—2 矢印から切先にかけて外反りがやや顕著になり、強い焼き入れを行なった可能性が窺えた。

この種の大きさの造込みに必ずしも明確な規定はないが関保之助・尾崎元春氏が『日本書紀』崇峻天皇紀『延喜式』弾正台の記事を用い推定された「ここにいう小刀、すなわち大型の刀子であると思われ (中略) 小刀を訓読して「ちいさがたな」という (以下略)」に相当してよいと考えられ、本稿の7号墳出土の Fig. 176—1 の種呼称を小刀としたのはそれによる。⁽²⁾ また両氏は「これらの大型刀子は献物帳に注してある小刀という式に当ててよい」としておられ、大型刀子という呼称であっても良いと思われる。⁽³⁾ 両氏の考え方は『東大寺献物帳』にある「金銀作小刀一口 (以下略)」を解釈する際に述べられたものである。

大刀が旧時において儀仗のため一時的佩用であったのに対し、小刀は身を守るため公・私に常佩用し、その質は佩用者の階層に通じていること、この小刀の外見的所見である精鍛造で強い焼き入れを行なった可能性のあることを担当者に伝え、合わせてX線の透視の結果において地金の遺存が良好なら研磨の必要性を加えた。研磨の必要性は正倉院刀前代の刀剣に研出し例は少なく、蕨手刀を除き未だ全体傾向を把握しようとする気運は感じられず、今日の冶金科学の深化と現状の考古学における鉄器研究の位置とは余りにもへだたりにあり、ましてやその中から地域傾向や当時の流通機構を知るは無理・難題としか言いようがない。この意味において正倉院刀前代の刀剣に研磨の必要性が生じる。その後、X線撮影の結果は PL. 98—1 のとおり、良好であったため、研磨を依頼された。結果は以下のとおりであった。

1. X線透視

X線撮影は当事業団保存処理室においてソフテックスM—1005特型により電圧80K. V. P、電流3mA、露出10分、距離60cmの強い透視と電圧60K. V. P、電流3mA、露出4分の弱い透視を行なった。前者は芯に近い地金の遺存を見るためであり、後者は刃先の薄い個所の状況を知るためである。PL. 98—1 は弱透視で刃部に細かな巣が入っているのが判かる。大きな錆込みは鉤元の刃部、切先手前刃部、中央よりやや上方の3ヶ所に認められる。この状態は、かつてX線透視を行なった大刀に見る筋状の錆込み、筋状の地金の遺存とは異なり、極めて程度のよい遺存であるのが判った。しかしX線撮影像の輪郭は甘くソフテックスに限界を感じる。

2. 研 磨

砥ぎ出しに当たってはX線透視と肉眼観察から、佩裏の遺存が良いと判断されたので、佩裏を研ぐことと

し、佩表、棟の砥ぎ出しは行なっていない。

研磨に用いた砥石は、組成1000番、やや軟質の合成砥で荒砥ぎを行なった。約4時間経過し、ようやく鰻元から5cmの個所で地金が現われ点となった。それ以降、黒紫色の地金上の錆は硬く、地金よりやや硬めかほぼ同じであった。研出し始め、刀身中程に歪みが認められたため歪み成りに研磨したが、歪みの最深部の錆を取り除こうとすると刀身が消耗するのでこれを止めた。荒砥ぎの終了は平を平面的に見た場合、現われた刃先、棟端などの現形が損耗しない範囲に留めて終了した。また平造りの平に肉置きがあったかは、錆化のため明瞭でなかったが切先の約10cmは旧時にあっても肉置きがなければ身瘦の切先となり、機能を損うので肉置きがなされていたと考えられ、研磨時にその矛盾は見られなかった。なおこの荒砥ぎに12時間を要している。

仕上げは金肌を用いて行なうぬぐいや、磨棒を用いるなど美術的な所作は行なわずに内曇砥ぎ段階に留めて終了した。用意した砥石は内曇砥。鳴滝砥木葉の軟、硬数種である。砥当りは全面に対し、刃砥に用いるやや軟質の内曇砥から受けつけた。

この研磨過程を通じ正倉院刀の砥石当りとを比較すれば、正倉院刀全般が無類に柔らかい⁽⁵⁾のに対し、やや硬目を感じた。それらは地沸等による硬さであるかもしれない。ただし錆部に当る際の当りの悪さを差引いたとしてもである。

研磨上の問題点は、本刀の研出しが再研を意識して浅く終了しているので、今後、歪み直しを行ない、研磨師による再研磨が望まれる。その際、現代の美術意識の基に研ぎ上げるかは別問題であろう。

3. 研 磨 結 果

刀姿(形状) 平棟平作りであり、肉置きは切先手前約10cmから切先にかけて置かれていた可能性が強い。

反りは1.75mmの外反りで、棟区より12cmの位置が最も深い。反りの割り合は切先側上半の方が深く、研出し前に、想定したとおりであった。なお切先についてはやや内反り気味である。ふくらは切先端で最もつき、中途は形状良好である。物打ちから刃区までは錆化しているが棟の反りに則して外反する傾向にある。重ねは研磨した状態どころ合いであるが本来は錆化損耗分が加わりいく分、厚かったであろう。

鍛 鍛は研出し前に観察したとおり、切先側約10cmについて大板目となり中程は大板目からやや大きめの杢目となり、鰻元で大板目流れどころとなる。鍛肌はいずれもつき、鰻元と切先刃側でやや肌だつ。これらの鍛目の状態は佩表側の錆化状態と共通する。また棟に顕著な錆割れはない。全体に地沸が入り、地景がはたらく。

刃文 刃文は全体に湾れ互目がまじる。刃部は錆化し不明瞭部もあるが刃区より2cmから以下が焼落されている。刃文は切先手前5cmまで湾れ互目まじりに入り、帽子は尖りに帰き掛けがかりやや刃側に焼き込み、棟側に深く落ちる。さらに帽子の反りは切先から13cmのところまで反り、沸づいた激しい掃き掛けの尖り帽子である。波文を形成している全体は沸出来で、砂流し、金筋などが見られる。

茎 栗尻

実測図 Fig. 221-1はX線撮影により輪郭線の補正を行なった。主な補正は切先端部で、鋒やや枯ところを、やや附にした。地刃の作成はトレースコープ用(ネガ)フジQNL-150、(ポジ)フジQP-150を用いた低感度の写真撮影であり、補正実測図内に印画紙を嵌め込んだものである。網版の抜けている個所は錆部である。Fig. 221-2は研出し前の肉眼観察した錆化状態である。錆状態は研出した地肌とさほど変わっていないが、錆化の方がかえって細く出る傾向にあった。

4. 考 察

研磨の結果、本刀は鍛目に槽滓が少なく精鍛造であり、鍛目に沿って生じた金筋、砂走りなど激しい焼き入れなどからすれば適切な焼き入れ処理であったとすることができ、偶然が重んでこの結果になったとは考え難い。よってそうした相乗作用を生みうるのは完成状態を見越した配慮の結果であると考えられ、そうした配慮を想定しうるのは良工であると判断される。よって本刀を良作として考えたい。次に研磨された他例と比較したい。

鍛肌はつみ、刃文に沸から地景まで発達した湾れ互目がかかる点は、正倉院刀の出来のすぐれた大刀に類似した上手な手法である。波文が整然としないのは前代に通ずる古拙な正倉院大刀7号の切先部、再刃の可能性のある無荘刀27号などに、やや似た面があるが地刃の区別がなされている点は異なる。石井昌国氏が紹介した12例のうち、7世紀以前の平造大刀（直刀）4例は大板目か柾目大肌、小板目に鍛られ、鍛え回数が少ないように感じられ、金筋をまじえるほどの沸はないようである。しかし本刀は鍛え、焼き入れともに勝れた出来であり、古墳時代の当代にあっても良工の一振であったと思われる。これらのことからすれば群馬県における7世紀前半代に小鍛冶遺構は存在するものこうした良作は地方出来でなく畿内からの搬入製品だったのではないだろうか。ただ気にかかる点は、蕨手刀⁽⁴⁾を考える時、その研磨例中に畿内で製作されたと考えられる正倉院大刀8号、長野県長門町出土の2例と「埋鏢」と称された弱い皆焼状の焼刃を持つ6例との間に本刀と共通性のある地沸を強くした大肌に乱又は皆焼の一群がある。それは宮城県栗原郡根岸に1例と計らずも群馬県に2例存在している（Fig. 221—5～7）。そして蕨手刀の初源について石井昌国氏は「その始源はひとまず関東・中部地方に求めたくなる。」とし、このことを解釈すれば蕨手刀の大半は地方で製作されたことになり、本刀との共通性のある一群も地方出来であり、ひいては上毛野でも製作された可能性が生じてくる。本刀は7世紀代の製作であって蕨手刀の製作された8世紀から9世紀初頭とは1世紀強の年代差があるが、両者の技法は一派通じるものがあり、本刀はその技法の淵源であるかもしれない。それを考慮すれば、必ずしも畿内からの搬入と断ずる訳にもゆかないのであり、今後の課題となるところである。

将来、こうした追究がなされて行く場合には、本刀は指標型となるので当団における研磨刀として別称「群埋文第1号刀」と呼称したい。

なお本稿を作成するに当り、刀剣研師関根貞雄氏の御教導をいただいた。感謝申し上げる。（大江正行）

註 (1) 関保之助、校訂・増補一尾崎元春「奈良朝時代の外装」『新版日本刀講座〈外装編〉』雄山閣 1968

(2) 律令制に規制された常佩用は刀子で、「延喜式」等に刀子に対し必要以上の規制を加えた記事が散見する。このことから階位規制の外に常佩用がもたらす危害を感じることができる。特権層は別として長刀子・小刀を常佩用してよいという記事は「延喜式」彈正台にある侍衛の武官に五寸以上の長刀子を佩るのを許す記事を除いて管見に触れていない。このため小刀が古代史料に余り現われないのは、おそらくは律令制の先がけとなる大化改新前後において、既に小刀に対し何らかの規制があり、奈良時代に至って特権層あるいは工具として用いる小刀は例外として大半はその名義とともに姿を消したものと考えられる。こう解釈すれば古墳からは小刀は出土するが、それ以降、平安時代前期までの間に出土例が稀であるのも理解でき、さらに本級の消長は、刀剣史上・一面期を画することになる。本稿はそうした背景を考慮に入れ、名称に小刀を選んだ。なお上代武具を研究された後藤守一氏は本級を刀子とし、石井昌国氏も刀子の範疇に入れておられる。

後藤守一「原始時代の武器と武装」（考古学講座）雄山閣 1936

石井昌国「出土刀」『新版考古学講座7〈有史文化（下）〉』雄山閣 1970

(3) 「小刀」は古語名称であり、「大型刀子」は大型が考古学上の實用もしくは現代語であり刀子は古語であるから古語と實用、現代語との折衷名称で、厳密さに欠ける面がある。

(4) 石井昌国「蕨手刀」雄山閣 1966

(5) 本間順治「正倉院の刀剣」『正倉院の刀剣』（正倉院事務所編集）日本経済新聞 1974

小野光敬「研磨」『正倉院の匠たち』（青山茂編）草思社 1983

(6) （正倉院事務所編集）『正倉院の刀剣』日本経済新聞 1974

(7) 石井昌国「出土刀」『新版考古学講座7〈有史文化（下）〉』雄山閣 1970

かつて見たことのある部分研ぎの古墳出土大刀数例は、柾目槽滓が多く、地刃とが不明瞭で石井氏が紹介した例と異なっていた。このことからすれば、地刃、鍛えの実態の幅はさらに広そうである。

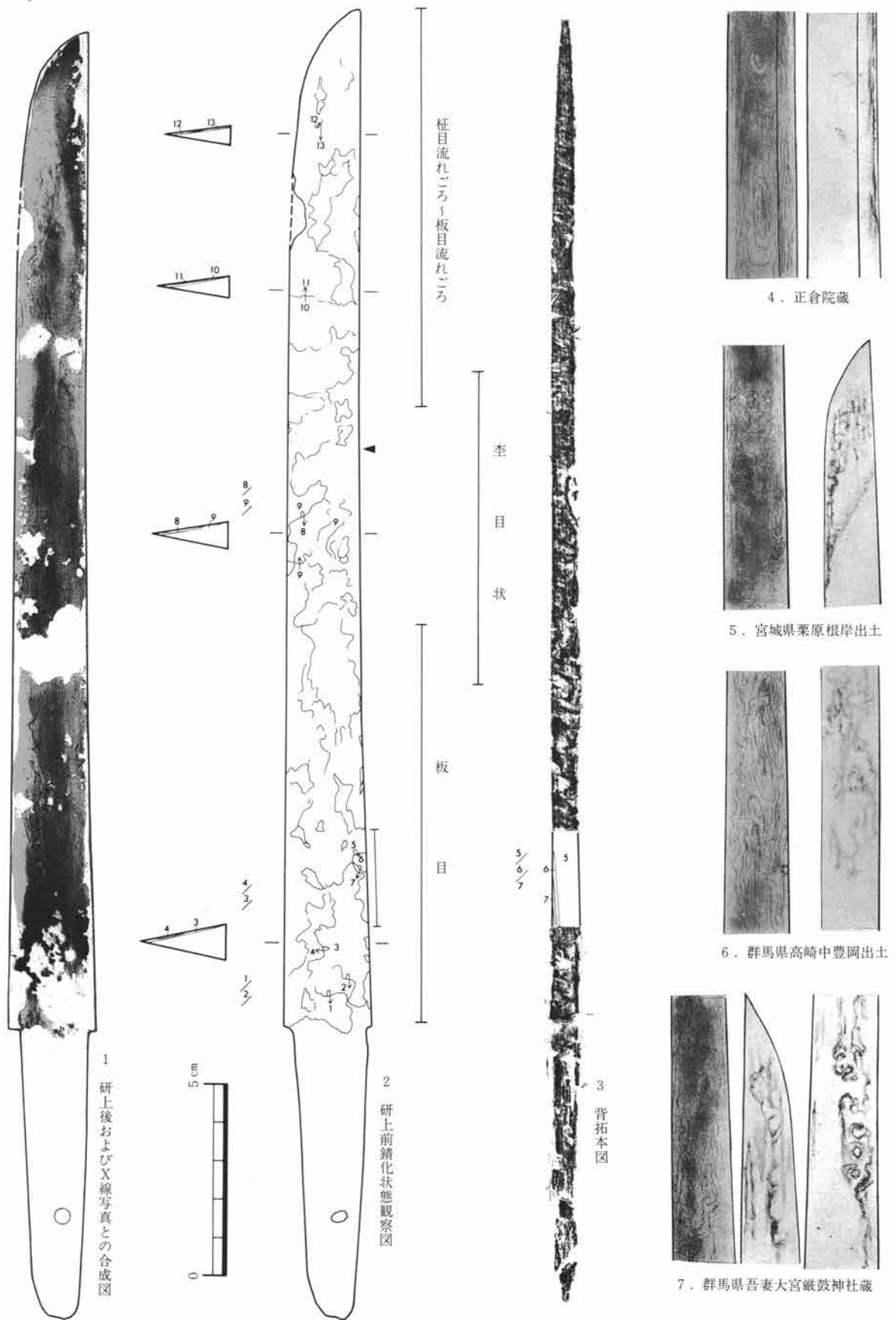


Fig. 221 7号墳石室内出土小刀実測図

第2節 清里・長久保遺跡および清里・庚申塚遺跡の古墳出土人骨

1. 緒言

群馬県前橋市の清里・庚申塚遺跡、清里・長久保遺跡は、群馬県埋蔵文化財調査事業団によって昭和54・55年度に発掘調査された。昭和54年度には庚申塚遺跡中の1基の古墳(1号墳)から人骨と歯が検出された。また昭和55年度より調査された長久保遺跡の12基の古墳群のうち5基(1・2・5・6・9号墳)、併行して調査された庚申塚遺跡中の別の古墳1基(2号墳)からも少量の人骨と歯が検出された。

これらの人骨および歯について、同事業団から調査を依頼された。このうち庚申塚1号墳出土のものは昭和56年に、長久保遺跡の古墳群および庚申塚2号墳出土のものは昭和59年に、それぞれ筆者の所属する国立科学博物館の新宿分館に搬入された。これらを観察して得られた所見をここに一括して報告する。

2. 清里・長久保遺跡

清里・長久保1号墳出土人骨

(1) 保存状態と出土状態

保存は不良で、小骨片と歯を残すのみであり、歯も多くは歯冠のエナメル質だけが残存する。これらの遺残は他の遺物とともに番号・記号を付して採取された。これらの遺物のうち鉄器・土器は数字で、人骨および歯はイロハ記号で表わされている(Fig. 128)。人骨および歯の出土地点は40箇所であったが、細かな破片まで含まれており、判定不可能なものも多く、以下15点のみ判定可能であった。記号イは人骨で、やや大きい破片を主とする数個の骨片より成り、アクリル樹脂溶液(商品名アクリロイドB-72)で補強処理されていた。その他ロからヨまでが歯であり、そのうち、ロからトまでが石室内覆土(床面から上位17cmまでの間)から、チからヨまでが床面直上から出土したものであった。

実測図によると、これらの石室内の位置は中央やや左寄りに最も密集しているが、一部は奥壁にかけて広く散在し、とくに歯は奥寄りから発見されたものが多い。しかしこれらの小さい骨片や歯の位置から、被葬者の個体的異同や位置関係を推測することはほとんど不可能である。

人骨破片の数は多いが分量は全部で両手に載るほどであり、多くは数cm以下の細片で、しかも侵蝕によって骨の表面が剥落したり、粗い凹凸を生じているものが多い。したがって形態特徴を知ることは困難であるから、骨については概観を述べるに留め、歯の所見に主眼を置くことにする。

(2) 人骨の所見

人骨はすべて四肢の長管骨の破片で、頭蓋や体幹骨は認められない。最大の破片はイのうちの1個で、これは数個の破片を接着して長さ約15.5cmの1個の破片に復元したものである。幅は最大の部分で約2.3cmある。この骨片は右側脛骨骨体の内側面の一部に相当し、形態特徴はほとんど不明であるが、微密質はかなり厚い。

他の骨片を通覧すると、大部分は大腿骨および脛骨などの大きい骨の小片と考えられるもので、上腕骨やそれより小さい骨の破片と考えられるものは僅かである。これらの破片のほとんど全部に共通して認められることは、骨質がかなり厚い点である。このことは所属個体が骨の強壯な成年男性であることを推定させるが、この点で明らかに特徴の異なる骨片は見られないので、個体数が1体であるのか、それとも複数であるのかは、骨の所見のみでは明らかでない。

(3) 歯の所見

歯については以下に口からヨの順に観察結果を列記する。

ロ : 下右第1大臼歯歯冠で、内部に象牙質を残す。大きさは大きく、5咬頭性で、咬合面の溝は+型である。咬耗は頬側に強く、Brocaの2度に達する。

ハ : 大臼歯歯冠エナメル質の破片2個で、歯種は不明である。咬耗は強い。

ニ : 上右第3大臼歯歯冠で、歯根は歯頸部付近から折損している。遠心部が退化し、3咬頭性に近い。咬耗はあるが1度に留まっている。

ホ : 下左第2小臼歯歯冠で、内部に象牙質を残す。大きく、舌側咬頭は1個である。咬耗は軽度である。

ヘ : 下左第3大臼歯歯冠で、内部に象牙質を残す。かなり大きいのが、咬頭と溝の排列が乱れている。咬耗は軽度である。

ト : 上左第2大臼歯歯冠で、歯頸部付近および近心部が破損している。遠心舌側咬頭は小さい。咬耗は1度であるが咬合面の広い範囲に存在する。

チ : 上左第3大臼歯歯冠。3咬頭性で、近遠心径が小さい。咬耗は軽度である。

リ : 上右第1大臼歯歯冠。近遠心径に比して頬舌径が大きい。咬耗は広範囲に及んでいる。

ヌ : 下左第2大臼歯歯冠で、内部に象牙質を残す。大きさは中等であるが、頬舌径がやや大きく、咬合面の溝は+型で、4咬頭性である。咬耗は強く、進行した2度と見なされる。

ル : 上右第2乳臼歯歯冠で、内部に象牙質を残す。大きさは中等であるが、遠心舌側咬頭は小さい。咬耗は軽度である。遠心面に磨耗小面が認められる。

ヲ : 上左第2大臼歯歯冠で、内部に象牙質を残す。頬舌径は大きいのが、遠心頬側咬頭がやや退化し、二分している。咬耗は軽度である。

ワ : 上右第3大臼歯歯冠で、内部に象牙質を残す。退化形で、かなり小さく、遠心頬側咬頭も縮小しており、2咬頭性に近い。咬耗はほとんど認められない。

カ : 下右第3大臼歯歯冠で、内部に象牙質を残す。近遠心径はかなり大きいのが、近心部と遠心部が狭く、咬頭の大きさの関係も非典型的である。咬耗はほとんど認められない。

ヨ : 下右第2小臼歯歯冠で、歯根は歯頸部付近から折損している。大きさは小さく、舌側咬頭は1個である。咬耗は1度であるが、範囲が広く、かつ平らである。

(4) 被葬者の数および年齢

上述の所見のうち、とくに主として残された歯の歯種と特徴から、長久保1号墳の被葬者の個体数と年齢について考察すると次のようになる。

残存歯には前歯は存在せず、2個の小臼歯と10個の大臼歯および歯種不明の大臼歯破片が存在し、その他に1個の乳臼歯がある。この乳臼歯は10歳前後以下の小児のものと考えられ、他の歯にはこれと同一個体に属すると思われるものはなく、すべて成人の歯と見なしてよい。それらのうち、上右第3大臼歯と上左第2大臼歯には、それぞれ同じ歯種に2個ずつの重複が認められるので、少なくとも2個体の成人が存在することになる。

もし成人の数を2個体と仮定すれば、そのうち1体の歯は比較的大きく、咬耗の程度が強い群をなしており、もう1体の歯は大きさが中等ないし小さく、咬頭が低いために咬耗は概して平坦だが広範囲に及ぶような1群をなしていると見なすことによって、歯の所見を大きな矛盾なく理解することができる。これらの2

個体のうち、前者は咬耗の程度から見て比較的高齢であり、恐らく熟年に達しており、性別は男性である可能性が大きい。後者は恐らく壮年で、性別は不明である。

要するに被葬者は少なくとも3体存在し、1体は熟年男性、1体は壮年、もう1体は10歳前後以下の小児である可能性が大きいと考えられる。しかし被葬者が3体より多かった可能性も否定できない。

清里・長久保2号墳出土人骨

(1) 保存状態と出土状態

保存状態は不良で、残存する骨は少量であるが、残存部の骨質は比較的良好である。長さ15cm以上の長骨3本と、径5cm内外の頭骨片2個が含まれている。歯は20個以上残されており、多くは歯冠のみであるが、歯根を有する歯も数個存在する。

出土状態は不確実で、大部分は攪乱された土中から発見されており、石室内の位置関係を知ることは不可能であった (Fig. 140)。

(2) 人骨の所見 (PL. 99—1)

人骨破片のうち、主要なものを挙げると次の如くである。

頭骨 : 左側頭骨の破片は鱗部を欠くが、乳様突起、外耳道、錐体を含む岩様部が残存しており、大きさと厚さから成人男性のものと考えられる。最大径約5cmの前頭骨と思われる破片が1個あり、厚さは最大8mmで、かなり大きい。もう1個の頭蓋破片は保存が不良で、薄い部位は不明である。

四肢骨 : 上腕骨1個は右側の長さ約11cmの骨体上部の破片で、太さは男性として中等であるが、三角筋粗面の発達が良好である。大腿骨は左右2個あり、いずれも頸部から骨体中央よりやや下部に至る破片で右側は全長約26cm、左側は約21cmである。太さは男性として中等であるが、破面で見ると緻密質はかなり厚く、体の上部は扁平で、中央の後面には骨稜が発達する。これらは同一個体の左右大腿骨と考えられる。脛骨は左側の骨体の約 $\frac{2}{3}$ の破片で、約17cmの長さである。太さは中等で、僅かに扁平である。緻密質の厚さも中等である。

その他に、四肢骨の小片と微細な骨片が多数存在する。その中には骨質の極めて厚い破片が少なからず混在しており、これらの人骨が全体として数個体に由来することを推定させる。

(3) 歯の所見

残存歯の中には保存状態において大きな差が見られる。歯根まで良好に保存されているもの、歯冠のみ残るものがあり、さらに歯冠が破損してエナメル質の小片となっているものも多い。ここで形態特徴が判明する程度に保存されている歯を選び、それらの大きさ、形態、咬耗の程度などの特徴に基づいて所属個体別に分類したところ、次のような3個体に分けられることが明らかになった。

第1個体 : 上左犬歯、上右第1および第2小白歯、上左右第1大臼歯、上右第2大臼歯、下左右第1大臼歯、下右第3大臼歯の9個の歯を含む。このうち上右の第1小白歯、第1および第2大臼歯は歯根が保存されている。形態の特徴としては、大きさは小さく、咬頭が比較的高い。上第2大臼歯は3咬頭性である。下第1大臼歯の咬合面の溝はY型で、明瞭な近心小窩が認められる。下右第3大臼歯はやや退化形を呈している。咬耗は軽度である。

第2個体 : 上左右第2小白歯、上右第1および第2大臼歯、下右第1切歯、下右犬歯、下右第1小白歯の7個の歯を含む。形態の特徴としては、冠高が低く、咬合面に細かい溝と隆線が多いことが挙げられ、上第2大臼歯は3咬頭性である。咬耗は軽度である。

第3個体：上左第2小白歯1個によって代表される。この歯は大形で、頬側と舌側の咬頭が離れており、咬合面が広いという特徴がある。

(4) 被葬者の数および年齢

上述のように、残存する歯がほぼ3個体に分けられるとすれば、長久保2号墳の被葬者が少なくとも3体あったことになる。これらの歯の所属個体の年齢は、咬耗が弱いことから、いずれもかなり若く、恐らく壮年前期であると推定される。性別については不確実であるが、人骨の所見を加えて考察すると、少なくとも2体の男性と、少なくとも1体の女性を含んでいたと想定するのが妥当ではないかと考えられる。

清里・長久保5号墳出土人骨

(1) 保存状態と出土状態

保存は極めて不良で、少量の微小な骨の破片と、数個の歯冠およびエナメル質の細片が残存するのみである。実測図によると、これらは石室の奥半分の床面下数cmないし19cmから散発的に検出されている (Fig. 157)。

(2) 所見

骨は大部分四肢骨の破片と見られるが、細かいので形態特徴を明らかにすることは困難である。

歯冠のうち、歯種を判別できるものは2個ある。1個(イ)は上右第1小白歯歯冠で、中等の大きさを持ち、咬耗は軽度である。もう1個(ロ)は下左第3大臼歯で、4咬頭性であるが小さく、退化形である。咬耗はほとんど認められない。これらの2個の歯が同一個体に属するかどうかは明らかでない。いずれにしても、被葬者の1体は年齢が若かったと推定できる。

清里・長久保6号墳出土人骨

(1) 保存状態と出土状態

保存は不良で、四肢骨を主とする小骨片と、1個の歯およびエナメル質の細片数個が残存するのみである。これらはすべて石室内の攪乱土から発見されており、本来の位置は不明である (Fig. 162)。

(2) 人骨の所見 (PL. 99—2)

径約4cmの頭蓋片が3個あり、2個はやや厚く、他は薄い。部位、形態特徴は不明である。その他の骨片は四肢骨の破片を主とするが、最大のもは長さ約8cmの上腕骨骨体の破片および大腿骨骨体上部の破片であり、その他はすべて5cm以下の小片である。破片の中には上腕骨骨頭の一部や、比較的細い中手骨の破片と考えられるものも含まれており、総数30個余り存在する。四肢骨のうち、上腕骨は細いが、大腿骨の緻密質は厚く、また細片の中にもかなり厚い大腿骨および脛骨が含まれている。

(3) 歯の所見

1個の歯は上右犬歯で、根尖が少し破損する以外は概ね完全である。大きさはやや小さく、咬耗はかなり進行しており、歯冠高の $\frac{1}{3}$ 以上が失われていると推測される。

(4) 被葬者の数および年齢

残存する部分が少量なので、被葬者の数を推定することは難しいが、骨の性状から見て被葬者の中には男女の両性が存在すると考えるのが妥当である。また歯の所属個体の年齢は、咬耗から見て熟年に達していたと推定される。

清里・長久保9号墳出土人骨

(1) 保存状態

保存は極めて不良で、少数の小骨片と7個の歯が残るだけである。しかし歯の多くは歯根まで保存されている。

(2) 所見

骨はすべて四肢骨の破片と考えられ、径2.5cm以下の小骨片である。そのうち脛骨の破片と考えられるものは、骨質がかなり厚い。他の形態特徴は明らかでない。

7個の歯のうち、第1の個体に属すると考えられるものは5個で、歯種は上右第1切歯、上右犬歯、下右第1切歯、下右犬歯、および下大臼歯の破片である。すべて歯根を残している。これらの歯はやや大きく、根も比較的長い。咬耗はすべて2度に達している。

第2の個体に属すると推定される他の2個は、上右犬歯および下左第2大臼歯で、ともに歯根を残すが、犬歯の根尖は折損している。大きさは小さく、根も短い。咬耗は2度に達しており、大臼歯では咬合面の広い範囲に及んでいる。

(3) 被葬者の数および年齢

歯の所属個体は上述のように2個体と見なすことができる。年齢は両者とも咬耗から見て壮年中期と推定される。性別については、男性が含まれていることは骨の所見からもほぼ確実であるが、歯の大きさからは第2個体が女性である可能性が考えられる。

3. 清里・庚申塚遺跡

清里・庚申塚1号墳出土人骨

(1) 保存状態と出土状態

保存は不良で、とくに骨は少量の小さい骨片を残すのみである。歯は比較的多く残存するが、主として歯冠を残すだけで、歯根は大部分失われ、歯冠もエナメル質だけのこともある。これらの遺残は他の遺物とともに番号を付して採取されたが、石室内の床面上および床面下の浅い土中から検出されている。実測図によると、石室内の位置はほぼ全域にわたり、やや中央より奥の右寄りに集まる傾向はあるものの、かなり拡散している。したがってこれらの位置から、被葬者の個体的異同や位置関係を推測することはほとんど不可能である(Fig. 200)。

以下に採集番号にしたがって個々の人骨および歯の所見を列記する。番号の後に(下)と記すものは床面下より出土したもの、それのないものは床面上で検出されたものを意味する。

(2) 人骨の所見

イ : 約30個の小骨片ないし骨粉から成る。最大の骨片は約3×1.5cmの大きさと、脛骨骨体の前縁付近の破片と推定される。微密質は約9mmの厚さがあり、成人男性の骨である可能性が大きいと考えられる。

ロ : 大きじ約1杯分の小骨片ないし骨粉で、最大の破片でも径約1.5cmである。四肢骨の破片と考えられるが、部位の同定は困難である。

ハ : 直径約28mmおよび15mmの四肢骨の小片2個で、不定形に割れており、部位は不明であるが、やや厚い。

ニ : 直径1cm以下の微小な骨片で、小さじ約1杯分の量がある。四肢骨の破片と考えられる。

ホ(下) : すべて径1cm以下の微小な骨片および骨粉から成り、分量は大きじ1杯分ぐらい存在する。

四肢骨の小片と考えられる。

ヘ : 小さじ約1杯分の小骨片で、そのうち大きめのものは細長い破片で、最大のものは直径約2cmである。四肢骨の破片であるが、微密質は薄く、もし成人の骨であるとすれば前腕骨の可能性が考えられる。

ト(下) : 脛骨の破片4個より成り、最大のものは長径約35mmで、骨体上部の内縁側を含むと考えられる。厚さおよび形態は成人のものと思なされる。他の3個は微小な破片である。

(3) 歯の所見

チ : 下右大白歯歯冠の約 $\frac{2}{3}$ の破片のほか、小片2個がある。恐らく第1臼歯と考えられる。咬耗はやや強いが、正確な程度は不明である。

リ : 下小白歯のものと推定される。歯冠破片2個。咬耗は強い。

ヌ : 上左第1小白歯歯冠。大きさは中等で、咬耗は軽度である。

ル : 下左第3大白歯歯冠。やや小さいが5咬頭を有し、咬合面の溝はX型である。咬耗は近心部および咬合面に認められる。

ヲ : 下右第2小白歯歯冠で内部に象牙質が残存する。大きさは中等であるが、冠高は大きく、舌側咬頭は1個のみである。軽度の咬耗が見られる。

ワ : 下左第2大白歯歯冠で、破損している。大きさは中等で、咬合面の溝は+型で、咬頭数は4+と思なされる。咬耗は軽度である。

カ : 上左第2大白歯歯冠で、近心面が破損する。大きさは中等であるが、冠高はやや大きい。舌側遠心咬頭は退化して小さい。咬耗は軽度である。

コ : 上左第1大白歯歯冠で、近心面が破損する。発達した4咬頭をもつが、大きさは小さく、また遠心部は近心部に比して頬舌径がやや小さい。咬耗はほとんど認められない。

ク : 上左第1大白歯歯冠。大きさは中等で、カラベリ溝が認められる。咬耗は軽度である。

ケ : 下右第3大白歯で、歯根は未完成で、歯頸線から2~3mmまで形成されている。したがってこの歯は未萌出で、10歳台後半の年齢の個体のもと考えられる。歯冠は小さく、退化形で、咬頭の排列が乱れているが、冠高はかなり大きい。

コ : 下右第1大白歯歯冠で、内部の象牙質の一部も残存する。大きさはやや大きく、5咬頭性で咬合面の溝は+型である。咬耗は軽度(1度)であるが、近心および遠心面に隣接歯による磨耗の痕跡が認められる。

ツ(下) : 下左大白歯歯冠近心部の破片である。咬頭付近に咬耗が見られるが軽度(Brocaの1度)である。

ネ(下) : 上左大白歯歯冠頬側部の破片と考えられる。冠高はかなり大きい。

ナ(下) : 上左第1大白歯歯冠。近心舌側咬頭にカラベリ溝が認められる。咬耗は軽度(1度)で、かなり若い個体のものであることは明らかであり、恐らくは未成年と考えられる。やや大きい。

ラ(下) : 大白歯歯冠の破片2個。咬耗は軽度である。

ム(下) : 上右第2小白歯歯冠の約 $\frac{2}{3}$ の破片で、頬側部を欠く。大きさは中等で、咬耗は軽度である。

ウ(下) : 下右第2大白歯歯冠で、内部に少量の象牙質を残す。4咬頭性で、咬合面の溝はX型である。大きさは中等であるが、冠高が大きい。咬耗は軽度である。また近心面に軽度の磨耗面が認められるが遠心面にはない。これらのことから、未成年の個体の歯である可能性が大きいと考えられる。

エ(下) : 大白歯のと思われる歯冠エナメル質の小片5個で、形態特徴は不明である。

ノ(下) : 上右第1大白歯で、歯冠および歯頸部が残存する。大きさは中等であるが、頬舌径が比較的大きい。咬耗は2度に達し、近心舌側咬頭に僅かに象牙質の露出を見る。

オ(下) : 下右第3大白歯歯冠で約 $\frac{1}{4}$ が残存し、近心部を欠く、小さく、退化形である。咬耗は2度に達し、とくに頬側で強い。

ク(下) : 下左第3大白歯歯冠。ほぼ4咬頭性で、やや小形、不定形である。咬合面の溝は+型である。咬耗は全く認められない。

ヤ(下) : 歯の象牙質を主とする数個の破片で、歯種の同定は困難である。

マ(下) : 上右大白歯歯冠で、近心舌側を欠く約 $\frac{1}{4}$ で、大きさは小さく、また遠心頬側咬頭がやや退化するが、第2大白歯と考えられる。近心舌側咬頭が失われているので、咬耗の程度は不明であるが、咬耗は遠心舌側咬頭の広範囲に及んでおり、残存部では1度である。

ケ(下) : 大白歯歯冠の数個の小片で、歯種は不明である。

フ(下) : 小白歯または大白歯のものと考えられる数個の小片である。

コ(下) : 下左第2大白歯歯冠で、象牙質も残存する。大きさは中等であるが、冠高が大きい。5咬頭性で、咬合面の溝はY型である。近心頬側隅角が近心に突出する。咬耗はごく軽度である。

エ(下) : 2個の歯がある。1個は上左第2(または第3)大白歯で、歯根も約半分を残している。近遠心径が小さく、遠心舌側咬頭が小さいが、冠高は比較的大きい。歯根は恐らく3根性と考えられる。咬耗は軽度である。他の1個は下左第1小白歯の破損した歯冠である。大きさは小さく、とくに頬舌径が小さい。咬耗は軽度である。

無番号 : 1個の無番号の歯は上左第2乳白歯歯冠である。大きさは中等で、軽度のカラベリ結節を有する。咬耗は軽度であるが、咬合面の広範囲に及んでいる。

(4) 被葬者の数および年齢

上述の所見のうち、とくに主として残された歯の歯種と特徴から、庚申塚1号墳の被葬者の個体数と年齢について考察すると次のようになる。

残存歯のうちには前歯が存在しないが、小白歯および大白歯のかなりの歯種が見られる。そのうち大白歯の歯種には重複して存在するものがあり、被葬者が複数であったことが明らかである。とくに上右第1大白歯には3個の歯が認められるので、個体数は少なくとも3体であると推定される。被葬者の数が3体より多い可能性も否定できないが、残された歯の形態的特徴と咬耗の程度などを考慮すると、3体と見なしても大きな矛盾はない。

もし被葬者が3体のみと仮定すると、第1の個体は咬耗がやや進んだ歯群によって代表され、年齢は壮年であると推定される。第2の個体はレの第3大白歯によって代表される未成年の個体で、一般に歯の咬耗は弱く、10歳台後半の年齢と推定される。第3の個体は無番号の乳白歯によって代表され、年齢は10歳前後または10歳台前半と考えられる。これらの個体の性別は不明であるが、第2の個体に属すると見なされる歯が概してやや大きいことから、この個体は男性である可能性がやや大きいと考えることができる。なお、人骨のうちイの脛骨片は、このうち第1個体に属するものと見なすことができるであろう。

清里・庚申塚2号墳出土人骨

(1) 保存状態と出土状態

保存はきわめて不良で、片手の掌に載るほどの量の骨片と1個の歯の破片が残されているに過ぎない。検

出位置は、実測図によると4個所に分かれ、すべて石室の左壁に近いが、うち3個所（イ・ロ・ハ）は前方、1個所（ニ）は中央やや後方に位置している。なお、イは床面、他は床面下から出土している。（Fig. 204）

(2) 所見

イ：長さ約5.5cm、幅約1cmの細長い骨片である。縁に沿って稜が走り、他面は破面をなす。全体に緩く湾曲し、やや扁平で、かつ捻れている。その形状から、上腕骨遠位部の破片と考えられる。目立った特徴はないが、大きい方ではない。

ロ：長さ約3cm、幅約1cmの細い長管骨の破片である。太さから見て前腕骨の一部と推定されるが、正確な部位は明らかではない。

ハ：径4cm以下の20個余りの小骨片がある。これらの骨片のうちには、頭蓋、脊椎、四肢骨の破片が含まれている。頭蓋片には前頭骨、側頭骨、後頭骨の破片と考えられるものが見られる。細かいので形態特徴は明らかでないが、頭蓋は一般に薄い。

ニ：上左大白歯歯冠の頰側破片である。第1大白歯か第2大白歯か不明である。咬耗は軽度である。

(3) 被葬者の数および年齢

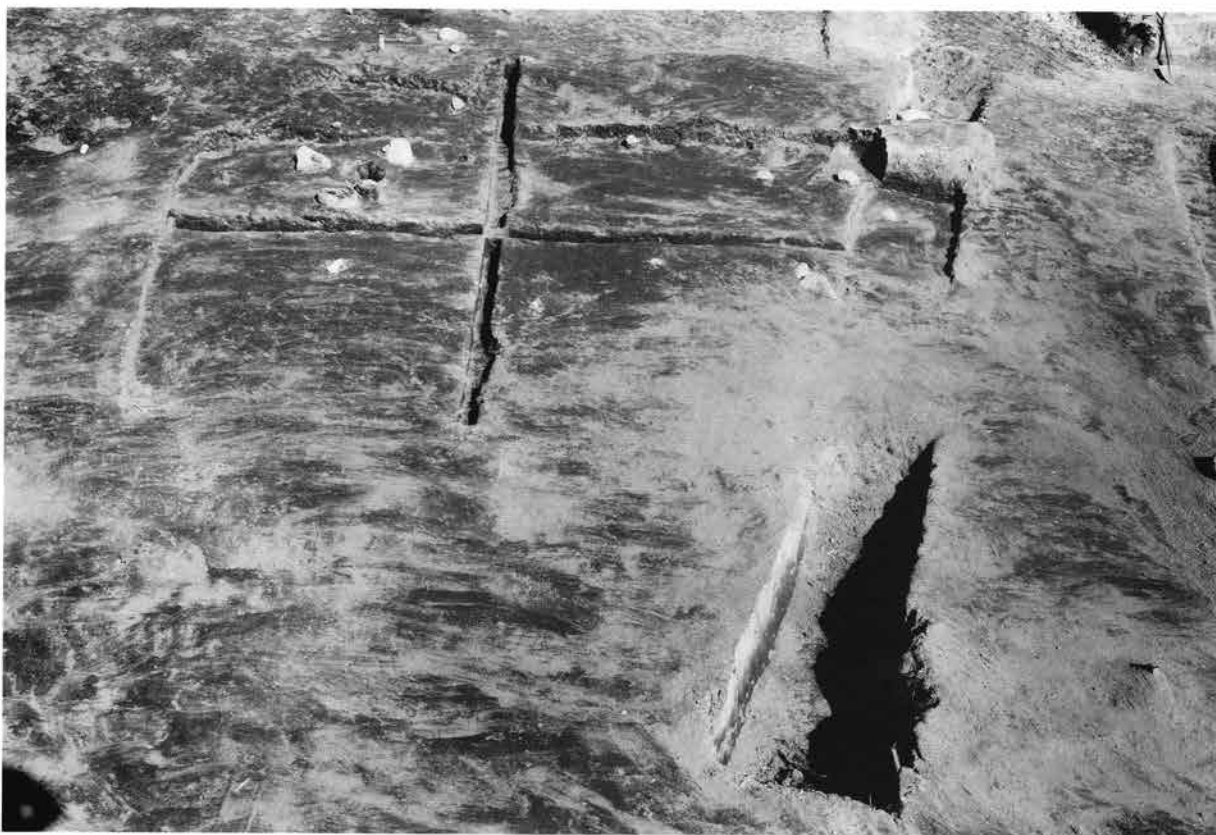
残存する骨が少量なので、個体数は推定できないが、少なくとも現存する部分は1個体に属する可能性がある。もしすべてが同一個体のものとすれば、歯の咬耗が軽度であることから、その年齢はかなり若いと考えられ、未成年の可能性もある。骨の大きさと厚さも、このことと矛盾しない。性別は不明で、とくに未成年の場合は推定困難であるが、もし成年に近い個体であると想定すれば、女性である可能性を強めると言うことができる。

（佐倉 朔）

写 真 图 版



清里・長久保遺跡全景（空中写真）



1. 1区1号住居址全景(南)



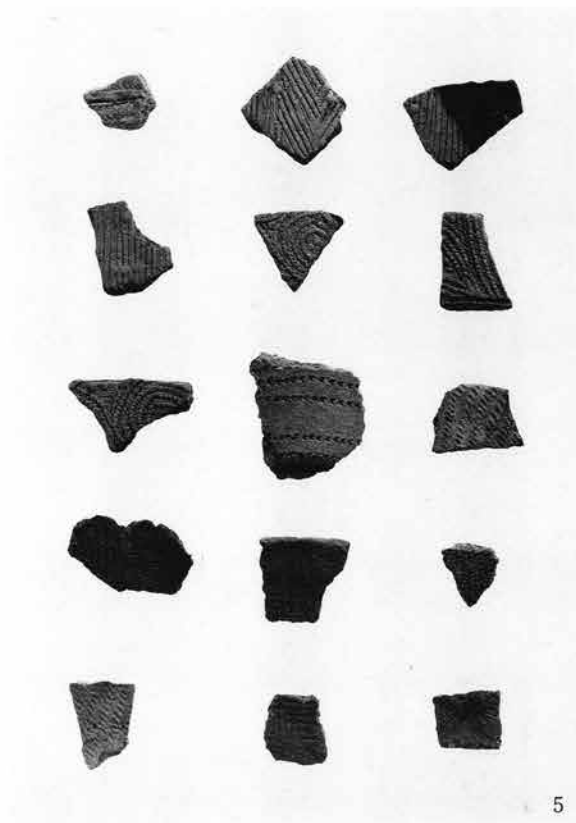
2. 1区1号住居址全景最終(南)



1. 1区1号住居址遺物出土状況(南西)



2. 1区1号住居址北礫群遺物出土状況(南)



5



3



6

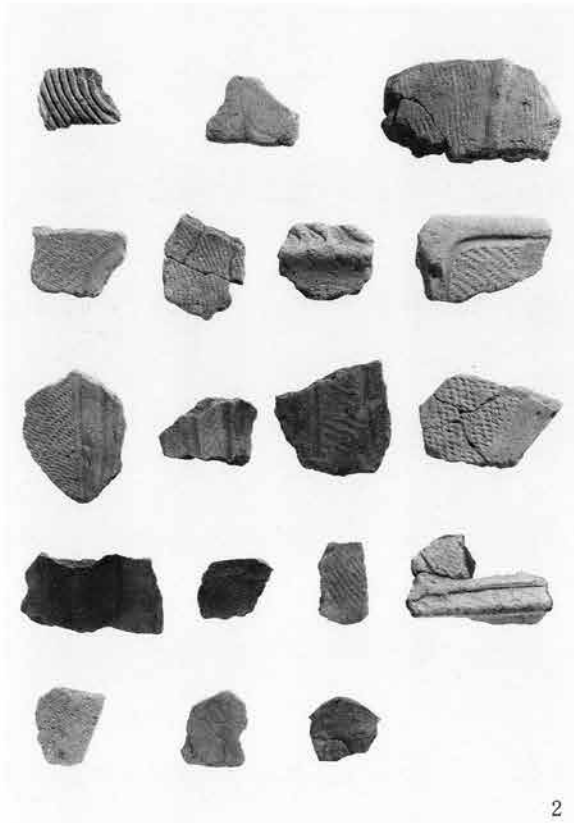


4

3~6. 1区1号住居址出土遺物



1. 13区1・5号住居址全景(南)



2



3

2・3. 13区1号住居址出土遺物



1. 13区2号住居址遺物出土状況全景(東)



2. 13区2号住居址全景(東)



1. 13区2号住居址全景(南)



2. 13区2号住居址柱穴柱受け(西)



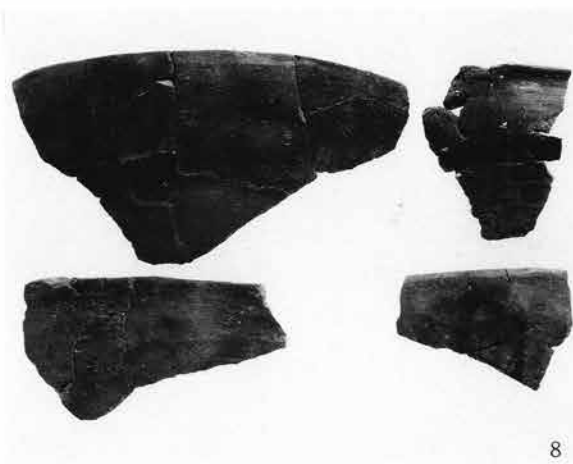
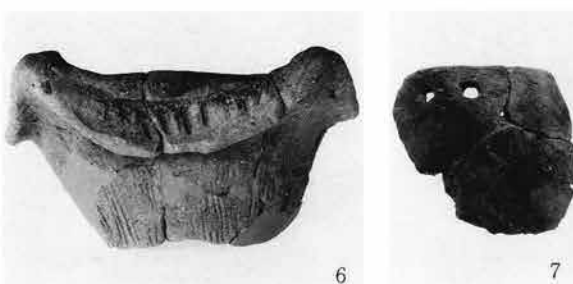
4. 13区2号住居址炉内埋設土器(南)



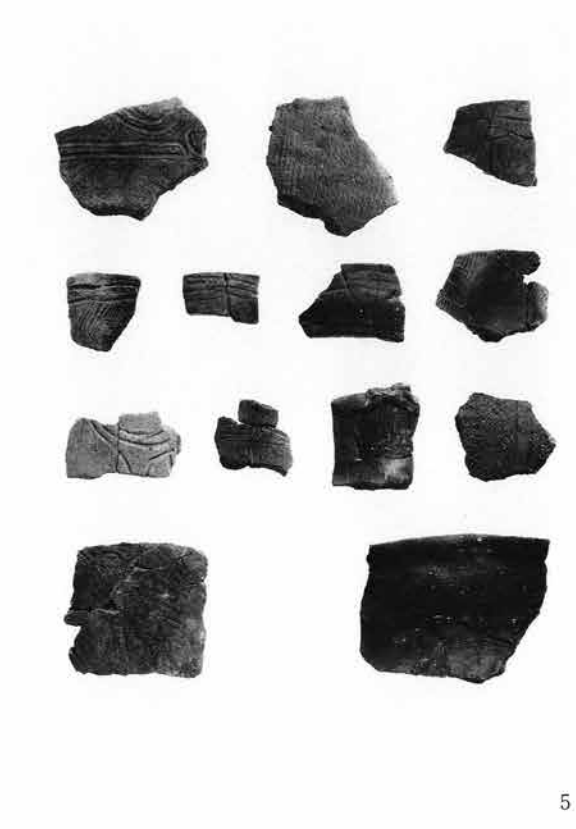
3. 13区2号住居址遺物出土状況



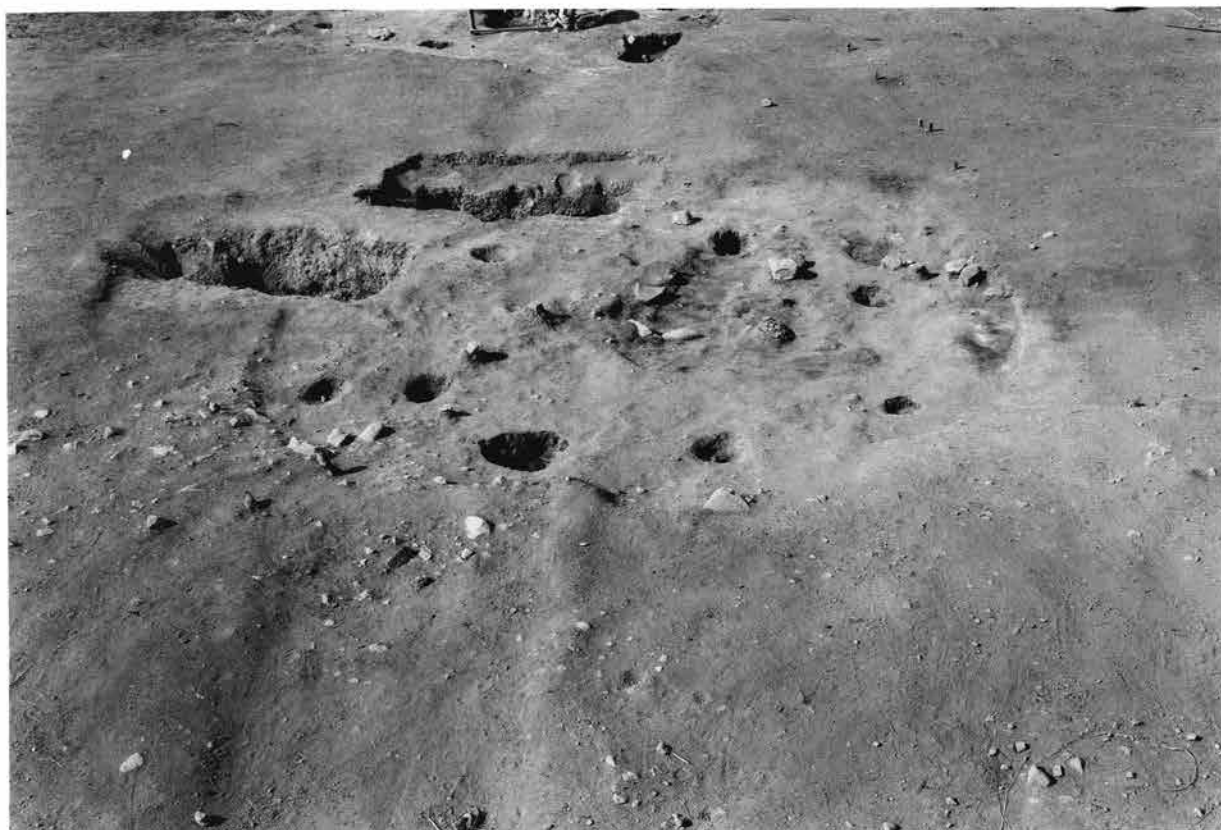
5. 13区2号住居址炉内埋設土器(南)



1 ~ 8, 13区2号住居址出土遺物



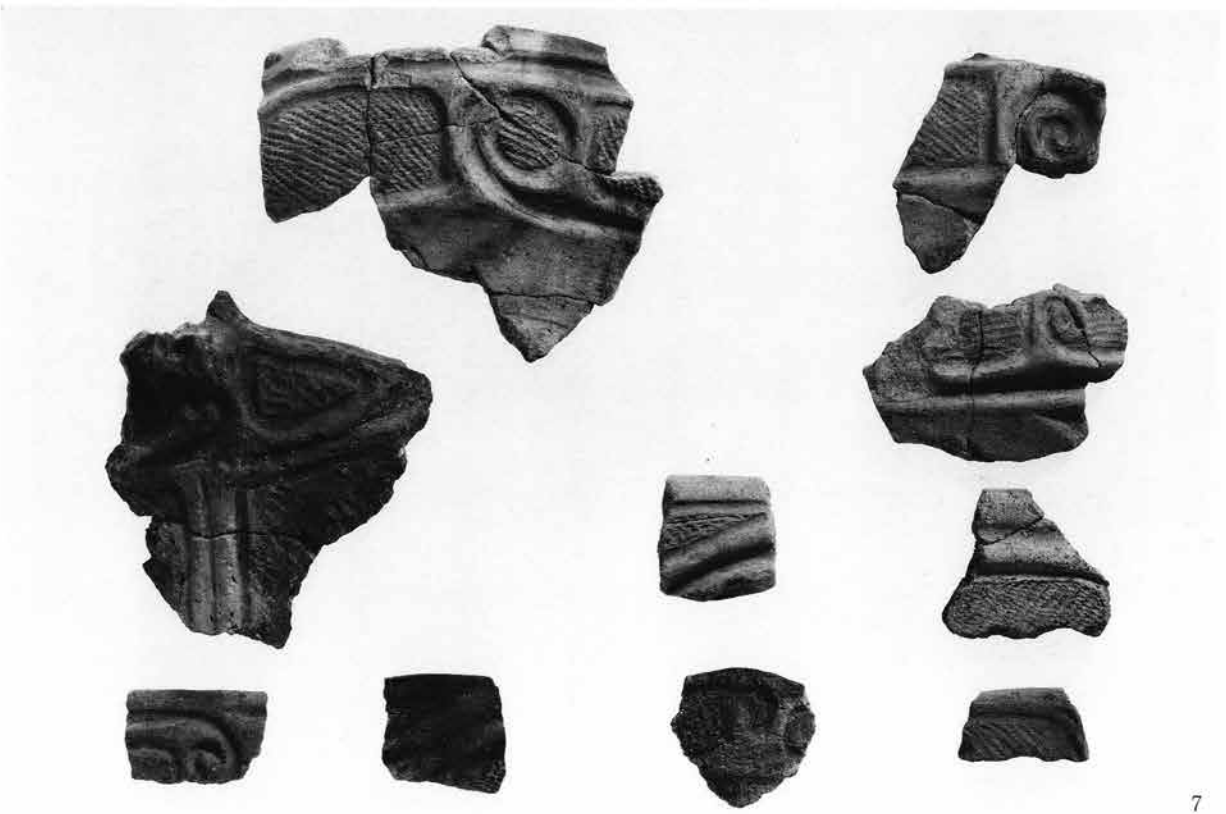
1 ~ 6. 13区 2号住居址出土遺物



1. 13区3号住居址全景(東)



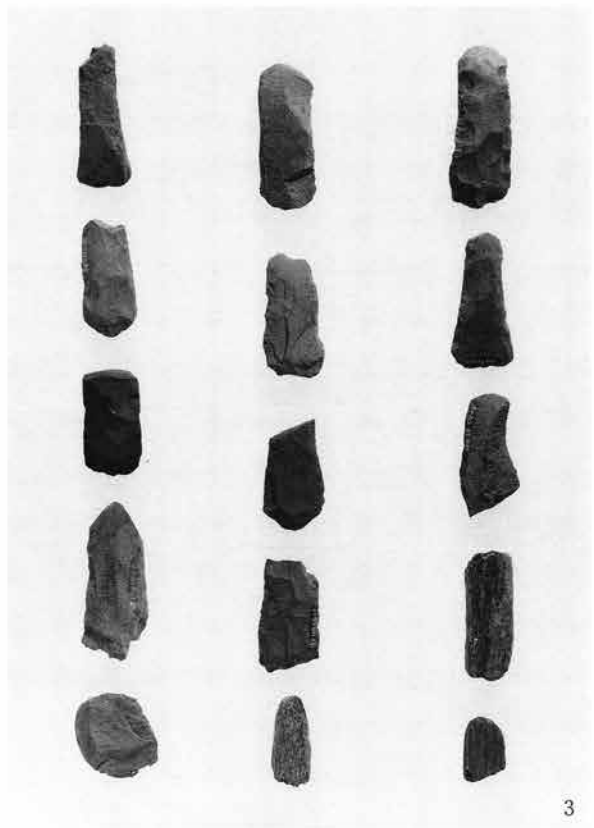
2. 13区3号住居址遺物出土狀況全景(東)



1 ~ 7. 13区 3号住居址出土遺物



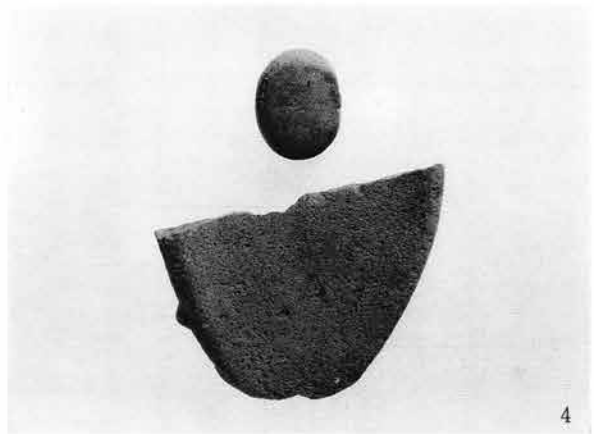
1



3



2



4

1. 13区3号住居址出土遺物

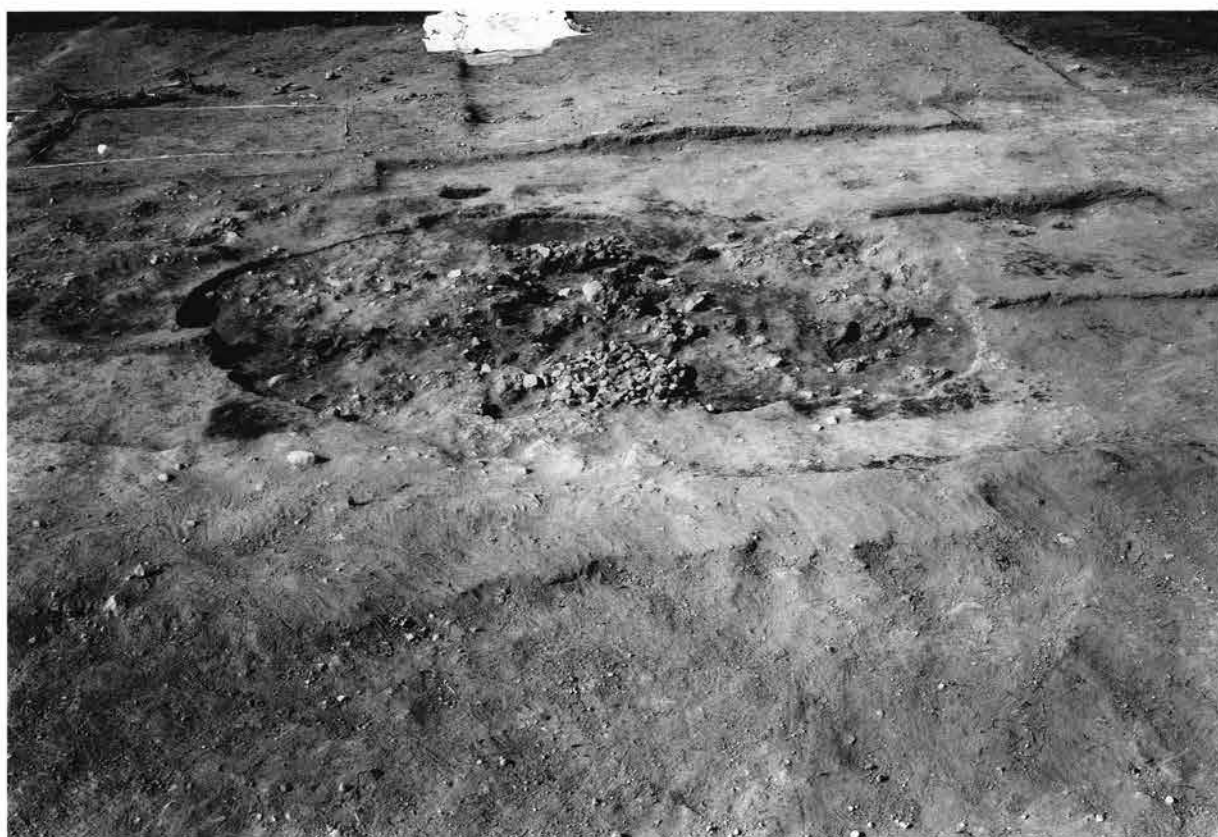
2. "

3. "

4. "



1. 13区4号住居址全景(東)



2. 13区4号住居址遺物出土狀況全景(東)



1. 13区4号住居址炉全景(東)



2. 13区4号住居址遺物出土狀況



4. 13区4号住居址遺物出土狀況



3. 13区4号住居址遺物出土狀況



5. 13区4号住居址遺物出土狀況



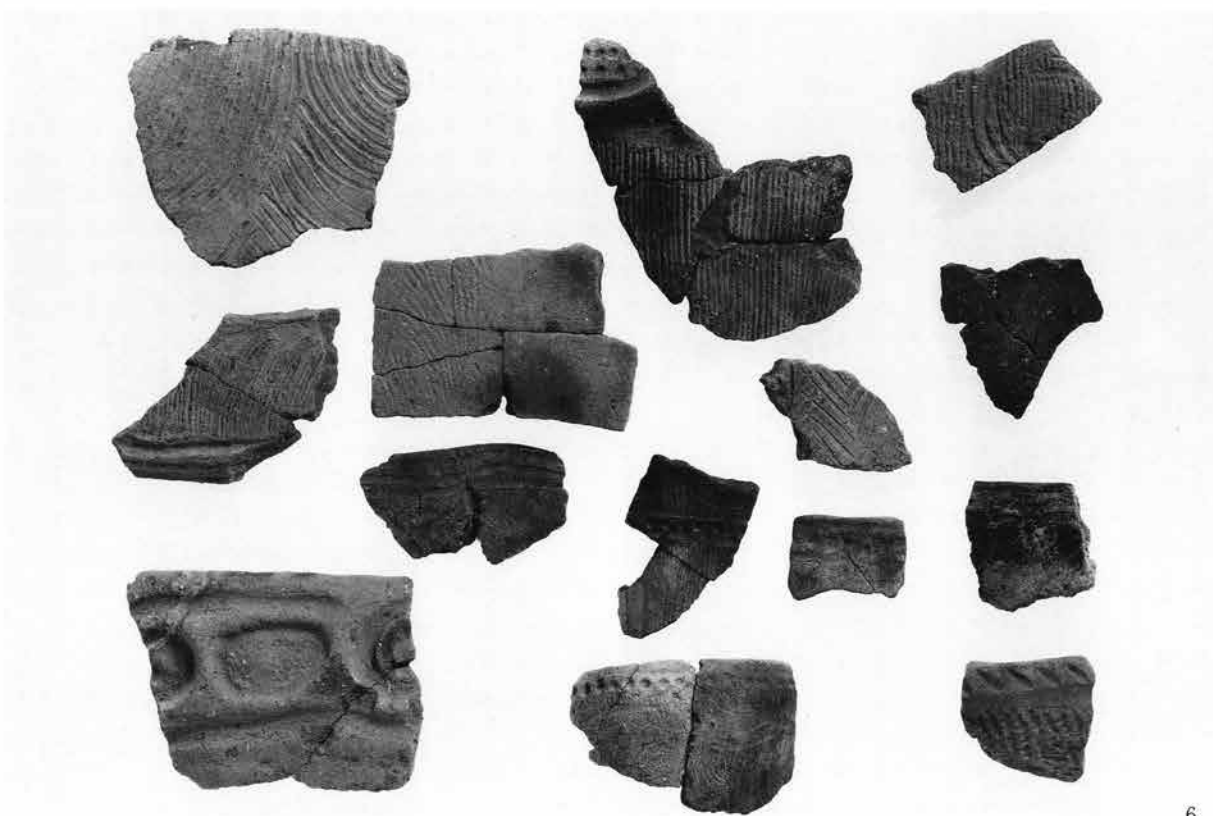
1. 13区4号住居址出土遺物

2. "

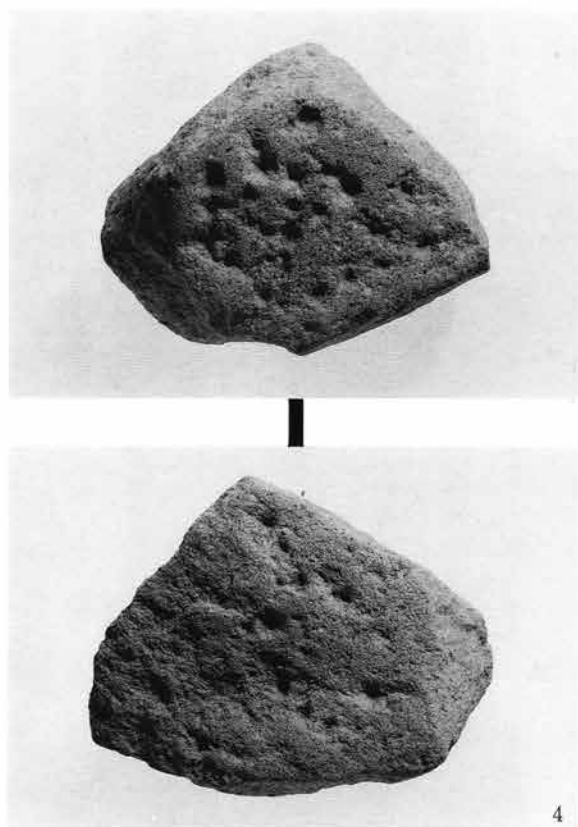
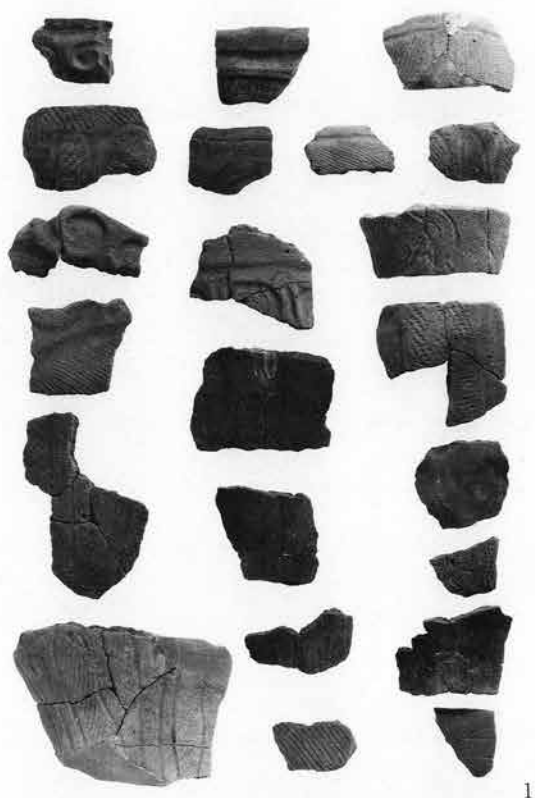
3. "

4. "

5. "



6. 13区4号住居址出土遺物



1 ~ 4. 13区4号住居址出土遺物



1. 13区5号住居址遺物出土狀況床面(南)



2. 13区1・5号住居址全景(南)



4. 13区5号住居址遺物出土狀況埋襲(北西)



3. 13区5号住居址内1・2号炉(南東)



5. 13区5号住居址1号炉



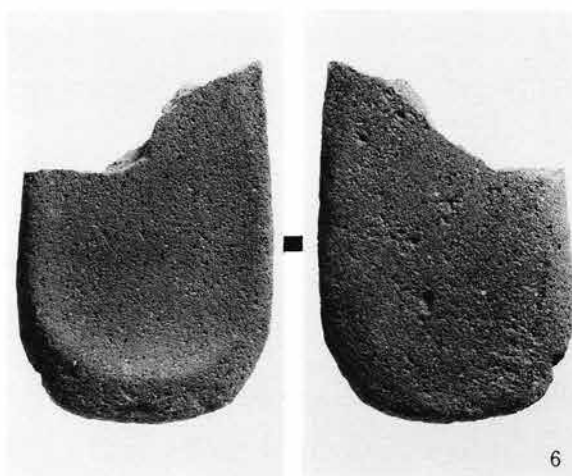
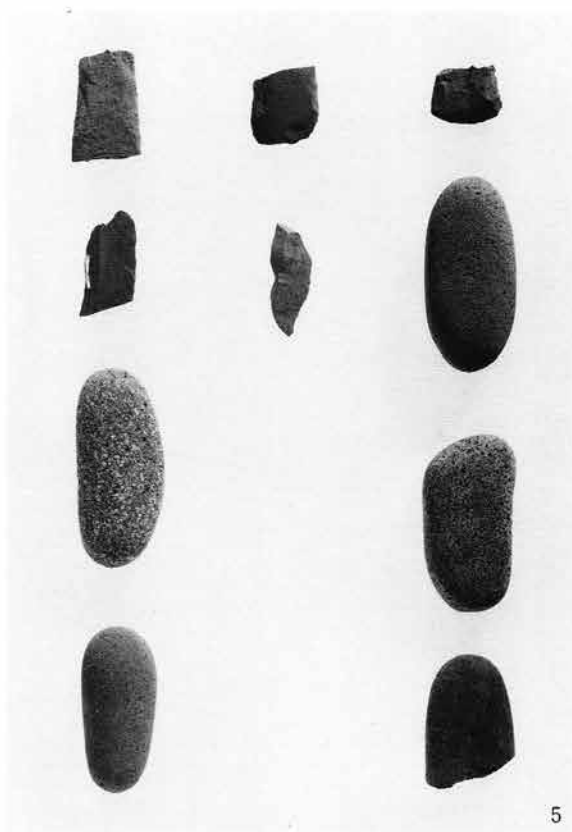
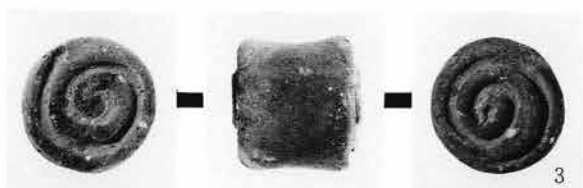
1. 13区5号住居址遺物出土状況(南)



2 ~ 4. 13区5号住居址出土遺物



1 ~ 4. 13区 5号住居址出土遺物



1~7. 13区5号住居址出土遺物



1. 13区6号住居址全景(南)



2. 13区6号住居址セクションW-E(南)



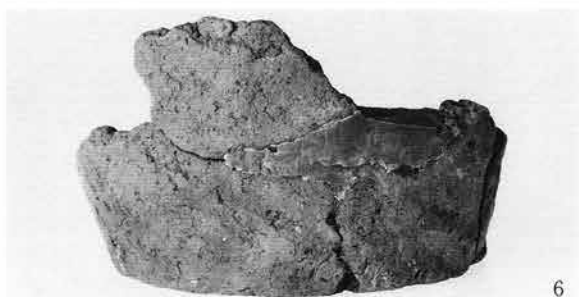
3. 13区6号住居址セクションS-N(東)



4

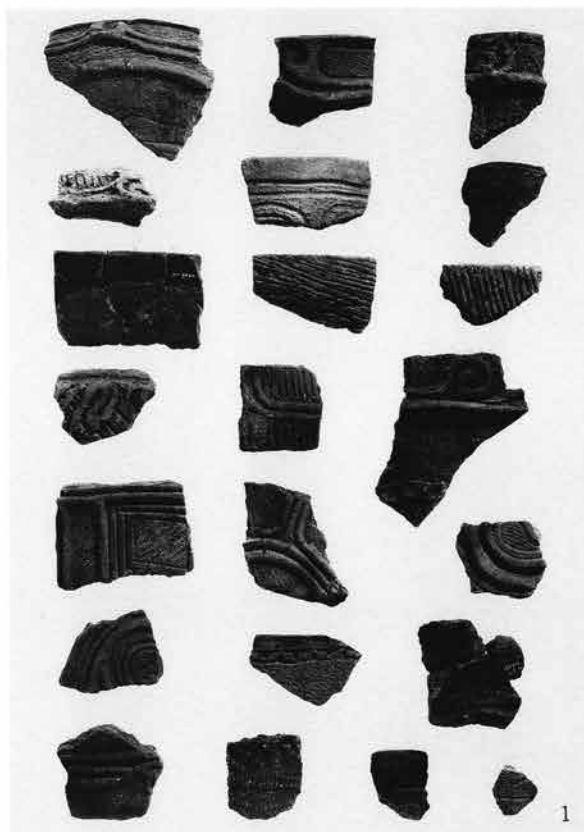


5

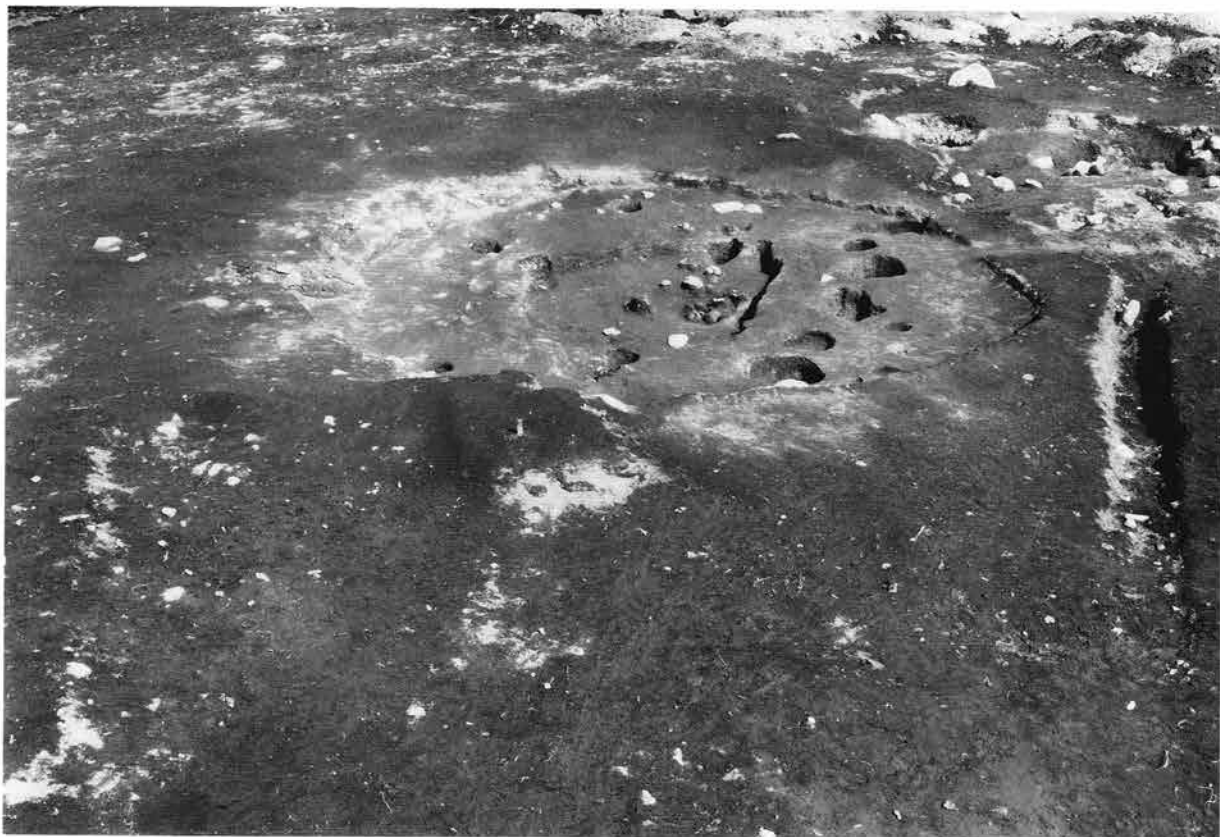


6

4~6. 13区6号住居址出土遺物



1 ~ 4. 13区6号住居址出土遺物



1. 13区 8号住居址全景(南)



2. 13区 8号住居址遺物出土狀況全景(南)



1. 13区 8号住居址遺物出土狀況埋襲(北)



2. 13区 8号住居址遺物出土狀況



4



5

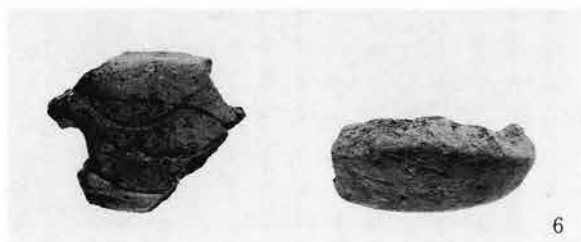
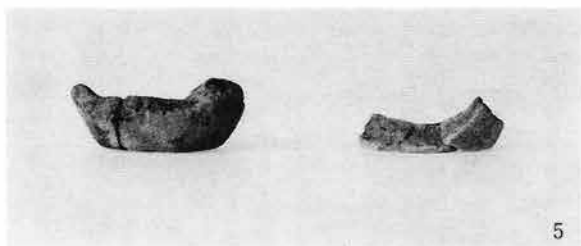
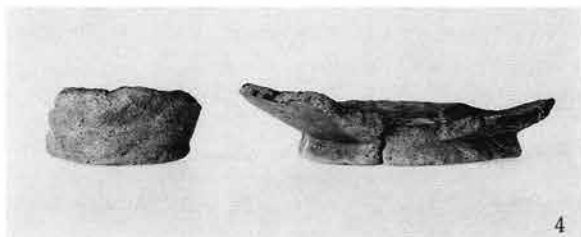
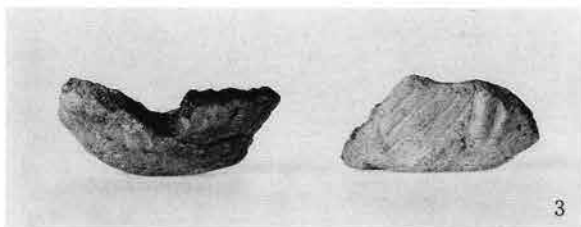
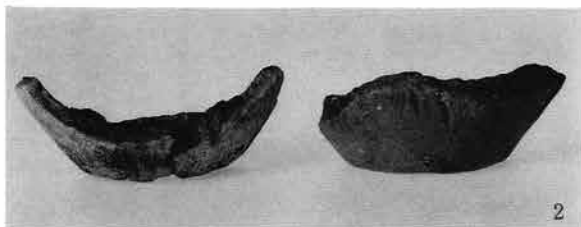


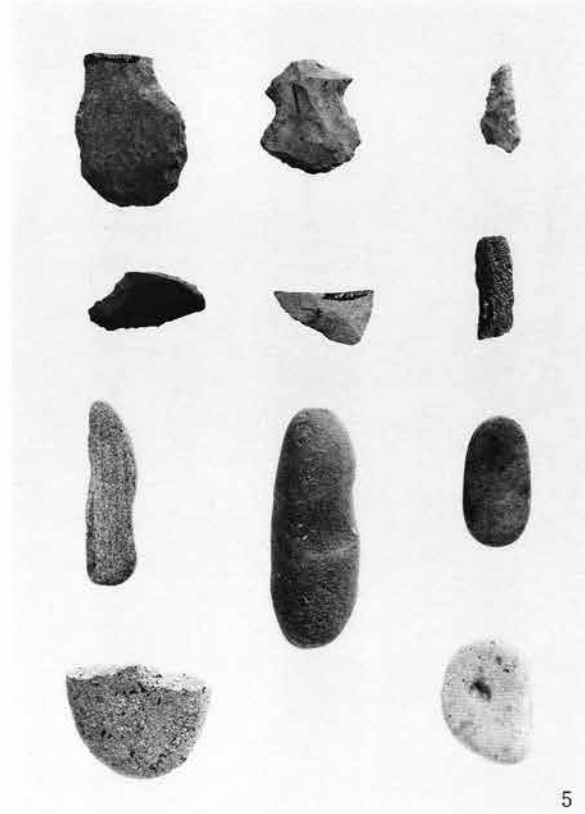
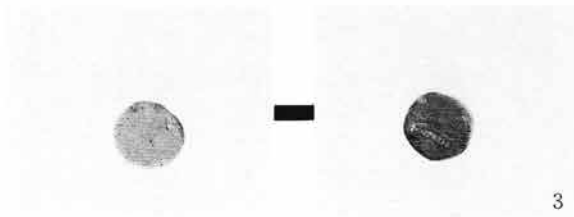
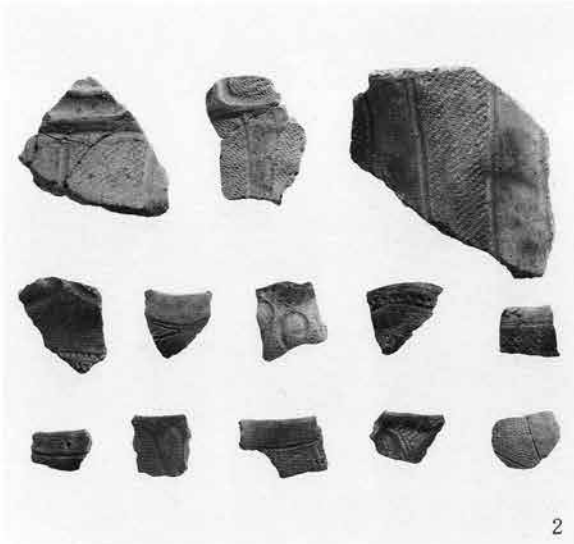
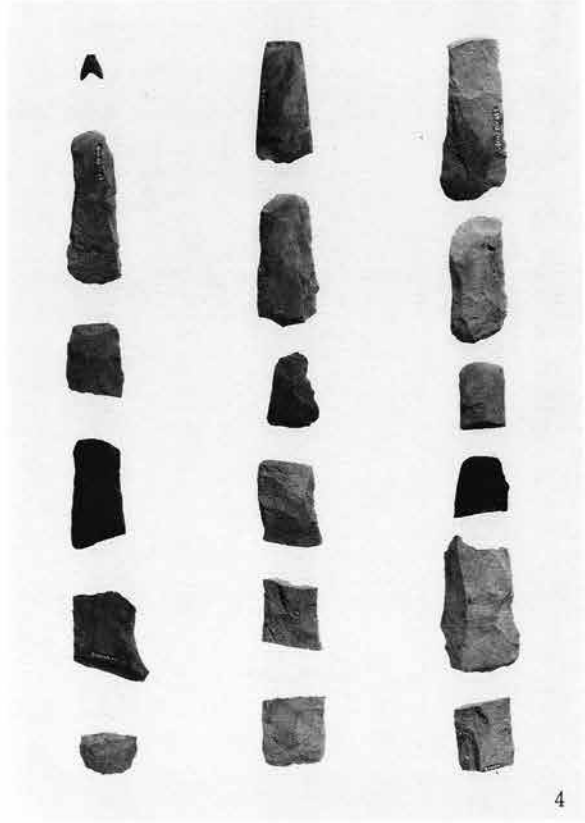
3



6

3~6. 13区 8号住居址出土遺物







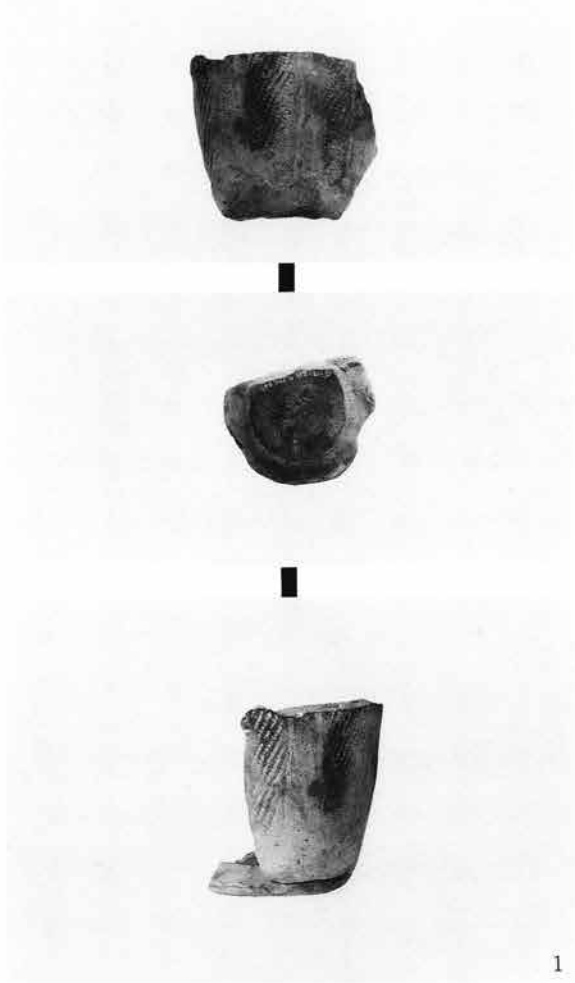
1. 13区 8号住居址内落ち込み(南)



2. 13区 8号住居址内落ち込み全景(南)



3～5. 13区 8号住居址内落ち込み出土遺物



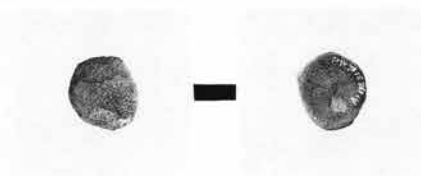
1



2



3



4



5

1. 13区8号住居址内落ち込み出土遺物

2. "

3. "

4. "

5. "



1. 13区9号住居址セクションW-E(南)



2. 13区9号住居址遺物出土状況全景(南西)



1. 13区9号住居址遺物出土状況 柱受け(南)



2



4



3



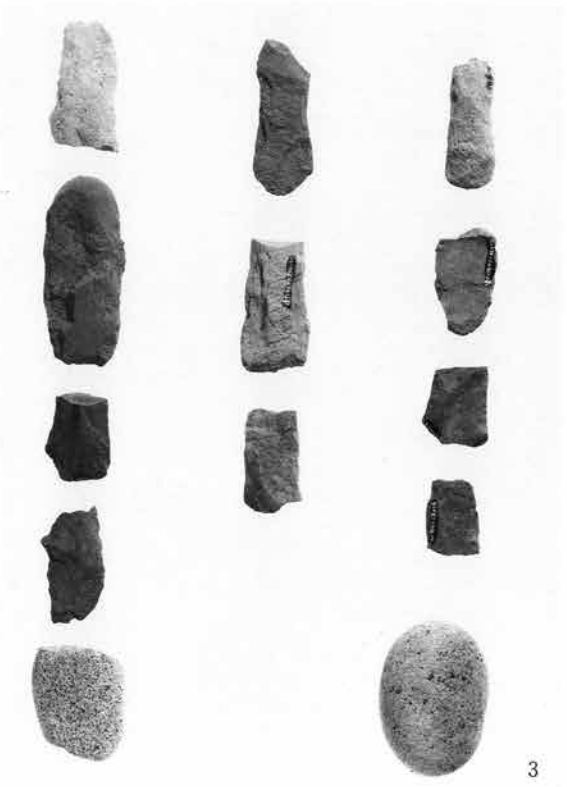
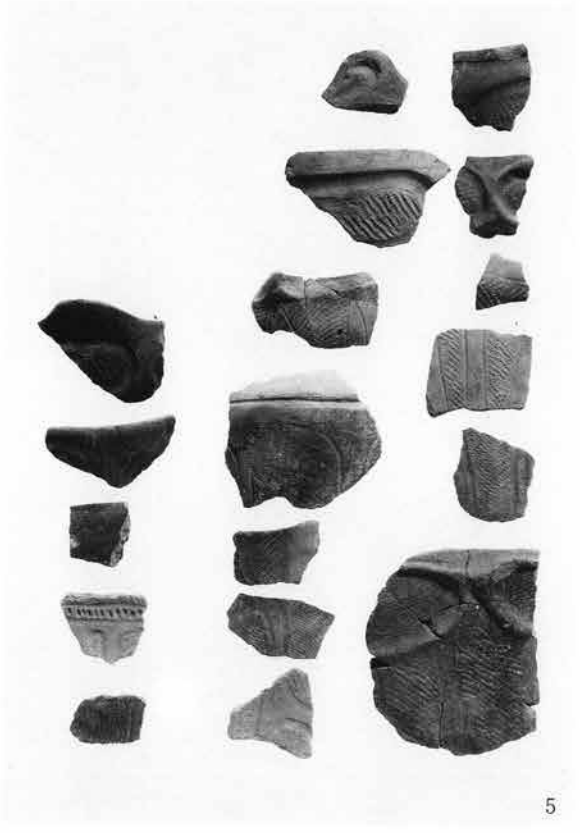
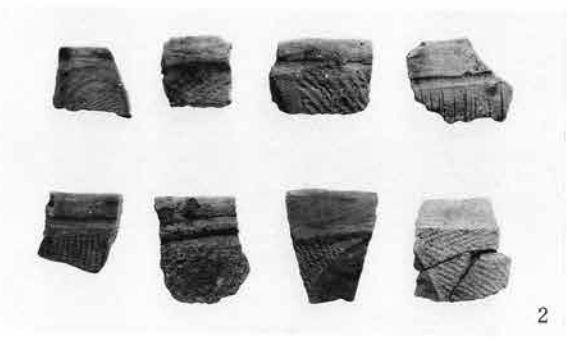
5

2. 13区9号住居址出土遺物

3. "

4. "

5. "



1. 13区9号住居址出土遺物
 2. "
 3. "
 4. "
 5. "



1. 13区10号住居址遺物出土状況全景(西)



2. 13区10号住居址全景(西)

13区11号住居址全景(西)



1. 13区10号住居址炉遺物出土状況(南東)



2. 13区10号住居址遺物出土状況(東)



3



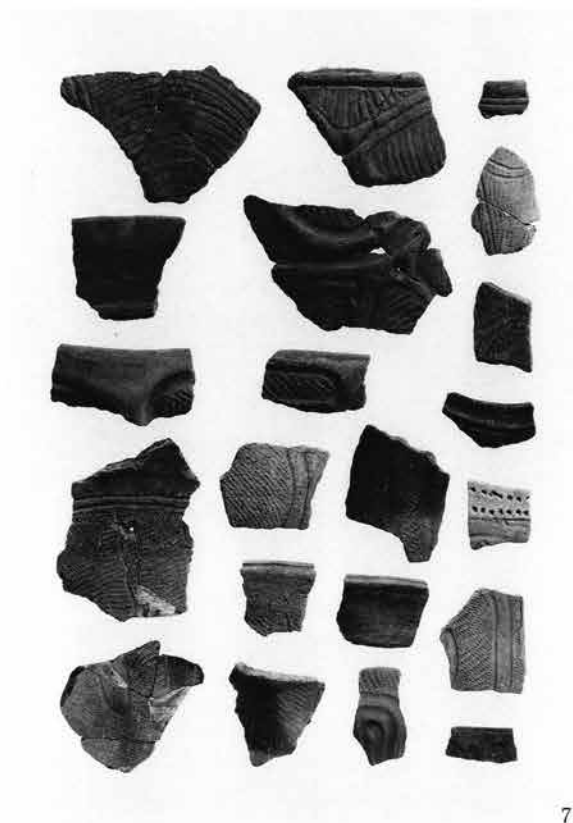
4



5

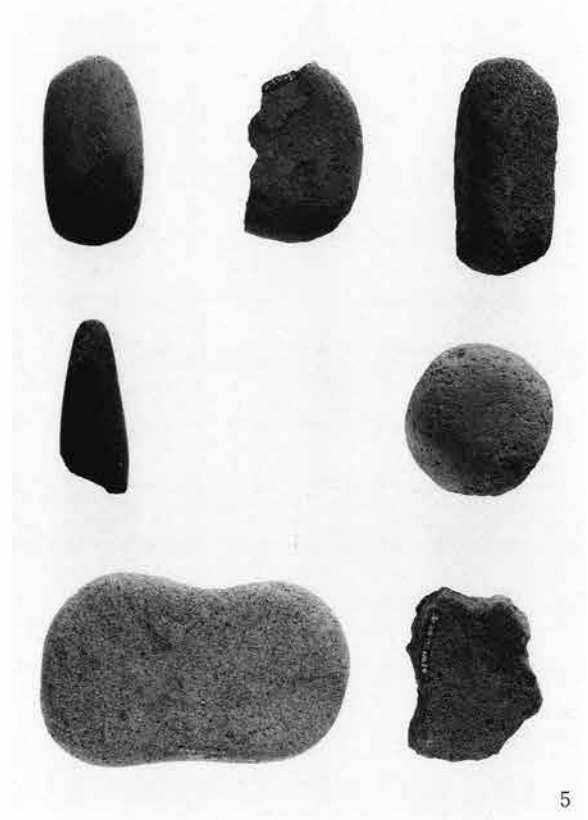
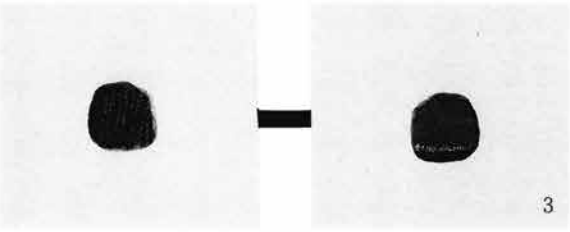
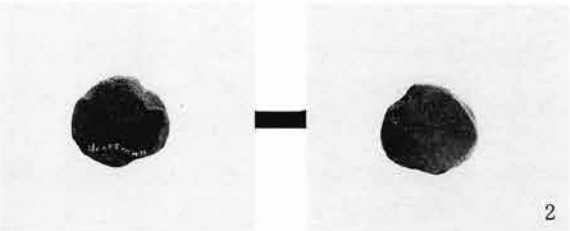
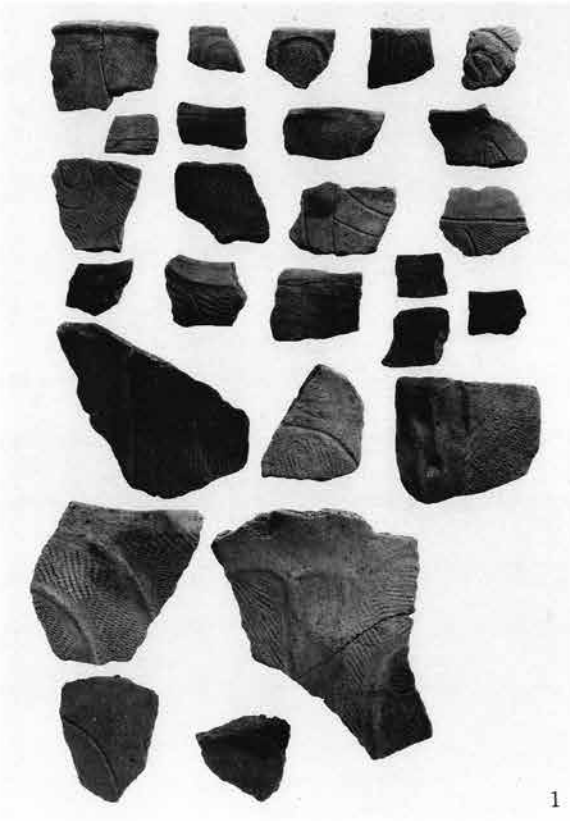


6

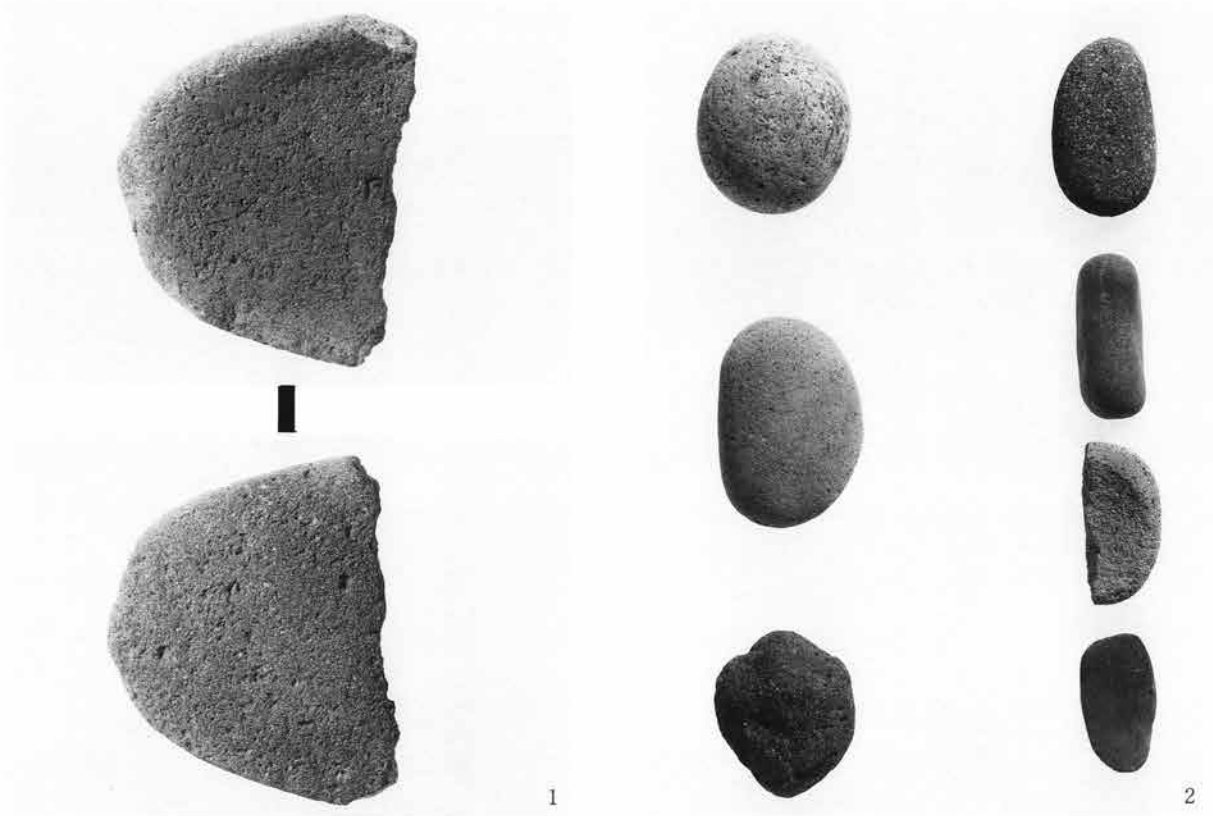


7

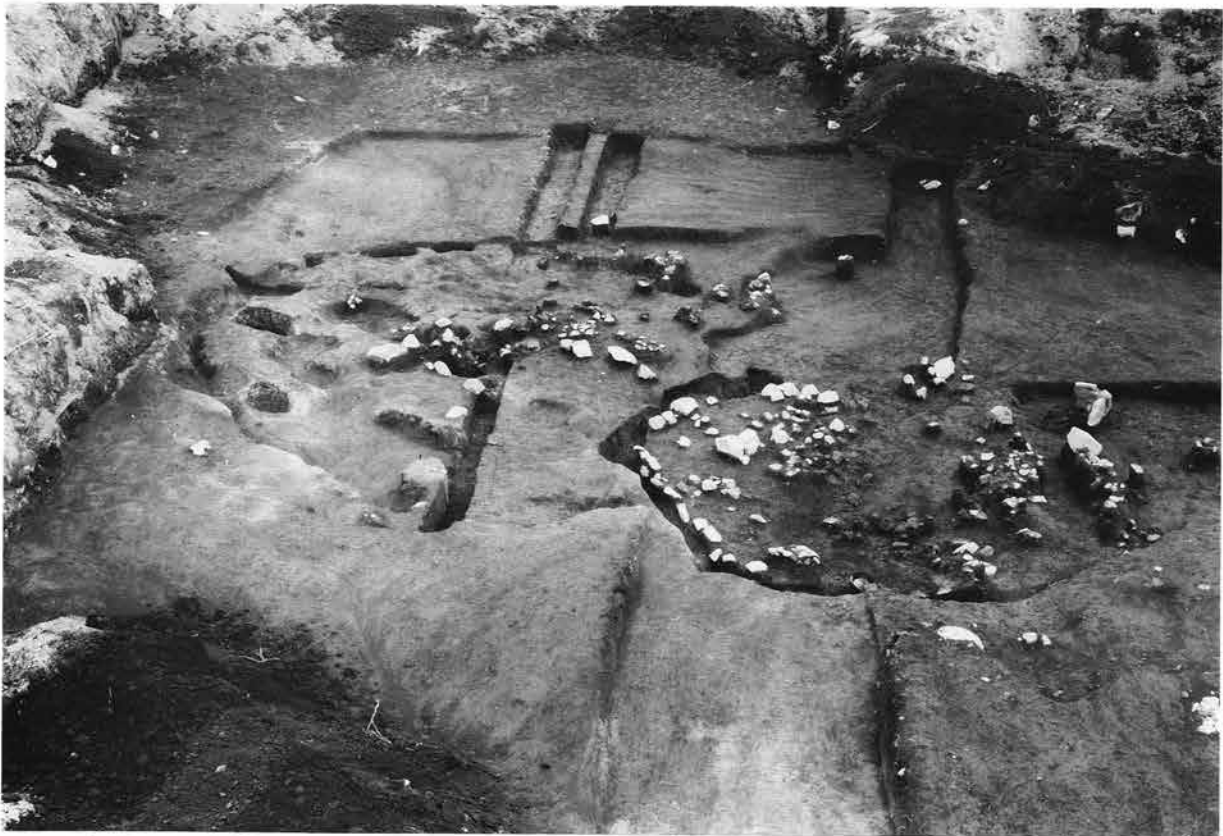
3~7. 13区10号住居址出土遺物



1 ~ 5. 13区10号住居址出土遺物



1・2. 13区10号住居址出土遺物



3. 13区10号住居址全景(西)

13区11号住居址遺物出土狀況全景(西)



1. 13区11号住居址全景下部(南東)



2. 13区11号住居址セクションE-W(北西)



1. 13区10・11号住居址全景(西)



2. 13区11号住居址炉(南西)



3



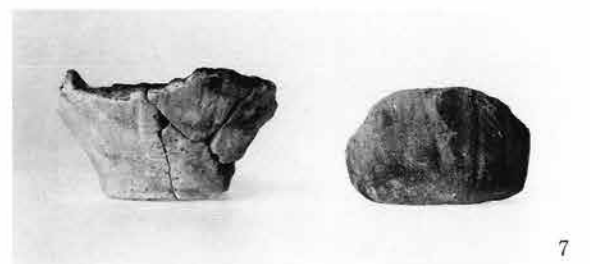
4



5

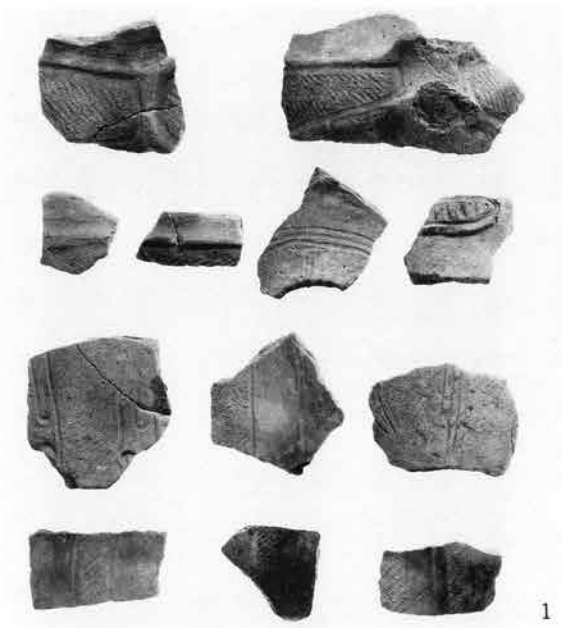


6

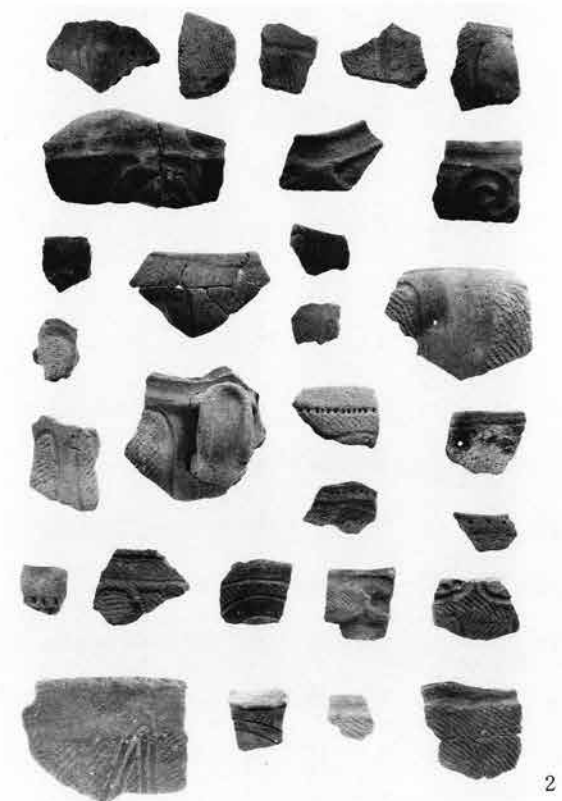


7

3~7. 13区11号住居址出土遺物



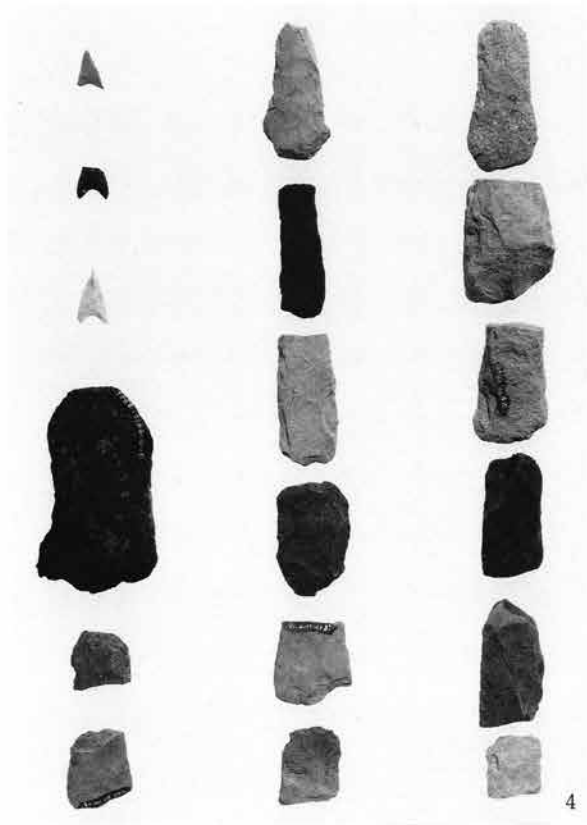
1



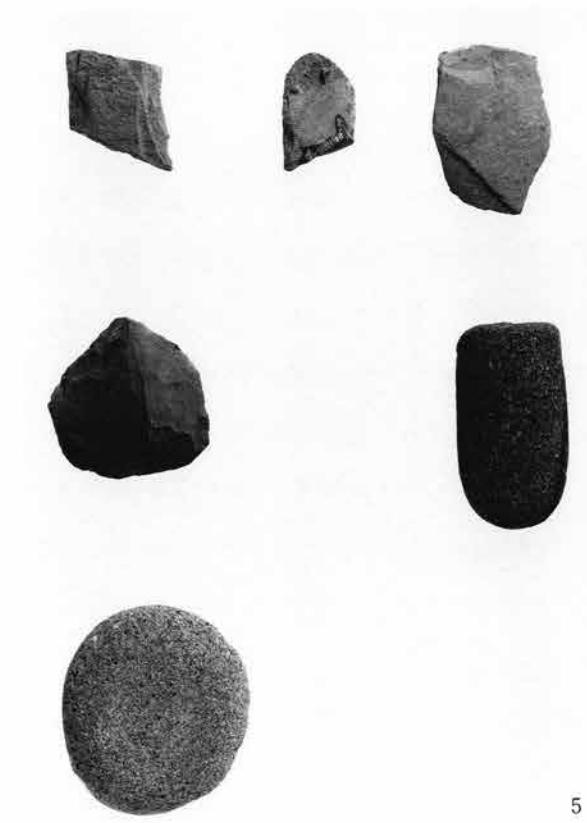
2



3



4

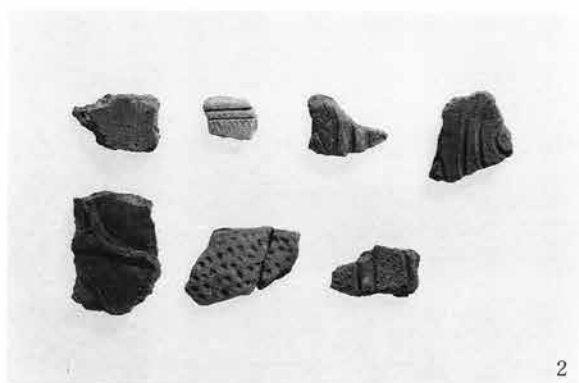


5

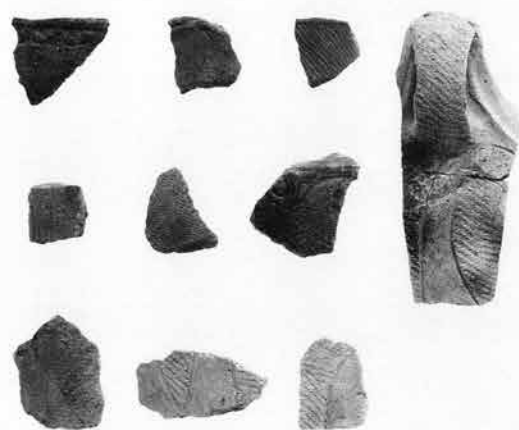
1 ~ 5. 13区11号住居址出土遺物



1. 13区1号土坑全景(東)



2. 13区1号土坑出土遺物



4. 13区2号土坑出土遺物



3. 13区2号土坑遺物出土狀況全景(南)



1. 13区1号集石全景(南西)



2. 13区1号集石掘り方全景(南西)



1. 13区A～C-12・13グリッド土器だまり遺物出土状況(西)



2. 13区C-9グリッド土器だまり遺物出土状況(西)



4. 13区C-8グリッド土器だまり遺物出土状況(北)



3. 13区C-8グリッド土器だまり遺物出土状況(南東)



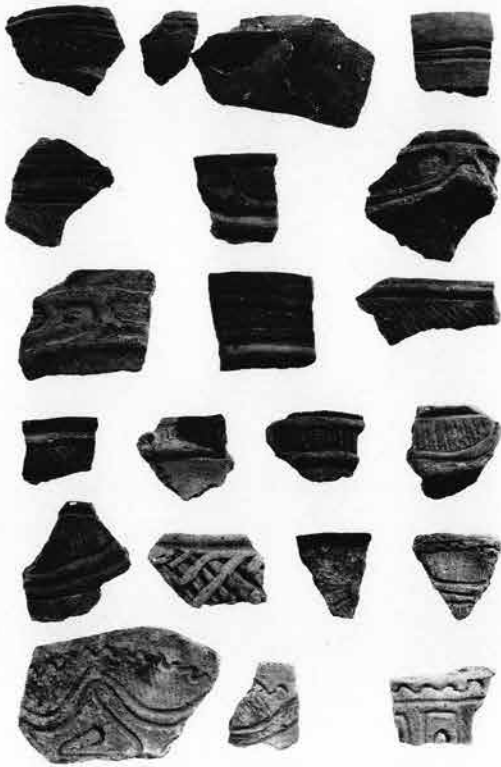
5. 13区E-8グリッド土器だまり遺物出土状況(南)



1. 12・13・27区土器だまり遺物出土状況



2. 12・13・27区土器だまり遺物出土状況



1



3



2



4



1



2



3



4



5

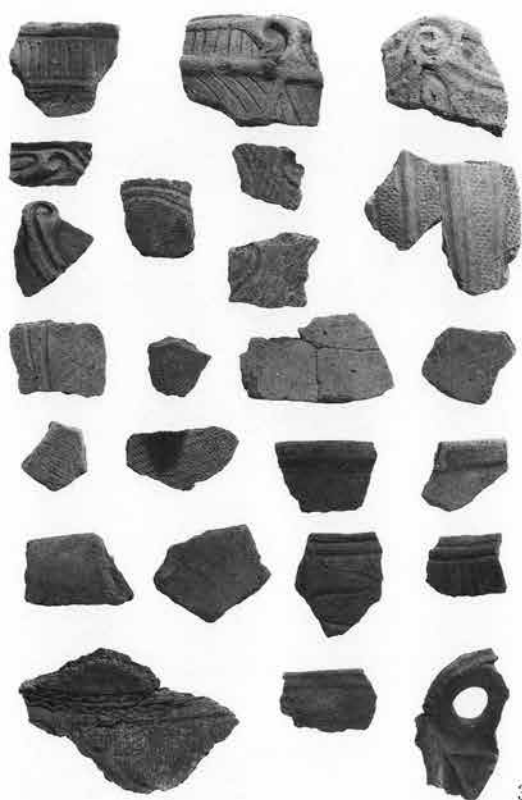
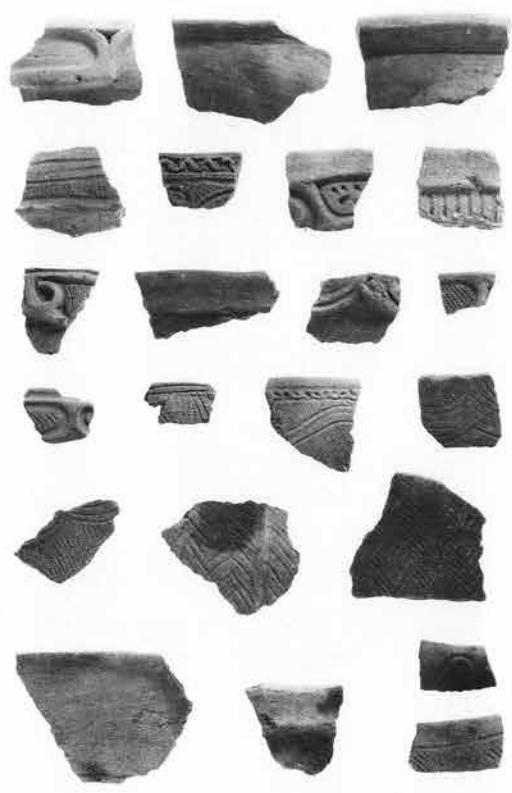


6



7

1~7. 12・13・27区土器だまり出土遺物



1～4. 12・13・27区土器だまり出土遺物



1



3



2



4

1. 12・13・27区土器だまり出土遺物

2. "

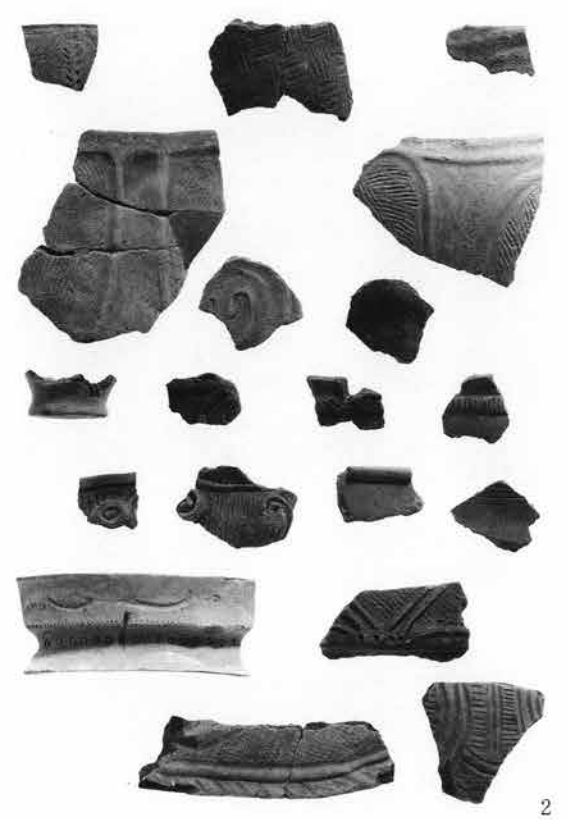
3. "

4. "

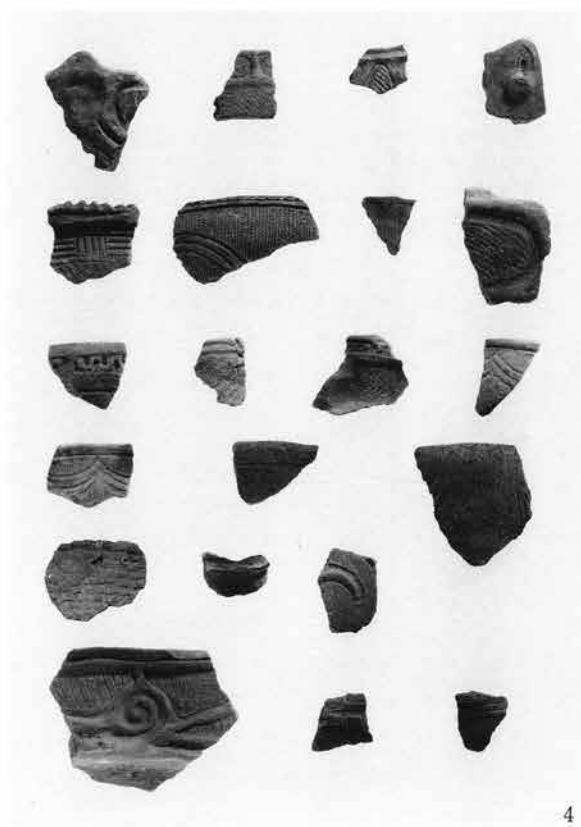
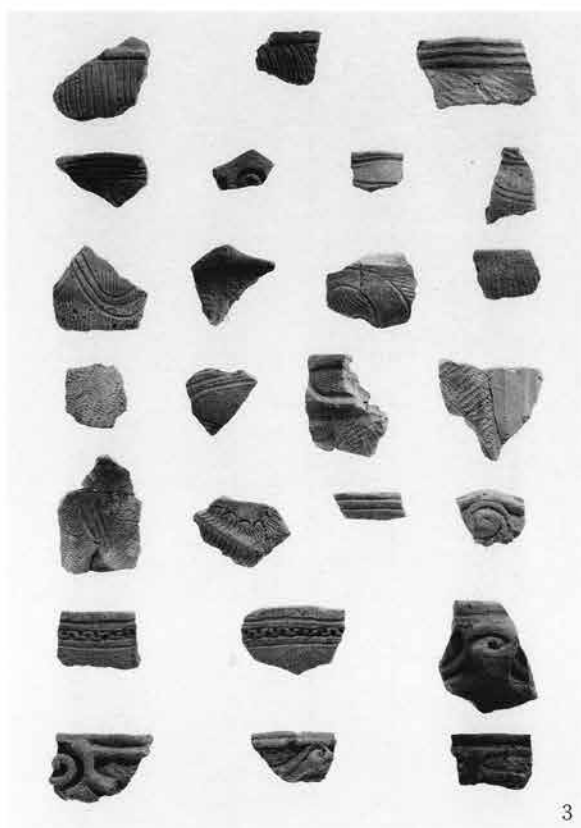
5. "



5



1 ~ 4. 12・13・27区土器だまり出土遺物



1～4. 12・13・27区土器だまり出土遺物



1



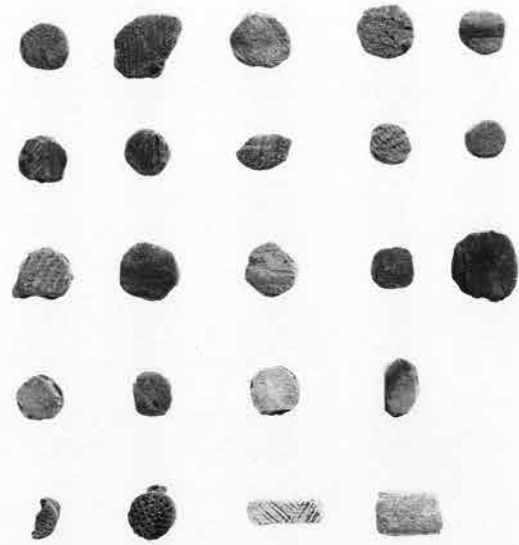
2



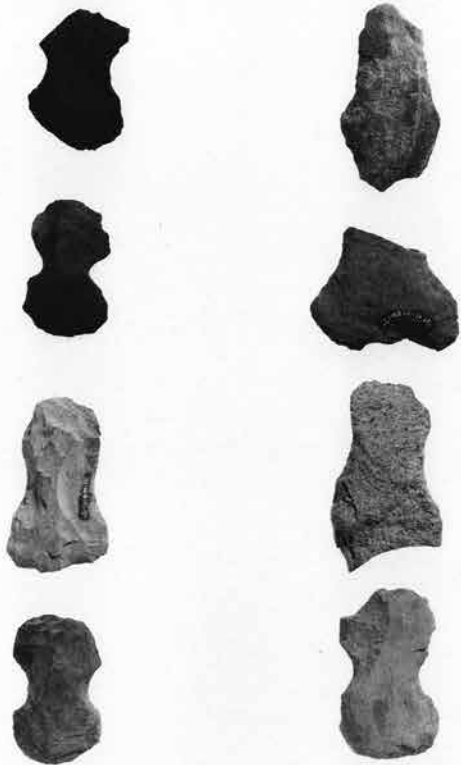
3



4



5



6



1



3

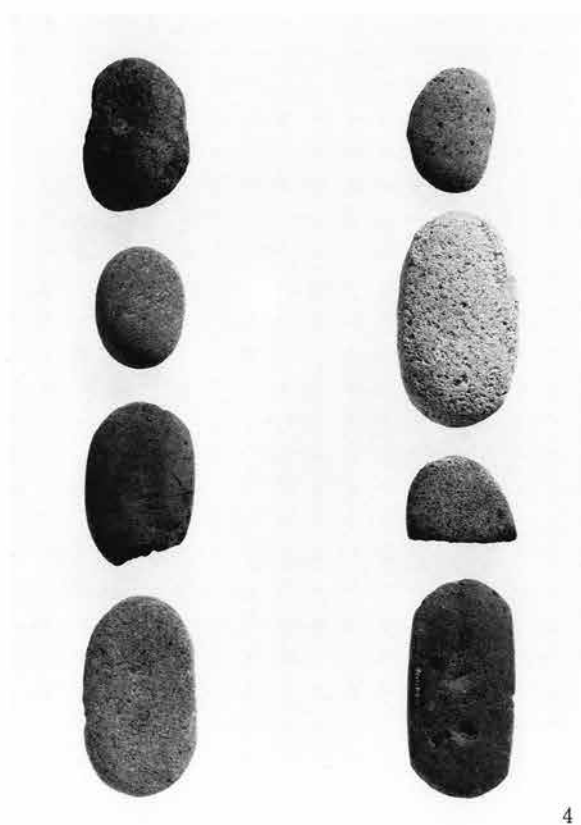
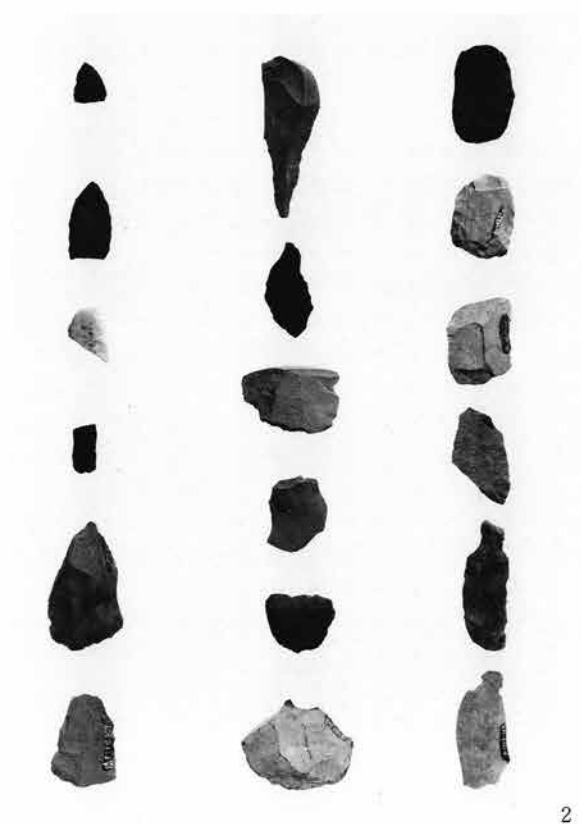
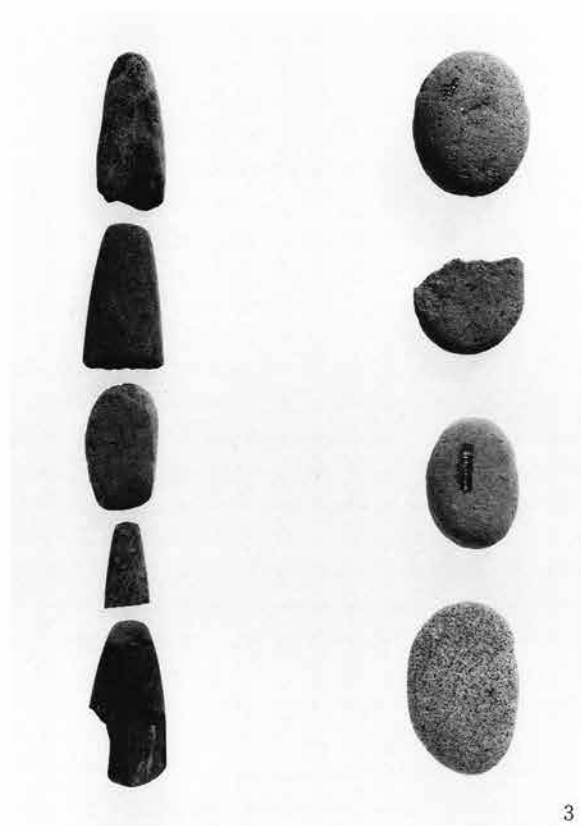


2

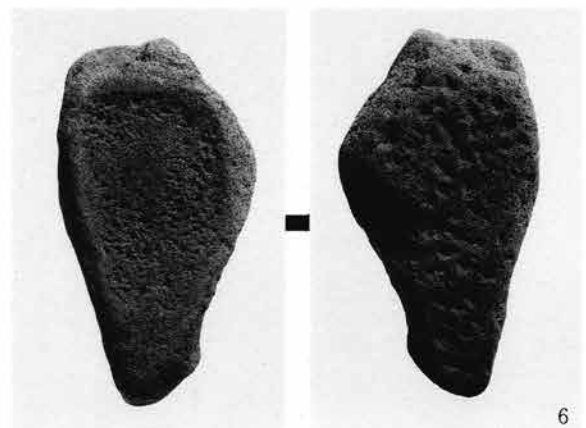
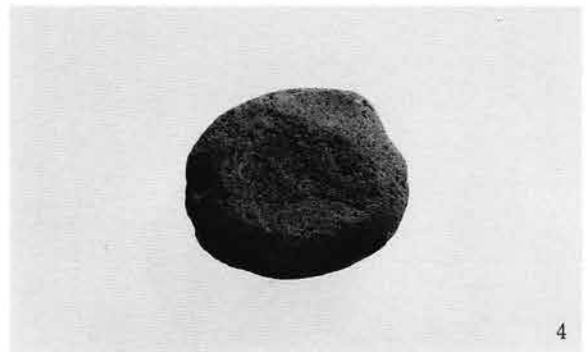
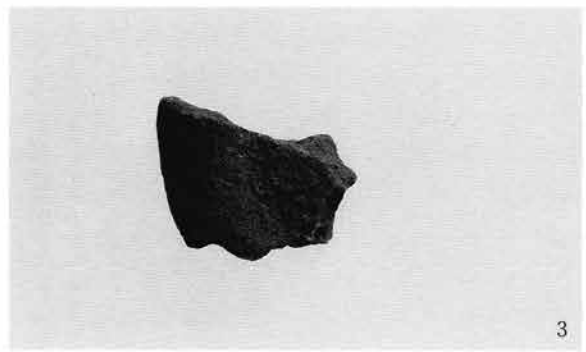
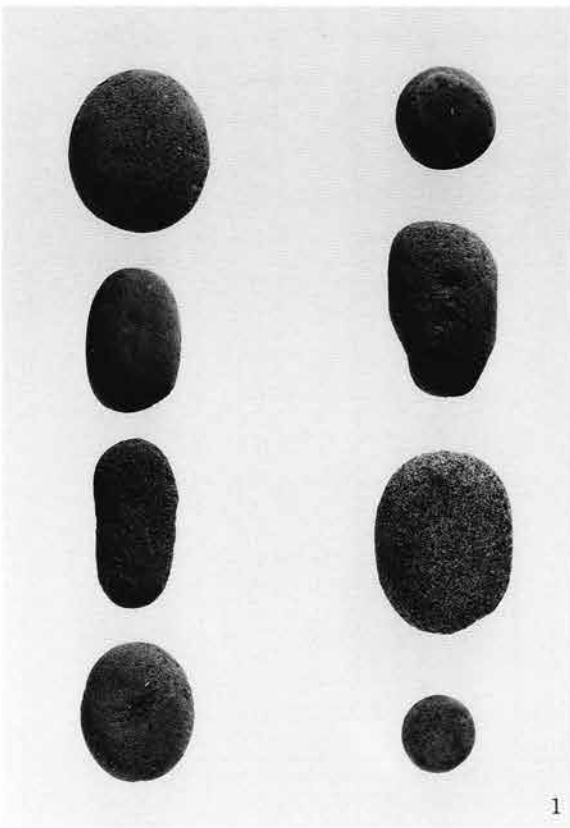


4

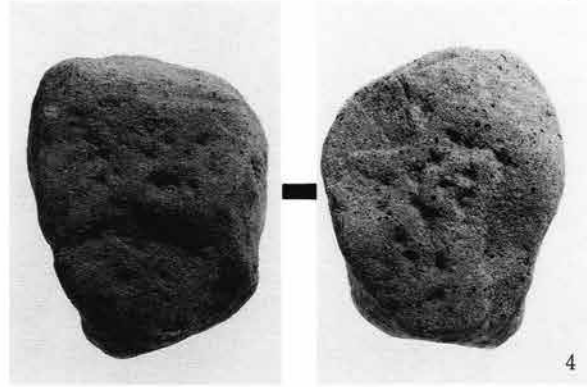
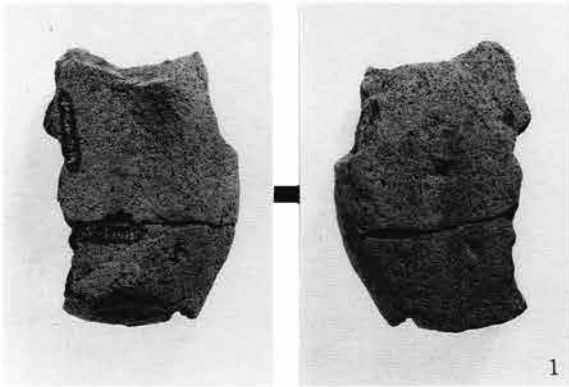
1～4. 12・13・27区土器だまり出土遺物



1～4. 12・13・27区土器だまり出土遺物



1 ~ 6. 12・13・27区土器だまり出土遺物



1～6. 12・13・27区土器だより出土遺物



1. 1号墳墳丘正面(南東)



3. 1号墳石室正面(南東)



2. 1号墳墳丘土層(南)



4. 1号墳墓道石組(南西)



5. 1号墳全景(南東)



1. 1号墳石室左壁(東)



5. 1号墳石室裏込め被覆(北東)



2. 1号墳石室右壁(南)



6. 1号墳壁石根石と堀り方(南東)



3. 1号墳墓道(北西)



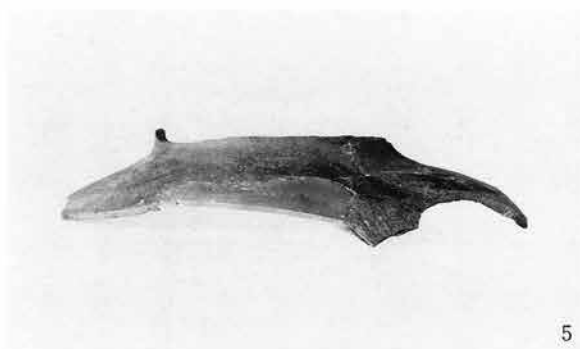
7. 1号墳石室根石支石(南東)



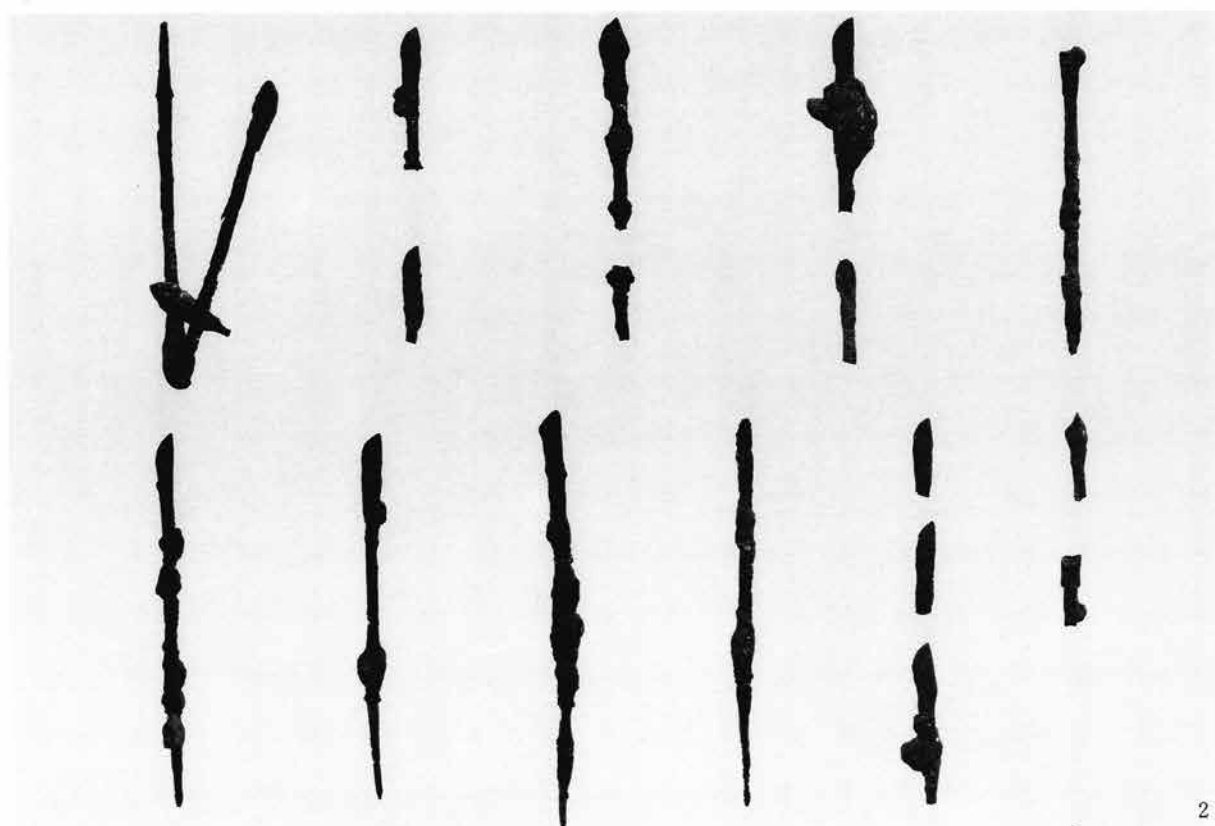
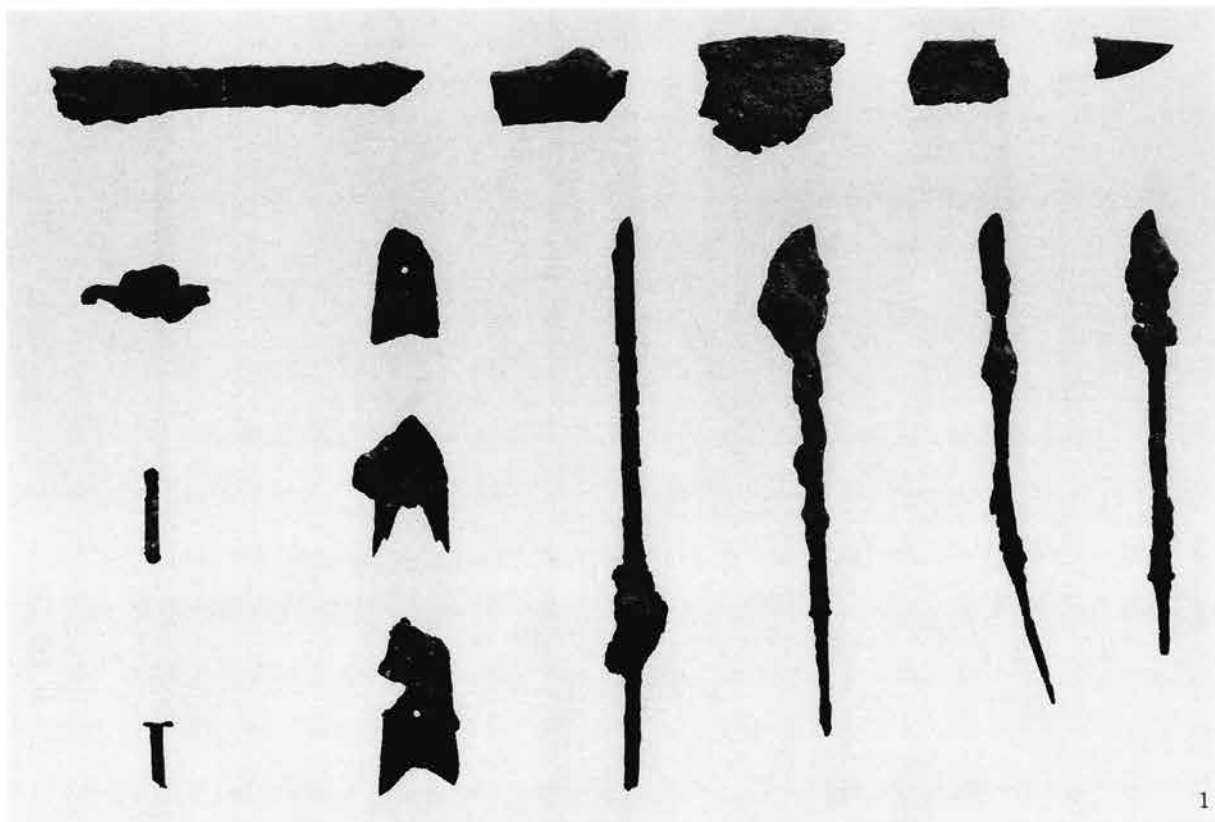
4. 1号墳石室内鉄鏃出土状況(北東)



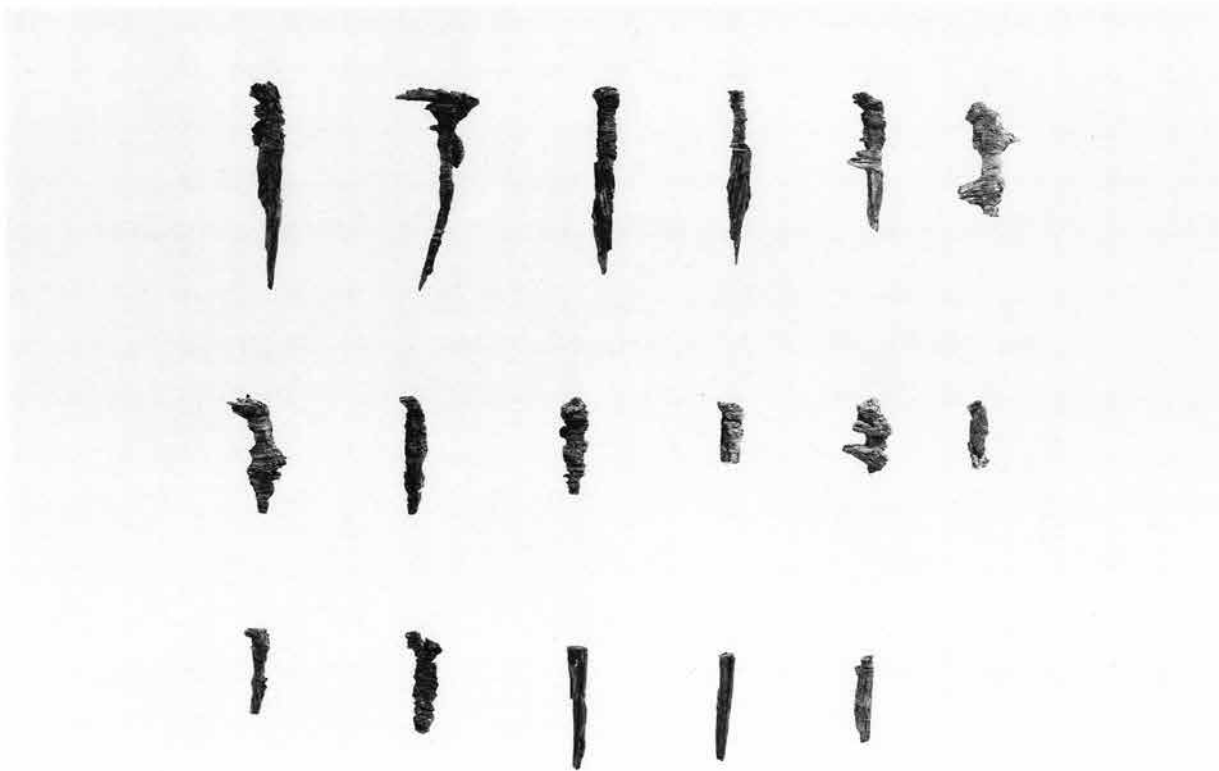
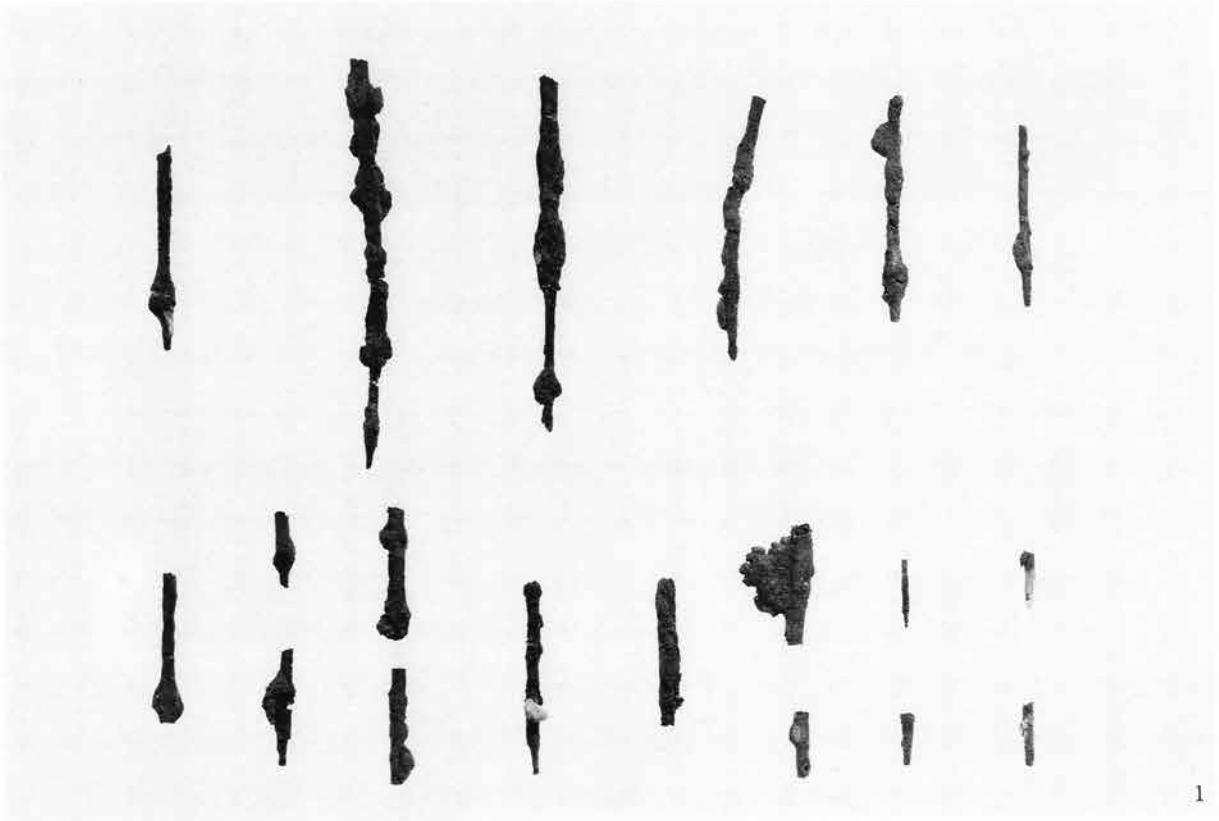
8. 1号墳掘り方最終(南東)



1~7. 1号墳出土遺物



1・2. 1号墳出土遺物



1・2. 1号墳出土遺物



1. 2号墳全景(南)



2. 2号墳石室全景(南)



1. 2号墳石室左壁(南東)



5. 2号墳墓道(南)



2. 2号墳石室右壁(南西)



6. 2号墳墓道部遺物出土状況(南)



3. 2号墳玄室奥壁(南)



7. 2号墳壁石根石と掘り方(西)



4. 2号墳玄室内遺物出土状況(南)



8. 2号墳壁石根石と掘り方(北西)



1. 2号墳左壁根石と掘り方(南西)



2. 2号墳左壁礎石(東)



3. 2号墳石室前遺物出土状況



4. 2号墳石室前遺物出土状況



5

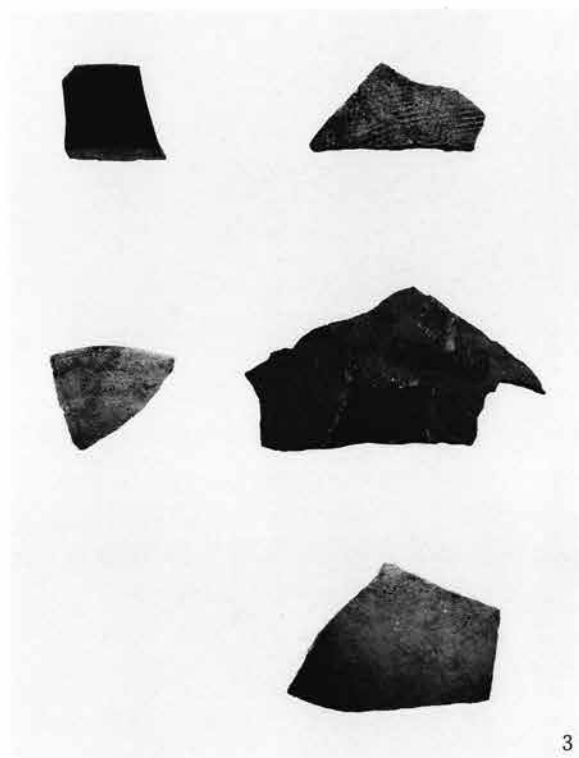
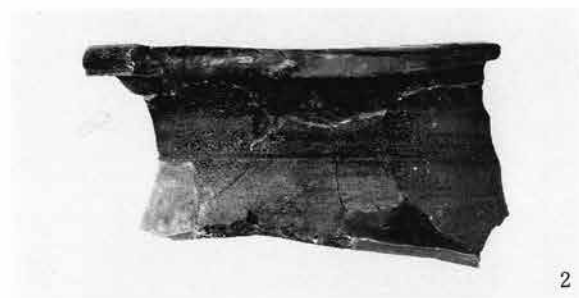
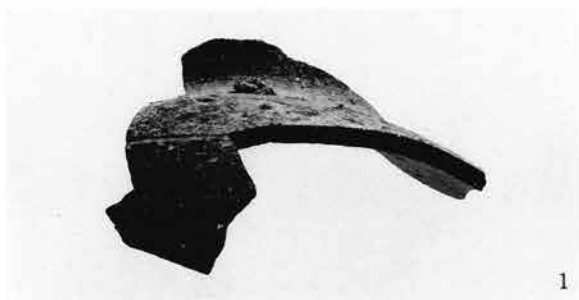


6

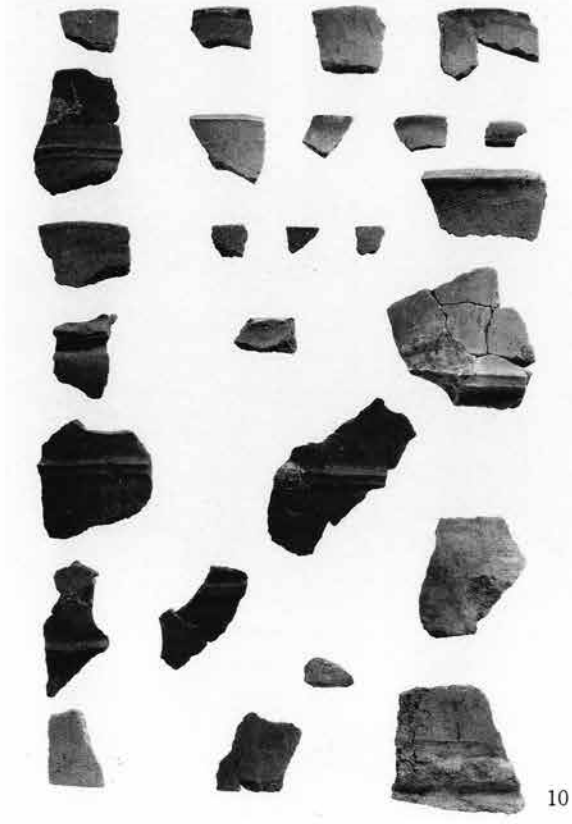


7

5～7. 2号墳出土遺物



1 ~ 9. 2号墳出土遺物



1~10. 2号墳出土遺物



1. 3号墳全景(南)



2. 3号墳石室全景(南)



1. 3号墳石室左壁(南東)



5. 3号墳前庭部右袖(西)



2. 3号墳石室右壁(南西)



6. 3号墳裏込め被覆状況(東)



3. 3号墳石室奥壁(南)



7. 3号墳壁石根石と掘り方(南)



4. 3号墳前庭部左袖(東)



8. 3号墳壁石根石と掘り方(東)



1. 3号墳西トレンチ裏込め(南西)



3. 3号墳左壁裏込め(西)



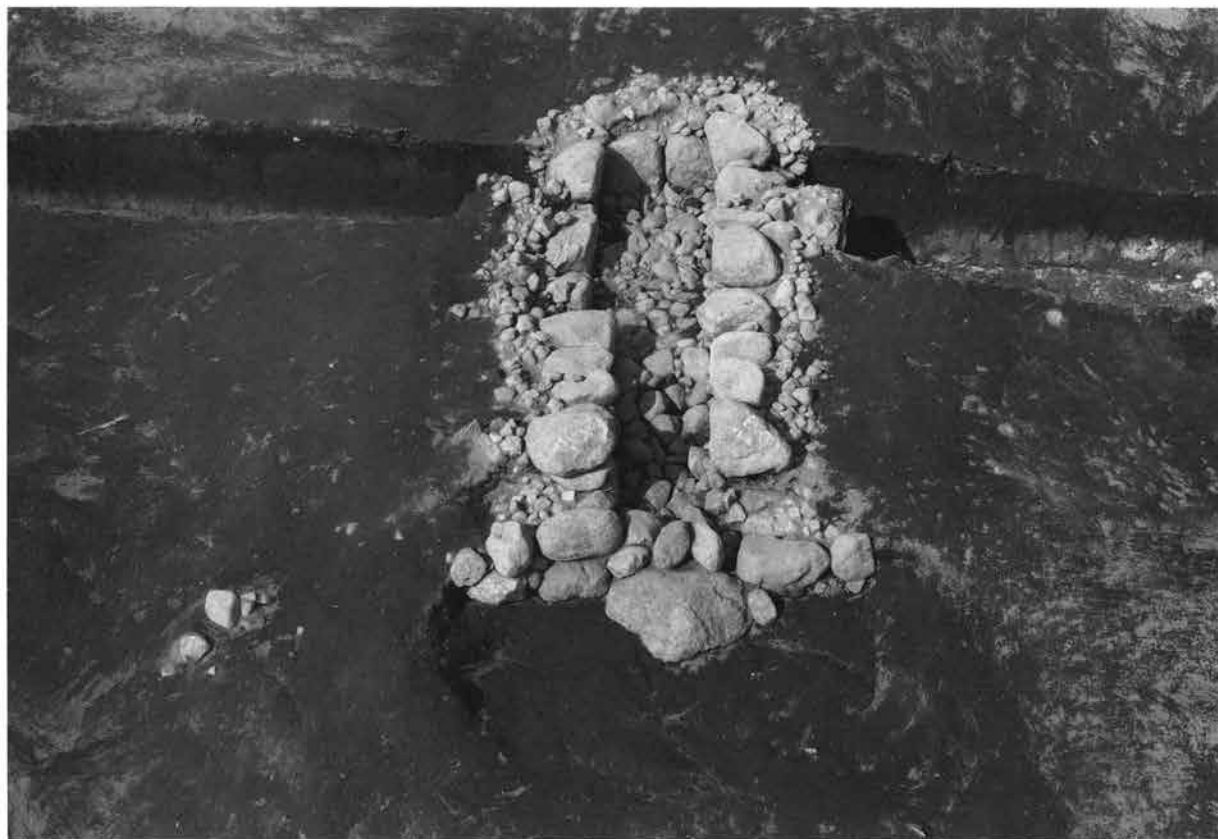
2. 3号墳奥壁裏込め(北)



4. 3号墳出土遺物



5. 4号墳全景(南)



1. 4号墳石室全景(南)



2. 4号墳閉塞状況(南)



4. 4号墳裏込め被覆状況(南東)



3. 4号墳石室右壁(南西)



5. 4号墳玄室床下土層(南)



1. 5号墳全景(南)



2. 5号墳石室全景(南東)



1. 5号墳閉塞状況(南東)



5. 5号墳墓道石組(南)



2. 5号墳石室左壁(東)



6. 5号墳玄室内遺物出土状況(北西)



3. 5号墳石室右壁(南)



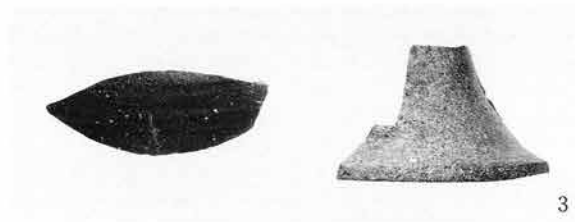
7. 5号墳玄室内遺物出土状況(南)



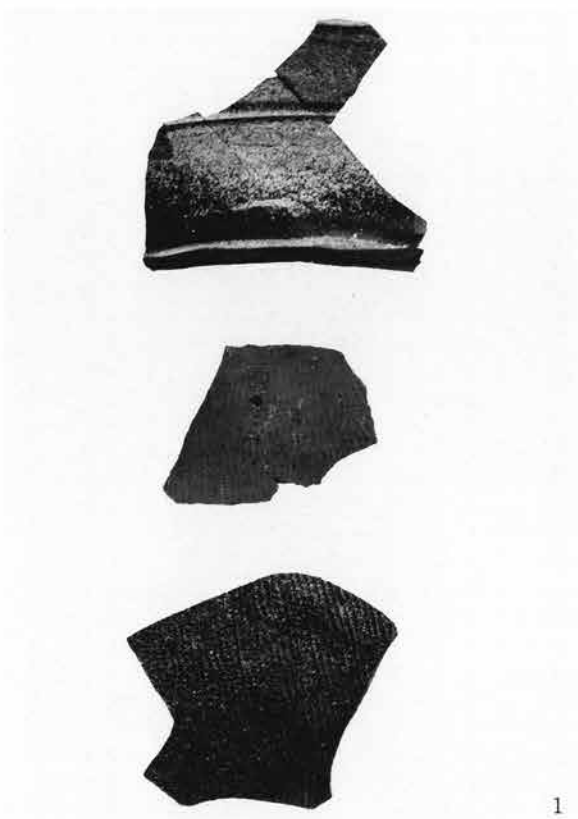
4. 5号墳石室奥壁(南東)



8. 5号墳石室壁石根石と掘り方(南東)



1～7. 5号墳出土遺物



1



2

1. 5号墳出土遺物

2. "



3

3. 5号墳出土遺物



1. 6号墳石室全景(南)



2. 6号墳全景(南)



3. 6号墳玄室床下土層(南)

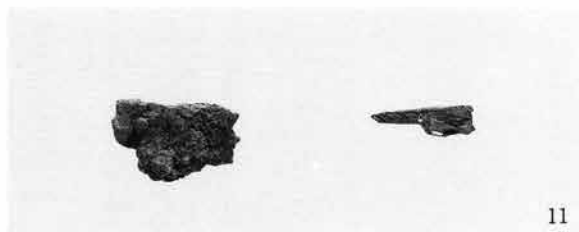
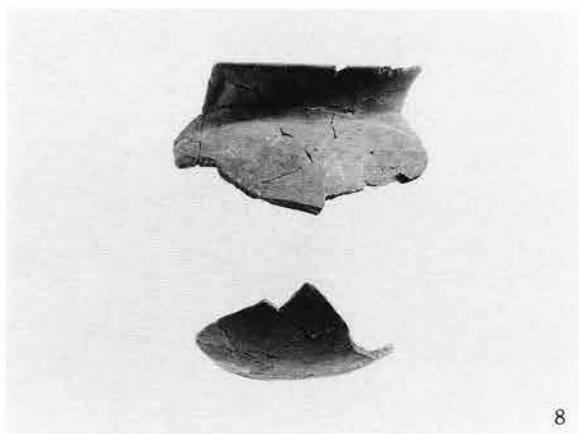


4



5

4・5. 6号墳出土遺物



1 ~ 11. 6号墳出土遺物



1. 7号墳全景(南)



2. 7号墳墓道石組(南東)



4. 7号墳閉塞状況と墓道石組(南)



3. 7号墳石室前特殊遺構(南西)



5. 7号墳石室前閉塞部(南)



1. 7号墳閉塞状況(北)



5. 7号墳袖石(北)



2. 7号墳石室左壁(東)



6. 7号墳玄室礎石(南)



3. 7号墳石室右壁(北西)



7. 7号墳玄室内遺物出土状況(北)



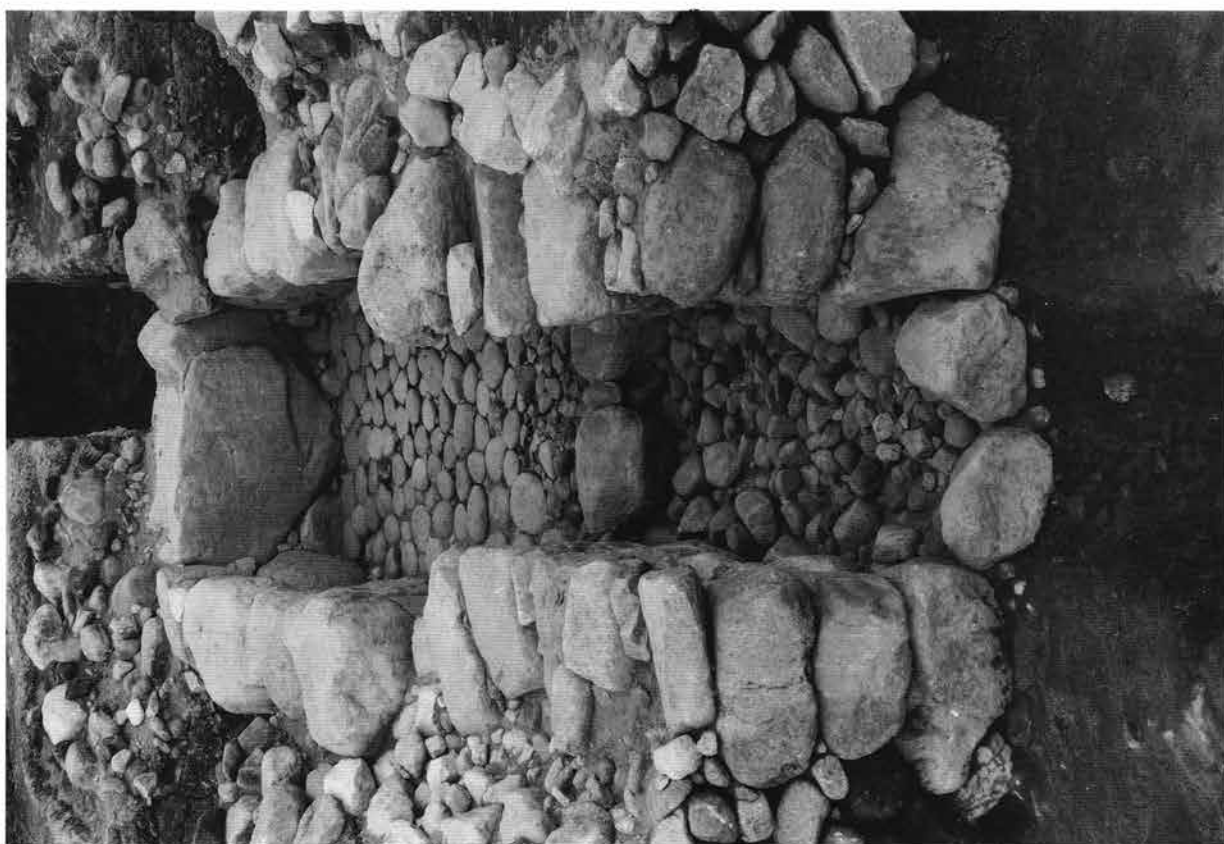
4. 7号墳石室奥壁(南)



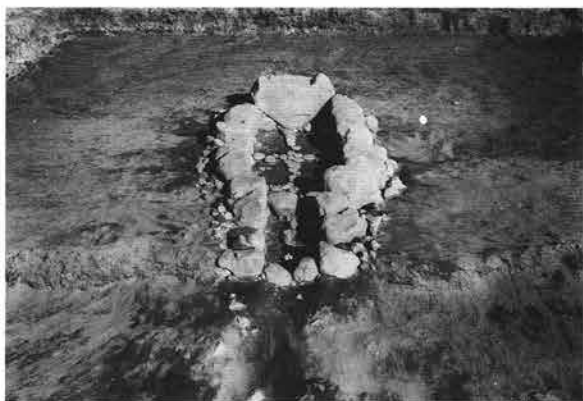
8. 7号墳墓道内出土遺物(東)



1、7号墳玄室内遺物出土状況(南)



2、7号墳石室全景(南)



1. 7号墳壁石根石と裏込め被覆(南)



2. 7号墳壁石根石と掘り方(南)



3. 7号墳壁石根石(西)



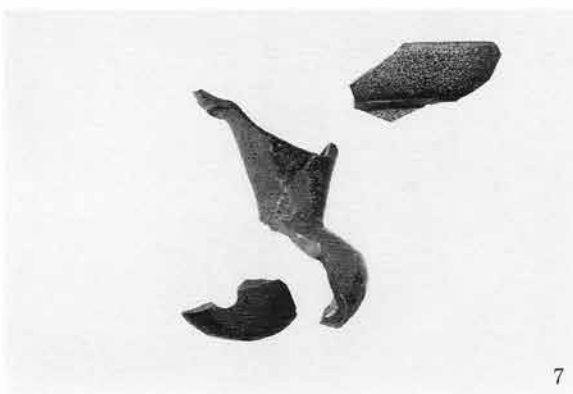
4. 7号墳壁石根石(北)



5

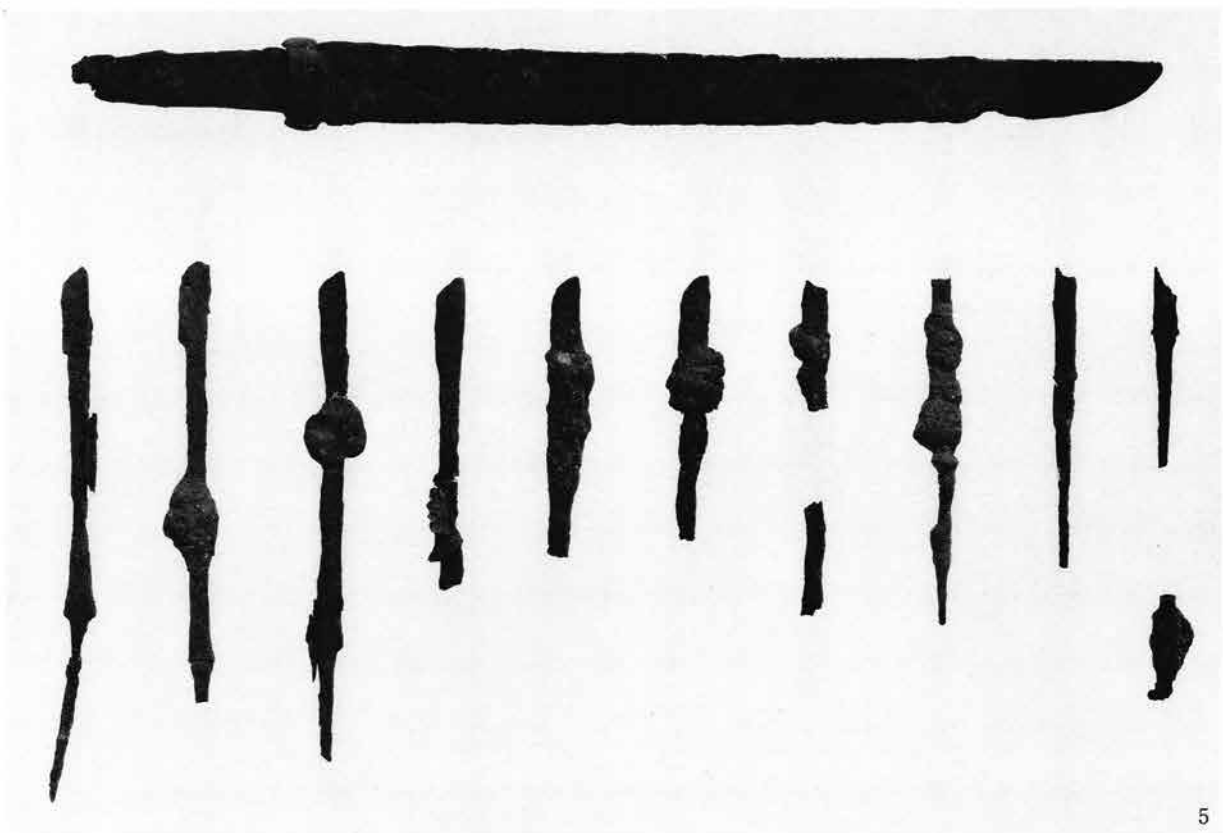
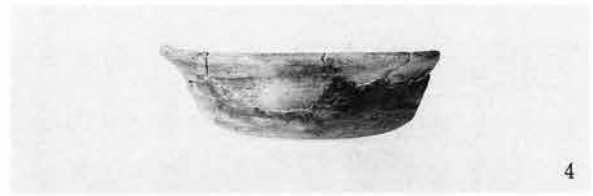
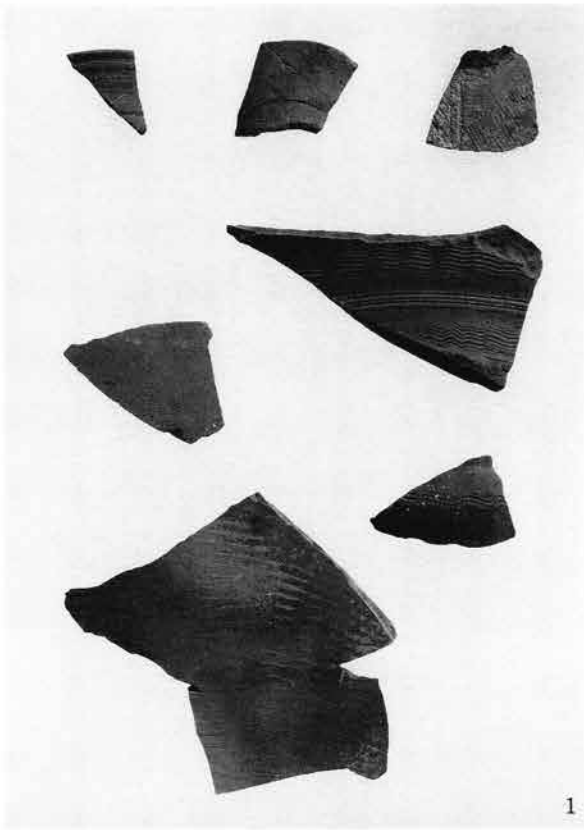


6

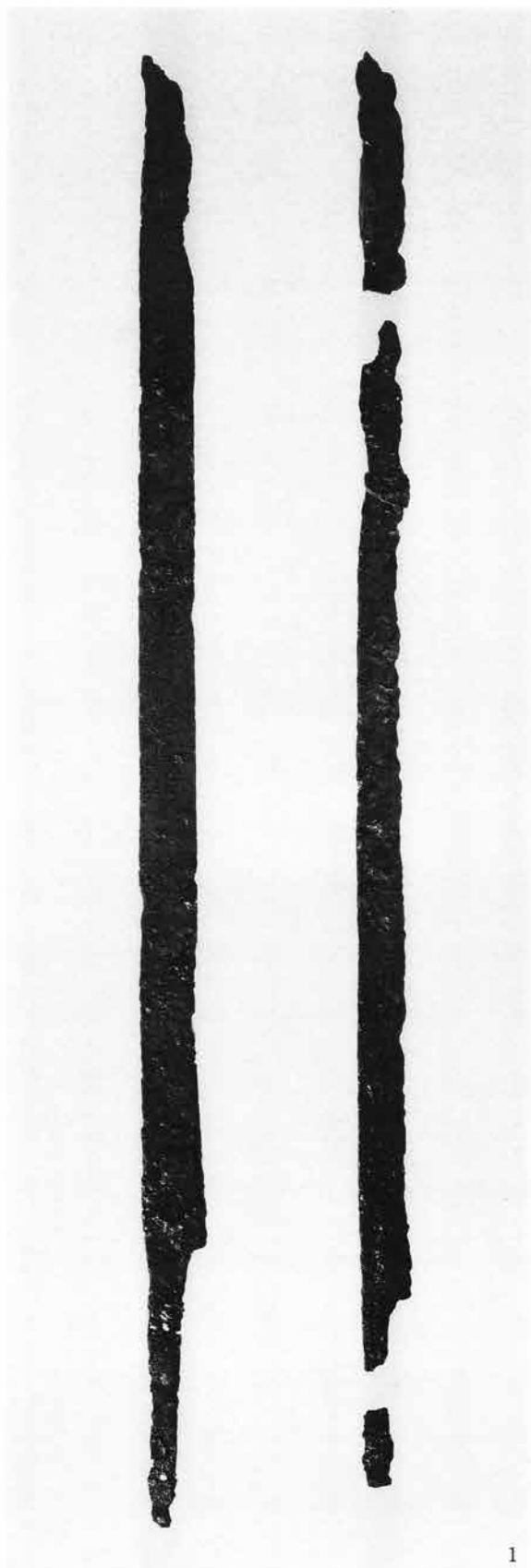


7

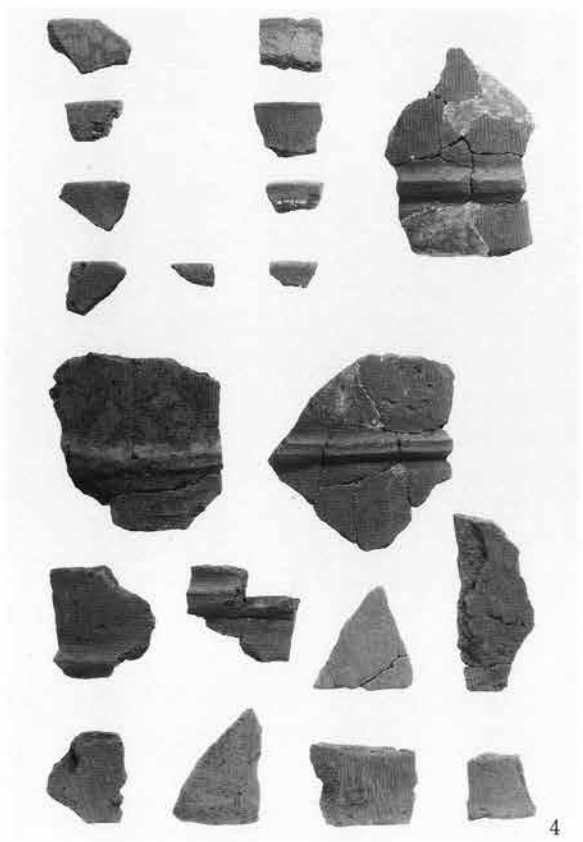
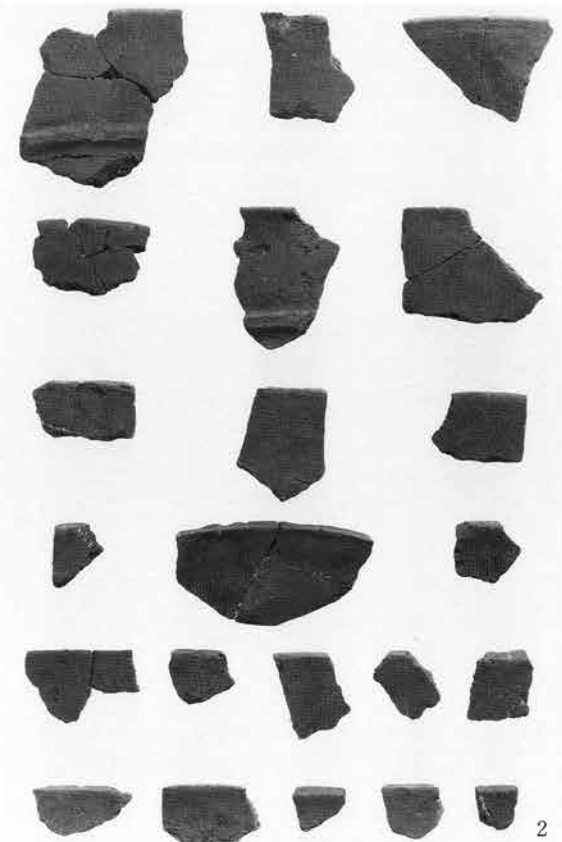
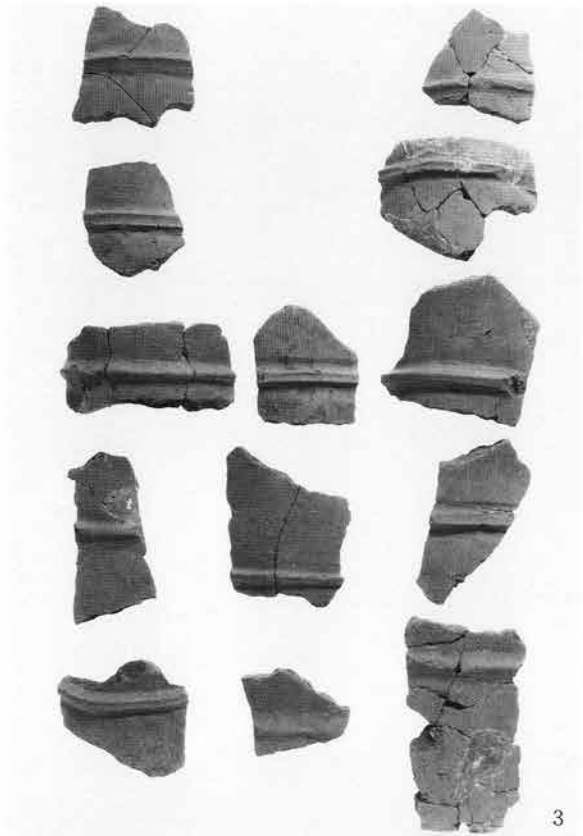
5～7. 7号墳出土遺物



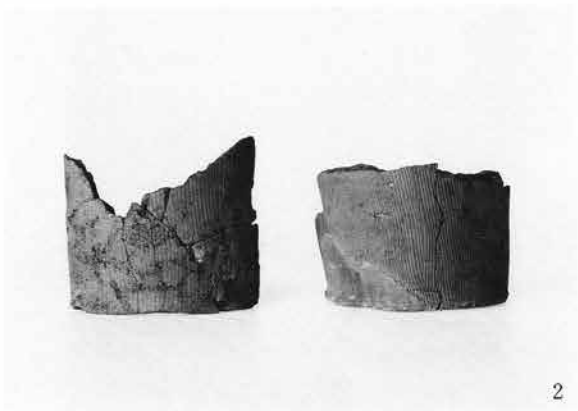
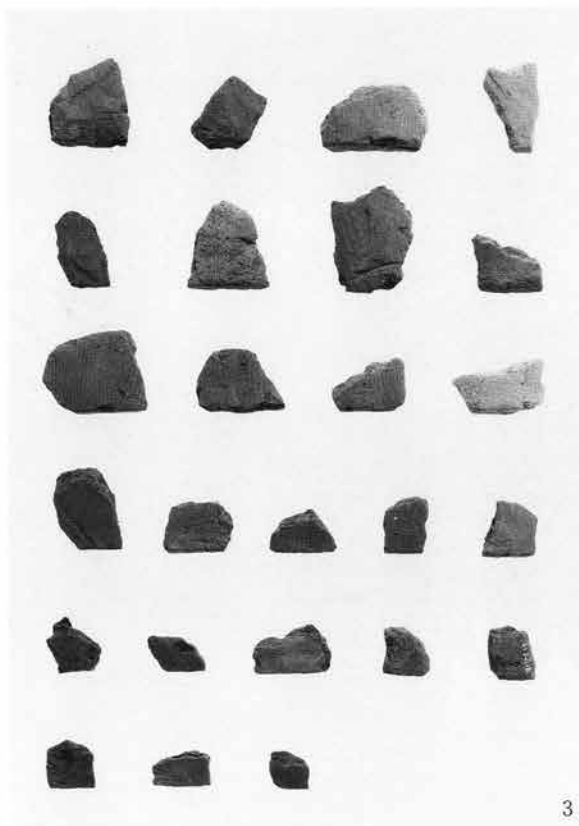
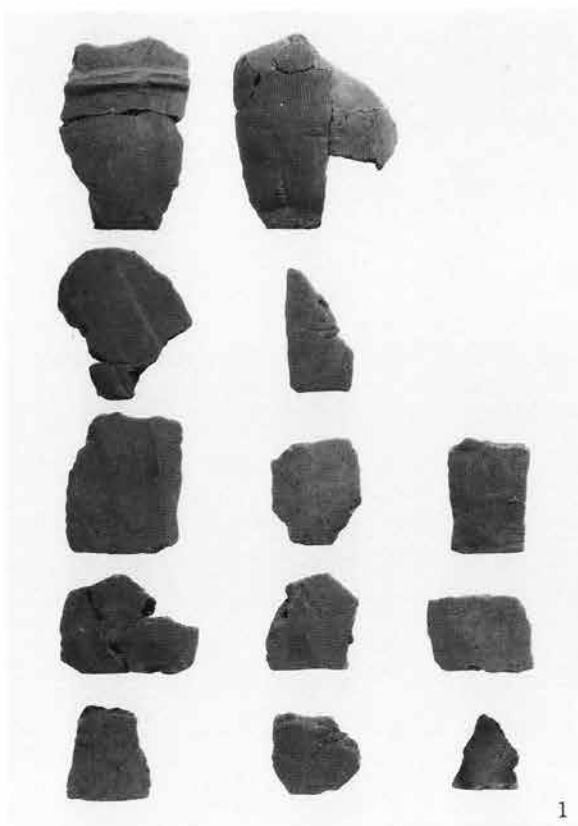
1 ~ 5. 7号墳出土遺物



1・2. 7号墳出土遺物



1~4, 7号墳出土遺物



- 1. 7号墳出土遺物
- 2. "
- 3. "
- 4. "



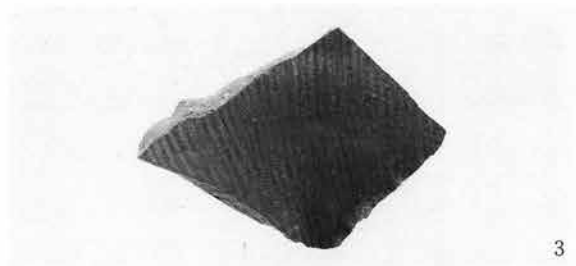
1. 8号墳全景(北)



2. 8号墳主体部(北)



1. 8号墳主体部(北)



2~5. 8号墳出土遺物



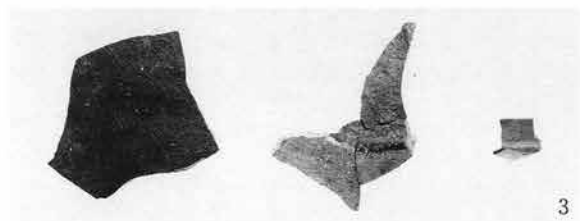
1. 9号墳全景(北東)



2. 9号墳主体部(南西)



1. 9号墳石室全景(北東)



2~6. 9号墳出土遺物



1. 10号墳全景(北)



3. 10号墳石室左壁(南東)



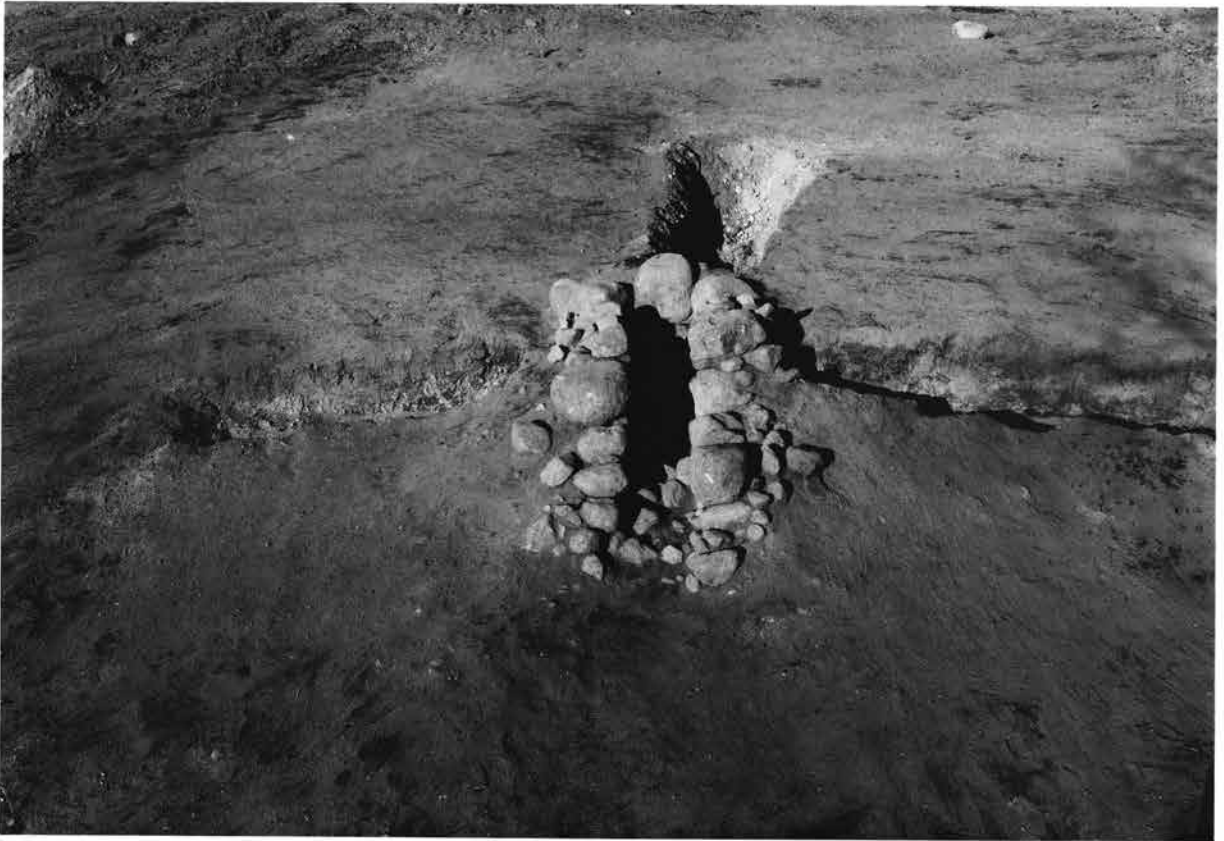
2. 10号墳石室右壁(西)



4. 10号墳石室奥壁(南)



5. 10号墳石室全景(上)



1. 11号墳全景(南西)



2. 11号墳石室床面(南西)



4. 11号墳掘り方(南西)



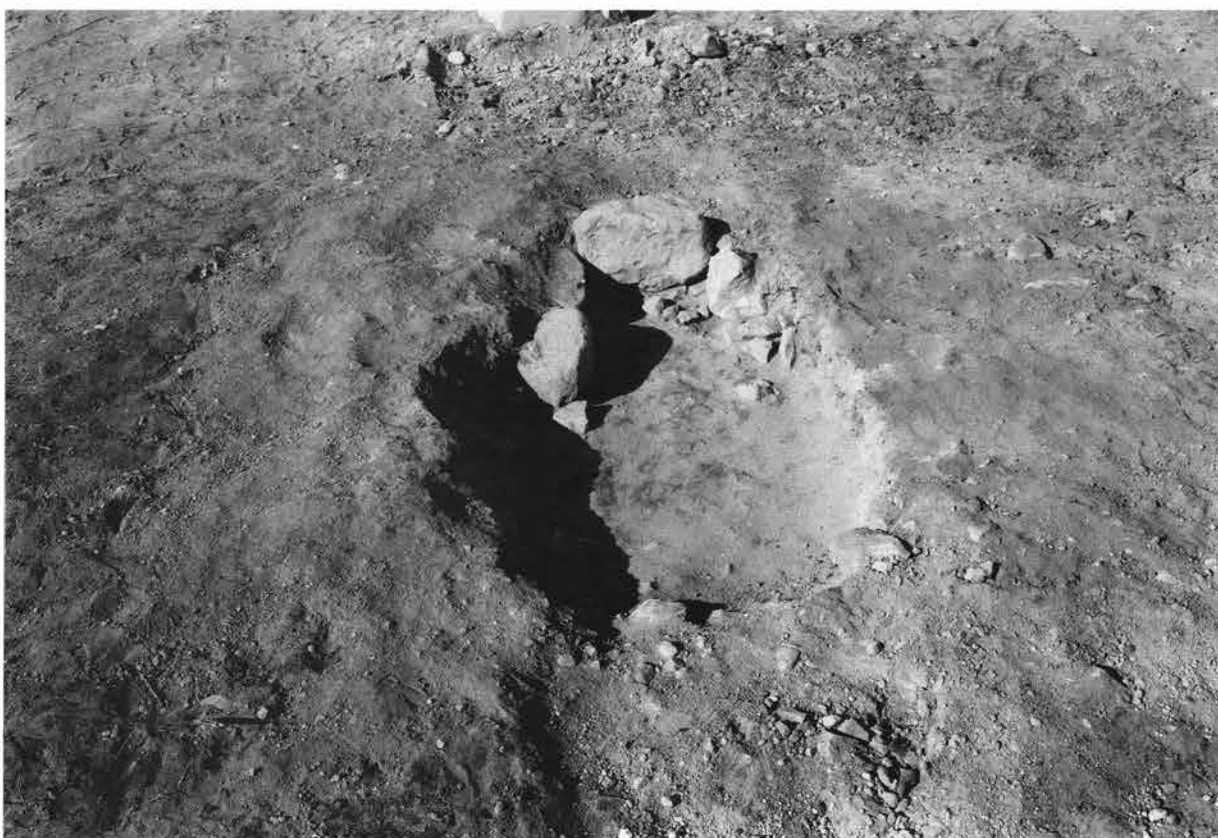
3. 11号墳正面(南西)



5. 11号墳框(北東)



1. 12号填石室全景(南)



2. 12号填全景(南)



1. 庚申塚1号墳調査前全景(南)



2. 庚申塚1号墳全景(南西)



1. 庚申塚1号墳石室全景(南)



2. 庚申塚1号墳閉塞状況(南)



4. 庚申塚1号墳右壁裏込め(東)



3. 庚申塚1号墳石室左壁(南東)



5. 庚申塚1号墳石室床面(南)



1. 庚申塚1号墳石室右壁(南西)



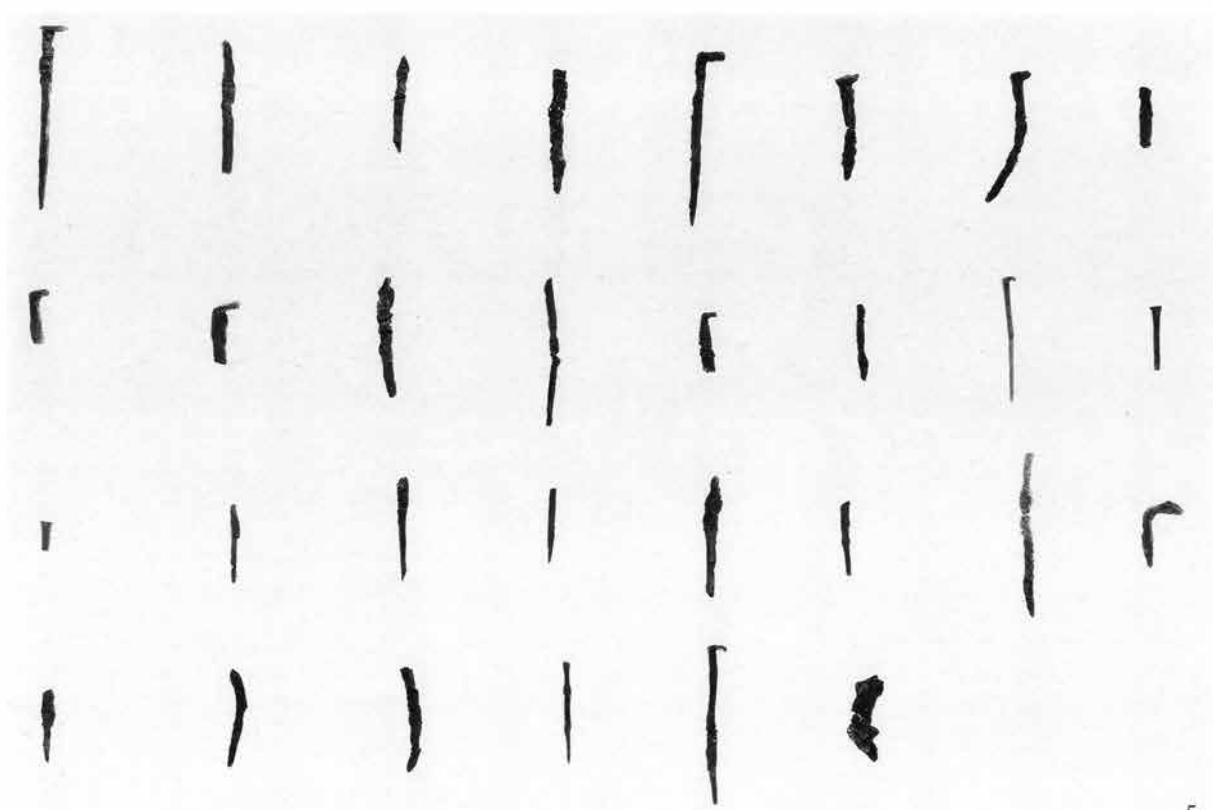
3. 庚申塚1号墳葺石根石(南)



2. 庚申塚1号墳石室奥壁(南)



4. 庚申塚1号墳掘り方土層(南)



5. 庚申塚1号墳出土遺物



1. 庚申塚2号墳石室全景(南)



2. 庚申塚2号墳全景(南)



1. 庚申塚2号墳玄門柱(北)



5. 庚申塚2号墳周堀土層断面(南東)



2. 庚申塚2号墳石室左壁(南東)



6. 庚申塚2号墳裏込め被覆状況(南)



3. 庚申塚2号墳石室右壁(南西)



7. 庚申塚2号墳石室全景(南)



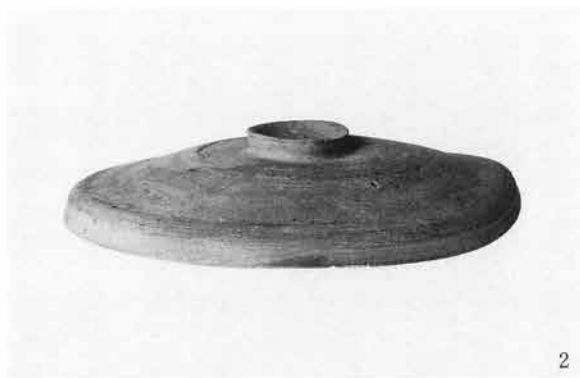
4. 庚申塚2号墳石室奥壁(南)



8. 庚申塚2号墳玄室内遺物出土状況(北)



1. 庚申塚2号墳石室(南)



2



4

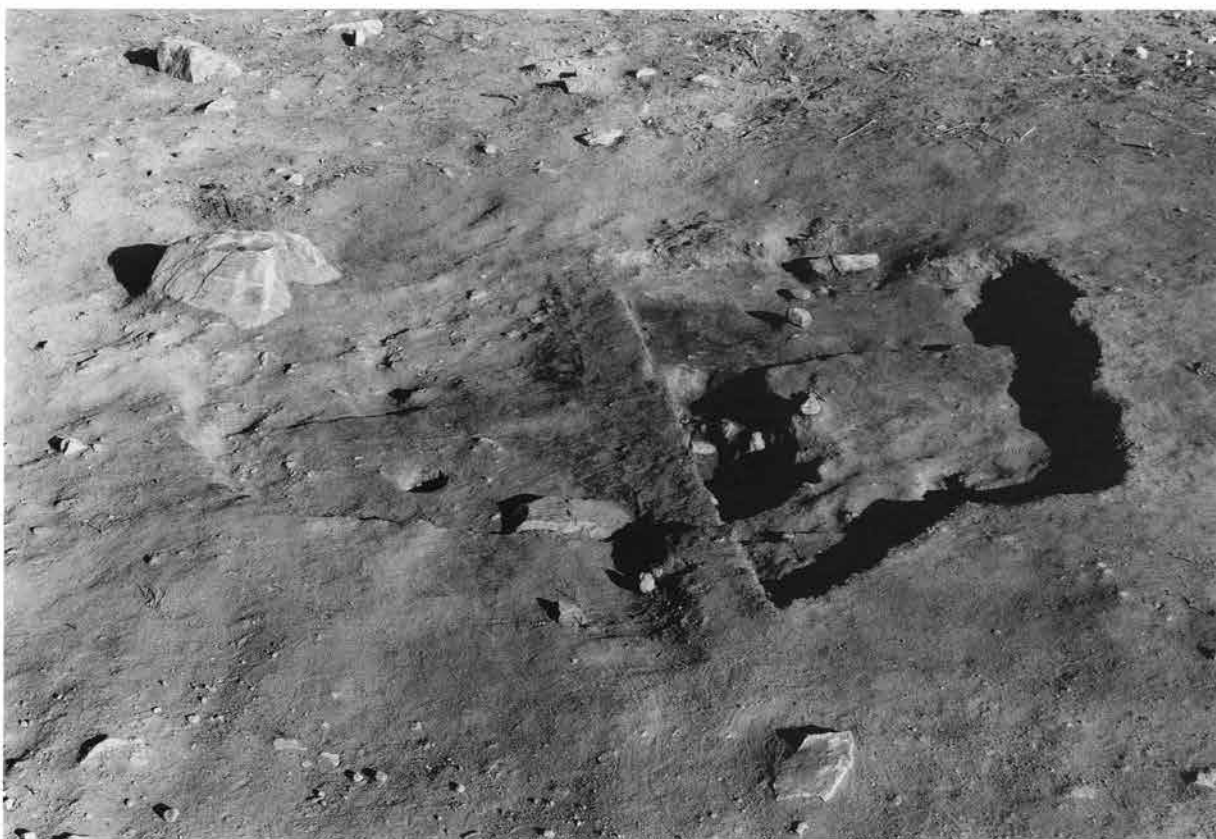


3



5

2~5. 庚申塚2号墳出土遺物



1. 13区7号住居址全景(西)



2. 13区7号住居址遺物出土状況



3. 13区7号住居址炉セクションW-E(南)



4



5



6

4～6. 13区7号住居址出土遺物



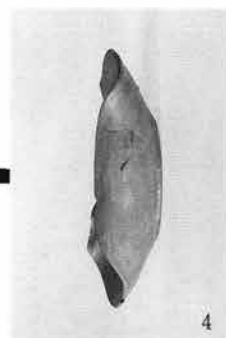
1. 13区1号墓壙全景(南)



2. 13区1号墓壙遺物出土狀況



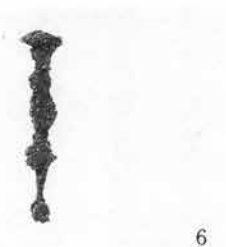
3. 13区1号墓壙出土遺物



4. 13区1号墓壙出土遺物



5. 13区1号墓壙出土遺物



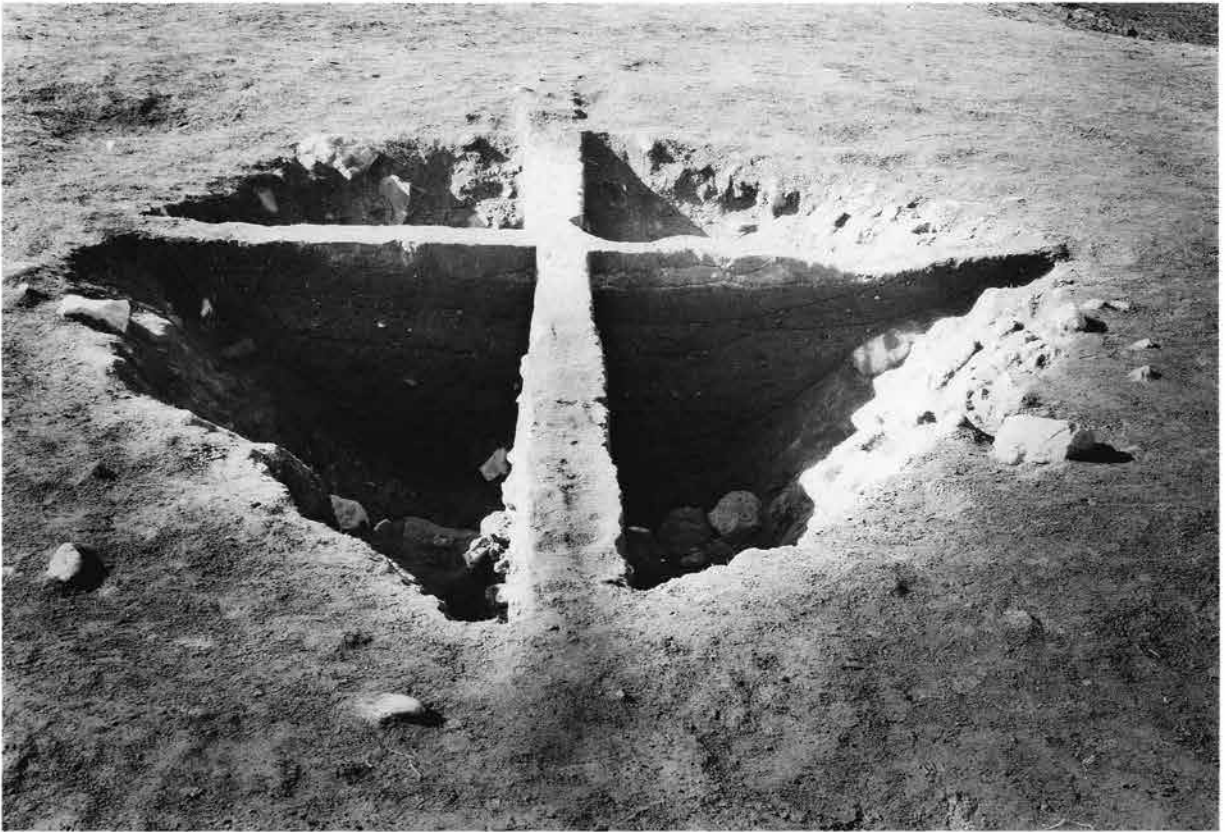
6. 13区2号墓壙出土遺物



1. 13区2号墓壙全景(南)



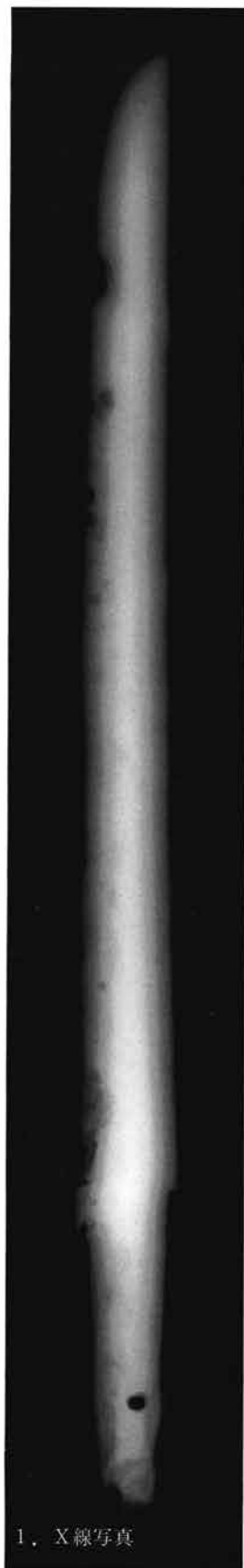
2. 13区2号墓壙セクション(南)



1. 5区1号土坑セクションE-W(北東)



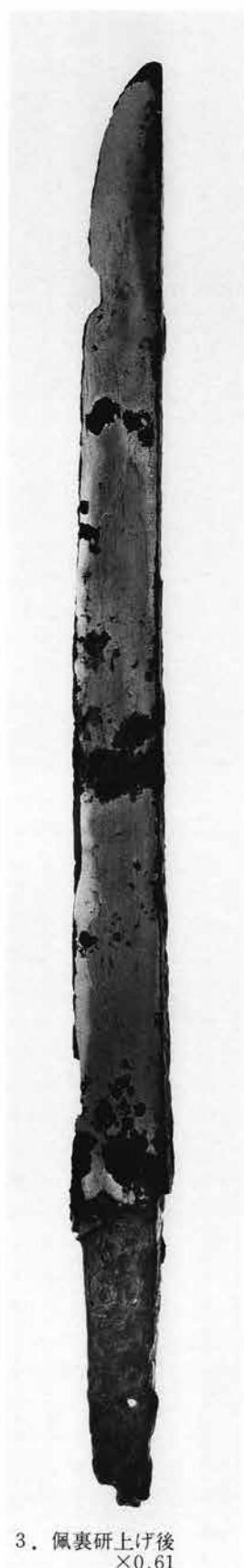
2. 5区1号土坑全景(南東)



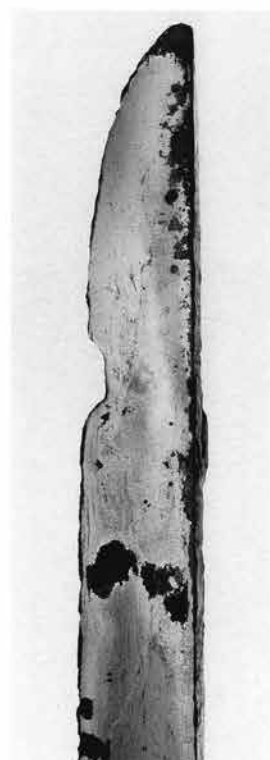
1. X線写真



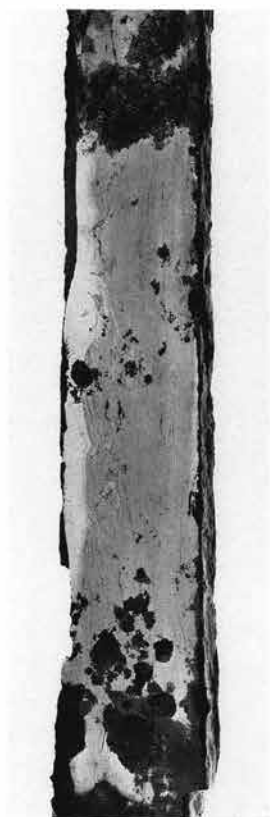
2. 佩表錆身
×0.61



3. 佩裏研上げ後
×0.61



4. 切先部 × 1



5. 金租元～物打部
× 1



1. 清里・長久保 2号墳人骨 左より：左右大腿骨，左脛骨，左上腕骨ほか。上右 3個は頭蓋破片。



2. 清里・長久保 6号墳人骨 左より：大腿骨，上腕骨，その他四肢骨小片。上右 3個は頭蓋破片。

清里・長久保遺跡

昭和55年度渠営畑地帯総合土地改良事業
清里地区埋蔵文化財発掘調査報告書第3集

昭和61年3月20日 印刷

昭和61年3月25日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2
電話（0279）52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社